

---

# 機動戦士 ガンダム - 戦いの償い -

ひろしS

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

機動戦士 ガンダム - 戦いの償い -

### 【Nコード】

N1031K

### 【作者名】

ひろし

### 【あらすじ】

いわゆる宇宙世紀ものです。

モバゲータウンで強制非公開になったので、避難してきました。

現在、モバゲー時代に無かった部分を新規構築している為、更新ペースが月1回程度まで落ちていきます。するべき事の合間に書いていきますので、申し訳ありませんがご了承下さい。

また全50話を予定していましたが、新規の部分が増えた為、少し話数も増える予定です。

宇宙世紀0108年、スイートウォーターの老朽化に伴う処遇をめぐり、革命軍が蜂起。対する連邦軍側は、亡きエースパイロットの息子がガンダムに乗り込み、革命軍と対決する、というお話。

連邦軍の描写が中心ですが、書き方は第三者視点です。一人称は基本的に使いません。

シリアスな戦争を意識したので、戦災孤児の心理描写や会話が中心の、暗めの話です。「強いガンダム」ではなく、少年兵の苦悩を描きます。

ニュータイプ描写もほぼ皆無、大気圏に突入してもすぐ帰還、大ボスの「ロード」もカリスマ性が無く、ガンダムファンには逆にウケないと思います。

参考になるレビューは辛口でも歓迎致します。ご質問や誤字等は伝言板へお願い致します。

本作は、「ガンダム」という媒体を通じて、筆者の体験をアレンジしたストーリーになっています。

現在も筆者は、精神的な病を抱えています。本作は、筆者が「もし自分の周囲の環境がこうだったら、もっと自分が救われたかもしれない」という、読者への問いかけを描いたものです。

なお、ガンダムをはじめ、モビルスーツの設計は、殆どパクリか、

丸々パクリです。

## はじめに（前書き）

初めまして。ひろしSと申します。モバゲータウンから強制非表示を受け続けたため、こちらへ避難してきました。

本作が初投稿（モバゲーでも初投稿だったんですが）の初心者です。温かく見守っていただければと思います。

筆者は、アスペルガー症候群という脳機能障害があり、誹謗中傷などには非常に弱い精神状態にあります。参考になる批評は歓迎しますが、単なる批判や中傷のみのレビュー等はご遠慮ください。

また、「この場面ではこの兵器を」「この時代設定ではファンネル10機は時代にそぐわない」というご意見も多数頂きましたが、基本的に強すぎるガンダムは好みではないほか、筆者は逆襲のシャア以降の作品は殆ど読んでおらず、細かい設定は知りませんので、そういった細部への言及はご遠慮願います。

参考になる内容の批判や、改善のためのアドバイスは随時お受けいたしますが、反映できる文才があるかどうかは別問題となりますので、機会があれば次回作以降に反映していきたいと思えます。

## はじめに

「本作の趣旨について」

本作は、「ガンダム」という媒体を通じて、筆者の体験をアレンジしたストーリーになっています。

現在も筆者は、精神的な病を抱えています。

本作は、筆者が大人になってから、「子供の頃に、親や周囲の人がこんな風に手助けをして欲しかった」という、現在の心境をストーリー化して描いたものです。

その為、普通なら「そんな事も分らないか？」という事も、主人公は臆する事なく口にし、周囲が助言を与える事で、主人公と周囲の絆を深めていく、という筋書きです。

また敵軍を含め、自分が悩んだ時に「周囲にこういう風に励まして欲しい」「こういう風に接して欲しい」と感じて貰う為のセリフを、随所に入れていきます。

その主旨をご理解頂く為、ガンダムを知らない人にも出来るだけ分かりやすくなる様に、ニュータイプ描写などのマニアックな要素は、必要最低限に抑えています。

ぜひ多くの方にお読み頂き、考えるための機会にして頂きたいと思えますし、同様の内容をガンダムを使わずに書ける技量は、現在の筆者には有りませんので、通報等にご遠慮頂きますようお願い致します。

この作品は「ガンダムを書きたいたための作品」では無く、「筆者の体験談をそのまま書く」よりも、ガンダムという形にアレンジする事で、「読み易い形にして人との接し方を見つめ直す機会にして欲しい」という主旨を盛り込んでいますので、筆者としてはどうしても多くの方に読んで頂きたく、長期存続を望んでいます。

以上のような理由から、本作の趣旨は、所謂「強いニュータイプ」「強いガンダム」という作品をお求めの方や、詳細な点の矛盾点を突付いて楽しみたい方には向かないものです。

ガンダムが強すぎると緊張感に欠け、「小説としてのハイライト」を作れないからです。

また筆者は劇場版Zガンダム以外は、逆襲のシャア以降の作品を殆ど見ていませんので、細かい公式設定は見落としている部分や敢えて無視した部分があります。

また「ガンダムだらけ」の作品でもありません。本作の敵対組織は「革命軍を名乗るテログループ」であり、「ロード軍」という言い回しを使う事もありますが、ガンダムを作れるほどの財力がありません。「ガンダム対ガンダム」の戦闘も実質的に無いとお考えください。

また、サイド4で戦闘している筈なのに重力圏に近づいたり、ガンダムに28基ものファンネルを仕込み、しかもボス機を砲撃で撃墜出来ないなど、主人公は、はっきり言ってガンダムのパイロットとしては、かなり弱いランクとなります。

筆者自身、本作は「ガンダムの小説である」と胸を張って言えるレ

ベルでは無いと考えています。

しかし、編纂にはあらずじの作成に約1年、再編集に3ヶ月を掛け、他の方からのご意見や、他作のレビューなども読みつつ、出来るだけ小説としてお楽しみ頂けるよう留意しました。

本作は、小説が好きな筆者が作成したため、携帯小説で嫌われがちな絵文字や擬音表現は一切無い作風です。爆発音などは、SFアニメなどを参考に各自で想像願います。

また音符もエピソードに1文字出る以外は、一切使いません。

送り仮名や文字表記については、全てを漢字にせず、読みにくくなる部分は意図的に平仮名と片仮名を混用しています（例「いまじぶん」×今時分 いま時分、など）。

また心で考えている言葉は、描写の都合上（）では無く””を使います。（）は振り仮名や他の使い方をしていきますのでまた、サイド4で戦闘している筈なのに重力圏に近づいたり、ガンダムに28基ものファンネルを仕込み、しかもボス機を砲撃で撃墜出来ないなど、主人公は、はつきり言ってガンダムのパイロットとしては、かなり弱いランクとなります。

本文は通常部は2行間隔、場面の切り替え部は5行間隔を標準としています。違う部分は単なるミスですので流してください。

送り仮名や文字表記については、全てを漢字にせず、読みにくくなる部分は意図的に平仮名と片仮名を混用しています（例「いまじぶん」×今時分 いま時分、など）。



また心で考えている言葉は、描写の都合上（ ）では無く” ”を使います。（ ）は振り仮名や別の使い方をしていますので、ご了承ください。

出来るだけ人物も、表情が想像できるような台詞や心理描写にしたつもりですが、至らない点はご容赦願います。

現実に筆者の周囲でどんな事が起こり、どんな場面にアレンジしたかは、別の駄文にまとめていく予定です。もし興味をお持ち頂ければ、そちらもご覧ください。

## 「作品説明」

いわゆる宇宙世紀ものです。

宇宙世紀0108年で、未だにジェガンやギラ・ドーガがい！という突っ込みは無しにして下さい。

敵MSは、過去の戦争で多数出たと思われる、残骸を寄せ集めて組み直したものと設定。

ギラ・ドーガやリック・ディアス（本編では改良型のためベリックと表記）を主力とし、キュベレイMK-？（同じくワルザ、グリアラスと表記）を前半の中ボス・大ボスの機体としています。

その他設定は、専門知識は皆無ですが、作中や「用語解説」に簡単に記述します。

シリアスな戦争を意識したので、戦災孤児の心理描写や会話が中心の、暗めの話です。

「強いガンダム」の話ではなく、戦争に苦悩し生きる意味を見い出せなくなっていく少年兵が、その打開策を周囲の大人から助言され、徐々に自分が生きる価値を導き出していく過程を描きます。

ニュータイプ描写もほぼ皆無、大気圏に突入してもすぐ帰還、大ボスの「ロード」もカリスマ性が無く、ガンダムファンには逆にウケないと思います。

病的症状等の解説は、ネットや正確な情報を元にした漫画等で簡単に調査するか、筆者経験を元に記載していますが、「これは絶対に間違ってる！」と誤解を招く表現があれば、ご連絡願います。

参考になるレビューは、辛口でも歓迎致します。ご質問や誤字脱字のご指摘等は、可能な限り早めに対応するつもりですが、持病のため体調の波が大きい体質ですので、気長にお付き合い頂ければと思います。

## 用語解説（前書き）

先に読むと面白くなくなる（？）解説も含みますので、出来れば本文を読んだ後にお読み下さい。

ガンダムファンには必要ないページ（？）です。

話が進むと増えるかもしれませんが。悪しからず。参考出典：殆どは  
ウィキペディア  
Wikipediaより。

## 用語解説

「Zガンダム（ゼータガンダム）」

飛行機型に変形するガンダム。「機動戦士Zガンダム」作中では主役機です。

初代ガンダム（通称：ファーストガンダム）や、ZZガンダム（ダブルゼータガンダム）と違って分離はせず、ファンネルと呼ばれる脳波で操作するビーム砲も付いていません。

前半に今回の主人公「ロサ」が乗る（エース）ガンダムのイメージの基本になった機体です。

「ZZガンダム（ダブルゼータガンダム）」

「機動戦士ガンダムZZ」の主役機。

スマートなZガンダムと異なり、色々な砲撃用武器を持つ、重装備機。後半の「ガンダム」の元ネタ。

上半身・胴体・腰から下の下半身の3つに分離し、それぞれが飛行機に変形しますが、2つだけ合体したら飛行機にもガンダムにもなりません。

ガンダムの分離機構の参考にもしています。

「ガンダム（エースガンダム）」

拙作の主役ガンダムの名称です。

前述のガンダム2機に、ファンネルという脳波で操作するビーム砲を足したものだ。というより、Zガンダムに分離機構とファンネルを付けて、パラス・アテネの腕ビーム砲の小型版を両腕に付けたもの。殆どZガンダムのパクリです。

「RX-93・ガンダム」

初めて「ファンネル」が付いたガンダム。「機動戦士ガンダム 逆襲のシャア」の主役機。拙作では説明のみ記載。

RX-93が型番、ガンダム（ニューガンダム）が機体名です。拙作ではファンネルの参考にしています。型番は他の機体も全てありますが、書ききれませんのでここでは省略します。

「ファンネル」と「サイコミュ」と「ニュータイプ」の関連性

簡単にいえば、「ファンネル」は頭で考えた通りにラジコンで動くビーム砲、「サイコミュ」はファンネルのコントローラーで、機体の操縦補助にも使えます。

ガンダムの世界では、「ニュータイプ」と言われる特殊能力を持つ人しか、操作出来ない事になっています。

筆者解釈は、後述の「ミノフスキー粒子」と呼ばれるガンダム世界

特有の帯電粒子が、何らかの理由で体に入った人同士が、空中や宇宙に撒き散らされた同粒子を通して通電するという、簡易な携帯電話のような状態、と考えていますので、近距離の意思疎通しか出来ないものと思います。

「ニュータイプは体内と宇宙に撒かれたミノフスキー粒子を媒体に共鳴を感じとる」という説がありますので、疑問のある方はそちらを検索して下さい。

語源は、最初に搭載した「キュベレイ」用が、車の排気パイプのファンネルに形が似ていたからです。

## 「ガンダム」

後半の主人公機。ZZやEX-S等に準じる重装備型。変形機構は有りません。その他仕様は本文で記述します。

## 「ジェガン」

ガンダム以外のモビルスーツのうち、ガンダムの味方側「地球連邦軍」の量産機の名前。いわゆるやられキャラ。「逆襲のシャア」からのパクリです。

他に「機動戦士ガンダムUC」<sup>ユニオン</sup>からのパクリで、ジェガンの肩に武器を追加できるように止め金を付けた「スタークジェガン」がアナハイムの警備機で登場する他、ガンダムよりワンランク下、という感じの、現実世界の警察特殊部隊（SAT・SWAT）の様に強行突入・接近戦向けの機体「ジェスタ」も、本来はジェガンの派生機

種です。

ちなみに拙作は宇宙世紀0108年、ジエガンの初製造は宇宙世紀0093年。15年前の機体が主力……と思いましたが、基本設計そのものは0120年まで使っているそうです。

### 「ギラ・ドーガ」

ガンダムの世界で初の量産モビルスーツ「ザク」の改良発展型で、拙作でもガンダムの敵側の量産機<sup>やひれキャラ</sup>。

0093〜0096年の戦争で、多数出たであろう撃墜された残骸を、寄せ集めて組み直したものと設定し、本作で使用。

また、ジム系の残骸を敵軍が使わない点は、筆者の技量で、ザク系とジム系が同じ側で「ごった煮」という状況を、きちんと書き上げるのは不可能と判断したからです。

### 「ベリック」

やはり「やられキャラ」ですが、革命軍側の隊長機用の機体。

「機動戦士Zガンダム」作中の戦争である「グリプス戦役」で用いられた「リックディアス」の残骸を組みなおした機体。「ガンマ・ガンダム」とも呼ばれた「リックディアス」の改良型であることから、「ベータ・リックディアス」を縮めた呼称。

基本的に、両軍共に3〜5機を1小隊と設定している為、隊長機と

言っても、1隻の戦艦に対し、平均2〜3機の隊長機が配備されま  
す。

ギラ・ドーガとは基本設計が異なるため、見た目は異なります。本  
文に簡単に説明を記載。

### 「ワルザ」

拙作独自のモビルスーツ名で、敵側のファンネル付きニュータイプ  
専用機。

設定上は、量産型キュベレイの装甲を、リック・ディアス（拙作で  
はベリックと表記）と互換性を持たせたもの。両機種は考案者が  
同じで、装甲以外の部分は似ているとの記述から設定しました。

ファンネルは肩バインダに収納して装備、全部で10基です。

### 「グリアラス」

敵軍のボス「ロード」の専用機。他はワルザと同じ（というか設定  
を考えていません…悪しからず）。ファンネルは10基付きです。

### 「アーシュレイ」

後半のロード専用機。ただし性能は桁違いに強いです。ファンネル  
は15基装備。



基本的には、やはり正史からのパクリ。概要は本文に記載します。

「モビルスーツ（MS）」と「モビルアーマー（MA）」

ガンダム特有の言い回しですが、要するに巨大ロボットの事。身長約18mが標準的。

MSとMAの区別の基準は結構曖昧ですが、「身長18mのザク（拙作ではギラドーガ）やジム（同ジェガン）とビームサーベルでの戦闘がし易い」構造の機体をMS、それ以外の「砲撃専用機（エルメス、アジール等）」や、「旧世代の奇襲用変形機（メツサーラやギャプラン等）」などがMAと考えるのが分かりやすいかと思えます。

宇宙世紀ではZガンダム以降、ムーバブルフレーム（現実世界のモノコック構造に類似した考え方）と呼ばれる機体構造が主流になり、推進力を後部に集める形に変形可能とし、高速移動をし易くした機体をTMS（Transformable Mobile Suit：可変モビルスーツ）と呼ぶようです。

宇宙世紀では、Zガンダムとガブスレイ以降の「白兵戦用変形機」は全てTMSに分類されるようです。

「コロニーレーザー」

スペースコロニーを改造して、まるごと一つを巨大なレーザー兵器にしたもの。

現実のレーザー発振機は、スイッチを入れたら即、光線が発射されますが、作中では巨大過ぎてエネルギー増幅に時間が掛かるのだと解釈してください。

カメラの反射望遠レンズや、天文台などの大型天体望遠鏡と同じく、増幅鏡を複数組み合わせ、同じ直線上の光を増やしていく、というのが基本原理。

実際に作動途中で壊れても、作中のように爆発はしないと思います。たぶん…。

## 「ガーゴイル」

作中では主人公が乗る戦艦の名前。「ラー・カイルム級」というのは、最初にこの大きさを作られた戦艦の名前に由来。現実の戦艦でも「金剛級」等の呼称があります。

全長約480m・全幅165m。ほぼ東京駅や上野駅の駅舎を除く地上ホーム部分と同じ大きさ。構造的には上下に何層がある筈なので、現在のの上野駅が近いかも知れません。モビルスーツデッキを上階から見ると、ちょうど上野駅常磐線ホームから、階下の特急ホームを覗くような感じだと思います。

戦艦にも用途により、「艦」という呼称が色々ありますが、区別の詳細な記載は進行上無意味であるため、拙作の軍のシンボルとなるガーゴイルを「戦艦（ラー・カイルム級）」、それより小さいものを小型高速移動艦として「巡洋艦（クラップ級）」と定義しました。

艦船の用途についての筆者解釈については、余談で詳述しましたので、そちらをご覧ください。

艦名として言い易いので、この名前にしましたが、語源を調べると少々不細工かも……。元ネタは「ソロモンの鍵」という昔のファミコンゲームの、火を吐く敵キャラです。

ちなみに、艦名は連邦軍が伝説上の魔物や精霊、革命軍側が星座を主に使います。

「戦艦の位置付けと艦船の用途について」

戦艦にも用途により、「艦」という呼称が色々ありますが、区別の詳細な記載は進行上無意味であるため、拙作の軍のシンボルとなるガーゴイルを「戦艦（ラー・カラム級）」、それより小さいものを小型高速移動艦として「巡洋艦（クラップ級）」と定義しました。

敵軍は残骸から組み直す都合上、生きている部品が多いと思われる戦艦（グワジン級）が主戦力。

現実の用途との対比は余談に記載しましたが、ガーゴイルのような、いわゆる宇宙戦艦に当て嵌まるような、ロボット等（現実には戦闘機や戦車等）の機動兵器を積める「戦艦」は、実在艦船には存在しません。

これはコスモゼロという戦闘機を積む「宇宙戦艦ヤマト」や、ガンダム等のモビルスーツ（戦闘ロボットの種類）を積む「ホワイトベース」等も同様です。

「スペースコロニーの名前」

「スペースコロニー」は、宇宙空間に人が住む為の構造物。宇宙ステーションと異なり永住するための設備があります。

形は全て円筒型ですが、位置により太陽光を採光する「開放型」と人工太陽を有する「密閉型」が有りますが、「スウィートウォーター」以外は細かい設定をしても進行上意味が無いため、特に決めていません。

サイド3などの名称は、ラグランジェポイントと言われる概念に基づいていて、ロサが住んでいたフロンティアサイドがラグランジェポイント1（L1）、サイド3がL2、サイド1のスウィートウォーターやロンデニオンがL5にあります。

サイドというのはコロニーの集まりで、個別のコロニーの名前ではありません。

同じサイドの中でも、作るときの出資した側の都合で、敵寄りだったり味方寄りだったりします。

「コロニーレーザー」

スペースコロニーを改造して、まるごと一つを巨大なレーザー兵器にしたもの。

現実のレーザー発振機は、スイッチを入れたら即、光線が発射され

ますが、作中では巨大過ぎてエネルギー増幅に時間が掛かるのだと解釈してください。

カメラの反射望遠レンズや、天文台などの大型天体望遠鏡と同じく、増幅鏡を複数組み合わせ、同じ直線上の光を増やしていく、というのが基本原理。

実際に作動途中で壊れても、作中のように爆発はしないと思います。たぶん…。

### 「地球連邦政府」

地球をまるごと統治する組織。

なにせエリートの役人ばかりなので、内部の争いも絶えないばかりで無く、無理やり全人類の統治までしようとして反発されたり、横領などずさんでやりたい放題な政治が目立つ時代も多く、しばしば戦争の種を蒔いています。

拙作でも、ご多聞に漏れず準拠(?)しています。

下部組織に地球連邦軍、連邦資本のコロニーの管理をするコロニー会社などがあります。

### 「月面都市」

フォン・ブラウン、アンマン、グラナダが該当。地球からみて上記の順に近いです。

フォン・ブラウンが地球から見て正面、アンマンは月の真横、グラナダが月の裏側というのが、大体共通しているみたいですので、拙作でも引用しました。

### 「スペースノイド」

地球から宇宙に移民した人、またはその子孫。ガンダムでは大体は抑圧の対象にされてしまいます。地球とは、環境の違いから、常識感覚が若干違います。

港⇨宇宙からの入り口で蓋が有り、水は無い

地下鉄⇨コロニーの外側（居住部から見て地下）を走るモノレールなどが代表例。

### 「アースノイド」

地球生まれの地球育ちの人。

ガンダムでは、コロニーの中で平気で戦争する（壊れて穴が空く概念がない）、政治的圧力をかける連邦政府の怠惰な連中という、悪いイメージが比較的強いです。

拙作では、中にはちゃんと考えてる人もいるんだよ、という事で、アースノイドのまともな人に司令官を任せてみました。

「ジオン/ネオ・ジオン」

拙作では、現存する「共和国」を付けた場合を除き、全て0093年のネオ・ジオンを名乗った反乱軍を指しています。後述の「ジオン共和国」出身者の過激派が名乗った私設軍が「ネオ・ジオン」で、この時の戦争を「第二次ネオジオン戦争」とも言います。作品名では「機動戦士ガンダム 逆襲のシャア」が該当。

ちなみに、流れを説明する上で、セリフに言葉が出るのみで、ジオン人やジオン軍そのものは、一切出てきません。

0093年は、主人公・ロサが生まれた年でもあります。

0093年の戦争は、アニメ版「逆襲のシャア」と小説版「ベルトーチカ・チルドレン」では内容が若干異なりますが、拙作の流れ的にはマフティー反乱が必要なので、小説版「逆襲のシャア・ベルトーチカチルドレン」が該当。

拙作の中の「ネオ・ジオン」「ジオン軍」は、全て「0093年のネオ・ジオン軍」と脳内変換して下さい。

第2次という言い回しになるのは、殆ど関係の無い軍がネオ・ジオンを名乗り戦争をした（「機動戦士ガンダムZZ」参照）ためです。

「サイド3駐留軍」

拙作では、政治的な情勢のターニングポイントになりますので解説

します。

0080年の「一年戦争」で敗れた直後、当時の「ジオン公国」サイド3」が、敗戦・降伏後に「ジオン共和国」と名を変え、和平の交換条件として、連邦軍の進駐を受け入れました。

この軍が専守防衛軍の「駐留軍」で、スペースノイドとアースノイドが仲直りする象徴とみなされた訳です。第二次世界大戦後の、日本と進駐軍みたいな関係であると考えて下さい。

その後、圧倒的な生産力の工業国となった「ジオン共和国」は、3度に亘り反政府軍が蜂起した為、それらを教訓として駐留軍に体制の改編を強く求めた結果、独自規格のモビルスーツ「フォーシエガン」のみで編成された「ガルーダ部隊」という特殊部隊の配備に至りました。それが作中の状況です。

「ジオン共和国」サイド3」

ネオ・ジオンとは別物で、拙作内では現存するという設定の、架空の国土の名前です。ややこしいですが。

作中のジオン共和国そのものは、独立国家という設定なので、無論地球連邦軍に対して、敵意はありません。

ただ、作中の戦争の発端となった、連邦政府からぞんざいな扱いを受けていたコロニー・「スウィートウォーター」に住む人間の殆どが、旧ジオン公国出身であり、これまでの解説から、元々連邦政府に良い気持ちを持っていない者が多いであろう事は、何となく察して頂けると思います。



過去の不満に加えて、再びジオン公国出身者の生活を圧迫し始めた連邦政府。そりゃ戦争も起こりますわな、という状況で、本作が始まります。

### 「ミノフスキー粒子」

レーダーを攪乱するために使う架空の粉。特徴はレーダーに「完全に映らなくなる」という事。現実の戦闘機が攪乱に使う「チャフ」のような金属箔や「フレア」のような擬似熱源を撒いても、機体は映るため隠すのは無理です。金属粉を撒くのは全く異なるという事です。

詳細は「ミノフスキーの物理学」という架空設定の物理学を検索してみてください。色々な解釈があるため、筆者に詳述は出来ません。

### 「アナハイム・エレクトロニクス（略称はアナハイム）」

架空の会社。同名の实在会社とは関係ありません。

「機動戦士Zガンダム」以降の宇宙世紀の世界では、ガンダム系の機体を中心に殆んど連邦系MSを造っていて、設定上は欠かせないと言える会社です。拙作でも出て来ます。

ジム系は他社へのOEMで関わっていたらしく、自社ライセンス生産はZガンダム作中のリック・ディアス辺りから本格的に始めたようです。

かなり以前から、敵対する連邦政府軍と反連邦政府軍の双方の機体を製造していると、もっぱらの噂があります。

### 「スラスタールとメインバーニア」

機械科出身の筆者にとって、「スラスト」は回転体の軸方向の応力を意味する言葉（タイヤで例えると側面への力）であり、飛行機と違いファンブレードを使わない水素噴射エンジンをスラスタールと呼ぶのは、どうも違和感を感じますので、推進方向の噴射は全て「メインバーニア」、姿勢制御を「スラスタール」とし、「アポジモーター」という言葉は使いません。この点に関しては独自解釈となりますが、訂正は致しません。

最後部の余談にあるとおり、本来の宇宙用語から考えると、間違った用語を用いているようですが、敢えて訂正はしません。メインロケットなんて書いても、イメージ出来る人が居ないと思いますので。

### 「推進剤と燃料、エネルギーの概念」

筆者の独自解釈です。「推進剤」とは、ここでは主に液体水素と液体酸素（地球ではガスバーナーと同じなので水素のみでも可）。

一定割合で混合した後、核融合炉の熱で膨張させて、背中のノズル（ここではメインバーニアと表記）から噴出する反動で、機体を動かします。

宇宙工学関係では、「燃料」では無く「推進剤」という呼称を使い、「機体のエネルギー」という表現では、車で例えると「ガソリン」

推進剤）」と「バッテリーの電力（炉の熱・半永久的に続く）」まで含まれてしまったため、きちんと呼び分けるのが正しいようです。

ちなみに文中で「ケロシンは古い」という表現が有りますが、実際には最も取り扱いが簡単で、構造も一番シビアさが必要無い（最も安全である）為、現在も推進剤としてロケットのブースターに使っています。

## 「ホワイトアウト」

本文を読んだ後に、もう一度ここを読んでいただいた方が、状況が分かりやすいと思います。

例えば、いわゆる「火事場の馬鹿力」とか、階数の多いビルで火事が起こったとき、逃げ回って何とか助かった場合、自分が逃げた経路を、後で聞かれても「それどころじゃ無いわい！」と思います。あの状態が一番近いです。

ここでは、意識はあるが無意識の行動、という、少し他人に理解しがたい状況を言います。

文章で具体的に表すと、

気絶　ブラックアウト　立ち眩み　正常　呆然　ホワイトアウト

気絶、条件反射の行動、或いは狂気の行動

となります。

作中では、エリオットが恐怖のどん底の状況で、無線から口サの声

ばかり聞いてたので、その声を聞くと思い出して怖い、ビームライフルで撃たれたのでその光を見るのも怖い、と感じてホワイトアウトを再度起こす、という状態です。

以前、映画のタイトルで同じ言葉が使われましたが、あちらは猛吹雪で視界ゼロの状況という状態を指していますので、全く状況は異なります。この欄の「ブラックアウト」と、F1レースのスタート時の「ブラックアウト」が全く異なる意味であるのと同じです。

#### 「トラウマについての説明」

「ある嫌な体験をした時に、その時に体に発生した不快な事や良くない事」が、再度起こった場合に必ず再現される状態。

失神したり、吐き気だったり、恐怖感だったり、様々な症状が起こります。

作中では声を聞いたり、ビーム砲を見る事でホワイトアウトを起こすという、トラウマによる身体異常を起こしています。

筆者自身も、「ストレス性の過換気症」や、「ある状況になると胃痙攣を起こす」というトラウマがあります。

ホワイトアウトを起こすほどの恐怖であれば必ずトラウマは発動すると思われれますので、表現に加えました。精神疾患の一種だと思います。

もしトラウマを持っている人が身近にいたら、話をきちんと聞いて理解してあげてください。精神疾患は理解されにくく、本人はマジ

で辛いものですので。

### 「ロサの心臓病」

病名や「3日で退院可」等の要素は、少年サンデーの「最上の命医」  
という漫画を参照。

グラナダでロサが決断を下す際、より不自然さが無いと考え、再編集後は関連シーンを増やしました。

現実的には障害者手帳が発行される重度障害で、戦闘用のロボット等の操縦は、出来ない筈です。

ちなみに「完全大血管転移症」の手術後、狭心症等の後遺症による発作が起るか否かは個人差があり、全く起きない人も実際に居るみたいです。

余談ですが、主人公のように発作が起きたからと言って、薬で抑え続けるのは寿命を縮める元で、筆者の祖母が、「救心」を飲み続けて病院へ行かなかった為に、心不全で亡くなっています。決して真似はしないように。

### 「その他の病的症状」

「早生まれの人が劣等感を持ちやすい」というのは、筆者の経験を踏まえたものですが、最近になって、筆者が出産時に仮死状態で生まれていた事や、アスペルガー症候群を持っている事が判明したため、実際には原因が違ふ可能性があります。

記憶力低下に関するセリフも、パワーハラズメントが原因で、アスペルガーによる恐怖感が引き起こしたものか、鬱による不眠症や拒食症による栄養失調が原因なのか、今のところ判然としません。

その辺りの筆者の体験については、別冊の裏話に章ごとに対照させて記述していきますので、そちらをご覧ください。

### 「宇高連絡船」

輸送艦サジタリアスのイメージの元ネタ。瀬戸大橋開業前のJR/国鉄の連絡船の事。

艦橋（ブリッジ・操舵室の事）のすぐ下に貨物列車を搬入するハッチがあり、通常の楔型とは違う独特な形をしていました。

第二次世界大戦以前の、歩兵を揚陸させるのが主目的であった頃の強襲揚陸艦の形状も、こんな形状であったのだらうと推測できる形状をしています。

### 「ガンダムの簡単な流れ」

拙作の状況になるまでの流れを示します。

機動戦士ガンダム…宇宙世紀0079～0080年。「一年戦争」も同義。

機動戦士Zガンダム…宇宙世紀0087年。「グリプス戦役」も同

義。

機動戦士ガンダムZZ…0088年。「第1次ネオ・ジオン戦争」も同義。

機動戦士ガンダム 逆襲のシャア ベルトーチカチルドレン…0093年。映画版とは内容が異なり、マフティー反乱に繋がる小説。「第2次ネオ・ジオン戦争」も同義。

機動戦士ガンダムUC…<sup>ユニオン</sup>0096年。「袖つきの反乱」も同義。

機動戦士ガンダム閃光のハサウェイ…0105年。拙作冒頭の説明中、「マフティー反乱」はこの作品を指します。

拙作…0108年

この他にも「機動戦士ガンダム」からの派生作品は多数あり、拙作にも少し関連のある年代が舞台の作品を、タイトルだけ掲載します。

機動戦士ガンダム THE ORIGIN…宇宙世紀0079年

機動戦士ガンダム エコール・デュ・シエル…0087年

機動戦士ガンダム アドバンス・オブ・ゼータ…0087年

他にも小説が多数あります。

拙作に関連する時代の小説として、「機動戦士ガンダム 逆襲のシャア」、「機動戦士ガンダム 逆襲のシャア ベルトーチカ・チルドレン」がありますが、両作品はパラレルワールドで、結末も異なる。

ります。



## プロローグ（前書き）

宇宙世紀0105年のマフティー反乱の鎮圧後、地球連邦政府に対する脅威は薄れ、それにより連邦政府の横暴や怠惰も目立ち始め、スペースノイドの生活を圧迫し始めた。

この現状を打破すべく宇宙世紀0107年、ロード革命戦線が蜂起し、連邦軍は鎮圧のためガーゴイル隊を編成。再び宇宙が戦場と化す。

その後、戦いは0108年になっても続き、主人公・ロサが偶然ガンダムに乗り込むこととなり、新たな戦局を迎える。

## プロローグ

「シャインリバー shine river」

過去の戦争の残党である反連邦政府組織「ネオ・ジオン」が、戦争難民への救済として、残骸を継ぎ合わせて建造したサイド1のコロニー「スウィート・ウォーター」が老朽化し、その代替として、月と地球の延長線上に有り、当時コロニーの空白地帯となっていた「フロンティアサイド（サイド4の再開発地域）」の、最も地球寄りの外郭部に新造されたコロニーである。

人類史上初のコロニーが造られた「サイド1」は、月の公転軌道上で月を追いかける位置に在るのだが、元々コロニーが多く、「スウィート・ウォーター」の代替の為の新造コロニーを配置するスペースが無かったため、シャインリバーをサイド4に建設し、移住させる形に落ち着いた。

その経緯から、比較的「ネオ・ジオン」に共感を持つ者も多く、また低所得層の住民が殆どである事も、このシャインリバーというコロニーの特徴である。

つまり、地球連邦政府に対して、あまり良い感情を持っていない人間が多いのが、現状である。

だが、住民に労働の機会を与えようと、ネオ・ジオンの鎮圧後、連邦政府は大規模な軍需工場の造成に乗り出し、今や大部分の住民は、何らかの形で、連邦政府から出て来た金のお世話になるしかない。

そういう状況もまた、このコロニーの現状なのである。

また連邦政府の口添えで、小型の輸送用シャトルを製造する工場も、月面都市グラナダから、アナハイム・エレクトロニクスの子会社が移転してきて、コロニーの就業率向上に、一役買っていた。

そうだった背景から、連邦関係者が移住する際には優遇され、連邦政府高官やエリートクラスのパイロットなどが、居住地や別荘地として住居を購入するケースも多く見られた。

やがて、連邦政府関係者が高級住宅地を形成し、拡大を繰り返したため、本来の住民である筈の貧困層が、片隅に押しやられてしまった。

このため、シャインリバーの貧困層が暮らす、コロニー端部の地域はスラム街となり、軍関係の労働で、体を壊したり怪我の後遺症を持った者も増え、路上生活者も増加し始めた。

さらに、「スウィート・ウォーター」のスラム街で税金を払う事も出来ず、コロニー公社からシャインリバーに移住する費用も出してもらえなかった貧民層が、当時まだ小規模テロ組織に過ぎなかった「ロード革命戦線」からの施しを受け、遂に革命活動に参加する者が出て来た。

元々、連邦軍に良い感情は持っていない者達である。一個師団が出来るのに、大した時間は掛からなかった。

また、スウィート・ウォーターの維持管理を担当していた、コロニー公社の人間の一部が、維持の杜撰さや待遇に反発して、維持費用を「ロード革命戦線」に横流しするようになる。

これで資金源を得た革命軍は、急速に勢力を拡大し始め、さらにシヤインリバーのスラム街の中から、「ロード革命戦線」に密通する者も現れた。

これを防ぐ為、スラム街の路上生活者が、再三に亘って軍の取締りを受ける様になった。

これに反発した者が、スウィート・ウォーターとの間で運航されていた移住シャトルで、密航者として再度逆戻りし、革命軍に参加し始めるようになった。

こうして、またしても、地球連邦政府とスペースノイドとの間に、確執が生まれたのである。

このような連邦政府の傲慢な政策は、再びスペースノイド全体の反感を買い始め、廃棄される予定だったものの予算が足りなくなり、放置されていたスウィート・ウォーターの旧ネオ・ジオン軍事施設が革命軍に制圧された後、これを拠点に、宇宙世紀0107年、「ロード革命戦線」が地球連邦軍に宣戦布告し、反旗を翻した。

本来は、戦艦「ガーゴイル」は、宇宙世紀0105年に蜂起した反乱軍「マフティー・エリユ・ナビン（以下マフティー軍と記載）」の反乱が宇宙に拡大するのを、未然に防ぐ目的で建造されたものだった。

その本来の目的を果たす前に「マフティー軍」は鎮圧されたが、そ

の後に蜂起した「ロード革命戦線」の殲滅を目的とした地球連邦軍の主力特殊部隊として、この艦を中心とした第15独立艦隊、通称「ガーゴイル隊」が新たに設置された。

これには、戦闘用の人型ロボットである「モビルスーツ」15機搭載の「ガーゴイル」、同10機の「サラマンダー」「シルフィード」「クラーケン」「フェンリル」「ケルベロス」で編成される。

このうち、ガーゴイル、サラマンダー、シルフィードがフロンティアサイド、そのほかはサイド1の常駐となり、革命軍に対する本格的な掃討作戦が開始された。

このガーゴイル隊のエースパイロットであった、ハートレイ「ヒシモト」の専用機・Aガンダムは、本来は連邦軍の「ペーネロペー（オデュッセウスガンダム）」が、マフティー軍の「（クスイ）ガンダム」を万一防ぎ切れなかった際に、援軍として大気圏突入に対応出来る仕様で製造されたが、実際にはその役割を果たす事は無かった。

その後、ロード革命戦線の宇宙での戦力拡大に伴い、過去の戦争で使用された特殊機器をAガンダムに搭載したため、一般のパイロットでは操縦出来なかった。

試験搭載する機器の、搭載前と後の効果を、実戦形式で確認する為に2機製造され、ハートレイ以外では唯一、Aガンダムをともに扱えた息子・ロサが、テストパイロットとしてハートレイの敵役を務め、改良・調整を加えつつ使われた。

だが、戦闘空域にエンジン故障で紛れ込んだ民間機を、戦闘中に救出しようとして、ハートレイはロードに撃墜された。

ハートレイの撃墜後、ロサはAガンダムの正規パイロットへの転換を志願したが、年齢（10〜14歳の時期）が公序良俗に反すると倫理的問題で、ロサを正規の軍パイロットとして扱えず、却下された。

その後は、ロサ自身も後述の事情により、行方不明になりがちで、使われなくなった1機が、残ったまま放置されていた。

それが今回の主人公・ロサの機体である。

前述の事情で、ガンダムにはハートレイが地球での作戦に加わる状況も想定された為、地球圏再突入のためのフライングアーマー（空気の摩擦熱に耐えるための盾）を装備して、これを使うのに最も安定した性能を発揮出来る様に、戦闘機型に変形する機構が組み込まれた。

ガンダムが特殊機と言われる所以である、思念波操作システム「サイコ・コミュニケーション」（通称サイコミュ）」を用いた、思念波操作式の小型移動ビーム砲台「ファンネル」も、ロード革命戦線の勢力拡大に伴い10基に増強された他に、「パラスアテネ」を参考に、左右各下腕部に小型の2連装ビームキャノンを追加した。

また、弾薬切れの際に、シールドをトンファーとして使える様に強度を向上するなど、小威力の武装も追加されている。

コアトップ（胸部より上の上半身）、コアファイター（腹部・パイロット搭乗部）、コアベース（腰から下の下半身）の3部位に分離し、それぞれを小型の飛行機形態に変形しての独立運用や、コアファイターから件の思念波操作による他機の完全遠隔操作など、トラ

ンプの切り札・エースのように運用出来るとして、ガンダムと名づけられた。

そのような構造になってはいるが、実際にはサイコミュ搭載機の為、正規パイロットではハートレイ以外がともに操縦できず、またモビルスーツとして運用した方が、遙かに求められた性能を発揮し易かった為、実際には分離運用された実績は無い。

## 1・コロニー強襲（前書き）

スペースコロニー「シャインリバー」のある場所で、一人の少年が、尋常では無い強さの殺気を放っていた。

それは、「シャインリバー」の日常の光景であった。

だが、この日を境に、そんな日常が崩れた。



## 1・コロニー強襲

スペースコロニー「シャインリバー」の、とある街角。

「これじゃ足りねえだろ…？上納金つてのは、大人しく出した方が、身の為だぜ」

いわゆる坊っちゃん刈りをもう少し伸ばした感じの、短髪・黒髪、黒いジャージ姿の細身の少年が、とあるマフィアの事務所の一角で、ボスらしき白髪まじりの初老の男に向かって凄んでいる。

ローズウツドの重厚な机や内装材を用いた、如何にも、といった雰囲気、典型的なヤクザ組織の事務所。その中で、どう見ても少年の姿は、浮いて見える。

サバを読んでも身長160cmに満たない、丸顔のその幼い容姿は、誰がどう見ても中学生。とても高校を出ているようには見えない。

だが、その殺気は尋常ではなく、初老の男も青い顔をして、必死の表情で少年をなだめている。明らかに仕立て服と判る、上等な生地、の黒いスーツも、その表情の為に霞んでしまう。

「最近軍の路上生活者の取り締まりが厳しくなったから、そのと

ばつちりで、シャブ（覚醒剤のこと）やチャカ（拳銃のこと）も売れねえ。うちも商売あがったりなんだ。お前さん、元パイロットなんだろ？軍に言ってくれよ、路上生活者以外にまで口を出すなって……」

そんな男の様子を、ふん、と見下すように鼻先で笑い、只でさえ強い殺気を更に強くして、吐き捨てるように言いながら、少年が凄む。

「俺は正規の軍人じゃ無え。只のテストパイロットだ。そんなことだから、俺みたいなガキに、上納金を払うハメになるんだよ。全く、情けねえ連中だぜ。まあ良い、また来る。邪魔したな」

そう言い残して、少年がドアの外へ出た後、傍らに居た、サンングラスを掛けた下っ端とおぼしき若い組員が、ドアを睨みながら呟いた。

「あの野郎……何様のつもりだ」

「仕方があるまい。奴のお陰で、今やシャインリバーの組織は、うちだけが生き残ってるんだ。死にたくなければ、大人しく従うしかない」

初老の男が、青い顔のまま溜め息をついて言い終わった途端、分厚い黒檀のドアが粉々に吹き飛び、右の裏拳を構えたままの、少年の顔が見えた。

「陰口を叩くのは、相手が居ないのを確認してからにしろ。こんな風になりたく無いならな」

恐怖に染まった表情で、真っ青になって固まった組員達の顔を見て、少年はニヤリと冷酷な笑みを浮かべ、そのまま引き上げていった。

まもなく15歳になるこの少年・ロサ・ヒシモトは、恒例の「集金」を終え、スラム街から市街地へ向かって歩いていった。

裏通りから商店街へ抜けた時、ロサは、少し先の大通りを横切る大型トレーラーの荷台に載せられた荷物の、見覚えのあるシルエットに目を奪われた。

半年ほど口にしていなかった言葉が、呆けた様な表情をしたロサの口から、自然とこぼれ落ちた。

「あれは…親父のガンダム…？」

事情を知らない一般の人間には、小型の輸送機か戦闘機にしか見えない飛行機が、目隠しの布をかぶせられ、トレーラーの長さ20mほどの荷台に乗せられている。布の形状から見て、ステルス戦闘機「F-117・ナイトホーク」によく似た、直線的な形状の機体。

元パイロット”と言われたロサは、年齢の問題で正規の軍のパイロットでは無かったが、確かにテストパイロットをしていた。その担当機体の形状を見間違ふことは、まずあり得ない。

だが父の撃墜後、残った1機は月面都市「フォン・ブラウン」に在る、製造元の「アナハイム・エレクトロニクス」に引き取られたと風の便りに聞いていた。

「何でガンダムが、こんな所に…？」

ロサはトレーラーを追ってみたが、生身の人間に追いつける筈も無く、トレーラーは視界から消えた。

「近づきたくは無いが、何か知ってるかも知れない。……しょうがねえ、行ってみるか」

如何にも不機嫌そうに舌打ちした後、母・ケイトが事情を知らないか尋ねようと、ロサが滅多に戻らない自宅に向かって歩き出した。

「まったく…何で自分家おんがに戻るのに、舌打ちしなきゃならねえんだよ！？」

自宅前に辿り着き、忌々しげに、もう一度盛大な音を立てて舌打ちした後、ロサが玄関に入ろうとした、その時である。

突然、コロニー中に大音量のサイレンが鳴り響いた。

戦闘開始か、コロニーのどこかが破損してエア漏れを起こしたかの、どちらかしか鳴らない筈のサイレン。

ロサの体が、その音にピクリと跳ね上がると同時に、ロサの母・ケイトが中から飛び出して来て、ロサとぶつかった。その反動で、再びケイトは玄関の中に投げ出される。

「痛いわね！何ボサツと突っ立ってんのよ！？」

顔をしかめてケイトがロサに怒鳴った直後、ケイトと共に、建物が突然押し潰された。

ぶつかった反動で、ロサも1mほど後ろに飛ばされた。だが、その1mが生死を分けた。

軍人の息子であるロサには、すぐにモビルスーツが着陸したのだと判断出来た。

アメリカンフットボールのプロテクターを着たような、ずんぐりとしたシルエットに、右肩に盾を付け、左肩に棘の生えた、モスグリーンの機体。

シャインリバーの連邦軍施設の乗っ取りを企てた、「ロード革命戦線」の主力機「ギラ・ドーガ」の一機であった。

「逃げなきゃ……！」

焦りと恐怖を隠しきれない表情で、ロサが呟いた直後、背中ランドセルの箱に付いた戦闘機のエンジンを大型化したようなバーニアを噴かし、離陸するギラ・ドーガの排気に吹き飛ばされ、ロサは近くの建物の壁に背中から叩きつけられた。

流石に冷静さをなくしたロサは、「上納金」を落とした事にも気付かず、無我夢中でその場から逃げ出した。

近くの公園のシェルターを目指して、10分程、逃げ回った頃だろうか。

サイレンがけたたましく鳴り響く大通りで、先程のトレーラーが、崩れたオフィスビルの瓦礫に行く手を遮られ、立ち往生している場面に出くわした。

「あれは、さっきのガンダム!？」

走りながら呟いたロサの足は、自然とトレーラーに向かっていく。

護衛の軍人も、トレーラーを旋回させようと周囲を確認するが、瓦礫が増える一方で、どうしようも無くなってきた。

その隙をみて、ロサがトレーラーの荷台に飛び込む。

「そこのガキ、何やってんだ!？」

気付いた護衛官がロサに向かって怒鳴るが、今はそれ所では無い。

「モビルスーツも扱えねえへボ軍人は、黙ってる!!」

ロサは、振り向きもせず怒鳴り返し、そのままコックピットに潜り込んだ後、手早く内部を確認した。

「やっぱり間違いない。A<sup>エース</sup>ガンダムか」

操縦桿が1本の戦闘機とは、明らかに異なる雰囲気。パワーシヨベルのように、両肘掛けに付いた、射撃ボタン付きの操作レバー。

人型の量産型モビルスーツ「ジェガン」と、ほぼ同じ機器配置のコックピットだが、変形機構のスイッチや、ジェガンより多い武装の数だけ、増設された残弾確認モニターを見て、ロサが呟いた。

手早く主電源を投入後、急いで機体の状況を、ヘッドアップディスプレイのモニターで確認していく。

幼い頃から軍基地に父・ハートレイに連れて行かれ、この機体のテストにも何年も付き合わされたので、操縦は体が覚えている。

量産機のジェガンで、ファンネルを使う特殊機であるAガンダムに乗る父・ハートレイと、互角の戦いを繰り広げ、父の同僚を何度も驚かせた事もあった。

「エネルギー残量は…核融合炉は動くが、推進剤がこの戦闘でギリギリもつかどうか…か。頼むから、とりあえずもってくれよ…！」

祈る気持ちで、ロサが操縦レバーに力を込める。目隠しの布を引きちぎって、飛行機型のまま、Aガンダムが離陸した。



「武器は……ビームサーベルだけ!? 何で!？」

幾ら叫んでも、武器が増える訳ではない。仕方なく、そのまま若草色のジエガンと交戦中の、5機のもスグリーンの「キラ・ドーガ」の編隊に向かう。その戦闘の様子は、スマートな直線基調のデザインのジエガンと威ついシルエットのキラ・ドーガ、正に牛若丸と弁慶の戦いを思わせる。

空中戦をするのに十分な高さを見計らって、ロサがAガンダムを飛行機形態から人型のモビルスーツ形態に変形させた。ジエガンより若干威つい体格のシルエットに、額に付いたV字型の高性能アンテナと、釣り上がった二つの目。以前の戦争で活躍した「Zガンダム」によく似た白い機体が、姿を現した。

「あれは、まさか……Aガンダム!? パイロットは死んだ筈では無かったのか!！」

気付いたキラ・ドーガのパイロットが、幽霊でも見たような表情で叫び、Aガンダムにザクマシンガンを向けた。

「コロニーの中で、そんなものを使うんじゃないやねえよ! 穴が開くだろうが!！」

スクリーン越しにギラ・ドーガを睨みつけ、叫んだロサは半年近いブランクを感じさせない操縦でAガンダムを操る。

引き金を引く暇も無く、ギラ・ドーガの背中の中のランドセル（エンジンの噴射装置・バーニアの付いた箱）が切り裂かれ、空中で爆発した。

「こいつ！よくも仲間をつ……！！」

それを見た他の機体が、ジエガンから離れ、一斉にAガンダムに襲いかかった。相手は以前、彼等の総帥と互角に渡り合った機体であるAガンダム。ギラ・ドーガが単機で飛び掛ったところで、勝てる訳がないと悟っているから、彼等4機の行動は速かった。

突然、攻撃目標が目の前から消えたジエガン隊は、その動きを捕捉し切れずに、ギラ・ドーガを一瞬見失った時間だけ、追跡が遅れてしまった。それを見たロサが、軽く舌打ちしつつ、ギラ・ドーガに背を向けて加速する。

「ちつ、4対1か。まともにやり合って、コロニーに穴を開けたらまずい。地表に近づかないように注意しながら、全部、町外れの空中で始末してやる」

冷静に判断してロサが呟いた後、Aガンダムは市街地を通り越し、

居住者の少ない、町外れの丘陵地に向かい始めた。

コロニーの端の方にある、草原と林が広がる小規模な自然公園の上空にきた所で、いきなり振り向いて突撃して来たAガンダムに、キラ・ドーガの1機がビームサーベルで切り裂かれ、爆発する。

残りの3機が、それに釣られてビームサーベルを抜き、一斉にAガンダムに斬りかかった。

だが、天賦の才を持ち、しかもエースパイロット直々の英才教育を受けていたロサが、雑魚に落とされる筈も無い。

キラ・ドーガが1機、また1機と切り裂かれ、撃墜されていく。やがて、勝てないと悟った残りの1機が逃げ出した。

「逃がすかよ!……あの番号!!お袋を殺つたのは、てめえか!?!」

自宅を潰された時に見覚えのある、肩の背面側の「03」の機番表記を見て、ロサの怒りが爆発する。

だが、推進剤不足を示す、手元の赤い警告ランプが不意に点灯し、ロサを現実を引き戻した。

「推進剤切れだど!?!?.....くそっ!!」

舌打ちしながらギラ・ドーガの背中を睨み付け、ロサも追撃しようとするが、最終警告を意味する連続警報音が鳴り響き、ロサを止めた。

コロニー内は、地球と同じく疑似重力がある。下手に追って、推進剤が空になれば、墜落してしまう。

「ちくしょう!!何で推進剤くらい、入れといてくれないんだよ!!」

拳を握りしめて肘掛けに叩きつけ、八つ当たり気味に怒鳴った後、ロサは ガンダムを足元の草原に着陸させた。

残っていたジエガン数機が、ギラ・ドーガを追撃していったが、どうやら逃げられたようだった。

追撃に参加しなかったジエガンの1機が、ガンダムに近づき、着陸した。

その機体から、小隊長らしきパイロットが降りた後、ガンダムの

傍らにやってきて、声を掛けてきた。

「Aガンダムのパイロットは誰だ？乗っているのは、連邦軍のパイロットか？」

話し方は凜々しいが、優しい雰囲気の女性の声。

その声で気付いたが、よく見ると分厚いパイロットスーツ越しでも、胸元の膨らみが、うっすらと判る。

その声は、ロサには聞き覚えのある声だった。

「レイラ…？」

ロサは怪訝そうな声で呟き、スクリーン越しにパイロットを一瞥して、コックピットのハッチを開け、地面に降りた。

ヘルメットも被っていないロサの顔を見て、相手は驚いた声を出した。

「えっ…？あなた、民間人…？」

相手がヘルメットのバイザーを上げて、目を見開いた。やはり、ロサの幼馴染で、姉・ソフィアの友人のレイラ・イルフォードのようだ。

「レイラ姉ちゃんか？」

ロサは、昔のままの呼び方で呼んでみた。その声を聞き、相手は完全に緊張感が解けた表情に変わった。

「ロサ……？もしかして、あなた、ロサなの！？」

レイラが士官学校に入って以来、二人はもう4年間も会っていない。

Aガンダムの調整作業は、所属艦「ガーゴイル」とメーカーを往復する輸送艦の内部で行われていて、直接ロサがガーゴイルに入る機会は、無かった為である。

レイラの記憶の中では、ロサはまだ身長140cm程度の小学生だった。15cm以上も身長が伸びた今のロサを見て、気付かなかったのも無理は無い。

知っている顔に会って緊張感が緩み、ロサは急に涙ぐんだ。状況が

落ち着いて、目の前で母が死んだ事、その瞬間の光景を、今になつて思い出したのである。

「どつしたの!？」

レイラは、急に涙を見せたロサに驚き、慌てて駆け寄った。

ロサは、あまりにも急な状況の変化に理解力がついていけず、レイラが両肩に手を置いて目線を合わせても、言葉が出て来ないまま、無言で涙を流し続けた。

レイラはヘルメットを取り、ロサより少しだけ長い黒い髪と、やや細面の優しい目をした顔を見せた後、少しでも落ち着かせようと、無言でロサを抱きしめた。

目線が、まだ顎の高さまでしか無いロサの頭を、何度も労るように撫で続ける。

レイラの、軍の訓練で鍛えられた女性特有の、細いがしなやかな弾力のある体に身を任せ、ロサが嗚咽を押し殺し、肩を震わせた。

追撃を終えた、他のジェガンがレイラ機を見つけ、数機が集まってきた。

ロサの母・ケイトは、ロサが生まれてから戦乱が続いた為に、元々帰宅する事が少なかった軍人の夫・ハートレイの目を盗み、度々愛人を家に上がり込ませていた。

その光景を何度も見ていたロサは、自宅には次第に寄り付かなくなっていた。

元々、軍人の父に、戦乱の合間を縫っては海軍式に鍛える育て方をされた為、ロサは10歳に満たないうちに、本格的に軍人を相手にして、人間の急所を狙い制圧する為に使う、対重火器戦を想定した殺人武術の大半を身につけていた。

12歳の頃には、マフティー反乱が起こり、世界中が緊張状態になったため、ハートレイは年中を通して、殆ど自宅には戻れなくな

この頃からロサは武術を悪用し、暇を見つけては、手当たり次第に街のチンピラと喧嘩して、金を巻き上げる生活をするようになっていく。



どうせ、ろくでもない手段で得た金だろうから、警察に駆け込まれる心配も無いだろう、と考えるの事だった。

やがて、金を巻き上げられた者達が出入りしていたマフィアや犯罪組織が、次々にロサを潰しに掛かったものの、全て返り討ちに遭い、素手で壊滅させられてしまった。

次第に、ロサを敵に回せば潰されると、犯罪組織ですら逆らわなくなつた。

そんな生活をする内に、気が付けば、シャインリバーの裏社会で知らぬ者は居ない程、顔が利くようになっていた。

警察ですら、彼が絡んでいると判つた途端に、顔色を変えて、引き上げるようになっていた。

そんな生活をしていたロサだったが、母の愛人には敢えて目を向けない様になっていた。

父が殆ど帰って来ないと、自分が寂しく感じているのだから、母の寂しさはいかばかりかと、せめてものロサの優しさのつもりだった。

まともに相手に会えば、逆上して殺してしまうだろう。

そうなった時のケイトの心情を思えば、自分が家に近づかないのが望ましいと、ロサは考えていた。

ハートレイの死後、ケイトの行動は更に大っぴらになり、思春期を迎えて完全に嫌気が差したロサは、ほぼ完全に自宅に戻らなくなつたが、ケイトは探しもせず、何も言わなかつた。

元々、同じ様な理由から、中学卒業後に失踪した5歳上の姉・ソフィアが居たのだが、やはりケイトは、特に探す様子を見せる事も無かつた。

そんな環境が、ヒシモト家の家族の絆を蝕んでいった。それでも、母の死は悲しかった。

泣き止んで気分が落ち着いたロサは、レイラには余計な心配をかけまいと、自宅が倒壊した時にケイトが死んだ事だけを話した。

レイラの勧めで、ロサは、元の父の所属艦であつた戦艦「ガーゴイル」に向かつた。

## 2 ハートレイの記憶（前書き）

レイラに連れられ、以前はハートレイとガンダムも所属していた、ラー・カイラム級戦艦「ガーゴイル」に到着したロサ。

かつての父の上司に迎えられ、新たな居場所を得る事になった。

## 2・ハートレイの記憶

直前に、至近の空域で戦闘があり、軽い被弾箇所も有った為、その修理と弾薬の補給のために、ラー・カイラム級戦艦「ガーゴイル」は、シャインリバーの軍港に寄港していた。

軍港と言っても、直径が6km程しか無いコロニーの片隅に設けられているピットのようなものだから、全長480m強・幅165mもの巨大な戦艦が入れば、それで手一杯になってしまう。

その内装も、四方を無骨な金属の壁に覆われた、正に造船ドックのような景色である。地球の港のように、見渡す限りの大海原が広がるという、眺めていて人の心が洗われるような景色ではない。

モビルスーツについては、オーバーホール（分解して組み立て直すレベルの、大規模な検査修理）が行える工場が軍港の傍らにあり、先ほどの戦闘で被弾したジェガン数機が、既に修理に入っている。

一応、艦船についても、簡単な修理作業が行える規模なので、ガーゴイルの船体の修理も並行して行われていた。

港のハッチは作業の安全確保の為に閉じられていて、コロニー外部の満天の星空を見る事は、まだ出来ない。後部から見る宇宙用の艦船は、スペースシャトル用の何倍もある巨大なロケットエンジンが

複数付いていて、艦船というよりは、正に「宇宙戦艦」と呼ぶに相応しい造りである。その隙間を縫うように、僅かな隙間に着艦専用の小さなハッチが1つだけ付いている。

「ガーゴイルか…なんだか懐かしい感じがする。まだ、見なくなっ  
てから、1年も経ってないのに」

マフィアやチンピラを締め上げては金を巻き上げるという、荒んだ生活の合間に、時折呼ばれてはAガンダムの調整。そんな生活をしていて、暫く表情を作ることすら忘れていたロサが、Aガンダムのコックピットのスクリーン越しに、白い巨体を横たえるガーゴイルを見て、感慨深げに目を細めて呟いた。

資材搬入の為に開けられていた、後部の着艦ハッチからAガンダムをガーゴイルに着艦させたロサは、かつてハートレイが使っていた筈の区画へとAガンダムの駐機を終えた後、レイラに連れられて、操舵設備と艦長席が有る、ブリッジに案内された。

ガーゴイルのブリッジは、ラー・カイラム級1番艦「ラー・カイラム」のレイアウトを、ほぼそのまま引き継いだものである。艦の全幅が広い割には、幅10mほど、奥行きも6m有るか無いか程度とかなり狭い。更に壁から1m程は、通信機器やレーダーのモニターなどが設置されているので、床面積はそれを差し引いたほどしかない。

基本的に、船体からは外部に露出している部分だから、船体に対して意図的に小さく作る事で、外部から視覚的に小さな<sup>ま</sup>たという風に見せかけ、心理的に狙撃時に狙いにくいと錯覚させる為の、カモフラージュの一種である。

航宙艦（宇宙用艦船）は、地球の海上を移動する艦船と異なり、光の無い宇宙で肉眼で敵を捕捉する事が出来ない為、状況確認の殆どをレーダーで行う。その為、海上艦船のように、船幅いっぱい幅に窓を並べる必要が無い。だからこそ、可能な造作と言えるだろう。

「よくやってくれた、ロサ。礼を言うよ」

周囲の床より、階段3段だけ高い位置にある艦長席を降り、笑みを浮かべてロサを労った艦長のメッシ・ジユノーも、元はハートレイの上官であり、レイラと共にロサを知る人物である。

ロサが幼かった頃に初めて会った時、「ブライト!!ノアだ!」と勘違いした程、「ホワイトベースのブライト!!ノア艦長」によく似た風貌をしている。名前に似つかわしくない日本人顔や黒い癖毛、声までもが似ている。

年齢も、およそ似たようなもの。0093年の第二次ネオジオン戦争時、メッシは戦艦「ラー・カイラム」の操舵手として、ブライトと共に戦っていた時期がある。常に高精度な舵捌きを要求される役割柄、どんな場面でも冷静さを保ったまま戦場を潜り抜けてきた為、

不機嫌な顔で怒鳴る事こそ少ないが、全体的に似たような雰囲気であるのも、恐らくそのせいなのだろう。

ブライトと共に苦労していたせいなのか、髪が生え際の後退具合が、年々早くなってきたので、40歳にしては、やや老けて見える。

「それにしても、こんな形で会うとはな……」

感慨深げに目を細めたメツシは、Aガンダムのハートレイと、ジェガンのロサのシミュレーション戦闘を思い出していた。

メツシは、この親子のシミュレーション戦闘を何度も傍観していた、数少ない人間でもある。

ハートレイが不在の時は、ロサはテストに対応する目的で、CGモードでAガンダムを使っていた。「ハートレイ専用機」であるため自分の専用仕様には調整していないものの、ファンネルのコントロールも一応出来ていた。

だが、非テスト時には、シミュレーションモードではAガンダム同士にも設定は出来るのに、ハートレイが基地に居る時は、ロサはジ

エガンを好んで使っていた。

5年前、ロサがAガンダムを扱い始めてから、まだ間もない頃に、不思議に思ったメツシが、一度ハートレイに尋ねたことがある。

「なんでロサが、ガンダムじゃないんだ？子供って、普通は強い方を好むものだろう」

「ガンダムでジェガンに勝てるのは当たり前……ジェガンでガンダムに勝たなきゃ意味がねえんだよ。つまり、ジェガンでAガンダムに勝って、自分が最強のパイロットだと言ってエんだよ。あのおそガキ……」

ハートレイのその返答に、メツシは呆れ返り、ポカンと口を開けたまま、言葉が出なかった。

身長170cm程の中肉中背のメツシと違い、ハートレイは、角張った顔に左頬の大きな十字傷、黒い逆立った短い髪。190cm近い蔵つい筋肉質の体。

ただでさえ威圧感たっぷりの風貌なのに、更に眉間に皺を寄せ、こめかみに青筋を立てて、ハートレイが威圧感を増していく。



普段から鋭い目を更に鋭くし、ジエガンに乗り込むロサの姿を睨みつけるハートレイの表情を、メツシは今でも鮮明に覚えている。

シミュレーション中の映像は、外部のモニターでも確認出来るようになっており、メツシや、時折レイラも見に来ていた。

コロニーの訓練施設が空いていれば、実際に空砲を撃ち合う事もあったが、やはりシミュレーションでの対決が多かった。

だが、ロサの戦闘の様子を見て、メツシ達は圧倒される事になる。

口先だけの生意気盛りの子供、と言う訳ではなく、実際にロサは強かった。ハートレイが圧勝する光景も、初めての対決時から数えて2〜3度見ただけ。

数回も繰り返すと、ロサのジエガンは被弾もせず、むしろAガンダムを追い詰めるようになっていった。

Aガンダムには、銀行でよく見るような箱形の監視カメラに似た形状の、専用遠隔操作砲「ファンネル」が10基付いているのだが、ロサはものともせず全て撃ち落とし、Aガンダム本体に攻撃を加える程の実力を持っていた。

無論ハートレイが撃墜される事は無かったが、ロサが天賦の才を持っている事は、この時点で既に、誰の目にも明らかだったのである。

先ほどの表情を崩さないまま、Aガンダムに乗り込んだハートレイが、太い声を張り上げる。

「いくぞ、くそガキ！連邦のNo.1パイロットをなめるなよ！！」

「勝負だ、親父！！」

この時、ロサは10歳。

ロサの操縦するジェガンに、容赦なくハートレイのAガンダムが斬りかかった。同時にファンネルも広範囲に展開する。

Aガンダムがビームサーベルを抜くと同時に、ジェガンもビームサーベルを抜いた。上段から振り下ろされるAガンダムの切っ先を、しなやかに機体を回転させながらジェガンが受け流す。

「後ろ3発！」

ファンネルの動きを見切ったロサが、肩越しに左手のビームライフ

ルを構え、振り向きもせずに撃ち落とすしていく。

ビームサーベルを振り抜いた直後に、居合い斬りの形で切り返して来るAガンダム連続斬撃を、冷静に受け止めながら、ロサがファンネルの動きを読み取る。

再び切っ先がぶつかり合い、スパークを散らした後、互いに弾くと同時に、ロサが素早くライフルを構える。

「右と下！」

ネズミ花火のように動き回るファンネルを、やはり正確に撃墜した。

「左から一斉っ！」

今度は撃つ前から、展開していた5基からの一斉掃射を感知し、全てかわす。

「……………あれ、普通のジエガンだよな？」

誰がどう見ても普通では無いジエガンの動きに、引き吊った顔のメツシが、レイラに尋ねる。

「…………その筈なんですが」

傍らに居たレイラも、目が点になったまま、言葉が出ない。

2人がそう言っている間に、残りのファンネルも全て撃ち落された。

互いにビームサーベルを交えた直後に、Aガンダムが右の蹴りを繰り出す。ジエガンも素早く肘でガードし、ダメージを受けない。

直後にジエガンの右の蹴りが、Aガンダムの腹にヒットした。Aガンダムが体制を崩し、すかさずジエガンが、ビームサーベルを振り下ろした。ロサが嬉々とした表情で叫ぶ。

「もらった!!」

堪らずAガンダムが、手甲のグレネードランチャーを発射し、即座に爆発させて煙幕を作る。

予想外の爆発で、斬りかかったジエガンの右腕が、ビームサーベルもろとも吹き飛び、Aガンダムの斬撃が漸くジエガンにヒットした。

ハートレイがグレネードランチャーを使う程に追い詰められたのは、後にも先にもロサー一人しか居なかった。

「Aガンダム対ジェガンで、何でこんな激しい戦闘になるんだ…？」

傍観者2人は、呆然としていた。

「汚ねえぞ！ジェガンは爆弾使えないんだから！」

不意を突かれたロサが、両拳を振り上げてハートレイに抗議する。グレネードランチャーを爆弾と言う所は、流石に子供である。

「戦争に卑怯もくそもあるか！どんな手を使っても勝たなきゃならないのが戦場だ！」

ハートレイが冷や汗をかきつつ、当然の如く言い放った。

「よーし！もう一度勝負だ！」

屈託のないロサに、メッシは恐怖すら覚えた。目が点になったまま、思わず溜め息をつき、メッシが呟く。

「あそこまでハートレイを追い詰めた奴が、連邦軍に居たか……？」

「私には無理です」

「こっちに振らないで下さい、と言わんばかりに顔をしかめて、レイラが即答した。」

ロサは、生まれつきの心臓病で、生後直後に手術を受けている他、仮死状態で生まれたのが原因と思われる、軽いアスペルガー症候群の影響で、体が非常に弱かった。

それを補おうと、体を鍛えるために4歳の頃からハートレイに基地に連れて行かれ、当時から軍人を相手に訓練を受けていた。

ロサは、武術を嫌がって駄々をこねていたのだが、まだ世の中が安定していた頃のある時、一般解放のイベントに連れて行かれた時に、駐機場で一緒に並んでいるジェガンと違い、額に角が生えていて、いかにも強そうなガンダムを、非常に気に入った。

そして、そのパイロットが父・ハートレイだと分かると、自分も乗ると言い出した。

ガンダムに乗せてくれたら武術も頑張る、という条件で、ロサは10歳の頃には、ハートレイの所属部隊の中でも、5指に入る程の実力を持つようになった。

モビルスーツの操縦は、ハートレイにとっては、ロサに武術をさせて体を丈夫にする為の「ダシ」の筈だった。

だが、いつの間にか対戦相手をさせられ、しかもエースパイロットの自分を追い詰める程の頭角を表したロサを、本格的にパイロットにしようと、約束通りガンダムに乗せ、ハートレイ自ら英才教育を施すようになった。

そのうち、マフティー軍が蜂起し、その宇宙への影響拡大を未然に防ぐ目的で、ガーゴイル隊編成が確定した。その旗頭として、軍縮の影響で元々宇宙と地球の両方で運用出来る仕様だったガンダムへの、サイコミュとファンネル増設が決まった。

この時、1機では試験的に変更した機器の搭載前と後の比較が困難であるとして、もう1機が追加生産されたが、ハートレイ以外にサイコミュを使える者が見つからず、このままでは実戦形式での性能比較が出来ないと、軍部が困り果てた。

そこで、試しにロサに操作させた所、蛙の子は蛙という事なのか、数回の訓練だけで、やや詰めが甘いものの問題なく使いこなした為、ロサは新型サイコミュを試験搭載する際の実戦テストパイロットとして、ハートレイの敵役を務める事になった。

だが、やがて最初の反抗期になり、自分の方が強いと主張しなくなったロサが、ジェガンでガンダムに勝つと言い出した。

それで、こんなシミュレーションバトルが展開されていたのである。

その後、ハートレイが戦争の激化で戻らなくなり、挙げ句の果てに、ロサがガーゴイルに乗る半年前に、撃墜された。

ハートレイの死後も、シミュレーション使用の許可は下りていたが、ロサはハートレイが居ないシミュレーションなど、つまらないと感じていた。

また、思春期になって母の不貞を不快に思う様になり、家にも寄り付きたく無くなったロサは、その武術を悪用して、シャインリバーの裏社会で暗躍する事になるのである。



### 3・搭乗の準備（前書き）

レイラに連れられ、戦艦「ガーゴイル」にやって来たロサ。

艦長のメッシからも、パイロットとして搭乗する要請を受け、環境の変化に戸惑いながらも、その準備を始める。

### 3・搭乗の準備

「やはり、血は争えないという事か……」

ハートレイとロサの記憶を辿り終えたメツシは、納得したように小さく頷き、独り言を言った。

ひととおりレイラから状況を聞き、元々戻る事が稀になっていたとはいえ、帰る家が既に無いロサに、メツシはパイロットとしてガーゴイルに留まるように提案した。

革命軍の総帥であるクリスチャン＝ロードは、革命軍のエースパイロットでもあり、唯一互角に戦えた連邦軍のパイロットが、ロサの父・ハートレイ＝ヒシモトだった。

シミュレーションとはいえ、そのハートレイと互角に渡り合うロサの姿を、間近で見ていたメツシは、ハートレイの死後、革命軍に押し立てられて久しい連邦軍の、最後の希望と考えての事だった。

「戦争を終わらせるのに、力を貸してくれ」

”……暫く乗って無えんだけど……。まあ、艦長の力にはなりた  
いし、いいか。どうせ、あれじゃ帰るに帰れねえし……。”

真剣な表情で言うメッシの言葉にそう思いつつ、ロサは黙って頷いた。

基地に寄り付かなくなってから、もう半年近くが経ち、感覚も鈍りつつあったのだが、今までよりも乗る回数も遙かに増える筈だからと、ロサは楽観的に考えていた。

ブリッジを出た後、ロサはレイラに連れられて、ハートレイが生前使っていたという、パイロット用の個室に案内された。

ドアのロックを開けたレイラに促され、ロサが部屋に入った。所謂ビジネスホテルのような造りで、ベッドとシャワー室、小型の冷蔵庫とデスクがあるだけの、簡素な部屋である。

”これが、親父が使ってた部屋か。案外狭いんだな…”

ロサはその事実に取り敢えられ、この時のレイラの、ロサを見る悲しげな表情に気付く事は出来なかった。

ロサの後から部屋に入り、入口の傍らに備え付けてある鏡を見て、自分の表情に気づいたレイラが、表情を正し、ロサに悟られないよう、努めて落ち着いた声を出した。

「この部屋は、さっきの戦闘で、撃墜された人が使っていたの。私物は片付けて家族へ引き渡すから、何か必要な物があつたら、出港までに買って来てね」

部屋には、着替えなど多少の私物が残っていたが、あまり物を置かない人物だったようで、財布の他はＴシャツなどの着替えしかない。質素と言うよりは、がらんどろといった雰囲気である。

「レイラ姉ちゃんは？」

振り向いたロサが何気なく尋ねたのに対し、レイラは落ち着いた微笑を浮かべた。そうしなければ、今にも涙が出そうになるのを、抑え切る事が出来なかった。

「私は特に無いわ。着替え位は用意した方が良いわよ」

「でも、財布もみんな踏み潰されちゃって、何も無いんだよな……」

キラ・ドーガに踏み潰された、自宅の惨状を思い出しながら視線を落とし、ロサが表情を曇らせる。

「じゃあ、私のお金を貸してあげるわ。最低限必要な分は、用意して来たら？あと3日で出港の予定だから、それまでに準備してね」

「わかった。家に使える物が有れば持って来る。何も無かったら頼むよ。ありがとう」

そう言って笑みを見せた後、レイラにナップサックを借りたロサは、一旦、倒壊した自宅跡に戻った。

その後、レイラはブリッジに戻り、自分の小隊の3人が撃墜された事をメッシに知らせ、堪え切れずに唇を噛み、涙を流した。

別段、レイラにミスは無く、偶然相手の腕が、撃墜された者より上だっただけのだが、仲間を守り切れなかった自分の責任を気に病み、レイラは降格ないし除隊を申し出た。

「自分の身を最後に守るのは自分だ、それがモビルスーツのパイロットだろう。それに、ロサの事を一番知っているのは、レイラじゃないか。ロサの面倒を見てやってくれ。それに、死んでいった者に申し訳無いと思うのなら、勝って戦争を終わらせる。それが、最大の手向けになる。そうだろう？」

そう言って、メッシはレイラの肩を叩き、部屋で休むように言った。

「大丈夫かな？」

レイラがブリッジを出た後、一緒に話を聞いていた、総隊長のレオンハザードが、メッシに尋ねた。

身長190cm近い厳つい体に、短い立った金髪。如何にも軍人といった雰囲気、広くやや縦に長い、厳つい顔つき。目付きはやや細いが、若干瞳が大きめなせい、それほど威圧感を感じられない。もちろん、レイラを心配しているせいもあるのだろう。

「ただでさえ、ガーゴイルの小隊長が務まる腕の持ち主は少ない。それに、プライベートの面で、実際にロサの面倒を見るのには一番の適任者だ。レイラがいる方が、ロサも間違いなく安心してガーゴイルに居られる筈だ。居てもらわなきゃ、何かと困る」

真剣な表情で言うメッシの言葉に、レオンは頷く事しか出来なかった。

レイラの実家もシャインリバーに在るが、このまま艦を降りても、何の解決にも繋がらない。メッシの言うとおり、少なくとも戦争が終わってから戻るのでなければ、本人が鬱屈した感情を溜め込むだけになり、鬱状態になりかねない。

死んだ者に対し、生きている者が出来る事は、悲しみを乗り越えて、遅く生きていく事しか出来ない。それは、レオン自身が一番よく解っている事である。

「確かにな……」

「ハートレイ撃墜のショックからも立ち直った子だ、大丈夫さ」

レイラの気丈さを確信した表情で、そう言い切ったメツシの言葉に、レオンも黙って頷いた。

同じ頃、とりあえず自宅跡に辿りついたロサは、瓦礫の中から使えそうな金品や衣類を探していた。

「レイラ姉ちゃん、仲間が撃墜されたのに、悲しそうな顔一つしなかったな……。やっぱり、戦争のせいで、変わってしまったのか……？」

瓦礫をどけながら、ロサはそんな事を考えていた。

戦場で私情に流されると死を招くと、以前にメツシから聞かされた事がある。もし、自分が撃墜されても、やはりレイラはあのような表情のまま、決着がつくまで戦争を続けるのだろうか？

せめて1人くらいは、自分が死んだら泣いてくれる人が居て欲しい。いつも優しく、姉・ソフィアが失踪した時、我が身の事のように心配してくれた頃の面影が、先程のレイラに感じられなかった事を、ロサは寂しく感じていた。

かろうじて無事だった連邦軍発行のパスポート、預金通帳とキャッツシユカード、財布とTシャツなど数点の使いそうな衣類を見つけた後、ロサはふと思いつき、母の遺体を探そうとした。

だが、もろにギラ・ドーガの足の裏で踏み潰されたらしく、血痕は生々しく残っていたが、人間の体の一部と判断出来るようなものは見つからない。さすがのロサも、堪らず口を覆い、目を閉じて顔を逸らした。

”お袋……ごめん……”

さらに、血痕の源と思われる場所の上に、覆い被さるように瓦礫がのしかかっているため、救出も無理だと判断したロサが、そのままガーゴイルに戻ろうとした時だった。



何かを不意に踏んでバランスを崩し、転びそうになる。ロサは瓦礫の一部だと思っただが、足元をよく見ると、それは、やや古めかしいデザインの、旧暦のものと思われる拳銃だった。

あまり見ない、折り畳み式の補助グリップが引き金の前方にあり、マシンガンの様に構えられるようになっていてる。

アニメや映画でやるように、グリップ左側のボタンを押して弾倉を出してみると、中身は空で、油も切れて摺動部の金属も光沢が無くなっていた。

弾倉を戻し、少し動きが渋いブローバックのスライドを引いて撃鉄を上げ、引き金を引く。どうやら壊れてはいないらしい。

「親父の銃かな？」

この時に、倒壊時に落とした事を忘れていた「上納金」と、防弾チョッキ代わりの厚手のアラミド入りのデニムが、近くに放り出されていたのを見つけた。

ハートレイが、撃墜される直前に、万一の時に役立つだろうと、ロサに用意してくれたのだが、格闘戦に慣れているロサには鬱陶しくて、着る機会が無かったものである。

何かの役に立つかもしれないと、ジャケットを羽織り、拳銃とジーンズを借りてきたナツブサックに放り込んで、ロサはガーゴイルに戻った。

ロサは部屋に持ってきたものを置き、借りていたナツブサックや財布を返すついでに、レイラに銃を見せてみた。

「これは、私が大佐の機体から回収した遺品よ」

そう言っつて、レイラは表情を曇らせた。当時の状況を思い出し、涙が出そうになったが、ロサに心配を掛けまいと、何とか抑え込んだ。

この銃が、イタリア製のベレッタM93Rという名で、9mmルガー弾を使うという事、切り替えて3連射の簡易マシンガンになる事などを、ロサはこの時に教わった。

本来は、15発と20発の2種類のマガジン（弾倉）があるが、入っていた弾倉は15発装弾のものである。

ハートレイの死後、ガーゴイルから私物を引き上げた際に、一緒に自宅に戻されていたらしい。

レイラが、ハートレイに拳銃の手ほどきを受けた時に、何度か使った事が有るとロサに話した。

ロサは基本的に素手の戦闘が殆どで、希に銃を使うとしても、スミス&ウェッソン44マグナムの様な威力のあるリボルバーか、物陰から対抗組織の主要人物を狙う為のライフルしか使う事が無かったので、ブローバツク式自動拳銃の取り扱いは、殆ど知らなかった。

銃の手入れの仕方を簡単に教わり、同じ種類の弾を使っているレイラに弾を分けて貰った後、ロサは自室に戻った。

その頃、他のクルーは、先刻の攻撃で被害を受けた箇所の、復旧作業の手伝いに狩り出され、半分程の人数が、艦の外に出てしまっていた。

予定外のAガンダム積載で補給が必要な整備班と、レイラたち女性クルーは、出港までの時間が余り無いのと、被害が予想より大きく腕力が必要であるという事で出勤要請が取り消され、クルーの中でも比較的腕力のある者が出ることになった。

無論、モビルスーツによる奇襲が再度起こった場合に、より素早く対応するのが目的でもある。

部屋の整理が終わってすぐに、ロサは整備班からの連絡を受け、Aガンダムのエネルギー補給と整備に加わった。

ロサ自身、基地では何度もガンダムを扱った経験はあったが、整備や補給作業を目の当たりにするのは、初めてだった。

基本的に、モビルスーツは宇宙で乗る事になるので、背丈に合わせてパイロットスーツに着替えてから、座席やペダルの位置の調整を終え、サイコミュ操作のデータ取りを済ませる。

さらに脳波の波形に同調させるため、専用のヘルメットを被り、再度調整を行う。まだ成長期の最中であるということで、数種類の大ささのヘルメットが用意された。

この時代の連邦軍向けのモビルスーツの操作は、以前のパソコンのマウスボールのような形をしたアームレイカーと呼ばれる操作方式が、手が外れやすいと不評の為に廃止され、機構的には、以前のジョイスティックのような棒状のレバーを握る形に戻されている。

手が小さいロサには、ハートレイ用の太いレバーは、分厚いパイロットスーツを着ていても、握りにくいと感じられたので、この時に細いものに交換してもらった。

そうこうしている内に、エネルギー補給も終わり、先程の戦闘では

リミッターによりカットされていた機能も、完全に復旧されて、全てのパイロットランプが点灯した。

「こんなにあっただけ……？」

感心したように呟くロサに、整備班長のマーク・スペンサーが、リフトでコックピットへ上がり、操作マニュアルを持って来てくれた。

身長180cm位の、重量物を扱うメカニックらしい筋肉質な体に、立った短いブロンズ色の固そうな髪、黒い瞳のやや細い目付き、角張った厳つい顔立ちだが、あまり声が低くは無く、人懐こい笑顔を見せるので、ハートレイ程に近寄り難い雰囲気では無い。

「出港した後は、ゆっくり読む暇も無えだろうから、今のうちに読んでおけ」

「ありがとう」

「暫く動かしてなかったから、慣らし運転が必要だ。変形やファンネルの動作も確認したい。指示通りに動かしてみてくれ」

ロサにマニュアルを渡し、コックピットから再びフロアに降りた後、手際よくマークが無線で指示を出していく。

その通りにロサが操作し、各部の動作の様子を確認する。どうやら問題は無いようだった。

「出港まで時間が無えから、オーバーホールは次回の補給時だな。最低限必要なパーツは後で搬入される事になってるが、出来るだけ壊さないように乗ってくれ」

冗談めかして言った後、マークはロサに笑顔を向けた。思わずロサが苦笑する。

「了解」

無茶言ってくれる、と呆れつつ、ロサはマニュアルのページを捲り始めた。大まかには覚えているが、細かい箇所は流石に忘れてる。

コロニー内は擬似重力があるので、高所作業用のリフトを借り、ロサはマークと一緒に、点検がてら各動作部の見学をする事にした。

改めて見ると、Aガンダムは意外に大きい。

シミュレーションでは実際に動いている訳ではないし、主に宇宙空間の戦闘が映し出されるので、大きさを感ずるような事は、まず無い。

この大きなロボットが、自分の手足のように瞬時に反応する事が、初めてロサには不思議に思えた。

ロサはマークと一緒に工具箱を持ち出し、Aガンダムの点検を始めた。

#### 4・戦災孤児（前書き）

出港時刻が近づき、瓦礫の撤去や救出作業の手伝いに出ているガーゴイルのクルーが、呼び戻された。

その中に、住まいを焼け出され、保護された孤児たちが居た。



#### 4・戦災孤児

やがて、ガーゴイルの出港時刻が近くなり、瓦礫を片付けに行っていたクルー達が、呼び戻された。

その中に、少女が2人混じっていた。1人はロサと同じ中学生くらい、もう1人は小学生くらいで、どうやらロサと同じように住まいを焼け出され、着のみ着のまままで連れて来られた様子だった。

やはりロサと同じように、ナップサックを誰かに借りたらしかったのだが、薄い荷物から、殆ど使えるものが見つからなかったと思われた。

また、もう1人、やはり小学生くらいの男の子が別に連れて来られていた。こちらも、やはり使えるものは殆ど持っていないようだった。

「別の孤児院に移れないって、どういう事だ!？」

艦長のメッシが、ブリッジの電話口で怒鳴っているのが、入口のドア越しに廊下まで響いている。

Aガンダムの点検を終え、ブリッジに上がって来たロサとマークが、それを聞いて顔を見合わせた。

「何事だ……？」

ロサが小さく声を出してブリッジに入ると、子供と、自分と同一歳くらいの女の子が居た。明らかに戦艦のブリッジには、似合わない光景だった。

「コロニー会社の公営孤児院があるだろう！……：戦災なんだから定員もくそも無いだろう！受け入れろって言ってんだろが！」

子供二人が、やや怯えた表情でメッシを見つめている。その二人の肩を、年上の女の子が優しく抱いていた。

「大丈夫だよ。あの人は、私達が住める場所を、一生懸命探してくれてるの。怖いおじさんじゃないよ」

優しい声で諭すように微笑み、子供達に声を掛ける。彼女自身も、本音を言えば今にも涙が溢れそうなのだが、こつする事で少しでも、気分を紛らわそうとしていた。

今後は自分が、この子達の面倒を見なければならぬという責任感だけが、辛うじて彼女の涙を抑えていた。

”どうやら、俺と同じ様に、住んでいた孤児院を焼け出されたという事らしいな。自分だって大変だろうに、気丈だな、あの子……”

ロサは、必死に涙を堪える彼女を見て、そう感じたものの、メッシにもそちらへも、どう声を掛けて良いものか、まるで見当が付かない。

同じ様に、レイラもメッシの声に驚いたらしく、ブリッジに入ってくるなり、目を丸くしてロサの顔を見る。

未だに詳しい状況を把握出来ないロサを、レイラはブリッジから連れ出した。

「一体、何事なの？」

「俺も良く判らないけど、聞いてる限り、あの子達がさっきの攻撃で孤児院から焼け出されたのに、受け入れ先が無いって事らしいね」

「でも、うちも余分な人数を乗せられる余裕は無いし、第一、戦場

へ出る訳だから、あんな歳の子達を連れて行くのは……」

レイラの当惑した表情を見て、ロサが心の中で呟いた。

”俺も、似たようなもんなんだけど……”

レイラの視線は3人に向いていて、この時のロサの表情にレイラが気付く事は、出来なかった。

「あんなんじゃない、あの子達が怯えちゃうよ。別の場所へ連れて行く。処遇が決まってから、また連絡して貰えば良いから」

呆れた様な声を出して、軽く溜め息をついた後、レイラが3人に近付いて笑顔を向け、声を掛けた。

「お腹空いたでしょ？クッキーでも食べる？」

子供達の頭を優しく撫でながら言い、まだ怒鳴り合っているメッシに軽く手を上げ、レイラは彼らをブリッジから連れ出した。

自室へと戻った後、普段は他のセクションの女性クルーと一緒に、休憩を取る時に出している、クッキーとオレンジジュースをトレイ

に並べ終わり、レイラが3人に声を掛けた。傍らに、立ち去りそびれたロサも一緒にいる。

子供達は、すぐにジュースを飲み干してしまい、それを見たロサは、自分の分を半分ずつ分けてやった。

先程よりは穏やかな表情になった子供達を見ながら、ロサはクツキーには手をつけず、何かを考え込むような表情で腕を組み、立ったまま壁にもたれ、レイラと彼等の話を聞いていた。

年上の15歳の女の子はフローラ。ロサと同じ年。身長155cm、大体ロサと同じである。白い長袖のワンピースに、ストレートのセミロングの黒髪、白い肌の細い指の掌、やや細い優しい目に小さな鼻と口、といった顔立ちが、いかにも大人しくか弱い女の子という雰囲気醸し出している。

8歳の女の子はメルサ。やや長めの金髪のツインテールにオーバーオール、大きな青い瞳の、子供らしい、ややぽっちゃりした丸顔。身長は130cm位、白人なのだろうが、やや日焼けした小麦色の肌。赤と白の横縞の長袖Tシャツと、アメリカの子供によく見られるような雰囲気のある服装である。彼女はフローラと同じ孤児院に居た。

10歳の男の子はアックスという名前で、2人とは別の孤児院にいた。やはり白人系の血筋らしく、立った短い髪に青い瞳、やや角張った年齢の割りに精悍な顔立ち。身長140cm程、緑と黒のチェ

ツク柄のネルシャツにホワイトジーンズの服装が似合う、やや筋肉のついた体格が、メルサより少しだけ年齢が上である事を主張している。

どちらも昼食の買い物に出た後、戦闘開始の警報で一時避難し、戻ってきたら既に孤児院は倒壊していた。

突然の出来事で呆然としていた所を、瓦礫を片付けに来たガーゴイルのクルーに、保護されたのだという。

「こんな子供まで巻き込んで……！！」

ロサが一瞬、怒りの表情を見せたが、ロサまで怒りを露わにしたら、怒鳴り散らすメッシから離れた意味が無くなる。

レイラが目で制し、軽く首を横に振った。気付いたロサが、慌てて我に返った。

「もう出港まで時間が無いな。どうするんだろ……」

溜め息をついたロサが、デスクの上の目覚まし時計を見ながら呟いた後、また無言で考え込んだ。

コロニーで学歴も無い孤児が稼ぐ方法といえば、男は犯罪組織、女は色街位しか手段が無い。

だが、勝手に家出した自分と違い、只でさえ孤児院で苦勞していたであろう3人に、これ以上苦勞をさせたくは無い。

ロサは、一通り考えを巡らせたが、シャインリバーの知り合いといえばマフィアの類ばかりで、まともな職業の知り合いは、一人も居ない。

良い方法など、この時点のロサには、思いつく筈も無かった。

「ここで働かせて貰う事は出来ませんか……？」

フローラがレイラに、必死の表情で懇願する。行き先の無い不安感や、何とか居場所を確保したいという気持ちだが、痛いほどレイラにも伝わってくる。

困惑してしまい、言葉が出ないレイラを見かねたロサが、口を挟んだ。

「こいつは戦艦だから……。俺みたいに少しでもモビルスーツや

喧嘩の覚えが有れば良いだろうが、君やその子達みたいな、か弱い人間が居られるような場所じゃないよ。危険すぎる」

「でも、このままコロニーに居ても、私達、居場所がありません……。お願いします……」

震える声で言った後、ついにフローラが泣き出してしまった。今迄も、相当気を張っていたのだろう。

気まづくなつた雰囲気、堪らずロサは溜め息をつき、無言で部屋を出てしまった。

そこへメッシが現れ、建物の近くにいた他の孤児達は、発見が早かつたため他の孤児院に受け入れられたが、買い物に出ている発見の遅かつた3人の受け入れ先が見つからないことを、ロサに伝えた。

大きく息を吐き、ロサは廊下の壁にもたれ、やりきれない表情で天井を見上げた。

「なんで子供まで巻き込むんだよ……」

メッシは返答に詰まり、困惑した表情のまま、すまん、と頭を下げた。他に出来る事が、この時のメッシには見当たらなかった。



頭を下げたメツシに、ロサは何も言えなかった。メツシの表情には、明らかに苦悩の表情が見られたからである。

もっと軽い言い方なら、この場でぶん殴って怒りを納める事も出来ただろうが、少なくともこの表情を見せられては、ロサはメツシを殴る気には、なれなかった。

怒りのやり場の無くなったロサが、大きく溜め息をつきながら、吐き捨てるように言う。

「ただでさえ難民が増えて、食いつ持を減らしたがってるコロニー会社が、金も払えない孤児の受け入れ先を、まともに探してくれるとも思えないがね……」

ロサの言葉に、電話口の担当者の、やる気の無い声を思い出し、メツシが目を丸くした。

「何故それを？」

「シャインリバーの、俺の情報網から聞いた話さ。それより、あの子達、どうするんだ？」

壁にもたれたまま、首だけをメツシに向けたロサを見て、メツシも投げやりの表情で溜め息をついた。

「とりあえず、補給先の何処かで受け入れ先が有れば、そこに受け入れて貰うしか無いな。いつまでも子供を戦艦に乗せておく訳にもいくまい」

その一言に、堪らずロサが拳で壁を叩いた。パンツという乾いた音が、2人しか居ない廊下に響いた。

「自分が生まれた所に、ただ居る事すら出来ないのかよ……」

また吐き捨てるように言っつて壁から離れ、ロサは自分の部屋に向かつて歩き出した。

「こんな戦争、早く終わらせなきゃならないな……俺達の手で」

本音を言えば、ここに来た時はその気は無かったのだが、ロサは覚悟を決め、誰に言っても無く呟いた。

「ああ……そうだな」

短く返事をした後、メツシは状況を伝えるために、レイラの部屋へ入った。

その後も、メツシはコロニー公社に問い合わせを続けたが、他のコロニーでも、3人の受け入れ先は見つからなかった。

やがて、出港時刻を迎えたガーゴイルは、結局、彼ら3人も乗せたまま出港する事になった。

## 5・奇襲（前書き）

シャインリバーから乗った4人は、いずれも無重力には不慣れだった。

その浮遊感を楽しむのも束の間、味方の艦から応援要請が入る。

早速応援に行くロサ達だが。

## 5・奇襲

予定外のAガンダム積載に伴い、その補給物資の応急的な追加の為に若干停泊時間は延びたものの、結局3人の孤児の受け入れ先は見つからないまま、ガーゴイルはシャインリバーを離れる事になった。

地球から移住したロサと違い、コロニーで生まれ育った3人は初めて体験する無重力空間のため、慣れない感覚に戸惑っていたが、子供達2人は意外に楽しんでいる様子だった。

その笑顔の様子を見て、フローラも少しだけ癒されたようで、ガーゴイルに来て以来、初めて笑みを見せた。

その頃、ロサはマークと共に、モビルスーツデッキでAガンダムの点検を行っていた。

ロサは、Aガンダムに慣れているとはいえ、操縦経験の殆どが地球やコロニーの重力下であり、無重力状態では、模擬戦闘などで数回しか飛ばした事が無いので、操縦の訓練に出るための準備をしていたのである。

コロニー内では、乗り込んですぐにビームサーベルを振り回す余裕があったが、今回は流石にそんな余裕は無いらしく、マークの話を聞くロサの顔は、真剣そのものというよりは、若干緊張感で硬く感

じられるような表情である。

「宇宙空間じゃ、何かあったら着陸すれば良い、という訳にはいかない。戻れるうちに戻ること。いいな？」

「わかった」

「他に何か聞いておきたい事は有るか？」

「あとは、実際に動かしてみて、気が付いたらまた聞くよ。ありがとう」

訓練飛行に出る為、Aガンダムからマークが離れ、ゆっくりと空中を浮遊しながらエアハッチの中へと退避した。

そのゆったりした空気を引き裂いて、突如、別の作戦で動いていた連邦軍巡洋艦「サラマンダー」から、応援要請が入った。

メインエンジン不調で、推進力がなくなったところを、ロード革命戦線の新型機で編成された部隊に襲われ、圧倒的に劣勢だという。

これを受け、艦内に緊急警報音が響き渡り、メッシがモビルスーツ

隊に出動命令を出した。

だが、エアハッチを出て、モビルスーツデッキへ向かう人数を見て、ロサが呆れた声を出した。

「こんなに出すのか？」

よく見れば、モビルスーツの数だけ人数が居る。つまり、パイロット全員という事である。

ガーゴイルの艦載機は、最大で15機。

ロサのAガンダムは予定外の積載であるが、シャインリバー強襲時の戦闘で、レイラ隊のジェガン3機を失っているため、Aガンダムを含め、現在の積載数は13機である。

現在は、世間が軍縮の方針を支持しているため、戦艦が増備される事は無くなり、10機搭載の高速巡洋艦が主流になっているため、ガーゴイルは、モビルスーツ積載艦としては大型の部類になる。

「応援は結構だけど、こんなに出して、ガーゴイルは大丈夫なのか？」

Aガンダムのコックピットから、如何にも納得のいかない声を出す  
ロサに、メッシが楽観的な声で答えた。

「新型機が多くて、猫の手も借りたい状況らしい。それに、この辺  
りはコロニーも無いし、無人の残骸ばかりだから、攻撃を受ける事  
も有るまい。大丈夫だ」

「……了解」

納得しかねるが、入ったばかりの新人があまり意見しても、良い目  
を見る事は無い。溜め息をついて、とりあえず返事をしたロサも、  
サラマンダーに向かう事にした。

無重力に慣れていないロサは、調整時に小柄なロサの為に取り付け  
られたシートベルト（通常はベルトは付いていない）を目いっぱい  
引き、体が浮かないように完全に固定する。

「いきなり実戦かよ……ま、何とかなるだろ」

ロサが軽く溜め息をつき、操縦レバーを握った。

とりあえず、親父より強い相手などそうは居ないだろうと、ロサは



高たかを括くわつていた。

不意に体が浮いたりたりさえしなれば、重力が有ろうと無かろうと、  
そう変わるものではないと踏んだのである。

” 所謂いえば、カタパルトに乗るの、初めてだな ”

「艦長、カタパルトって足を載せるだけで良いの？」

ロサの質問を聞いたメツシが、艦長席からずり落ちた。まさか、連  
邦のエースを追い詰めた程の実力者が、そんな初歩を知らないとは思  
っていないなかったのである。

『 あ…… ああ、そっだ 』

「 今、椅子からずり落ちてなかった？ 」

『 き、気のせいだろ、ハハ…… 』

メツシの空笑いに、いぶかしげな顔をするロサ。

「……ま、いつか。Aガンダム、出ます！」

バーニアを吹かして、ガンダムがカタパルトから飛び出す。

だが、さすがに最初は吹かし過ぎてしまい、前に居たレイラ機と接触しそうになってしまった。

「うわわ！！レイラ姉ちゃん、ごめん！！！」

『大丈夫！？』

慌ててレイラのジェガンが、ガンダムを支える。

「あはは……噴かし過ぎちゃった。着くまでに、ちょっと慣らしが必要みたいだ」

思わずロサが頭を掻く。

『無理なら戻っても良いんだぜ？お前さんはまだ宇宙に出た事は無えんだろ？』

レオンがロサに声をかけた。ハートレイとは同期であり、無論、彼もロサの事は幼い頃から知っている。レイラが軍に入ったのも、ご近所の幼馴染だったロサを通して、ハートレイやレオンに憧れた為なので、どちらにとっても、現在の彼は尊敬できる上官であり、半ば父親のようなものでもある。

しかし、流石にロサにも、現時点でのガンダムのパイロットは自分である、というプライドがある。戦いもせず引つ込むというのは、どうにも納得できなかったようで、思わず虚勢を張ってしまった。

「慣れれば大丈夫。何とかします」

『度胸だけは一人前だな。さすがハートレイの息子だ』

「いつまでも、度胸だけは、って言われないうちにしないと」

苦笑するロサに、レオンが真剣な声で言った。

『無理だと思ったら引き返せ。コロニーと違って、いつでも着陸できるような場所はないからな』

「了解。引き返す時は、ちゃんと知らせます」

ロサは無重力状態での三次元の動きに慣れるため、機体を上下左右に振りながら、隊列の後方から追いかけていった。

次々にガーゴイルからモビルスーツが出て行く様子を、近くのコロニーの残骸の影から、じっと伺っていたモビルスーツが居た。

その機体の居る周囲は、正に廃墟と言う言葉がぴったりなの、今にも幽霊が出て来そうな、おどろおどろしい雰囲気を漂わせている。

サイド4自体は戦乱に巻き込まれた事は無かったのだが、以前の戦いで使われたコロニーレーザーの照準内に偶然入ってしまい、直撃を受けて破壊されたまま、放置されていたものである。

生物の気配が無い残骸の影で、隠れているモビルスーツのパイロットが、ふうつと大きく息を吐いて、目を閉じる。この瞬間にAガンダムが発進した事に、彼女は気付く事が出来なかった。

「レイラ、そこに居ないよね…?」

祈るように呟いた後、もう一度目を開き、ガーゴイルの様子を見る、

ようやくモビルスーツが出払ったようだ。その後、暫く時間を置く。

モビルスーツ同士の交戦開始後に、そう簡単に引き返す事は出来ない。そろそろ交戦が開始される頃だ。もう良いだろう。

「レイラ、ごめん！」

斜め後ろからそのモビルスーツ「ワルザ」は、たった1機で、ガールに襲い掛かった。

熱源を感知したガールゴイルの索敵手が、ブリッジ中に聞こえる程の、悲鳴のような叫び声を上げた。

「右舷後方より敵機熱源！」

「こんな場所から奇襲！？」

メッシは、自分の読みの甘さを悔やんだが、唇を噛む暇も無く、即座に指示を出していく。

「手の空いてる者は全員銃座に回れ！……銃座が埋まった！手の空いてる者は砲撃の補助に回るんだ！」

艦内一斉放送でメツシが怒鳴った後、ふと思い出し、レイラの部屋にいる筈の3人に、インターホンで呼びかける。

『3人ともノーマルスーツ（一般用宇宙服の事）を着ておけ！あと、フローラ、聞こえるか！？』

「はい！」

フローラが、怯えながらも必死に自分を保ちつつ、出撃前にレイラが用意してくれたノーマルスーツを、慣れない手付きで子供達に着せながら、悲鳴のような声で答える。

『その子たちを、守ってやってくれ。それが、今の君の任務だ』

フローラの怯え具合に気付いたのか、メツシは声を落ち着けて言った。

その声を聞いたフローラも、少し落ち着いたのでろう。先程よりも、

はつきりとした声で応えた。

「……はい！」

その瞬間、敵からの攻撃で、爆音と共に艦が大きく揺れた。

「キヤアアッ！」

その弾みで子供達の体が宙に投げ出され、慌ててフローラが2人の腕を掴むが、慣れない無重力で一緒に流されてしまう。

『3人とも無事か！？』

メッシが再び声をかける。

『ベッドに付いているシュリーフのベルトで、飛ばされないように体を固定するんだ！』

「はい！」

恐怖の余り、自分の力では物事を考える事が出来なくなったフロー

ラは、メッシに言われるまま、シュラーフのベルトで、2人が投げ出されないように固定した。

自らも必死にベルトに掴まり、何とか投げ出されないように踏ん張る。

「ロサ、助けて……！」

フローラは、死の恐怖に震えながら固く目を瞑り、無意識に声を出していた。

残骸を飛び出したワルザに、即座にガーゴイルが反応を見せ、機銃掃射で弾幕を張り、艦後方の砲塔が回転し始める。

「艦底から狙えば、簡単に……！」

すぐさま、ワルザをガーゴイルの艦底へと向かわせたが、珍しく艦底にも砲台や機銃が付いていた。その砲台が、いきなりメガ粒子ビームの火を吹いた。



「くっ……!!」

慌ててワルザが飛び退く。

「あんな所に砲台があるなんて……!!?」

再び上を押さえようとすが、さすがに連邦軍のエース艦である。的確な位置に、再び砲台からメガ粒子砲のビームが飛んでくる。

「まず砲台を黙らせる!!」

まだ慣れていないファンネルより、ライフル狙撃の方が確実に当たると踏んだワルザのパイロットは、ビームライフルを取り出し、艦後部のエンジン室上部の砲台を狙う。

「砲台かエンジンには当たる筈……当たれ!!」

再び砲撃を受け、これをかわしながら引き金を引いた為、大きく狙いが外れ、ビームライフルの火線は、エンジンの遙か下の外板を削り取った。

再び砲台からの火線をかわすが、今度はかわした先へ、即座に別の

砲台からの砲撃が襲いかかる。

「砲台同士で連携も出来る！？なんて技量……仕方がない……！」

慣れないファンネルを放出し、狙いが定まらないまま乱射する。

「当てる事くらいは出来る筈……！」

だが、激しい砲撃に阻まれ、かわしながらの攻撃になり、なかなか船体の肝心な部分に当たらない。

15分以上の狙撃でようやくパイロットはファンネルに慣れ始め、モビルスーツデッキ近くの張り出しや、艦の先端部に当たり始めた。

新型モビルスーツ「ベリック」5機に、ギラ・ドーガ20機を加えたロード軍の攻撃に、意外な苦戦を強いられていたロサは、初めての無重力での戦闘で、思い通りに流れをつかめず、苛立っていた。

サラマンダーを襲ったのは、1年戦争の頃からジオン支持者が多く、連邦への反感を持つ者も多かったサイド3から出撃した、ロード革

命戦線のグワジン級戦艦「キグナス」他、数隻の戦艦から飛来した大編隊である。

ベーリックは各小隊のリーダー機で、ギラ・ドーガより動きが速い。

だが、新型といっても新設計のものではなく、以前のリック・ディアスの改良機である。

別名「ガンダム」と呼ばれたことから、その改良性能向上型の上位機種という意味合いで「リック・ディアス」を略した名称である。

また、個々の小隊も、集団戦法の訓練を相当高いレベルで行っているようで、1機を攻撃しようとすれば、別の角度からまた攻撃を受ける。

細かく言えば、ロサはハートレイのファンネルを相手にしていたとはいえ、基本的に1対1のシミュレーションしか知らない。

当然、対集団戦をやるのも初めてで、本人はこの事に気付いていないが、苦戦を強いられるのも無理は無い。

レオンたちの奮戦もあり、ファンネルも併用して10機ほど撃墜は

したものの、敵はまだ10機以上残っている。

やっとの事で、もう1機撃墜する。ようやく目に見えて、こちらのほうが有利な数になってきた。

「新型だからって……！俺はガンダムのパイロットなんだぞ！！何やってるんだ、お前は！？」

なんでこんなに手こずっているんだと、ロサが自分の腕にもどかしさを覚え、苛立ちを感じて思わず自分を罵っていた。そんな時である。

『ロサ！助けて！』

不意に名前を呼ばれ、ロサは周囲を見回した。戦闘中で無線も切っているのに、誰も呼ぶ事は出来ない筈である。

「何だ？今のは……？」

ロサが周囲を見回すが、誰かが無線や接触回線で呼びかけたような気配は無い。

『助けて！船が沈んじゃう！』

今度は、はっきりと聞こえた。

「……フローラ？フローラなのか！？」

相手からの返事は聞こえない。

だが、間違いなくガーゴイルに何か有ったのだと直感したロサは、全速力でガーゴイルに戻り始めた。

「ロサ、どうした！？どこへ行くんだ！？」

ロサの近くに居たグールケットが、ロサの動きに気付いた。

「ガーゴイルが襲われてる！後は頼む！！」

隊長であるレオンも異変に気付いた。レオンの動きが止まったのを見て、他の機も一斉に無線を開き、レオンとグールのやり取りを聞き始める。

『ロサは何て言った？』

「ガーゴイルが襲われていると……」

『何？』

レオンは一瞬考えた。

『俺達には、どうしろと？』

「後は頼むとしか……」

グールは戸惑いを隠せない。だがレオンは、それだけ聞いて納得したようだ。

『ガーゴイルはロサに任せる。俺達は目の前の任務に集中する！いいな！』

ロサのおかげで、敵の残りは10機程度、こちらはサラマンダー所属機も合わせれば20機近く残っている。

十分しのげると判断したレオンは、ガーゴイルで一番の大声を張り上げ、檄を飛ばす。

気圧されたグールも、戦闘を再開した。

ベリックの部隊は、少ないながらも、レオンのジエガン隊を、まだ翻弄し続けていた。

## 6・亡霊(前書き)

助けを求めるフローラの声を聞き、全速力でガーゴイルに戻るロサ。

その姿を見た「ワルザ」のパイロットの反応は　。



## 6・亡霊

「フローラ、無事で居てくれよ……！」

祈るように呟いたロサは、ガーゴイルを襲う敵機の殺気を見つける事に、意識を集中する。

喧嘩慣れして、殺気を自在にコントロール出来るロサにとっては、レーダーを使うよりも、その方が発見が早い。

数秒後に気配を捉えたロサが、Aガンダムの各部に収納されている10基のファンネルを放出して呟いた。

「ガーゴイルに当てるなよ……行けっ、ファンネル……！」

ロサの声と共に、10基のファンネルが、一斉にガーゴイルを目標として先行する。

ここでレーダーを目を遣り、敵の動きの癖を読み掛かる。

ギラ・ドーガやベリックよりも、かなり敏捷性は高い機体のようで、先程のサラマンダーを襲っていた機体とは、まるで違う動きを

している。

「こいつ……別の新型か？」

動きを大まかに捕捉したロサは、威嚇と相手の動きを読むために、最初の一斉掃射を放った。

このビームに襲われ、辛うじて全てかわしたパイロットが、堪らず声を出した。

「何っ！？一体どこから狙ってきた!？」

肉眼では見えない距離から、10m（モビルスーツの身長約半分）と外れない正確さで狙撃を受け、ワルザのパイロットは驚愕の表情を浮かべた。

ファンネルの狙撃と同時に、その閃光を捉えた索敵手が叫んだ。

「ロサが戻って来ました！」

「何!？」

メツシが驚きの声を上げ、索敵手を見た。

「誰か連絡したのか!？」

「この状況じゃ出来ませんよ!」

「とにかくこの状況では、ロサに頼るしかない!各銃座、砲撃手、ロサが戻って来てる!当てるなよ!!!」

艦内放送でメツシが檄を飛ばす。これを聞いたフローラは、思わずきよとんとした顔になって、呟いた。

「ロサに聞こえたの……?」

確かに、心の中でロサに助けを求めたのは自分だ。しかし、まさか本当にロサが戻って来るとは、思っていなかった。

だが、不思議と気持ちが落ち着き、子供たちを励ますだけの余裕が出来ていた。

「ロサが助けしてくれるって!もう大丈夫!」

子供たち二人は、初めての状況に肩を寄せ合って怯えていたが、それを聞いてフローラの顔を見上げた。

「ほんと!？」

「ええ。だから2人共、頑張るのよ!」

フローラも、内心はまだ恐怖感があったのだが、精一杯の笑顔で、気丈に子供達を励ました。

Aガンダムファンネルを、先程よりも、やや広めに展開させ、もう一度威嚇射撃をした後、敵の動きをより正確に捕捉したロサが、今度はファンネルを収束させ、ピンポイントで一斉掃射を放つ。

「今度は当てる!」

ワルザは、正確に自分に向けてビームが走るのを、ギリギリでかわす。この火線の間隔の狭さから、相手がモビルスーツではない事を把握して、さらに驚いた。

「これは……ファンネル!？」

まさかと思ったが、視界の端に白いモビルスーツが見え、パイロットは確信した。

「なんで…… Aガンダムが!？」

以前に撃墜されたと聞いていて、動く筈が無いと思い込んでいたAガンダムからの攻撃を受け、まるで亡霊に襲われているような気分になっていく。

「亡霊……!？」

恐怖感から無意識に呟いた瞬間、ガンダムがビームサーベルを抜き、ワルザに襲い掛かった。その両目が、相手を威圧するように光を放つ。

「その船に手を出すんじゃないやねえ!子供が乗ってるんだぞ!!」

Aガンダムとワルザが切っ先を交えた瞬間、Aガンダムが右足を、ワルザのわき腹に繰り出す。

もろに蹴りを食らったワルザが吹き飛ばされ、Aガンダムがライフで連射したビームの一本が、体勢を崩したワルザの左手首を直撃した。

「うおおおっ!!」

ロサが雄叫びをあげて、ワルザに突撃する。

左手を焼かれた衝撃と、ロサの殺気の強さに、我に返ったワルザのパイロットが、全てのバーニアとスラスタを全開で吹かし、体勢を立て直す。

その背後で何か動いたのを、ロサは見逃さなかった。直後、複数の閃光がAガンダムを襲う。

「やはりファンネルか！」

見越していたロサが、俊敏にビームをかわしていく。

「今度はこっちの番だぜ！」

ロサがワルザに意識を集中し、一斉掃射を放つ。

「ファンネルの使い手に、ファンネルが通用すると思うか!？」

叫んだワルザのパイロットが、ビームの軌跡を見切ってかわし、Aガンダムファンネルへ反撃する。

ファンネル同士が激しい撃ち合いを開始し、モビルスーツ本体同士もビームサーベルのスパークを散らす。

斬りつけ合った瞬間に、ロサが左手のライフルで、もう一度ワルザの腹を狙う。

「くっ……!強い……!」

至近距離からの砲撃を、辛うじてワルザがかわす。

だが、左腕を破壊され、只でさえ不利な状況に加え、ロサの戦闘能力の高さに圧倒されたパイロットは、後退を決意し、Aガンダムに背を向けた。

「逃がすかよ!!」

追撃しようとするロサをファンネルで牽制しつつ、ワルザは空域を離脱した。ロサは尚も追撃しようとしたが、応援に行っていたせいもあって、推進剤の残量が少なく、追撃を諦めた。

「また残量不足かよ、くそっ!」

忌々しげに顔をしかめ、軽く操縦レバーに拳をぶつけ、ロサが呻いた。

初めての対集団戦でバーニアの噴かし加減が掴めず、必要以上に噴かし過ぎた為に、推進剤の消費量が多かったせいなのだが、この時のロサに気付ける筈は無かった。

「推進剤タンクの追加を頼んでみるか」

ロサは呟いて、ガーゴイルに目をやった。数箇所には被弾したらしく、外板がめくれている。エア漏れなどが心配になり、無線を開いた。

「艦長、大丈夫か?」



『ああ、何箇所か被弾したが、どうやら差し支えは無なさそうだ。エア漏れもしていないらしい』

メッシの声を聞き、ロサが安堵の溜め息を漏らした。

「フローラ達は？無事なのか？」

『確認する』

メッシが、インターホンでフローラ達に声をかける。

『フローラ、3人とも無事か？』

「はい」

まだ、フローラは恐怖で青ざめ、声も震えている。

『もう大丈夫だ、敵は引き上げた。ロサが助けてくれたよ』

それを聞いて、フローラは全身の力が抜け、思わず涙ぐんだ。その拍子に、ベルトを握っていた手が離れ、フローラの体がフワリと宙

に浮き始める。

子供達がその様子を心配して、フローラの顔を覗き込んだ。

「お姉ちゃん、どうしたの？大丈夫？」

我に返ったフローラが、笑みを浮かべた。

「ロサが助けてくれたって。怖かったから、泣いちゃった」

舌を出して、その場を取り繕う。その表情に、子供達も安心した様子で顔を向き合わせ、微笑んだ。

無線でその様子を聞いていたロサも、フローラの無事を知り、自然と顔がほころぶ。

「もう一度応援に行くのは無理みたいだ。推進剤が足りない。おかげで、さっきの奴も逃がしちまった」

『また他の部隊に、奇襲に來られても困る。このまま居てくれ』

「了解」

落ち着いた声で言い、ロサはAガンダムを、ガーゴイルのカタパルトデッキに着艦させ、再度の来襲に備えて構えた。

『よく戻ってくれた。正直、もう駄目かと思ったよ』

メッシが思わず溜め息をつきながら、無線でロサに声をかけた。

「お役に立てて光栄だ」

ロサは茶化すように、わざと大袈裟に答えた。

「まさか、本当に襲われていたとはね」

コックピットの全天周モニター一杯に映るガーゴイルを見上げながら、ロサが呟いた。その一言に、メッシが首を傾げる。

『そういえばお前、どうしてガーゴイルが襲われている事が分かったんだ？そんな装置が付いていたとは、聞いていなかったが』

「フローラに呼ばれたんだ」

ロサは正直に答えた。原因はともかく、間違いなく、フローラが自分に助けを求める声が聞こえたのだから、他に言いようが無い。

その返答に、メッシは言葉が出なかった。

” 所謂いえば……以前の戦争で活躍した、連邦軍のアムロ＝レイというパイロットが、他の者と交信することが出来たと聞いた事があるが……まさか、な……”

どうせ昔の事だから、話に尾ひれが付いて、誇張されたのだろうとメッシは今まで思っていた。

だが、目の前に居るロサが、同じような事を言っている。にわかには信じ難い状況である。

「ロサも……ニュータイプという奴なのか……？」

メッシは、驚愕の表情で呟いた。

その後すぐに、無事に戦闘空域を離脱した「サラマンダー」から、

レオン隊のモビルスーツに曳航され、至近距離に在ったコロニー「ミランダ」に到着したとの連絡が入った。

## 7・理解（前書き）

サラマンダーを救助し、全員の無事を報告するレオン達。

ガーゴイルを守りきったロサに、礼を言いに来た者達が、それぞれに感じ取った、ロサの本音とは…。

## 7・理解

サラマンダーを無事救助したレオン達が、「ミランダ」でエネルギー補給を終え、ガーゴイルに帰還した。流石にエース艦の部隊だけあって、全員無事である。

「被弾している…!?!」

レオンが気づき、慌てて無線を開いた。

「みんな無事なのか!?!」

『移動に支障は無いが、もう一度同じような事があつたら、やばいだろうな。都合の良い神頼みをするしかない。敵が来ませんようにってな』

メッシが無線越しに、わざと茶化すように言った。

「冗談を飛ばせる程度の余裕はあると?」

レオンが豪快に笑い飛ばした後、ガーゴイルはそのまま全機を収容した。

グールは、てっきりロサが怖気づいて逃げたと思っていたので、ロサと顔を合わせるのはバツが悪かった。

「本当に襲われていたのか……」

被弾したガーゴイルを見て、グールは思わず青ざめ、身震いした。

ブリッジに戻ったレオン達が、メッシに帰還後の報告を終えた。

「折角、ドックに入ったばかりだったのにな」

レオンが何気なく言い、頭を搔いた。本人に他意は無かったのだが、メッシはその言葉に肩をすくめた。

「俺の判断ミスだった。今後は気をつける」

「まあ、たまにはこんな事もあるさ。人間、誰でも間違いはあるもんだ」

レオンが軽く受け流す。みんな無事なら良いじゃねえか、という事



だろう。この実にあっさりとしたキャラクターが、慕われる理由でもある。

ロサに声を掛けようとブリッジを見回し、レオンがメッシに尋ねた。

「ロサは？」

「Aガンダムの点検に、モビルスーツデッキへ行つた。派手に格闘戦をやっていたんでな、損傷が無いか、チェックが必要だそうだ」

「そうか」

レオンが、着替える前に礼を言っておこうとモビルスーツデッキへ行くと、パイロットスーツを着たままのロサが、Aガンダムの足元のフロアに降り、マークと何やら話をしていた。他のメカニックも何人が集まって、補修パーツのリストを手にしている。

ロサ達の真剣な表情に、レオンはフロアから少し上のバルコニーで足を止め、終了するまで様子を見る事にした。

上から見る整備デッキのフロアは、上野駅の常磐線ホームから、階下のプラットホームを覗き込む雰囲気と、よく似ている。最も大きく違うのは、ホームの喫茶店から漂う食べ物匂いではなく、町工

場のように、溶接される金属や油の匂いが漂っている事である。

ロサと向き合うマークが、いつに無く真面目な顔で、ロサの顔を見た。

「推進剤タンクの追加改造には、残量計のプログラムの修正も必要だから、本格的な工場が必要だ。修理設備程度のドックしかないガ  
ーゴイルの中じゃ、ちよつと無理だな」

「近くには、そういう設備は無いのか？」

「グラナダなら出来るかも知れないが、出来るか判らない改造に、わざわざ月の裏側に寄り道するのはちよつと遠いしな。ロンデニオンに着けば、どうにかなるかも知れないが」

ロサの質問にそう答えた後、少々困ったような顔で、マークが頭を掻いた。

ロサも、元々 ガンダムのテストに付き合わされていたため、多少は技術的な知識もある。マークの表情から、思ったより難しい改造である事は、理解できた。

「しょうがねえ。残量も考えて噴かすしか無いか」

思わず諦めたような表情で、溜め息をつくロサの表情を見て、思い出したようにマークが言う。

「そう言えば、宇宙戦は今回が初めてだっけ？重力が無い分、噴かし方をセーブしても同じように動ける筈だ。噴かす時に、加減を少し工夫してくれ。本来は、片道なら月から地球まで補給無しで飛べる筈の機体だから」

予想外の航続距離を言われ、ロサが感嘆の声をあげた。

「そんなに飛べるのか！？………そういえば勢いが有り過ぎて、ちょっと辛かったな。なるほど、解った。じゃあ、タンクの追加改造は必要無いな」

「フレーム自体は無事のようだな。ちゃんと問題無く変形は出来るか？」

「試してみよう」

ロサがAガンダムに乗り込んで変形を開始し、点検用のスローモーションで変形時の具合を確認していく。あちこち外板が凹んではいるが、動作には問題は無い様だった。

マークが頭の上に、両腕で大きく〇を作った。どうやら点検は完了したようだ。所定の位置に駐機を終え、ロサがAガンダムのコックピットから出てきた。

レオンはエアハッチに来たロサを呼び止め、自販機コーナーへ促した。

オレンジジュースをロサにおごってやり、レオンが笑みを見せ、口を開いた。

「お前さんがいなけりゃ、俺達は今頃サラマンダーのパイロットになつてるところだった。礼を言っぜ」

「大多数の奴らには、怖気づいて逃げたと思われてたんじゃないか？」

苦笑しながら、自販機の前のソファーに座り込むロサの様子に、レオンは若い頃のハートレイの面影を感じていた。

「そう思った奴が居たかも知れない事は、否定しないさ」

レオンは声をあげて笑った後、話を続ける。

「ハートレイも以前に似たような事を言っていたんでな。俺が他の奴らを制した」

「親父が……？」

実際に、軍人として動く際の父・ハートレイの様子を、他人から聞くことはあまり無かったロサが、顔を上げた。

「もっとも、もう少し被害はマシだったが」

「親父は、もっと早く気付いたって事か」

溜め息をついて、肩を落とすロサを見ながら、レオンが苦笑した。

「まあな」

「俺がそのくらい早く気付いてれば、あの子達に怖い思いをさせずに済んだのに……」

更に深い溜め息をつくロサに、レオンが真面目な顔になり、弁護するような口調で言った。

「問題ない範囲で済んだんだ。被弾箇所を修理すりゃ済むこつた。初めて宇宙に出て、あの反応が出来るってのも大したもんだぞ。流石はハートレイの息子だと、真剣に思ったぞ」

「気休めはよしてくれ」

拗ねた様な声を出し、ロサが眉をひそめる。

「どうやって気付いたんだ？」

レオンの質問に、ロサが一息置いて話し始めた。超常現象に近い内容だから、信じて貰えるか不安だったのだろう。

「フローラに呼ばれたんだ。」助けて、船が沈んじやう”って。何だか分かんねえけど、間違いなくフローラの声が、はっきり聞こえた」

「そうか」

納得した様子のレオンに、ロサが尋ねた。

「あれは、一体何だったんだろうな？ 幾ら考えても、分かんねえ……」

ロサが、結論の出ない考え事に、やや困惑した表情を浮かべる。難しい顔をするロサの様子に、レオンが苦笑した。

「それだけ、お前がこの船を想ってるって事さ。次はもっと早く反応出来る筈だ。ハートレイの血を引いている、お前ならな」

「親父の血か……」

ロサがまだ理解しきれず、溜め息をつく。

「ま、今回の一件で、みんなお前の実力は解った筈だ。少なくとも、怖気づいたなんて思う奴は居なくなる。頑張ってくれ」

レオンはロサの肩を叩いて笑顔を見せた後、ロサに背を向けた。

「ありがとう」

ロサは素直に礼を言って、レオンの背中を見送り、持っていたオレンジジュースを飲み干した。

立ち上がって、紙コップをゴミ箱に投げ込んだ直後、フローラがロサを見つけ、声をかけてきた。

「ロサ、さっきはありがとう……」

改めてフローラを見ると、肩までの綺麗な黒髪が印象的で、清楚で大人しそうな、可憐という言葉がぴったりの美少女である。清潔感のある白いワンピースの着衣が、その印象をより際立たせている。

その生活ぶりから、女に縁の無かったロサは、はにかむような声で礼を言うフローラに思わず照れてしまい、照れ隠しで言葉がそっけなくなる。

「べっ……別に、わざわざ礼を言われる程の事じゃねえよ」

どもりながら横を向くロサの様子に、フローラがくすつと笑った。

「まさか本当に戻って来てくれるとは思わなかったから、すごく嬉しかった。だから、ちゃんとお礼を言っておきたかったの」



フローラはそう言って、にっこりと微笑んだ。

「無事で良かったよ。もつとも、親父ならもつと早く気付いていたかも知れないって、言われたけどな」

自分もそこそこの腕は有ると思っただけに、意外にシヨックだった様子で、ロサはそこまで言った後、溜め息をつき、少し遠くを見るような、悲しげな目をした。

ロサの表情の理由が分からず、フローラが怪訝そうに首を傾げる。

「ロサの……お父さん？」

「親父も、この艦のパイロットだった。ガンダムも、元々は親父のモビルスーツだ」

「それって、今は居ないって事なの？そんなに凄い人が、どうして今は此処に居ないの？」

事情を知らなければ当然の疑問を、フローラが口にした。ロサが俯き、声を潜めた。

「民間機が故障して戦闘空域に紛れ込んだのを、救助しようとして狙撃されたらしい」

「……ごめんなさい！」

立ち入った事を聞いてしまったと、フローラは申し訳なく思い、頭を下げて謝った。

声が、無意識にそれまでより大きくなってしまったのは、ロサが怒ったら怖い人だと、それまでの口調から感じていたからだろう。

「別に謝る必要は無いさ。知られたく無いのなら、俺が話さなければ良かっただけの事だ。だから、君が気にする必要は無い」

ロサが取り繕うために、笑顔を作った。ロサのきつい口調に、少し怯え気味だったフローラだが、不器用な言い回しで、遠回しに怒っていないと言おうとしているロサの様子に安心したのか、フローラも笑顔を見せた。

「正直、来た時は、余り気は進まなかった。でも、これ以上、俺達みたいな戦災孤児を増やさないように、早く戦争を終わらせる必要が有ると思った。だから、この艦に乗る事にした」

「えっ……？じゃあ、ロサも私たちと同じ……孤児だったの？」

目を丸くするフローラの顔を見て、ロサは黙って頷いた。

「あの時の攻撃に巻き込まれて、お袋が死んだ。それで、俺も孤児になったのさ。逃げる途中で偶然ガンダムを見つけて、それで奴らを追い払った。他にガンダムをまともに操縦できるパイロットは居ないから、ガンダムに乗ったまま、この艦に連れて来られたんだ」

諦めたような表情で、ロサがため息をついて、肩をすくめた。

その様子を見て、触れない方が良かったのではないかと感じたフローラが、視線を落とした。

「そうだったの……。私はてっきり、ロサは今迄ずっと、この船に乗っていたんだと思ってた」

「俺みたいに、マフィアから金を巻き上げる位に喧嘩慣れでもすれば、そのままシャインリバーに居ても、別に良かったんだけどね。俺の知り合いじゃ、ヤクザ者か色街の関係者しか居ないから、君に紹介できるような仕事が無かった」

自嘲気味にそう言つて、苦笑するロサの聞き慣れない言葉に、フロ  
ーラが頭に”？”を浮かべる。

「いろがい……?」

「赤線とも言う。アダルトビデオみたいな事をする場所さ」

「……!!」

思わずフローラが顔を真っ赤にし、両手で口を覆った。どんなもの  
であるかという程度くらいは、知っていたらしい。

「そんな所を知ってるの!？」

悲鳴に近い声を出すフローラを見て、またロサが苦笑した。

「実際に行った事は勿論無いし、行ける歳でも無ければ、行ける金  
も無いよ。ただ、そういう関係者の知り合いが多いというだけの話  
さ。今迄だつて、孤児院で苦労してただろ？君をそんな所に紹介し  
たくなかつたから、艦長には何も言わなかつたんだ」

その一言は、フローラには意外だった。マフィアとか喧嘩慣れしているとか、ロサの口からは物騒な言葉しか出なかったため、冷徹な恐い人だと思いついていたからである。

”この人、意外に優しいんだ……”

そう感じたフローラは、返事が出来なかった。そのまま暫く沈黙していた2人の所へ、子供達が来て無邪気に声をかけてきた。

「フローラ姉ちゃん、トランプしよう！」

「いいわよ」

「ロサお兄ちゃんも一緒にしよう！」

「はいはい」

そのまま2人に手を引かれ、ロサ達はレイラの部屋に連れて行かれた。

アックスに手を引かれるフローラの背中を見ながら、ロサは、フローラの口から、何も言葉が出なかった事を気にしていた。

”しまった……誤解されたかな……？”

ロサは色街という言葉を口にした事を、今になって後悔した。

## 8・ロード出撃（前書き）

所属艦「アクエリアス」に帰還したワルザ。

。ガンダムの再稼働の知らせを受け、動き出したモビルスーツとは

## 8・ロード出撃

所属艦「アクエリアス」にワルザが帰還し、モビルスーツデッキに駐機を終えた。

「珍しく随分派手にやられたな、ソフィア」

大して驚いた様子も見せずに、呑気な声を出して被弾したワルザの手首を見上げた、小太りのメカニックに言われ、ワルザのパイロット・ソフィア「ヒシモトは、如何にも不機嫌そうな声を出した。」

「仕方が無いでしょう!? 相手が ガンダムだなんて、聞いてなかったんですから!」

「ガンダム!? 総帥とタメを張ってたっていう、あのガンダムか!? あれって落とされたんじゃないやなかったっけ!」

信じられないという表情で目を見張るメカニックに、ソフィアが声を荒げる。

「録画してますから、CG画像を見て下さい! 他の何に見えるか、後でお聞きします!」



無重力状態から、思い切りワルザの装甲を蹴りつけ、ブリッジへと急ぐソフィア。

「もし、本部が知ってて連絡して来て無かったんだとしたら、そりゃ怒るわな。総帥とタメを張れる機体を相手に、ソフィアが勝てる訳が無いんだから」

いつもより言葉が少ないソフィアの様子に、メカニックが同情するような声を出した。

「アクエリアス」の艦長も、ソフィアの剣幕に、何も言えずに通信権を乗っ取られた。

ヘルメットを取った、セミロングの黒い髪、ロサよりもやや細い顔立ち、黒目がちの大きめの目が優しく見える筈の目尻をつり上げ、女性にしては高い170cm程の身長で、隣に座る館長を見下ろすような形で、ソフィアが画面の前に陣取る。

戦艦「スコピオン」で、サラマンダーを襲ったベリックの新部隊の視察に向かっているという、総帥・クリスチャンロードの顔が、ディスプレイに表示される。

銀色のやや長い髪に、顎が尖った細目の顔。鼻筋がとおり整った顔

立ちだが、目は細く茶色の瞳も小さいせいか、どこか冷たさを感じさせる。

ソフィアは、ガーゴイル奇襲に失敗したことの報告と、Aガンダムの再稼働の情報が提供されていなかったことに対し、説明を求めた。

「Aガンダムが稼働しているという情報は、全く聞いていませんでした。何故そのような重大な情報が提供されていなかったのか、ご説明頂けますか」

『シャインリバーに入ったギラ・ドーガが撃退されたという報告は受けていたが、戻ったパイロットが精神的に不安定だったので、信憑性に欠けると判断されて、私の耳に入ってこなかったのだ。すまない』

ロードが、画面の向こうの「スコープオン」から、落ち着いた声で言った。

「しかし、疑わしいと思われることは、きちんと事実を確認すべきと思われませんが」

怒りが収まらないソフィアが食い下がる。

『今後は些細なことでも報告するように、私が自ら叱責してある。Aガンダム你再稼働という重大な事柄は、パイロットの生死に関わるからな。お前の奇襲を阻止したというモビルスーツは、間違いなくAガンダムなのだな？ソフィア』

「はい。間違いありません。ファンネルまで使いこなすパイロットが居るとは、完全に予想外でした」

ソフィアの言葉に、ロードが感心したように唸った。

『ほう……。ファンネルを使いこなせるパイロットとは、相当な腕のようだな。相手に心当たりは無いのか？』

「今のところは……」

ソフィアが困惑しながら首を振った。

”ファンネルを使うパイロットか……奴以来だな”

ロードがハートレイを思い出し、少し考えた。その後、何かを思い出したように、ソフィアに尋ねた。

『そういえば、君の弟がシャインリバーに居る筈だったな。今はどうしているんだ?』

「先日の攻撃で、自宅は倒壊したと聞いています。それ以来家族は行方不明で、誰かが押し潰されたような血痕があったらしいので、そのときに死んだものと……」

また困惑気味にソフィアが答えた。

ソフィア自身も、家族が行方不明である事には混乱していたが、現在は革命軍に身を置いていて、自分の目でシャインリバーへ確認に行けない事実には、齒痒さを感じていた。

『全員が行方不明か……』

ロードは呟いた後、少し間を置き、ソフィアに尋ねた。

『君の弟が生きていて、ガンダムを操縦していたという可能性は無いのか?』

ロードの質問に、ソフィアは考え込んだ。だが、今のソフィアに、明確な答えを出せる筈も無い。返答の全てが、推測になってしまう。

「弟はまだ15歳です。モビルスーツの操縦はともかく、ガンダムの操縦は無理ではないかと……」

『かつてハマーン・カーンが、ザビ家とネオ・ジオンを掌握した後、それを倒したエウーゴのガンダムのパイロットは、13歳だったという。15歳なら、ガンダムの操縦は十分可能だろう』

ロードの言葉に、ソフィアが反論出来ず、言葉を失った。

『可能性は高いようだな』

「シミュレーションでは、父と何度か戦っていたと聞いた事は有りましたが、コロニーの中と外では勝手が違う筈です。まして、ファンネルまでは……」

ガンダムの動きを思い出しながら、ソフィアが言った。

ファンネルの使い方もそうだが、特に接近戦での動きは半端なものでは無かった。どう見ても、15歳のロサが動かしていたとは、ソフィアには考えられなかった。

『分かった、また何か判れば報告を頼む。ご苦労だったな』

そう言った後、ロードはソフィアを労い、次の戦闘に備え休むよう告げ、通信を切った。

「ハートレイの亡霊、か……」

そう呟いた後、電源の落ちた画面に映る自分の顔を見ながら、ロードは、当時の状況を思い出していた。

半年前、連邦軍の軍需工場が増加したシャインリバーの制空圏で、その設備の乗っ取りを企てたロード革命戦線は、ハートレイ率いるガーゴイル隊と、激しい戦闘を繰り返していた。

お互いにファンネルを使いこなせるロードとハートレイは、互いに10基ずつのファンネルを展開して砲撃戦を繰り返し、一步も譲らない戦闘となっていた。

互いにファンネルを使い果たした後も、ビームサーベルでの斬りつけ合いになり、なおも激しい戦いが続いた。

そんな状況の最中さいちゆうに、エンジンの故障で航行不能になり、漂流してきた民間のシャトルが、戦闘空域に紛れ込んだ。

それに気付いたハートレイは、停戦信号弾を打ち上げた後、救助に向かった。

本来、信号弾が上がった後は、如何なる状況でも発砲は禁じられているのだが、ロードは、Aガンダムを狙撃し、コックピットを撃ち抜いた。

直撃を受けたAガンダムのコックピットの中は、ハートレイのベレッタM93Rが宙に浮いたまま残されていただけで、座席や操作機器は殆どが消失していた。

だが、真横からの狙撃で、エネルギー系統には引火しなかったため爆発はせず、シャトルは救助を手伝いに来たレイラの手で救助された。

「どつやら、私自身の目で確認する必要がありそうだな」

ロードは眉をひそめて呟き、インターホンを取り上げた。

「グリアラスの準備は出来ているか？サイド4に進路を変更し、ガンダム你再稼働の確認に行く。シルフィー隊に同行してもらう。準備の連絡を」

連絡を終え、ロードは専用機「グリアラス」で出撃するため、自室から「スコープオン」のモビルスーツデッキに向かった。

”再び、私が自ら、モビルスーツに乗る事になるとはな……”

ロード自身も、元はテロ組織のいち組織員であり、その中での活躍を認められ、現在の地位がある。

当時その軍事力はまだ小さく、殆どは歩兵での地道なテロ行為、人海戦術が主戦力。

モビルスーツを持っている地球連邦軍を相手に、まともに勝負を挑んでも、勝てる訳が無い。

そこで、ロードは一旦組織を解散し、モビルスーツの残骸から使える部品を集め、モビルスーツ部隊を立ち上げる事を提案した。



残骸の回収業者を組織の中から立ち上げ、自分の他にも数人を引き連れ、サイド1空域のモビルスーツの残骸を集めた。

表面上はただの回収業者、サイド1空域は第2次ネオ・ジオン戦争時の戦闘も激しかった為、残骸は山ほどある。あっさりと許可がおりた。

そして、回収船を仕立てて残骸を集める範囲を広げ、サイド1だけでなく他の空域からの回収も始め、同時に各コロニーの実態調査も秘密裏に行い、見込みの有りそうな者を、次々に仲間に引き込んでいった。

当時の戦力は、残骸の中から回収したザクやギラ・ドーガのうち、使える部品を寄せ集めて回収船内で仕立て直したものが大半を占めた。

俗にいう「二個いち」どころでない、中には10機近く集めて、ようやく形になった物もあった。

それでも、モビルスーツの獲得は、戦力を大きく変えた。

その後、回収した残骸の中に、リック・ディアスや量産型キュベレイも混じるようになり、やがて両者の機体が組み上がった。

それに、ギラ・ドーガのエンジンなど、時代相応の技術を採用入れ、現行仕様としたのが、ベリックやグリアラスである。

そして、スウィート・ウォーターで、連邦軍に接収されていた旧ネオ・ジオン基地施設を強襲し、解体の費用が無く保管されていたギラ・ドーガ10機とその関連武装、そして質素とはいえ、モビルスーツの本格的な整備と製造の地盤を、一気に手に入れた。

これをきっかけにスウィート・ウォーターで大規模な暴動が発生し、連邦軍を撤退させたロードは、一躍英雄になった。

この実績を買われ、ロードはテロ組織の頭領となり、革命軍としてクーデターを起こすため、正式に「ロード革命戦線」を名乗り、連邦軍に宣戦布告したのである。

ガーゴイルは、被弾箇所 of 完全な修理を受けるため、比較的現在地から近いコロニー「テキサス」へと航行を続けていた。

テキサスも、以前は荒廃していたが、難民の増加によりコロニー建造費用を抑制するため整備され、その就業先として、ここにも連邦軍の口利きによる軍需工場が設置された。

ガーゴイルの整備班は、手持ちの材料で、外板の仮修理に追われていた。モビルスーツデッキで、有り合わせの鉄板が、手作業で手際よく溶接されていく。

「この被弾の仕方、よくエア漏れが起こらなかったよな」

マークは、艦外から改めて被弾箇所を眺めて、感心したように呟いた。

この時点でガーゴイルのクルー達はまだ気付いていなかったのだが、ガーゴイルを襲ったワルザのパイロット・ソフィア・ヒシモトが、親友であるレイラが乗っているかも知れないという感覚が心のブレーキとなり、ガーゴイルに致命傷を与える程に思い切れなかったことも、幸いしていたようだった。

『マーク、どうだ？仮修理だけでも、出来そうか？』

無線で、メッシが船外に居るマークに声をかける。

「出来なくはないが、やはり繰り返し戦闘に耐えられるような頑丈さには、ならないだろうな。ちゃんとしたドックでの本格的な修理が必要だろう」

『解った。テキサスも近いから、出来る範囲でやってくれ。また来られた時に、とりあえず船体がもたなければ、どうしようも無い』

「もう一回程度は、もたせられる様にしておくよ」

マークが手で合図を送り、溶接を終えたパネルを持って来させた。

戦艦の外板は、修理が出来るだけ簡単に出来るよう、いくつかのパネル型に分割されていて、部材を外して交換する事で、すぐに仮修理が出来るようになっていた。

鋼板をおおよその形に溶接して型材を形成し、破損したパネルと交換していくのである。

モバイルスーツの場合は、複雑な動きに対応する必要があるため専用のパーツが必要だが、戦艦の外板の仮修理程度なら、有り合わせの材料で作って済ませる。

「これで暫くはもつだろう」

船外から整備班が戻り、エアハッチを閉じた途端、ブリッジで敵襲

の警報が鳴った。

「敵機熱源接近！全部で6機、1機はグリアラスと思われます！」

「ロードが！？」

メッシが忌々しげに舌打ちし、艦内放送で敵襲を知らせる。

「ロードのグリアラスが来ている！追い払うだけで良いから、無理をするな。良いな！」

「追い払うだけでいい、か」

ロサはこの戦闘で、ロード機を撃墜できないかと考えていた。ハートレイが生きていた頃に、CGでのシミュレーションも幾度と無くやっているから、自信も無い訳ではない。

「初めて戦う相手に、無謀な事を考えちゃ駄目よ」

全く顔色を変えず、落ち着き払っているロサの表情を見たレイラが、釘を刺す。

「了解。シミュレーションである程度の癖は掴んでるんだけどね、確かグリアラスって機体じゃなかった筈だ。無茶はしないさ」

ロサが愛想笑いを見せた後、各自がモバイルスーツに乗り込み、順次ハッチが閉まっていく。

「俺は、何処の小隊に参加するんです？」

自分のポジションがまだ確定していないロサが、レオンに尋ねた。

ガーゴイル隊の防御編成は、レオンの前線部隊とレイラの後方部隊、ケニー・レイノルズの中距離部隊の3部隊編成。

シャインリバー入港時は各隊5人だったが、強襲時以降はレイラ隊の3人が撃墜されたため、現在は各隊4人に再編成している。

『俺と前線で防御線を張るのを手伝ってくれ。お前が居れば、そう簡単にガーゴイルに手を出す事も出来まい』

「前は、前線が親父の役目だったと？」

少し目を細めて言うロサの言葉に、レオンが頷いた。

『そういう事だ。初めて戦う相手だ、無理はするな』

「了解」

『ロード以外に突破された場合は、後方のレイラとケニーに任せる。俺達はいくまでもロードに集中する。いいな』

「了解。Aガンダム、出ます！」

今回はロサが先陣を切って飛び出す。レオンのジェガンがそれに続く。

「今の状態じゃ、戦闘はガーゴイルから遠い方が良いな。少し離れよう」

『さすがに、あの様子じゃ、直撃はさせられないからな』

ロサの判断に、レオンも頷いた。どうやらロサと同じ意見のようである。

地球が意外に近い。雲の形や台風の間まで、はっきり判る。

「きれいだな」

ロサは、地球の青さに見とれて、思わず呟いた。



## 9・墜落（前書き）

仮修理を終えたガーゴイルに、ロード革命戦線の総帥・ロードが専用機「グリアラス」で近づく。

いよいよ、ロサの本当の意味での戦いが始まる。

## 9・墜落

「来たな、ガンダム……！」

レーダーを確認して呟いたロードが、自機のファンネルを放出し、先制攻撃に掛かる。ロードの専用機として運用されている「グリアラス」のファンネルは、キュベレイがベースなので、それと同系の漏斗形である。

「行け、ファンネル！」

放出されてから、暫くフワフワと漂っていたファンネルが、ロードの声と共に、突然直線的な動きに変わり、まっすぐにガーゴイルを指し始めた。

相手の動きを読む為、やや広範囲に10基のファンネルを展開する。その表面には、電波の反射を攪乱するフィルムを貼り込んであるためにステルス性があり、通常のレーダーでは反応しない。無論、自機のレーダーにも反応はしない。

「強襲部隊を、たった一機で一方的に倒したと言う貴様の腕、見せてもらおう……！」

ファンネルが先行した、ガーゴイルが居る筈の空域を睨み、ロードが呟いた。

「そろそろ来るな」

リーダーで相手の機影を確認し、自分との距離を見繕ったロサが、特に慌てる様子も見せずに呟いた。

ハートレイの残したCGシミュレーションで、数えきれない程の訓練をこなし、およその癖を知っているロサが、レオンにも声を掛ける。

170

「そろそろファンネルの攻撃が来る頃だ。レオンさん、気をつけて」

「了解」

レオンが言った刹那、ロードのファンネルが一斉掃射を開始する。

前回の一連の戦闘で、忘れていた勘をかなり取り戻したロサも、この動きに合わせてファンネルを放出した。ロードからの10本のビ

ームの延長線上に、ロサが自機のファンネルを合わせる。

「そんなワンパターンの攻撃で、違う相手に勝てると思ってんのかよ？全部受け止めてやる！ガーゴイルまでは届かせない！！」

自信に満ちた表情で言い、ロサも一斉掃射を放った。両者の中間点で互いのビーム同士がぶつかり合い、釣り合って爆発する。エネルギーの大きさ自体は、ロサの目論見どおり、どうやら同じらしい。

「何だと！？受け止めた！？」

爆発に気づいたロードが、その狙撃の正確さを見て、驚愕の表情で呟いた。ハートレイもファンネルは使っていたが、受け止めるという使い方をした事は無かった。

「狙撃力はハートレイ以上だということか……！？ならば、これでどうだ！？」

今度は、ネズミ花火の様な、複雑かつ速い動きでファンネルを高速移動させ、さらにマシンガンの如く連射する。

「それもお見通しだ。ガーゴイルまでは届かせないと言った！！」

落ち着いた声でロサが言った後、Aガンダムファンネルが、極端な高速移動もしないまま、砲口の角度だけを動かす。その連続狙撃により、時間差がとられたビームの波状攻撃と言える連射も、やはり途中で全て爆発させられ、宇宙の虚空へと霧散した。

さらにガーゴイルを直撃するコースへ向かっていた、他の機体から来た数本の狙撃まで、ビームライフルの狙撃で全て止めてしまった。その様子に、レオンが啞然とする。

「こいつは、想像以上の腕だな」

ロードを完全にロサに任せても大丈夫だと判断したレオンが、グリアラスから離れ、他の機体の攻撃に掛かった。

ロードのやや後方、ギラ・ドーガの編隊の先頭にいる赤い機体を、レオンが数発狙撃したが、全てかわされた。その直後に、その機体小さく手を上げるような動作を見せると、素早くギラ・ドーガが散開した。

「あれは、この前の新型機……やはり、あれが隊長機らしいな」

ロードのグリアラス以外に、赤い機体・ベリックが1機混じっている。恐らくそのパイロットが、ロード以外に、本来この小隊を纏

めている人物なのだろう。

ビームサーベルを抜き、レオンのジェガンがベリックに斬りかかった。これを受け止めたベリックとの間に、激しいスパークが飛び散る。

この鏖迫り合いを手始めに、各機が戦闘を開始する。ロサも右手でビームサーベルを抜き、左のビームライフルを連射しながら、ロードのグリアラスに斬りかかった。

ロードがファンネルで、様々な角度や速度でAガンダムを狙撃するが、攻撃がガーゴイルに行かなければ、エネルギーを使ってまで、無理に止める必要は無い。Aガンダムは、ものともせずになんとか突撃する。

「うおおおっ！！」

ロサが雄叫びをあげると同時に、Aガンダムがビームサーベルを振り下ろした。グリアラスとの切っ先がぶつかり、互いに一度弾いてから、もう一度互いの機体に飛び掛かった。

右上からロサがビームサーベルを振り下ろし、これを受け流しつつロードが左足で蹴りを出す。

これを右膝でガードしたAガンダムが、膝を上げたまま2段蹴りの形で、グリアラスの膝を蹴飛ばして離れた後、ファンネルでの一斉掃射をグリアラスに向けて放ち、さらにビームライフルで狙撃してきた。その切り返しの速さに、ロードが慌ててかわしながら驚く。

「こいつ……速い!!」

ロサは生身でも、重火器相手に喧嘩を重ねてきた体である。自分の体と同じように動かす事さえ出来れば、ファンネルやビームサーベルといった武器に頼りがちなパイロットより、数段接近戦には強い。

さらにロサが、ライフルで数発撃ち込んでロードにかわせ、かわした先に、とどめと言わんばかりにファンネルの一斉掃射を叩き込む。

ついにかわしきれずに、グリアラスの右肩が吹き飛んだ。

「総帥!?!」

これに気付いたベリックのパイロット・シルフィー＝リーシアが、グリアラスを見て叫んだ。

レオンの隙を突き、ロードの元へ急ぐ。ファンネルこそ無いものの、シルフィーの正確な連続射撃に、堪らずレオンが距離をとる。

「ちいつ！行かせるかよ！！」

シルフィーの動きに気づいたロサが、Aガンダムファンネルをベリックに向けて。グリアラスからの狙撃をかわしながら、ベリックに対し、時間差をとってマシンガンのように連続攻撃を加えるが、全て紙一重でかわされ、今度はロサが焦りだし、思わず舌打ちする。

「サラマンダーの時も、あの機体にかわされ続けたな……こいつがあの時のリーダーか」

言いながら、ロサがファンネルとビームライフルで、なおも連続攻撃を加え続けるが、シルフィーのベリックは、全てかわした末、グリアラスの横に辿り着いてしまった。

「」無事ですか！？」

「少々甘く見ていた事は、否定出来ん……想像以上の強さだ」

ロードが忌々しげな声で答えた後、シルフィーが手短かに言葉を続



ける。

「ここはひとまず撤退を」

「止むを得ん……!!」

ロードの返事を聞き、シルフィーが素早く撤退信号を出した。だが、それを見たロサが、背を向けようとする2機に対し、凄まじい連射で追撃を始めた。

「逃がすか!!」

狙撃が正確であるが故に、狙われる側からすれば、かわしやうしい狙撃。狙撃が当たらない事に苛立ちながら、ロサが連射を続けるうち、Aガンダムファンネルは、エネルギー切れになって宙に浮き始めた。

「武器はファンネルだけじゃねえよ!!」

エネルギー切れになったファンネルを、機体に呼び戻して収納した後、ビームライフルで連射しながら、ロサが2機に突進していく。

更に、Aガンダムの腕のショートライフルやグレネードまで連続発射して、文字通りの総力戦を始めた。

グレネード弾を撃ち落としながらビームをかわし、ベリックが防戦一方になりつつも、必死にグリアラスを庇う。

「ロサ、深追いしすぎだ！戻れ！！」

気付いたレオンが叫ぶが、ロサは目の前のロードを逃がすつもりは無かった。

「言うのが遅えんだよ……！！」

ロサが鬼のような形相で呟いた後、Aガンダムが再び、グリアラスを目掛けて斬りかかる。だが、今度はシルフィーのベリックが間に割り込み、ロサのビームサーベルを受け止めた。

「総帥は殺らせない！！」

必死の表情でシルフィーが叫び、スパークを散らすAガンダムの切っ先を睨む。互いに弾いた後、再び両者がビームサーベルを振りかぶった。グリアラスをすんなりと追えない苛立ちに、堪らずロサが咆えた。

「ザコが出しゃばるんじゃねえ！どけ！！」

Aガンダムとベリックのビームサーベルが、鏝迫り合いで激しい火花を散らす。

「総帥、今のうちにスコープオンへ！！」

懸命にAガンダムの斬撃を食い止めながら、シルフィーが叫び、ロードを促す。背後のグリアラスを見ている余裕など、その表情からは全く感じられない。その声を聞いたロードが、忌々しげに唇を噛んだ。

「すまん！！武運を祈る！！」

ロードの言葉と同時に、グリアラスが2機に背を向け、バーニアを噴かした。その光を見たロサも追おうとするが、シルフィーが決死の覚悟で行く手を阻む。

「あいつが居なければ、親父もお袋も死なずに済んだんだ！！邪魔すんじゃ無え！！！！」

怒号と共に放たれた、ロサの凄まじい殺気に、全てのパイロットの背筋が凍りついた。戦闘空域に居た機体が全て、時間が止まったように動きが止まる。

無線など通さなくても、はっきりと感じられる程の異様な威圧感に、シルフィーも例外でなく、恐怖で体が言う事を聞かなくなる。

「殺られる……!!」

迫り来るAガンダムに思わず怯み、シルフィーが反射的に目を閉じた。無意識に握り締めた操作レバーの動きが、ベリックのビームサーベルを振り上げさせた。それと同時に、Aガンダムがビームサーベルを振り下ろす。

だが、ベリックのビームサーベルが、Aガンダムの何mも手前で空を切った。Aガンダムの斬撃も同じように、ベリックの遙か手前で空振りになる。

今までのAガンダムよりも、明らかに動きが遅い事に、ロサが気付いた。

「何だ！？バーニアの推進力が落ちている……どういうことだ!？」

おかしいのはバーニアだけではない。機体そのものが、明らかに流れ気味になっている。思っている様に機体が静止しない。

「まずい！このままじゃ大気圏に突入して、摩擦熱で燃えちまう！」

焦り始めたロサが、目を泳がせながら叫び、間合いを取ろうとベリックに蹴りを入れる。それをベリックが受け止めた瞬間、2機の機体が大きく流れた。

この弾みで、いよいよ地球の重力圏に引き込まれ、ベリックと共にAガンダムが地球に向けて落下し始めた。自分の意思に関係なく、足元へ引きずられる感覚に、流石のロサも、堪らず恐怖感を露わにする。

「やばい、落ちる！！」

必死にバーニアを噴かすが、地球の重力には逆らえない。

流石のロサも慌てふためき、パニックになりそうな頭を必死に働かせるが、答えは出ない。

”ダメだ、どうしたら良いか分からない、マニュアルを……！！”

操作盤に指を叩きつけるようにしてマニュアルを呼び出し、「大気圏」と打ち込む。ディスプレイに、変形についての説明が表示された。

「これか!？」

ロサは操作盤の表示どおりに、Aガンダムの機体を飛行機形態「ウエーブライダー」に変形させる。

変形後は、フライングアーマーはガンダムと同じく機体下面になり、それを地球に向けて降り、コックピットを大気の摩擦熱から保護する。

落下中は、機体を水平方向に回転させる事しか出来ないのも、ロサは上下からの攻撃を受けない事を祈るのみだった。

同時に重力に引き込まれたシルフィーのベリックが、やがて摩擦熱に耐え切れなくなり、爆発した。

ベリックを探していたロサの目の前での出来事で、無抵抗で死んでいくシルフィー機の爆発に、思わずロサは目を背けた。

「頼むから、せめて戦争で死んでくれ……これじゃ俺は、ただの人殺しじゃないか……！」

自分が先走らなければ、ベーリックのパイロットはこんな死に方をせず、せめて軍人のパイロットとしての死に方が出来た筈だ。

そう感じたロサは、炎上するベーリックの煙を突き抜けた瞬間、激しい後悔の念に駆られた。

その煙は、シルフィーの無念さをロサに思い知らせるかのようについて、いつまでもAガンダムに纏わりついていた。

## 10・キンバリー（前書き）

ベリックとの戦闘の結末に、激しい後悔を覚えたロサ。だが、ただ自分は、フローラ

達を守る為に、生きて戻らなければならない。

その気持ちだけが、今のロサを支えている。ガーゴイルに戻る手段を求めて、ロサが地

球をさまよう。



## 10・キンバリー

地面に相對していた、Aガンダムのフライングアーマーの表面温度が、地表が近付くと共に下がりはじめ、やがて広い陸地が見えてきた。

だが、降下した場所の景色は、生物の気配がまるで感じられないような、砂と岩しか無い広大な荒地。よく見ると、遙か彼方に、地肌が剥き出しの岩山のようなものが、やはり陽炎で揺れているのが見える。

てつきり、昔の日本のような緑豊かな山や、魚の豊富な海でも見えないと思っていたロサは、思わず呆気に取られ、溜め息を漏らした。

「これ……砂漠か……？」

幼い頃、日本に居たロサは、図鑑やテレビの画像を見た事は何度かあった為、大まかな砂漠のイメージは掴んでいる。だが、目の前に広がる光景は、少し印象が違っている。

雨が降った後に、干からびて固まったような、黄色い土。大きな岩が、それに埋もれるようにして、結構転がっている。まるで昔の西部劇のセットのような、荒涼たる景色。

日本人が砂漠と聞いてよくイメージする、ピラミッドもスフィンクスも、ヤシやソテツのような裸子植物の生えたオアシスも、まるで見当たらない。

「砂漠じゃないな。砂漠なら雨が降らない筈だから、土が固まつたりはしない。これ、どこの上空だ？上空からじゃ判らないな」

地球での運用に対応出来る筈のAガンダムも、実際に降下したのは今回が初めてのようで、地形図のデータをモニターに呼び出そうとしても、位置情報はずっと「unknown」を表示したままになっている。

この土地が、敵方の制空権である可能性を考えると、下手に無線やレーダーの電波を飛ばす訳にも行かないから、GPS機能も使わない方が賢明だろう。

残る武器は、ほんの僅かな残弾数しかないビームライフルと、ビームサーベルしかない。万一、戦闘になったら圧倒的不利な状況になる事は、火を見るよりも明らかである。

やむを得ず、ロサは敵に見つからない事を祈りつつ、自分が現在居る位置を把握する為に、飛行機形態のままのAガンダムを、2周だけ落下地点の上空を巡回させて、目印になる物を探した。

しかし、こんな荒野のど真ん中に、目印になるものが有る筈も無い。遠くの陽炎に揺れる岩山も、輪郭がはつきりしないから、膺気楼かもしれない。目印としては、当てにしない方が良さそうである。

仕方なく、日の高さや光の色から、現地の時間は正午過ぎであると判断し、「とりあえず太陽を背にしてまっすぐ飛ぶ」と決めたが、それでも数十分間、航行を続ける羽目になった。

やがて土しか見えない荒れ地から、枯れたような色合いの草原に景色が変わるが、相変わらず人の気配は、全く感じられない。

「まずいな。このままミイラになるなんて、ごめんだぜ」

流石のロサも焦り、顔が引き攣り始めた。このままでは推進剤となる液体水素どころか、飲料水も儘ならないかも知れない。

草が枯れたような色という事は、長期間にわたり、雨が降らない可能性が高いからである。ロサの顔に、焦りと恐怖の表情が広がると共に、自然とAガンダムの飛行速度が上がる。

「やばい、水を確保出来る場所を探さないと……！！」

完全に冷静さを欠いた声で、ロサが呟いた瞬間、草原の絨毯に、黒

い切れ目が見えた。全速力でその上を通過したため、判断出来なかった口サが、引き返して確認に向かう。

「今のは何だ？」

ふと、鉄道の線路らしきものが目に入る。日本の鉄道とは異なり、安っぽい割れ目だらけの枕木に、適当に細いレールを打ち付けただけの、簡易な軌道。その下も、碎石ではなく、ただの土である。恐らく、日本の鉄道のように整備をしたら、元が取れない程度の輸送量だから、これで十分と言う事なのだろう。

線路の周囲だけ土が黒っぽいのは、恐らく車両の油か、ブレーキの鉄粉がこぼれた跡。わずかに鉄の光沢が見られるレールの上面が、この鉄道が現役である事を、健気に主張している。

それを見て、ようやく人間の気配を感じ取った口サは、線路伝いにAガンダムを飛ばし、ようやく住居らしき人工建造物が見えた事に、胸を撫で下ろした。

やがて、線路の周囲に住居が増えると共に、線路が分岐し始め、この街の中心と思しき駅が見えてきた。

「Kimberley」の文字が、駅舎や道路標識に見え、十数両の青い車体を連ねた綺麗な列車が、小綺麗に整備されたホームに停

まっている。他のホームにも、列車待ちと思しき人影が、何人か見える。この地域では、比較的大き目の都市のようである。

「キンバリー？南アフリカ共和国か？」

どこかで聞いた覚えのある単語に、ロサが訝しげな顔をして、首を傾げた。

「何かの拍子に親父から聞いた地名なんだが……何だっけ、忘れちゃったな」

しかし、都市なら水は確保出来るとして、とりあえず今は、推進剤の補給が先決である。

街の上空を旋回して、着陸出来そうな場所を探す。町外れのゴルフ場の林を見つけ、その中にAガンダムを着陸させた後、ロサは、迷彩の布カバーを機体に被せて目隠しを済ませ、近くの線路伝いに歩き出した。

200mも歩かない内に、先程とは別の、小さな無人駅を見つけた。それを通り過ぎると、町の外から生活物資を運ぶトラックが行き交う大通りに出た。

ロサは更に市街地へと歩き、ガソリンスタンドやトラックステーション等の、液体水素を扱っているような店を探すことにした。燃料電池動力の車も増えているから、大きめの都市なら、探せばきつと見つかる筈だ。

ロサがそう思った矢先、自動小銃（携帯用の機関銃）を持った数人の男達が、ロサを取り囲む様に立ち塞がった。160cmに満たないロサの目線からは、道の真ん中に突然壁が出来たような光景に見えた。

街の周辺の環境に合わせたものと思われる、カーキ（土色）系迷彩服に、同色のベレー帽。一目では何処の軍の人間か、判断はつかない。だが、全員が身長2m以上の大男。それぞれが、生身での戦争を経験した現役兵なのだろう、独特の「死線を潜り抜けてきた者の雰囲気」が感じられる。言葉で表現するとしたら、「死臭」と言えば良いだろうか。

「ガーゴイル隊・Aガンダムのパイロット、ロサ」ヒシモトだな？」

男達の一人が、遙か上から見下ろすようにロサの顔を見て、英語で尋ねてきた。その声は、殺気こそ感じられないが、有無を言わせぬ威圧感がこもっている。

その威圧感に、ロサは一瞬身構えたが、誰一人として銃を向けて来ないところを見ると、敵意は無いようである。それに気づいたロサは、警戒こそ解かないものの、銃を抜かずに落ち着いて頷いた。多少は英語でも、聞き取る事は出来る。

「我々に同行しろ」

周囲の民間人が不安げな表情で、遠巻きにこちらを見ているのが、男達の壁の隙間から、あちこちに見えている。

自動小銃を持ったこの人数相手では、自分はともかく、抵抗すれば周囲の民間人が巻き込まれ、只では済まないだろう。そう考えたロサは、抵抗する事を諦め、大人しくついていく事にした。

抵抗するにしても、アジトまで連行してくれるのなら、そこで抵抗した方が、遥かに周囲への被害は少ない。そこまで考えた後、もう一度ロサは無言で頷いた。

ロサも銃を持っている事は、見れば判る筈だが、男達が銃を奪おうとはせず、そのまま歩き出した。その様子から察するに、連邦軍の人間かもしれないと、ロサは多少の安心感を持ち始めていた。上手くいけば、推進剤の補給も受けられるように、手配出来るかも知れない。

そう考えたロサは、思い切って、隣を歩く男の一人に尋ねてみた。

「連邦軍の人間か？」

男は一瞬ロサの顔を見ただけで、言葉は発しなかった。ロサは、それを肯定の返事だと思ふ事にして、警戒を解いた。

「青い綺麗な列車」こと「ブルートレイン（ギネスブックに掲載されている世界一の豪華列車）」が停車していた大きな駅の傍らに、彼らの服装と同じカーキ迷彩で塗装された、如何にも軍用車然とした「ウニモグ（ベントツ製の軍用作業車）」が無造作に停められている。

日本の消防庁にある、耐熱装甲を持つ耐熱救助車の、赤色灯を外して塗り替えたもの、と表現するのが適切なウニモグにロサが乗ると、後部の荷物置き場には、見慣れない医療機器のようなものが、雑然と積まれている。どうやら、緊急時の簡易救急車としての役割もあるらしい。

動き出してから数分で、「West End」と書かれた標識を通過後、雑木林の中を分け入るように入っていく。

揺れ加減の変化に、小さな窓からロサが覗くと、どうやら原生林を公園として管理している土地のようだった。まだ昼間なのに鬱蒼と



しているが、目線の高さに葉が見えないところをみると、かなり背の高い木ばかりが生い茂っている区画なのだろう。

その後、やはり数分間で、車は小さな鉄扉の前で止められ、ロサはその中へ案内された。その中が地球連邦軍の本部である事に、ロサはまだ、この時点では気付いていなかった。

地球連邦軍・キンバリー総司令部の内部は、予定外のガンダム地球圏再突入をキャッチした事が原因で、かなり騒々しくなっていた。まるで映画の中の、戦闘中のアメリカ国防総省を彷彿とさせる騒ぎになっている。

その中の一室にロサが案内されると、どう見ても戦争は出来なさそうな、ロサよりも少しだけ背が高い、やや小太りの壮年期と思われる男が、それまで座っていた執務机から跳ね上がるように立ち上がり、いきなりロサを睨み付けた。

「こんな所で、何を勝手な行動を取っている！？ロサ」ヒシモト！

執務机越しに、「小太りの男」とい連邦軍総司令官・カール・ロズベルグは、地球にいる筈の無いAガンダムのパイロットに向かって、苛立ちを隠さず怒鳴りつけた。

「ガーゴイル隊は、シャインリバーから直接スウィートウォーターを叩くよう指示していた筈だろう！なぜ貴様がここに居る！？」

ロサは、このように上から目線で物を言われる事は、一番嫌いである。いきなりの罵声に、むっとした表情を露わにして、わざと敬語を使わずに言い返した。

「こんな所に好きで来たんじゃないよ。ロードとの交戦中に、気がついたら重力に引き込まれていたんだ」

「その言葉遣いは何だ！そんな事だから、たかがテロ組織の一つも潰せんのだろう！」

カールが吐き捨てる様に、また罵声を浴びせる。だが、ロサも負けではない。

「だったら俺みたいな民間人じゃなく、軍の正規パイロットがガンダムを動かせば良いだろう。言っとくが、俺は軍属になった覚えは無いぜ」

ロサの言葉に、反論出来なくなったカールは、苛立ちがピークに達したらしく、ヒステリックな様子で声を荒げた。

「それが出来るのならば、とつくにやっている！貴様は我々の言うとおりに動いていれば良い！！」

考え無しに発せられたその言葉に、ロサが突然、強大な殺気を放つて反応した。

「てめえの言うとおりに動いて、何人の人間が死んだんだ……！？」

鬼のような形相になったロサの声が、まるで別人のように低くなる。そのあまりにも強い殺気に、周囲に居た男達が、慌ててロサに銃を向けた。それまでの、生意気に毒づくだけの雰囲気とは、明らかに異なるロサの威圧感に、カールが恐怖に満ちた表情で青ざめ、思わず後ずさりした。

目の前で両親の仇を取り逃がし、復讐も果たせなかったロサの、やり場の無かった怒りが解放されてしまい、その矛先が向いているのである。ロサにしてみれば、簡単に怒りが収まる筈も無い。

「親父が撃墜されて直ぐに乗せてくれていれば、もっと早く戦争なんて終わらせられただろうが！フローラ達の孤児院だって、倒壊なんかせずに済んだんだ！！」

ロサの両の拳が、目の前の執務机の天板を捉えた。だが、八つ当たりでしかない事は、ロサにも分かっていたのだろう。乾いた音が室

内に響いただけで、いつぞやのように、木の机が破壊されるような事は無かった。握られたままの拳が、無力感に苛まれ続けた苦しみに、机の上で震えだした。

「結局、俺をガーゴイルに乗せるなら……何で、もっと早く乗せてくれなかったんだ……!!」

気持ちの昂りを抑え切れなくなったロサが、震える声で八つ当たりするように叫び、嗚咽を堪えながら、唇を噛んだ。力なく振り上げられた拳が、もう一度机の上に振り下ろされ、鈍い音を立てた。

今更、誰に言っても変わらない事は、ロサには解っていた。当時の立場で、それぞれがどうしようも無かった事も、理解している。だが、話しているうちに、無理矢理抑え込めていた気持ちが、堰を切つて止まらなくなってしまったのである。

その様子に、周囲に居た男達が全て、銃を下ろした。15歳のロサの心で、よくここまで抑え込んでいたと、誰もが二の句を失った表情でロサを見た。

「……気持ちは解らんではないが、我々は公設軍隊だ。一個人の感情を、いちいち汲み取って動く訳にはいかん。例えハートレイ大佐の息子と言えど、例外は認められん。例外を一度認めてしまえば、更なる例外を生んでしまう。軍に限らず、公務とは、そういうものなのだ。その為に、公務には例外無く規律というものが存在してい

る」

俯いたままのロサを見ながら、諭すようにカールが言った。

だがロサも、軍人の息子である。今更、分かり切っている事を説明されたところで、火に油を注がれた気持ちにしかならない。

今は、ただ気持ちを聞くだけにしておきたかった。無力感に苛まれた自分の悔しさを、受け止めるだけにしておきたかった。自分が求めている反応は、ここではしてもらえない。そう感じたロサの決断は、瞬時に出た。

”やはり、俺の居場所は、ここじゃない。俺が居るべき場所は、ガールゴイル……フローラやレイラ姉ちゃんが居る場所だ……！！”

これ以上、こいつと議論しても無駄。とりあえず、ガールゴイルに戻らなければ話が始まらない、そう感じたのである。

顔を上げたロサが、気持ちを落ち着けるよう自分に言い聞かせ、深呼吸した後、再びカールと向き合う。

「Aガンダムバーニアでも、重力に引きずり込まれた。どうやってガールゴイルに戻ればいいのか、方法を教えて貰いたい」

「ニューヨークのJ・F・ケネディ空港に、シャトルを打ち上げる設備がある。モビルスーツを載せられるシャトルは、他に空きが無い」

「どつやって連絡すれば良い？」

「こちらで手配はする。これ以上、余計な仕事を増やすな」

相変わらずカールは苛立ちを隠さない。それを敢えて無視して、睨むような表情のまま、ロサが尋ねた。

「ここからニューヨークへ飛ぶとなると、そこまでの推進剤が足りない。補給を頼みたい」

「キンバリー中央駅は解るか？」

ロサの表情に、やや引き攣った表情でカールが尋ねたのに対し、少し考えたロサの表情が、落ち着きを取り戻した。

「青い綺麗な列車が停まっていた駅の事か？」

「青い列車?……」「ブルートレイン」の事か?そうだ。そこから南へ向かう大通り沿いに、空港が有る。そこで補給を受けられるよう、手配をしておく」

通信連絡の準備をしようと、カールがロサに背を向けた。

「わかった。その空港へ行けば良いんだな?」

「補給が済んだら、直ちにニューヨークへ向かえ。もたもたしている時間は無い」

「了解。車に乗せられた駅までの、帰り道が判らない。道案内を一人貸して欲しい」

ロサの言葉にカールが振り向き、ドアの近くに居た男の一人に目配せをした。その男が、再びロサを車に案内し、Aガンダムまで連れて行く事になった。今度は、ロサは助手席に乗り込んだ。

来る時には窓が小さい後部だったため気付かなかったが、町の中には美しい教会や森があり、とても軍事組織の中枢がある町には見えなかった。日焼けした現地の人間の混じって、観光客と思しき白人や、アジア系の外国人の姿も多い。

「綺麗な町だね」

ロサは側面の窓を見ながら、運転中の男に話しかけたが、男は何も言わなかった。丁度、件の「ブルートレイン」が駅から発車していった。先頭のディーゼル機関車が、綺麗な車体に似合わぬ黒煙を上げながら加速していく。その上空を、ボーイング737クラスの、小さな旅客機が通過した。これから、ロサも向かう空港に着陸する便だろう。

「こんな景勝地で戦闘にならないように、さっさとお暇しないとな」

ロサが、真面目な表情でそう言った直後、最初に乗せられた駅前広場に車が着いた。

「ありがとう。助かったよ」

礼を言って、ロサは車を降り、Aガンダムを降りた林へと向かった。

空港へ向かってAガンダムを離陸させ、万一の戦闘に備えて、出来るだけ中心街を避けながら、町外れの外郭沿いを飛行させる。目印となる中央駅の上空を通過し、空港への道路に差し掛かった時だった。



突如、数機のモビルスーツが、Aガンダムを狙撃してきた。ドダイ改に乗った、黄色い色の砂漠用のキラ・ドーガである。その機体を判別したロサが、思わず顔をしかめ、舌打ちした。

「地球にもロード軍の分子が居たのか！？まずい、街から離れないと、そつちに被害が出る！！」

ロサは街から離れようと、Aガンダムを急上昇させるが、推進剤は残り少ない。何しろ、重力に逆らおうとした際に、通常なら有り得ない噴かし方をした為、限りなくゼロに近い残量しか無い筈である。

案の定、500mも上昇しない内に、推進剤の残量計がEを指し始めた。空力的に滑空程度は出来なくは無いが、これ以上高度を取れば、万一墜落した時に、大変な事になる。

仕方なく、上昇途中でAガンダムを变形させ、ビームライフルで狙撃する。確実に当てて2機を撃墜するものの、ここでライフルも弾切れになってしまった。

ファンネルも落下前に使い切っているので、残る武器はビームサーベルしか無い。

万一、空港が狙撃されたら、シャトルまで辿り着けず、ガーゴイル

に戻れなくなる。と言って、草原を逃げ回れば自分の居場所が判らなくなるし、相手から丸見えになり、狙いたい放題になってしまう。選択肢を考えながら逃げるうちに、空港への進路を塞がれてしまい、やむを得ないと判断したロサは、再び機体を飛行機型に変形させて、街の方角へと逃げ出した。キラ・ドーガもそれを追い、街中へと追撃を開始した。

先程の「West End」の上空に差し掛かった途端、別の方角からAガンダムに向けてビームが走った。

「くっ……！援軍だと!？」

慌てて機体を左右に振り、辛うじてかわしたロサが、相手の機種を見て焦りだす。

「ギャプランかよ!？ちいつ、厄介なものを……!!」

ガンダムと同じく飛行機型に変形可能な、3機の新型モビルアーマー「バーチカル（ギャプランの派生機種）」と残りのキラ・ドーガが、執拗にAガンダムを追撃する。

ビームライフルや機銃掃射の流れ弾が、先ほどの連邦軍本部の鉄扉

を直撃し、その周囲に幾つか在ったトーチカ（監視用の見張り台）のガラスが、次々に飛び散った。

だが、ビームサーベルしか武器が無いロサも、敵の弾が尽きるまで、逃げ回るしか無い。基地の破損に構っている余裕など、ある筈も無い。広い公園の上空を、急上昇や急旋回を繰り返しながら、ひたすら弾切れを待つ。

やがて敵からの狙撃も止み、各機がビームサーベルを抜いて、ガンダムに斬り掛かり始めた。どうやら、相手も乱射を続けていたため、弾切れになったようである。

ロサは、Aガンダムを再びモビルスーツ形態に変形させて、森の中に急降下し、身を隠した。先ほど連れて来られたばかりだから、多少は状況も把握している。公園内は、幸いにも枝の高い木ばかりで、葉の動きで上空の敵に位置を察知される事は無い。小刻みに移動しながら、着地の際の隙を突いて、ビームサーベルで斬りかかる作戦に出た。

街中に戦闘開始の警報サイレンが鳴り響く中、Aガンダムを追って、ロード軍のモビルスーツ隊も、森の中に降下してきた。

着地する瞬間、姿勢制御に注意する為に来る一瞬の隙を突き、1機のキラ・ドーガを串刺しにする。しかし、不意打ちだから、爆発しないように刺せる程の余裕は無い。

Aガンダムが離れた途端にキラ・ドーガは爆発し、残りの敵機に位置を察知されてしまった。ビームサーベルで木々を切り倒しながら、他の敵機が一斉に、Aガンダムに襲い掛かる。

「重力下で負けるもんかよ!!」

言葉とは裏腹の、全く余裕の無い表情でロサが叫んだ後、残り少ない推進剤を気にしながら、上へ飛び出して死角から急襲、また森へという動きを繰り返しつつ、何とか残り2機まで減らした。

Aガンダムの足元では、1機が爆発する毎に地下基地の天井に穴が開き、さらに穴が開いた所へ別の爆風が吹き込んで、芋づる式に被害が広がっていく。これが繰り返され、最後の1機まで追い詰めた頃には、地下基地は壊滅的な被害を受けていた。

その最後の1機が、まだ機銃掃射を出来るだけの弾を残していた。木々の隙間を移動するAガンダムを見つけるなり、ザクマシンガンを連射し始める。

「ちいつ！まだ撃てる奴が居たのかよ!？」

再び ガンダムが森から上空へと飛び出すと、キラ・ドーガはその

動きに合わせてしつこく連射してくる。引き金を引きっぱなしにしている様子を見ると、次々に味方を撃墜されて、冷静さを失っているのだろう。

ガンダムが旋回を続けて、全てかわしていくうちに、連射が止んだ。すかさずロサが上空から斬りかかる。ギラ・ドーガがAガンダムに銃口を向けるが、やはり弾切れになったようだ。

「おおおおっ！！」

ロサの雄叫びと共に、ギラ・ドーガが串刺しになる。これが爆発し、ようやく戦闘は終了した。

幸い公園が広がった事もあり、世間体としては森を荒らしたただけで済んだのだが、連邦軍本部は、もはや原型を留めていない程の惨状だった。

トーチカの割れた窓から、原型を留めていないコンピューターの箱が、べったりと血で染まっているのが、あちこちに見える。その光景は、母が圧死したシャインリバーの自宅を思い起こさせた。思わずロサの背筋に、悪寒が走る。

「また俺のせいで人が死んだ……」

青ざめた顔で呟いた後、何度となく頭を振り、気持ちを落ち着ける。連邦政府の圧政自体は、ロサ自身も気に入らなかったが、無抵抗の者が目の前で多数死んだ凄惨さに、ロサは神妙な顔で胸の前で十字を切った。

その後、ロサはすぐに空港へ向かい、推進剤の補給を済ませ、ケネディ空港に直行する事にした。だが、キンバリーの空港は通常の旅客空港なので、武器関係のエネルギー補給は出来ない上、宇宙用の酸化剤である液体酸素も補給出来ない。ビームサーベルも、このままでは、いつエネルギー切れになるか判らない状況である。

地球上にも連邦軍の拠点は幾つか在る筈だが、結果的に自分のせいで本部が壊滅してしまった以上、素直に補給に応じてくれるとは思えない。

「さつさとガーゴイルに戻らないと、いつ落とされるか分からない。頼むから、これ以上は来ないでくれよ……!!」

ロサが祈るように呟いた後、以前の戦争で破壊され、復興時に天蓋が撤去されたダカールの上空を通過した。無線を傍受専用にして盗聴していると、キリマンジャロの部隊が、今になってキンバリーへ向かい出したようだった。

「まったく……！いつもいつも遅えんだよ！軍がお役所仕事じゃ駄目

だって、連邦はいつになったら分かるんだ!？」

忌々しげにロサが呟いたが、今更どうする事も出来ず、ひたすらAガンダムを飛ばし続けるしか無い。

主戦力を残骸に頼るロード軍が、維持費が高くつく水中用や潜水艦までは持っていないだろうと、大西洋上を出来るだけ直線的に飛ばし、急いでAガンダムをケネディ空港に向かわせる。

バミューダを通過する頃には、いくら西へ向かっているとは言えど、日が沈みつつあった。摩天楼の明かりが徐々に見え始めたのを見て、ロサが思い出したように呟いた。

「そういえば、ニューヨークの第2司令部に、親父の知り合いが居たな……」

確か、ダニエル・キリスという名前だったと思う。ニューヨークの連邦軍第2司令部の、指揮官をしているという人物だった。

ロサがまだ幼く地球にいた頃、よくハートレイを訪ねて来ていた記憶がある。久しく会っていないが、元気だろうか。

「会う事になるかも知れないな」

ロサは、ハートレイとダニエルが談笑する、幼い頃の記憶を辿りながら、呟いた。



## 11・理想（前書き）

キンバリーで燃料補給を終え、シャトルを打ち上げる設備が有ると  
いうJ・F・ケネディ空港に向かったロサ。

そこで、ロサを待っていた人物とは。

## 11・理想

ニューヨークの連邦軍第二司令部は、パニックに近い状態で、情報収集に追われていた。

キンバリーの連邦軍総本部が、モビルスーツ同士の戦闘で壊滅し、しかもAガンダムが絡んでいたというのだから当然である。

只でさえ見つけにくい筈の、緑豊かな公園の地下にある基地が、何故発見され壊滅したのか、ここに居る者には、まるで見当が付かなかった。

「そういえば、直前にAガンダムをシャトルで打ち上げるように、指示を受けていたが……」

騒々しいオフィスの片隅で、柔和な雰囲気、面長の顔を、訝しげな表情に変えて、そう呟いた男。事実上の総司令官代理となる、第二司令部の総責任者・ダニエル・キリスは、その関連性について考え始めていた。

「まさかとは思うが、Aガンダムが手を引いていたという訳ではあるまいな……？」

散髪に行く暇も無くなり、少し伸びた柔らかめの金髪をかき上げ、碧眼を細めたダニエルは、良からぬ考えが浮かび、厳しい表情で眉間に皺を寄せた。

万が一、それが事実であるならば、Aガンダムをスパイ容疑で撃墜するしかない。しかし、ハートレイにしか動かせないと言われた機体を使いこなし、ロードを追い返した程の腕である。簡単に撃墜できるとも思えない。

「本人に事情を聞いてみるのが、一番か」

このまま此处で、机上の空論を続けても仕方が無いと感じて、ダニエルが溜め息をつきながら、そう呟いた時、Aガンダムがケネディ空港付近に飛来したとの連絡が入った。

この時点では、まだAガンダムのパイロットがロサである事を、ダニエルは知らされていなかった。

「パイロットと話をしたい。到着後に一旦空港ロビーに寄るように、パイロットに伝える。私も空港に向かう」

ダニエルは指示を出し、自らも空港に向かう準備を始めた。170cm程の身長だが、オーダーメイドの黒スーツのせいもあるのか、非常に均整の取れた体によく似合う、ベージュのトレンチコートを

羽織り、車へと向かった。

ロサは、出来るだけ街に近づかないように注意しながら海上を飛行して、港の傍らに在る、J・F・ケネディ空港にAガンダムを接近させた。

Aガンダムはランディングギアが車輪ではなく、スノーモービルの操舵脚のようになっていたため、通常の滑走路は使えない。やむを得ず滑走路を閉鎖してもらい、垂直離着陸で着陸する事になった。

固定翼機の垂直離着陸は、ヘリコプターなどの回転翼と違い燃料効率が非常に悪い上、耳を劈くような騒音が出る為、ロサはあまりやりたくは無かったのだが、ガーゴイルに戻る為には、この際、致し方ない。

カラフルな各国の旅客機が、旅客ターミナルにずらりと並ぶ中、戦闘機然としたAガンダムは、非常に目立つ存在だった。

軍による滑走路閉鎖を聞きつけ、ターミナルの屋上展望台から、超望遠レンズでAガンダムの航空機形態を撮影しようと、数人の飛行機マニアが、カメラを構えているのが見える。無論、狙っている機体がモビルスーツとは思ってもよらず、新型のステルス戦闘機か何か

と思い込んでいるのだろう。

管制塔からの指示に従い、通常の航空機が並ぶ区画から少し離れた、シャトル発射設備前の空きスペースに駐機する。

『駐機を終えたら、旅客ターミナルの到着ロビーへ来るように。連邦軍の関係者が、話をしたいそうだな』

「軍の関係者？」

管制からの無線連絡に、ロサはおうむ返しに言ってから少し考えたが、ダニエル以外に用のありそうな人間は思い浮かばない。

考えるより会った方が早いだろうと、「了解」とだけ返事をし、念のため拳銃を用意して、ロサは到着ロビーへ向かった。

到着ロビーには、ダニエルが一人でロサを待っていた。互いに、たった一人で広大な場所に来ているので、分からない筈は無い。

だが、到着ロビーに姿を表した、どう見ても高校を出ていないであろう少年に、ダニエルが戸惑う。

「子供……?」

ヘルメットを腕に掛け、地球では必要ない筈のパイロットスーツを着た少年。他には誰も居ないという事は、間違いなくガンダムのパイロットなのか。戸惑いながらも、ダニエルがロサに声をかけた。

「君がガンダムのパイロットか?」

「ダニエルさんですか?」

穏やかな笑顔で、自分の名前を尋ねる少年に、ダニエルが驚き、目を丸くした。

「なぜ私の名前を?」

「俺はロサ＝ヒシモト。ハートレイの息子です」

ダニエルは、ロサが宇宙に上がってから顔を合わせていないため、気付かなかったのだが、名前を聞いて合点がいったようだ。ダニエルが思わず大きく頷く。

「あのロサか!大きくなっただんだな!」

「」無沙汰しています」

互いに笑みを浮かべたが、ダニエルが直ぐに笑みを消した。

「時候の挨拶はこの辺にしておこう。本部の壊滅についての話を聞こうか」

ダニエルの言葉に、ロサも真面目な顔になり、頷いた。

「キンバリーの件ですね」

ロサの言葉に、ダニエルが頷き、やや険しい顔になる。恐らく、ロサでなければ、かなり厳しい口調で問い詰められていたであろう。

「Aガンダムが、ロード革命戦線の手引きをした疑いがある」

やはりな、という表情で、ロサは軽く首を横に振った。予想どおりの質問に、落ち着いて答える。

「偶然です。他に逃げ場がありませんでした。エネルギーも無かつ

たし、ビームサーベル以外に武器が無かった。あれじゃ逃げ回るしかありません。街への被害を最小限に抑えつつ俺が生き延びるには、あの森に逃げ込むしかなかった。俺だって、あんな結果になるとは思っていませんでした」

ロサ自身も、連れて行かれるまでは、本部の正確な位置を知っていた訳ではない。キンバリーと言う地名自体を、忘れていた程である。わざとかどうかと問われれば、そう答えるしか無い。

全て、やましい部分も特に無い事実だから、ロサが落ち着いた話し方であるのが、ダニエルがロサを疑わずに済む、唯一の判断材料だった。

「本当にわざとでは無いのだな？」

ダニエルが念を押す。口調から、疑っている訳では無いが、念のため尋ねている、といった雰囲気を感じられ、ロサの表情も少し安堵していた。

「いまAガンダムの飛行記録や、戦闘画像を調べて貰っても結構です。ビームサーベルだって、あとの位まで戦闘に耐えられるか分からない。とにかく、武器関係のエネルギーが、全然無いんです」

「調べさせてもらおうよ。それが、私の今の任務なのでな」



ロサが頷き、2人がロビーから移動した。ロサがAガンダムのハッチを開放し、ダニエルをコックピットへ案内した。

ダニエルが慣れた手つきで、飛行記録や戦闘のCG画像を再生して確認していく。ロサがその傍らで、冷静な顔で操作を見守る。

”ダニエルさん、随分手慣れてるな。Aガンダムを操作した事が有るのかな？”

ロサが不思議に思っている間に、ダニエルは手際良く操作を済ませ、Aガンダムがロード迎撃の為にガーゴイルを出撃してから、今までの飛行記録とCGを各々確認し、納得した様子で、ロサを促してAガンダムから降りた。

2人の傍らの滑走路を、轟音を響かせながら、国際線の旅客機が離陸していく。いつの間にか、滑走路の閉鎖は解除されていたようだ。既に辺りは日が沈み、離陸した機体のあちこちで、衝突防止灯火が点滅している。

「確かに、生きて此処まで辿り着いたのが不思議なくらい、丸腰だな」

呆れた様な声を出して、ダニエルが口サを見た。その様子に、口サも思わず苦笑する。

ロードと交戦し、更に弾切れの状態で、ビーム砲2門を腕に内蔵しているギャプラン3機を全て撃墜したとなれば、誰もが呆れるか驚くかで、言葉を失うのが普通の反応だろう。

しかも、キリマンジャロの部隊から、民間人には怪我人すら出なかったと言う、信じられないような報告が来ていた。通常のパイロットなら、まず有り得ない話である。

「お解り頂けて安心しました」

「しかし、他にも戦いやすい場所があったらどう」

ダニエルが、やや咎めるような口調で言ったのに対し、口サはあくまでも落ち着いていた。

「草原じゃ丸見えだし、枝の低い木の林だと、枝をなぎ倒しながら移動する事になるから、位置を教えるのと同じで意味が無い。背が高く隠れやすい木があると分かるのが、あの公園しかなかった。土地勘が無い以上、あの公園以外では無理です」

「成程な……一般市民を巻き込まない為には、止むを得なかったか。分かった。しかし完全に疑いが晴れた訳では無い。暫くは逐一、行動をガーゴイルから報告して貰う事になる。いいな？」

ダニエルの言葉に、表情を曇らせながらも、ロサが頷いた。

「状況が状況ですから、止むを得ません」

「モビルスーツ形態に変形して、コンベアでシャトルにAガンダムを納めてくれ。乗ったまま待機していれば、1時間後に発射する」

ダニエルが、すぐ横のコンベアを見ながら言った。ロサが同じ方向を見ながら頷く。

「了解。今後の連邦の指揮系統は、どうなるんです？」

「暫くはニューヨークが暫定的に指揮を執る。私の責任の下でな」

「解りました」

「ここでの戦闘は避けてくれよ？もしそうになったら、Aガンダムは裏切り者として、総攻撃をかけなければならぬからな」

「使えるかどうか分からないビームサーベルだけじゃ、ひとたりも有りませんね」

ロサが肩をすくめて見せると、ダニエルが目を細めた。その仕草に、ハートレイの面影を見たのだろう。

「ハートレイの分まで生き延びるよ、ロサ」

そう言ったダニエルの声は、上官としては無く、息子を慈しむような声だった。ダニエルの表情を見上げ、ロサも穏やかな笑みを浮かべる。

「はい。ダニエルさんも、」無事で「

ロサの言葉に頷いたダニエルが、到着ロビーへと引き上げて行った。その背中を見送り、ロサはAガンダムの特ラップを上がり、機体をシャトルへ納める準備を始めた。

” 変わって無いな、ダニエルさん”

今まで、誰かを頼る事を良しとする生き方をしなかったロサだが、

自分が信じていた連邦軍の者たちが、昔と変わっていない安心感に、無意識に笑みと安堵の言葉が漏れた。

Aガンダムをコンベアに乗せ、シャトルへの積載を済ませたロサは、Aガンダムのコックピットに座ったまま、墜落までの一連の流れを思い出していた。

「ロードを目の前にして、深追いし過ぎだな。何しろ、完全に頭に血が昇っていたからな」

レオンの制止に従っていれば、今回のような状況は免れる事が出来ただろう。

だが、もう一步でロードを倒す事が出来る所までは、事実、追い詰めていた。決して間違っても居なかった筈である。

「どっちが正しかったんだろうな？」

ロードの側近の中でも指折りの実力者と思われる、ベリックのリーダー機を巻き込んで、そちらを倒す事は出来た。その意味では、正解だったと言えるだろう。

だが、本部の壊滅という大失態を招き、なおかつシャトルの発射と

いう手間を増やしてしまった。

ロードならともかく、あの1機を倒す為に、ここまでする価値が有つただろうか？

「恐らく、そこまでの価値は、無かつただろうな」

神妙な面持ちで、ロサが反芻していく。

今回の一件で判ったのは、ロード革命戦線に参加しているパイロットは、あくまでも自分がロードに付き従う事こそが正しく、ロード革命戦線こそが民衆を解放できるのだという確固たる信念を持っている、という事である。

ロードの為に、命を捨てる事も辞さないその覚悟は、それはそれで立派だとは思いつし、決してロサには真似が出来ない。

だが人を傷つけ、自分の命を捨ててまで信念を貫くという事に、果たして価値があるのだろうか？

生きて体が動いてこそ、自分の手で理想を實現出来ると信じるロサには、到底理解しがたい感性である。

自分が死んだ後、本当に理想が実現されているかどうかなど、誰にも分からない。それなら自分の手で実現する為の努力をする方が、よほど苦勞が無い。ロサはそう考えていた。

「スウィート・ウォーターの独立を認めなければ、永遠に戦争は終わらないのかもしれない……」

相容れないものをお互いに持っている以上、どちらかが妥協点を見出さなければ、この戦争は終わる事は無い……ロサは、そんな事を考え始めていた。

だが、この時点では、ロサはスウィート・ウォーターが個人所有の独立コロニーである事は、忘れていた。

航空無線の通信回線を開き、管制塔でシャトルの発射を見届けようと待機していたダニエルに繋いで貰う。

『どづした、ロサ』

「今後は、ダニエルさんが連邦政府の中心人物になるんですよね？」

『暫定的に、ではあるがな』

無線越しに、ダニエルが苦笑する。

「この戦争、もし連邦が制圧しても、スウィート・ウォーターの独立を認めなければ、また同じ事の繰り返しになると思っています」

ロサの言葉に、ダニエルの声が険しくなる。

『それは無理だ、そんな事をすれば他のコロニーまで独立運動が波及する。そうなれば、いくら連邦軍でも手に負えなくなる』

まだダニエルも、スウィート・ウォーターが既に独立している事を忘れたまま、話をしている。

「連邦政府が、何故コロニーを管理し続けなければならないんです？ どうせ赤字続きなんだし、そろそろ放っておいても良いんじゃないんですか？」

『つまり、コロニー毎の独立採算にしると？』

ロサの言葉の意味を納得し、ダニエルの声が元に戻る。



「自分達の力だけでは、経済的にもたないという事が分ければ、コロニーの連中も大人しく連邦に従うでしょう」

『もし、もたせられる様に、なってしまうたら?』

「各コロニーが、それぞれに軍を持てば良い。ひとつのコロニーが侵略されれば、全コロニーから攻撃されるように協定を結ばせれば、互いに簡単には侵略戦争は出来ません」

『地球が一斉に襲われたら、どうする?』

当然のダニエルの疑問に、ロサは即答した。

「基本的に、コロニーには兵器に使えるような、鉱物資源や燃料資源は無い。地球に拠点を置く者に、負ける道理は有りません」

ダニエルが言葉に詰まる。返事が無い事を確認し、ロサが言葉を続ける。

「何より、この戦争では、連邦軍に正義が見えない。たとえ建前だけであったとしても、スペースノイドを納得させられるだけの大義名分がなければ、いずれまた同じ事の繰り返しになる事は、目に見

えています。自分の家族を殺したかもしれない人間と、隣人として共生しろと言われても、今の状況では、ある程度は連邦が譲歩を見せなければ無理です。事実、お袋が戦闘に巻き込まれた直後の俺も、そうだった。お袋を死なせたパイロットを、恨みすらした時期も、確かに有った。でも、それじゃダメなんです。互いに許し合う為の、きっかけを作らなきゃいけない。今、それが出来るのは、連邦軍側なんだ」

『しかし、譲歩といつても、譲れるものと譲れないものがある』

真つ向から反論する言葉が見つからず、困惑した声でダニエルが答えた。現在のダニエルには、連邦軍の総司令官としての立場がある。周囲まで筒抜けになる航空無線で、下手な事は言えない。ロサも、それは重々承知していた。

「俺も昔は、親父の事を正義を守るヒーローみたいに思ってた。でも実際に戦争に参加して、それは違うと思うようになりました。お互いに必ず、何か大切なものを奪われているんですよ。それが互いに譲り合い、肩を寄せ合って生きていくのなら、どこかで譲歩する一線を設けなければ、また戦争が始まってしまふ。戦争を起こす火種を連邦軍が作っているのなら、連邦軍の存在そのものが平和の障害になっている事になる。今の状態のままの連邦軍が続くなら、次に戦争が起こったら、俺もレジスタンス側に付かざるを得ないですよ」

真つ向から連邦軍の在り方を、しかも正論で否定され、ダニエルが

返答に詰まった。ロサが、更に言葉を続ける。

「人間には、生まれ持った器というものがあります。連邦政府が、宇宙の全てを管理し切れているか。実際には、そうではないと思う。それなら、管理しきれない範囲は、管理できる人間に任せた方が、八方全てが丸く収まるんじゃないかと思うんです」

『それは、あくまでも理想論だろう』

「理想と現実が噛み合わないこと位は、俺だって分かっています。でも、少しでも理想に近づこうと努力するから、人は成長し、進化する。理想が無ければ、人は進化も、成長もする事は出来ない。違いますか？」

連邦政府の圧政に対し、長らく自分が疑問を持っていた事を、いま正にロサに代弁されてしまい、ダニエルは言葉を失った。ロサの言葉を否定する要素など、一片も無いのである。

『戦争に勝たなければ、発言権も持つ事は許されない。私が発言権を持てるように、努力してくれ』

「善処します」

『善処では困るな。必ず勝ちますと言って貰わないと』

ダニエルの挑発めいた発言に、ロサが苦笑した。

「かなり無茶な事も言っていますが、宜しく願います」

『出来る限りの事は、させて貰う』

やがて、シャトルのエンジンが稼動し出した。貨物用シャトルのため、積載されているAガンダムのコックピットにも、水素エンジンの轟音が響き渡る。

『無線を切つて下さい。航行が出来なくなる』

機長が無線に割り込んだ。

「あつ……失礼。では、ダニエルさん、ご無事で」

『お前もな、ロサ』

ダニエルからの通信が切れた後、機長が無線で、ロサに念押しする

よつに尋ねた。

『フロンティアサイドのコロニー・テキサスで良いんですね?』

「ええ。お願いします」

返事をした後、ロサが無線を切り、目を閉じた。ひとときわ噴射音が大きくなった後、シャトルが発進した。

## 12・不安（前書き）

ロサが地球に墜落してから、丸一日が経過しようとしていた。

ワルザの奇襲の時から、ロサの存在に絶対的な安心感を持っていた  
フローラは、ロサの不在に、不安を隠しきれなくなっていた。

小説本文

## 12・不安

ロサが地球の重力に引き込まれて墜落した後、ガーゴイルの艦内は、当然ながら大騒ぎになっていた。

現在、Aガンダム以外の機体が、補助具も無しに大気圏に突入すれば、大気の摩擦熱に耐えきれずに燃え尽きてしまう。レオンがロサを止めた地点でも、重力に引き込まれるギリギリの範囲だった。

このため、一番近くで目撃したレオンと、隊長機用の高性能レーダーを積んでいたために気付いたレイラ、ケニー以外には、墜落前後の様子すら分からない状況だった。

「撃墜されたのか!？」

流石に、焦りと困惑を隠しきれずに、ブリッジでメッシが声を大きくするが、レオンも俯いて首を振るしかない。

「分からん……俺も限界まで近付いて、ロサを止めたんだが、ロードを目の前にして、聞こえていなかったんだろ。実際、撃墜寸前までは、ロードを追いつめていたからな。気持ちは分からんでは無いが……」

「被弾してなかったのか！？機体の制御はちゃんと出来ていたんだろうな！？」

「解りません。地球の重力に引き込まれて、墜落した事だけは確かみたいですが、それ以上の事は何も……」

レイラも、憶測で言う事しか出来ず、困惑した表情で答えた。

レイラとケニーが、レーダーを見て異変に気付いた時には、Aガンダムは既に自由落下を始めていて、ウェーブライダーに変形していた。現時点で、彼らに分かるのは、それだけである。

必死にバーニアを噴かしていた様にも見えただが、肉眼で辛うじて見える大きさだったから、もしかしたら、被弾した煙と見間違えた可能性もある。

何しろ、地球にバーニアを向けて落ちて行ったのだから、只事で無い事くらい、容易に想像は出来る。問題は、被弾していたか否か、ロサがきちんとコントロール出来る状態かどうかである。

何か言いたげに唇を噛むメッシに、流石のレオンも、弱々しい声しか出せない。



「俺がもつと早く止めていれば、こんな事には……」

「ロサが勝手に突撃したんだろう!? レオンが悪いんじゃない、ロサ自身のミスだ!」

苛立ちを隠さず怒鳴るメツシに、レオンはもはや言葉も出ず、黙り込んでしまった。

「頼むから、生きていてくれよ、ロサ……!! そうでなければ、ハートレイに顔向けが出来ないじゃないか……!!」

ブリッジの窓の外を見て、メツシが祈る様に呟いた。

地球からの連絡は、通信回線のあるキンバリーからしか入れる事が出来ず、そこが壊滅してしまったため、ロサの安否をニューヨークからガーゴイルに連絡を入れる事は、この時点では、出来なかったのである。これが、連邦軍の傲慢さのひとつだった。

「Aガンダム自体は、大気圏再突入に対応出来る機体だ。ロサの事だから、恐らく生きてはいるだろう。そう願うしかない。取り敢えず、パイロットは待機任務（緊急時に備えて、担当機体に一定時間乗っておく任務）の者以外は、休んでおけ。ロサが戻る場所が無いなんて事にならん様にな」

メッシが、慰めるように、居合わせた者の顔を見渡した。現時点では、他に出来る事が見当たらない。

「生きていれば、ロサもテキサスに向かう筈だ。パイロットは解散しろ。先行してロサを待つ、出せるだけの速度で航行を続ける。機関士、オーバーヒートしない範囲で、最大まで速度を上げる。エンジンの温度監視を怠るな……」

メッシがパイロット達から視線を外し、機関士や操舵手に指示を出し始めたのを見て、パイロット達が解散し、各自が複雑な表情で自室へと戻って行った。

その後、この日の配膳当番であったレイラを手伝い、食事の配膳を始めたフローラも、クルーと会う毎にぴりぴりした様子を見せられ、只事では無い雰囲気を感じ取っていた。

「レイラさん、何かあったんですか？艦内が、随分と殺気立ってると思うか……みんな、ぴりぴりしてるみたいですけど……」

他のパイロット達は、明らかに殺気立っていて、声をかけづらい雰囲気である。最も尋ねやすそうなレイラが、ちょうど食事の配膳を

担当する時になったので、フローラは手伝いがてら、やや不安げな表情で、声を潜めて尋ねた。

「作戦開始の直前は、いつもこんな感じよ。心配要らないわ」

フローラを安心させようと、レイラは落ち着いた声で微笑んだ。だが、フローラの不安げな声と表情は、変わらない。

「この前の出撃から、ロサの姿が見えないみたいですけど、何かあったんですか？」

「ロサは別行動の作戦で動いているから、暫くは戻れないわ。でも、大丈夫よ」

「本当ですか？」

不安と疑念の混じったフローラの視線に、レイラがもう一度微笑んだ。

「ええ」

「いつ頃、戻って来ます？」

「ロサが居ないと不安？」

レイラの質問に、フローラが言葉に詰まった。肯定してしまえば、ロサ以外のパイロットは当てにならないという解釈も出来るから、フローラなりに気を遣う部分があったのだろう。

「大丈夫よ。ロサがちゃんと戻って来れるように、居場所を作っておかなくちゃ。それが今のあなたの役割よ、フローラ？」

レイラが優しく諭すように言って、フローラの頭を撫でた。それでも、俯いたままのフローラの表情が変わらないのを見て、レイラが言葉を続ける。

「フローラがここに居る限り、ロサは必ず戻ってくるわ。だから、今の自分に出来る事を、しっかりこなしなさい。いいわね？」

レイラは、自分自身にも言い聞かせるように、あくまでも優しく、落ち着いた声で言った後、軽くフローラの肩を叩き、食事の配膳を再開した。

レイラについて行こうとしたフローラの目に、艦外の景色が見える小さな窓が見えた。その窓から見える無数の星を見ながら、フロ

ラは心の中でロサに呼び掛けてみた。

”ロサ、お願い。早く戻って来て。あなたが居ないと、ここに居るのが恐くて……”

「フローラ、どうしたの？」

レイラが心配そうな表情で、フローラの顔を覗き込んだ。

「あつ……すみません、大丈夫です」

我に返ったフローラが、取り繕うように作り笑いをした。その様子に、フローラの気持ちを察したレイラが溜め息をつき、諭すような口調で言った。

「少し、休んだ方が良いわ。後は私がやるから、部屋に戻って休みなさい」

「でも……私もちゃんと手伝わないと……」

フローラが困惑した表情を浮かべる。

ロサが居ないという不安で、フローラの心労も大きくなりつつあったのだが、真面目すぎる性格ゆえに、無理をしても自分の役割を果たそうとしてしまう。

今の彼女にとっては、他に出来る事が無いから、食事関係の仕事を外されると、艦を追い出されそうな気がして、休む事が恐かったのである。

その表情からフローラの気持ちを読み取ったレイラが、少し腰を屈めてフローラに視線を合わせ、微笑んだ。

「大丈夫。ガーゴイルのみんなは、あなたが笑顔で食事を持ってきてくれるのを、楽しみにしてるのよ？あなたが辛そうにしてると、みんなが心配するから、休みたい時はちゃんと行って、休みなさい。いいわね？」

「……はい。すみません、レイラさん……」

遠慮がちに頷き、俯いたまま廊下を歩いていくフローラの背中にも、不安から来る疲労の色が見え始めていた。それを見たレイラが、同情するように溜め息をついた。

「無理も無いか。只でさえ慣れない戦艦に乗せられてる上に、みんな

ながみんな、あんな顔をしてるんじゃない、不安にもなるよね……。おまけに、あの窮地から救ってくれたロサがこの場に居ないんじゃない、不安になるなっていう方が無理か……」

レイラが、フローラも見ていた窓を覗き込んだ。全速力で航行中の筈なのだが、相変わらず星の流れは、殆ど感じられなかった。

フロンティアサイドのコロニー・テキサスを目指す、ロサとAガンダムを乗せたシャトルの内部。

荷物室に積載中なので、シャトルの航行に支障しないよう、電波を出す機器は、完全に使えない。また、無駄な電力を消費しないよう、スクリーンの電源も手動で落としている為、Aガンダムのコックピット内は、暗闇に覆われている。

敵機の識別信号を受信するためのモニター画面だけが、暗いコックピットの中で、ロサの体をぼんやりと照らし出しているが、今のところ敵機の気配は無い。

「俺が居ない間に、ガーゴイルが襲われていなければ良いが……」

ロサはガーゴイルの事が気掛かりで仕方が無く、既に24時間以上睡眠は取れていない。だが、そちらが眠気を上回り、今まで疲れを感じていなかった。

現在、ロサを乗せたこのシャトルは、通常の民間輸送機と同じ、定期航路用のコースを辿っている。このコース上での戦闘は、南極条約の締結（公式作品「機動戦士ガンダム」を参照）以来、禁止されている。

また、シャトル自体も民間の輸送機であり、通常の航空機のように事業者のマーキングを付けているので、やはり協定上、狙撃は禁止されている。

だから、如何にスペースノイドの支持を得ていようと、このコースを戦場にすれば、ロード革命戦線はテロ組織であるという事を、自らの手で世間に曝してしまふようなもの。

それでは、いずれ支持が得られなくなり、組織が崩壊してしまうのは、自明の理。だから、世間体を考えるならば、ここが戦場になる事は無い筈である。

だが、戦争の協定は、破られるために有るようなもの。現に、停戦信号発信後に、ハートレイがロードに撃墜された前例がある。



それに、世間体としては、戦時中にたった一機のシャトルが狙撃された程度では、話題にもならないだろう。中身を知っていない限り、ロード軍に狙撃される事は無い筈だが、それでもバレた場合は、格好の標的である事は、間違いない。

現時点でのAガンダムは、只でさえ武器が無い。おまけに、液体水素の残量は余裕が有るものの、それを無酸素状態で燃烧させる為の酸化剤となる、液体酸素が殆ど無いから、事実上、戦闘は出来ないに等しい。

万一、こんな状況で複数の敵に襲われたりしたら、ひとたまりも無いだろう。もし、グリアラスとワルザが組んで出て来ようものなら、それこそ秒殺されてしまう。

「こんな時だけは、神様を信じるしか無いな。全く、都合の良い信者だ」

呆れたように呟いた後、ロサは自分の事を晒った。

” 案外、気が小さいんだな、俺……”

あの時、レオンがロサを止めたのは、単純に重力を気にしての事なのか、或いは、ロサがロードに執着し過ぎたと気付いての事なのかは、今となっては分からない。だが、レオンの言うとおりに大人し

く諦めていれば、恐らくこんな状況には、ならなかっただろう。

「経験者の言う事も、必要な時には聞くべきだという事か」

納得したように呟いた後、ロサは自分に呆れ、溜め息をついた。

「自分では冷静沈着な性格のつもりだったが、俺も、まだ若いんだな」

今までが普通の人生ではなかった為、考え方は年寄りじみている方だと、自分では思っていた。だが、目の前にロードが現れ、それを倒せば戦争が終わると直情的に動いて、気がつけば墓穴を掘っていた。改めて思い返せば、自分でも、子供じみているとしか言いようが無い。

「戻ったら、艦長にどやされるだろうな」

メッシの怒鳴り散らす顔が目には浮かび、ロサは思わず目を閉じた。

「静かだな」

ロサが宇宙空間に出るのは、モバイルスーツに乗っている時しか無い

から、基本的に、常に戦場である。静かな空間である筈が無い。戦場にならなければ、宇宙空間というのはこんなに静かなんだと、口サは改めて実感した。

しかし、少々静か過ぎる事に、まだ口サは気付いていなかった。そう、本来なら聞こえてくるべき筈の、エンジンの音が、聞こえてこないのである……。

### 13・受難（前書き）

ガーゴイルからの応援のお陰で、命拾いした連邦軍の戦艦「サラマ  
ンダー」。

順調に航行を続けて、ガーゴイルとの戦力の違いをぼやく余裕が  
出  
来  
つ  
つ  
あ  
っ  
た  
の  
だ  
が  
。

### 13・受難

ガーゴイルからの救助を受け、コロニー「ミランダ」で無事に修理を終えた連邦軍のクラップ級巡洋艦「サラマンダー」は、連邦軍の宇宙での拠点の一つである、サイド1のコロニー「ロンデニオン」に向かっていた。

巡洋艦とは、簡単に言えば、戦艦よりはやや小型で小回りが利く、戦闘可能な艦船。クラップ級とは、やはり最初に造られたクラップという名の艦船と同じ位の大きさ、という意味で、実際には、時代相応に装備や性能は変更されている。

サラマンダーは他の連邦軍艦船と同様、搭載モビルスーツは10機全てがジエガンである。ガンダムを積むガーゴイルが特殊でなのであって、性能や戦力的には、他と差して変わりはない。

ロンデニオンと同じくサイド1にあるスウィート・ウォーターを叩くには、最良の拠点となるロンデニオンには、本来の予定では、ガーゴイルと合流した後に向かう筈だった。

だが、ミランダで予定外のドック入りを余儀なくされ、更に今からガーゴイルが予定外のドック入りをする事になったため、少しでも革命軍の殲滅を急ぎたいというフォン・ブラウンの高官たちからの意向により、サラマンダーだけがロンデニオンに先行する事になったのである。

サラマンダーの艦長・ニック・フォーソンは、エンジンの状況をこまめに確認しながら、サラマンダーを予定通りに巡航させていた。

「今度は大丈夫のようだな」

ミランダからロンデニオンまでの、丁度4分の1の行程を無事に過ぎ、ニックは一安心して、海軍に準拠した制帽を取った。髪の毛は多いのだが、苦勞が多かったのか歳なのか、短かめの黒い髪と白髪が半々くらいになっている。体格は中肉中背といったところだが、メッシに比べるとやや締まりが無い……失礼、ややふくよかな体格に見える。

「全く……同じ艦隊なのに、何で、ああも戦力が違うかねえ……？」

艦長席で、やはりメッシに比べて肉付きが良く見える丸顔に頬杖を突きながら、ニックが呆れた様な声を出した。

如何にも不満そうな、納得がいかない表情でニックがぼやいているのは、レオン達に救助された時の事である。

あの時、敵は全部で25機だった。こちらは、ガーゴイルからの応援を足しても23機。応援が来る迄にも、何機も撃墜されていたか

ら、実際にはもつと不利だった筈である。しかも、相手には新型機まで混じっていた。

それが、応援が来てから、みるみる敵機が減り出した。Aガンダムの復帰は聞いていたが、それだけで、ここまで違うものだろうか。

実際、ガーゴイルから来た応援だって、Aガンダム以外は普通のジエガンである。しかもAガンダムは、途中でガーゴイルが奇襲されたと言つて、帰還してしまったという。

それでも、残ったジエガンだけで結局敵を追い払い、モビルスーツで戦艦を曳航するという根性まで見せてくれた。明らかにガーゴイルのパイロットは、今のサラマンダーのパイロットとは、実力が違う。

「訓練が足りないのかねえ……。もう少しスパルタにしないとダメか？でも、俺もモビルスーツはからつきし駄目だから、人の事は言えねえんだよな……。どうするか？」

ニツクはまだ頼杖を突いたまま、溜め息をつきながら、ぼやき続けていた。そんな時である。突然、索敵手が声を出した。

「未確認飛行物体接近！」

「何！？敵か！？」

意外にニツクの反応は早かった。滅多に敵が襲って来ない分、驚きも半端では無かったらしい。

「いえ……近くの民間機が救助信号を出しています。故障したのか！？」

通信士が、故障機の機長に呼び掛け、機体の状況を確認し始める。そのやり取りを、傍らで聞いていたニツクが、如何にも面倒くさそうな声を出した。

「とりあえず、うちで拾ってやれ。うまく着艦出来るか？」

「エンジン故障で駄目だそうです」

「しょうがない、ジエガンを救助に向かわせる」

”つまんねえ物拾って来ないで、ガンダムみたいな戦力を拾って来いよな……”



余計な仕事を増やすなよ、とニックは心の中で思わず故障機に毒づいた。だが、この後まさか本当にガンダムを拾って来る等とは、誰も予想だにしなかった。

シャトルがモビルスーツデッキに曳航された後、ヘルメットを被ったまま、シャトルの機長が、艦長に挨拶したいと申し出た。ニックがモビルスーツデッキに下りる頃には、既にエアハッチが開放され、メカニック達が点検の準備に入っていた。酸素が入った事を確認し、機長がヘルメットを取って、ニックに笑みを向けた。

「お手数をお掛けしました」

「」無事で何より」

社交辞令的に笑みを見せて、挨拶を交わした後、シャトルの機体をちらりと見て、ニックが機長に尋ねた。

「輸送機ですか？」

「ええ。フロンティアサイドのテキサスに向かう予定だったんですが、途中でエンジンが故障してしまって」

ニツクの視線につられて、機長も機体を見上げた。機長の言葉に、ニツクが肩をすくめる。

「我々は、フロンティアサイドを丁度出てきた所なのですよ。何とも間の悪い……」

「この艦でエンジンの修理をして頂く事は、無理ですかね？」

ニツクが、シャトルのエンジンをちらりと見た。噴射口のコーンと、噴射剤の混合ノズルの繋がり具合から、艦と同じ水素噴射式に見える。

「とりあえずメカニックに見させて、出来そうなら、修理させますよ。どうだ、うちで診られるような故障か？」

少し遠くへ声を飛ばすようにして、ニツクがシャトルのエンジンに取り付いていたメカニックに尋ねると、別々の場所に居た数人のメカニックが、手を止めて顔をニツクに向け、両手で大きく を作って返してきた。

その様子に、シャトルの機長が、安堵の表情を浮かべ、メカニック達にも軽く会釈をした後、再びニツクの方に向き直った。

「有難うございます」

「ところで、テキサスに何をお運びで？いま時分に、地球からあそこに輸送機が飛ぶなんて、珍しいと思いますが……？」

首を傾げながらも、ニックが何気無く尋ねると、船長は少しだけ何かを考えた後、ニックの顔を見て聞き返した。

「……こちらは、地球連邦軍の戦艦ですよね？」

「そうですが、それが何か？」

「じゃあ、大丈夫か」

一人で納得した様に呟いた、機長の言葉の意図が掴めず、ニックが更にいぶかしげな顔になる。

「実は、連邦軍のあるモビルスーツを一機……」

「……は？モビルスーツ？」

「確かガンダムとか言ったような……」

「!!!?」

きょとんとした顔から、一気にニッケの目が開き、顔色が変わる。  
随分と表情の変化が忙しい。

「もしかやガーゴイル隊の!?!」

「我々は民間人ですから、詳しくは知らされていません」

「パイロットは?」

「中で休んでいます」

「連れて来て貰えますか?」

「モビルスーツに乗ったままなので、我々ではハッチの開け方が分かりませんから、どうしようもないのですが」

少々困った顔で、機長が頭を掻いた。モビルスーツも、戦車や戦闘機と同じく、兵器の一種である。民間人である機長が、その取り扱いを知らないのは、むしろ当然の反応と言える。

「ああ、そうか。そりゃそうだな」

ニックは独り言のように呟き、シャトルの背中の中の大半の面積を占める貨物ハッチを、機長に開けさせて、Aガンダムのコックピットの傍らへ向かった。

久しぶりに、真っ暗闇の中の静かな空間で熟睡していたロサは、ハッチを外部操作で開けられ、モビルスーツデッキを照らす照明の明るさに起こされてしまい、まだ眠気が抜けず、少々不機嫌だった。

只でさえ静かな宇宙空間で、エンジンまで止まっていれば、それはさぞ熟睡できる静かさだっただろう。不機嫌になる気持ちも、分からないではない。

「……………何？もう着いたの??」

よほど眠かったのだろう。大きな欠伸をしながら、鼻に掛かった声でロサが呟いた。目も半分開いていないような状態で、不用意にシートベルトを外した為、あらぬ方向に体が流れ、ニックに支えられ

ながら、モビルスーツデッキのフロアに下りる。

ガーゴイルとサラマンダーは、多少大きさが違う以外は、基本構造や内装材が同じで、寝惚けているロサには、まだ区別がついていない。そんな様子を見せる、身長160cm弱の少年を、ニックがやや訝しげな表情で見ながら尋ねた。

「君がガンダムのパイロットかね？」

「はい……？」

どこと無く焦点が合わない目で、メッシと同じ連邦軍の制服と艦長の胸章を見て、とりあえず相手は味方で自分よりは偉い人、と認識したロサは、不機嫌ながら寝惚けているなりに、敬意を示そうと努力した。

「私は、サラマンダー艦長の、ニック＝フォールソンだ」

「ああ、この前の……」

てつきりガーゴイルと合流して、挨拶に来たのだらうと早合点し、ロサが笑顔を見せる。

「先日は世話になった」

「いえ……」

「大変だったな、まさかガンダムを救助する事になるとは思わなかったよ」

「……は？」

苦笑するニツクの思いがけない言葉に、ロサの目が点になる。ロサの脳が、一呼吸おいてから、フル回転を始める。

”……ガンダムが救助された？俺、撃墜された覚えは無いけど？他のガンダムの救助でもしたの？”

寝惚け気味の脳で理解しきれなかったロサが、頭に大量の”？”を浮かべた。ニツクが、その様子にまた苦笑する。

「シャトルのエンジンが故障して、うちが救助したんだ。ロード軍の戦艦じゃなくて良かったよ」

「こっつてガーゴイルじゃないの!？」

ロサの眠気が、一気に吹き飛んだ。よく見ると、ガーゴイルより少々狭い。ジエガンも、12機じゃなく10機だ。2機足りない。そういえば、駐機場所にある筈の、ファンネルの予備部品も見当たらない。それ以前に、ガンダムの駐機場所そのものが無い。

「何?どうなってるんだ??」

意外な天然ボケを発揮して、辺りをきよろきよろと見回すロサに、ニックが顔を引き吊らせた。

「……気付いてなかったのかね?」

その声に我に返ったロサが、ニックに恐る恐る尋ねた。

「……ガーゴイルは?」

「ドック入りするために、まだフロンティアサイドのテキサスに向かっている筈だ。うちに応援に来ていた時に奇襲を受けた後、まだ修理が完了していなかったらしい」



「無事なんですか!？」

自然にロサの声が大きくなる。

「ああ。少なくとも、うちが聞いている範囲では、無事の筈だ」

「よかった……」

ロサが思わず安堵の表情を浮かべ、胸を撫で下ろす。ニックが、その様子を見て、状況説明を付け加えた。

「本来はミランダで合流する予定だったんだが、うちの修理が先に済んだので、うちだけで先にロンデニオンに向かう事になったんだ」

「この艦……サラマンダーは、今どの辺に居るんですか？」

漸く頭がはつきりしてきて、状況を飲み込んだロサは、落ち着いた声でニックに尋ねた。

「ミランダからロンデニオンへ向かう、4分の1を過ぎた辺りだ。ここからテキサスとミランダは、距離的には大した違いは無い」

「うわぁ……遠いな……」

その距離感に、ロサが顔をしかめる。月から地球へ直行するよりは近いが、結構な距離がある。そんなロサの反応に、怪訝そうに首を傾げながら、ニツクが尋ねた。

「どうするかね？ ガーゴイルと合流するつもりなら、うちでもエネルギーや弾薬の補給程度は、幾らでもさせて貰うぞ？ その程度で、先日の借りを返しきれるとは、思っていないしな」

「武器が無いんですよ。ファンネルやビームライフルもエネルギー切れだし、ビームサーベルも、あとのくらい持つ分からないよ。うな状況なんです」

そこまで説明して、まいったなあ……と頭を掻くロサの様子に、ニツクが更に首を傾げる。

「そのファンネルってのは、特殊な武器かね？」

「操作方法が特殊なだけで、補給するエネルギーそのものは、ビームライフルと同じです。あとは普通の推進剤が少々」

「それなら、うちで補給を済ませれば良い。あとは距離の問題だけだな。長距離は苦手なのかね？」

「目立つ機体ですから、到着までに襲われないかどうかが、ちょっと……」

やや弱気な表情で言うロサに、ニックがまた首を傾げる。

「あれほど強いモビルスーツで？」

ガンダムの強さは、先日の救助の際に見ているだけに、ロサで齒が立たないような化け物でもいるのかと、ニックは肝を冷やした。青ざめるニックとは対照的に、ロサは落ち着き払った顔で、肩をすくめた。

「武器のエネルギーが切れたら、逃げるしかありませんからね。実際、地球でそういう戦闘を散々やってきて、懲りてます」

拗ねた子供の様に口を尖らせながらも、さらりと言ったのけたロサの言葉に、ニックが思わず目を剥いた。

「そういう戦闘って……まさかビームサーベルだけで戦ったと言うのか！？それでも生きて戻れるのか、君は！？」

こんな修羅場をくぐってきた様なパイロットが、多数居るといふのなら、ガーゴイルが強いのも頷ける。ニックがそう思った後、ロサが表情を変えずに言葉を続けた。

「地球でも、キンバリーで液体水素だけは補給出来たんですが、それ以外はどうしようも無くて、襲われた時はビームサーベル一本で8機ほど撃墜して、何とかしましたけどね。でも正直、あんな綱渡りは、もうやりたくないです」

肩をすくめたまま、如何にも辟易した表情で言うロサに、ニックが絶句した。衝撃の余り、開いた口が塞がらない。正に絵に描いたような口の開け方をしている。

「その歳で、何でそんなに強いんだ!？」

「ガキの頃から親父に仕込まれてますから、当たり前と言えば、当たり前なんですけど……」

ロサがさらっと言ってのけたのに対し、ニックが心の中で思わず突っ込んだ。

” お前、今でも十分ガキじゃねえか。誰がどう見ても、高校出てな

いだろうが……！”

「ガーゴイルのパイロットって、皆がそんな連中なのかね？」

引き變った表情で尋ねるニツクの質問に、ロサはまた脳をフル回転させる。まだ、ガーゴイルのパイロットを全員把握している訳ではない為、はつきりした答えは出ない。

「どうだろ……そんな事はないんじゃないかな？でも、レオンさんとかレイラ姉ちゃんには強いですよ？ガーゴイルで、俺の親父と一緒に戦ってたんですから」

「ああ、ハートレイ大佐の部隊に居たのか」

納得したように、ニツクが頷いた。

「親父をご存知で？」

この一言で、ロサの言う「親父」が誰を指しているのかを、漸くニツクが理解した。

「……もしかして、君はハートレイ大佐のご子息？」

「はい。ロサ＝ヒシモトと言います」

”……いくらハートレイ大佐の息子で、しかもガキの頃から仕込まれたって言っても……一体、どんな訓練を受けたら、こうなるんだ？”

先日の戦闘を再び思い出し、束になっても勝てないと悟ったニツクの青ざめた顔に、夥しい冷や汗が浮かんだ。

「君も小隊長なのか？」

「普段はレオンさんの補助をしています。特に所属は決まっています」

「君一人でも、一小隊分の強さという事か？」

その解釈に、思わずロサが苦笑する。

「そんな事は無いですよ。レオンさん達が居ないと、俺一人じゃガールゴイルを守りきれない。確かにロードのグリアラスなんかは、俺の担当ですけど」

” 所謂いえばレオンさん、この前の戦闘の時、俺達でって言っておきながら、グリアラスを俺に押し付けてたな。戻ったら、文句言つてやるぞつと……”

世間話でもするような様子で話していた、ロサの言葉に入っていた単語に、ニツクが目を剥いた。

「ロードの相手が出るのか！？君一人で！？」

「1対1なら、負けない自信はありますよ。この前は、他の奴に邪魔されちゃいましたけど」

また、さらつと言ってロサが笑う。その余りにも余裕綽々な表情に、ニツクの顔からまた血の気が引く。

” こいつ、本気で言ってるやがる。冗談じゃない、ロードの直接攻撃なんて受けたら、サラマンダーじゃ、ひとたまりも無いぞ。そりゃ、ガーゴイルは強いわ”

「……補給する間、ちよつとうちの連中を、シミュレーションで鍛えてやってくれないかね？」

引き吊った表情で言うニックに、ロサが自信満々の表情で頷いた。

「良いですよ」

その後、ニックがメカニック達に、Aガンダムの補給と、シミュレーションの準備を指示し、ロサとシャトルの機長を待機させるため、ブリッジまで案内した。

”うちの連中、こいつの強さを見たら、ひっくり返るぞ”

ニックがそう思った瞬間、ブリッジに警報が響き渡った。

「敵襲!？」

「機種不明!初めて飛来する機体です!!」

索敵手の言葉に、ニックが理解しきれない表情で、顔を歪める。

「何だと!? シャトルを救助中なのになぜ……って、救助表示灯のスイッチ、入れ忘れてたああ!!」



”今まで、よく沈まなかったよな、この艦……ガーゴイルなら、有り得ねえ平和さだな”

慌てふためくニツク達を、呆れた表情で見ながら、ロサが自分を指差し、何ともいえない間抜けな声を出す。

「……俺、どうしましょう？」

”流石にガーゴイルじゃないから、勝手に出撃は出来ないしな。ったく、何で俺の居る所って、いつつもこんな感じで襲われるんだ……？”

一人だけポツンと佇むロサの声に、大騒ぎになっていたニツク達が”ん？”という表情で、一斉に止まった。

「ジエガンでも大丈夫か？」

「シミュレーションでは、親父のAガンダムと、そこそこの良い勝負はしてましたが……」

余りにも普通に言うロサに、ニツクの目が点になった。自分の中の常識で有り得ない筈のロサの言葉を、頭の中で反芻して、もう一度、まじまじとロサの顔を見回す。

「……マジで？」

「はい」

「1号機、彼と交代しろ」

ニックは即、指示を出した。

#### 14・鉄壁の防御（前書き）

故障したシャトルを無事救助され、命拾いしたロサ。

そこへ、再びロードが攻撃に現れるが……。

## 14・鉄壁の防御

Aガンダムに破壊されたグリアラスの右肩もそのままに、ロード革命戦線の旗艦の役割を担う戦艦「スコープオン」に、ロードが帰還してきた。当然ながら、メカニック達は目を丸くして驚き、慌てて駆けつけてくるが、ロードは落ち着いた様子で軽く手を上げて制し、自身の無事を伝えた後、武装への弾薬補給と破損箇所を修理を指示して、ブリッジに引き上げた。

だが、肩関節を抉るように破壊された為、単純に腕を付け直す程度の補修では済まず、メカニック達は、元に戻すには、数少ない補修パーツである胴体ごと交換する必要があるという結論に達した。

流石にそこまで大掛かりな修理は、戦艦の点検設備程度では出来る筈も無く、グリアラスの修理の為に「スコープオン」ごとスウィート・ウォーターに引き返す事になったロードは、敵艦が近くに居ると索敵手から連絡を受け、艦の確認をするよう命じた。

「大きさや速度等から「サラマンダー」と思われます。ガーゴイルとサラマンダー以外の艦が動いた形跡も無いようです」

索敵手と通信士からの報告を元に、「スコープオン」艦長のライル  
「ジークフリートが、ロードに知らせる。」

「如何なさいますか？攻撃するなら、若干スコープオンを相手に近付けた方が、宜しいかと思いますが」

「良いだろう。少しくらい寄り道して、頭数を減らすのも悪くは無い。ガンダムが生きていたとしても、まだ地球に居る筈だ。まさかこんな所に来れはすまい」

不敵な笑みを浮かべるロードに、ライルが頷き、インターホンを取った。

「シルフィー隊の生き残った者を同行させます。準備をさせますので、暫くお待ち下さい」

「いや、先日はガーゴイルが近くに居たからベリック隊が勝てなかったのだらう？単独で見れば、サラマンダーなどグリアラスの敵では無い。私一人で十分だ、ファンネルのエネルギー補充を済ませるように伝える」

そう言い残し、表情を変えないまま、ロードはモビルスーツデッキへ向かった。

ガーゴイル隊の一員とはいえ、サラマンダーは戦艦単独の戦力としては、今まで雑魚扱いだっただ。事実、性能的にも戦力的にも、サラマンダーは連邦軍のその他の艦船とも、なんら変わりはない。その

為ロードは、敢えて自分が出てまで狙う必要は無いと考えていた。

だが、先のAガンダムに大敗を喫した事に対する動揺が、あまり艦内に広がってもまずい。ここは、少しでも士気を落とさないよう、ロードが自ら戦果を挙げる必要がある。ロードにしてみれば、サラマンダーの単艦行動は、天の思し召し以外の何者でもない筈だった。

「あんな雑魚戦艦が単独行動するとは、よほど戦力が足りないらしいな」

グリアラスに乗り込み、スコープオンから出撃したロードが、サラマンダーの居る方角を見ながら呟いた。

レーダーの範囲にサラマンダーが入り、傾合いを見て、グリアラスを加速させながらファンネルを放出する。

「落ちろ！」

ロードが叫び、ファンネルに一齐掃射の指示を飛ばす。これで、戦艦1隻を減らしたつもりだった。

だが、ファンネルの放出直後に、機体の近くで3つ爆発が起こった後、10本出る筈のビームが7本しか出なかった。しかも、その7

本も、サラマンダーの遙か手前で、先日のAガンダムの迎撃時と同じく、全て爆発した。さらに2つの爆発が起こり、ファンネルの残存数が5基になってしまった。

「バカな!？」

ロードが状況を理解しきれず、加速していた機体を急停止させて、自機のリーダーをもう一度見直す。サラマンダーから出て来たジェガンのうち、1機だけが接近して来る。他にも数機居る様子だが、全く寄って来る気配は無い。

「雑魚1匹で、私と勝負だと!?! 一体何のつもりだ!?!」

残り5基のファンネルで、向かってくるジェガンに連射しようとしたが、今度は残りのファンネルが全て撃破されてしまい、思わずロードが目を剥く。

「これは……一体何が起こった……!?!」

狙撃を阻止したジェガンが、勢いを保ったまま突っ込んで来て、ビームサーベルを抜く。

「ちいっ!」

グリアラスも、残った左腕でビームサーベルを抜き、切っ先を交えた直後に、ジエガンの左のライフルの狙撃が、グリアラスの脇腹を目掛けて放たれる。

切っ先を弾いて狙撃をかわしながら、グリアラスが頭部のバルカン砲や、破壊されていない手首の小型ビームキャノンでジエガンを狙うが、全てかわされる。

辛うじて相手との距離は取ったが、ファンネルが無くなり片腕しかないグリアラスが圧倒的に翻弄され、気付いた時には、完全にサラマンダーに背を向ける格好になってしまっていた。

だが、再び迫るジエガンのライフルの連射に加え、斬撃の直後に蹴りを繰り出して来るといふ連続攻撃を、辛うじて防御するだけで手一杯になり、ロードはサラマンダーへ突撃する隙を見出せない。

一撃でも攻撃をまともに貰えば、恐らく生きては戻れないだろう事は、想像に難くない。正に、鬼気迫る動きというのは、こういう動きを言うのだろう。再び立ち位置が変わり、ジエガンがサラマンダーとロードの間に入った。

「たかが雑魚一匹に、このグリアラスが手玉にとられている……！  
？こいつ、化け物か!？」



「ファンネルだけで戦艦落とそうなんて、甘いんだよ」

一瞬の隙を突き、グリアラスの腹にジェガンの蹴りが入った。吹き飛ばされたグリアラスに向かって、ジェガンがライフルで連射しながら突撃し、ビームサーベルを振りかぶる。

「今度こそもらった！ロード！！」

ロサが叫んだ瞬間、突然、別の方角からビームが走った。これに気付いたロサが、忌々しげに舌打ちしながら、慌てて飛びのいた。

「くそっ！また邪魔が……！！」

激しい連射が始まり、ロサがさらに後退する。だが、火線の向きが変わらないのに気付き、ロサが首を傾げた。

「これは、威嚇射撃……！？」

その際に、グリアラスがバーニアを噴かして後退する。ロサが追おうとしたが、ビームの壁のような凄まじい連射に阻まれ、前に進めない。

「ちっ……！いい部下を持つてるじゃねえか」

ジェガンでは対抗しきれないと踏んだロサは、追撃を諦めた。それを察知したのか、連射も止み、攻撃が終わったようだ。

「何だ？今の連射は……？ファンネルとも違うような雰囲気だった  
が……」

ロードが逃げた方角を見つめながら、ロサが呟いた。

辛うじて肉眼で見える距離で繰り広げられていた、ロサの戦闘を目の当たりにしたニックは、真っ青になって固まっていた。

「あれは、確かロードの……！？」

ジェガンと交戦していた紫色の敵機は、ガーゴイルからデータが送られて来ていた要注意機の中でも、ロードの専用機と思われるとして、筆頭に挙げられていた機体だった。

だが、これまで一度も姿を現さなかった為、どうせ来ないだろうと、ニックが識別信号などのデータ入力をし忘れたまま、放置していたのである。

「何も無い所からビームが出ていた……何だ、あの攻撃は!？」

ファンネルの攻撃を生で見るのは初めてのニックには、理解が出来ない。

サラマンダーの現在地からは、遠くてファンネルは見えない。更に、リーダーにも映らないステルス性ホーミングミサイルなので、何も無いところからビームが出ている様に見えるのは、むしろ当然である。

「いや、それよりも……」

さらに驚くべきは、普通のジェガンで、こちらに1本たりともビームを寄せ付けなかった、ロサの鉄壁とも言える防御能力である。

ニックに理解不能な攻撃を完全に遮断し続け、あわ良くばぶった切ろうと斬りかかり、遂には敵を撤退させてしまった。

「あれ、本当にうちにあったジェガンか！？あんなの有り得ねえだろ！！信じられん……！！！」

ニツクは、無意識に目を剥いたまま叫んでいた。

サラマンダーから出撃していたジェガンが次々に帰還し、最後にロサが帰って来た。

「Aガンダムの補給、まだ終わりませんか？」

ケロツとした顔で、ジェガンのハッチを開けたロサが、メカニックに尋ねた。

「……もう半分ほどです。しばしお待ちを」

モビルスーツデッキで戦闘を見て固まっていたメカニック達が、ロサに声を掛けられて我に返り、作業を再開した。

ロサのジェガンにサラマンダーの撃沈を阻まれた後、再びグリアラスがスコープオンに帰還する際、その機影を隠すかのような大きな

シルエットを持つ、モビルアーマーが付き添っていた。

戦艦に入りきらないその機体が、推進剤と弾薬の補給の為、艦の底にワイヤーで係留された後、パイロットがロードと呼ばれて、スコーピオンのブリッジに入ってきた。

「今回は助かった。礼を言う。リリア＝ミゼル」

「いえ……。総帥のお力になれて光栄です」

ロードと向かい合った後、ヘルメットを取ったリリアと呼ばれた少女は、表情も特に出さず、無機質な声で答えた。感情というものをお忘れてしまったような、冷たさすら感じられる程、表情がない目をしている。

「プロザムを上手く動かす自信は、もうついたようだな？」

プロザムとは、第二次ネオ・ジオン戦争開戦時、従来の拡散ビーム砲搭載型モビルアーマー（サイコガンダムやクイン・マンサなど）を小型化する目的で試作された、モビルアーマーである。

実際には予想より小型化が出来ず、より火力を向上させる狙いで、同時に試作されたアルパ・アジールの方が、求められる攻撃力を満

たしていた事から開発が凍結され、スウィート・ウオーターの旧ネオ・ジオンの施設に放置されていた。それを完成させたものである。

「コントロール自体は問題ありませんが、サイコミュを機体制御にも使おうとすると、まだ少し負担がかかり過ぎるようで、意識が遠のく時があります」

「ならば、サイコミュは、暫く拡散ビーム砲のコントロールだけに使うようにすれば良い。機体制御はサイコミュ無しでは大変かもしれんが、意識が遠のくことは無いだろう」

「わかりました。ガーゴイルがドックに入ったのなら、今のうちに叩いてしまえばいいではありませんか？」

リアの質問に、ロードは一度ブリッジ正面の窓へ向いて、軽く溜め息をついた。

「入港期間が不明な上に、ガンダムの実力も未知数だ。ソフィアがガンダムと接触して以来、連邦軍に何があったか判らんが、サラマンドーまで戦力が上がっている。事は慎重に運んだ方が良さそうだ」

リアの質問に答えた後、ロードはリアの方に向き直り、相変わらず表情を見せない瞳を見ながら、言葉を続けた。

「アストルが間もなく完成する。試験を行うときに、ソフィアの手伝いをしてもらいたい」

「どうすれば良いのですか？」

「アストルの情報を連邦軍が嗅ぎ付けたら、当然破壊工作に来る筈だ。そうなった場合に、連邦軍の攻撃を阻止してもらいたい。我々の将来を左右する、重要な任務だ」

「わかりました。では、私はこれより、アストルに向かいます」

言い終えたりリアの両肩を軽く叩き、ロードが諭すように言った。

「プロザムは、お前以外に動かせない、我々の大事な切り札だ。体への負担が大きいと感じたら、途中のコロニーで休みながら行っても構わない。アストルに着くまでに、体調を整えておけ。いいな？」

「はい」

無表情のままのリアの返事を聞き、ロードが小さく頷いた。その様子を確認した後、リアは無表情のまま、一歩下がってロードに敬礼し、ブリッジを出た。

「ようやく安定して来たようだな」

リリアは、薬物や催眠術、精神的な刷り込み等により、人工的に二ユータイプとして覚醒させる「強化人間」の実験被験者である。

戦場で孤児になり、戦争を終わらせたいと願うリリアが、革命軍の訓練施設に居る時に話を聞き、自らの意思で名乗りをあげた。他の部隊からも志願者は名乗り出たが、複数の被験者を同時に扱えるほど、革命軍に財力は無い。

そこで、最も適性があるとの結果が出たリリアが、最初の被験者となった。

「私の手で、必ず戦争を終わらせる！ やっと、その力を手に入れたんだから！ ！」

モビルスーツと変わらない狭さのブロザムのコックピットで、黒い防眩バイザーで表情が見えないものの、固い決意を感じさせる声を出し、リリアが呟いた。入り切らない巨体をスコープオンから切り離されたブロザムが、メインバーニアを噴かし、やがて宇宙の闇へと消えた。



その頃、ガンダムへの補給待ちの間、ロサは暇潰しも兼ねて、サラマンダーのパイロットの訓練を引き受けた。補給中のAガンダムのシミュレーション機能だけを使い、ロサもジェガンの設定にして対戦を始める。

よく、余りにもあっけなく撃沈されてしまう様子を漫画で書く時に、「ちゅどーん！」と平仮名で書いて間抜けさを強調する事がある。それを地でいくような呆気なさで、全員がロサに秒殺されてしまう。

” ったく、しょーがねーな。何て弱さだよ、こいつら。これじゃ話にならねえ”

呆れたロサが、次第に面倒くさそうな声が変わって行く。

「10対1で良いですよ」

……ちゅどーん！

やはり勝負にならない。あっという間に、サラマンダーのジェガン隊が全滅させられてしまった。全員が、文字通り真っ青な顔をしている。

”こいつら、ガーゴイルに乗ってたら、とうの昔に死んでるぞ。それ以前に、こんなやられ方してたら、俺がぶん殴ってるな。これ以上、俺を弱くは出来ないし……さて、どうしたもんかな”

呆れて物も言えない、という表情を隠しもせずに溜め息をつき、ロサがフロアに下り、集まったパイロットの中心に居る、総隊長らしきパイロットを見た。

「グリアラスとワルザのシミュレーションCG、お見せしましょうか」

「グリアラスって、さっきの奴だよな？ワルザって何だ？」

居合わせたサラマンダーのクルーが、頭に”？”を浮かべて顔を見合わせる。

「もう一機、グリアラスと同じように、ファンネルを使う奴が居ます。その機体です」

「なに!?!」

今度は、全員が顔を引き吊らせて固まった。その様子に、呆れたような、不思議そうな顔をするロサ。

「来た事ありませんか？」

「初耳だ」

”へえ……ガーゴイルって、そんなにロード軍にとって目障りなんだ。ファンネル付きの特殊機で、何回も奇襲しに来なきゃいけないくらいに……”

妙な事に感心してしまったと自分で気付いて苦笑しつつ、ロサはモビルスーツデッキの傍らの整備用モニターへパイロット達を促し、Aガンダムのデータをメカニックに転送させて、ワルザやグリアラスと戦った際のCG画像を再生してみる。

「まあ、とりあえず見て貰いましょう」

全員が、再生画像の序盤から、地獄でも見たかのような顔をしている。さらに積みかけるように、CGデータを移したジェガンにロサが乗り換え、ファンネル装備機と交戦する際の自分の動きを、シミュレーションで披露する事にした。

斬りかかろうと突撃して行く間に、全てのファンネルをビームライフルで撃破し、複数の別の方角からのガーゴイルへの火線を狙撃して阻止する。更に、本体に斬撃での連続攻撃を加え、反撃の隙を全く与えない。自分達の操縦では、絶対に有り得ないジエガンの動きに、サラマンダーのクルーが絶句した。

細かい事を言えば、ロサ自身はまだ気付いていないが、Aガンダム  
の10基のファンネルで、同じような要領で相手のファンネルを破壊できないのは、並行作業が出来ないという、アスペルガー障害特有の認識障害によるものである。

ジエガンなら、ライフルは1丁しかないから、当然ながら1基ずつ、順に破壊する事になる。だが、「10本のビームを止める」事を考え始めると、それと同時に意識が分散してしまい、「10基のファンネルを破壊する」という事を忘れてしまうのである。読者は不思議に思うだろうが、アスペルガー障害とは、そういう不可解な部分を持っている障害である。

「普通のジエガンでも、武器を使い果たさせる事が出来れば、さつきみたいに追い払う程度は出来ます。勝てはしませんけど」

平然と言い放つロサ。サラマンダーのジエガンを使ったお手本だから、反論の余地も無く、全員が黙り込んだ。

「ジエガンでもAガンダムでも、装備や飛行速度が違うだけで、間

接を動かす速度や拳打による連続攻撃の仕方は、殆ど変わりません。要は如何に母艦を守るかだ。ファンネルの攻撃も、正面からぶつければ、ビームライフルで十分阻止できる。武器は攻撃だけでは、母艦は守りきれない」

これだけの解説をしながらも、ロサの手足が止まらずに動く。

サラマンダーのパイロットは、自分達が普段乗っているジエガンとはとても思えない動きに、全員が真剣にロサの操作を見守る。

今度は、ビームの狙撃の仕方を解説すると言って、ファンネルを撃墜せずに、全ての狙撃を阻止し続けて、エネルギー切れを待つ戦術もやってのける。

やはりガーゴイルは、掠り傷ひとつ負わなかった。

「もう一度、対戦をお願い出来ますか？」

パイロットの一人が、真剣な表情を変えずに申し出た。ロサが、限りなく愛想笑いに近い、営業スマイルを見せて頷いた。

「喜んで」

再び対戦モードで、ロサが敵役のAガンダムに設定される。母艦はサラマンダーに設定される。

” いちいち加勢に来るのも面倒だし、ガーゴイルからの応援が必要ない程度に、適当に鍛えてから帰ろつと……”

ロサは、気づかれない程度に小さく溜め息を付いた後、操縦レバーを握り直し、心の中で呟いた。

## 15・生還（前書き）

テキサスへ急ぐガーゴイルを、再びワルザが狙う。

初めて受けるファンネルの波状攻撃に、レイラとレオンが苦戦を強いられる。

サラマンダーから、Aガンダムを積んだシャトルが故障するも無事救助し、乗員全員健康である旨の連絡が、ガーゴイルに入った。

ガーゴイルのブリッジで歓声が沸き、あちこちで安堵の溜め息が漏れる。それを見届けたレイラが、ロサの無事を伝えるに、フローラ達の部屋へやってきた。

ロサが地球に墜落する直前に、メツシ達が気を遣い、ロッカールームを空けてロサをそこへ移動させたので、今はフローラとメルサと一緒に居る。ちなみにアックスはレオンと同じ部屋になった。

部屋数が若干合わないのは、少数だが乗務しているパイロット以外の女性クルーが、レイラにシャワーを借りていたのを、少しでも遠慮なく使いたいという事で、交代で使える部屋を確保した為である。

部屋の明け渡しの時、ロサはメツシの前では「エースパイロットがこの扱いかよ」と、文句たらたらだったのだが、フローラの申し訳なさそうな表情に撃沈させられ、今に至る。

「フローラ、部屋にいる？」



「はい」

部屋から顔を出したフローラが、レイラを部屋へ招き入れた。

「ロサが無事だって、連絡が入ったわ。ちょっと離れた場所だから、戻るには時間が掛かるかも知れないけど」

「まだロサは、戻れないんですか？」

不安の混じった寂しげな表情で、抗議するような声を出すフローラに、レイラが戸惑った。今まで、フローラが自分の感情をストレートに表現して来る事は、あまり無かったからである。

「フローラ……?」

「いま襲われたら、ロサが守ってくれない……」

ロサが出撃してから、既に丸3日が経とうとしている。

たったそれだけの時間なのだが、もし何か有っても、目の前でロサが守ってくれる訳ではないという不安が、フローラにとってのこの時間を、何倍も長いものに感じさせていた。

「ロサが居ないと、不安なんだ？」

フローラが黙って頷く。その時間の短さに、レイラが苦笑した。

”ホントに、心底ロサを信頼してるんだな、この子は”

「大丈夫。またあなたが呼べば、ロサは飛んでくるわよ」

「みんながざわつき始めてから、ずっと呼んでいます。でも、ロサはまだ帰って来てくれない……。もう帰って来ないんじゃないかって、心配で……」

「あなたがそんな事で、どうするの？」

涙目になっているフローラの肩を叩き、レイラが諫める口調で、フローラの顔を見た。

「あなたがロサの帰って来る場所を守っていてあげないと、ロサは本当に帰る場所が無くなってしまっわよ。しっかりしなさい」

「でも……」

「ロサにも、やるべき事があるの。ロサにしか出来ない事があるの。それは、ちゃんと理解してあげないと駄目よ。ロサは、あなたを守るために、頑張ってるのよ?」

諭すように言うレイラの言葉も、理解出来ない訳ではない。でも、どうしてもロサが居ないと不安になる。

言葉が見つからないフローラが、複雑な表情で俯き、黙り込んだ。

「戻ってきた時に、ロサにそんな顔で会える?そんな顔を、ロサに見られてもいいの?」

レイラは気丈に笑ってくれる事を期待したのだが、15歳になったばかりのフローラには、笑顔を見せられるだけの気丈さは、まだ無かった。

”あなたが居なくなっただけで、フローラが笑わなくなっちゃったじゃない!ロサ、早く戻って来なさい!!”

レイラが、心の中でロサを叱咤していた。

サラマンダーのパイロット全員が、3回程ロサと勝負を終え、何とかビーム同士をぶつけて防衛出来る程度まで上達した頃、ガーゴイルに敵襲との連絡が入った。

再びワルザが接近しているという。まるで、ロサの留守を狙っているかのようなタイミングに、流石のロサも青ざめる。

「ガーゴイルはまだ修理が終わってない！もう一度攻撃を受けたら……！」

今すぐに、ガーゴイルから出撃出来る訳ではないという現実、自分の先走った結果を、ロサは心の底から悔やんだ。

『ロサ君！例のワルザというモビルスーツは、サイド3の方角から来ているらしい。ここから出て、まだ間に合わないかね！？』

サラマンダーのレーダー画像をAガンダムへ転送し、それを見ながらニックがロサを促す。確かに、間に合わない距離でも無さそうである。幸い、補給も完全に終わった。

『近くに母艦が居ないのなら、防御にライフルを使う必要もあるまい。単純に、狙撃はかわして残弾数を温存すれば良いだろう。それなら、次の敵襲にも対応できないかね？』

ニックに言われ、冷静さを欠いていたロサの脳が、落ち着きを取り戻す。

「ああ、そうか。確かにその通りですね」

『ガーゴイルに守られた手前、見殺しには出来ん。うちのジエガンも同行させようか？』

「いや、サラマンダーはサラマンダーで、手駒が必要だ。俺だけで行きます」

『わかった。ロンデニオンで合流しよう』

ニックが、再会を確信したように、穏やかな声で言う。ロサも、一瞬だけ笑みを見せた。

「ありがとう！……無事で……！」

『お互いにな』

「はい！！Aガンダム、出ます！！」

全速力でサラマンダーから飛び出し、ロサはテキサスに向かった。

「ワルザは、まだガーゴイルに届いてない。ドックに着く前に、俺の手でワルザを止める！間に合ってくれよ、Aガンダム！！」

珍しく、ロサが苛立ちを隠しきれずに焦っていた。

コロニー「テキサス」を目の前にして、ワルザの接近を捕らえたガーゴイルは、迎撃のため一旦コロニーから離れる進路を取った。

修理のために寄港するコロニーが、攻撃によって破壊されては本末転倒だからである。

「くそっ、こんな時にロサが居ないなんて……！！」

ジエガンのコックピットに入り、ハッチを閉めたレオンが、唇を噛んだ。

「艦長、いま接近しているモビルスーツが、たった1機で奇襲してきた奴なんですね？」

ジエガンの電源を投入し、レイラが無線で確認する。

「動きなどから見て間違いない。ファンネルも使うし、ロサとも互角に戦える奴だ。気を付けろ！！」

『マジかよ……』

メッシの言葉に、グールが顔をしかめた拍子に漏れた声を聞き、レオンがグールの尻を叩く。

「ガーゴイルが沈んだら、今度こそ帰る場所が無くなる。とりあえず守りきればいい。いくぞ！」

レオンのジエガンがガーゴイルから飛び出し、それにグールが続く。

『ロサと互角って事は、ハートレイ大佐と互角の強さって事でしょ

？  
』

グールが、如何にも恐る恐る言っている、という雰囲気を出した声で、レオンに尋ねる。彼自身も、ハートレイの強さは知っている。

グールのその言葉を聞き、レオンが首を傾げた。

「ハートレイが死んでから、ファンネルを使える機体なんて来なかったのにな」

『ガンダムを拾っちゃったからですか？』

「ロサが居なけりゃ、俺達は今頃サラムンダーのパイロットだったんだ。疫病神だなんて文句、口が裂けても言えるか。来るぞ！」

ワルザの他に、ギラ・ドーガが4機居る。レオン達の接近に気付き、ビームライフルによる狙撃が始まる。

「俺が紫の奴を食い止める、他のを何とかしろ！」

ファンネル自体は、以前ハートレイとロードの戦いを見て知っている



るつもりだったレオンが、ビームサーベルを抜き、狙撃をかわしながら、本体に突撃する。

「うおおおっ！！」

ワルザとジェガンが切っ先を交え、火花を散らす。

だが、次の瞬間にファンネルの連射に襲われ、堪らずレオンがワルザから離れた。

「あれを撃ち落とせてのか……！？」

レオンが愕然とした表情で、自分を囲んでいる10基のファンネルを見回した。

レオンやレイラも、ハートレイが居た頃にロードと同じ戦闘空域には居たが、直接切っ先を交える事は無く、ファンネル付きの機体をまともに相手にするのは、今回が初めてである。

仕方なく、しつこく狙ってくるファンネルを狙撃するが、今度は本体からの狙撃が、手首ごと右腕のビームサーベルを吹き飛ばした。

「レオンさん!」

グールが叫ぶが、その隙に自分も相手の動きに振り回され、突破されてしまった。

こう着状態になっているのを見て、後方のレイラがメッシに無線を開く。

「私も前線に出ます!」

『止むを得ん、頼む!』

被弾したレオンの元へ、レイラが急行する。

だが、前線を突破して来たギラ・ドーガの連射に阻まれ、なかなか前に進めない。

「調子に乗るんじゃないよ!」

レイラもビームライフルを連射して応戦し、ようやく一機を撃墜した。だが、ビームサーベルの無いレオンが、ファンネルの連続砲撃で引くに引けず、かわすのに手一杯で、行き場を失くしている。

距離があるが、レイラのジェガンが、ワルザ本体の狙撃を図る。

「当たれ!!」

連射しながら、レイラがワルザに向かい突進する。連射の1発が、ファンネルに当たったが、肝心のワルザ本体に全てかわされた。

「速い……!!本体に当たらなければ、意味が無い!!」

「ちっ!もう一人出来るのが居た……!」

気づいたソフィアが、レイラのジェガンにファンネルを向け、一斉掃射を浴びせる。この時ソフィアは、まだこの機体がレイラである事に気付いていない。

「くっ!かわすので精一杯……!これがファンネルの狙撃なの!？」

レイラがビームに気を取られた瞬間、ワルザがガーゴイルにビームライフルを向けて連射した。誰もがそれを見た瞬間、絶望した。

「しまった……!!」

そのビームのうちの1本が、ガーゴイルの右カタパルトデッキの先端を貫通する。

幸い、その下には何も無いため、全体としては被害は小さい。だが、衝撃は大きく、艦内でフローラ達が絶叫する。

『被害はカタパルトだけだ、ついでに修理すればいい!何とかしてくれ!!』

メッシが無線に向かって怒鳴った後、もう一度大きく揺れ、堪らず弱音を上げる。

「ロサ、戻れないのか……!?!」

レイラとレオンが二人掛かりで連射するが、ワルザはおるかファンネルも捕らえられなくなった。

また一斉掃射を浴び、防戦一方になる。隙を突いて、またワルザがガーゴイルを狙撃した。今度は真っ直ぐブリッジにビームが走る。

「……!!」

ガーゴイルの誰もが思わず目を瞑った瞬間、ブリッジの近くで爆発が起こった。

『何の爆発だ!? 一体何が起きた!?』

無線から聞こえるメッシの怒鳴り声に、今度は全員の目が点になる。

「艦長、何で生きてるの!?」

パイロット全員がハモった声を出した直後、ワルザに向かって妙な角度からビームが走る。これに気付いたレオンとレイラが、慌てて飛びのいた。

「うわっ！ 今度は何だ!?!」

間隔の狭い、ビーム砲の一斉掃射がワルザを襲い、堪らずソフィアが後退する。

「これは……ガンダムか!」

「てめえ……!!」

ガーゴイルの被弾が、ロサの逆鱗に触れ、怒りが頂点に達している。

それ以上言葉が出なくなったロサが、鬼のような形相で、ファンネルとビームライフルで切れ目無く連射しながら、ワルザに突撃する。

これをかわしきれずに、ワルザが左の二の腕に被弾する。それと同時に、全てのファンネルが爆発した。

「バカな!？」

言い終わる前に、さらに抵抗する間も無くワルザの右腕を斬り落とされたソフィアは、堪らずに撤退信号を出した。

「逃げられると思うな!!」

激怒したロサがワルザを追う。だが、撤退しようとしたキラ・ドゥーガの1機が、運悪くガンダムの正面に入ってしまった。

「どけ!……!」

怒りに我を忘れたロサが叫び、全てのファンネルがギラ・ドーガを襲う。その爆発の際にワルザは撤退した。

「……また、人を殺してしまった……」

爆発の閃光で我に返ったロサが、目の前で延焼するギラ・ドーガの煙を見ながら、呟いた。

「みんな、よくやってくれた」

ガーゴイルのモビルスーツデッキで、帰投したパイロットをメッシが出迎え、1人ずつ肩を叩く。

最後にロサがAガンダムから降りてきた。それを見て、軽くメッシが手を上げた。

「修正（罰として殴られる事）されても、文句は言えないな」

小さく呟くと、ロサはメッシに近づいていった。

「よくやった、ロサ」

両肩をがしつと掴まれ、思わずロサが目を閉じ、首をすぼめる。

「ごめん、艦長。俺が先走ったから……」

「ついでに修理すれば良いさ。もうすぐドックだ」

「……怒らないの？」

そっと片目を開け、恐る恐るメッシを見上げるロサを見て、メッシが苦笑した。

「レオンのジェガンを見てみる。お前が間に合わなかったら、今頃どうなってた事か」

メッシの言葉に、ロサが右手首を吹き飛ばされているジェガンを見た。ワルザ相手では、確かに勝ち目は無いだろう。

「それ以前に、ブリッジが吹っ飛んでたぜ」



安堵の表情を浮かべたレオンが付け加えた。すぐに意味を理解できなかったメツシが、首を傾げる。

「何？」

「ブリッジの右舷で爆発があったろ？あれはワルザの狙撃を、ロサが止めた爆発だ。そうだろ？ロサ」

レオンの言葉に、黙ってロサが頷く。メツシは、今までその瞬間を見た事が無かったため、啞然とした。

「……ビームライフルの狙撃を、止めたって言うのか？」

「あの直後、艦長が怒鳴ってたろ？みんな、そっちの方が不思議に思ってたぜ。何で生きてるんだってな」

レオンが声をあげて笑うのを見ながら、直撃を想像したメツシが、真っ青になった。

”もしかして、ロサが間に合わなかったら、死んでたのか？俺は”

「……!？」

不意にロサの意識が遠くなり、バランスを崩して体が宙に浮く。レオンとメツシが、慌ててロサの肩を抱えた。

「大丈夫か!？」

「……疲れただけだ。大丈夫だよ」

力無く呟いたロサは、目が虚ろで焦点も合っていない表情をしている。ロサの様子を見て、レオンが諭すように言った。

「顔色が良くないな。医務室で休め」

レオンに抱えられ、ロサは無言で頷いた後、医務室へ担ぎ込まれた。これを聞いたフローラが飛んで行き、ロサの看病に当たる事になった。

16 街の死角 (前書き)

やっとの事でコロニー「テキサス」に辿り着いたガーゴイル。

船体修理の間に、それぞれが束の間の休息を取る事になるが。

## 16・街の死角

慣れない長距離を一気に飛行した上に、感情に任せた戦闘をして疲れ切ったロサは、医務室で点滴を受けた後、熟睡して夢を見ていた。戦闘中の夢。相手は異常に強い。いくら撃っても、全てかわされてしまう。現実なら、そろそろ弾切れになっても良い頃である。だが、ロサは何故か気付かずに撃ち続ける。

突如、目の前にAガンダムが飛び出して来た。ファンネルの一斉掃射を浴び、直撃を受けた。ハートレイの顔が大きく目に浮かぶ。

その衝撃的な場面に、思わずロサはガバツと跳ね起きた。

脂汗で全身の服がべとつき、髪もぐしゃぐしゃになっている。息が弾んで、動悸が止まらない。余りにもはっきりとした映像だったため、まだ夢と現実の区別がつかっていない。

数分程経ってから、呼吸が落ち着いていたロサの脳が、フル回転で周囲の状況を把握し始める。

”…………ん？息が出来るという事は……………生きているのか？俺は……………”

ロサは、自分の両手をまず見つめる。両手を握り、また開いてみる。力が入らないが、とりあえず動く。どうやら幽霊には、なっていないらしい。

「……なんて夢だ」

ロサが、思わず大きく肩で息をついて顔をしかめ、肘を突いた右手で額を支えた。思うように体が動かず、タオルを取るのも面倒になったロサは、そのままじっとしていた。その顔は完全に血の気が消え、真っ青なままである。

”それに、さっきの心臓が圧縮されるような痛み……この歳まで、体がもったのが奇跡か……”

ロサがそこまで考えた時、替えのタオルと、ロサの着替えを取りに行っていたフローラが、現実の世界に戻ったロサの元へと帰ってきた。

医務室に入ったフローラが、汗だくのロサの姿に驚き、ベッドに駆け寄った。

「どうしたの！？すごい汗！！」

「ちょっと嫌な夢を見て、うなされただけさ。心配ない」

額を手に乗せ、顔をしかめたまま、普段よりかなり低い掠れた声を出したロサの顔を、フローラが心配そうに覗き込む。

「大丈夫？」

「ああ」

フローラが、持ってきたばかりのタオルで、ロサの額の汗を拭いてやる。

本当は放っておいて欲しい気分だったが、優しく体を拭ってくれるフローラの手の暖かさが、ロサの気分を少し落ち着かせた。

「修理に寄るコロニーに、大きなショッピングモールがあるんだって聞いたから、一緒にどうかかなと思ってたんだけど……まだ出かけたりするのは、無理そうね。モビルスーツの修理もあるから、長引くかもしれないって」

相手の顔も見ずにロサが話す事は殆ど無いため、ロサの反応を見ながら話すフローラの表情が、次第に曇っていく。

ロサはまだ頭が重く、フローラの顔を見る事も出来ないまま、譫言のように呟いた。

「ショッピングモール……」

言い終わって暫くしてから、大きく深呼吸をして、漸く頭の中がはつきりしてきた後、フローラの顔を見た。

「レイラ姉ちゃん達と行っておいでよ。俺とは、一緒に動かない方がいい」

「どうして？もし元気になったら……」

一緒に行く事を期待していたフローラが、怪訝そうに話すのを、ロサが遮った。

「恐らく、今のロード軍の認識では、ガーゴイルのエアスパイロツトは、レオンさんやレイラ姉ちゃんじゃない。ガンダムに乗ってるこの俺だ。奴らだって、既に俺の顔は知っているだろうし、街中で一緒に居る所を襲われたら、君は奴等から自分の身を守る事が出来

ない。幾ら俺でも、君まで守り切れる自信は無い。だから、別行動の方が良いよ」

まだゆっくりとしか言葉が出て来ないが、フローラを自分のせいで危険に晒したくない一心で、ロサが言い聞かせる。

「……でも」

「アックスやメルサも行くんだろ？レイラ姉ちゃんやレオンさんなら、ちゃんと守ってくれるよ。幾ら俺でも、生身じゃモビルスーツには抵抗出来ないからね。何かあったらすぐにガンダムを出せるように、出来るだけ此処で大人しくしてるよ」

「……わかったわ」

「ごめん、楽しみにしてたのに」

申し訳なさそうなロサの表情が、汗の乾ききらない髪と相まって、痛々しく感じたフローラは、無理に作り笑いを見せた。

「ううん、私の方こそ、休んでたのにごめんなさい」



「少し冷たい水を貰えるかな。まだ体がだるくて」

「わかったわ。氷を貰って来るから、待ってて」

至極残念そうな表情で医務室を出る、フローラの背中を見届けたロサは、コロニー滞在中に確認が必要な事を、まだ回転の鈍い頭の中で整理し始めた。

「情報集めに、個人の携帯電話は使えないからな」

小声でそう言った後、ロサはベッドから覚束ない足取りで立ち上がり、薬品棚に入っていた瓶の一つを開け、入っていた薬品を口に含んだ。

「……流石は軍艦だ、一般的な応急処置に使える薬は、一通り揃ってるようだな」

ポケットに瓶を隠し、ロサがベッドに座り直して呟いた後、氷水を持ったフローラが、医務室に戻って来た。

ガーゴイルが修繕のためテキサスに入港した頃、革命軍本部に戻ったロードは、グリアラスの修理を指示した後、Aガンダムを如何に倒すかを思案していた。

正面切つての戦いを挑み、ファンネルは全て受け止められ、挙げ句の果てにガーゴイル以外のジェガンにまで、まさに手も足も出ないという大敗を喫した。

「ガンダムはともかく、なぜジェガンにまで、あんな戦力の変化が起こったんだ！？ハートレイの息子とは、それほどまでに影響力が有るといふのか！？」

周囲に聞こえないように小さく呟いたロードは、厳しい表情のまま受話器を取った。

「ロサ・ヒシモトについての情報を、可能な限り集める。連邦軍になぜあれほどの戦力の変化が起こったのか、徹底的に調べる必要がある。あと、ソフィアとの接触についても調べるんだ。ソフィアが密通している可能性も、否定は出来ない」

受話器を置いたロードは、腕を組み、表情を崩さないうまま、暫く考え込んだ。

「キュベレイがベースで勝てないとなると……」

宇宙空間でのトラブルは、即、死につながる。その為、完全な新規設計は、正規メーカーの手に依らない限り、性能よりも安全性に不安が残る。それがロード革命戦線の現状である。

サイド3の潤沢な資金力を背景に持っていたジオンに比べれば、ロード革命戦線は資金力が遥かに小さい。

ガンダム系統のモビルスーツは、概して金が掛かり過ぎる。連邦軍なら金に糸目をつけずに造ることも出来るだろうが、こちらはそうもいかない。

また、ガンダムを造らないのは、コストの問題だけでない。

連邦軍に対して反感を持つスペースノイドは、大抵は一年戦争時代のジオン出身者か、その子孫である。

そのジオンにとって最大の敵であったガンダムは、彼らにとっては、スペースノイド抑圧の象徴。すなわち、最も忌むべき存在だからである。仮にもスペースノイドの解放を開戦の口実とするならば、決してガンダムは使ってはならないのである。

ガンダム系統以外のモビルスーツで、キュベレイ以降、まともにAガンダムと戦えそうなものは、サザビー、シナンジュ、クシャトリヤ、ローゼン・ズール位しかない。

サザビーはファンネルが6基しかなく、しかも増設の拡張が出来なかった。ファンネルが10基のAガンダム相手では、苦戦は目に見えている。

ローゼン・ズールは、ユニコーンガンダムのサイコフィールドを押しさえ込むために特化した設計（公式作品「機動戦士ガンダムユニコーン」参照）だから、サイコフィールドを持たず、ファンネルを持つAガンダムの前では、意味がない。

クシャトリヤは、活躍が目立ったため、「袖付きの反乱（公式作品「機動戦士ガンダムユニコーン」での戦争）」「終結後、連邦軍が直ちに図面を接收しているし、機体も撃墜され現存していない。

シナンジュも、ユニコーンガンダムのベースとなったアナハイム製の機体であるため、図面なども連邦軍の監視下にある。

同じように、他のガンダムの設計も、一年戦争時代を除き、アナハイム・エレクトロニクスが一貫して行っている。

つまり、アナハイムにスパイでも送り込まない限り、どう考えても、

ガンダムタイプやそれに対抗し得る機体は、図面が入手出来ないの  
である。図面が無ければ、仕様が決まらず、発注すら出来ない。モ  
ビルスーツに限らず、組立済み完成品の機械を発注するという行為  
は、概してそういうものである。

また、スパイ行為に参加できる人間とは、指導者の狂信者か、金目  
当ての者かのどちらかしか居ない。だが、狂信者になる者〃スパイ  
能力に長けた者、という保証は無い。

現状では、革命軍が取る事の出来る手段は、まさに皆無に等しい。

「このまま手を打てなければ、スペースノイドの支持を得る事すら  
難しくなる……」

ロードの顔に、焦りの色が出始めていた。もう一度受話器を取り、  
先程とは違う番号を押す。

「アストルと、スウィートウォーターの進捗状況はどうなっている  
? ……わかった。失敗は許されない。慎重に進めてくれ」

” まだ、私は諦めんぞ……そのために、耐え抜いたのだから……”

ロードは受話器を置き、心の中で呟いた。

ロードの家庭は一般的ではあったが、父親が第2次ネオ・ジオン戦争の激化で職を失い、酒や賭博に走った挙げ句、失踪した。

ロード自身もまた、その頃に父親からの虐待による数多くの傷を負い、今も身体中に痕跡が残っている。

その父親に復讐を誓い、ロードは革命を掲げるテロ組織に入り、頭角を表した。

だが、苦勞して父の所在を突き止めた時には、既に脳溢血のため、古びたアパートの一角で、人知れず息を引き取っていた。

「戦争さえ……連邦軍さえ存在しなければ、こんな事にはならなかったのに……!」

この時に、ロードは連邦軍打倒を誓い、革命軍蜂起を決行することになるのである。

ガーゴイルは、コロニー「テキサス」の軍港に入港し、修理と補給を開始した。

「テキサス」は、一年戦争時代に軍事設備が無く、作戦上の重要性が無かった為、当時から既に荒れて放置されていた。それを、昨今の戦争難民の増加に対応する為に、再整備したコロニーである。

一年戦争時代に、シャア・アズナブルが「ゲルググ」を受領した頃の、コロニーの由来となった「アメリカ合衆国のテキサスを模した観光地」の荒涼たる景色はもはや存在せず、一般的な居住区中心の内装に改造され、150万人程が住んでいる。

この港は、改装時の予算を圧縮する為に、新造コロニーのシャインリバーより、更に無骨な古い構造をしている。曲がりなりにも鉄板が貼られて柱が見えないシャインリバーに対し、テキサスの港は柱も剥き出しで、構造物が丸見えになっている。

レーザーアンカーによる自動誘導も付いていない古い設備のため、元操舵手のメツシが、自らガーゴイルの舵を握って入港した。

補給や修理に忙しい整備班は動けない為、レオンとレイラが、子供達を連れて市街地へと向かった。

体力が回復したロサも、レオン達が出かけた後、暫くしてからこっそり抜け出すつもりだったのだが、補給資材の確認をしていたマークに見つかってしまった。”あちゃー、見つかった”と口を動かしたロサを見て、怪訝そうな顔で、マークがロサに声を掛けた。

「あれ？フローラ達は一緒じゃないのか？」

「ああ。ちょっと確かめたい事が有ってね。すぐ戻るよ」

「風俗にでも行くつもりかい？」

如何にも冗談っぽく、ニツとマークが笑うが、ロサは真面目に口を尖らせる。

「そんな金はねえよ」

そんなロサに苦笑した後、マークがAガンダム用のパーツが積み重ねた区画を指差した。



「戻ったら補給資材の確認をしてくれ。Aガンダムの補修パーツなんて、そう簡単には手に入らないからな。足りない物が無いか、確かめて欲しい」

「了解」

「ちゃんと動くかどうかもチェックする必要がある。特にファンネルは不良品が無いが、念入りに見ておいてくれ」

「わかった。戻ったらすぐにやるよ」

マークに軽く手を上げ、ロサは町に向かって歩き出した。

出来るだけ人気の無い、裏通りの公衆電話を探しながら、暫く歩く。

警察や軍、諜報員ですら持たない情報が溢れるような、裏社会の情報屋と連絡を取るのに、個人の携帯電話を使うと、通話履歴を突き止められた場合、相手にも危険が及ぶ可能性が非常に高い。だから、ロサの情報収集作業は、公衆電話を使うのが基本である。

幸い、10分ほど歩いた所で、公園の中にある公衆電話を見つけた。

「俺だ。例の件、調査出来たか？……成程、やはりそうか。わかった、引き続き調べてくれ。もう少し確かな確証が欲しい。そっちの事は頼む。また連絡する」

手短かに用件だけを言い合い、電話を切った。

「候補は4人か……意外に手こずりそうだな」

そう呟いた後、電話から離れ、カモフラージュの為に銀行へ寄った後、ロサはガーゴイルへ戻った。どうやら、敵のスパイの尾行は無かったようだ。

ガーゴイルは被弾箇所の外板の修理中で、あちこちでアーク溶接の青白い光がちらついている。その傍らで、モビルスーツのパーツや食料など、補給物資の搬入も進んでいた。

「俺が親父みたいに、攻撃を受ける前に気付いていれば、あの修理は必要無かつたんだよな……」

まだ気に病んでいたものの、眺めていても、自分に溶接箇所の修理は出来ない。

ロサは、マークの指示どおり、受け取ったリストと部品倉庫の搬入

資材を照会し終えた後、武器関係のエネルギーの充填を始める。と言っても、水撒きを使うホースのような電気コードを、並んでいる武装に数本ずつ繋いでいくだけで、差して労力は必要無い為、作業はすぐに済んでしまった。

充填完了まで暫く時間が掛かるため、動作チェックも出来ず、ロサは大人しく自分の部屋に戻った。だが、みんな外に出てしまい、する事が無い。

「溶接の仕方でも教わるか」

再び部屋を出たロサは、右舷の側面を修理していた作業員の一人に声を掛け、一緒に作業を始めた。

その頃レオン達は、市街地にある、比較的大き目のショッピングモールの中に入っていた。

衣料や食料の他にも様々な雑貨店などが入った、日本の標準的なショッピングセンターを平面に並べたような、いわゆる商店街に近い構成であるが、日本の駅前商店街に多いような、シャッターの下りにいる店は殆ど無い。

だが、あちこちの店の前で目を輝かせる子供2人をよそに、フロラは小さく溜め息をつき、残念そうに俯きながら呟いた。

「やっぱり、ロサも一緒に来て欲しかったな……」

ロサが回復した様子にはフロラも安心したが、それだけに、余計に残念に思えて仕方が無い。

「たまには、気晴らしも必要なのにね」

フロラの表情を見て、小さく溜め息をついたレイラも、同じ意見のようだった。

メルサとアックスは、初めてゲームコーナーのあるショッピングセンターに来たので、保護者そっこのけで、あちこちではしゃいでいる。

「スパイを警戒する必要があると言ったんだろ？フロラに気を遣ってるんだから、文句も言えんだろ」

女性陣の意見に、レオンが口を挟んだ。

「確かに、今の時点で生身の所を襲うのなら、俺達よりはロサを襲った方が、連邦には影響が大きいし、ロサの言い分も間違っちゃいない」

「確かに、ロサがガーゴイルに居てくれれば、何かあってもすぐに対応してくれるでしょうから、私達は安心して遊べますが、ロサにも気分転換は必要だと思いますよ？」

「まあ、確かにな」

レイラの意見を肯定しつつ、レオンが子供達の様子を見ながら、真剣な顔になる。

「何か他にも、理由は有るかも知れないが……」

「たとえば？」

怪訝そうな顔で、レイラがレオンを見た。少し考えた後、レオン自身も首を傾げながら話し出す。

「此处で嫌な思い出があるとか、或いは別の事なのかも知れない」

「ロサが、私達に知られたら、まずい事をしているとでも?」

「裏の世界に顔が利く上に、頭は切れるから、何を考えているのか予想しかねる部分がある事は、否定出来ない」

レオンの言葉に対し、レイラは少し考えた。

今までのロサの様子から、自分達に知られてまずい事をしていとは、少々考えにくい。それに、こんな短期滞在の場所で、現地の裏の世界に首を突っ込めば、フローラも危険に晒す事になる。

用心深いロサが、そこまでバカな真似をするとは、レイラには到底考えられない。

「でも、やっぱりロサがまずい事をしたり、裏切るような真似をするとは思えませんね。予想外の行動に出る事は、有り得るかも知れませんが」

「我々にとってはプラスになる事では、しょっちゅう予想を裏切るからなあ」

レオンが声をあげて笑う。

「レイラ姉ちゃん、次はこれをやりたい！」

メルサとアックスは、UFOキャッチャーの前で、楽しそうに飛び跳ねながらレイラを呼んでいる。

「解った、今行くわ」

その様子に、レイラが微笑みながら答え、フローラも顔をほころばせた。

その様子を、物陰でじっと見ている人物が居た。濃紺のスーツ姿の、ヤクザとも私服警官とも取れない男。

ロサが居ない事に気付き、戸惑いを感じてはいたが、暫く彼らを尾行して、ロサが同行していない事を、その人物は確信した。

「ロサは現在、別行動のようです……」

携帯電話の電話口に小声で話すと、別の場所から、数人の黒服の男が、あちこちの物陰から、レオン達の様子を伺い始めた。

気配を消して距離を取っているので、まだレイラ達には気付かれていない。

さらに別の場所から、小型三脚に乗せたライフルのスコップを覗きながら、寝そべった格好で様子を伺っている、黒服の男が居る。まだ引き金に手をかけてはいないので、音で気付かれる筈もない……  
筈だった。

だが、後頭部に拳銃が突きつけられ、更に、へし折られそうな力で首の側面を掴まれた。相手は小さな手にもかかわらず、骨が軋み、気道と頸動脈を的確に圧迫してくる。

間違いない、相手は急所を制圧する殺人術の手練れであると悟り、狙撃手の男は、構えていたライフルから手を離し、地面に這いつくばった姿勢のまま、黙って両手を上げた。

「いい子だ。少しでも抵抗する素振りを見せれば、殺す」

周囲を圧倒する強烈な殺気を放ちながら、声の主が冷酷な笑みを浮かべた。丁度、声変わりの直後のような、やや少年らしさを残した、低い声。だが、その口から出てくる言葉は、声や見た目から推定で



きる年齢からは、およそかけ離れた、物騒極まりないものである。

物静かではあるが、迷いの無い落ち着いた声が、逆に絶対的な殺意を醸し出している。この力では、抵抗すれば即刻、首の骨をへし折られるだろう。

「なぜ……ここが判った……？」

余程、見つからないという自信が有ったのだろう。這いつくばったままの姿勢で、狙撃手の男が、氣道を圧迫されたまま殆ど出ていない声で、信じられないという表情のまま尋ねた。

「簡単な事だ。自分が狙撃手として狙うなら、俺もこういう所から狙うからさ。銀行の屋上つてのは、高くも無く低くも無く、狙撃する時の隠れ易さは抜群だからな。他にも居るのか？ 答えないなら、ためえを殺してから、ゆっくり探すまでだ。この場で死んでもらう」

首を掴む力が更に強くなり、辛うじて呼吸を止めない程度に、指先が頸動脈を圧迫し始めた。

次第に狙撃手の目の前が、暗くなり始める。力の差を見せつけるように、声の主は片手で首を掴んだまま、狙撃手の体を難なく持ち上げた。宙吊りにされた狙撃手が、勝てないと悟り、口を開く。

「男の軍人への狙撃を、合図にする手筈に……なっている。狙撃が無ければ……他の者が……動く事は無い……。他に狙撃手は……いい、居ない」

首の骨がきしむ激痛と、遠くなりつつある意識、それでもハッキリと感じ取れる程の背筋が凍るような殺気に、男は震え上がり、いとも簡単に話してしまった。修羅場をくぐってきた単独で動くプロではなく、雇われの組織員といったところなのだろう。

「そういうことか」

殺気の主は、納得したように呟き、狙撃手の首から手を離して、地面に放り出した。突然、呼吸が出来るようになった狙撃手が、一気に気道に入った空気の量に、堪らずむせ返った。

「こいつは貰って行くぜ」

殺気の主がそう言って、空いていた左手でライフルを掴み上げた。周囲にまで殺気を充満させ、奪い取ったライフルを狙撃手の後頭部に突きつけたまま、声の主が尋ねた。

「黒幕は誰だ……？」

再び息を呑む状態になってしまった狙撃手は、出そうとした言葉も恐怖で声にならず、うつ伏せのまま口だけを必死に動かしたが、声の主はその脇腹を蹴り上げ、顔を自分の方へ向けさせた。

「誰だ？」

狙撃手は、もはや痙攣に近い震えを起こす口を、必死に動かす。

「ロ、ロード……」

最初は口がそう動いた。それを見た声の主が、片手で持ったライフルの引き金を、無造作に引いた。

弾は男の肩を掠め、僅かに血が滲む。もう一度引き金が引かれた。今度は耳たぶに同じように血が滲んだ。

スコープも覗かずに、他人のライフルを片手で扱いながら、このような撃ち方をそう簡単に出来るものではない。押し潰されそうな違和感に襲われる程、更に殺気が強大になる。

「もう一度だけ聞いてやる。誰だ？」

堪らずに観念した狙撃手が、声を出す事は出来ないまま、別の名前を口にした。

その名を理解した声の主は、もう一度ライフルの引き金を引いた。弾は男の首筋を掠め、ワイシャツの襟の頂点を切り裂き、襟だけが垂れ下がった。もう1cm体に近ければ、頸動脈を直撃しているところである。

「もう一度、彼らの周りで姿を見たら、貴様ら全員殺す。戻って仲間に伝える。2度目の警告はしない。シャインリバーやグラナダみたいに、皆殺しで組織を制圧されたくなければ、大人しく従う事だ」

それだけ言い残して、声の主はライフルを持ったまま、その場を立ち去った。

相手を押し潰すかのような異常な殺気に、さすがにレオンとレイラが気付いた。

だが、子供達を怯えさせたく無いとの気遣いから、常に見える場所に居る事で、子供達を守る事にした。

何回か、銃声のような音も聞こえた様に感じ、2人が顔を見合わせた。だが、周囲に着弾した様子も無く、騒いでいる者も居ないから、街中で釘でも踏んだ車のタイヤがパンクしたのかも知れない。もう一度、訝しげな表情で顔を見合わせた後、2人は警戒を解いた。

やがて遊び疲れたメルサが眠くなり始め、レオンが抱えてやる回数が多くなって来た。

「そろそろ、戻ろうか」

レオンがアックスを促し、一行はガーゴイルに戻る事になった。

## 17・進路変更(前書き)

ショッピングモールから、無事戻ったレオン達。

一方で、ロサがふと気付いた事とは…。

## 17・進路変更

遊び疲れたメルサとアックスを寝かしつけた後、レオンとレイラは、フローラに2人を任せ、ガーゴイルの自販機の前で、殺気の主の正体が誰なのか、真剣に討論していた。

「やっぱりレオンさんも、あの殺気に気付いていたんですか？」

「ああ。必要以上に子供達を怯えさせたくないと思っただんで、言わなかったんだがな」

「どっちだと思います？あの殺気の主」

レオンも少し考えたが、やはり結論は出そうもない。

「こっちに対するものなら、あの場で狙って来てたんじゃないか？同じ狙うなら足手纏いが居る方が、俺達を狙いやすいだろうからな」

どうしても、語尾が推測になってしまう。だが、放っておくのも意味が悪い。もしレオン達が狙われているとしたら、とんでもないことになるであろう事は、雰囲気から容易に推測出来るからである。

「ということ、あの殺気の主が、連邦軍の人間だとしても？距離があっても判るような、かなり異常な感じでしたよ？」

「確かにそうなんだが、ロード軍側なら、狙って来なかった理由が分からん」

レオンも考えあぐねている。

確かに、レイラの言うとおり、異常な強さの殺気だった。あれほどの威圧感を出せる人物は、連邦軍では思い当たらない。

「……………ロサか？」

「雰囲気が違うような気がしますが……………」

即答したところを見ると、レイラも同意見のようだ。

「ロサでは無いとすれば……………」

レオンが呟いたところへ、外板の修理作業を手伝っていたロサが一息入れにやってきた。



「誰か呼んだ？」

疲れたのか、いつもより語尾が少々伸びた、呑気な声を出すロサに、レオン達は思わず気が抜け、張り詰めた空気も緩んだ。

「いや、何でもない」

「あの殺気の話かい？」

「!？」

見透かしたように言うロサの言葉に、レオンとレイラが顔を見合わせた。

「あんな強大な殺気、気付かない訳ないだろ」

ロサは平然と言い放った後、オレンジジュースを買って、一口飲んだ。

「ここに居て気付いたのか？」

「俺は、喧嘩で巻き上げた金で生活してたんだぜ？相手を殺気で威圧できなければ、喧嘩は負けだ」

目を丸くするレオンを見て、ロサは真顔で言い、さらに続ける。

「おそらく、みんなを狙っていた奴を見つけて、威圧したんだろ」

「なぜそう思う？」

「みんながああ殺気の主に襲われてたら、今頃ごっやって、呑気にジューズなんか飲んでられないだろ」

よく冷えたオレンジジュースを、先程よりやや多めに口にして、口サがふうっ……と吐息をついた。

「あれは連邦軍の人間だと言うのか？」

「俺達にとって、敵じゃない事だけは、確かだな」

「もしあの殺気の主に、俺達が襲われてたとしたら、今頃どうしてたんだ？」

「何かあったなら、こんなに街の様子が平和じゃないだろう。街の様子を見れば解るさ」

妙に説得力のある意見だと、レオンは思った。だが、胸のつかえが取れない以上、やはり聞いてみるべきだろう。

「お前じゃないんだな？」

「俺は、ここで外板修理の手伝いをしてた。簡単な修理なら、もう俺の手で出来るぜ」

ロサは、ジュースを飲み終え、紙コップをゴミ箱に投げ込むと、レオン達に顔を向けた。

「そんなに気になるなら、確かめて来ようか？どんなコロニーだつて、ヤクザ組織の一つや二つ有るもんだ、そいつら締め上げて吐かせれば、すぐ判るから」

爽やかな笑顔の背後に、何故かどす黒いオーラが見える気がしたレオンとレイラは、冷や汗を垂らしながら首を横に振った。

「冗談だよ。フローラも居るんだ、バカな真似はしないよ」

明るい声で言うと、またロサは修理の手伝いに出て行った。

” ちょっと、やり過ぎたかな？”

ロサが、表情に出さずに反省する。その背中を見て、レオンがレイラの顔を見た。

「あまり深く追求しても無駄だな」

諦めたレオンが、溜め息交じりに言い、レイラもやれやれといった表情で頷いた。

そこへ、マークがロサを探しに来た。

「ロサは？」

「修理の手伝いをしてるらしい。外に居なかったか？」

「もし見たら、ファンネルのチェックを頼むと伝えてくれ。エネルギー

ギーの充填が済んだから」

「わかった。探して来るよ」

レオンに呼ばれ、ロサはモビルスーツデッキで、ファンネルのチェックを始める。

流石にコロニー内でビーム砲は使えないので、思っている通りに動くかどうかだけを確認する。どうやら異常は無いようだ。

「出港したら、ちゃんと撃てるかどうか確認が必要だな」

その一言で、ロサは今回の一連の流れを思い出した。

”ちゃんと動く?……そういえば、同じように腕を破壊されたロドが2回目の攻撃に來ないのに、何故ワルザは、あんなインターバルで攻めて來れたんだ?”

ロサが、ふと浮かんだ疑問を説明しようと、これまでのワルザとの戦闘を頭の中で再生してみる。

”しかも、サラマンダーに來た時のグリアラスは、俺に撃たれたま

まで腕が無かったのに、ワルザの腕は毎回、ちゃんと直っていた。あれは、どういう事だ？”

ファンネルのエネルギーは戦艦で補給するにしても、修理はガーゴイルのように、きちんとした修理設備が無いと出来ない筈である。

”サラマンダーのニック艦長は、サイド3から出たようだと言っていたが、まさかサイド3が、完全にロード側に付いた訳じゃあるまいな？”

そうなれば、距離的に最も近く、元々ジオン側だった筈の月面都市グラナダも、ロード側に傾きかねない。

そうなる前に、サイド3のロード革命戦線の拠点を、先に叩かなければならないのではないか。

「そうしなければ、ワルザとグリアラスの挟み撃ちに遭う」

通常、ロサがワルザやグリアラスを追い払っているのは、どちらか1方向ずつから攻められていたからである。同時に前後から攻められれば、どちらかには手が回らない。

そんな挟み撃ちを繰り返されれば、当然疲労困憊になる。如何にガ

「ゴイルが強いといえど、いずれ撃沈される事になるだろう。」

「艦長には、話しておいた方が良いな」

作業を終えたロサは、ブリッジに上がり、メッシにひととおりの話を始めた。

「なるほどな」

メッシも、ロサと同じ事をつつす感じてはいたようで、ロサの話もすんなりと理解した。

「しかし、作戦の大幅な変更を伴うものになる。サラマンダーも、既にロンデニオンに向かう行程の半分近くは、消化してしまっているしな……」

メッシが難しい顔をして腕を組んだのを見て、ロサは首を横に振る。

「サラマンダーを呼び戻す必要は無いさ。むしろ、サラマンダーをガーゴイルの前に残しておいたほうが、少しでもガーゴイルが攻められた時にクッションになる」

「ガーゴイルだけで、サイド3の拠点を叩けるとでも言いつもりか？」

「いくら ガンダムでも、そいつは無理だな。コロニー全体じゃなく、奴らの根城になつてゐる施設だけなら、出来なくは無いかも知れないが、それでも正直きつそつだ。他に、近くに動ける艦は居ないのか？」

「ジオン共和国の駐留軍も、基本的には保安部隊だから、コロニーが有事の状態でない限り動かせない。あとは、今フォン・ブラウンにいる「シルフィード」くらいしか、この辺りには居ない筈だ。あれも、それほど強力な戦力ではない」

儼然とした顔のメツシに、流石のロサも呆れ顔である。

「情けない事を、随分はつきり言うね」

「事実だからしょうがない」

まさに、取りつくシマも無い。その様子に、ロサが頭を掻く。

「サラマンダーは、拾ってくれた礼代わりに、俺がスパルタ訓練してきたから、少しはマシになつたけど、そのシルフィードつてのも、



訓練が足りてないんじゃないの？」

「うちが攻められ過ぎなんだ」

即答するメッシに、ロサがわざと大袈裟に、肩をすくめる。

「なんだか遠まわしに、俺のせいになされてます？」

「ハートレイが居たから、元々こんな感じだ」

” やっぱり、ロード軍にとって目障りである事に変わりはない訳だ。この船”

「シルフィードが、うちの後ろで、しんがり（撤退時に大将騎を守るため最後部で敵の追撃を防ぐ武将の事）をやってくれば問題は無いけど、務まりそうもない？」

半ば呆れ顔のロサの質問に、メッシが即答する。

「無理だな。レオンとレイラの二人掛かりでも、ワルザに翻弄されていた。シルフィードじゃ話にならない」

メッシの言葉の刃の鋭さに、ロサが目を丸くする。

”そんなに、バツサリとぶった切らなくても良いじゃん。一応味方だよ？艦長……”

「やっぱり本部に掛け合うしかなかるう」

「ダニエルさんに、戦力の援助を頼むしか無いか」

まるで、「ご近所に頼み事をするように言う」ロサに、思わずメッシが目くじらを立てた。

「ダニエルさんって、お前、総司令に向かって何を親しげに!？」

「親父の知り合いだよ？ダニエルさんも、俺の事は知ってるさ。地球でも話はしたし、ちゃんと俺達にも協力すると約束してくれた。勝ちさえすれば、戦争をきちんとした形で終わらせてくれる人だ」

意外な繋がりを持っているものだと、今度はメッシが呆れ顔になった。

「一体、どんな話をしたんだ？」

「俺たちが勝ったら、連邦政府の宇宙からの撤退と、コロニーの独立採算制の確立をしてくれと」

「ふーん……って、ちょっと待て！！何だって！！？」

その内容の重大さに、鼻を鳴らしてから暫く経ってから気付いたメツシが、思わず大きな声を出した。

だが、ロサはメツシとは対照的に、至って冷静な顔で答える。

「要するに、連中は連邦のやり方が気に食わないんだろ？それなら放っておいて好きにさせれば良い。その代わり、後で泣きついても知らないよと言っておけば、後で破綻したコロニーは大人しく連邦に従うしか無い。各コロニーで軍隊を持ち、万一侵略が始まったら全コロニーから抹殺攻撃をするように協定を定めれば、よそのコロニーをそうは簡単に攻められない」

「地球が一斉に攻められたら？」

ダニエルと同じ質問に、ロサが「やはりそこが気になるか」と言いあげな表情で、軽く溜め息をついて答える。

「鉱物資源の無いコロニーに勝ち目があると思う？特に兵器に使えるエネルギー系の資源は、太陽か木星の水素でも使えない限り、宇宙には皆無だし、その水素を爆発させるにも、地球以外には余裕が無い酸素が要る。大半のコロニーが使ってる、太陽光発電のエネルギーだけでは、戦争なんて出来ないし、木星は連邦が昔から抑える上に遠いから、簡単に攻められるものじゃない。元々資源の無いコロニー同士が争ったって、大きな戦争になる筈が無いんだ」

「しかしそれではロード軍と何ら変わりが……」

「その通りさ。俺たちはどちらも、戦争を終わらせるという点においては、共通しているんだよ。リーダーが違うだけでね」

「……！！」

ロサの解釈に、メツシが絶句した。だが、その表情を見て、当たり前のようにロサが続ける。

「だからこそ、地球とコロニーを切り離して、根源になっている、いがみあいを取っ払っちまうのさ。考えてもみなよ。地球にだってよく有るだろ？日本でも西と東で対抗心持ったり、イタリアだって北部と南部でずいぶん温度差がある。地球と宇宙とで、温度差が生まれないはずが無いんだよ。日本やイタリアを切り離すことは出来

ないが、地球と宇宙を切り離すことは、今の状況なら、難しくない」

「そんなことを、総司令に……!?!」

「話したよ。快諾してくれた。ダニエルさん自身も、どうやら同じことを考えていたらしい。ただ、立場や周囲のこともあるから、おいそれとは口に出来なかつたんだ。あの人が公の場で口にすると、俺みたいなガキが理想論を言うのとは、訳が違う」

「……」

下手な大人より、余程筋が通っている。メツシが聞いていても反論の余地が無い。

ロサの発想力と行動力、そして相手の権力に臆すること無く発言出来る度胸に、呆れたのと驚いたのが半々の表情で、メツシの目が点になった。

その様子に、ロサが苦笑しつつも、話を続ける。

「いま連邦政府を気に入らない連中の大半は、地球からの独立とは、即ち兵器に使える資源が手に入らなくなる事に直結する、とは考えていない。だから、公の建前として、ロード革命戦線に勝てば全コ

ロニーの独立を確約すれば、スパーズノイドの支持だつて得られる事になる。今の連邦に足りないのは、根本的な解決策を考える脳みそだ。圧力で抑えつける事しか考えてない。それでは必ずまた反発が起きる。でも、ダニエルさんなら、そんな心配は無い」

「いつからそんな事を考えていたんだ？」

「シャトルで地球から飛ぶ直前だよ。最初は、スウィート・ウオーターを独立させれば戦争が終わるんじゃないかと考えた。でも、それは違うんだ。スウィート・ウオーターは既に個人名で買い取られていて、独立しているんだ。戦争してまで、民衆の解放なんてやる必要性が無いんだよ。奴の本当の狙いは、連邦政府への反感を利用して戦争を起こし、自分達の手で連邦政府に勝ったからと言って、宇宙の有力者を丸め込んで独裁をするつもりなんだ」

「……」

メッシは、昔の戦争で、ザビ家がそれと似たような事を考えていた、と聞いたのを、思い出した。

「だからこそ、俺達は負ける訳にはいかない」

”で、何の話をしてたんだっけ？えっと、確か……”

話が逸れて、ロサの脳みそが話を元に戻そうと、フル回転を始める。

「サイド3のロード軍基地の殲滅と、その為の戦力確保と、作戦変更。まずはワルザを潰さないと、こっちがきつい」

「軍部全体規模の会議が必要だ。いつもどおりならフォン＝ブラウンでやる筈だが、ガーゴイルからも出席者を出さなければならぬ」

腕を組むメツシの顔を見て、ロサが顎に手を当てて考え込む。

「しかし、艦長が抜けるとガーゴイルは動けないぞ？副艦長のロバートさんが、仮眠を取れなくなっちゃう」

「確かにそうだな。レオンなら大丈夫だろう。あと、もう1人くらいは、出した方が良くもな」

「レイラ姉ちゃんなら大丈夫じゃないか？出来れば1人はリーダーが欲しいから、ケニーさんは居てもらいたいな」

「分かった、そうしよう」

「サイド3に行くか行かないかで、出る時の向きが全然違うな」

呆れた様に言うロサに、メッシも頷き、憮然とした表情で言う。

「どっちに行くか決まらん事には、出港が出来んな」

「まあ、別にどっちでも良いけどね。俺はガーゴイルが沈まない様にするだけだから。あ、そうだ……アックス達のお守り、どうしようっ。」

今になって思い出したロサが、しまった……と言いたげに、頭を掻いた。その様子に、メッシが冷たく言い放った。

「お前が言いだしっぺだ、面倒見る」

「……了解。完全に忘れてた……」

ロサが舌を出して肩をすくめた後、メッシに向き直った。

「俺がフローラ達に付き添うなら、銃の消音器を貸してくれないか？万一、発砲する事態になったら、銃声があの子達の不安を増大させる事になる。少しでも冷静に対処させなきゃならないから、サイ



レンサーは欲しい」

「分かった、銃の種類は確かベレッタM93R、弾は9mmルガー弾だったな？マークに連絡して、武器庫から出して貰っておく。出かける前にモバイルスーツデッキに寄って、受け取ってくれ」

メッシの言葉に頷いた後、ロサが思い出したように、訝しげな表情でメッシに尋ねた。

「この親父の銃、M93Rだけ？レオンさんが、対テロ組織用に造られた簡易マシンガンだって言ってたけど、レイラ姉ちゃんやレオンさんのとは違うよな？なんで？」

「ハートレイも、昔はベレッタM92F、つまりレイラやレオンと同じ、軍や警官のブローバック式では標準品の銃を使っていた。だが、お前が生まれる前、あいつが地球に居た頃に、銀行強盗の現場に居合わせた事があってな。連射が出来ないM92Fで銃撃戦になった時、応戦しきれずに民間人の一人……当時のハートレイの婚約者だった人が巻き込まれて、亡くなったそう。その時、引き金を引いた直後に、犯人からの流れ弾が、被害者に当たったらしい。無論、ハートレイが犯人を射殺したんだが、あの時、自分が連射が利く銃を持っていたら、誰も傷つかずに済んだのにと、一度だけ漏らしていた事があった。その後、支給品をある程度の範囲で選択出来る、中佐になった時に、特例扱いで変えて貰ったそう」

「……そうだったのか」

もし、その人が生きていたとしたら、自分は生まれていなかったのかも知れない。フローラに出会う事も、無かったのかも知れない。

だが、もしその人の子供として生まれていたら、今の自分のように親を尊敬出来ない、自分を生んでくれた事に感謝出来ない、そんな子供には、ならなかったのかも知れない。

今のように、家族がバラバラになってしまふ事も、無かったのかも知れない。

ふと頭をよぎった、決して起こる事の無い「もしも」という状況が、ロサの表情を複雑なものに変えていった。

「どうかしたのか？」

言葉を失ったロサの顔を、心配げにメツシが覗き込んだ。

「いや、親父も結構、身近な人が死ぬ辛さを、知ってたんだなって思ってた。そんな風に見えた事が無かったから、ちよつと意外だったなと思って」

メッシの言葉に我に返ったロサが、珍しくはつきりしない言い回しで、語尾を濁した。

「先に、サイレンサーを受け取って来るから、マークさんに連絡を頼む。やっぱりフローラ達に、あまり物騒な物を見せたくは無いから、武器庫に寄らずに食事に行きたいからさ」

「分かった」

ロサがブリッジを出たのを見届け、メッシは艦長席のインターホンで連絡を取った後、少しだけ高い艦長席から、前方の窓の外を見た。

”さっきのロサの表情……。俺は、何か余計な事を言ってしまったのだろうか？”

メッシの中で、答えの出ない自問自答が、暫く続く事になった。

この後、レオンとレイラは、フォン・ブラウンでの連邦軍作戦会議に参加するため、ジェガンに乗り込み、一旦ガーゴイルを離れる事

になった。

「レオンさんとレイラさん、何処へ行ったの？」

部屋のデスクで、何やら図面を見ていたロサのもとへ、フローラがやや困惑した表情で、2人を探しに来た。

「2人は軍の会議に行ったよ。月のフォン＝ブラウンへ出張だ」

「どうしよう？食事に行こうと思ったんだけど……」

口元に右手を近づけ、更に困惑した表情を浮かべるフローラを見て、ロサが立ち上がり、ぎこちない笑顔を浮かべた。

「艦長からの指示で、俺が代わりに付き添う事になった」

「えっ……？」

到着前のロサの言動からは、考えられない事を言われ、フローラが目丸くする。その様子に、ロサが苦笑しながら、人差し指で頬を掻いた。

「まあ、何とかなるだろ」

” 組織には牽制を掛けてあるし、モビルスーツさえ来なければ、どうとでもなるぞ”

ロサが思った途端、急にフローラが嬉しそうな笑顔を見せた。あまりにも明るいその表情を見たロサが、照れ隠しで憎まれ口を叩いた。

「レオンさんやレイラ姉ちゃんに行くのが、嫌だったとか……？」

フローラはハッと我に返って、真っ赤になって後ろを向いてしまった。

「アックスとメルサ、呼んでくるね」

「……うん」

振り向かずに部屋を出るフローラの背中を見て、ロサが後悔した。

” しまった。フローラ、もしかして怒った……？”

厚めのアラミド繊維が入ったデニムジャケットとジーンズに着替え、ロサも出かける準備を始めた。これなら、多少の銃撃なら、盾になる事は出来る。

”そうか。ロード軍の連中にとってのロードは、俺にとってのフローラと似たようなものなのか。だから……”

このときに、初めて「自分が盾になってでも守り抜きたい者」への想いに、ロサが気付いた。自然と表情が真剣なものに変わっていく。

”でも俺が死んだら、フローラが幸せかどうかを、確認する術が無い。やはり、せめて戦争が終わる迄は、俺が生きて守り抜かなければならないだろうな”

銃の先端にサイレンサーを捻じ込んで、弾を確認した後、弾倉を銃に戻す。M93R用の予備の弾倉は武器庫にも無かったから、弾切れになったら負けである。

”こいつを使わない事を、祈るのみだな”

左の懐に吊ったホルスターに、銃を収めてジャケットを羽織り、ロサは部屋を出た。部屋の前では、ありあわせの服で、精一杯おめかししたフローラと、いつもどおりの2人が、廊下でロサを待っている。

た。

先刻、レオン達を狙撃しようと、黒服の男達が様子を窺っていたシヨッピングモールに、ロサ達が差し掛かった時、またその手の視線を感じたロサは、平静を装ったままの表情でフローラ達と会話をしていたが、自分の警告を無視した相手の行動に、穏やかな心中では無かった。

”確かここも、前に一度、制圧していた筈なんだがな……。しようがねえ、二度と齒向かわないように、もう一度シメておくか”

潰した組織の詳細など、いちいち覚えている程、律儀な性格でもない。ロサが、その日の夜に組織の制圧（殴り込みとも言っ）を決めた直後、離れた位置からのライフルの引き金を引く音が、ロサの耳に届いた。

ロサが拳銃をその方向に向け、3連射の弾丸を放ったのと、相手が引き金を引いたのは、ほぼ同時。ライフルの弾は最初の弾丸と激突して火花を散らし、甲高い金属音を発して碎け散った。2発目がライフルの銃口にめり込んで銃身を塞ぎ、更に3発目が狙撃手の肘を貫通し、骨を砕いた。

サイレンサーを通した口サの銃声は、周囲の雑踏に掻き消され、フローラ達の耳には届かなかった。しかし、ライフルの銃弾が弾け飛んだのを目の当たりにした黒服の男達は、その場での襲撃は不可能と判断し、全員が、そのまま街中へと散って行った。

フローラ達が口サを見た時には、既に銃は懐に入れており、メルサが喫茶店の前で呼んでいるのに気づいた口サも笑顔を作って、その中へと入って行った。

その日の深夜2時。本来の戦闘服である、黒いジャージを着た口サが、当直者がブリッジでうたた寝をしているのを確認した後、乗員通路の指紋ロックを素早く解除し、ガーゴイルの外へ出た。やはり手早く閉め直し、迷わず街の裏通りへと向かう。

とある雑居ビルのガラスのドアが、派手な音を立てて蹴破られた。駆けつけた拳銃を持った男達が、正確に首や鳩尾などの急所に拳を叩き込まれ、次々に倒されていく。無論、引き金を引く余裕すら与えられず、正になす術も無く、地面へと突っ伏していった。

「何事だ!？」

重厚なローズウツドの執務机の前に居た、ボスと思しき壮年の男が、



騒ぎに気づいて叫んだが、聞き慣れた声の返事は無かった。代わりに、やや高めの少年の声が、ドアの向こうで鈍く響いた。

「邪魔するぜ」

慇懃な物腰で少年の声がそう言った後、分厚いローズウツドのドアが蹴破られ、何かが破裂したような大きな音を立てて、地面に倒れこんだ。

「なっ……！お前は、確かシャインリバーの……！！」

ロサの顔を見た途端、壮年の男が跳ねるようにして後ずさり、執務机から離れた。

「何だ、俺の面を知ってると言う事は、てめえらじゃ無えのか？」

ロサが若干拍子抜けした声を出した後、音を立てて壁にぶつかった男を睨んだ。

「何の用だ！？」

真っ青になった男が、どもりながらロサに尋ねた。肩が大きく上下

していると言う事は、やはり冷酷非道な潰し方をするというロサの事は、知っているのだろう。

「晩メシ食いに歩いてた時に、俺を狙撃した命知らずが居る。ためえらの中に、先走った馬鹿が居ねえか？」

適度に殺気を放ちながら、ロサが執務机に拳を叩き落す。その音に跳ね上がった男は、震え上がりながら、必死の形相で首を横に振る。

「し、知らねえ！！お前の面を見て狙う馬鹿が、うちに居るかよ！！」

その様子に、本当に知らないようだと思ったロサが、窓外の夜空よりも更に暗く見える、どす黒いオーラを全身に纏いながら、ニヤリと冷酷な笑みを浮かべた。

「そうか……。そいつは悪かったな。なら、その馬鹿がどこの組織の人間か、調べてくれ。今日の昼飯を食いに来た時に、もう一度寄らせて貰う。その時までに分からないなら、そんな使えねえ組織は、この世に必要無い……。この意味が分かるな？」

痙攣に近い震え方で、壁に椅子をぶつける連続音を響かせながら、男が頷いた。

その翌日の朝、新興の麻薬組織が壊滅し、関係者全員が縛り上げられて、大量の麻薬と共に警察署の前に転がされていたという、現地の人間にとっては、かなり不可解なニュースで、コロニー中が持ちきりになったという。

” 結局、ロード軍かどうかも怪しい女が黒幕か……。ますます分からなくなっただな”

翌日、殴り込みの被害に遭った組織の証言を元に、メッシン達には内密で、似顔絵をコロニー中の組織にばら撒いたものの、結局ロサは、狙撃を依頼したという女の手掛かりを見つける事は、出来なかった。

ロサの表情も、やや浮かないものであったが、そう簡単に手掛かりが見つかるとも思っていない。

” まあ良い、フローラ達が安全に外出できるなら、問題は無かろう”

「ロサ、どうしたの？」

「何でも無いよ。入る店、決まった？」

フローラの声に、明るい声で返事をしたロサが、昼食を取る店を決めたフローラ達の後を追った。

ガーゴイルのドック入りは、3日目の夕方まで及んだが、先のAガンダムの活躍を警戒したのか、ロード軍からのモビルスーツによる攻撃は、受けずに済んだ。

18・上達（前書き）

テキサスを出港後、ファンネルの砲撃チエツクを終え、ガーゴイルに戻ったロサに、グールが声を掛けた。

その意図とは 。

「まだサイド1は交戦状態では無い、月の周辺に幾らか戻した方が良いのではないか？」

「しかし、サイド1を手薄にした隙に襲われたら、宇宙での拠点が失われる。ロンデニオンを手薄には出来ん」

「まだ「シルフィード」も同じ空域に居るし、有事になればサイド3の駐留軍も動かせる。サラマンダーを戻す必要は無いだろう」

そんな議論が続いた連邦議会も終わり、ガーゴイルは、ほぼロサの考えどおり、先にサイド3のロード革命戦線の拠点を叩く事になった。

その後にグラナダ、ロンデニオンで補給を受け、スウィート・ウオーターを目指すことになったガーゴイルは、サイド1のロード軍本拠地殲滅を急ぐため、レオンとレイラは途中で合流する事になり、修理完了後、そのままテキサスを出港した。

出港後、ファンネルの砲撃チェックを終え、Aガンダムは帰投後の

点検をしていたロサに、グールが真剣な表情で声をかけた。

「終わったら、ちょっと付き合っただ貰えるか？」

「どうした？」

どちらかというと明るい顔が多い筈のグールが、表情を崩さないのを見て、ロサが点検の手を止め、向き合った。

「この前の攻撃で、レオンさんが被弾しても、俺には何も出来なかった。俺も、大抵はレオンさんと動くから、いつまでも足手纏いになつてる訳にはいかない。だから、シミュレーションの相手を頼みたいんだ」

「Aガンダムで？」

「今の状況では、ジエガン同士じゃ駄目だ。Aガンダムと互角にやれる位の覚悟が無いと、この先やっていけないような気がする」

”本気のAガンダムにジエガンで勝つてのは、多分俺でも無理だけどな”

ロサは、内心ではそう思いつつも、その心意気を買っ事にした。やり方はサラマンダーの時と同じで良いだろう。

マークに設定を頼み、ロサとグールがモバイルスーツに乗り込む。

「ファンネルを使って、本気でやってくれ」

「シミュレーションなら、死ぬ事も無いし、遠慮なくやらせて貰うぞ。俺がジェガンかサラマンダーを撃墜したら勝ちだ。行くぜ!!」

母艦をガーゴイルに設定しなかったのは、自分の手でフローラの乗っている艦を撃てないと、ロサが物言いをつけたからである。

基本構造やカタパルト周辺の内部レイアウトは、どちらもほぼ同じなので、さほど違和感はない。

ロサが敵の設定なので、あらかじめ距離をとって宙に浮いている。

グールのジェガンがカタパルトから飛び出すと、いきなりロサがファンネルを繰り出した。

「ファンネルのビームも、物理的な見方をすればビームライフルの



火線と同じだ。威力は対して変わらないから、ビームライフルで狙撃すれば、止める事が出来る」

ロサが説明しながらファンネルを展開し、一斉掃射を放つ。

最初の勝敗は、その一撃で決まった。ジェガンもろともサラマンダーのブリッジが吹き飛ぶ。

「……あいつ、ホントに躊躇い無く撃ちやがった」

傍らでモニターを見ていたマークが、顔を引き攣らせながら、思わず突っ込んだ。フローラがもし乗っていなかったら、恐らくガーゴイルでも、ロサは何の躊躇も無く発砲していただろう。

「俺がジェガンに乗っている時に、今のをどう防ぐか見せてやるよ」

全身が冷や汗まみれのマークをよそに、涼しい顔のロサが、隣のジェガンに乗り移り、操作を始める。グール機のスクリーンに、ロサの操作するジェガンの映像が映し出された。

ロサのジェガンがガーゴイルから飛び出し、Aガンダムと対峙する。ロサが守る場合は、必ずガーゴイルに設定する。

収束したファンネルの一斉掃射に対応して、ロサがビームライフルを連射し、全ての火線の先端を爆発させて食い止めると、ファンネルが広範囲に展開を開始した。

このときグールは、ロサのジェガンが自分よりAガンダムとの間合いを大きめに取り、ガーゴイルの近くに居る事に気が付いた。

「おおおおっ！！！」

雄叫びとともに、ロサがビームサーベルを抜き、Aガンダム目掛けて突撃する。10基のファンネルの半数がガーゴイルを狙い、残り半数がロサのジェガンを狙う。

ロサは左手のビームライフルの連射し、1基のファンネルに2発ずつビームを撃ち込んで、狙撃の阻止と同時に全てのファンネルを撃墜した。流石に、シミュレーションなら死ぬ事は無いから緊張感は全く無いし、自分が扱う機体の癖は知っているから出来るのだろう。そのままジェガンが、ビームサーベルでAガンダム本体に斬りかかる。

一連の様子を見ていたグールが、自分と同じ機体と思えない動きの違いに、呆然としている。

「Aガンダムにジェガンで勝つてのは、正直俺でも無理だと思うが、防御だけならこの程度は出来る。まずはこれが出るようにならないと、ファンネルを使う機体を相手にするのは無理だ。ワルザやグリアラスを相手にするには、本体の移動の速さにもついていく必要がある」

まるで格闘ゲームのような速さで、ロサがビームサーベル以外にも手足で連続打撃を加えていく。蹴りが空を切っても、そのままう一本の足の回し蹴りが飛んでくる。これをAガンダムが全てガードし、その一方でAガンダムからも、隙を突いて同様の攻撃を繰り出して来る。

こうして見ると、ジェガンもAガンダムも、蹴りや拳打を繰り出す速度は、そう変わらない事が判る。実戦の最中は死なない為に必死だから、まず気付かない要素である。

「Aガンダムは親父の設定になっている。俺同士じゃ永遠に勝負がつかないからな」

これだけの連続攻撃の合間を縫って、ロサが解説する。

やがて、ジェガンが右の居合い切りでビームサーベルを繰り出した瞬間、Aガンダムとの間で爆発が起こった。

Aガンダムの手甲のグレネードランチャーのミサイルが、煙幕を作るために発射直後に爆発したのだ。

「親父の常套手段だ」

だが、ジエガンのライフルが、Aガンダムの頭部を捕らえた。ジエガンの勝ちだ。

「あら？いくらCGデータといっても、勝てないと思ったのに……？」

ロサが、予想外の展開に、思わず間抜けな声を出した。

「母艦がガーゴイルだと、攻撃も防御も通常の3倍だな」

マークが呆れた声を出した後、ロサに挑んだ事を後悔したグールが、顔を引きつらせた。

「これを、俺にやれと？」

「とりあえず、防御するところからだな」

ロサが、平然と言い放つ。

「防御が出来るようになったら、次はワルザとグリアラス相手のシミュレーションだ。既に俺が録画したデータを持つてる」

「そこまで行くのに、先が長そうだな……」

グールが情けない声で、弱音を吐いた。

だが、意外にもグールの上達は早く、3回目でAガンダムからの砲撃を全て防御し、ファンネルの半数を撃墜するまで腕を上げた。

ワルザとグリアラスのCGシミュレーションでも、ファンネルを数基ずつ撃墜し、完全な防御をして見せた。サラマンダーの連中よりは、スジが良いらしい。

「思ったより、やるじゃん」

その上達振りに、ロサが感嘆の声をあげ、再びAガンダムに乗り込んだ。

「もう一回、直接操作で相手になってやる。CGじゃないから、データに無い動きもしてやる」

「よし、行くぞー!!」

最初と違い、グールもかなり自信がついたようだ。

ロサが攻撃パターンを変え、ガンダム本体のスピード重視の攻撃に切り替えた。グールもそれに対応し、ライフルの単発で狙撃しながらAガンダムの動きに合わせてビームサーベルを振りかぶる。

ファンネルの狙撃をかわしつつ、ライフルで数基を撃墜し、そのままAガンダムに斬りかかる。

互いに切っ先を弾いた後、大振りしたビームサーベルを目隠しにして、ジエガンがライフルを連射する。

銃口が見えなかったロサが慌ててのけぞり、残ったファンネルでジエガンを狙撃するが、またかわされる。

「あつぶねー……! ああいうのもアリなんだな……」

ロサが思わず冷や汗をかく。

CG画像なら、Aガンダムが反応し切れずに直撃されていた事だろう。

「まだまだあ!!」

上達の手応えを感じたグールが、勢いよくロサに攻めかかる。

「面白え……勝負だ!!」

ロサも真剣になり始めた。

結局グールは、Aガンダムの撃墜には至らなかったものの、ファンネルを全て撃ち落とし、サラマンダーを守り切るまで上達した。

ロサの予想を遥かに超える、大きな進歩である。

「ちょっとは自信がついたようだな」

ガンダムから降りたロサが、グールを褒めた。グールの表情は、

最初の秒殺された時とは、明らかに違っていた。

「また頼むよ。有難う」

「次に撃墜されないように、俺も腕を上げないとな」

冗談めかした声で言ったロサだが、半分は真剣だった。事実、目が笑っていない。その様子を見ていたマークが呟いた。

「意外と良いパイロットに恵まれてるみたいだな、この艦は」



## 19・ソフィア（前書き）

レオンとレイラの不在に、再びガーゴイルを襲うワルザ。

そのパイロットの正体に、それぞれの思いが混じった驚きを見せる、  
ガーゴイルのパイロット達。

## 19・ソフィア

ワルザの修理が完了した後、ソフィアが再び、戦艦「アクエリアス」から、僚機と共にガーゴイルを目指して出撃した。

その傍らに、今回の攻撃から新たに配属されたキーンジャクソン中尉が、新型試作機「ゲルデュエイス」で同伴する。

「前は散々やられたみたいだが、大丈夫なのかね？ソフィア少尉」

明らかに見下した様子で、キーンがソフィアに言う。

”専用機とも言つべきワルザで、何故 ガンダムを落とせなかったのかね？”という、明らかな皮肉が籠っている。キーンの口調に、まともに相手をする気が無くなったソフィアは、棒読みで言葉を返した。

「前は油断しただけ。今度こそ、ガーゴイルを落とす」

「今までだって上手いかなかったそうだが？」

さすがにむっとしたソフィアが、言葉に怒気を込めながら返した。

「ガンダムを甘く見ていると、墓穴を掘りますよ」

「このゲルデュエイスのスピードに、ガンダムがついて来れるとでも？」

「シミュレーションで勝ったといつても、あくまでもゲームと同じ。実際に上手くいくものとは限らない」

「」忠告、感謝するよ」

「新入りが、あまりソフィアを刺激するな！ファンネルの動きに支障が出ると、我々の命まで危なくなる」

ベリックを操縦するフリートリック大尉が、キアに怒鳴り付けた。サラマンダーを襲った時に、ガーゴイル隊に撤退させられた生き残りの1人である。

「ガーゴイルには、ガンダム以外にも出来る奴がいる。仲間同士の精神状態を乱して戦力を殺ぐなら、今すぐに追い返すぞ！」

「はいはい、了解。やりにくい部隊だね、ここは」

”このパイロットでは、ガーゴイルを叩くのは無理だな”

ソフィアは、直感的に感じてはいたが、もうガーゴイルは目の前にいる。このまま攻撃するしかない。

その動きをガーゴイルの索敵手が捉えた。

「敵機接近！1機はワルザ、ベリックと新型が各1機、ギラ・ド  
ーガ5機！」

「そんなに！？」

「また新型？ずいぶん開発力があるんだな、ロード軍。どこから資金が流れてるんだ？」

顔を引き吊らせるゲールをよそに、ロサは相変わらず冷静にリーダーを見ながら、考えを巡らせている。

”ワルザとグリアラスは、いつも逃げる方向が違う。新型といっても、この方角からなら、恐らくロードじゃない。なら、焦る必要は無い筈だ”

レオンとレイラが居ないという、普段は無い状況に、ロサがメツシの指示を仰ぐ。

「どう編成します?」

『この前、グールがお前に鍛えてもらっていただろ?ロサとグールで前の防御線、他は後ろに回す。中盤は数が足りないから無しだ』

「実質2機で迎撃か。まあいいや、今のグールなら何とかなるだろ」

ロサはケロツとした顔で言い放つ。

「ロサと俺だけで前線?正気かよ?」

うんざりした表情で青ざめながら、肩をすくめるグールの尻を、ロサが叩く。

『ギラ・ドーガは、後ろに何とかして貰う。俺達で厄介なのを止め

るぞ。Aガンダム、出ます！」

ガーゴイルからも、次々にモビルスーツが飛び出す。先陣を切って飛び出したロサが、続くグールに声をかける。

『気をつける、ワルザもファンネルを使う』

「またあいつかよ。あれはロードじゃないのか？」

前回手も足も出なかったグールが、たまらず肩をすくめ、萎縮したような声を出す。その声に呆れたような溜め息をつきながら、ロサが返事をした。

『ロードとはファンネルの動きが違うし、逃げる方向も別々だ。パイロットは別人だ』

「こんな時に、レオンさんとレイラさんが居ないなんて……」

『あいつはどうやら、手薄の時に確実に仕留める為の、奇襲専用のようだな』

「分析してる場合か！？もう一機の新型とか言ってたの、かなり速

いぞー!？」

『来るぞー!新型を頼む!』

ロサの発言に、グールの顔から、みるみる血の気が引いていく。

「マジかよ!?!あいつもファンネルを持ってたら、ジエガンじゃ勝ち目はねーぞ!?!」

慌てふためくグールに、ロサが落ち着いた声で言った。

『シミュレーションで相手してやっただろ?追いついていただけでいい』

その直後、ワルザのファンネルによる狙撃が始まった。Aガンダム  
のファンネルが、その軌跡上に合わせられる。

「てめえら如きに、ガーゴイルを殺らせるかよ!?!」

正確に全てのビームが狙撃され、ガンダムの手前で爆発する。

「あんな使い方が出来るなんて……!?!」

考えもしなかった使い方に、ソフィアも驚きを隠せずに呟いた。

最初のワルザからの狙撃を阻止した直後、Aガンダムのファンネルからのビームが逆襲し、ワルザのファンネルを狙撃しに掛かる。

「最初の奇襲では、宇宙戦そのものに慣れてなかったから、こんな狙撃は出来なかった。だが、今は違う！」

狙撃に成功したロサの口から、自信に満ちた言葉が飛び出す。

前回と違い、精神的に余裕がある。ロサは、1ターンで2連射や3連射という不規則な攻撃で、ワルザが狙撃するタイミングを封じ、徐々に追い詰めていく。

更にビームライフル連射しながら、隙を突いてAガンダムがビームサーベルを抜き、ワルザに斬りかかった。右同士では防ぎにくいのを狙って、自機の右の足元から、ビームサーベルを振り上げる。

右腕で間に合わず、左手首のビームサーベルで逆手に切っ先を交えたワルザも、中途半端な構えでは防ぎ切れず、辛うじて受け流すが、思わず機体を仰け反った。



さらに怯んだワルザに、ファンネルの一斉掃射を叩き込もうと意識を集中した一瞬に、背後から連射を受け、堪らずAガンダムが距離を取る。

だが距離を取る間にも、ロサはガーゴイルへの意識を薄れさせるための連射を続け、ワルザに狙撃の隙を全く与えない。

まさに、一步も引かない攻防が始まった。

一方、グールのジェガンも、グルデュエイスと交戦を開始した。互いにビームライフルでの撃ち合いが始まると同時に、片手にビームサーベルを持たせて突撃する。

だが、尋常なスピードでは無いグルデュエイスに、切っ先を交えたものの、相手の勢いに押されたグールのジェガンが、弾き飛ばされた。

この隙にグルデュエイスが、ガーゴイルをビームライフルで狙撃する。

「ちっ！」

気付いたロサが、ビームライフルでこの狙撃を阻止すると同時に連射し、ケニーのジェガンと撃ち合っていたベリリックとキラ・ドールガ1機を撃墜する。

「何！？狙撃を止めただと！？」

グルデュエイスは、突入した勢いに乗ってガーゴイルに斬りかかろうとするが、今度はAガンダムのパネルの一斉掃射で目の前に障壁を作られ、動きを止められた。

これを捉え、グルルが再びビームサーベルで斬りかかる。一斉掃射の巻き添えで、キラ・ドールガが2機落ちる。

「グルル！何やってんだ！？」

「すまん！」

その隙に、ウルザがAガンダムの後ろを取って羽交い絞めにする。ウルザのパネルが、正確にAガンダムのコックピットへ砲口を向けた。

「バカな！自爆する気か！？」

『ロサ！？』

接触回線で、声を聞いたソフィアが驚いた一瞬の隙を突き、真上からロサのファンネルが、ワルザの肩を狙撃する。

「くっ！」

これを辛うじてかわし、ワルザがAガンダムから離れ、再び身構えた。

対峙したAガンダムから、ロサが自分の名を呼んだワルザに対し、無線を開いた。

「……………なぜ俺の事を知っている！？」

『久しぶりね、ロサ』

相手が、無線の回線を開いた。その声を聞いたロサが、あまりの驚きに目を見開いた後、少し間をおいて呟いた。

「まさか……姉さん？ソフィア姉さんか！？」

流石のロサも混乱し、Aガンダムの動きも止まった。

だが、ようやく相手の事を理解したロサは、一瞬だけ体をこわばらせたあと、弾かれたように座席から身を乗り出して叫んだ。

「どうして！？シャインリバーでは、裏社会の奴らまで使って、いくら探しても見つからなかったのに……！」

『家を出てからは、源氏名のひとつを本名として通していたから、私の名前は、シャインリバーから消えてしまっていたみたい』

ソフィアが、呆れたような声を出した。

「源氏名……？」

言葉の意味を理解したロサが、蔑むような声を出した。それと同時に、同じ様な世界に関わりを持ちながら、その事に気付けなかった自分の不覚を、ロサは呪っていた。

そのロサの表情を察したソフィアが、自嘲的に笑った。

『水商売よ。さすがに15歳じゃ、まともな仕事も無かったからね。シャインリバーのスラム街のお客も多かったから、酔った勢いでスウィート・ウォーターの話もよく聞かされた。誰もが皆、スウィート・ウォーターに居れば良かったと、口を揃えて言っていたわ。だから、自分の目で確かめようと、スウィート・ウォーターに行ってみた』

「密航したのか」

『移民シャトルの貨物室に潜りこんでね。事実、スウィート・ウォーターには、路上生活者なんて居なかった。スラム街といっても、シャインリバーの様に、いつ強盗に襲われるか解らないような所では無かった。連邦政府の政治が、如何にひどいか、よく解った。特にシャインリバーの貧困層は、見放されている』

淡々と話すソフィアの声を聞きながら、ロサの表情と声色が、徐々に怒りに染まっていく。

「それでロード軍に参加したのか？」

『貧困層の人々は、自分の力だけでは、どうしようも無い状態にな

っているわ。戦争を終わらせて、全ての人を救える平和な世界にするためよ。ロード総帥が統治する事こそ、真の平和が実現するきっかけになる』

言い切るソフィアの声は、自分の判断が正しいという確信に満ちていた。

「そんなにスイート・ウオーターの治安が良いというのなら、スイート・ウオーターの独立自治を掲げれば済む事だ。全宇宙を巻き込んでの戦争なんてやる必要が無いだろう」

スクリーン越しに、ワルザの顔を鬼のような形相で睨み付けながら、ロサが吐き捨てるように言い、そのまま続ける。

「それに、スイート・ウオーターのやり方を全宇宙でやっていたら、連邦政府は破綻してしまう。連邦政府を宇宙と切り離すと言うならまだしも、全宇宙をロードという一個人で統治できる訳がない。ロードの理想とは、どんな建前があるかと、行き着く結論は奴の独裁だ。そんな事の踏み台に利用されている人々こそ、解放するべきだ」

明らかにロードを蔑む声を出すロサに、ソフィアが声を荒げる。

『黙りなさい!!--』

「ロード軍がシャインリバーを襲ったせいでお袋が死んだ。俺の目の前でキラ・ドーガに家ごと踏み潰されてな」

『母さんが……？』

戸惑いを隠しきれないソフィアの声を聞き、ロサが話を続ける。

「ガーゴイルには、俺と同じように孤児院を踏み潰されて、焼け出された拳げ句に行き場を失くした子供達だって乗ってるんだ。戦争が無ければ、こんな悲劇は起こらなかった。それでもロード軍が正しいと言えるのか？」

ロサはまだ、自分のもとへソフィアが戻って来るとい希望を、失ってはいなかった。

勝手な言い分に、爆発しそうになる怒りを必死に抑え込みながら、言葉を紡いだ。だが、そんな気持ちをソフィアが感じ取る事は出来ず、突き放すようにロサを一蹴する。

『戦争に犠牲はつきものよ。平和な世界を取り戻す為の、尊い犠牲だわ』

ロサが、悲しげに視線を落とした。ソフィアを説得出来ない自分の力を蔑み、自分に対する情けなさに、操縦レバーを握る手が震える。涙を堪えようと一瞬だけ目を閉じた後、今まで抑え込んでいた様々な負の感情が、堰を切って一気に溢れだした。

「子供にとつちや、そんな事は理解出来ないんだから、どうでも良いんだよ……！戦争をしてる俺達全員が、あの子達の家族を奪ったんだ。それでも、あの子達は俺を受け入れてくれた。今の俺にとつては、ガーゴイルの皆が俺の家族だ。家族を傷つける者に容赦はない！！」

家庭の温かさを忘れてしまった子供の、正直な気持ちを吐露した後、ロサの怒りが爆発した。

「俺の家族を殺し、フローラの家族を奪ったロード革命戦線は、絶対に許さない！血の繋がりが有ろうと無かろうと、俺の手であなたを殺す！！俺みたいな悲しみを背負う人間を、これ以上増やさないためにな！！！」

強烈な殺気を放って、ロサがソフィアを威嚇する。フォン＝ブラウンからガーゴイルへ戻る途中だった、レイラとレオンがこれに気付き、同時に叫んだ。



「これは……ハートレイの殺気!？」

互いに顔を見合せ、その源の方角へ、2人のジエガンが急行する。だが、現在地からは、かなりの距離がある。

ロサを仲間に引き込む事が出来さえすれば、ロード軍が一気に有利になるという事で頭が一杯になっていたソフィアの意識からは、完全にガーゴイルの事は消えていた。

『私はあなたの姉よ、弟を自分の手では殺したくは無いわ!大人しく言う事を聞いて、革命に手を貸しなさい!!』

「家族つてのは、人のぬくもりを感じさせてくれる存在……寂しい時に何時でも傍に居て、手を握ってくれる人の事を言うんだ!あんたみたいに、自分の勝手に家を出て、独りになった俺にこうやって銃を向ける人間に、俺の家族を名乗る資格なんて有る訳無いだろう!」

ワルザに、切れ目無く連続攻撃を加えるファンネルよりも、ロサが叫ぶ毎に放たれる殺気に威圧され続けるソフィアは、まだロサの心中を理解出来ずに、説得を試みる。

『あなたと私が手を取り合えば、すぐに戦争が終わるのよ!何故分

からないの！！この戦争が終われば、また一緒に暮らせるでしょう！？」

「あんと一緒にあの世に行く事になれば、そうなるかもしれないな！！」

叫んだ直後、Aガンダムのファンネルが弾切れになり、気付いたロサがビームサーベルを抜いた。

大振りで振り下ろすが、ワルザがかわすのは予測している。振り抜いた後、左足の回し蹴りで、ワルザの背中を狙う。

ソフィアの視界の範囲外からの攻撃に、かわしきれずにワルザが吹き飛ばされた。

ガンダムとの距離が離れ、ワルザが体勢を立て直した直後、ソフィアが弾切れになったファンネルを、Aガンダム目掛けて特攻させた。

それをAガンダムが次々に斬りつける隙に、ワルザがガンダムの懐に飛び込む。

『革命に手を貸せないと言うのなら……死んでもらうわ、ロサ！今

のあなたは、革命軍にとって最大の障壁！私の手であなたを倒し、革命軍の未来を切り開いて見せる！！」

ソフィアがワルザのビームサーベルを振り下ろし、Aガンダムが受け止める。切っ先を交えた鏖迫り合いのスパークが、次第に激しさを増していく。

「あなたは自分の都合を押し付けるばかりで、俺の苦しみや悲しみなんて、全然解ろうともしてくれない！俺の家族を名乗るんなら、俺の目線で考えろよ！俺の置かれてる状況を理解しろよ！自分の都合を押し付けて、相手を苦しめて、巻き込んで、迷惑かけてる事に気付かない人間が、家族を名乗る資格など無い！何故それが分からない！！」

忌々しげにロサが怒鳴った後、2機が切っ先を弾き、再び斬りつけあいが始まる。ファンネル無しの一騎打ちが始まった。

一方、グールはグルデュエイスのスピードに振り回されて冷静さを失い、苦戦を強いられていた。

ロサはワルザにかかりきりで、グルデュエイスまで手が回らなくなっている。今までロサやレオンの補助が必ず有ったグールは、更に

焦りを増していた。

「くそっ……！こいつ、速い……！」

キラ・ドーガの5倍のスピードだと、メツシは言っていた。確かに速い。目がついていかない苛立ちに、思わず歯ぎしりする。

しかし、グールもロサと大して歳は変わらない。ロサの狙撃を見て、見よう見まねだが、グルデュエイスの狙撃をビームライフルで阻止していく。やってみれば、意外に当たる。

「こいつも、あの防御が出来るのか!？」

とりあえず、グールを潰すほうが先決と踏んだキアは、再びグルデュエイスのスピードで攪乱にかかる。そのスピードに、またグールが目を回され始める。

「ふん、こんなものか。もらった！」

高速移動を続けながら、キアが斬りつけ、その切っ先が、グールの右手を切り落とした。その恐怖に、堪らずグールが音を上げる。

「ロサ！ヘルプ頼む！」

ソフィアへの集中力を殺がれ、苛立ちを隠せないロサが、八つ当たり気味にグールに怒鳴った。

「無茶言うな！ワルザとそんなのを、纏めて相手なんか出来るか！  
！自分で何とかしろよ！！！」

「動きについていけない！殺られる！」

「相手の動きをよく見る！そいつは、速すぎて機体をコントロール  
しきれて無え！動きが直線ばっかだろうが！！！」

「ん！？どういう事だ！？」

完全にワルザに集中しているつもりでも、相手を攻撃する瞬間の敵  
の殺気だけは、体が捉えてしまうロサは、グルデュエイスの殺気の  
移動を、無意識に捕捉していたのである。

「相手が一直線に自分に突っ込んで来るんなら、どうするんだ！？」

「……そうか、なるほど」

ロサの言葉を聞き、グールの表情が、漸く落ち着いた。そこへ、キアがビームサーベルで斬りかかる。

「もらった！」

この斬撃を、グールのジェガンが辛うじてかわす。

「あのスピードでは、受け止めても勢いで流される。妙なところに叩きつけられたら、命は無い」

ロサのように、勘で相手を分析出来るような能力は、グールには無い。自分に言い聞かせるように言葉にしながら、冷静に分析を始める。

「直線の連続で移動するのだから……」

当たらないのを承知でグルデュエイスにビームライフルを向け、単発で追い込んでいく。

「そんなチンケな武器で、このグルデュエイスに勝てるか！」

キアは次々にかわしていく。だが、次第にビームが機体の近くを掠め出し、十発目をかわした後、遂にグルデュエイスの足が捉えられた。

「バカな!？」

当たる筈が無いと思い込んでいたキアが仰天する。

「この程度の被弾で落ちるかよ!」

キアは高速運動を続け、再びグールに斬りかかる。

「このキア様を、なめるなよ!」

グールが冷静に切っ先を見切り、また紙一重でかわした。

かわされたグルデュエイスの背後から、何も無い空間をグールが連続狙撃する。すると、何も無い筈の場所で爆発が起こった。

「直線運動しかないのなら、そのスピードに合わせて、移動先の延長線上にライフルをぶち込めば、当てる事が出来る」

シミュレーションでのロサの講釈を、ロサの声を聞いて思い出した  
グールが、実践しただけ。だが、グールのその声は、先程までとは  
別人のように、自信に満ちていた。

「ふん……やれば出来るじゃねえかよ。情け無え声だしてんじゃね  
えつつーの」

ロサが悪態をつきながらも、グルデュエイズ撃墜を見届け、グール  
を褒めた。

その直後、ロサの殺気を感じ取ったレオンとレイラが、漸く辿り着  
いた。

「Aガンダム！？あの殺気の主は、ロサなのか！？」

2人が、思わず声を出した。

「援軍！？……ちっ！」

気付いたソフィアが舌打ちし、ワルザが切っ先を弾くと同時に、撤  
退姿勢を取る。



「逃がすかよ！」

ロサが追おうとするが、まだ3基残っていた、ワルザのファンネルがエネルギーも無いまま特攻してくるのに阻まれ、結局ワルザを取り逃がした。

「邪魔だ!!」

ロサが思わず怒鳴り、ファンネルを殴り飛ばす。主の居なくなつたワルザのファンネルは、Aガンダムに殴られた方向に、そのまま浮遊していった。

「今になって、何が家族だ……!!」

グールに指示を出す為に、無線を入れっ放しだったのを忘れ、ワルザが逃げた方角を睨み付けながら、今まで出した事の無い低い声で、ロサがうめいた。

『家族……!!?』

無線を聞いた3人が、声を合わせて驚く。

『ロサ、今のパイロットって……？』

レイラが、上ずった震える声で、ロサに尋ねた。この時に、無線の切り忘れにロサが気付き舌打ちしたが、もう隠す事は出来ない。諦めたロサが、怒りで低い声のまま答えた。

「ソフィア＝ヒシモト……姉さんだよ」

その答えに、レイラが絶句する。

『生きていたのか？』

失踪した事をレイラから聞いていたレオンが、口を挟む。

「そつらしいな」

『間違いないのか？』

「離れて長いから、声だけでは正直、確証は得られない。シャインリバーの、裏社会の俺の情報網をもってしても、姉さんは見つから

なかった。だが、スラム街で源氏名を本名として生活していたのなら、合点がいく。シャインリバーのスラム街には、スウィート・ウオーターに戻りたがっている貧民層の人間も多いから、話を聞いて密航したというのも、恐らく本当だろう」

ロサの声が次第に、元のやや高め少年らしい声に戻っていく。冷静に考えながら話しているうちに、気分が落ち着いたのである。

だが、聞いている周囲の3人が、落ち着いて居られる筈も無かった。特にレイラは、親友だったのである。黙っていられる訳が無い。

『私が説得する!!』

レイラが追おうとするが、ロサがAガンダムを正面に割り込ませて、レイラを止めた。

「今の姉さんには、何を言っても無駄だ」

『でも……!!』

「完全に、連邦に対する信用を失ってしまっている。あれでは、何を言っても姉さんの心には届かない。事実、実の弟である俺の声ですら届かなかつたんだ」

諦めた声を出すロサの言葉に、全員が次の言葉を失う。

「俺の手で姉さんを倒すさ。それが、姉さんのせいで死んだ者に対する、俺に出来るせめてもの償いだ」

『お前は、それでいいのか？』

レオンが念を押した。ロサが言葉に詰まり、少しだけ間をおいた。

「俺は、その為に生まれたのさ。そういう運命だと思っ事にするよ」

ため息混じりに諦めたような声を出し、ロサはもう一度、ワルザが逃げた方角を睨み付けた。

ガーゴイルに戻った後、ロサに同行したグールが、一息入れようと自販機コーナーに誘った。

170cm程の背丈を屈め、ロサよりほんの少しだけ長いダークブ

ラウンの髪を揺らしながら、オレンジジュースを取り出し、ロサにカップを差し出す。

「サンキュ」

ロサが受け取り、表情を緩ませた。

グールも自分のミルクティーを取り出し、やや面長の日系人の雰囲気を持つ顔を、ロサに向けた。髪と同じ色の切れ長の目が、ロサの目を見る。

互いに、あまり話し込むつもりは無いため、自然と立ち話が続く。

「お前、さつき気になる事を言ってたよな」

「ん？」

「あの紫色……確かワルザって言ったか？あれが、ガーゴイルが手薄な時の、奇襲専用みたいだよ」

「ああ」

ロサが、何だそんな事か、と言いたげな表情を見せたが、グールは真剣な顔で言った。

「あれは、一体どういう意味だ？」

「どついう意味と言われても、言葉のまんまじゃないか」

2人が、同時にカップに口をつけ、話を続ける。

「ガーゴイルが手薄になるタイミングを、なぜ奴が知っていると思うんだ？」

「事実、手薄になっているときに限って、奴が現れるじゃないか。そう思う方が自然だろ？」

「でも、今回は奴1機じゃなかった」

グールも意外に、見るべき部分を見ているんだなど、ロサが内心で感心しながら、頷いた。

「確かにな。今回新型が増えてたのは、前回の攻撃で、戦力が足り

ないと判断したんだろう。グールが今回みたいな予想外の上達振りを見せていなければ、丁度ガーゴイルを落とせる戦力だった筈だ。恐らく防御線が俺1人では、あの新型からは、ガーゴイルを守りきれなかった」

「この前も1機じゃなかったのを見ると、あの時たった1機でガーゴイルを襲ったという事は、ガーゴイルが空になるのを、奴は事前に知っていたという事になる」

同じ事を考えていたロサが、表情を出さずにグールの言葉に頷く。

「恐らくそうだろうな」

「あの時、なぜメツシ艦長が全員を応援にやるのが、奴にわかったんだ？いくらファンネルを使えたって、戦艦相手にたった1機で奇襲つてのは、判ってなければ出来ないギャンブルだろう」

不思議そうな顔をするグールに、ロサは表情ひとつ変えず、現実を突きつける。

「恐らく、密告者が居るんだろ」

「仲間を疑うつてののか？連邦軍本部ならともかく、このガーゴイル

に乗っている人間を？」

”本部ならともかくって、問題発言ではないか？グール……”

心の中でツツコミを入れながらも、ロサが表情を崩さずに、グールの疑問に答える。

「事実が事実として受け止める必要がある。戦場で個人的感情に流されていると、判断を誤る」

「たとえば、メッシ艦長やレオンさんが、そうだとしてもか？」

「それが事実なら、受け入れざるを得ない」

「レイラさんやフローラでもか？」

「ああ、そうだな」

この瞬間、ロサが無意識に強烈な殺気を放って、グールを睨み付けた。フローラを侮辱するなら許さない、黙れと言わんばかりだ。思わずグールが後ずさりし、音を立てて自販機に背中をぶつけた。



このグールの怯え方を見て、自分の殺気に気付いたロサが、ジュースを一口飲んで怒りを鎮め、話を続ける。

「だが、フローラには今のところ無理だな」

「どうして？」

「常に敵と交戦するパイロットはともかく、フローラは外部の人間と接触する機会が無いし、連絡手段も無い。この前の停泊の間も、ずっとレオンさんがレイラ姉ちゃんのどちらかとずっと一緒に居た筈だ。1人になったという話は、聞いていない。2人が居なくなった後は俺が付いていたが、その間も、1人になった時間は無かった」

「トイレに行く振りをして接触したという可能性も、無くはないだろう」

グールも本気で疑っている訳ではないので、別段、重い雰囲気では無い。ロサも平然と返事をする。

「メルサのほう回数が多くて、ずっとフローラが付き添っていた。レイラ姉ちゃんが言う事が正しければ、無理だな。不審な行動は、何かの拍子にメルサの口から漏れる筈だ」

「2人がグルになっている可能性は？」

「2人がグルなら、俺の食事に毒でも盛って、コロニーに居た間に始末していただろう。溶接を手伝ってた修理屋のおじさんたちは、俺も何度か食事には行ったからな。コロニーの食事で毒殺されたなら、自分達が疑われる事も無い」

別に肩を持っている訳でもないので、冷静にロサが言う。

「じゃあ、お前がスパイという可能性も無くは無い訳だ」

さらりと冗談を飛ばすグルだが、ロサがその内容に思わず苦笑した。

「確かに、一番怪しいのは俺だよな。来た当初の、ワルザのガーゴイル奇襲だって、作られたシナリオという見方も出来なくは無いらしいし、奇襲してきたロード軍のパイロットと戦う振りをして、密告だって出来ただろう」

そう考える方が、むしろロサ自身も、不自然さは感じない。

「だが、それなら地球に墜落する前の、ロードとの交戦中にグルに

なつてガーゴイルを落とさないか？ロードと俺が手を組んだら、落とせない戦艦なんて無い筈だ。それ以前に、奇襲の時のワルザと組んでガーゴイルを落とす方が、はるかに楽だ。モビルスーツが居ない戦艦なんて、丸腰と同じだからな」

「そつえば、確かにそうだな」

さすがにグールも納得した。確かにそのとおりだと、グールも思つ。

「ま、いずれ尻尾は掴むさ。フローラに危険が及ぶ要素は、この俺が命に代えても叩き潰す」

鋭い眼光を放つて言った後、ロサが紙コップを握りつぶした。

「だが、プロのスパイだとしたら、そう簡単には……」

心配そうに言うグールを見て、ロサが笑った。

「確証が得られるまでは俺だって動かない。そこまで俺もバカじゃないさ」

その直後、マークがロサを探しに来た。

「ガンダムのチェックが終わってるなら、シミュレータの調整を手伝ってもらって良いか？グールの進歩振りを見て、他の連中がやる気になっちまってな」

「わかった」

ロサと向き合う位置に居たグールに気付き、マークが不思議そうな顔をした。

「何か相談事か？」

「コロニーに、かわいい女の子が居たってさ」

「フローラの居ない間に、浮気してたのか」

真顔で言うマークに、ロサが口を尖らせる。

「俺は修理を手伝ってたじゃないか」

「フローラには黙っててやるよ」

「違つつのに」

そんな会話をしながら、ロサとマークが、モビルスーツデッキに向かって歩き出した。

「グール、ジューズご馳走さま」

「ああ」

軽く手を上げて、グールは遠ざかるロサの背中を見ていた。

「ロサの奴、大丈夫かな……」

グールはわざとパイロットの事は話題にしなかったが、そのワルザというモビルスーツのパイロットは、自分の姉だとロサは言っていた。

しかし、ロサが密通しているのなら、それを自分から暴露すれば立場が不利になるだけだし、さっきの戦闘だって、あれほどの鉄壁の防御はしない筈だ。

事実、ロードとの交戦時には、ガーゴイルは掠り傷ひとつ負っていない。やはり、ロサが密通しているとは考えられない。

自分が同じ立場なら、どんな気持ちになるだろう。グールには、想像もつかない。

だが、ロサは無理に平静を装っている風にも見えなかった。

「俺なら、あんな風に振舞うのは、無理だな」

グールは、ロサの気丈さに感心しながら、呟いた。

## 20・守りたい人（前書き）

シミュレーションの調整を頼まれ、集まった者のやる気を見て、対戦相手まで引き受けたロサ。

ロサの体を心配したフローラが、その様子を見に来て感じた事とは…。

## 20 守りたい人

「次は、誰がやるんだ？」

シミュレーションで、Aガンダムをロサが操作し、他の者がジエガンで戦闘訓練を行っている。ロサは既に、全員を3回ずつ相手にしている。だが、全くといって良い程、疲れを見せていない。

マークは、ロサにシミュレーションデータの調整だけを頼むつもりだったが、集まっていた連中のやる気を見て、ロサが相手をすると言い出し、そのまま訓練に突入したのである。

その甲斐あって、参加したパイロット達は、ファンネルやビームライフルからの狙撃を阻止する技術を、続々と身につけていった。

中には、グールのように、Aガンダムに斬りかかり、ロサに冷や汗をかかせる者まで出てきた。

これができる人数が増えるだけ、ガーゴイルの防御力は飛躍的に向上する。その分、ロサやレオンが安心してガーゴイルを留守に出来る。

当然、ロサも手応えを感じて、やる気満々である。



”こいつら、サラマンダーの連中より、よっぽど鍛え甲斐があるじゃない。もっと早く気付くべきだったな”

組織を纏める必要のあるロードが、いくら単独で強いといっても、自分でこのような訓練を施すのは、まず無理だろう。

「俺がやる」

西欧系のやや長めの金髪を持つ、身長175cm程のエリオット・リージェが進み出て、ジェガンに乗り込む。

彼は、ロサよりも5つ年上。それ故に、年下のロサの方が認められつつある現在の状況が、どうしても気に入らない1人でもある。

操縦桿を握った後、面長の顔立ちの鋭い碧眼が、Aガンダムを睨み付ける。

「行くぜ！」

Aガンダムは敵襲という設定なので、最初からサラマンダーの外に居る。

エリオットのジェガンがサラマンダーを離陸すると同時に、Aガンダムがファンネルを展開し、マシンガンの如くエリオットのジェガンに連続射撃を加える。

エリオットがこれをビームライフルの連射で全て狙撃し、火線の先端同士が爆発する。その防御には成功したものの、この爆煙に隠れたAガンダムが更にサラマンダーを狙撃し、直撃させて勝負が決まった。

「ガンダムに気を取られ過ぎだ。母艦も面倒を見てやらないと、帰る場所が失くなるぜ」

「……………!!」

「いきなり突進するんじゃなく、相手の動きを見てから動くんだ。今の場合、爆煙を隠れ蓑にして母艦を狙うのは、セオリーだ。その通りに動いてるのに、まともにやられてちゃ、話にならないぞ。さらに言えば、最後の狙撃だって、ほんの少し待ってライフルで撃てば、止められた筈だ」

まるで軍学校の指導員のような口サの厳しい声に、エリオットは反論の言葉が見つからず、思わず唇を噛んだ。

「もう一度やるか？」

「当たり前だ！」

エリオットがそう叫んだとき、若手が訓練中だと聞いたレオンとレイラ、それにフローラが、モビルスーツデッキにやってきた。

フローラは、最近ロサが時折、嫌な夢を見てうなされているのを知っているので、無理をしていないかと心配になった為である。

傍らで、訓練中の様子を見る事が出来るモニターを、何やら楽しそうに見ているマークやメカニック達に、レオンが声をかけた。

「どうだい？訓練の成果は」

「どうもこうもあるか。ロサが何人居るか、わからない位になってるぞ」

「！？」

マークの言葉の意味を理解出来なかったレオンとレイラが、頭に”

？”を浮かべて、顔を見合せた。

その様子を見たマークが、”見て驚くな”ならぬ、”見て大いに驚いてくれ”と言わんばかりの、楽しげな表情を浮かべる。

「モニターを見ていれば分かるさ」

エリオットが先ほどの反省から、ややAガンダムと間合いを取る。

ロサのファンネルによる一斉掃射に、ビームライフルの連射を加えて、凄まじい猛攻が始まる。エリオットが、やはり先ほどと違い、今度はAガンダムが攻撃を開始してから動き出した。

ロサの狙撃が、エリオットによって全て阻止された。あまりに予想外の光景が展開され、レオンとレイラが、目を見開いて固まった。その傍らで、仕掛けた悪戯が成功した子供のような顔をしたマークが、笑いを堪えている。

爆煙に隠れて、エリオットから死角になっている筈の角度から、ロサがビームサーベルを抜いてサラマンダーに斬りかかる。

今度はサラマンダーに近かったエリオットが、直前で切っ先を交えてロサの斬撃を阻止すると、ロサはもう一度ファンネルで一斉掃射

を加え、さらにマシンガンの如く連射する。

これもエリオットが阻止するが、Aガンダム本体からのライフル狙撃のビーム一本が、サラマンダーのカタパルトを掠めた。だが、直撃ではないので、そのまま戦闘が続行されていく。

「……なんだこりゃ？」

昔のハートレイとロサの戦闘より、更に激しい攻防に、レオンが呆然とする。

「……私も、参加しないとダメかな？」

レイラが、レオンの隣で、顔を引きつらせながら呟いた。

フローラは戦場に出た事は無いので、まともにモビルスーツ同士の戦闘を見るのは、これが初めてである。それでも、その激しさは十分に感じ取れた。

幾つか並んでいるモニターのあちこちで火柱が上がり、猛煙で画面が埋まっていく。

モバイルスーツ視点のモニター以外は、殆ど状況が分からない。それでも、母艦にAガンダムの猛攻は、掠りもしない。

「ロサは、こんな風に戦って、ずっとガーゴイルを守ってくれていてたんですね」

想像を絶する激しさに、フローラが溜め息をついた。

ロサが、出会った当初、自分をガーゴイルに乗せたがらなかった気持ちだが、漸く分かったような気がした。

こんな戦闘を繰り返していたのなら、ロサが疲れないほうがおかしい。

自分がロサに守って欲しいと思う度に、こんな戦いをさせていたのかと思うと、自己嫌悪を感じたフローラは胸が締め付けられそうになった。

「私、何も知らずに、ロサにこんな戦いをさせてたんだ……嫌な女ですね……」

ロサやフローラのように早生まれの人間は、劣等感を持ちやすく自己嫌悪に陥りやすい性格になる場合がある。

学校生活の中で、周りの同い歳の人間より、僅かとはいえ経験値が常に少なく、自分の方が他人より物事を先に達成できる事が少ないからである。

思わず涙ぐむフローラの肩を、レイラが軽く叩き、目線を合わせて優しい笑みを見せながら、首を横に振った。

「ロサは、自分の意思で戦っているの。あなたのせいじゃ無いわよ」

「でも……」

「前にも言った筈よ？あなたが居れば、ロサは必ずガーゴイルに戻るって。あなたが本当に嫌な女だと思ってるなら、ロサはあんなにも頑張ってガーゴイルを守ろうとはしない筈でしょ？あなたがロサにとって、どうしても生きていて欲しい魅力的な女性だから、傍に戻りたいと思って、頑張れるの。だから、あなたも、何があっても必ずロサは戻って来るって、信じて待つてあげなきゃ。ね？」

レイラが軽くウィンクして見せたが、フローラは涙目のまま、沈んだ表情を変えようとしない。

”ダメだ……ロサ、フローラが泣き止まないから、話しちゃうね。

「ごめん！」

あまりに不憫に感じたレイラが、止むを得ないと、ちらりとAガンダムのコックピットに目を遣り、すぐに視線を戻して、ロサが照れ臭いから内緒にしてくれと言っていた事を、フローラに話し出した。

「ホントは、ロサに内緒にしてくれって言われたんだけどね。私達が居ない間、コロニーでロサが付き添っていた時、デニムのジャケットを着ていなかった？」

「確かに、着ていましたけど………?」

フローラが、レイラの言葉の意図を掴めず、溢れそうになる涙を手で拭いながら頷いた。

「あの服は、実は防弾チヨッキなの。普通のものより、アラミドが薄いし鉄板も入ってないから、実際に撃たれたら、内臓に食い込まない程度で、かなりダメージは受けるんだけどね。彼が穿いてるジーンズも、普通のものより、かなり多めにアラミドが入った特注品なの」

「防弾チヨッキ?どうしてそんなものを?」



「万が一、あなたが銃で狙撃されたら、ロサは自分が盾になるつもりだったの。盾になるといっても、自分の体を弾が貫通したら、あなた達も怪我をしてしまう。といって目に見える重装備だと、あなたや子供達が楽しくないでしょ？だから、彼なりに気を遣って、あんな格好をしていたの」

レイラの言わんとしている事に気付いたフローラが、漸く顔を上げた。

「それって、もしかして……」

「ロサにとって、あなたは自分を盾にしても守り抜きたい、大切な人の。もしそんな風に思ってたければ、もっとラフな薄着で出かける筈よ。あの格好で体を使う接近戦をやるには、ちょっと動きにくいからね。彼一人だけなら、軍人が重火器を使っても、勝てる人間なんてそうは居ない位に強いから、防弾チョッキなんて必要無いのよ」

「それじゃあ、ロサも、私の事を……？」

「自分の命に代えても守りたい人だって、きっとそう思ってる」

レイラの言葉に、フローラが目を丸くする。

「本当に……？」

「ええ。ロサの事、好きだって言ってあげたら？きつと喜ぶわよ」

思わぬ言葉に、フローラが思わず顔を赤くして、レイラの顔を見たまま呆けてしまう。その様子を見て、傍にいたレオンとマークも、  
”しょうがねえな”と言いたげに、顔を見合わせて微笑んだ。レイラは、まるで初恋をした妹を見るような気分で、にこやかにフローラを見ていた。

”昔、私もこんな頃があったなあ。初々しくて可愛いな、この年頃って。……って、ちよつと待て。私、まだ20歳じゃないの。何でこんなに、おばさんっぽくなってるんだろ……”

自分の年齢を思い出したレイラが、急にそわそわし出したのを見て、レオンとマークが、訝しげに顔を見合わせる。それに気付き、変な雰囲気になったのを誤魔化そうと、わざとらしく咳払いをして、レイラがモニターを覗き込んだ。

「この戦艦、ガーゴイルじゃないですよ？なんで？」

気付いたレイラが、不思議そうな顔をして、画面のサラマンダーを

覗き込み、声を出した。それに対し、呆れたように両手を上げて、マークが言う。

「フローラが乗ってる船を、自分の手で撃てないんだとさ。サラマ  
ンダーなら、遠慮なく撃てるんだと。あいつ、ホントに躊躇い無く  
撃ちやがる」

「なるほど」

レオンとレイラが声を揃えて頷いた。

3人に他意は無かったのだが、それを聞いたフローラが、また顔を  
真っ赤にして、下を向いてしまった。

## 21・被害者の思い（前書き）

ジエガンでロサのAガンダムを迎撃するという、傍目には無謀とすら見える訓練を順調にこなし、飛躍的に実力を上げつつあった、ガールゴイルのパイロット達。

だが、皮肉にも、そのロサが拠点の特定を阻む、最大の障壁になりつつあった。

## 21・被害者の思い

その後、フローラが見学に来る事は無かったものの、ガーゴイルのパイロット達は、ジエガンでロサのAガンダムを迎撃するという、他の部隊から見れば無謀としか思えない訓練を順調にこなしつつ、サイド3を目指していた。

だが、未だに肝心なロード革命戦線の拠点が掴めず、探す方法を模索しながら、航行を続けていた。

「どうでも良いけど、拠点も判らないのに、どうやって攻めるんだ？これじゃ、太平洋のド真ん中で潜水艦を探すようなもんじゃないか」

訓練の相手を終えて、ブリッジに上がって来たロサが、呆れたようにメッシに言う。

「何を言ってるんだ、言い出しつぺはお前じゃないか」

ロサの言い分に、やはり呆れたようにメッシが返す。悪戯した子供のように、ロサが舌を出して、おどけてみせた。

「確かに、ワルザの拠点がサイド3の何処かにある事は、間違いな

いんだが……」

ロサが、真面目な顔に戻って呟いた。

サイド3と一口に言っても、それはコロニーの集合の総称であって、コロニー単体の名前を指している訳ではない。

ジオン公国の拠点となったズムシティ、ソーラ・レイに改造されたマハル、アクシズと衝突し破壊されたコア3といった具合に、一つのサイドの中には、幾つものコロニーが在る。

その中から、ワルザの拠点となっているコロニーを探し出さなければならぬのである。

日本で例えれば、「サイド3」が「日本」、「ズムシティ」が「東京（首都）」、「マハル」や「コア3」が「大阪」や「博多」、「札幌」などにあたる。その中でも東京が連邦寄りだったり、博多がロード軍寄りだったりする。

つまり、東京に拠点があると思って攻めてみたら実は東京が味方寄りの都市で、しかも敵の拠点が博多にありました、などという事態も、十分に考えられるのである。

いくら核ミサイルや水爆を使っても、日本を丸ごと吹き飛ばせるような兵器では無いから、サイド3を丸ごと潰すのも不可能、じゃあどうやって特定して、ピンポイントでミサイルをぶち込むのか、という話を彼らはしているのである。

「流石は天下の連邦軍だな。どのコロニーか特定すら出来ないのに、拠点を潰せと言われてもな……」

ロサは、まるで他人事のように、ぶつくさ文句を言っている。それを見て、メッシが投げ槍な口調で毒づいた。

「お前だって、その天下の連邦軍の一員じゃないか」

「俺の名前、軍の名簿にまだ載って無い筈だけど？」

白々しく言うロサに、メッシが呆れた声を出す。

「総司令官に意見した人間が、よく言うよ」

ロサが苦笑した後、また真面目な顔になって腕を組み、溜め息をついた。

「さて、どうやって特定しようか……。正直、全っ然、アテは無いんだよな……」

「やはり、各コロニーに偵察を送り込むしか無いか？」

メツシの常識的な意見に、ロサが眉間に皺を寄せ、声を低くした。

「出来るだけ、シャインリバーの時みたいな、市街地への被害は避けたい。スペースノイドの連邦に対する反感が、大きくなるだけだからな。まして、ガーゴイルは連邦のエース艦だ。下手に動いて被害を出せば、ネオ・ジオンの動きを掴めなかったロンド・ベルの二の舞になる。そうだったら、向こうの思う壺だ」

ロサが反論するのは珍しい事である。流石に、メツシも戸惑いを隠せない。

「しかし、そんな事を言っていたら、特定は無理だぞ？」

「俺達4人が、ここに来た経緯を忘れたの？」

低い声のままのロサの言葉に、メツシも反論出来ず、口をつぐんだ。ロサの表情が、戦争に巻き込まれて家族を失った者の怒りや悲しみを、ありありと物語っていた。言葉を続けるうちに、その眉間の皺



が、更に深くなった。

「防戦に出てきたワルザを叩くのならともかく、俺はそんなやり方には絶対に手を貸さないぜ。俺達みたいな戦災孤児を、自分の手で出すのはごめんだ。俺に命令するなら、今すぐ俺はガーゴイルを降りる。他の3人も連れてな」

厳しい表情を崩さないロサを見ながら、メツシは、ロサがガーゴイルに来た初日に”なんで子供まで巻き込むんだ”と言った時の表情を、思い出していた。返事が無い事に苛ついたので、更にロサが続ける。

「他のパイロットが行く事になっても、俺は反対だ。仮に許されるものなら、例えレオンさんやレイラ姉ちゃんが行く事になったとしても、撃墜してでも止めたい気分だ」

「じゃあ、どうしろと?」

「……………」

困惑した表情のメツシの問いに、今度はロサが、顎に手を当てて考え込んだ。

現実的に考えれば、先日も、大したインターバルも無く、次々に新  
型に襲われている。純粹に、自分達が生きる事を優先して考えれば、  
ワルザだけでなく、拠点そのものを潰す必要性は、間違いなく高い  
ものである。

それについては、ロサも同意見であるし、間違っているとは考えて  
いない。メッシが潜入調査を急ごうとするのも、妥当な考えだと、  
ロサ自身も十分に分かっている。

だが、自分自身の手で、自分やフローラ達と同じ様な立場に立たさ  
れる者を、これ以上増やす訳には行かない。その気持ちだが、どうし  
ても、もう一步踏み込む事を躊躇させてしまふ。

ロサはグールと話していた、密告者の事を思い出し、その動きを考  
える。

”密告者は当然、この状況を伝えるべきだよな。ならば、どうやっ  
て伝えるんだ？”

無線を使うには無線室のドアを開けなければならぬし、サイド3  
への進路変更以後、戦闘にはなっていないから、交戦中に伝える事  
も不可能。携帯電話だって当然使えない。

”あと、戦艦から外部へ情報を伝える方法って、他に何かあるんだ

？”

真剣な表情で、顎に手を当てて考え込むロサを見て、メッシが答えを促した。

「……ロサ？何か思い付いたか？」

「サイド3の空域まで、どのくらい時間が掛かる？」

「早くても3日だな」

「なら、探す方法を考える時間を少しくれないか？」

「手段はあるのか？」

メッシの質問に、ロサは表情を崩さずに、首を横に振った。

「今のところは無いです」

「わかった。だが、到着しても決まらなかつたら、コロニーに潜り込んで探すしか無い。いいな？」

「その時は……仕方が無い」

渋々ながら頷いた後、ロサは自室に戻り、ガーゴイルの図面を見始めた。

フォン・ブラウンの会議時に盗聴器やスパイが潜り込んでいるなら、この場で密告を防ぐ事は出来ない。とりあえず、ガーゴイルからどうやって知らせているのかだけでも、見当を付けようと考えたのである。

「最初の奇襲の時に、なぜ奴らは知っていたのか……」

ロサは、最初のワルザの奇襲の前、サラマンダーに応援に行く時の状況を思い浮かべる。

あの時、全機を出すというのはメッシがその場で決定した事で、本来なら外部に漏れる筈は無い。

「艦長の指揮の手順を、予め相手が知っているか、或いは決定後に艦内から誰かが知らせたか、どちらかしか無い」

どんな高性能盗聴器も、電波を拾える範囲は、せいぜい半径4km程度。聞こえる範囲に近づこうものなら、たちまちレーダーで判別されてしまうので使えない。第一、出る筈の無い電波が出ているのだから、すぐにバレる。

”待てよ、ある程度距離があっても、ちゃんと確実に識別出来て、しかも電波みたいにブリッジで感知できない通信方式……？なるほど、そういう事か”

ロサは、ガーゴイルの電気回路の回路図を見始めた。そして、ある一点を見て大きく頷き、その横に換気ダクトの接続図を並べた。

「方法は判った。後は、証拠と現場を押さえるだけだな」

密通の問題はこれで解決した。あとは、サイド3の拠点の場所探しである。

「都合のいいダミー情報でも流せれば、おびき出せるんだがな。さて、どうするかな」

ダミー情報といっても、ある程度事実に基づいた情報で無いと役に立たない。と言っても、必要以上の事を流せば墓穴を掘る。

拠点が特定出来ない以上、おびき出してその出発点を調べるか、追撃を諦めずに追いかけて回して逃げ込んだ行き先を、叩くしかないだろう。

”蜂の巣を突つく覚悟は、必要だろうな”

暫く方法を考えていたが、これといって良い方法も思い浮かばない。

「とりあえず、出来る事からコツコツと、いきますか」

ロサは、自室の天井の換気口の蓋を開けて中を覗き込み、何やら作業を始めた。

## 22・拾い物（前書き）

コロニーへの潜入調査に反対するロサに、手を焼くメツシたち。

そんな中、ガーゴイルに接近する機体が有った。

## 22・拾い物

サイド3のロード革命戦線の拠点となったコロニー「アストル」は、サイド3の中で最も月に近い位置にある。

月面都市最大の工業都市であり、且つ地球への流通拠点である「グラナダ」と、地球を凌ぐ工業国であるサイド3の首都「ズムシティ」を、革命軍が攻略するための拠点として、やはり古いコロニーを秘密裏に改装して仕立てられた。

したがって、一般の住民はおらず、ロード軍の関係者のみが出入りする、完全な軍用コロニーである。

アストルに一般の住民が居ないという事は、基本的に密告等によって発見する事が、非常に困難である。

ガーゴイルだけでなく、連邦軍の情報網をもつてしても、未だに見つからないのは、当然の事と言えた。

ズムシティは、元が一年戦争時代の旧ジオン公国軍の軍需施設を足掛かりに発展したコロニーのため、工業生産能力は未だに他のコロ



二一、ひいては地球の各都市をも圧倒していた。

またグラナダは、生産力はズムシティに劣るものの、アナハイム・エレクトロニクスの発祥地だけあり、現在も比類無き技術開発力を誇っていた。

アストル自体は、元が1年戦争時代のジオン公国軍の最終兵器であった「ソーラ・レイ」の残骸なので、最終手段としてコロニーレーザーに改造する事も出来る。

このような条件が整っていた事から、蜂起直後から、早期に革命軍の手で確保され、サイド3付近での活動の拠点とされた。

残骸扱いだっただため、無論、連邦軍は全く無関心で放置していた。

ロード革命戦線のモビルスーツが、ギラ・ドーガ等の比較的古い基礎設計であるのは、過去の戦争の残骸を寄せ集めて組み直す際に、最も集め易い、つまりスペアパーツの確保が容易だったため、という背景がある。

早い話、いちテロ組織の資金力では、新しい設計で造れるだけの金が無いのである。

ベリックにしても、過去のリック・ディアスにエンジン等の最低の部分に手を加えただけで、完全な新設計ではないのも、新設計のモビルスーツ開発力が無い事に起因している。

それらと同様、現時点で革命軍の切り札とも言えるワルザやグリアラスも、ベリックの装甲を出来るだけ共用する都合で外観は全く違うが、ベースとなったのはファンネル搭載の必要上、量産型キュベレイである。

Aガンダムとファンネルの存在は、仲間居た過去の反政府軍の生き残りから聞いていたから、残骸を発見した後、現地を徹底的に探し尽くして、ようやく2機分を確保したパーツを用いた。

このような背景から、完全な新設計の試作機開発の成功率が極めて低かったロード革命戦線にとっては、ズムシティからグラナダにかけての、一年戦争時代のジオン公国が最大の防衛ラインとした地域を、何とか無傷で制圧し、最大のモビルスーツ開発拠点としたい、という狙いがあった。

逆に言えば、この地域を連邦軍が守り切る事さえ出来れば、ロード革命戦線が完全新設計のモビルスーツを導入する事は、ほぼ不可能という事になる。

ロサ達が、この地域がロード革命戦線に肩入れする事に対し、危機感を持つのも、無理も無い事と言えた。

ガーゴイルのリーダーに、サイド3のコロニーが映り始める頃、メツシとレオンがブリッジで、これまでの戦闘についての話をしていた。

「アムロ」レイのようなニュータイプってのは、離れた場所に居る人間が相手でも意思疎通が出来たって言われてるが、今回の俺達みたいな状況の時に、奴らの拠点を探し出すような芸当をして見せる事は、無理だったのかね？」

レオンが、溜め息混じりにメツシに言った。

正直、レオンもロサが何かアテでもあるのだらうと期待していたのに、メツシから話を聞いて力が抜けてしまったのである。それを見て、メツシが苦笑しながら返事をした。

「ロサが出来ないかと考えてるのか？」

「奇襲の時のフローラの声は、ロサにしか聞こえなかったからな」

「フローラがニュータイプって可能性も、無くは無いだろっ?。」

「まあ確かに、ニュータイプだから戦闘に強い、という訳では無いんだろっが……。」

レオンがこの一言で、何かに気付いた様子で、急に真面目な顔になり、暫く何かを考えた後、その表情を崩さないまま、口を開いた。

「そういえば、あのワルザというモビルスーツ、誰かが居ない時ばかり来るよな……?。」

「……言われてみれば、確かにそのとおりだな。」

レオンの言葉に、メッシも頷いた。

「奴らはどうやって、ガーゴイルの誰かが居ない事を、調べてるんだ?。」

レオンが顎に手を当てて考え始めた。

「今までの攻められ方から考えても、確かに偶然とは思えないな。」

メッシは、今までのワルザとの戦闘を思い出していた。その顔を見て、レオンが話を続ける。

「そういえば、最初の奇襲の時もそうだし、ロサが戻ってきた時の戦闘でも、ロサが居ない事を、予め解った上で来たように思える。今回もそうだ」

「たまたま今回は、グールが大幅に腕を上げていたから無事にしのげたが、あの異常な速さの新型がグールに落とされなければ、恐らくガーゴイルは沈んでいた。あの機体が来た当初は、何度も前線が突破されてガーゴイルが狙撃されたからな」

メッシが、直前の戦闘の様子を思い出しながら言う。

「俺が居ない間に、そんなのが来てたのか？」

レオンが目を丸くして驚いた。彼自身は、グルデュエイスが撃墜された後に合流したため、その様子は全く見ていない。

「ロサとグールが、前線で頑張ってくれた。それで無ければ俺達は今頃、こんなおしゃべりは出来なかった筈だ」

メッシが、わざと茶化すような言い方をした。戦闘の間に何度も冷や汗をかいた恐怖を、誤魔化したかったのだろう。

「そういえば、この前の訓練じゃグールの腕は見られなかったが、あいつ、そんなに凄かったのか？」

まだ半信半疑の様子のレストランに苦笑しながら、メッシが言った。

「それを見て、この前みたいな訓練が始まったんだ。グールに出来て、俺達に出来ない筈が無いってな」

「ほう……成程、そういう事だったのか。何でまた急にあんな流れになったのかと不思議だったんだが、納得した」

今まで、ガーゴイルのパイロットが、自発的に訓練などと言い出した試しは無かった。ここまで話を聞いて、漸くレオンが納得したのも、無理はない。

「だが、落ち着いて考えれば、ギラ・ドーガが増えたり、更に新型が増えたり、その時のガーゴイルの戦力に合わせて、丁度落とせる戦力で来ているように思えるな」

今までワルザに攻められた時の状況を思い出しながら、メッシが言

う。

「一体、どうやって……？」

暫く考えた後、メツシが急に声を小さくして話し出した。表情もかなり厳しい。

「あまり考えたくは無いが……」

「スパイか？」

レオンの言葉にメツシが頷き、話を続ける。

「しかし、一体どうやって密通してるんだ？無線室のドアが不意に開いたこともないし、妙な電波が出たことも無い。その辺りに不審な動作があれば、すぐに異常表示が出るから、俺が気付かないなんて、まず有り得ない」

メツシの言葉に頷いた後、少し間をおいて考えながら、レオンが言った。

「戦闘中に接触回線という手も、無くはないが……」

その言葉にメツシが首を振る。

「最初にフルザが来た時、俺が全てのモビルスーツの出撃を決めたのは、艦内だ。戦闘中に接触回線を使って、知らせる事は出来ない」

「……確かに」

そこへ索敵手が声を出した。

「救助信号を確認しました。民間機のようにです」

「民間機？」

レオンとメツシが顔を見合わせる。

「間違いないのか？」

「レーダーの機影から輸送機と思われます。機体の登録番号も照会しましたが、間違いなく一致します」



「わかった。うちで救助しよう。上手く着艦出来そうか？」

「エンジン故障で、制御不能だそうです」

それを聞き、レオンがモバイルスーツデッキに向かった。

「俺が救助に行こう」

「頼む」

レオンのジエガンがガーゴイルから出て、シャトルの機体後部の点検用フックにワイヤーロープを掛け、モバイルスーツデッキまで曳航する。

救助された機体は、グラナダとズムシティを結ぶ、定期旅客便のシャトルであった。

「お手数をお掛けしました。」

シャトルの機長が、レオンとメッシに挨拶した。

「艦長のメッシ＝ジュノーです。旅客機のようにですが、皆さんご無事で？」

「ええ。おかげさまで」

「この辺りなら、近くのコロニーでも救助要請は受け入れてくれる筈なのですが、そちらは駄目だったんですか？」

何気無く尋ねたつもりだったメッシの言葉に、穏やかだった艦長の表情が、急に困惑したような様子に変わる。

「実は、故障した直後に、近くに一つ有ったんですが、断られましてね」

「断られた？」

メッシのいぶかしげな表情に、艦長の表情が曇る。自分で言っている筋が通っていない事は解っているから、スパイと疑われても仕方が無いと感じて、受け入れてくれるか不安になったのだろう。

「修理できる設備が無いという話でした。仕方無く、応急処置をして他を当たると、そのコロニーを離れたんですが、他所に辿り着

く前に、完全に駄目になってしまいました」

「修理設備も無いコロニーなど、初めて聞きましたが……？」

メツシが首を傾げ、機長も頷いた。

「私も長いことシャトルを飛ばしていて、何度か救助された事もあります、受け入れて貰えないコロニーというのは、今回が初めてです」

機長も事実を言っているのです、話し方は落ち着いているが、表情を見ると明らかに、機長自身も納得していない様子である。

腑に落ちない部分が多いが、シャトルの窓から子供や老人が不安げな顔を覗かせているのを見て、メツシは一旦、話を切り上げる事にした。

「とりあえず、メカニックに修理が出来るか、確認させます。一応軍艦ですから、出来るだけシャトルからは出ない様にして頂きたい」

「分かりました。乗客には説明しておきます」

「ところで、断ったコロニーというのは、どの辺りにあったものですか？」

「丁度、サイド3の中でも、最も月に近い辺りの、外郭部です。あんな位置にコロニーが有った事にも、今回初めて気付いたんですけどね」

まるで珍しい物でも見たような顔で、機長が言う。その様子に、メツシが目を丸くして尋ねた。

「今回の件で立ち寄るまで、全く気付かなかったという事ですか？」

機長の話は、例えて言うなら、数十年通っている通勤経路の信号機の一つに、全く気付かなかったと言っているのと同じである。

そんな話を、誰が簡単に信じるだろう。だが、機長自身も納得出来ない様子ながらも、頷いた。

「ええ。長いこと同じ航路を飛ばしていますが、そんな事も有るんですかね」

「ほっ………？」

メッシは、どうやらスパイ行為が目的で近づいて来た訳でも無いらしいと判断した。

本当にスパイなら、もっと辻褄の合う話をして、より相手を納得させられるような言い訳を用意して来る筈だからである。

かなり不可解な部分もあるが、機長の話し方を見る限り、嘘を言っているようにも見えない。

「わかりました。では、メカニックが点検を終えるまで、船内でお待ち下さい」

「宜しく願います」

機長が、安堵の表情を浮かべ、頭を下げた。

メッシは、メカニックにシャトルの点検を指示した後、一旦ブリッジに上がり、傍らで話を聞いていたレオンに尋ねた。

「さっきの機長の言っていた話、どう思っ？」

「断ったコロニーの事か？」

「シャトルのエンジンの修理も出来ないコロニーって、有り得るかね」

メッシが慥然とした表情で言った。どう見ても納得していない様子である。

「確かにな。シャトルのエンジンも修理できないような技術では、コロニーの維持管理も出来まい」

レオンも頷いたのを見て、メッシが腕を組み、何かを考え始めた。少し間をおいて、意を決したような表情で、レオンに言う。

「ロサには、コロニーへの潜入調査はするなと言われていたんだが、もし、その断ったコロニーというのが……」

メッシの言わんとする事にレオンが気付き、話を続けた。

「軍事機密のコロニーだと？」

メッシが表情を崩さずに頷く。

「あの機長の話が本当だとしたら、その可能性が高い」

「しかし、民間機を積んだまま戦闘は出来ないぞ。万一、戦闘になったら、大問題になる」

声こそ落ち着いているが、困惑を隠し切れない表情で、レオンが言った。ガーゴイルが、万が一にも不祥事を起こせば、世間に与える影響は計り知れない。下手をすれば、全てのスペースノイドを敵に回す事にもなりかねない。

レオンの言わんとする事に頷いた後、落ち着きを取り戻した声で、メツシがレオンを諭した。

「とりあえず、この後どう動くかを考えるのは、シャトルを降り出してからだな。うちで修理できなければ、近くのコロニーに任せるしか無い」

「ちゃんと直るかね？」

やや不安げなレオンに対し、メツシは楽観的な表情で言った。

「うちのモビルスーツを見てる連中だ。それに、マークとシーアスは元々は戦闘機の部署に居たんだし、大丈夫だろ」

それを聞き、レオンも納得した表情になったが、やはり気掛かりな事には変わりはなかったようだ。その後すぐにブリッジの出口に向かった。

「少し様子を見てくるよ」

「頼む」

レオンがブリッジを出た後、メツシは顎に手を当てて、難しい表情で考え込んだ。

ロサの心境を考えれば、出来るだけ潜入調査は避けたい。

しかし、民間機の救助を断る程の軍用機密を持つコロニーが有るとなると、話が違って来る。そんなコロニーは、メツシが知る限り、連邦軍側には無い筈だ。

「ロサには悪いが、止むを得んな」



メッシは、インターホンでロサをブリッジへ呼び出した。

「ロサ、お前の考えを聞きたい」

メッシは、機長からの話と、レオンとのやりとりをロサに話し始めた。やはりロサも、話の内容に違和感に感じた様子で、呆れたような声を出した。

「はあ？何だそりゃ？そんなの有り得ねえだろ」

常識的な反応を示すロサの顔を見て、メッシが頷き、話を続ける。

「しかもそのコロニーが、修理出来る設備が無いと言って、救助を断ったらしいんだ」

「救助を断った？………どういう事だ？民間機に関しては、故障機の救助は各コロニーに義務付けられてる筈だろ？」

ロサが納得しかねる様子で首を傾げ、声を低くする。その様子を見て、諭すような口調でメッシが言った。

「もし、民間機に入られては困るような、軍事機密を持つコロニー

だとしたら、合点がいくと思わないか？」

ロサが眉間に皺を寄せて、メッシを見た。

「……そのコロニーが、ロード軍の拠点だと？」

メッシが頷き、話を続ける。

「後でもう一度、そのコロニーの正確な位置を、機長に尋ねようと思っている。お前が潜入に反対していたから、ちゃんと話をしておこうと思っただけ」

「連邦側じゃないのか？」

まだ承諾しかねるロサが、困惑した表情を見せる。

「いくら機密でも、主力艦隊の長である俺に連絡が無いというのは、余りにも筋が通らない話だ。それに連邦側なら、潜入しても戦闘になる事は有り得ない。そう思わないか？」

メッシの言葉に、ロサが真面目な顔で考え込んだ。暫く時間をおいてから、メッシが尋ねた。

「納得してくれるか？」

「正直、まだ他に良い方法が見つかっていないし、俺も悩んでたんだ。軍用コロニーなら民間人も居ないだろうから、しょうが無いな」

溜め息をついた後、ロサが諦めたような声を出した。納得は出来ないが、自分も他に方法が思いつかないから仕方が無い、そんな雰囲気である。

「何にしてもシャトルを放り出してから動く事になる。それまでは何も出来ない」

「民間機のシャトルを、巻き込む訳にはいかないからな」

ロサが頷いた後、承諾を得られた事で安堵した表情を浮かべながら、メッシが言った。

「ロサには万一の攻撃に備えて、ガーゴイルに残って貰いたい。潜入には他のパイロットに行って貰おうと思っている」

「スズメバチの巣を突つくような事態に、ならなきゃ良いけど」

思わず肩をすくめるロサを見て、メツシが苦笑した。

「俺もそう願うよ」

「そのシャトルがスパイって事は無いのか？」

「俺が見る限り、そんな事は無さそうだ」

「そうか」

「なぜスパイだと？」

「ウルザの飛来するタイミングが良すぎるから、もしかしたらと思っただけだ」

ロサの言葉に、メツシが驚きを隠しきれない様子で尋ねた。

「気付いてたのか？」

「確証が無かったから、言わなかっただけさ。下手な発言は、仲間を混乱させるだけだから。艦長も気付いてたんだ?」

平然と答えるロサに、目を丸くしながらメツシが答えた。

「ついさっき、レオンと話してたところだ」

「レオンさんも?」

「ああ」

「ふーん……」

” やっぱり、気付く人は気付くんだな。さすがにエース艦の役職者ってのは、伊達じゃないって事か……”

ロサが思った後、メツシが笑みを浮かべて、ロサに言った。

「少なくとも、お前がスパイじゃない事は確かだな」

先日のグールとのやり取りの後だけに、今度はロサが目を丸くした。

「なんで？」

「お前がロード側のスパイなら、この前の戦闘でブリッジを吹っ飛ばしていた筈だろ？」

冷やかし気味に言うメツシの言葉に、ロサが苦笑した。

「確かに俺がスパイなら、あんなチャンスは滅多に無いな」

そこへ、整備デッキで話を聞き終えたレオンが戻って来た。

「スパイがどうしたって？」

「俺がスパイなら、この前の攻撃でブリッジを守らずに、吹っ飛ばしたって話さ」

ロサが居た事に少々レオンが驚いたが、すぐに納得した様子で頷いた。

「ああ、その話か」

「どうだった？修理出来るって？」

いつもどおりの楽観的な声で、ロサが尋ねた。レオンが頷き、ほっとしたように、肩で息をついた。

「ああ。何とかかなりそうだとさ」

「最近、よくシャトルが故障するな」

ロサが呆れた口調で、思い出したように言った。自分も、つい先日  
に救助されたばかりだから、他人事では無いと感じたのだろう。こ  
れだけ身近な場所で続いたら、使う側としては、文句の一つも言い  
たくなる。

その様子に、メッシが真面目な顔で答えた。

「戦時中だからな。人件費ばかり高んで、整備に金を回せないんだ  
ろう」

「なんで人件費？」

理解し切れないと言いたげな表情で、ロサがメッシを見た。

「いつ撃墜されるか分からないから、危険手当が要る」

「なるほど……危険手当か」

ロサは、納得したように頷いた後、沈んだ表情で俯いた。

実際に、自分の親も、シャトルを救助しようとした際に、撃墜されているのである。そう考えると、確かに、いつ戦場に紛れ込むかも知れない訳だから、並みの給料ではやっていられないだろう。

463

”親父も、そんな不運に巻き込まれて死んだ一人って事か……。全く、何てツイてない死に方をしちまったんだ……”

ロサは反射的に、ハートレイ撃墜の瞬間の光景を思い浮かべていた。

「……ロサ、どうした？大丈夫か？」

急に黙り込んだロサの表情を見て、メッシが心配そうな声を出して、ロサの顔を覗き込んだ。



その声を聞き、我に返ったロサが、その場の雰囲気を取り繕うために、作り笑いを見せる。

「親父の事を思い出しただけ。大丈夫だよ」

「そうか」

「例の変なコロニーへの潜入の判断は、艦長に任せるよ。まともな産業が有るコロニーでも無さそうだしね」

「良いのか？」

反対すると思い込んでいたレオンが、意外そうな表情で念押しする。

「他のコロニーならともかく、故障した民間機を救助しないなんて、ちょっと異常だ。何も無くても、文句を言っておく必要はあるだろ」

無然とした表情で、ロサが言った言葉に、メッシが頷いた。

「わかった」

「部屋に戻るね」

「ああ」

ロサがブリッジを出た後、モビルスーツデッキから、シャトルのエンジン修理が完了したと連絡が入った。

『推進剤切れで、補給しないと飛べないみたいだけど、どうする？』

少々困惑しているのがインターホン越しでも分かる声で、マークがメッシに尋ねた。それを聞き、メッシが首を傾げる。

「うちの推進剤じゃ、駄目なのか？」

『このシャトルのエンジンは、水素じゃなくてケロシン（ジェット機用の石油燃料）だ。うちにはケロシンは無いから、補給は出来ないよ』

「随分古いんだな。解った。乗せっ放しだと、戦闘に巻き込まれる。近くのコロニーに救援を頼もう。そのまま機内で大人しくしておく

ように伝えてくれ」

『了解』

「どっちにしても、コロニーに寄る羽目になったか」

メッシがインターホンを置いた後、レオンがやれやれと言いたげな顔で、溜め息をついた。

「仕方が無い。それに、ロサが潜入を認めるような、怪しげなコロニーの情報も手に入った。その位は、労力を割いても良からう。潜入は後回しだな」

メッシが苦笑しながら、宥めるようにレオンに言う。

「とりあえず、この後、何処に入れて貰うんだ？」

「ここからだとブリュタールが近い。あそこは連邦資本だから、多分大丈夫だろう」

「せっかく観光コロニーに寄るんなら、行楽に行きたいな」

レオンの表情が緩み、メッシも頷く。

「そうだな。ついでに、うちも補給を受けるか」

「たまには補給部隊も、休養させてやった方が良くないんじゃないか？」

レオンが真面目な表情に戻り、気を遣う。前回のテキサスでも、Aガンダムの予定外の積載で、メカニックや補給の受け入れ担当者は、殆どの時間を忙殺されていた筈だからである。

「そつえばそうだな」

レオンの言葉に、メッシも納得した顔で頷いた。

### 23・思い出話(前書き)

シャトルを引き渡すついでに、息抜きに観光に行く事になったガー  
ゴイルのクルー達。

ロサは相変わらず、外出を渋るのだが・・・。

### 23・思い出話

ブリュタールは、1年戦争終結後、地球連邦政府が、サイド3・ジオン共和国（旧・ジオン公国）に建造した、観光用コロニーである。

通常のコロニーでは、住居部分が優先されるため、非居住区は最低限の部分を確保するに止まる。

だが、観光用として造られたコロニーでは、主にその維持管理や案内人などの関係者が居住するのみなので、観光の目玉となる部分に最大限の力を注ぐ事になる。

「ブリュタール」は、現存するスペースコロニーの中では最大級の面積を誇るコノシア湖があり、その周囲を囲むように、自然公園を再現した森や、放し飼いの鳥類の保護区などがある。これらを巡る、遊覧船事業を中心としたコロニーである。

ガーゴイルは、ここで故障したシャトルへの補給を要請するべく、中央の港に入港した。

「地球連邦軍ガーゴイル隊所属・ガーゴイル艦長のメッシ・ジユノ

ーです。故障したシャトルを積載していますが、推進剤が異なり補給が出来ないため、こちらで救助を要請したいのですが」

港の傍らの港湾事務局へ、メッシが無線で連絡する。

『推進剤の種類は？』

「ケロシンです。故障の際にタンクから漏れて、推進剤が無くなってしまったようなのですが、うちは水素しか積んでいませんので、供給をお願いします」

『故障箇所は、問題無いのですか？』

「修理は済んでいますので、問題ありません」

『了解。入港を許可します。タグボートのレーザーアンカーで誘導しますので、自動操舵に切り替えて下さい』

「出来れば、我々も小休止をさせて頂きたいのですが、許可を頂けますか？」

『3日後に、生活物資を持って来る輸送機が到着しますので、それ

以降は港が塞がります。それまでならば、問題はありません。ただ、停泊中に戦闘が発生した場合は、即刻強制退去となりますので、ご承知おき下さい」

「承知しました」

ガーゴイルが、タグボート代わりの小型ランチに曳航され、港に接岸する。メツシが乗員の名簿などを入管審査官に見せ、許可を申請する。

審査が終わった後、暫くしてからシャトルが先程のランチにトイーングされ、ガーゴイルから降ろされた。

「今回は補給はしないの？」

マークが不思議そうな顔で、メツシに尋ねた。

「テキサスでは、予定外の積載で、休む暇が無かっただろ？少し位は、休養を取って貰っても良からう」



「まあ、我々補給確認の担当者としちゃあ、ありがたいが」

マークの言葉にメツシが笑みを見せたが、すぐに真面目な顔になる。

「戦闘にならない事を、祈るばかりだな」

「確かにな」

「3日後が期限らしい。実質、居られるのは、長くても2日だな」

メツシが肩をすくめた。だが、それを見てマークが笑った。

「戦時中だから、十分だろ」

「ああ」

「ロサたちはどうするの？」

マークが、まだ出て来ないロサ達が居る居住区画の方を見て、メツシに尋ねた。

「恐らく出かけるとは思うんだが、ロサが生身の時に襲われるのを警戒して、あまり外に出たがらないんだよな」

マークにつられて同じ方を見ながら、やや心配げにメッシが溜め息をつくのを見て、マークも頷いた。

「今や連邦のエースパイロットだからな。気持ちは分かるような気もするが……」

責任感のあまり、気を抜くタイミングを掴めないロサを心配するのは、レイラやフローラだけでは無い。彼らも同じなのである。

「まあ、別に俺たちが止めている訳じゃないし、出かけたくなったら、本人の意思で出かけるだろ」

「……そうだな」

マークの言葉に、メッシも頷いた。確かに、メッシ達がロサを止めている訳ではない。

マークは、整備班のグループと一緒に出かけていった。

「たまには、2人で出かけたら？」

レイラが、ロサを呼びに来た。そのつもりが無かったので、ロサはTシャツにジャージの軽装である。

「俺はいいよ。また付き添ってあげてくれない？」

「ボディーガードが1人ずつ居る方が、安全じゃない？」

早くフローラの所へ行きなさい、と言いたげな表情で、レイラがロサを促す。その表情に、渋々ロサが頷く。

「まあ、確かにそうかもしれないけど」

レイラがそれを見て頷き、悪戯っぽい笑みを見せ、ロサに言った。

「じゃあ、子供達は私とレオンさんで面倒を見るから、ロサはフローラをお願いね」

「……えっ!？」

ロサが、喉に何かつまったような声を出し、引き吊った顔をして戸惑う。

「他にどうしると?」

当たり前のようにレイラが言うのに対し、しどろもどろになりながら、ロサが抵抗を試みる。

「でも、万一襲われたら……」

「モバイルスーツが来なければ大丈夫でしょ?それに、ここは完全に連邦政府の資本だし、多少の攻撃なら、自前の保安部隊でも相手が出るから、大丈夫よ」

レイラの正論に、あえなく撃沈されたロサが、反論を諦め、溜め息をついた。

「……だと良いけど」

「じゃあ、お願いね」

「……はい」

” やれやれ…… フローラと二人で出かけるって言われても、何をどうしたら良いのか、全然解んねえよ……。まあ、時間も短いし、フローラを待たせちゃ悪いから、さっさと準備するかな”

例の防弾のデニムの上下に着替え、ロサがフローラを呼びに行く。

「フローラ、部屋に居る？」

「はい」

服装は普段と変わらないが、レイラに教わった、ありあわせの化粧品でフローラがおめかしして、ロサを待っていた。

直前に、髪も洗ったのだろう。ほのかなシャンプーの匂いにふわりと鼻をくすぐられ、いつもよりもやや光沢が強く見えるフローラの唇に、ほんの少しだけ背伸びしたような、少女特有の色気を感じたロサが、自分の心臓が跳ね上がるような熱さを感じ、思わず顔を赤くした。

フローラも、ロサのデニムの事を聞いているので、それを見て嬉しそうに微笑んだ。目の遣り所に困ったロサの顔が更に赤くなり、フローラの顔を直視出来なくなって、そのまま俯いてしまった。

普段の慇懃無礼かつ勝ち気な様子はどこへやら、まるで初恋の相手に告白する小学生の様に、ぼそぼそとロサが呟いた。

「じゃあ、行こうか」

「……はい」

2人とも、異性と2人で出かけるというのは初めてで、何をどうしたら良いのか、見当もつかない。何だか、とても様子がぎこちないが、取り敢えず2人も出かける事になった。

ロサとフローラは、遊覧船には乗らずに、森の遊歩道を歩いていた。

遊覧船の方が観光らしく感じられるが、どうせガーゴイルのメンバーに冷やかされるだけだ。案の定、近くを通った遊覧船で、メルサ達のはしゃぐ声が聞こえる。

「俺達も乗ろうか？」

戦いのこと以外は、まるで口下手なロサは、こういう状況が苦手である。話題が見つからず、気まずい雰囲気を感じ取り、やや言いにくそうに、フローラに声をかける。

「もう少し、このままでいたいな……」

フローラが、ロサの顔を見ながら微笑んだ。ぎこちない笑みでロサが頷く。

「……わかった」

”……どうしよう。こんな時って、何を話したらいいんだ……？”

「何だか、懐かしい感じがする……」

フローラが目を細め、木漏れ日を漏らす木立ちを見上げながら呟いたのを聞き、ロサが不思議そうな顔をして、フローラを見た。

「懐かしい？」

「私達の孤児院は、シャインリバーの隅の丘陵地にあったの」

顔を上げたまま、眩しそうに目を細めるフローラの言葉に、ロサが納得したように頷いた。

「ああ、あの辺りは木も沢山生えてたな」

「すごく長閑で、空気も良かったわ」

「……ごめん、辛い事を思い出させちゃったかな」

丘陵地の孤児院が倒壊した際の、悲惨な様子を思い、フローラの心情を気遣ったロサが、肩を落とした。

それを見たフローラが、少し寂しげな笑みを浮かべて、横に首を振った。

「そんな事ないよ。ロサとお散歩するのは初めてだから、ゆっくりお話したかった」



「……そうか」

安堵した様子で、ロサも笑みを浮かべたが、無理に作り笑いをするフローラの様子に、胸が痛んだ。

それがロサの表情に出ってしまったのを見て、思わず”あつ……”という顔をした後、フローラが話題を変えた。

「ロサは、どの辺りに住んでたの？」

「官公庁の傍の住宅地。スラム街からは、あまり良い目で見られない地区さ」

自嘲的な笑みを浮かべるロサを、フローラが怪訝そうな顔で見た。

「どうして？」

「連邦の関係者が移住しすぎて、本来の居住者だった人たちを、隅っこに追いやってしまったからね。俺自身は地球に居たかったんだけど、ガーゴイル隊がフロンティアサイド中心に展開する事になって、移住せざるを得なかった」

ロサの表情が、あまり日本を離れたくなかった事を物語っていた。次第に笑みが消えていく。

林の隙間から見える、湖面に映る人工太陽の光を、遠くを見るような表情で見るロサにつられ、フローラも同じような表情を見せた。

「地球に居た事があるの？」

「5歳まで日本に居たんだ」

「そういえば、ヒシモトって日本人の苗字ね。今まで気付かなかつたわ」

「でも、今は大気汚染や温暖化が進んで、俺がいた頃より住み難いらしい。そのまま住んでいたら、もしかしたら体調が悪くなっていたかもしれない」

俯いたロサの顔を、フローラが意外そうな表情で覗き込んだ。

「体が弱かったの？」

フローラの顔をちらりと見て、ロサが無言で頷いた。

「出産の何週間か前に、お袋が妊娠中毒症になって、生まれた時は仮死状態だったらしい。それに輪をかけて、心臓の大動脈と大静脈が生まれつき逆になったから、その繋ぎ換えの手術も必要だった。生きてるだけでも奇跡だと、助けてくれた医者が呆れてたらしい。でも、その時に全身が酸欠状態になったせいで、部分的に脳が停止してしまってるんだ。今でも時々、言葉が詰まったり、疲れが酷いと新しく物を覚える事が出来なかつたり、知ってる人の名前を忘れてたりする。普段は目立たないから、脳機能障害や知恵遅れではないと思われるんだよね。本人は気にしてるんだけど、周囲は気付いてなくて、辛かった時期があった」

「そうなんだ……」

「体が弱いのは、親父が軍隊の格闘技で鍛えれば何とかなるって言って、しょっちゅう基地に連れて行かれた。武術やガンダムの操縦も、その頃から身に付けさせられたものなんだ。最初は、武術が嫌で仕方が無くて、よく泣いてた」

当時を思い出したロサが、照れ臭そうに苦笑した。

「ロサが泣いてたの？何だか想像出来ないな。ちょっと見てみたかった」

フローラが、悪戯を仕掛ける子供のような表情で、ロサの顔を覗き込み、微笑んだ。

その視線とまともに目が合い、ロサが顔を赤くして、視線を逸らした。

”出来るものなら、このままずっと、こうしていたい。この笑顔を、俺の手ですつと守り抜きたい。でも、今の俺に幸せになる権利なんか、無い……”

「……どうしたの？」

ロサが複雑な表情を見せたせいか、フローラがロサの顔を覗き込んだ。

「……何でもない」

照れを隠し切れないロサの表情を見て、フローラがまた微笑んだ。だが、不意にその表情がスツと沈む。暫く表情を変えずに沈黙した後、フローラが静かに話し始めた。

「私……生まれてすぐに孤児院の前に捨てられていたの。だから、

お父さんもお母さんも、顔も分からないの」

「……そうなんだ」

意外な話題になり、言葉に詰まったロサが、声を潜めた。

本当は、ロサ自身はもっと明るい話をしたいのだが、フローラが自分からこんな話を始めたという事は、誰かに聞いて欲しくて仕方が無かったのだろう。そう感じたロサは、暫く聞き役に徹する事にした。

「でも多分、私が居たらどうしても生活できなかつたんじゃないかって、そう思うの。必要が無かつたから捨てられたんじゃない筈だって、そう思うの」

自分に言い聞かせる為の、独り言を言うような表情で話すフローラに、ロサは自分の言葉を纏める事は出来なかつた。

「確かに、自分が生きていくだけで精一杯の人も、多いからな……」

ロサが木立ちを見上げ、相槌を打つ。遠くを見るようなロサの顔をちらりと見て、フローラもつられて木立ちを見上げた。

「多分、スラム街に居るんじゃないかな……」

「両親に会いたいと思う？」

ロサの質問に、フローラは少し間を開けてから、困惑した表情で首を振った。

「……分からない。会っても何かが変わる訳じゃ無いと思うし……  
本当に、ただ必要無いから捨てられたんだと判るのが、怖い気もする」

「フローラは優しいんだね……。俺ならそうは思えないな。多分、  
必要無いんなら俺なんか生むんじゃないやねえよって、ずっと親を恨んで  
生きていく事になると思う」

ロサは、フローラの言葉に穏やかな表情で相槌を打ってはいたが、  
個人的にはフローラの両親を許せないと思っていた。

しかし、フローラ自身がそう思っていないとなると、怒りを表に出  
す訳にもいかず、複雑な気分になった。努めてそれを表情に出さな  
いように気をつけながら、ロサが口を開く。

「じゃあ、フローラにとっては、孤児院の人が、本当の家族だったんだ？」

「うん……。だから、あの時は本当に混乱して、どうしたら良いか分からなくて……」

当時を思い出したのか、フローラが両手で、鳩尾の辺りを抑えた。

「俺も目の前で、家を踏み潰されたからね。気持ちはよく解るよ。結局、お袋の遺体も瓦礫で潰されて、救助は出来なかった」

「目の前で……!？」

フローラが、思わず目を見開き、両手で口を覆った。

ロサが、無力感に苛まれた様子を隠しきれないまま視線を落とし、フローラから顔を背けた。

「ああ。目の前に、ロード軍のギラ・ドーガが落ちて来た。玄関で俺とぶつからなければ、お袋は死なずに済んだ筈だ。お袋が死んだのは、俺のせいなんだよ」

自宅を倒壊させられたとは聞いたが、ロサの母親がそこまで無惨な最期を遂げたとは、フローラは想像もしていなかった。

無意識に、悔しさを隠しきれなくなっていたロサの表情を、直視出来なくなったフローラが、悲しげに俯いた。

「ロサも、悲しかったんだね」

「でも、俺は家族の顔は、判るからね。フローラよりは、マシかも知れない」

自嘲的な笑みを見せたロサの、家族という言葉に、フローラが思い出したように呟いた。

「他の子達は、誰も助からなかったのかな……？」

「その後、丘陵地の孤児院は、何人かは助かったらしいけど、他の孤児院の定員の都合で、助かった子も、ばらばらになったそうだ。シスターは全員亡くなったらしい」

澁みなく全て言い終えたロサの顔を、フローラが目を丸くして見た。



「どうしてそれを？」

「ガーゴイルが出港するまで少し時間があつたから、本当にフロラ達の受け入れ先が無いのか、調べてみた。丘陵地の孤児院は、あの教会しか無かったからね。名前を変えていたら分からないが、その後の消息をちゃんと掴めたのは、君とメルサの他には、2人だけだつた。他の子は、恐らく……」

ロサが、フロラの心情を察し、語尾を濁した。堪らずフロラが固く目を瞑つた。

「2人……？10人以上居たのに……？」

白いワンピースの腰の辺りを、無意識に掴んだ小さな手が、力なく握られ、肩が震え出す。

「私、何か悪い事したのかな？神様の天罰を受けるような事をしたのかな……？」

「君が悪いんじゃないよ。いつまでも戦争をしてる、俺達が悪いんだ。あの時だつて、俺がもっと早くガンダムを見つけて、孤児院に墜落する前に奴らを撃墜していれば、そんな事にはならなかった筈なんだ」

そこまで言って、ロサはフローラの前に立ち止まった。

フローラは俯いたまま、無言でロサの両肩を掴んだ。次第に力が強くなり、その手が震え、涙が堰を切ったように溢れだす。

ロサが悪いとは思っていない。だが、悔しさや悲しさをぶつける場所が、どうしても見つからない。

自分が悪者になる事で、少しでも悔しさをぶつけさせてくれるロサの優しさに、フローラは少しだけ甘える事にしたのだ。

「俺は、親の顔が判るだけ、まだ幸せだったんだな。寂しかったんだね、フローラは……。悔しかったよね、あんな形で家族が死んだんだもんね……」

ロサが、そっとフローラの両肩に手を置いた。まだフローラは、嗚咽を堪えたまま震えていた。その様子を見ていられなくなったロサが、慈しむような表情で、静かに諭すように言った。

「一度、声を出して、気が済むまで泣いた方が良いよ。声を抑えて泣いてると、後で苦しくなるからさ。泣ける時に泣いた方がいい。これから先、どうしても泣けない時って、必ずあるからさ」

ロサの言葉を待っていたかのように、フローラが声をあげて、号泣した。

ロサは、いつかレイラがしてくれたように、フローラの背中をそっと抱き締めた。

だが、フローラが号泣する痛々しい姿を直視する事が出来ず、ロサは目を閉じたまま、フローラが泣き止むまで立ち尽くした。

どの位の時間が経ったのだろうか。少し日が傾き、フローラが泣き止んだ頃、傍を通る遊覧船は、既に静かになっていた。

「乗りに行くのか？」

「……はい」

涙の跡はまだ残ったままだったが、以前より明るい表情で、笑みを浮かべたフローラが、ロサの言葉に頷いた。

2人は、遊覧船乗り場に向かって、ゆっくりと歩き出した。この後の出会いが、自分達の運命を左右する事になるなど、予想だに出来ないままに……。

## 24・遊覧船で（前書き）

フローラが泣き止んだ後、遊覧船乗り場に辿り着いた2人。

だが、その2人を、傍らから眺める者が居た。

## 24・遊覧船で

二人が辿り着いた遊覧船乗り場は、比較的大きな船が発着する、大きめの港だった。

丁度、琵琶湖のミシガン号のような、外輪船をモチーフにした外観の遊覧船が、僅かな波音を立てながら、出港時刻を待っていた。総重量は800t位だろうか。時間帯が異なるが、小規模ながらもデザインークルーズもあるとの看板が、改札横に掲示されている。

「意外と本格的だな」

切符売り場の横の岸壁から、十数mの所に接岸している白い船体を見て、感心したように口サが呟いた。

密閉されたコロンー内なので、無論煙突から煙を出す訳ではないが、船体後部の大きな赤い外輪は飾りではなく、実際にモーター仕掛けでスクリューとして機能するようだ。

売店でジュースを買ってきた2人が、乗船券売り場への列に並ぶ。

「もう空いてると思ったのに、並んでるね」

ロサが少し鬱陶しそうな声を出したのに対し、フローラは満面の笑みを浮かべて答えた。

「急ぐ訳でもないし、のんびり出来て良いよ」

気を遣っているのではなく、単純にロサと一緒に何かが出来ることが嬉しくて仕方が無い。彼女は、何かに急かされるといふ環境で育っていないため、もともと天真爛漫でのんびり屋なのである。

そんなフローラの笑みに、仏頂面を続ける事など出来る訳も無く、ロサが表情を緩める。

「フローラがそう言うなら、別に良いけどさ」

そう言った直後、ロサがふと視線を感じ、改札口に目をやる。何気なく見た先に、同じ歳くらいの女の子が立っていた。

耳や襟にも届かない、短い栗色の髪に、やや愛嬌のある雰囲気、髪と同じ色の優しい瞳。身長も、ロサ達と同じ位だろうか。体にフィットしたタイトジーンズや、少し日焼けした小麦色の肌、如何にもスポーツをしていそうな引き締まった体つきに、まだ幼さを残す丸顔。見た目からして大人しいフローラとは対照的な、見るからに活発な性格、という雰囲気である。

何故かこちらと目が合い、ロサが慌てて目をそらす。その様子をフローラが不審に思い、ロサの顔を見た。

「あの子、知り合い？」

不意の質問に、ロサが焦りを隠しきれずに、しどろもどろになる。

「いや、偶然目が会っただけ。名前も判らない、知らない子だ」

「ホントに？」

ロサの目をまっすぐに見ながら、フローラがロサに顔を近づけて詰り寄る。

「ホントだってば……！」

ロサが慌てて否定する。その様子に、フローラが吹き出した。

「あはは……！……！……！……！……！……！」



ロサが冷や汗を流しながら、腹を抱えて笑うフローラを、呆然と眺める。

”フローラ……頼むから、そんな風にかかわないでくれよ。俺は、マジで否定してんだからさあ……”

心の中で文句を言うロサだが、口には出せなかった。先程よりも、フローラの表情が明るくなった様に見えたからである。

だが、もう一人の女の子の違和感が気になった事も、事実である。何故だか、初対面である気がしない。

”ロード側じゃなければ良いが……”

そう考えた瞬間、表情に出そうになったが、明るく笑うフローラの表情を見て、今は行楽に徹する方が良いと判断したロサは、嫌な予感が表情に出そうになるのを、何とか抑え込んだ。

常に敵を意識しなければならぬという、軍人の悪い癖である。

さらに言えば、遊覧船の乗船口に1人で居たというのが、ロサに違和感を与えたのかもしれない。

2人が改札を通る時、件の少女は、ロサとフローラの関係を探していたらしく、缶ジュースを飲みながら、フローラを勘繰るような目でちらりと見た。

視線に気付いたフローラは、ロサが気付かない様に、デニムジャケットの背中の裾を指先で掴み、“渡さないわよ”と言わんばかりに、キツと少女を睨み付けた。

その気配（殺気？）にロサが気付かない訳が無く、自分の傍らで激しい火花が散っている様子に、冷や汗を流していた。

”フローラ、何かキャラが違う……でも、何で怒ってるんだろ？”

「フ、フローラ、どうしたの？」

自分が絡む状況で、女性の嫉妬を感じるという経験も環境も無かったロサには、この時にはフローラが殺気を放つ理由が分からなかった。ロサがフローラの嫉妬に気付くのは、もう少し後の事になる。

ロサが吃りながら尋ねる声を聞き、我に返ったフローラから、殺気が消えた。

「な、何でもないよ。行こう」

そう言って微笑んだフローラには、元の天真爛漫な空気が戻って来ていた。

乗船後、2人は後部の展望デッキで、風に当たっていた。初めてのデート（？）だから、手を繋ぐほどの余裕も無く、何を話しているのかも、お互いに見当が付かない。

何気無い雑談をしているうちに、乗船時間の殆どが過ぎた。

「お手洗いに行つて来るね」

乗船時間が残り僅かになった頃、フローラがそう言って、ロサのもとを離れようとした。だが、さっきの少女にフローラが狙われないか、どうしても気になる。

「じゃあ、入口の近くまで、俺も一緒に行くよ」

ロサも室内に入り、洗面所の前のベンチで、フローラを待つことにした。ロサが腰掛けた瞬間、その隣に、同じ様に誰かが腰掛けた。

”この気配は……？”

ロサが、いぶかしげな表情で、その方向を見る。やはり、先ほどの少女が、同じ船に乗っていた。慌ててロサが飛びのき、焦りを隠しきれない表情で、懐の拳銃に手をやる。

「そんなに慌てなくても、良いじゃない」

少女は、ロサの様子を見ながら、呆れたように声を出した。

「何が目的だ!？」

表情を変えないまま、フローラに聞こえないように、押し殺したような声でロサが尋ねた。

敵意や殺気は感じなかったが、それだけに目的が掴めず、ロサが明確に警戒している様子を、わざと相手に見せる。

「そんなに私が怖い？」

少女が、”意外に臆病ね”という拍子抜けした表情で、ロサの顔を

見た。

「状況が状況だ、警戒もするさ」

不意に現れた少女に焦るロサは、相手に殺気を込める事も忘れて、まだ警戒心を剥き出しにした表情で少女を睨んだ。そんなロサを、少女はつまらなさそうな表情で見つめた。

「ただ、好みだったから見てただけなのに」

「……」

「1人だったから、チャンスだと思ったただけなのに、そんなに警戒されたら、シヨックだな」

「……？」

ロサには未だに、相手の言いたい事が理解出来ていない。

要するに、少女はただのナンパだと言いたいだけなのだが、そういう経験も知識も無いロサには、単純に怪しい女にしか見えていないのである。

「彼女さんは居なくなっただの？」

「洗面所に行ったただけだ、今も一緒にいる」

「ふーん、残念」

いかにもつまらなそうな声とは対照的に、少女は楽しそうに微笑を浮かべている。

ここで、ロサは相手が拳銃などの武器らしきものを、全く持っていない事に気付いた。バッグなどの類も、よく見ると持っていない。

「あなた、軍人？」

「……」

ロサが答えるべきか迷っているうちに、少女は小さく溜め息をつき、次の言葉を発した。

「まあ良いわ、答えたくなければ、別に良いわよ。でも、家族は居

ないでしょ?」

「なぜそう思う?」

「さっきの切符売り場の慌て方を見れば、誰だって分かるわよ。親に恋愛の仕方をきちんと教わっていれば、あんな風に慌てないもの」

「世間知らずで悪かったな」

むっとした顔で睨むロサを見て、少女が苦笑した。その表情が、どこことなく寂しげなものに変わった。

「私もね、戦争で両親を亡くしてるの。あなたとは、気が合つと思っただけだな」

「……」

返答に困り、どんな表情をすれば良いのかも見当がつかないロサに、少女が屈託のない笑顔を向けた。

「私はリリア＝ミゼル。あなたは?」

「……ロサ＝ヒシモト」

ロサは偽名を考えず、本名を言ってしまった。何故か分からないが、嘘についても、見破られそうな気がしたからである。

名前を聞いたリリアは、人懐こい笑顔をロサに向けた。

「いい名前だね。優しそう」

「……そうかな？アルファベットで書くと、よくローザとかロゼとか、女の子と間違われるから、俺はあんまり好きじゃないんだけど……」

首を傾げるロサの表情を見たリリアが、くすりと笑った後、ロサから視線を外し、少し俯いた。

「私もね……実は軍人なんだ」

リリアの言葉に、ロサが目を見開いて驚いた。

だが、どちら側なのか質問を切り出す間もなく、リリアが言葉を続



けた為、ロサは成り行きでそのまま会話を続ける事になった。

「移民のシャトルが故障して、戦場に入っちゃって……助かったのは、私だけだったみたい。小さい子供って、少しくらいは溺れたりしても、大人より脳が死なないようになってるんだって。だから、私は後遺症も出なかった」

「軍に拾われた訳か。俺達と同じように」

「そういう事ね。あなた達もそうなの？」

普通の少女と変わらない、明るい声を出すリアの様子に、完全に敵意を感じないと踏んだロサが、拳銃から手を離し、警戒心を解いた表情で頷いた。

「俺達は2人共、住んでた家をモビルスーツに踏み潰された。いわゆる戦災孤児だ。偶然、同じ戦艦に拾われたんだ」

「ふーん。あなたは、この戦争、どう思ってる？」

「どっして？」

「自分が居る側が、正しいと思う？」

リリアの質問に、ロサは少し困惑した様子で、暫く間を置いて考えた。完全に、連邦や自分が正しいとは、思っていないからである。表情を変えられないまま小さく溜め息をつき、出て来た答えを、素直に言葉に乗せた。

「正しいかどうかは、正直、俺にも分からない。ただ、人殺しを続けてる自分が、幸せになれない事だけは、確かだな」

「人殺し……か」

リリアが少し俯いて呟く。ロサが、リリアのその表情を見ながら、話を続ける。

「でも、戦争を終わらせる事が出来れば、他の人が幸せになれると信じてる。でなければ、戦争なんてやってられない。正しいとか間違ってるというより、自分の艦の、家族みたいな仲間を守りたい。それが本音だな」

リリアが顔を上げ、表情を伺うようにロサを見た。

「あの彼女さんを、守りたいんだ？」

「まあね」

「自分の命を張ってでも、守りたい？」

「どうせ一回死んでた命だ、他人に捧げるのも悪くは無しさ。仮死状態で生まれてたのが生き返って、こうして生きてるんだからな」

ロサは、真面目にしか恋愛話は出来ないから、笑顔でそんな話はい出来ない。この時も、ロサの表情は真剣そのものである。

「そっか…そこまで好きなら、私はお邪魔虫だね」

「戦争が終わった時に生きてたら、友達には、なれるかも知れないけどね。彼女って呼べる存在になって貰う事は、出来そうに無いな」

ロサの苦笑する様子に、リリアも苦笑を返し、小さく溜め息をついた。

「友達かあ……残念。彼女じゃないんだ」

「自分が幸せになれないと思ってる人間が、他人を幸せには出来ないだろ？フローラだって、受け入れてくれる孤児院があれば、そこで降りて貰うつもりだ」

「フローラって言うんだ、あの子」

「苗字は俺も知らない。でも、この世で一番幸せになって欲しい人だ」

「あなた自身の手で、幸せにして欲しいと思ってると思うけどな」

ホントに女心を解ってないんだから……という呆れた目で、リリアが口サを見た。

「女の子はそう思うんだ……？男は、自分よりもっと幸せに出来る人が現れる事を願って、別れようとすることもあるからね。特に俺みたいな荒くれ者は、そう思ってしまう」

口サが肩をすくめ、その様子を見てリリアが笑った。

「じゃあ、あの子があなたの船を降りた後に、私を彼女にしてくれない？」

膝を乗り出してロサの顔を見るリリアに、ロサは首を横に振った。

「フローラだけじゃない。君も苦勞してるみたいだし、俺みたいなのに関わって、これ以上不幸には、なつて欲しく無いな」

「あなた、真面目だね。今時、珍しい」

「色々あったから、自分みたいな不幸な人間を、これ以上増やしたくは無いんでね」

「……そっか」

リリアは気が済んだのかベンチから立ち上がり、ロサに背を向けた。

「また会ったときに、彼女がいなかったら、立候補するわ」

「お互いに生きてたらね」

ロサの言葉に、リリアが振り向き、笑顔を向けた。

「無事で、ロサ」

「無事で、リリア」

どちらの軍の所属かも結局お互いにわからないまま、二人は別れた。

少だけロサの声を聞いていたのか、戻ってきたフローラが、ロサの顔を見た。

「誰とお話ししてたの？」

「案内の人だよ。どこか面白い所が無いか、聞いてたんだ」

まさか、敵か味方かも判らない人間と話していたとは言えない。余計な不安を与えまいと、ロサが口から出任せの嘘で誤魔化する。

だが、どうしても目が泳ぐロサの様子に、フローラが詰め寄った。

「ほんとに？」

腰に手を当ててロサに顔を近づけ、射抜くような視線で睨むフロー

ラに、更にロサの目が泳ぐ。

「本当だつてば……！」

「どつして慌てるの？」

「フローラが疑うからだよ」

知ってか知らずか、リリアがベンチに置いていったパンフレットを見つけて慌てて拾い、ロサが必死にフローラをなだめる。

その様子を、遠くで見っていたリリアがクスクス笑っていたが、ロサ達は気付いていなかった。

そのすぐ後、ロサたちを乗せた遊覧船は、もとの港に到着した。

ロサとフローラが改札口を抜けた直後、ロサの無線機の警報が鳴った。

「コロニー外で戦闘開始！ガーゴイル乗員は直ちに帰還せよ！」

ロサが、腰のベルトに吊っていた小型無線機から、緊迫した雰囲気  
のメツシの声が聞こえる。

「こんな所で、敵襲!？」

ロサが急に軍人の表情に戻り、フローラを見る。フローラが頷き、  
2人がガーゴイルへ向かって駆け出す。

「フローラ、ごめんね。もう少し、ゆっくりしたかったんだけど」

走りながら、ロサがフローラを見て、申し訳なさそうな声で謝った。

「ううん……平気だよ。急ごう」

フローラが、取り繕うように、気丈に微笑んだ。

コロニーの保安部隊のジェガンと共に、戻ったガーゴイルのパイロ



ツトが、順次出撃していく。

「ちっ……！またワルザか！？」

最も早く戻ったケニーとグールが、舌打ちしながら迎撃に向かった。

「ロサが戻るまで、何とかもたせるぞ！グール、ワルザを頼む！他は俺が何とかする！」

「了解！今度は俺達だって、負けはしない！」

ロサの訓練で、ワルザやグリアラスの迎撃まで、ほぼ完全に出来るようになった2人が、グールがワルザに、ケニーが他のギラ・ドーガに向かう。

グール達のジエガンが出撃した直後、レオンや子供達も戻って来た。

「レオンさん、レイラ姉ちゃん、頑張れ！ロード軍なんてやっつけちゃえ！」

「わかった！部屋で大人しく待ってるよ！」

両手を振り上げて声を出す、子供達の応援に笑顔を向け、軽く手を挙げてレオンが応える。

「まだ死ねないな、俺達は」

「「まだ」なんて言わないで下さいよ。みんな、レオンさんが必要なんですから」

モビルスーツデッキへ向かって走りながら、レオンが小声で呟いたのを聞いて、レイラが真剣な声でレオンに言う。その後、レイラはレオンから視線を外して、小声で言った。

「それに……まだ私は、レオンさんに恩返しを出来てませんから」

「お前をガーゴイルに残したのは、メツシの判断だ。俺は何もしてねえよ」

レイラが、レオン機より手前でポンと床を蹴りつけて、慣れた無重力に身を任せ、乗機のコックピットに向かう。

”私がハートレイ大佐の死を乗り越えて、ロサがまた慕ってくれるような人間に成長出来たのは、レオンさん、あなたのお陰なんです。

私は、その恩を返さなくてはならない。戦死なんかさせませんよ、絶対に！”

レイラが、心の中で呟いた。

レイラが、身近に居たハートレイやレオンに憧れて士官学校に入つた後、3年前のマフティー反乱（0105年・公式作品「閃光のハサウェイ」参照）の戦闘に巻き込まれ、レイラの両親は亡くなった。

その後は、士官学校でレイラの組を指導していたレオンが、レイラの親代わりと言える程、親身になって世話をしてくれていた。

現在、ガーゴイルの小隊長を任される腕を持てたのも、レオンが支えてくれたからこそなのだ、レイラは思っている。だから、レオンを意地でも戦場で死なせない、密かにレイラは誓っていた。

レオンも、自機のコックピットに入り、出撃準備にかかる。

”死に場所を求めてたつもりだったのに、お前のお陰ですっかり狂っちゃったよ、ハートレイ”

レオンが苦笑しながら呟いた。

レオンも、グリプス戦役（0087年・公式作品「機動戦士ガンダム」参照）のコロニーレーザー試射（サイド2の通称18バンチ事件）で、妻と幼い娘を亡くしている。

だから、娘と同じ年頃のレイラが両親を亡くしたと聞き、どうしても放っておく事が出来なかった。

本音を言えば、レオンは家族を失った悲しみに絶望し、グリプス戦役で戦場に身を投じ、死ぬ覚悟をしていた。

だが、ハートレイを通じてロサやレイラがなついてしまい、戦場に出る度に「レオンさん頑張れ！」と笑顔を向けられ、死ぬに死ぬななくなってしまった。

”メルサ達を見てると、あの頃のロサやレイラを思い出すな……全く、ますます死ねないじゃないか。すまん、アンナ、カレン。もう少しだけ、待っててくれるか……？”

レオンは、穏やかな笑みを浮かべ、亡き妻と娘に心の中で詫びた。

ロサが姉としてレイラを慕うように、今のレイラは、レオンを父親のように慕っている。

まだ、死ねない。出来れば、レイラがウエディングドレスを着るまでは、生きたい。

レオンは、ロサ達がガーゴイルに来てから、そんな事を考えるようになっていた。

「レオン・ジエガン一号機、出るぞ！」

悲しみを振り払うように、レオンはひととき大きな声を出した。

## 25・モビルアーマー（前書き）

レオン達がガーゴイルから出撃した直後、ロサとフローラが戻ってきた。

周囲の環境の変化に翻弄され、出撃後のロサの思いが揺れ動く。

## 25・モビルアーマー

レオンのジェガンが、ガーゴイルから出撃していったのを見て、メツシが指示を飛ばす。

「ゲールがワルザ、ケニーやレイラ達が他を当たっている。2機いるベリックが厄介だ、他は任せて、そっちを先に潰してくれ。ロサが戻り次第、ワルザに向かって貰う」

『了解！』

レオンが、前線を突破して中盤に迫って来たベリックを潰しに向かった。

このやりとりの直後、ロサとフローラもガーゴイルに到着した。

入口に飛び込み、見慣れたハンドグリップのレールと、滑り止め塗料が塗られたグレーの床が2人の目に入った途端、フローラが崩れるように、前のめりに倒れ込んだ。その音を聞き、慌ててロサが駆け寄る。

「フローラ、大丈夫！？」

両肩を下から持ち上げてフロアを助け起こすが、膝に力が入らないフロアは、座り込んで肩で息をしている。

「うん……大丈夫……だよ……」

結構な距離を走ったため、さすがに顔が青ざめている。心配した口サが、もう一度フロアの両肩を持ち上げて壁にもたれさせた後、インターホンでメッシに声をかけた。

「艦長、急ぐ必要は無いけど、フロアに酸素マスクを頼む」

『どつした!?!』

「走り過ぎで顔が青い。携帯用のスプレー型のボンベで良い。いま入口に居るけど、座り込んでしまって動けない状態だ」

『わかった。敵はワルザとベリック2機、ギラ・ドーガ10機だ』

「了解。もうみんな出てるのか?」

『お前が最後だ。エアハッチのロックを閉める。出港する』



「わかった。フローラを頼む」

ロサはインターホンを置き、へたり込んでいるフローラに目線を合わせて、優しく微笑んだ。

「いま携帯用酸素ボンベを用意してもらってるから、このまま、ここに居て。いいね？」

フローラは息が弾んで声も出せないまま、大きく頷いて見せた。

本当はロサが抱えて走ったほうが速かったのだが、両手が塞がってしまうと、いざという時に素早い対応が出来ない。ロサはフローラを守る事を優先して、自分がフローラに合わせて走る方が安全だと判断したのである。

フローラが頷いたのを確認して、急いでパイロットスーツに着替えた後、ロサはモビルスーツデッキに走った。

「今の状況は？」

Aガンダムに乗り込み、コックピットのハッチを閉めたロサが、メ

ツシに確認する。

『双方撃墜無し、膠着状態になってる』

「了解。俺がワルザに向かう」

『頼む』

ロサも無線を切った後、ガーゴイルからAガンダムが飛び出した。

「いい加減にしろよ、姉さん……！」

ロサが、観光客まで巻き込もうとするソフィアに対し、怒りを露わにして呟いた。

ワルザとゲールのジエガンの戦闘は、ゲールが防戦一方の状況にあった。

「これが、ロサの姉さんの機体……！」

グールもそれを知っているだけに、ワルザからの狙撃を防ぎ、鏢迫り合いにも応戦はするものの、流石に自分から狙撃したり、斬りかかる事が出来ずにいた。

それを知らないソフィアは、グールに対し、全力でファンネルの猛攻を仕掛けていた。

だが、今回はガーゴイルのパイロットは、全員がロサの特訓を受けている。たとえグールが止め損ねても、他のジェガンがビームを阻止してしまう。

「他の機体まで、ロサと同じ事を……!?!」

次々に狙撃を阻止され、ソフィアが驚愕の表情を浮かべて舌打ちした。

これでは、もう数機程度はワルザと同レベルの戦力が無ければ、ガーゴイルに掠らせる事すら出来ない。それを肌で感じ取ったソフィアが焦り、ガーゴイルに向けて連続狙撃を試みるも、全て阻止されてしまった。

そのうち、ワルザのファンネルの数基がグールに撃墜され、さらに

グール以外のジェガンからの狙撃でも、1基が落とされた。

だが、事情を知らないメツシが、グールが攻めあぐねているのを見かねて、思わず怒鳴る。

「誰か、ロサが行くまでの間だけでも、グールの応援は出来ないのか！？ワルザ相手に、攻めあぐねてるじゃないか！！」

それを聞いたレイラの動きが、思わず止まった。

「ワルザ……！？ソフィア……！！」

ソフィアを、どうしても自分の手で撃つ事は出来ないと悟ったレイラが、切羽詰った表情で呟いた後、動いた。

ワルザに向かって無線を開き、レイラが、震える声でソフィアに訴える。

「ソフィア、もうやめて！私の手であなたを撃つ事なんて出来ないよ……そんな事、出来る訳無いじゃない！」

『レイラ！？』

「どうして私たちが……ロサとあなたが敵同士なのよ!? こんなの、絶対に間違ってる!! お願いだから、昔のあなたに戻って! 元通りの、ロサのお姉さんに戻って! 仲が良かった私の幼馴染みに戻ってよ……!」

悲痛なレイラの訴えを拒絶するかのように、ギラ・ドーガの狙撃が、レイラのジェガンを襲う。これをグールのジェガンのライフル狙撃が阻止した。

そうこうしているうちに、ロサのAガンダムが、ワルザに向かって飛来した。

「こんな所で、戦争なんてしてんじゃねえよ!!」

ロサが鬼のような形相で怒鳴りながら、いきなりビームサーベルを抜いて、ワルザに斬りかかる。

ロサがファンネルを使わなかったのは、万一外した場合に、流れ弾がレイラやグールに当たらないようにするためである。

ワルザもビームサーベルを抜き、ロサのAガンダムの斬撃を受け止め、激しいスパークが飛び散る。

「遅くなってすまん！他の機体を頼む！！」

『わかった！！』

ロサの言葉に、ロサの姉だからと遠慮して手を出せなかったグールが、安堵の溜め息をついて頷き、レオンが1人で2機を相手にしていたベーリックの方へと向かう。

鏝迫り合いで力負けするまいと、互いのサーベルを押し付け合いながら、また2人が言葉をぶつけ始める。

「こんな観光コロニーの空域で戦闘するなんて、何を考えてるんだ！！」

「今は戦争中……手段なんか選んでいられない！隙を見せるあなた達が悪いのよ！！」

「そんなのは革命とは言わない！テロって言うんだよ！！」

ワルザが、切っ先を弾くと同時にビームライフルを連射する。ソフィアがレイラへの直撃を無意識に避けたため、ファンネル無しで、

再び両者がビームサーベルを交え、接近戦での鏖迫り合いを始める。

ロサもつられて、ファンネルを出すタイミングを逃してしまっていたが、激しい怒りのために、その事に気付けないまま、ワルザの斬撃に応戦してしまっていた。

「革命など必要ない民衆だって居るだろう！観光に来ている人間まで危険に曝して、何が革命だ！！」

「革命に参加出来ない、戦う力の無い民衆の分まで、私達が戦わなければならぬ！！」

「二人とも、もうやめて！こんな所であなたたちが争っても、何にもならないよ！！」

レイラがそう叫んだ瞬間、それまでとは違う方角からの凄まじい連射が、Aガンダムを襲った。

これに気付いたロサが、一旦ワルザと距離を取り、レイラを庇う為にファンネルとビームライフルをそちらに向け、撃てるだけのビームを放って相手の砲撃を阻止した。

ロサが防御で手一杯になった際に、ワルザが撤退を開始する。だが、

連射の壁に遮られ、どう見ても追撃は出来そうに無い。

「ちっ！火線がこっちを狙ってる以上、コロニーから離れないと流れ弾で被害が出ちまう！やむを得ん、あっちを先に潰す！！」

ロサがワルザを諦め、火線の発射源に向かって突進していった。

「ロサ！ソフィア！どうして……！！」

心の底から叫ぶレイラの声は、この時の二人には届かなかった。

「この雰囲気……サラマンダーでロードを落とそうとした時に、邪魔された奴か……！？」

断続的に続く砲撃の嵐を掻い潜りつつ、ロサがAガンダムを更に移動させ、発射源とコロニーとの位置関係を変えていく。

コロニーへ直撃が行く事が無いと思われる位置まで移動を終え、威嚇と相手の動きを読むために、ロサがファンネルの一斉掃射を放った。



「当たれ!!」

だが、それよりもはるかに多い数のビーム攻撃で反撃され、連射が追いつかなくなり、ひたすら火線をかわし続ける羽目になった。

「やはり普通のビーム兵器じゃない、これは一体何を使った攻撃なんだ!?!」

火線の発射源と思われる、光の集まった箇所が、徐々にこちらに近づいてくる。

どうやらガーゴイルよりも、Aガンダムが目標のようで、機体を右に振れば相手も同じ方へ、左へ振っても同じように移動して来る。

それを感じ取ったロサは、ガーゴイルとは距離をとるため、相手より更にコロニーから離れ、ガーゴイルとガンダムの間に相手が入る位置まで移動した。案の定、相手はガーゴイルを無視してガンダムの方に向かってきた。

「ガーゴイルは無事なんだろうな……!?!」

レーダーをもう一度確認すると、どうやらガーゴイル周辺の戦闘は終わったらしく、キラ・ドーガらしき機影が撤退していくのが見える。

「よし、後はこいつだけだな」

言った刹那、また無数のビームの火線が、Aガンダムを襲う。

ロサの操縦で、何とかかわし切ったものの、撤退している最中のキラ・ドーガが流れ弾を浴び、そちらが全て撃墜されてしまった。

「……………なに!？」

この光景には、流石のロサも目を剥いた。敵を落とす為なら、味方の犠牲もいとわないというのだろうか。

「こいつ……………人の命を何だと思っただけやがる!？」

まだ敵の姿がはっきりと見えないが、その薄気味悪さよりも、怒りの方が上回ったロサは、再三の連続砲撃をかわし続け、遂に敵機を肉眼で把握出来る位置まで辿り着いた。

「……………これは!？」

明らかに戦艦には搭載出来ないと分かるような、巨大なモビルアーマー。悠にAガンダムを越える全高がある。

大きすぎるせいか、脚が無い。以前の戦争で使われた、「アジール」を少し縮めたような形状。闇に溶け込むような、艶消しの黒い塗装。

恐らく、グリアラスのファンネルや、ステルス戦闘機「F-117 ナイトホーク」と同じように、電波の反射攪乱シートを貼っているのだろう、これだけ近づいても、レーダーでは輪郭がばやけ、映像ではジェガン等と同じような大きさになっている。

「なんて大きさだ……………」

無意識に呟いたロサが、驚愕の表情を浮かべた。その瞬間、異様なプレッシャーがロサを襲う。

「うつ……………何だ……………!？」

殺気とも雰囲気の違う、何とも言えない不快感に、ロサが思わず声をあげる。

『ガンダム…… コロス…… ワタシノ…… スベテ……』

抑揚の無い、古いロボットのような完全に無表情な声でそう言った後、相手がまた一斉掃射を開始する。

「こいつ、危険だ！！まともな精神状態じゃない……！！」

肌で感じたロサは、コロニーやガーゴイルから、更にガンダムを離れさせる。それに誘導されるように、モビルアーマーがついて来る。

『ロサ、大丈夫か！？』

無線のスピーカーから、レオンの声が聞こえた。数秒後、肉眼で見える距離まで、ジエガンが近づいて来る。

” まずい、止めないと……！！ ”

焦りを隠す余裕も無く、ロサが出せる限りの大声で怒鳴った。

「近づくな！こいつの目的は俺だ、来るんじゃない！！」

『何……！？どういう事だ！？』

やりとりを聞いていたのか、モビルアーマーが一瞬、レオンの方向を向こうとしたのを察知し、ロサがモビルアーマーに向けて連続砲撃を向けた。

更に外したフリをして、ライフルの一閃でレオンに向けて威嚇射撃を放った。慌ててレオンがジェガンの動きを止める。

『ロサ！？どうした！？』

今までロサが放った火線が、味方機を掠めた事など一度も無かったため、レオンが驚きを隠しきれず、目を見開いた。

「来るなど言ってる！！来るんじゃない！！」

ロサの絶叫に近い叫び声に、只事では無い雰囲気を感じたレオンは、自分を掠めた火線がロサからの威嚇だと気付き、ロサの居る空域から、少し距離をとった。

ロサがもう一度ファネルの一斉掃射を放ち、モビルアーマーの気を惹きつける。モビルアーマーがこれに応戦し、再びAガンダムに向けて凄まじい連射を向ける。

「……………!?!」

あまりの火線の激しさに、様子を見ていたレオンが絶句した。だが、爆発が起きないところを見ると、Aガンダムは無事のものである。

「一体、何が起きてる!?!あの凄まじいビームの連射は、何なんだ!?!」

ロサに続いてレオンも戻らないのを心配したグールが、様子を見に来た。

『レオンさん、大丈夫ですか!?!』

「ああ、俺は無事なんだが……………」

呆然とした様子で、レオンが応答した。その返答の気の無い様子に、グールが苛立ちを隠さずに怒鳴った。

『「俺は」って、どういう事ですか!?! ロサは!?!』

「ロサの奴、一体何と戦ってるんだ!?!」

『何です?』

グールは理解できず、レオンに聞き返す。

「ファンネルどころじゃない、まるで戦艦の主砲だ」

『戦艦? 何処です?』

グールが言った瞬間、またビームの嵐がAガンダムを襲う。

『……何だ!?! 何が起きてる!?!?』

グールも、まるで理解できない様子で、口を開けたまま固まった。

「ロサが威嚇射撃までして、俺を止めた。ロサの為にも、近づかない方がよい」

自分の想定外だったレオンの発言に、グールが目を見開いて、レオンを責めた。

『そんな！？ロサを見殺しにしろってんですか！？』

必死の形相でグールが叫んだが、レオンは落ち着いた声で、グールに言った。

「いま俺達が下手に近寄ったら、ロサが落とされる事になる。今は奴に集中させないと、ロサが死ぬ事になる。余計な事はするな」

『でも………！！』

思わず唇を噛むグールに、レオンは自分に言い聞かせる独り言のような口調で言った。

「ロサなら大丈夫だ」

『あれは一体何なんです！？』

「わからん。昔のジオンに、異常な程、でかいモビルアーマーが在



つたと聞いた事が有るが……その類の機体かも知れん。恐らく機体が黒いから、肉眼では見えんのだろう」

『ロサ……！！くそっ、どうすれば良いんだ！？』

グールが自分に出来る事が何か無いのか、必死に考え始める。レオンも同じように考えているが、そのままじっと見守るしかなかった。

「レオンさん、気付いてくれたようだな」

レオンが居る筈の方角をちらりと見た後、ロサはビームの嵐をかわしつつ、相手の弱点を探そうと、あちこちの角度から砲撃を試して、探りを入れていた。

意外に動きは速くない。だが、レオンたちやガーゴイルの方向には、絶対に向けさせられない。

幸い燃料には、まだ余裕がある。相手の角度が変わるように誘導しつつ、有効な攻撃手段を探る。

「こいつ、コックピットはどこだ！？入口のハッチは、どんなモビルスーツであっても急所の筈。こいつから人の意思が感じられる以上、遠隔操作じゃない筈……！！！」

ロサが焦りを隠しきれない表情で呟いた後、またモビルアーマーからの一斉掃射が始まった。

それをかわそうと、ビームの軌跡を読もうとロサが集中した瞬間、頭部に人の影が見えた。

「何だ？……女の子！？」

見えた人影の顔は、ロサと同じ位、つまりフローラと同じ歳くらいの、女の子の顔だった。

表情は霞が掛かったようにぼやけていて、はっきりとは見えないが、髪や輪郭などの雰囲気は、先程出会ったばかりのリリアという少女に、よく似ている。だが、相手の攻撃をかわすのに必死で、この時のロサが気付ける筈もなかった。

それでも、本能的にリリアの気配を感じたのだろうか、自然と説得の言葉が口を突いて出て来た。

「何でそんなものを動かしてる！？自分の意思で動かしてるんじゃないなら、今すぐそいつから降りろ！そいつは、君みたいな子が動かして良い物じゃない！！」

『……………！？』

またAガンダム目掛けて、ビームの嵐が飛んで来る。だが、つい先程までとは、何かが違う事にロサが気付いた。

よく見ると、砲口の角度が微妙に違う。先程までは、確実にAガンダムを狙っていたので、砲撃の瞬間の光が強くはつきりと見えていたのに、今は時折、砲口のノズルカバーが光源を隠し、明るさが変化している。

”狙いが定まってない、乱射してるだけに見える。一体、何が起きたんだ？”

この様子を見て、ロサが無線を開いた。

「俺は、君みたいな女の子を死なせたくない！頼むから、もうやめてくれ！！」

フローラのイメージが被り、どうしてもこの場で撃てないと感じた

ロサが、相手を説得にかかる。

その後も数秒間にわたり相手は乱射を続けたが、遂にエネルギーが切れたらしく、大人しくなってしまうた。

『ガンダム…… コロス…… ワタシノ…… ヤクメ……』

先程よりも、無理に思い込もうと自分に言い聞かせるような、押し殺した声に変わった。明らかに、相手の様子に変化が起きている。

「違う！！君は、人を殺して良い人間なんかじゃない！！」

『……うっうっ……うるさい、頭が……！！』

無線のスピーカー越しに、うめくように苦しげな声が、ロサの耳元に響いた。だが、最初の無機質な声とは全く違う。その声は、完全に「人間の声」だった。

「君は、人を殺したく無い人の筈だ！俺は君に殺されたくない！もうやめてくれ！！」

『ひと……ころした……く……ない……ああ……！！』

言葉になりきららない、苦しみを帯びた叫び声をあげて、モビルアーマーはAガンダムに向かって突っ込んでくる。

あまりの大きさに、受け止める事を諦めたロサは、かわすしかなかった。そのままモビルアーマーは、闇の中へ消えていこうとする。

「もうその機体から降りろ！君は戦争に関わっちゃいけない！君の手で人殺しなんかしないでくれ！頼むから！！」

自分でも何故だかわからないが、説得するための言葉が、次々に出て来て止まらない。必死に声を掛け続けるロサを振り払おうと、モビルアーマーが何度も腕を振り回した。巨大な両腕を至近距離で振り回され、堪らずAガンダムが距離を取る。

その際に、そのままモビルアーマーは、宇宙の闇に消えていった。

「今のは……きつと、殺しちゃいけない……」

途方に暮れたような表情で闇を見つめながら、ロサが呟いた。

「……終わったのか？」

ロサが居る筈の空域が、静かになったのを感じ取ったレオンが呟いた。

その後数秒経ってから、Aガンダムが、レオンのもとへ戻ってきた。

『レオンさん、さっきはごめん。被弾して無いよね？』

ロサが心配して、申し訳なさそうな声でレオンに謝った。

「いや、お前がああでもしなければ、俺もお前の援護をしようと思つた筈だからな。仕方が無い」

「ロサ、一体何だったんだ、あの砲撃は？誰がどう見ても、普通じゃない。なのに何故、助けを拒んだんだ？」

状況をまだ理解しきれていないグールが、苛立ちと怒気を含んだ声で、口を挟んだ。

『…………』

ロサは、彼らに話すべきかどうか、まだ迷っていた。

話してしまえば、あのモビルアーマーを、撃墜する方法を考える事になってしまふ。そうなれば、あのパイロットを救えない。

だが倒さなければ、ガーゴイルを沈められて、フローラが死んでしまふかもしれない。

『厄介な事になったな…………』

深い溜め息をついて呟いた後、ロサは両手で顔を覆った。その様子に、レオンが首を傾げながら、ロサに尋ねた。

「厄介って、まさかあれがソフィアだとも？」

『いや、姉さんは間違いなくワルザに乗っていた。違うよ』

ロサの返答に、レオンとグールが、顔を見合わせた。

ロサは、今まで他人に相談事を持ちかけるといふ行動をした事が無い。

幼い頃から、理由の無い劣等感に悩んでいたロサは、常に人の顔色を伺いながら生きてきた。だから、知っている人間の場合、相手の言いたい事を、およそ読めてしまうのである。だから、今まで相談しても無駄だという先入観が先に働き、結局自分で考えたとおりに動くしか無くなってしまふのである。

恐らく、レオン達にあのモビルアーマーの事を話せば、倒さなければガーゴイルが沈むと彼らは言うだろう。

だがロサには、あのパイロットが、自分の意思で戦争に参加している訳では無い、何故だかそんな気がしたのである。

まして、自分やフローラと同じくらいの歳の女の子を、自分の手で撃墜するというのは、まるでフローラを自分の手で殺すような錯覚に陥るのではないかと、ロサは不安に感じていた。

あのパイロットが死んだら、必ず自分が自責の念に駆られる事を、この時点でロサは既に予感していたのである。

だが、目撃者が何人も居れば、話さざるを得ない。黙って放っておく訳にもいかない。



『とりあえず……ガーゴイルに戻るっ』

ロサはそれだけ言い、レオンたちを促して、ガーゴイルに帰還した。

「あれは、一体何だったんだ？俺達に分かるように、説明してくれ」

レオンも、ロサが口をつぐんだ理由を理解出来ず、モビルスーツでツキでロサに尋ねた。

「あれは多分、昔のジオンの戦争の時に造られた、モビルアーマーだ。以前に聞いた事がある。普通のモビルスーツより、はるかに大きかった」

観念したように、ロサが呟き、そのまま話を続ける。

「あの機体のパイロットは、俺やフローラと同じ歳位の女の子だ」

「間違いないのか？」

「ああ。頭の部分に顔が見えた。間違いない筈だ。ただ、自分の意思で戦争をしているんじゃない。催眠術か何か、操られているように思える」

生気の無い表情で、俯いたままロサが言った。それを聞いたレオンが、困惑した表情を浮かべて、ロサの顔を見た。

「しかし、例えそうであったとしても、あれを落とさなければ、ガーゴイルが沈む事になる。ガーゴイルを守る方が、遥かに救える人数は多いんだぞ？」

「わかってる。だが、あれを落とせば、自分の手でフローラを殺したような錯覚を起こしそうで、怖い。そうなったら、俺は人格崩壊を起こすかもしれない」

ロサが青い顔のまま、唇を噛んだ。その表情に、レオンとグールが顔を見合わせた。困惑した表情で俯いたまま、ロサがまた話し出す。

「どうすれば良いのか、正直、俺にも分からない。でも、あの子は俺の声に反応して、自分を取り戻そうとしていたような感じがした。もしかしたら説得できるかもしれない」

「おまえ、フローラと見ず知らずの敵の女と、どっちが大事なんだ！？」

グールが突然怒鳴った後、ロサの胸倉を掴んだ。レオンもロサも驚いて、グールを止める事が出来なかった。

「お前は、何を指して戦っているんだ！？お前の手でこの戦争を終わらせて、自分の手でフローラを幸せにしたいと思ってるんじゃないのかよ！？」

「……俺だつて出来るもんなら、そうしたいさ」

目を閉じて一呼吸おいた後、再び目を開けたロサがそう言って、グールを真っ直ぐに睨んだ。

「だが、あの子を自分の手で殺して、俺の人格が変わってしまったら、どのみちフローラを守れなくなる。説得して戦争をやめさせるのが、一番理想的だ」

「しかし……！！」

「ガーゴイルには、今までどおり手出しはさせない。だから、暫くあれが出て来たら、手出しはしないで欲しい」

「もしガーゴイルに危害が及んだら、撃墜するぞ。いいな？」

レオンが口を挟み、真っ直ぐにロサを見た。

「……その時は、仕方が無い」

ロサも力なく頷いた。その表情に、グールが手を離す。床に足が着いたロサが、再び口を開いた。

「ただ、あの機体には、ファンネルやビームライフルが通用しない」

レオンとグールが、驚愕の表情を浮かべ、絶句した。

「俺も必死になって急所を探したが、正直、見当はついていない。だが、コックピットのハッチは、どんな機体でも急所の筈だ、恐らく頭のどこかに、弱点がある。或いは、奴が連射する切れ目を狙って、ビーム砲の発射口を狙撃して誘爆させるか」

「……」

言葉が出ない2人の表情に、ロサが続けて言おうとした言葉を飲み込んだ。

”本当は、そういう場合は自爆を覚悟でモビルスーツごと特攻するのが一番確実なんだが……言わないほうが良さそうだな。言ってしまったら、恐らくどちらかが実行してしまうだろう……”

「とりあえず、あのモビルアーマーの件は、俺に任せて欲しい。どうしてもガーゴイルに危険が及ぶようなら、撃墜も止むを得ない」

「艦長に、この事を知らせてもいいか？」

レオンが念押しする。

「ああ」

ロサは短く返事をした後、レイラの部屋へ向かった。

ドアホンの画面に映った、ロサの顔を見たレイラが、一瞬、顔をこわばらせた。どんな表情を見せれば良いのか分からず、俯いたレ

イラが、画面を見ずにベッドに腰掛けたまま、ロサに声を掛けた。

「開いてるわよ。入って」

普段の声とはかけ離れた、まるで生気の無い声を出したレイラを見て、ロサが諭すような口調で話し出した。

「前にも言っただろ？何を言っても無駄だって。姉さんを説得するのは、もう無理だよ」

諦めたように力の無い声を出し、悲しげに俯くロサを正視できず、レイラも顔を上げられないまま答えた。

「私は、あなたたち姉弟が、いがみ合っているのを見たく無いだけ。私自身が、自分の判断で動いただけよ」

「戦場で私情を持ち込んだら、周りが見えなくなつて死ぬ事になる。レイラ姉ちゃんは、まだ死んじやいけない。私情を持ち込んだら駄目だ」

ロサが言い終えた瞬間、レイラが弾かれたように立ち上がり、ロサを睨み付けた。

「私だって、あなたたちに生きていて欲しい、そう思っちゃいけない!?!」

珍しく、レイラが感情をむき出しにして、ロサに怒鳴った。そんなレイラを、ロサが悲しげな目で見つめる。

「そう思ってくれる人が傍に居てくれる事は、俺もすごく嬉しい。でも、想いだけでは、どうにもならない事は、必ず存在する」

ロサの目の光が、涙で揺れ始めた。それに気付いたレイラが、反論の言葉を失い、黙り込んだ。搾り出すような声で、ロサが言葉を続ける。

「前に言っただろ？俺の手で姉さんを倒すと。レイラ姉ちゃんは、もうワルザに近づかない方が良く。今のままじゃ、いずれ死ぬ事になる」

泣き笑いのロサの表情に、レイラが堪らず目を閉じ、唇を噛んだ。握り締められた拳が震えているのが、ロサにもはっきりと分かった。

「俺も、レイラ姉ちゃんが居ないと困るんだよ。これ以上、家族みたいな人が死んで欲しくない。だから、意見じゃない、お願いだ。ワルザは……ソフィア姉さんの事は、俺に任せてくれ。いいね？」

それだけ言って、すぐにロサはレイラに背を向け、部屋を出た。

「私は、どうしたら良い……?」

答えを出せないレイラが、ベッドに座り込み、両手で顔を覆った。

ロサが、レイラを「姉ちゃん」、ソフィアを「姉さん」と無意識に分けているのも、実際に一緒に居た時間の長さを象徴していた。

今のロサにとっては、どちらを姉として慕っているかと問われれば、間違いなくレイラを選ぶ。ロサにとって、レイラはそういう存在なのである。

”分かってくれるよね、レイラ姉ちゃん……”

ロサのその想いもまた、レイラには完全に届かないまま、空回りし始めていた。



## 26・揺れる信念（前書き）

帰投したプロザムのパイロットを心配し、様子を見に来たソフィア。

幼さを残す少女の苦悶の表情に、自らの信念が揺れ動く。

## 26・揺れる信念

旧「ソーラ・レイ」の残骸は、円筒内部の増幅機構の修復を終え、コロニーレーザー「アストル」として復元された後、月の都市・アンマンに発射口を向けるため、移送艦を使った躯体の転回作業が開始されていた。

アンマンは、アナハイム・エレクトロニクスのモバイルスーツ開発および生産能力を落とさず、かつ「人質」として効果の高い大規模都市という、ロード革命戦線側にとっては理想的な条件が揃った標的である。

少し前から合流していたモバイルアーマー「プロザム」、そしてワルザの所属艦「アクエリアス」も、この「アストル」を、現在の拠点としている。

現在のアストルの駐機スペースはかなり縮小されているため、モバイルスーツを単独で並べる事は出来ない。

当然、戦艦の中にモバイルスーツを収める事になるが、プロザムを戦艦に納める事は出来ない。そのため、レーザー増幅部、つまりエアハッチ外の無酸素部に係留場所が設置されている。

無傷で帰還した筈のプロザムから降りて来ないパイロットを心配し

て、先に戻っていたソフィアが、様子を見に来た。

「大丈夫なの？無事なら返事をしなさい」

ブロザムの外部装甲と、パイロットスーツのヘルメットを接触させ、心配そうな声で内部へソフィアが呼び掛ける。だが、中からの返事は無い。

「開けるわよ？」

外部からの操作でエアハッチを開け、ブロザムのコックピットへと向かう。

自動操縦でアストルに帰投したブロザムのパイロットは、疲労で完全に気を失い、パイロットシートに座ったまま、首をうなだれていた。

「大丈夫！？しっかりしなさい！！」

慌てて駆け寄り、腰に付いている酸素ボンベの呼吸表示を確認する。表示は青ランプ、呼吸中を示していた。

安堵の溜め息をつき、ソフィアがパイロットを抱え、医務室へ運びこんだ。汗だくのヘルメットとパイロットスーツを脱がせ、濡れたタオルで体の汗を拭いた後、入院着のようなリネンの浴衣に着替えさせる。

アストルの軍施設は、宇宙空間と接するコロニーの外壁の部分に、戦艦やモビルスーツ部隊の拠点としての必要最低限の設備を設けているだけで、医療施設は文字通り病院と言える程ではなく、「医務室」程度の規模でしかない。

診療所と言えなくも無いが、軍艦に乗り慣れているパイロット達には、呼び慣れた医務室という呼ばれ方で通っていた。

「いつまでもこんな設備のまま、こんな戦闘を続けていたら、いずれは兵がもたなくなるよな」

軍医のゲイル・ロセッタが、プロザムのパイロットに点滴を打ちながら、溜め息をついて呟く。

「しかし、コロニーレーザーとしての機能はもう完成しているのですから、後はアンマンの制圧作戦を敢行するだけです。もう少しの辛抱ですよ」

ゲイルを宥めるように、苦笑しながらソフィアが言う。

「しかし実際に、この子の様に体がもたなくなりつつあるパイロットも居る。そろそろ引っ越さないと、戦闘の前にみんな体調を崩して、部隊が潰れちまう」

ゲイルと同時に、ソフィアは、まだ青い顔で横たわるパイロットの顔を見た。弟と同年代の、雰囲気も似ている、童顔の丸顔の少女。先程、着替えさせる際に汗を拭いたのに、また脂汗をかき始めている。

”この子も志願兵なのだろうか。まだこんなにあどけないのに、戦場に出向くなんて……”

気付かない内に、表情に出てしまっていたのだろう。複雑な気持ちになるソフィアに、ゲイルが声をかける。

「気になるかね？彼女の事が」

その声に我に返ったソフィアが、慌てて首を横に振った。

「いえ、そんな事は……」

「弟さんと同じ位の歳なのだろう？ 気になるのも無理も無い。彼女は戦災孤児だ。故障して戦闘空域に紛れ込んだシャトルから救助された、唯一の生存者だったそうだ」

「故障したシャトルの生存者……」

ソフィアは、父・ハートレイの撃墜された状況を思い浮かべていた。

” そんな者まで戦争に参加していたなんて……。ということは、父さんが救出しようとした者の中にも、やはり彼女のように軍に入った人間が居たのだろうか…… ”

ソフィアの中で、自宅をギラ・ドーガに倒壊させられてガンダムに乗ったというロサの事が、目の前の少女に重なっていた。

「彼女も…… 志願兵では無いという事ですか？」

戸惑いを含んだ声で、ソフィアが尋ねた。「彼女も」という言い回しになったのは、やはりロサにイメージが被っていたのが、無意識に言葉に出てしまったからだろう。

それを聞いたゲイルは、静かに話し始めた。

「彼女を救ったのは、当時のネオ・ジオン。「赤い彗星」が率いていた頃だ。彼女がジオン共和国の孤児院で育った間も、連邦軍が権力や武力でスペースノイドを抑え込もうとしたが為に、幾度と無く戦争が起こった」

ソフィアは、言葉が見つからず、パイロットの細い腕に繋がれた点滴の滴が落ちるのを見ながら、無言で話を聞いている。

「そんな状況を見ながら育った彼女は、常に戦争の引き金になっている連邦軍に、反旗を翻すのが正しい生き方だと考え、革命軍入りを志願した。強化人間の実験プログラムにも、自ら手を挙げたそう。成り行きではあるが、プロザムのパイロットになったのは、彼女の意思だ」

ソフィアはそれを聞き、ほんの少しではあったが、気が楽になった。

もし少女が志願兵でなく、強制的に戦場へ駆り出されたのだとしたら、ソフィアは衝動的に彼女の手を引いて、革命軍を去っていたかも知れなかった。

劣悪になりつつある住環境に晒され、責任感の強いソフィアも、目の前の少女1人すら苦しみから解放してやれないもどかしさに、精神的に追い詰められていたのである。

「本当に、我々の手によって、民衆が救われる日は、来るのでしょうか……？」

ついにソフィアが疑問を口にした。

自分達大人が不甲斐ないばかりに、こんな少女まで戦場に赴かせ、いつ命を落とすかも分からないような状況に立たせている。

だが、革命軍の存在意義を完全に否定してしまったら、自分が今まで正しいと信じ続けてきた戦いが、全て無駄になる。

その狭間で、ソフィアの心も揺れ動いていた。だが、それを察したゲイルが、ソフィアに疑問を投げ掛けた。

「自分のしている事を信じられなきゃ、誰がお前さんを信じてくれるんだね？」

ソフィアの複雑な表情を見かねたのだろう。誰かが軍を去れと言えば、そのとおりに動きかねない表情のソフィアに、背中を押すような口調で、ゲイルが言った。

「お前さんが民衆を救えると信じていなければ、誰が民衆を救える



んだね？俺も、今この状況には、正直疑問を感じている。だが、だからと言って、今この場で信念を曲げるか、貫き通すかは、別の問題ではないのかね？」

ゲイルが少し下がってきたためがねを持ち上げ、さらに続ける。

「兵というのは、力の無い民衆の手では出来ない事を、自分の力でやってのけるといふ信念と責任感が必要なものだ。今の状況だけを見て信念が揺らぐなら、今後を考えた方が良くも知れんぞ」

強い口調で、ゲイルが言った。引っ張られるように、伏し目がちなソフィアが頷く。

「……そうですね」

「まあ、この作戦さえ上手くいけば、我々もここから解放される。上手くやってくれ」

「……はい」

結局、疑問を振り切る事が出来ないまま、ソフィアは短く返事をした。

苦悶の表情を浮かべ、またリネンの着衣に汗が染み込み始めた少女の手をそっと握り、不憫に感じたソフィアが言う。

「もう、これから暫くは、刷り込みなどの負担がかかるプログラムは、避けた方が良いのではありませんか？」

「確かに。スウィート・ウォーターならともかく、ここの設備では、今回みたいになった時、回復させるのに限度がある。むしろ余計な事をせずに、成長させた方が良いのかも知れん」

無然とした表情で、ゲイルが頷いた。

「そういえば、総帥がベリック部隊の視察に来られるという件、まだ延期されたままのようですが、何か聞いていますか？」

ソフィアが顔を上げ、ゲイルを見た。

「いや、特に何も聞いていない。もうすぐ退避命令が出るな。お前さん自身がすべき準備は、もう出来ているのかね？」

ゲイルの返答に溜め息をついた後、ソフィアが質問に答え始める。

「モビルスーツ隊に関しては、各自で出てしまえばそれで済みますが、他の作業員は戦艦に収容する必要があります。しかし、近隣の艦隊で足りるかどうか……」

ソフィアがそこまで言ったところで、ゲイルが遮った。

「足りなければ要請はするさ。お前さんは心配しなくても良いよ」

「……はい」

まだ疑問が解決していないソフィアの表情に、ゲイルが話を逸らした。

「点滴が終われば目が覚めるだろう。精密検査はその後だな。特に看護の人手が要る訳でも無いが、傍に居てやるかね？」

「……はい」

頷いたソフィアは、自分を姉のように慕う少女に、幼い頃のロサの面影を重ねていた。

「わかった。じゃあ、検査の準備をしてくる。何かあったら呼んでくれ」

そう言って、ゲイルは隣の検査室へ入っていった。

”自分を信じられなくて、誰が自分を信じてくれる……か。確かにその通りね”

ソフィアは、無言で小さく頷いた。

## 27・フラストレーション（前書き）

ロード軍の拠点と思われる、不審なコロニーの手掛かりを掴むため、メッシが各パイロットに指示を飛ばす。

だが、それぞれの抱えるフラストレーションが、ガーゴイルの歯車を狂わせ始めた。

## 27・フラストレーション

ガーゴイルは、戦闘が発生した為にブリュタールから強制退去となり、またその際に予想外の弾薬消費を余儀なくされた為に補給が必要になり、地球から見て月の裏側に在る主要都市の一つ・グラナダへと向かっていた。

「全く、迷惑な奴らだよな」

複雑になっていく事情を知らないクルー達が、あちこちでぼやいている。

「例のコロニーの調査には、レオンとグールに行つて貰う事にした。他のパイロットは待機。レオンが戻るまでは、レオン隊のうち、マーガスはケニー隊に、ルークはレイラ隊に編成する。コロニーの詳細を確認後、グラナダに向かう。現時点での決定事項は以上だ」

会議室で、メツシが各パイロットへの連絡を伝える。

この後、レオンとグールがジェガンで出撃し、件のコロニーの潜入調査へ向かった。その目的地は、ガーゴイルがグラナダに向かう軌道からは、やや外れた位置にある。

「俺はどうするの?」

話の中で、全く名前の出なかったロサが、きよとんとした顔で自分を指差しながら、メッシに尋ねた。

「今のパイロットの技量なら、前線の防御はお前1人でも問題なからう」

苦笑すらせず真顔で返すメッシの思わぬ言葉に、ロサが目を丸くした後、肩をすくめる。

「……………正気かよ?」

「ギラ・ドーガ程度なら、お前が突破されても、他のパイロットでどうにかなる。お前がリーダー機を潰しさえしてくれば、問題は無い」

平然とした顔で言うメッシに、ロサが”また、無茶言ってくれよ”という表情を見せる。

「あんまり買いかぶっていると、痛い目を見るかもよ?ワルザみたいなのがゾロゾロ出て来たりしたら、いくら俺でも、どうにもならないし」

メッシの言葉に茶化すように答えたロサだが、メッシはまた真顔で返してきた。

「そつなったら諦めるしかなかるう」

「……まあ、確かにそうだけど」

返す言葉も無くなり、ロサがつまらなそうに口をつぐんだ。

「あと、例のモビルアーマーの件だが……」

メッシの意思確認に、瞬時にロサの表情が厳しくなる。

「あれはビームライフルやファンネルは通用しない。ぶち抜くとしたら、戦艦の主砲でもなければ無理だ。それもハイメガ粒子砲クラスのものでなければ、恐らく歯が立たないだろう」

レオンから話を聞き、ある程度はロサの言いそうな事を予想していたメッシは、さして驚きもせず、即座に返事をした。



「ジエガンで相手をするのは、無理という事か？」

「ああ。ガーゴイルと ガンダムに挟まれた位置に居る時も、奴はガーゴイルを無視していた。この前の動きを見る限り、奴は恐らくガーゴイルを落とす事より、ガンダムを目標として刷り込まれている筈だ。だから、俺が何とかする」

「でも、何とかすると言っても、方法は……」

心配げな表情で口を挟むレイラをちらりと見た後、ロサは、真剣な表情で、まっすぐにメツシを見た。

「下手にジエガンが近づいたら、奴の神経を逆撫ですることになるから、上手くいくものも上手くいなくなる。だから、誰も手出しをしないで欲しい。もしガーゴイルに危険が及ぶようなら、俺が奴をひきつけるから、俺もろとも主砲で奴をぶち抜いてくれても構わない」

「……………本気で言ってるのか？」

グールとエリオットが、正気を疑うような表情で、目を丸くして口を挟んだ。ロサは表情を崩さずに、黙って頷いた。

「まだ奴の弱点が掴めない以上、止むを得ないさ。お前らでも、もうグリアラスの相手くらい出来るだろ？俺が死んだら、後は頼むよ」  
冗談とも本気とも取れない言い回しで、真顔でロサが答える。

「各人、出来るだけの努力はしてくれ。最大の重点事項は、全員が生きて戻る事だ。以上」

メッシの言葉を最後に解散後、ロサは自販機でココアを買って自室に戻り、頭の中を落ち着けようとしていた。

いつものソファで飲まなかったのは、他のメンバーが、気まずい雰囲気になってくつろげないだろうと、ロサなりに気を遣ったの事である。

” さっきの話が、冗談で済んでくれれば良いんだがな…… ”

熱めのココアをそっと啜り、すぐにカップをデスクに置いた後、ロサが厳しい表情で腕を組んだ。

フローラを守り切る為なら、自分には何があるかと構わない。フローラが生き延びられるなら、自分が盾になって死ぬ覚悟も、今のロサには既に出来ている。

だが、あのモビルアーマーを倒したからといって、ガーゴイルを守り切れるという保証も、まして連邦軍が戦争に勝てるという保証も、何処にも無いのである。

第一、ロサが本来倒すべき相手はロードであって、あのモビルアーマーのパイロットではないのだ。

” どうすれば、あの子は説得に応じてくれるだろう？ ”

答えの出ない自問自答が暫く続き、それに疲れたロサが、目を閉じて深い溜め息をついた。どうしても、いつものように弱点を探すよりも先に、説得する方法を考えてしまふ。だが、それで答えが出る筈も無く、肘をデスクに突いて両手を組み、祈るように額を乗せた。

フローラに近い年齢の女の子を、自分の手で死なせたくないという気持ちだが、ロサの中に、きつと説得に応じてくれるだろうという、根拠の無い願望を生み出していた。

” 普段から敬意を持ってたら、こんな時に、親父やお袋が導いてくれたのかね？ ”

ふと、そんな言葉が頭をよぎり、すぐに苦笑して頭を軽く振る。

”……つたく、何を弱気になってるんだ？全く、馬鹿馬鹿しい。大  
体、神に救って貰えるような生き方してねえだろ、お前は”

自分に向かって小声で罵った後、ロサは再び掌で目頭を押さえるよ  
うに頭を支え、答えの出ない考え事を始めた。

20分後、万一の戦闘に備え、他のパイロットも全員が、モビルス  
ーツで待機となった。各員が思い思いに、自分の機体へと向かう。

「どう思う？例のコロニーのこと」

エアハッチを出たエリオットが、たまたま隣に居合わせたロサに声  
をかけた。

彼は、ワルザのパイロットがロサの姉である事を、まだ知らない。

まして、ロサ自身までが、モビルアーマーのパイロットを殺す事で  
精神崩壊するのを恐れているという、複雑になりつつある事情など、  
知る由も無かった。

「救命信号を無視するくらいだから、まともなコロニーで無い事は確かだよな」

ロサは、エリオットに視線を向けず、Aガンダムに視線を向けたまま答えた。

”ちっ、無視かよ”

当然エリオットには、ロサがまともに話を聞いていないようにしか見えず、心の中で舌打ちする。

仮にエリオットではなくレオンやレイラが話しかけたとしても、この時のロサは、恐らく同じ反応をしたのだろうが、エリオットにはそう見える筈も無い。

ロサも平静を装ってはいたが、内心ではモビルアーマーのパイロットの説得の方法を考えるのに、必死になっていた。

当然、他人の話など、まともに話を聞くような余裕は無い。

さらに言えば、件のコロニーを突ついて、もしワルザやモビルアーマー

マーが出て来たら、確実にそのコロニーを破壊しなければならない。姉だけでなく、モビルアーマーの少女も、自分の手で殺さなければならぬのである。

その後、自分の心がどう変化するのか、その状況になってみなければ、ロサ自身にも分からない。

焦りが焦りを生む状況になり、自分がどうするべきなのか、ロサも次第に冷静に考えられなくなりつつあった。

『そのコロニーが奴らの拠点で、上手く潰せたとしたら、結構な戦果だな』

エリオットが、まるで既に拠点を潰したかのように、得意そうに言うのが無線越しに聞こえたのに対し、ロサが釘を刺した。

「取らぬ狸の皮算用とか言っぜ。得意になるのは、実際に潰してからにするんだな。サラマンダーを襲った数からして、少なくとも戦艦も2〜3隻は居る筈だ。油断してたら、主砲をぶち込まれるぞ」

ロサは冷静に答えているつもりだが、その声はさすがに苛立ちを隠しきれなくなっている。他のパイロットも、各自準備を済ませたよ

うで、全てのジェガンのハッチが閉まった。

『相変わらず慎重だな』

鼻で笑うような言い回しで皮肉るエリオットの言葉に、ロサは口から自然に出てくる言葉で返す。既に、いちいち返事を考えてなどいられない。

「戦場から生きて帰るには、ビビる位で丁度良いのさ」

『肝に銘じておくよ』

「途中までも、誰か応援を出した方が良いんじゃないのか？」

ロサが無線でメッシに声をかけた。何が危険なのか分からないが、この時点で、既にロサの勘が「何か危険な雰囲気」を察知し、警鐘を鳴らしていた。

今の状態で思い当たる危険と言えば、レオン達の事しか無い。

万一、例のモバイルアーマーに襲われたら、ジェガンではひとたまりも無い。それは、ロサ自身も、一度はジェガンに乗った状態で砲撃

を経験しているから、間違いない。

いくらレオンとゲールでも、同時にモビルアーマーとワルザに襲われたらどうしようも無いと、気がかりで仕方が無いのである。

『例のモビルアーマーが出て来たら、ひたすらかわして逃げろとは言っておいたが……』

ロサが、他人を心配してメッシに意見する事など、滅多に無い。さすがに、メッシも語尾の力が無くなっていく。

「あれは、Aガンダムだから全部かわせたんだ。ジエガンじゃひとたまりも無いぜ。俺もサラマンダーに居た時に狙撃されたが、ジエガンじゃ手も足も出なかつたんだぞ」

『しかし、ロサに出られると、また奇襲に遭った時に、どうしようも無くなる』

『じゃあ、俺が出ましようか』

メッシとロサの交信の間に、エリオットが割り込んだ。それをロサが軽くあしらう。



「やめとけ。あれは尋常じゃない。無駄死にするだけだ」

突き放すような言い方をするロサに、エリオットが食って掛かった。やはり目の上のくぶのロサが、鬱陶しく感じられて仕方が無いのである。

『ロサに出来て俺に出来ないってのか？』

「なら勝手にすれば良いさ。経験のある人間に行動を止められる時だけは、素直に言う事は聞いておくもんだ。死んでから後悔しても知らないぞ」

自分もレオンの制止を振り切って、地球に墜落するという大失態をやらかした経験が、ロサに棘のある言い方をさせた。

「ケニーはどう思う？」

メッシが、エリオットの小隊長であるケニーの答えを促す。

「本人が行きたいってんなら、良いんじゃないですか？たまには良い経験でしょう」

「無責任な言い方はやめてくれ!!」

突然、ロサが大声で割って入った。その声に3人が驚き、会話が途絶えた。

「あれは俺が何とかすると言った筈だ。ビームライフルもファンネルも弾かれるんじゃない、ジエガンで勝ち目なんか無えだろうが!!お前ら、自爆して止めるとでも言つつもりかよ!?!」

只でさえ答えの出ない押し問答が続いているのに、それを茶化され、ロサの苛立ちがピークに達し、八つ当たり気味にロサが怒鳴った。

冗談で言っているつもりだったエリオットが、思わず白け、溜め息をついた。

『何だと!?!』

予想外のメッシの怒鳴り声に、エリオットが飛び上がり、目を見開く。

「何だ!?!どうしたんです!?!艦長!?!」

エリオットが反射的にメッシに尋ねたが、暫くはザワザワと複数の話し声が聞こえるだけで、メッシは何も言わなかった。

『シルフィードが交戦中！？どここの空域だ！？』

『サイド3の外郭部、例のコロニーの近くの空域です！』

「ちっ、不用意に近づいたみたいだな」

通信士とメッシのやりとりを聞き、ロサが顔をしかめて舌打ちした。先日のサラマンドーへの応援時に、大群を相手に随分手こずった光景が、ロサの頭をよぎる。

『応援を出しますか！？』

通信士がメッシに判断を仰ぐ。だが、メッシは一瞬だけ考えた後、ロサに話を振った。

『ロサはぜひっと思っっ』

「……へっっ」

急にメツシから話を振られて、ロサは喉が詰まったような声を出した。それを聞いたエリオットが、心の中で舌打ちする。

” またロサかよ、みんなしてロサ、ロサって……”

エリオットがそんな事を考えている事を知る筈も無く、2人の会話が続く。

『シルフィードに、応援が必要だと思っつか？』

「無駄だろうな。多分沈む」

『……何だって？どういう事だ？』

意外な答えに、メツシが眉を潜めて聞き返す。その表情が無線越しでも分かる声に、ロサが真剣な声で返した。

「俺が訓練をする前のサラマンダーと同等の戦力では、ワルザどころかベーリックにすら勝てない。片腕のグリアラスでさえ手も足も出せなくて、俺の戦いを傍観していた程だ。もしシルフィードがあれと同じ程度なら、もうすぐ沈む」

ロサがそこまで言った直後、通信士が叫ぶのが聞こえた。

『シルフィードからの通信が途絶えました！おい、聞こえるか！？』

通信士が必死に呼びかけるが、反応は無くなったようだ。

「……………自分の戦力を、もうちょっと、ちゃんと把握しろよな……………！」

首を振ったロサが思わず目を閉じ、唇を噛んだ。

「レオンさん達が戻ったら、一旦うちも後退して、本部からの応援が来るまで待とう。一隻で近づくのは危険だ。そのコロニーが奴らの拠点なら、シルフィードが沈んだ様子から考えれば、迎撃に出てくる数は、サラマンダーの時より遥かに多い筈だ」

『今回に限って、やけに弱気じゃないか』

メッシが冷やかに言う。だが、珍しくロサがメッシの話を聞いていなかった。

「レオンさんとグールも、すぐにでも撤退させた方が良さだろっな」

ロサが、カタパルトデッキの先端を見つめながら呟く。

この会話に、索敵手が割り込んだ。

「レオン機とグール機が戻って来ました！敵モバイルスーツに追われている模様です！」

ロサが、大きく息を吐き、右手で額を覆った。

「仕方無いな……潰すしか無い」

ロサとメツシが、無線越しに頷きあった。

『間違いなさそうだな』

「敵機は？何機来てるんだ？」

『20機以上……何機居るんだ！？』

ミノフスキー粒子でレーダーが使えず、バーニアの噴射熱源を索敵手が数えていたが、確認しきれない数のギラ・ドーガが迫っているという事しか、把握出来ないようだった。

宇宙空間だから、潜水艦のように探信音<sup>ピンガー</sup>で数を正確に把握する機能は無いので、あまりに数が多いと、対応しきれないのである。

索敵手の声を聞いて、呆れたように口サがメッシに言う。

「昔あった武器……ハイパーメガランチャーだっけ？あれ、今度の補給で用意してくれないか？そんな数、相手にしてられねえよ」

メッシはそれには答えず、冷静かつ簡潔に判断を下した。

『援護が必要だな』

「まず俺が出る。出たらすぐに艦底方向に逃げるから、レオンさんとグールに主砲発射を伝えてくれ」

『ミノフスキー粒子が濃くなって、電波妨害がひどくなって来てる。無理かも知れん』

「なら、下からファンネルで狙撃する。その後3秒経ったら砲撃してくれ。正面に来てる筈だ」

『わかった』

メッシには、「3秒」の根拠や、何故ロサが「レオンたちが正面に居る筈だ」という事を確信したのか理解できなかったが、有視界のみで主砲を撃つてレオン達を巻き込む訳にもいかないのです、ここはロサの勘を頼る判断を下した。

「他のジェガンは、最初の砲撃の後に出れば安全だ。砲撃を、俺やレオンさん達に当てないでくれよな」

『砲撃手に言っておくよ』

「頼むぜ！Aガンダム、出ます！！」

Aガンダムがガーゴイルから飛び出し、ガーゴイルから見て前方左下に向かっていく。

ロサがレーダーを見るが、やはり予想通り、ミノフスキー粒子で攪乱されてしまい、機影は殆ど見えない。



「2人に向いてる殺気を捕らえて、それを狙うしか無いな」

ファンネルをひと固めに展開して、ふうつと息を吐き、気配を捉える事だけに意識を集中する。

追われている2機と、その至近距離でビームライフルで連射している、ベーリックが数機。

ベーリックの3機目が、ジェガンに向けて連射を始めた瞬間、2人が大きく分かれた。この瞬間のベーリックの殺気を、ロサが見逃さずに捉えた。

「そこだー!!」

ロサが叫び、Aガンダムのファンネルが一斉掃射を放つ。10本のビームが、まっすぐにベーリックへ向かった。

これに気付いたレオンとゲールが、さらに自分達の足元の方角へ沈み込むように逃げる。その3秒後、ガーゴイルの主砲であるハイメガ粒子砲が火を噴いた。

Aガンダムの放ったビームと主砲の火線が交錯し、レオン達を追っていたベリック数機と、後続のギラ・ドーガ十数機が、一斉に爆発した。

これを合図に、ガーゴイルからジェガンが次々に出撃し、艦底方向に逃げていたAガンダムが、やや遅れがちにそれに続く。

レオンとゲールは、ライフルのリロードの弾倉を補給のため、一旦ガーゴイルに着艦する。

『あれはコロニーレーザーだ！向きからして、月の都市のアンマンを狙うつもりらしい！』

レオンがすれ違いざまに、ロサに無線を開いた。

「発射するつもりなのか!？」

『まだ分からん！曳航中のようだから、すぐに発射する訳では無いと思うー!』

「わかった！お疲れ様!!」

2人を労って、ロサもバーニアを噴かして加速し、戦闘空域に向かった。だが、数回の狙撃を受けた後、すぐにロサは違和感に気付いた。

「ワルザは居ないようだな」

全高18mのモビルスーツの集団の連射と、それに収納されているファンネルの連射では、投影面積が全く違う。撃たれる側に見れば、明らかに雰囲気異なるのである。

「ジェガン相手に、ワルザは必要無しって事か……？」

ロサが周囲を見回しながら呟いた直後、正面にベリックが立ち塞がり、ビームサーベルを横一文字に薙いだ。

それを八艘飛びの形でかわし、Aガンダムもビームサーベルを抜く。

「ちいつ！考え事が過ぎたか！」

振りぬいたビームサーベルを、居合い切りの形でベリックが再び斬りつけ、それをAガンダムが受け止めると同時に、激しい火花が飛び散る。

2秒ほど鏢迫り合いが続いた後、ベリックの腋の下がガラ空きなのを見て、Aガンダムが右脚を蹴り込む。それをまともに貰ったベリックが、そのまま後方に吹き飛ばされた。

すかさずAガンダムがライフルで狙撃し、一撃でコックピットを撃ち抜く。

この爆発を隠れ蓑にして、ギラ・ドーガがガーゴイルを狙ってビームライフルを構えたが、気付いたロサが炎上するベリックの向こうを睨む。

「ガーゴイルに銃を向けるんじゃないぞ！」

炎の周囲を取り囲むようにファンネルが動き、その集中砲撃が、ロサから見えないギラ・ドーガの装甲を、跡形も無い程に穿つ。

やがて、ベリックの最後の1機になったリーダー機が、残りのギラ・ドーガを引き上げさせようと、撤退信号を打ち上げ、辺りを黄色い光が照らし出した。

この追撃に、先陣を切ってエリオットが突撃した。

「いま奴らを追えば、そのまま殲滅できる！これ以上、ロサに負けてられるかよ、俺の力を見せつけてやる！！」

これに気付いたロサが、エリオットを止めようと無線を開いた。

「よせ！偵察に行っただけで、これだけ出て来るんだ、攻撃の意思を察知されたら、大変な事になるぞ！！」

ロサは出せるだけの大声で怒鳴ったが、ミノフスキー粒子にかき消されたロサの声は、エリオットに届かない。

ハイメガ粒子砲を避けていたため、戦闘への参加も遅かったAガンダムも、離れた位置に居たエリオットのジェガンには追いつけず、そのまま置き去りにされてしまった。

「あのバカ……！もつと状況を読めつての……！！！」

忌々しげに舌打ちして呟いた後、ロサは例のモビルアーマーが出てこない事を祈りながら、エリオットのジェガンを追った。

28 惹かれ合いし者たち (前書き)

ガーゴイルとの全面对決の準備を急ぐ「アストル」の面々。

その一方で、目の前には居ない口サを待つ者が、名前を呼ぶ。

## 28・惹かれ合いし者たち

ガーゴイルが放ったハイメガ粒子砲の閃光は、コロニーレーザー「アストル」から、肉眼でもはっきりとそれと分かる距離を掠めていった。

「侵入者を追って行ったベリック隊が、撤退信号を出した！今回は追撃がしつこいらしい、迎撃準備を急げ！」

アストルに潜伏していた革命軍の兵士達が、にわかに殺気立ち始めた。

「総員、第1戦闘配備！モビルスーツ隊はコックピットで待機、あと10分で戻って来る、急げ！」

戦艦の内部で、パイロットが、次々に自分が搭乗するモビルスーツに向かって走ってゆくと、銃座では弾薬を補充する兵の姿が見られ、砲門ではミサイルやメガ粒子砲の残弾数が、大声で喚呼されている。

医務室の外の廊下でも、各自の配置箇所へ急ぐ兵士達が、はっきりなしに走る音が聞こえる。

医務室で、プロザムのパイロットの看病に当たっていたソフィアも、

パイロットである。当然、担当機体であるワルザに向かうべきなのだが、彼女はまだ、コックピットに向かう事を迷っていた。

「行かないのかね？」

検査室から顔を出した軍医のゲイルに声を掛けられ、まだ目を覚まさない少女の傍らで、ソフィアは体をこわばらせた。

「私の役目は、手薄な時の隙を突いた奇襲です。ガーゴイルにまともな戦力がある時は、私は動けない」

「しかし、ここを破壊しに来たとなれば、そうも言ってはいられないだろう」

「……」

明らかに迷いを見せるソフィアの背中を押すように、ゲイルが諭す。

「玄関の番犬程度は、必要だと思っがな？ソフィア少尉」

ゲイルが言った後、少女が静かに目を覚ました。



「……誰かが呼んでる。誰だろっ?」

少女は、虚ろな目で、寝言を言うように呟いた後、ソフィアがずっと自分の手を握っている事に気付き、その顔を見て、安堵の表情を見せて微笑んだ。その温かさを確認するように、ソフィアの手をそっと握り返す。

「……近くに來てる。行かなきゃ」

まだ体調が優れないためか、掠れた声で呟き、笑みを残したまま起き上がるうとする少女の肩に手を乗せ、ソフィアが押し止める。

ソフィアに止められた理由が分からなかったらしく、友達と遊んでいる最中に家に呼び戻された子供のような表情で不服を訴えながらも、再び少女の体がベッドに横たわった。

「まだ動くのは無理よ。大人しく休んでいなさい」

ソフィアが優しく諭すように言い、少女に向かって微笑んだ。

だが、突然何かを感じ取ったようにピクリと体を震わせ、虚空を見るような定まらない視線で、少女は呟いた。

「……ロサ？ロサが来てるの？」

少女が、表情に再び笑みを戻しつつ、この場でソフィアが最も聞きたくなかった名前を口にした。

「あなたに会いに来たのなら、ここまで来てくれるわ。だから、まだ休んでいなさい」

感情を押し殺し、少女に戸惑いを悟られないよう無理に笑みを作りながら、諭すようにソフィアが言った。

「ロサの事を知ってるの？」

不思議そうな表情を浮かべた少女が、ソフィアを見上げる。その顔は、まだ血の気が戻らず、青白い。

何かを求めるとような無邪気な眼差しに、事実を言えなくなったソフィアは、首を横に振った。劣るように、そっと少女の額を撫でてやり、優しく微笑む。

「ロサっていう子は、お友達なの？」

「うん……そうだよ。会ったばかりだけど、優しい子なの。どっちの味方かは分からなかったけど、ちゃんとお話ししてくれた」

そう言って、少女は満足そうに微笑んだ。

「そう……良かったわね。まだ体が動かないでしょうから、もう少し、ここで休んでいなさい。良いわね？」

小さい子をあやすようにそう言った後、ソフィアは立ち上がった。

「どこに行くの？」

急に不安げな声を出す少女。その潤んだ瞳が、傍に居て欲しいと訴える。

「ワルザの点検をしてくるわ。あなたが元気になるまで、私が頑張らないといけないからね。私が居ない間に、ちゃんと休んで、早く元気になりなさい」

そう言って微笑み、もう一度少女の額を優しく撫でた後、ソフィアは医務室を出た。

医務室に足音が聞こえない所まで歩くと、ソフィアはワルザに向かって走り出した。

少女がロサの名を呼んだ瞬間、メルサ達と一緒に、ガーゴイルの自室に居たフローラが、嫌な胸騒ぎを感じた。急に動悸が激しくなり、呼吸が乱れ出す。

「ロサ……大丈夫だよね？ちゃんと帰って来てくれるよね？」

虚ろな目をしたまま蒼ざめた顔で、ロサが出撃していった方角を見ながら呟いた後、デスクに寄りかかり、そのままデスクチェアに倒れるように座り込む。

その顔を見たアックスとメルサが慌てて駆け寄り、フローラの顔を心配そうに覗き込んだ。

「フローラ姉ちゃん、大丈夫！？」

驚いて大声を出したアックスの声を聞き、フローラは我に帰り、慌

ててアックスの顔を見た。

「……うん、私は大丈夫だよ」

子供達に心配させまいと、微笑んだつもりだったが、フローラの顔はひきつったまま、蒼ざめていた。その声も、すっかり掠れてしまっている。

「病気じゃないの？」

メルサでも解るほど、明らかにフローラの不安は、顔に出てしまっていた。

「ロサが戻って来たら、治るから、大丈夫。心配しないで。平気だから」

フローラはいつもどおりの声で話したつもりだったが、その不安を隠し切る事は、どうしても出来なかった。

だが、頑なに不安を隠そうとして、平気だと言い続けるフローラの様子に呑まれ、これ以上は声を掛けない方が良いと感じ、子供達は2人とも黙り込んでしまった。

” ロサお兄ちゃん、早く帰って来てよ。フローラお姉ちゃんは、ロサお兄ちゃんが帰って来ないと、病気が治らないみたいだよ。”

そんなメルサの、小さな優しい祈りも、戦場の最前線に向かおうとしている今のロサに、届く筈は無かった。

## 29・開かれた心 (前書き)

ロサがエリオットを追っている頃、月面都市・アンマンに避難勧告が出された。

パニックになるアンマンをよそに、コロニーレーザー「アストル」で、それぞれの思いが交錯する。

## 29・開かれた心

ガーゴイルが打電した情報を元に、月面都市・アンマンでは、全住民に避難勧告が出された。

だが、唐突に勧告が出たため、住民は何故狙われるのか見当がつかず、街全体が騒然としていた。

アンマンの他にも、幾つか在る月面都市は同士は、リニアと呼ばれる高速鉄道でつながっている。

だが、通常はビジネス客しか使わないため、本数も少なくゆったりと乗れる筈の列車が、この時ばかりは超満員となり、ドアが閉まらなくなって発車もままならず、駅はパニック状態に陥っていた。

コロニーでいう地下鉄モノレールと異なり、巨大なクレーターの中に形成された月面都市を覆う天蓋の外部は、密閉空間ではなく宇宙と続く真空なので、都市間には途中駅が設置できない。

このため、上海のリニアモーターカー（いわゆるマグレブの一種）を参考に、都市間を高速移動するための鉄道が敷かれている。

リニアと呼ばれる方は、地下鉄と区分するための呼称である。



コロニーの外周（つまり内部の居住ブロックに立った状態では足の下）を走る鉄道は、どこも同じ姿かたちなので、モノレールは地下鉄と呼ばれる。スペースノイド独特の呼び方である。

地球連邦軍の幹部の1人、ギルモア＝ラング事務次官も、会議終了直後にコロニーレーザー発射準備の報せを受け、そのパニック状態の駅の中に居た。

彼は、連邦軍に配備されるモビルスーツの受領のため、アナハイム・エレクトロニクスとの関係者と打ち合わせのため、フォン＝ブラウンとグラナダの中間点であるアンマンに滞在していた。

「冗談じゃない、こんな所でくたばってたまるかよ！ 戦場に出たくないから事務屋になっただけだ！」

改札制限が掛かり、人がごった返している中をギルモアがすり抜け、改札の係員に連邦軍の身分証を見せ、裏口を通すよう耳打ちする。

「しかし、列車そのものがパンク状態で、次の列車にも乗れるかどうか……」

「乗務員室に入れてくれれば、問題は無かるう。君の上司にも恩給

を出すように、口をきいてやるから」

” やれやれ、官僚ってこれだ・・・ ”

心の中で舌打ちした後、事務所へ連れて行こうと、カウンターを出た瞬間、駅員の背後で、人が倒れこむ音が聞こえた。

「・・・!!」

振り向いた時には、ギルモアは既にこめかみを撃ち抜かれ、息絶えていた。慌てて駅員が駆け寄った時には、鮮血が飛び散り、辺りの路面を染めていた。

「救急車を呼んでくれ!!」

駅員が叫ぶと同時に、ギルモアの血と屍を見たりニアの乗客が一斉に悲鳴を上げ、改札周辺は大混乱に陥り、もはや収集がつかない状態になってしまっていた。

町外れのビルの屋上で、ライフルのスコップ越しにその様子を眺めていた狙撃者は、満足そうに冷徹な笑みを浮かべ、その場を後にした。

エリオットが、レオンとグールを襲ったロード革命戦線の追撃を続行し、ロサはこれを止めようと必死に追っていた。

だが、電波の攪乱が激しく、無線もレーダーもまるで役に立たない。

ようやくロサのAガンダムが、エリオットの機影を有視界で捉えられる距離まで近づいた時には、ロード革命戦線のサイド3拠点と思われる件のコロニーが、既に目と鼻の先に迫っていた。

気が付くと、他の若手のジエガンも、殆どがエリオットにつられてついて来てしまっている。周囲の状況を完全に見落としていたロサが、思わず舌打ちした。

「何でついて来てんだよ！？みんなガーゴイルに戻れ！下手に突ついたら、生きて戻れなくなるぞ！！」

ようやく無線で、エリオットとやり取りが出来る距離にロサが追いついた。

だが既に、ロード軍のモビルスーツが、一斉に飛び出して迎撃体勢

に入っていた。

赤いベリック数機を先頭に、数十機どころでは無い数のモスグリ  
ーンのキラ・ドーガが、こちらに向かって来る。

以前の戦争の再現ドラマで見た、ジオンの「赤い彗星」を先頭にし  
たザクの大群を彷彿とさせる光景が目の前で展開され、流石のロサ  
も背筋が凍る。

”ジオンの・・・怨念・・・!?”

そんなロサの恐怖感に一般のパイロットが気付く筈も無く、中途半  
端に自信をつけてしまった若手達のジエガンが、それぞれに戦闘を  
始めてしまった。

リーダー機もまだ追いついていないため、まるで統率のとれていな  
い出鱈目な動きになっていく。

隠れていた戦艦も、応戦のために出て来たものの、程無くジエガン  
隊に取り囲まれ、次々に撃沈されていく。これが、エリオットに自  
信を持たせ、暴走を助長してしまう原因になった。

「レオンさんは、月に発射口が向いてると言っていた。だとすれば、

この向こう側に発射口がある筈だ！これなら、レーザーそのものの破壊まで済ませて、俺の方がロサよりも働ける事を証明してやる！」

増長して勢いが止まらなくなったエリオットが、コロニー側面を掠めるようにジェガンを移動させ、次々に敵機を撃墜しながら、まだ見えていない筒の端面に向かう。

ついに筒の壁が途切れ、ガーゴイルの居る側から見えなかった発射口に、ジェガンが近づいた。

だが、間をおかずにワルザが出撃し、エリオットに切れ目無くファシネルの連射を浴びせる。

「この程度で、この俺を殺れるかよ！！」

全てのビームを受け止め、そのままエリオットがビームライフルを連射しながら、頭上に隙が有ったワルザの虚を突いて、コロニーレーザーの入口への突入を試みる。

「よし！突破した！！」

勝ち誇ったように声を出し、ワルザを上から見下ろしたエリオット

に、コロニーレーザーの入口から、プロザムの拡散ビーム砲による夥しい数の火線が、エリオットのジェガンに襲いかかった。

「何だ!？」

驚いたエリオットが、慌ててジェガンを止めた。この隙を突いて、ワルザのファンネルのビームが背後からエリオットを襲う。

「しまった!!」

左手のライフルと右足に直撃を受け、膝の関節とライフルが爆散して真っ二つになる。左手首も巻き込まれて吹き飛ばされた。

「うわああっ!!」

叫んだ後、更にジェガンの頭部メインカメラも破壊された。一気にコックピットの視界が狭くなり、恐怖でホワイトアウト（記憶に残らない無意識の行動）を起こしたエリオットが、反射的にバーニアのペダルを踏み込んでしまい、再びジェガンが全速力でコロニーレーザーに突入した。

遠目からの目視で、バーニアから長い炎を噴き出して加速していくジェガンが、胴体しか無い事に気付かなかった他のジェガンも、エ

リオットが防御線を突破したと勘違いして、次々に入口に向かっていく。

「アストルを破壊させる訳にはいかない、意地でも守り通して見せる！！」

ソフィアがワルザのファンネルでリオットを狙うが、Aガンダムからの狙撃で、ビームは阻止されてしまった。

「ガンダムが追い付いた！？くっ・・・当たれ！！」

ソフィアはビームライフルを構えるが、今度は引き金を引く前にAガンダムのライフル狙撃でそれも吹き飛ばされ、銃身が粉々に爆散する。

ここでロサはワルザを倒すべきだったのだが、モビルアーマーに近づいたリオットの事で、ロサの意識は手一杯になり、ワルザを倒す事まで気が回らなかった。

拡散ビーム砲の連射を開始したモビルアーマーに、リオットのジエガンが突撃していく。

「戻れ、リオット！！そんな機体では、そいつには勝てない！！」

ロサが絶叫しながらエリオットを追うが、エリオットはそれすら聞けない程の精神状態に陥っていて、ジエガンの突撃は止まらない。

幾度と無くエリオットを直撃しそうになるビームを、ロサがライフとファンネルで必死に阻止し、庇い続ける。

「意識を失ってるのか！？くそっ、どうすれば・・・！？」

反射的にロサは辺りを見回し、エリオットの後方に続こうとしていたジエガン隊が、モビルアーマーのビームの嵐に押されて、動きが鈍くなっている事に気付いた。

”明らかに他の機体は士気が落ちている、これ以上攻めるのは無理だ”

ロサは引き上げた方が得策と判断し、危険を承知でエリオットのほぼ正面に向けて、信号弾を打ち出した。

その閃光が、全ての機体を照らし出す。その光を見て、思わず怯むように目を閉じた拍子に、我に返ったエリオットが思わず叫ぶ。



「バカな！撤収だと！？ここまで攻め込んでおいてか！？」

ワルザに撃たれてから、ここまでの記憶が全て飛んでしまっているエリオットが、盛大な音を立てて舌打ちした。だが、説得するように光を残し続ける信号弾の様子を見て、エリオットが突入を諦めた。

「止むを得ん、撤収だ・・・何だ？モニターが死んでる？一体、何が・・・？」

このタイミングで、漸く異常に気付いたエリオットが、呆けたような声を出した直後、プロザムからの連射が一瞬止まり、その際に他のジェガンがエリオット機を抱え、戦闘空域を離脱しに掛かる。

だが、この様子を見ていたソフィアは、撤退信号は自分達を油断させるためのフェイクと判断してしまい、アストルの操作室に無線を開いた。

「アストルのコロニーレーザーを作動させて、破壊される前に発射させなさい！！」

まだ曳航中ではあったが、概ねの向きは、アンマンに合っている。ロード革命戦線の勝利を願い、ソフィアは決断した。

アストルの発射口の中で、コロニーレーザーの増幅開始を意味する赤い光が、不気味な明るさを増していく。

既にコロニーの側面に移動しているジェガン数機は、後方からのワルザの狙撃と、正面から際限なく出てくるギラドーガからエリオットを守りつつ、追撃を振り切るだけで手一杯になり、その光は見えていない。

「コロニーレーザーが発射準備に入った！？何故だ！？」

ロサが叫んだ直後、数十機の敵機に退路を断たれていた他のジェガンも、遅れて到着したレオン達が追いついて、ようやく突破口が開かれ、撤退を開始した。

四肢の無い損傷機に気付き、隊長機3機にグールが加わり、4人掛かりで追撃から逃げるジェガンを守りに入る。

ガンダムをモビルアーマーに任せ、ワルザが残っているベリックやギラ・ドーガと共に、ジェガンの追撃を始める。だが、ガーゴイルでも指折りの腕を持つ4人からの連続狙撃を浴び、全く狙いが定まらない。

「お願い、もう後退して！ソフィア……！！」

涙目になりながら眩き、それでもなおワルザに向けてビームライフルを連射するレイラ。そんな状態で、脱兎の如く動き回るファンネルに狙撃が当たる筈も無く、その様子を見ながら砲撃を続けるレオンとグールもまた、集中しきれずに散漫な射撃を続けていた。

「レオンさん、レイラも！！どこ狙ってるんだ！？全然当たらないじゃないか！！」

唯一ソフィアの事を知らない中隊長のケニーが、3人の様子に堪らず怒鳴る。

「ケニー、もう良い！撤退するぞ！これ以上続けたら、俺達が持たん！！」

「・・・了解！！」

ケニーが納得しかねる声を出した直後、レオンが撤退信号を出し、4人がアストルに背を向けた。

「無線も届かないな、エリオットは任せるしかない」

追撃をかわしつつ引き上げていくジェガンをちらりと見た後、ロサは明るさを増していく発射口へと向かう。再びモビルアーマーの拡散ビーム砲が、Aガンダムを襲い始めた。

「あの時みたいなの不快さは感じない。今なら、きっとまだ間に合う！頼むから俺の話を聞いてくれ……!!」

祈るように呟いた後、ロサは発射口の前に立ち塞がるモビルアーマーに無線を開いた。

「このままでは発射に巻き込まれるぞ！早くそこから逃げろ!!」

ロサが何とかパイロットを救おうと、叫びながら全速力で近づく。だが、Aガンダムを近づけまいと、モビルアーマーは必死にビームを連射してくる。

機体の割りに小さな顔の輪郭が、はっきり見える距離に近づいた時、相手の声が聞こえた。

『ガンダム……！これ以上、お前には近づかせない!!』

声を聞いたロサが、驚愕の表情を浮かべ、目を見開いた。思わずAガンダムの動きが止まる。

「……………その声……………まさか、リリアなのか？」

『ガンダムのパイロット……………ロサなの？』

ようやくお互いの存在に気付いた二人が、互いの連射を止める。

「リリア、もうよせ！このままじゃ君も巻き込まれる、君はこんな所で死んじゃいけない！戦争で死ぬなんてバカな事を考えるな！！」

必死になって叫ぶロサとは対照的に、リリアの話し方は冷静だった。冷静というよりは、他人事のような冷たい話し方である。

『言ったでしょう？私は軍人……………戦争に参加しているの！私が生まれてから、連邦軍が原因で何度も戦争が起こっているわ。私の手で、このプロザムで、戦争の起こる原因を排除する！それは、私にしか出来ない事。私の手で、やらなければならないのよ！！』

「だったらコロニーレーザーで死んでいく人はどうなる！？拾われて助けられた命で、何十万の人がレーザーで焼かれるのを見殺しに

するのか！？俺達と同じ思いをする人間を、自分の手でまた増やすつもりかよ！？答えろ、リリアア！！」

「リリアア！ガンダムは敵よ、撃ちなさい！！」

ノイズだらけの無線を通して、辛うじて聞こえる会話の内容に苛立ちを抑え切れず、ソフィアが叫ぶ。まだレオン達からの砲撃が終わらず、ワルザは必死にかわしながら、再び2人が居る空域へと急ぐ。

『ガンダム・・・ワタシノ・・・テキ・・・』

前回と同じ機械的な声が聞こえた後、また異様な不快感を発して、リリアは無線に応答しなくなった。

”そういえば、この前も「ガンダムは敵」と呟いていた。そうか、その言葉を聞く事で、催眠術によるマインドコントロールが発動するように、刷り込まれているんだ・・・！”

ふと、遊覧船でリリアが見せた屈託の無い笑顔が、ロサの頭をよぎった。

「・・・あんな女の子まで兵器扱いか！？これが貴様のやり方が、ロードー！！」

怒りに震えるロサの声に、少しだけリアのプレッシャーが弱くなった事に、怒り心頭のロサが気付く事は出来なかった。

「生きてさえいてくれれば、催眠術なんか後でも解ける。今は引き離すのが先だ！」

何とかコロニーレーザーから引き離そうと、ロサがブロザムを牽制するために、様々な角度からファンネルで連射する。これに応戦して、再びブロザムからの連射が始まる。

「ダメか・・・やはり止めるのは無理なのか・・・!?」

アストルの中でエネルギー増幅が進み、ブロザムとAガンダムも、赤い光に照らされ、機影が宇宙の闇に浮かび上がる。

「もう発射寸前まで増幅が進んでる、これ以上は・・・そうだ、増幅するミラーを破壊すれば、発射は止められる筈だ！」

とっさにレーザーの原理を思い出したロサが呟く。だが、今から突撃すれば、間に合わなかった場合にレーザーの発射に巻き込まれる。そうなれば流石のAガンダムといえど、命は無い。

「どつちにしても死ぬんなら、そつちを止めてやる！！ファンネル  
っ！メインミラーだけで良い、破壊しろ！！」

拡散ビーム砲に対する防御を完全に捨てたロサが、切れ目無く連射  
を続けつつ、ファンネルを光を増し続けるコロニー内部へ特攻させ  
た。

だが、ジエガンの追撃からようやく開放され、これに気付いたワル  
ザのファンネルが狙撃を阻止した後、ガンダムファンネルの前  
に立ちはだかる。ファンネル同士のビームがぶつかり合い、激しい  
攻防が始まる。

「邪魔するな、姉さん！！こんなやり方で勝ったって、残るものな  
んか何も無いだろう！？」

『連邦の思い上がりを打ち砕かないと、人類は救われない！これは、  
その第一歩なのよ！失敗させる訳にはいかない！！』

発射口の前にはリアのブロザムも立ちふさがり、ビームの嵐で飛  
び込む隙も無い。連射で防ぎながら飛び込む事も、出来そうに無い。

「こつなつたら止むを得ん、Aガンダムを直接ぶつけてやる！！」



変形したAガンダムがワルザの隙を突き、自爆覚悟で発射口に向かって突撃した。撃ち合うファンネルをすり抜けて、最高速でプロザムの頭上に向かう。

それに気付いたリリアが、Aガンダムに向けてビーム砲を連射し、更に後ろからもソフィアが、ワルザのもう1本残っていたビームライフルで連射する。

拡散ビームの火線が、Aガンダムのみならずワルザのファンネルまで次々に撃墜し、Aガンダムのフラインググアーマーも吹き飛ばされた。バランスを崩したAガンダムが、再び人型に戻る。

それでも怯む事無く、再び加速を続けながら、ロサがリリアに向けて、再び無線を開く。

「リリア、よせ！俺だ、ロサだ！君はこんな事で死んじやいけない！俺は、これ以上君に人殺しをさせたくない！頼むから、もう戦争なんかやめてくれ！！」

『……………！？』

「君は、戦争が終わったらもう一度会いたいって言ってくれたじゃないか！今やっている事は、君が望んでやっている事じゃない、元の君に戻るんだ！！」

『ひるたひ・・・!!お前に私は渡さない!!』

「!?!」

ロサには、唐突にリリアが発した言葉の意味は分からなかった。だが、この後のプロザムの行動が、その意味を理解させた。

リリアの中で、戦闘をしていたマインドコントロールにより作られた人格と、船でロサと言葉を交わした元の人格が、ひとつしかない体を奪い合っていたのである。

『ロサ・・・どうして、あなたはそこまで優しいの・・・?』

無線越しにそう聞こえた後、ロサに対するプレッシャーが消えた。それに耐えながら突入していたロサの体が、宙に投げ出されたような違和感に襲われる。

「えっ!?!・・・何だ!?!」

ロサが気が付いた時には、連射が止み、発射口へ向かって振り向いたプロザムの機体が、コロニーの一番奥にあるメインミラーへと流

れていた。

「リリア!？」

ロサが叫ぶが、今度はプロザムが拡散ビーム砲を連射しながら、発射口へと突入していき、あちこちで増幅管やミラーが割れ破片が飛び散り出した。

『もうエネルギーが臨界に達してる、このままじゃ爆発するわ!ロサ、逃げて!』

リリアがロサを離れさせるために、プロザムの腕のビーム砲をロサに向け、威嚇射撃を始めた。

「よせ!君は俺たちと生きなくちゃいけない!死んじゃいけない人なんだ!戻れ!」

尚も近付こうとするロサに、リリアが言葉で壁を作った。

『ロサと出会えて、本当に良かった・・・あなたの手で、フローラのこと、幸せにしてあげなきゃダメだよ』

さらにロサへの威嚇射撃が激しくなる。フローラの名前を出され、ロサが死への覚悟を揺さぶられる。

「・・・俺に、フローラのために生きると言うのか？」

『好きな人が、一番幸せな生き方をしてくれるのが、私の幸せ・・・私のために、フローラと幸せになって。お願い』

ロサが固く目を瞑り、ガンダムを反転させ、発射口に背を向けた。そのまま、バーニアを吹かし、全速力で離脱する。

プロザムの動きに気付いたソフィアが、破壊を阻止しようとワルザで突撃し、プロザムの頭部を押し潰した。

「誰にも邪魔はさせない!!」

だが、リリアの意思がはるかに強かった。ソフィアがプロザムを止める事は出来ず、レーザーのメインミラーが粉々に飛び散る。

「私はロサを守る・・・命に代えても・・・!!」

無線がこの声を拾い、威嚇射撃が止んだ事に気付いて振り向いた口

サの目に、この様子が微かに映った。

「あれは・・・ワルザ!? 姉さんか!？」

レーザーの光の中で、小さいがはっきりと、ワルザの機影が見えた。

「リリア・・・! 姉さん・・・!!」

ロサが叫んだ瞬間、行き場を失ったレーザーのエネルギーが内部で拡散し、閃光と共に大轟音を響かせ、コロニーが爆発した。その激しい爆風で、Aガンダムが吹き飛ばされる。

「うわああっ!!!」

反射的にロサの足が動き、バーニアのペダルを踏み込んだ。

数百mに及ぶ距離を飛ばされた後、何とか体勢を立て直したAガンダムが、猛煙をあげて炎上するアストルを向く。

「リリア・・・どうして・・・」

呆然とアストルを眺めるロサの前で、もう一度アストルが爆発した、もうこれ以上は、近づく事は出来ない。

リアと交わした会話が、ソフィアと過ごした地球での思い出が、フラッシュバックのようにロサの脳裏に反響し、ロサの目から、涙が流れる。

「なんで俺は・・・誰も救えないんだ・・・」

両の拳の震えが止まらない。堪らず目を閉じ、頭を何度も横に振る。

「くそおおっ！！何がガンダムだ！誰も救えないじゃないかよ！！」

自分の無力さへの怒りに、ロサは思い切り肘掛に拳を叩きつけた。

断末魔の叫びをあげるように、もう一度大きく爆発し、コロニーレザー・アストルは、宇宙の闇に四散した。

その光が、Aガンダムの両頬を照らし出す。ヘルメット状の装甲の縁が、あたかも涙を流したかのように、一筋の光跡を描いた。

### 30・帰還後（前書き）

アストルから帰還した、ガーゴイルのパイロット達が、エリオットの異常に気付き始めた。

その一方で、ソフィアとリリアが目の前で爆発に巻き込まれる際、一部始終を見ていたロサも、悲しみを隠しきれないまま、帰還した。

### 30・帰還後

「アストル」から無事ガーゴイルに生還したジェガン隊が、次々に後部の着艦デッキに帰還してきた。

それぞれが所定の駐機場所に機体を移動する中で、唯一被弾したエリオットの機体が、痛々しい姿を晒していた。待ち構えていたメカニック達が、ぎよつとした表情で、一斉にエリオットの機体を見た。

「エリオット、大丈夫か？」

レオンが居ない間だけ、エリオットと同じケニー隊に組み込まれていた、レオン隊のマーガス「シュツラウト」が、接触回線で声を掛ける。

「俺自身は何ともない、大丈夫だ。くそっ、ロサの奴、俺の目の前で信号弾なんか上げやがって・・・」

足元を固定されたジェガンのハッチが開き、エリオットとマーガスが出てきた。

「何だ？その言い草は無いだろ？お前のジェガンが、あのデカイモビルアーマーに突っ込んで行くのを、必死になってロサが守ってく



れてたじゃないか。あれがロサでなかったら、今頃お前は蜂の巣だつたんだぞ？」

レオン隊のルーク・アイラスが、無線で耳元に届いた声に眉を潜め、エリオットをたしなめる。だが、エリオットはバイザー越しに、ルークを忌々しげに睨んだ。

「何の事だ？俺がワルザを突破したのに、ロサが信号弾で止めたんじゃないか。大方、手柄を取られなくなかつたんだろ？」

マーガスとルークが、エリオットの言葉に目をしばたき、顔を見合わせる。もう一度、2人が覗き込むようにエリオットの顔を見た。

「エリオット、お前、まさか本当に覚えて無いのか？」

2人から、まじまじと顔を見られ、居心地が悪そうにエリオットが顔をしかめる。

「2人して何だよ、一体！？夢でも見てたんじゃないのか？とりあえず、俺はもう上がるぜ。あんな露骨に邪魔されちゃ、やる気にならねえ」

あくまでもロサを悪者にしたがるエリオットの言動に、ルークとマ

「ガスがもう一度首を傾げた。エリオットが立ち去った後、ルークが確認するように、マーガスに尋ねた。」

「何か、様子がおかしいよな、あいつ」

「普段から口サを気にくわないって雰囲気は有ったが、あそこまで酷くはなかったよな。あれじゃまるで、本当に何が有ったか、覚えて無いみたいだ」

「一応、艦長とレオンさんには知らせておこう。何か有った時に、取り返しがつかなくなる」

真剣な表情で言うルークの言葉に、マーガスが頷いた。

「どうした？何かあったのか？」

エリオットの機体が被弾したと聞き、ブリッジから様子を見に来たマークが、顔を見合わせている2人に、声を掛けた。何気無くエリオットのジェガンに目をやり、その惨状に思わず目を丸くする。

「うわっ、何だこりゃ！？今のうちのパイロットがここまでコテンパンにやられるなんて、相手はどんな化け物だったんだ！？」

思わず声を出したマークが、違和感を感じて周囲を見回し、更に呆けたような声を出した。

「他は無傷なのに、エリオットだけが、何でこんなになってるんだ？」

「マークさん、実はちょっと、その事でお話が」

マーガスが、真剣な声で切り出した。ルークとマーガスが、アストルでの経緯を話している途中で、追撃に対するしんがりを務めていた隊長機3機が帰還した。

「何だ、損傷機の前でそんな風に辛気臭い顔で話すなよ。誰か死んだみたいじゃねえか」

レオンが雰囲気を茶化したのに対し、ソフィアの事が気掛かりで苛立っていたレイラが、真面目な顔でたしなめる。

「縁起でもない事を言わないで下さいよ。こんな姿のジエガンの前だと、ホントにそんな気分になるじゃないですか」

レオンのジエガンが、レイラ機の肩をポンと叩いた。気が滅入って

いる事に気付いて、レオンなりに自分を励ましているのだと気付いたレイラが、口をつぐみ、俯いた。

ジエガンでは最後に戻った4機も駐機を終え、着艦デッキと駐機場所が一旦エアハッチで区切られた後、パイロット達が集まった場所にもエアが入った。ジエガンを降りた後も、疲労を隠せない表情のレイラに向かって、レオンが軽く手を上げて呼んだ後、本題に話を戻した。

「それで？真面目な話、何があった？」

ルークとマーガスが一通り話を終えた後、他のメカニック達が準備を終え、エリオットの機体の修理のため、マークのもとに集まって来た。

「よし、整備デッキへ移動させて、8号機（エリオット機）をバラすぞ。腕は下腕部だけで良いが、足はダメだ。丸ごと付け替えるしかない。ルーク、すまないが4号機（ルーク機）で8号機を抱えて、整備デッキへ移動させるのを手伝ってくれ」

マークが順次指示を出していき、整備班とルークが、着艦デッキから移動していった。残った隊長達は、マーガスから話を聞いて、いずれも厳しい表情に変わっていく。

「記憶喪失……か」

レオンが険しい表情で呟いたのに対し、マーガスが頷き、状況判断を加えて説明を続ける。

「はっきりした事はまだ分かりませんが、あの言動から判断する限り、そういった類いのものではないかと思われます」

「とりあえず、艦長に話を通すぞ。俺達だけで判断は出来ない」

レオンの言葉に、居合わせた者が、みな頷いた。

その後、着艦デッキに誰も居なくなつた後、ロサが漸くガーゴイルに到着した。着地と同時にガンダムハッチを開け、エアハッチの中に入る。その表情は黒い防眩バイザーに隠され、外からは見えない。

無論、ロサの肩と強く握られた両手が震えていた様子は、誰も見ていない。ガーゴイルに来て初めて、ロサは帰還の報告もせず、自室にそのまま戻ってしまった。

ヘルメットを投げ出し、そのままベッドに倒れ込む。両手に顔を伏せて俯せになるが、すぐにアストルでの光景が脳裏に蘇り、また体

が震え出す。

”あの二人は敵なんだ！敵を倒したんだから、フローラが生き延びられるんだから・・・良いじゃないかよ！・・・なのに、何でこんなに悲しいんだよ・・・！！”

ベッドのシーツを思い切り握り締め、泣き声を噛み殺しながら、ロサは涙を流し続けた。

ガンダムが、ガーゴイルの後部ハッチのセンサーを遮っていて、閉まらない事にメカニックが気付き、ロサの帰還がブリッジのメッシュに知らされた。

ロサが、戻ったまま駐機もしていないとの知らせが入り、ブリッジに居た面々が、みな一斉に首を傾げた。

「どうしたんだ？エリオットといいロサといい、何があったんだ？」

「何かあったのかな・・・？ちょっと様子を見てきます」

ブリッジに來ないロサを心配したレイラが、ブリッジを出て、ロサの部屋のドアホンを鳴らした。

「ロサ、部屋に居るの?」

泣き声に気付かれたくないロサは、返事をするどころではなかった。涙でぐしゃぐしゃの顔になりながらも、声を出さない様に努力したつもりだったが、その嗚咽を隠し切る事は、どうしても出来なかった。

「・・・泣いてるの?」

クルーの中では、唯一ロサが泣く様子を見た事が有るだけに、心配げな表情で、レイラが声を潜めた。

ソフィアと同じ歳のレイラの声を聞くと、どうしても昔のソフィアを思い出してしまい、嫌でも涙が止まらなくなる。顔を伏せたまま、震える拳でシーツを手繰り寄せるように握り締めたロサが、搾り出すような声を出した。

「ごめん、少し・・・一人に、してくれ・・・」

それ以上の言葉が出て来ない。今のロサには、そう言つのが精一杯だった。

「……落ち着いたら、ブリッジに来てね」

それだけ言って、レイラは一旦ブリッジに戻った。メッシが怒鳴っているのが、廊下まで聞こえている。

「あれほどロサが止めていただろう！なぜ指示も仰がずに動いた！？」

「追撃していったジエガンが、ケニーさんだと思って……。無線もリーダーも駄目でしたから……」

エリオットにつられて動いた第一陣の3人が、揃ってうなだれた。これを聞いたメッシが、エリオットを右の拳で殴り飛ばした。

先頭グループに居た若手のジエガン4機のうち、エリオット以外はガンダムが追隨しているのを見て、隊長機と思い込み、ついてきた。

だが、被弾したのがエリオットの機体だと気づき、ロサの信号弾に従って撤退を開始したところ、ワルザによる追撃が始まった。



エリオットをマーガスが救助後、発射口の戦闘空域を離脱しようとした時に、ケニー達の第2陣が到着し、漸く退路を開いた。

その直後に、アストルは爆発した。

偵察から戻ったレオンとゲールは、ガーゴイル周辺での戦闘終了時点で、ミノフスキー粒子で無線もレーダーも使えず、自分以外は追撃無しでガーゴイルに引き上げて来ると思い込んでしまったため、エリオットの追撃に気付いたのは、弾薬を受け取って再出撃する間際だった。

レオンが出撃準備を済ませた直後、一度ガーゴイルに撤退してきたレイラ達に話を聞き、慌てて加勢に向かったのである。

「分かったか？エリオット、お前が取った行動が、如何にみんなを危険に晒したのかという事が。暫く独房に入ってる。ロバート、連れて行ってくれ」

納得がいかない表情のまま俯いているエリオットを、副艦長のロバートが肩を叩いて促し、ブリッジを出ていく。

「取り敢えず、全員無事に戻ってるんだ、今回はもういい。次からは必ずリーダー機に指示を仰げ。無理ならガーゴイルが有視界で見

える範囲を離れるな。もう一度やったら、コロニーが無くて、その場でガーゴイルから叩き出す。いいな？」

さすがのレオンも表情が厳しい。レオンの低くなった声に、全員が無言で頷く。

「ロサは大丈夫なのか？」

メッシが、ブリッジに戻ってきたレイラに尋ねた。

「無事だとは思いますが、暫く1人にしてくれと……」

「何かあったのか？」

メッシの質問に、レイラは沈んだ表情のまま、首を横に振った。

「分かりません。気分が落ち着いたら、ブリッジに来るように言うてあります。後で来るとは思いますが……」

「そうか……分かった。ありがとう」

今までも、必要な事を言いたい時は、ロサは自分からメツシの元へ来ていた。必ず、また出て来ると信じて、今はそつとしておく事にした。

「おおよその状況は分かった。今のところ、他に詳しい状況が把握出来ているのは、ロサしか居ないという事だな？」

全員の顔を見渡して、メツシが確認したのに対し、誰もが同時に頷く。

「わかった。ロード軍の拠点と思われるコロニーも破壊出来たし、狙われたアンマンも無事だった。今回はご苦労だった。それぞれ次の戦闘に備えて休め」

メツシが労い、パイロット達が解散した後、ブリッジに残ったレイラが、表情を変えずに話し始めた。

「多分、ソフィアが死んだのではないかと・・・」

「ソフィアが？」

メツシとレオンが、顔を見合わせた。彼らも、幼い頃のソフィアは知っていた。完全に会わなくなったのは、ソフィアの失踪後である。

「それで泣いているんだと思います、ロサは・・・」

「わかった。後はロサから聞く。色々あったよつだから、疲れたる？今は休んだ方が良い」

メッシが、まだ何か言いたげなレイラを制した。

「・・・はい」

レイラも肩を落としたまま、自室へと引き上げよつと、ブリッジを出た。

ロサが戻ったきり部屋から出て来ないと聞き、心配したフローラが、ロサの部屋を訪ねよつとしていた。

それにレイラが気付き、フローラに手招きで合図して、レイラの部屋へ連れて行った。

「今は、そつとしておいてあげて」

レイラが重苦しく口を開いた。その様子を見たフローラの表情が、さらに心配げになる。

「何かあったんですか？」

「ロサ自身は無事よ。心配要らないわ」

「でも……」

「男の子は見栄っ張りだから、女の子に泣いてる所を見られたくないのよ。解ってあげて」

予想外のレイラ言葉に驚き、フローラが目を丸くした。

「泣いてる……ロサが？どうしてですか？」

「多分、ロサにとって大切な人が、死んでしまったんだと思うの。それが誰なのかは、私にもまだ分からない」

俯いたまま、力無く話すレイラの様子に、フローラが言葉を失う。

「落ち着いたら、自分で部屋から出て来ると思っわ。だから、今はそっとしておいてあげて」

「でも、この前は、私がロサに甘えさせて貰ったんです。今度は私が、ロサを慰めてあげないと・・・」

懇願するように言うフローラに、レイラが首を振った。

「男の子は、慰めて欲しくない時もあるのよ。今のロサがそうなの。今、あなたがロサのところに行っても、ロサが混乱するだけよ。あなたの前で泣きたいって自分から言ったら、その時に好きなだけ泣かせてあげれば良いわ」

「今の私に、何かロサにしてあげられる事は無いんですか？」

「あなただけじゃない。今のロサには、誰も、何もしてあげられない。ロサ自身の力だけで、ちゃんと気持ちの整理をしなければいけない時なの。そうしなければ、彼は今までどおりに、ガーゴイルを守れない」

本当の姉のように慕ってくれるロサを、慰めてやりたい気持ちは、レイラも変わらない。

レイラの言葉は、フローラだけでなく、自分自身にも言い聞かせる為のものでもあった。レイラの表情からそれを察したフローラは、言葉が見つからず、何も言えないまま俯いた。

「例えどんな事があっても、ロサはあなたが信じて待っていてくれる、必ず戻って来る。だから、自分から出て来るまで、待っていてあげて。良いわね？」

「・・・わかりました」

フローラは、納得しきれない表情だったが、レイラの言葉に、頷かざるを得ない雰囲気を感じ取り、渋々ながら頷いた。

レイラの部屋を出た後、ロサの部屋のドアを心配げな顔でちらりと見て、フローラは自室に戻っていった。

1時間後、ロサがブリッジのメッシのもとにやってきた。

「ロサ、ご苦労だったな」

メッシが艦長席から降り、まだ目が赤いまま沈んだ表情のロサの肩を、軽く叩いた。

「ごめん、艦長。完全にスタンドプレーだよ、あれは」

俯いたまま、消え入るような声でロサが呟いた。事情を知らなければ、先陣を切って突撃したと思われても、やむを得ない状況だったから、誤解されても仕方ないと、修正を受ける事も覚悟していたのだろう。

「お前の意思じゃなかったんだろう？他の連中が話してくれたよ」

メッシの言葉にロサも安心したのか、少しだけ表情を緩ませた。

「そうか」

「その時の状況なんだが・・・覚えてるか？」

メッシの質問に、ロサが無言で頷き、静かに話し始めた。

「エリオットが、止めても聞かなかった。ジエガンの手足が破壊されていたから、恐らく気を失ったか、恐怖を通り越してホワイトアウトした状態で、突入してしまったんだろう。目の前で信号弾を炸裂させて、ようやくその光で目が覚めたんだと思う」



メッシが頷き、続きを促す。

「俺も、そこまでは戻ってきた連中から聞いた。問題はその後だ」

「あのタイミングでコロニーレーザーが作動したのは、その撤退信号で撤退すると見せかけて、俺たちが一斉に突入すると思ったんだろう。俺の撤退信号も、作動の一因ではあるんだ」

「エリオットにコロニーレーザーを破壊される前に発射してしまえ、と自棄を起こして、ロード軍がコロニーレーザーを作動させたわけか」

メッシが納得して頷いた。ロサが淡々と説明を続ける。

「ワルザも例のモビルアーマーも、ミラーが割れて発射に失敗した時の爆発に巻き込まれた。多分、あれではあの2人は助からない。最後には、コロニーが完全に粉々になるような、大きな爆発が起こった」

「・・・そうか」

「あとは、ロードを倒すだけだ」

伏し目がちなメツシの様子に、ロサが違和感を感じ、首を傾げた。

「何か元気ないね？艦長」

ロサの言葉に、少し間を置いて言いにくそうに声を潜め、メツシが  
呟いた。

「ソフィアが、死んだそうだな」

「・・・知ってたのか」

ロサが、諦めたように言った後、溜め息をついた。流石にその声には、いつもの明るさは無い。メツシもつられて溜め息をついた後、沈痛な面持ちで頷いた。

「ついさっき聞いた。それまではレオン達からも、ソフィアの事は聞かされていなかったから、俺も驚いた」

「そりゃ驚くよね、まさかこんな事になるなんて、今まで誰も思っ  
てなかった筈だ」

空元氣を見せて苦笑するロサの様子に、かえってメッシは、何もしてやれない無力感に、胸が締め付けられた。心配げな表情で、メッシがロサの顔を覗き込む。

「大丈夫なのか？お前・・・」

「この戦争を俺の手で終わらせて、平和になったらゆっくり声を出して泣くよ。今はまだ、その時じゃない。戦争を終わらせて、完全に平和な世界にならなければ、俺の償いは終わりじゃないんだ」

まだ、目頭に涙の跡が残っている。だが、正面の大窓を見るロサの目には、いつもの鋭く真っ直ぐな眼光が戻っていた。

「・・・そうだな」

その様子を見て、ようやくメッシも安心した表情を見せた。

同じ頃、グラナダへ向かっていた、スウィート・ウォーターとグラナダを結ぶ「貨物用シャトル」のコックピット。

「何か、近所で戦争やってるっばいが・・・大丈夫か？」

ノートパソコンを使っていた、濃紺スーツを着込んだ中年男性の「乗客」が、緊急用インターホンで機長に尋ねた。本来は電波を出す電子機器の使用は、レーダーに悪影響を及ぼす為、それしか現在地を知る手段が無い宇宙では遭難しかねないのだが、スチュワードも居ないらしく、誰も咎めていなかった。

彼が気づいたのは、移動中に株価の変動を見ようと、ノートパソコンの画面を見ていた際、宇宙で起こる筈の無い、雷でテレビの画面が乱れるようなノイズが、幾度と無く画面に走ったからである。

宇宙で雷のノイズが走るなど、本来は有り得ない話。考えうるのは、ビーム砲による電磁波しかない。

「お客さん、困りますよ。さっきから電波が攪乱されて、飛行コースが狂い始めてると思ったら、お客さんのパソコンが原因だったのか。すぐに電源を切って下さい、遭難してしまいますよ。ただでさえ、通常コース外の場所を飛んでるんだから、救助も呼べない。チケットにもそう書いてあるでしょう」

このシャトルは、闇ルート。要は、無免許での路線営業で、貨物機に座席等の接客設備を仮設したコンテナに乗客を乗せた、違法営業機だったのである。

戦時中の輸送量激減で、貨物専門の航空会社は倒産寸前に追い込まれ、苦肉の策として「人間を運べるコンテナ」を搭載し、輸送量を確保するしかなくなった。会社をもたせるには、やむを得ない選択とはいえ、正規路線のコースを通れる筈も無く、戦火に巻き込まれても文句を言えない場所を通る事もザラにある。

その代わりに、乗客は正規ルートの約1/3の運賃で飛ぶ事が出来る。日本と言う所の、JRバス等の路線免許を持つて営業する「正規営業路線」に対する、路線免許を持たない観光バス会社が営業する「ツアー扱いの格安高速バス」のようなもの、といえば分かり易いだろうか。

「この近くでも戦争やってるって話だ、レーダーが狂ったら、戦場に突っ込みますよ」

機長が厳しい口調で言った直後、まっすぐにシャトルに向かってくる機体を、レーダーが捉えた。警報が鳴り、慌てて機長が前方を注視する。

「……言わんこつちや無い！連邦の取り締まりか！？」

機長が顔をしかめて言い終わると同時に見えたのは、マシンガンを携えた、モスグリーンのズンぐりとした機体。銃口がこちらに向い

ている。その傍らに、マイクロバス程度の大きさの、白い小型ラン  
チも見える。

「・・・何だ！？賊！？」

危機感に青ざめた機長が、目を見開いたまま呟いた直後、横柄な口  
調で、無線で尋ねる声が聞こえてきた。

『このシャトルの機長、聞こえているか？』

「・・・何の用だ！？」

『大人しく言う事を聞けば、危害を加える事は無い。我々の同志を、  
グラナダまで乗せる。我々の目的は、強奪や人質を取る事では無い』

「！？」

理解しきれない表情で、機長が窓の外のモビルスーツを見た。

「その機体・・・ジオンのザクか！？」

『必要な事だけに答える。我々に従わないなら、このまま宇宙の塵になって彷徨って貰う事になる。闇ルートの手ヤトルなど、代わりは幾らでも飛んでいる』

マシンガンの銃口が、正確にコックピットを向いた。

「わ、分かった！今からハッチを空ける！但しモバイルスーツは無理だ、貨物室に入る大きさじゃない！」

『同志を乗せると言った。客室に入れるようにしろ。乗客が騒いだら殺す。騒がないように知らせておけ』

機密を確保した後、客用扉を開放すると、20人近い人数が客席になだれ込んだ。全員が自動小銃を持っている。

彼らは、爆発したコロニーレーザー・アストルの生き残り。無論、手ヤトルは違法営業なので、救助要請も被害届も出せる訳も無い事を、見越しての行動である。

『よし、出せ』

キラ・ドーガの一機から、先程と違う声が聞こえ、右手に持ったマシンガンを振って、追いつけるようなゼスチュアを見せた。

「酸素を入れ直す。ドアのロックを確認してくれ」

客室に放送で兵士達に指示した後、機長は放送のスイッチを切り、うんざりした表情で呟いた。

「全く、バカな客のお陰で、とんだとばっちりだ」

シャトルがロケットエンジンを再点火し、襲撃された現場を離れた。

その後、アストル爆散の直前にグラナダから出ていた、ロード軍の補給艦「サジタリアス」が、現場に残った者からの連絡を受け、主が乗り移った為に抜け殻となった機体を回収するため、アストル跡へと向かう途中、現場へと現れた。

サジタリアスは、外装を民間の貨物船に偽装して、グラナダとアストルの間を往復し、物資の輸送を担当していた他に、グラナダで製造されている連邦軍のモビルスーツの情報を探ってもいた。

戦闘員はサジタリアスには居ないため、アストルから焼け出された



パイロット達が、サジタリアスの情報を元に、グラナダのアナハイム・エレクトロニクスを襲撃する準備の為に動いていた。

それを支援する手近な拠点として、サジタリアスも動く事になったのである。

「どうやら、上手くいったようだな」

海軍式のマリンハットを肘掛にサジタリアス艦長のバイス「オーリスが、ギラ・ドーガの回収と駐機を終え、ブリッジに上がってきたパイロット達に声を掛けた。その中では最も年上と思われる、30代前半の男が、進み出て敬礼した後、固い表情のまま答えた。

「今回はグレイン「フォース大尉も参加しています、あの方なら、問題なく進められるかと」

その返答に、バイスが呆れたように溜め息をつき、顔をしかめた。

「やれやれ・・・能力的には問題ないだろうが・・・テストパイロットまで実戦投入せざるを得なくなったか。仕方が無い、我々は「待機場所」に移動して、合流してくるのを待つ。何しろ補給が来らん、出来るだけ無駄な加速は避けて、推進剤を温存しろ」

バイスの指示と共に、サジタリアスのエンジンに火が入り、やがてその巨体も宇宙の闇へと消えた。

### 31・再会（前書き）

総合病院で検査を受けるエリオットに付き添い、医師の話聞くことになったメッシとレオン。

待合室で、ある人物から意外な話を聞くことになる。

### 31・再会

ガーゴイルの手助けと修理のお陰で、コロニーで補給を終えたグラナダ行きのシャトルは、ブリュタールを出発した。

「そつえば、確かこの辺りだったな」

シャトルは、機長のハンス・ベルナルの操縦で、先日救助を断ったコロニーの近くを航行していた。それを思い出したハンスが、周囲の景色を見ながら呟いた。

「ん……？何だ、あれは？」

ハンスの目に入ったのは、爆発して散乱したと思われる、コロニーの残骸だった。

金属がむき出しになっている部分はまだ光沢があるものの、爆発の焼け跡が生々しく残り、黒焦げになった部分の面積が大半を占めている。比較的新しいコロニーが被害に遭ったのだらうと、容易に推測出来る。

現在、彼のシャトルは、救助を受けたため、通常のコースからは、かなり外れた空域を通過している。

近年は、民間のシャトルが往来するコースとその周辺では戦闘行為が禁止されているため、こういった光景を民間人が目の当たりにする事は稀になった。

グリプス戦役の頃は、ティターンズが無差別虐殺を繰り返し、コロニー破壊もしばしばあったし、第1次ネオ・ジオン戦争でも、勝つために手段を選ばない風潮が見られ、これと似たような光景はあちこちで見られた。

このような光景を見るのは、ハンス自身も20年ぶりの事だった。正視に耐えないその光景に、ハンスは思わず目を背けた。

「一体、何人が犠牲になったんだろうな……。我々を助けてくれた軍が、こんな行為をしたと思いたくは無いな」

ハンスは、横目で瓦礫を見ながら呟いた。

推進剤を援助してくれたコロニー「ブリュタール」では、推進剤と食料の補給をしてくれたのだが、食料については、ブリュタールに到着前、少量ではあるものの、ガーゴイルからも分けてもらっていた。

またいつ故障するか判らない状況では、食料が無ければ、乗客が騒ぎ出したら手がつけられなくなるため、乗客には、多少余分に手に入った食料の事は、黙っていた。

ようやく正規の軌道に戻り、一安心したハンスは、自動操縦に切り替えた後、モニターをひとつおり確認し、異常が無い事に満足げに頷いた。

「修理してくれたメカニックの腕が、かなり良かったらしいな」

そう呟いた後、警報音が鳴り、ハンスは反射的にレーダーを見た。

「救命信号？こんな所で？」

レーダーにSOSの文字が2つ点灯している。だが、モバイルスーツやシャトルなどより、機影は遥かに小さい。

だが、無線機だけが放り出されている訳でも無いようで、丸い機影が、はつきりとレーダー画面に映っている。

「通常のシャトルの軌道上だな・・・何だろう？移動しないところを見ると、とりあえず自力飛行は出来ないようだが・・・」

自動操縦のままでも、とりあえず正規のコースに戻す必要がある為、そのまま航行しても、発信源には自動的に辿り着ける。余計な加速で燃料を浪費する訳にもいかないので、ハンスはそのまま暫く様子を見る事にした。

10分程で、救命信号の発信源の近くに来た時だった。

「この辺りの筈なんだが・・・」

ハンスが目視で、辺りの様子を見回す。レーダー画面を拡大し、シヤトル機体と発信源との位置関係を確認する。

「あれか？」

シヤトルの右手に、銀色かグレーのような色の、丸い金属の球体が、少し離れた位置に2つ見える。外観から判断する限り、同じものに見える。救命信号は、どうやらその球体から発信されているようだ。

人件費削減で一人しか居ない客室のスチュワード（男性の客室乗務員・スチュワードスの対義語）をインターホンで呼び、レーダーの画像を見せて、ハンスが尋ねた。

「どう思う？」

機長の権限で、スチュワードを確認に行かせる事は出来る。そういう事にも慣れているのだろう、尋ねられたスチュワードは大して動揺もしないまま、窓の外に見える球体とレーダー画像を交互に見比べて、落ち着いて答えた。

「救命信号を出すには、珍しい物体ですね。どう見ても飛行するものじゃ無いし、何だろう？」

「しかし、我々も救助された訳だし、無視する訳にもいくまい？」

「それを言われると弱いですね・・・」

スチュワードが苦笑して、頭を掻く。諦めたように溜め息をつき、機長に背を向けた。

「一応、目視確認をして来ましょう。中身が空か遺体だったら、そのまま戻りますが、もし非常脱出装置か何かで、生存者が乗っていたら収容しなければなりません」

「その時は後部の貨物ハッチを開ける。修理してもらった時に、ついでに不具合も全部見てくれたから、今度は大丈夫だ。あのメカニ



ツクを、うちの修理屋にスカウトすれば良かった」

「戦争が終わったら、誘いに行きますか」

「そうだな、それじゃ、あの球体の確認に行ってくれ」

ノーマルスーツの腰に、小型のバーニアと、通信回線を組み込んだ命綱をつけたスチュワードが、球体に近づく。

とりあえず全体を見回し、1つだけ付いているボタンを見つけたが、その他に外部から操作出来そうな部分は見当たらない。

もう一つの球体も確認しに行ってみたが、やはり同様のようである。

「押してみるしか、無いよなあ・・・」

スチュワードがボタンを押すと、ハッチが開き、中にパイロットスーツを着た女性が乗っていた。

意識は無いが、ボンベの呼吸反応を示すランプは青色、呼吸を示している。

「生存者確認！意識はありませんが呼吸しています！！」

スチュワードが機長に連絡し、女性を搬出する。

一旦シャトルに戻って女性をハッチ内に收容し、もう一つの球体に向かう。やはりもう一つからも、同様に女性が見つかり、シャトルに收容した。

金属の球体は、モバイルスーツの破損時の非常脱出装置だったのだが、シャトルの乗務員にはまず見る機会が無く、理解出来なかったのも無理は無い。

スチュワードがドクターコールを試みるが、乗客に医師は居ないようだった。

やむを得ず、スチュワードが救護室の1つしか無いベッドに2人を横たえ、それぞれに酸素マスクを付けさせる。シャトルはグラナダに向けて、再び発進した。今度は急ぐ必要が出たため、ハンスが全速力でグラナダを目指し始めた。

人工太陽に照らされたグラナダの街並みが、有視界でもはっきりとわかる範囲に近づいて来た。

アンマンでの暗殺を決行した男は、避難勧告が解除され、混乱の収まったりニアで、グレナダに向かった。

モビルスーツ受領担当者が死んだ事により、アナハイム・エレクトロニクスから地球連邦軍への引渡すスケジュールを、大幅に狂わせる事が出来る。

「さて、これからが本番だ。あの程度の仕事、俺が動くまでも無いだろう。上手くやってくれば良いがな」

本来ならば、アンマンはコロニーレーザーの直撃で街ごと消滅していた筈だったのだが、ガーゴイルがコロニーレーザーに近づいたと聞いて、男はアンマン狙撃は失敗すると踏み、暗殺を決行したのである。

グレナダからスイート・ウォーター行きの間ルートのシャトルで、ロード革命戦線本部を目指す。男はリクライニングシートを倒し、アイマスクをして、眠りについた。

定刻からかなり遅れて、キラ・ドーガに襲撃されたシャトルが、グラナダの「格安シャトル」もとい「闇ルート」のシャトル」専用の発着場へと到着した。

『もし通報すれば、グラナダの街が戦場になる。巻き込まれたいくなければ、大人しくしておく事だ』

先程と同じ、横柄な中年と思われる男の声が、インターホンを通して機長席に聞こえてきた。

「何だ？グラナダの占拠が目的ではないのか!？」

『大人しくしてさえして居れば、テロも戦争も起こらんよ。「必要なモノ」を取りに来るのに、天蓋を破壊せずにグラナダに入るには、他に方法が無いんでな。グラナダが地獄絵図になるか否かは、あんに掛かってるんだぜ、機長さん』

抑揚も表情も無い声が、相手の言葉がハツタリや冗談では無いという事を、機長に恐怖感として認識させた。クレーターに強化アクリルで蓋をした状態で酸素が保たれているグラナダで、戦争など起こされたら大変な事になる。

”連邦軍にバレた時は、グラナダの街ごと自害するつもりか。こい

つら、やはり正気じゃない・・・！”

青ざめながらも、まだ降りる事が出来ていない乗客の安全を確保する義務感が、機長に確認の言葉を言わせていた。

「黙っていれば、住民の安全は保障すると言っただな！？」

『そのとおりだ』

「・・・承知した」

いつの間にか、パイロットスーツから一般的な服装に着替えを済ませていたロード軍の兵士達も、自動小銃をゴルフバックに収め、何食わぬ顔で団体客を装い、シャトル乗り場から立ち去った。

その後、1時間ほど経った後、ガーゴイルはグラナダへ到着した。

メッシが、正規路線用旅客ターミナルに並ぶ、数機のシャトルの中に、見覚えのある垂直尾翼のマーキングを見つけ、声を出した。

「あのシャトルは・・・？」

あちらは民間機なので、軍艦であるガーゴイルが入る軍港からは少し離れた、市街地に近い区画に停泊している。マーキングの上に書かれた登録番号から、先日救助した定期旅客便のシャトルだと判断出来た。

「どつやら、無事だったらしいな」

メッシが安堵の表情を浮かべ、笑みを漏らした。

コロニーレーザーでの予定外の戦闘で、大幅に弾薬を消費したガーゴイルは、武器や弾薬関係の補給に追われる事になった。

相応の時間も必要になった為、そのついでに、先刻の戦闘時に暴走したエリオットの精密検査も行われる事になった。

本人は、異常は無いと言い張り、入院を拒絶したのだが、メッシが本部に掛け合い、辞令を出して入院を命令した。

部分的とはいえ、完全に記憶が飛んでいるとなると、さすがに放置する訳にもいかなかったのである。

エリオットは、港の近くの総合病院に入院する事になり、メッシとレオンが付き添って、入院手続きを終えた。

検査が始まった後、一般待合室の長椅子で、2人が溜め息をついた。

「エリオットが、あそこまでロサに対抗心を持っていたとはな」

レオンが意外そうな表情で呟いた。

エリオットは、普段から所属長であるケニーと動く事が公私共に多かった事と、レオンがアックス達と接する事が増えて、あまり気をかけてやる余裕が無くなり、レオンからは少し距離がある存在になっていた。

このため、レオンがエリオットの心境の変化に気付かなかったのも、無理は無かった。

エリオットにとってのロサは、自宅の倒壊で逃げる途中にガンダムに乗り、更にガーゴイルのパイロットになってしまったという、いわば「居る筈の無い人間」だった。

当然、ロサは父親の加減で軍の内情をある程度は知っているが、軍人としての教育は全くと違っていいほど受けていない。だから、本来なら上官であるメツシやレオン、マーク達とも、まるで身内のような接し方をしている。

それが、いきなりエースパイロットに奉りあげられ、拳句の果てにガーゴイルのサイド3への進路変更と、軍を動かす迄に発言力を強めているのだから、きちんと士官学校を出ている下士官のエリオットにしてみれば、面白くないのは当然と言えるだろう。

更に言えば、ロサと行動を共にするレオン隊や、元々ロサを知っていたメツシ、レイラ達と違い、公私共にロサと接する機会が少なかつたケニーの小隊のパイロット達は、ロサの事を、少なからず快くは思っていないかった。

彼らがロサより戦果を挙げるのを焦る気持ちも、落ち着いて考えれば、メツシやレオンにも分からない訳では無い。

「しかし、ロサの感覚を信じた方が、現実問題として上手くいくんだよな」

メツシも、ため息をついた。実際に奇襲からガーゴイルを守り、レオン達に当たらないよう砲撃合図をし、エリオットを窮地から救っているロサを、信じない訳にはいかない。



今回の一件で、ロサの感覚を信じた方が、より安全に作戦を遂行できる事は、パイロット達も感覚的に理解出来たようだ。

だが、エリオットは納得しなかった。このまま放っておけば、今後もこの状態は続く事になるだろう。そうならば、ガーゴイルの統率を取り続けるために、エリオットをここで降ろさなくてはならない。

「今回ばかりは、降ろす事も、覚悟しなければならないな・・・」

メッシが、また溜め息をつきながら呟く。

他のガーゴイルのパイロットと同様に活躍し、また同じ釜の飯を食った仲間である。出来るものなら、そのまま乗せ続けてやりたい。

連邦軍のエース艦のパイロットに抜擢される事は、軍の中でも滅多に無い栄誉。いわばエリートコースに乗ったも同然なのである。

いま降ろすという事は、エリオットの将来を奪うのも同然である。メッシにとっても、苦渋の決断と言えた。

だが、エリオットもまた、20歳の若者である。このまま乗せ続けて、また同じ事が起きたら、今度は命を落とすかもしれない。

彼は、ロサとは戦闘時も離れていることが多い。今回のように、いつでもフォローして貰えるとは限らないのだ。

メツシが、待合室の天井を見上げた時である。聞き覚えのある声に、メツシが辺りを見回した。

「先日は、お世話になりました。メツシ艦長、レオン少佐」

相手は、まだグラナダに到着したばかりなのか、操縦していた時のままのノーマルスーツの格好である。

「覚えておいでですか？先日助けて頂いた、シャトルの機長のハンズIIベルナルです」

相手がにこやかに握手を求めている。気付いたメツシとレオンも立ち上がり、笑顔で握手に応える。

「これはどうも。お元気そうで何よりです」

「このような所でお会い出来るとは、思いませんでした。どなたか乗組員の方が怪我でもされたのですか？」

「ええ。少し体調を崩した者がおりましてね。ハンス機長は、なぜこちらに？」

メッシの問いに、少し間をおいてメッシとレオンの顔を交互に見た後、ハンスは急に声を潜めた。

「実は、こちらに向かう途中に、救命信号を受信しましてね。怪我人を収容して、こちらへ運んできたのですが……それがどうも、ロード軍側のパイロットだったらしいのです。こちらに運んでから、病院の方に指摘されましたね。厄介な人間を運んでくれたと、顔をしかめられました」

ハンスが思わず肩をすくめる。

「人道的には正しいと思うんですがね。つくづく運が悪いですな」

メッシも同情するように言った。

「2人共、全身火傷を負っていて、何とか一命を取りとめはしたんですが、まだ意識は回復していないとか」

それを聞いたメッシとレオンが、顔を見合わせる。

「2人？全身火傷・・・？」

「何か思い当たる点でも？」

ハンスが怪訝そうに首を傾げ、メッシ達を見る。

「場所はどの辺りですか？」

「例の、我々の救助を断ったコロニーの辺りです。……ああ、あの爆発したような残骸は、もしかしたら、あのコロニーだったのかな？」

ハンスが思い出したように言う。

「・・・もしかして、その2人というのは、女性ですか？」

メッシが、引き吊った顔で、恐る恐る尋ねる。

「ええ。どうしてそれを？」

頷きながら、怪訝そうな顔でハンスが聞き返した。

「もしかして、年齢は1人が20歳位で、もう1人は10代半ばの女の子では？」

メッシが答える前に、今度はレオンが尋ねた。

「ご存知の方なんですか？」

ハンスの顔が、更に怪訝そうになる。彼にしてみれば、まるでエスパールか何かと話をしているようだ。

「長いこと戦争に関わっていると、敵の顔見知りも増えるものだから……。もちろん、意識も無いような怪我人を撃ちに行ったりはしませんがね。さすがに、それでは只の人殺しですから。それに、一般兵を1人や2人減らした所で、戦争は終わりませんし」

レオンが苦笑交じりに答えたのを聞いて、ハンスは元の笑みに戻った。

「お二人なら、そのような事は無いと思ったので、お話ししたので

すよ。思ったとおりで、安心しました」

「そういえば、まだお仕事では？」

思い出したように言うメッシに、ハンスが頷いた。

「これから、職場で状況報告を行わなくてはなりません。そちらで修理して頂いたお陰で、自社のメンテナンスよりも安心して飛べるようになりました。メカニックの方にも宜しくお伝え下さい。戦争が終わったら、うちに来て頂けると有難い。良い腕をしておられます」

ハンスの満足そうな笑顔に、メッシもつられて笑みを見せた。

「戻ったら伝えておきます」

「それでは、仕事に戻らなくてはなりませんので、これで失礼致します」

笑みを浮かべたまま、ハンスが挨拶し、頭を下げた。メッシ達も、穏やかな声で返した。

「ご無事で、ハンス機長」

「ご無事で、メッシ艦長、レオン少佐」

ハンスが病院の入口を出た後、メッシとレオンは真剣な表情になり、再び顔を見合わせた。

「恐らく、間違いないな」

メッシの言葉に、レオンも声を潜めて頷く。

「ソフィアと、ロサの言っていたモバイルアーマーの女の子……だな」

「ロサとレイラには、言わない方が良いな」

「ああ」

同じ歳くらいの女の子、という方はともかく、いまの段階でソフィアにロサを会わせたら、何をしてくすか分からない、というのが、2人の共通の意見だった。それに、レイラの耳に入って、いつレイラの口からロサに漏れるとも限らない。

これまでの様子から、ロサは既にソフィアを完全に敵視していて、自分の肉親という概念は、完全に捨てているように見える。

その上、初めてワルザのパイロットがソフィアだと判明した時、ロサは確かに「今更、何が家族だ」と口にしたのを、レオンははっきりと聞いている。

ここでもし、ソフィアが意識不明の重体だと知ったら、間違いなくロサは止めを刺しに来るだろう。

例えそれが人殺しだと分かっているとしても、「家族が殺した人の分まで自分が償う」と言ったロサなら、恐らく行動に出る。

「仮に会わせるとしても、この戦争が終わってからだ」

メツシの言葉に、レオンも頷いた。

「連邦軍の方ですか？お待たせ致しました。主治医を担当する、脳神経外科のヤン・ハッサンです」

白衣を着た長身の医師が、メツシ達を見つけ、近づいて来た。若く見えるが、声は意外に落ち着いている。



「艦長のメツシ・ジュノーです。いかがですか、うちの者の容態は」

「本来なら1週間ほど頂きたいところですが、状況が状況ですから、3日ほどで何とか必要な検査結果を纏めます。少しお時間を下さい」

「お手数をお掛けします」

「恐らく画像検査では異常は出ないでしょうから、脳機能の検査の結果次第ですね。言語野などの詳細な反応も検査しておきます。状況をお聞きする限り、何らかの意識障害を起こした事は、間違い無いと思いますので」

「分かりました。結果が分かり次第、ご連絡をお願いします」

エリオットの要検査入院の診断書を受け取ったメツシとレオンは、そのままガーゴイルに戻り、会議室で、クルー達に状況を話し始めた。

整備班や補給担当は、まだ物資の搬入に追われていた。

### 32・会議室にて（前書き）

エリオットに関する状況報告と、サイド3付近からの離脱時機を決定するため、各担当セクションの役職者と、ロサ達パイロットが、会議室に集まっていた。

議論が一進一退してしまい、なかなか話が進まない中、ロサがメツシの決断を促すために、無い知恵を絞る。

### 32・会議室にて

補給艦が使えなくなった場合、ここで補給は最後になるからと、弾薬補給と整備に忙しいマークだけは、メッシに決定権を委任して作業を進めているものの、それ以外の役職者と、パイロット全員が、会議室に集まっていた。

「3日の検査入院か……。それだけで戻れば良いんだがな」

普段は楽観的なケニーも、心配そうな声で呟く。レオンと体格は似ていて敵ついのだが、座っている上に、柔らかい金髪と丸みの強い顔つきが、心配げな表情に、更に拍車をかけているように見えた。

本来は、エリオットの所属する小隊の長はケニーだが、ガーゴイルの総隊長であるレオンに付き添いを任せていたので、話はメッシから聞く事しか出来なかった。

「その3日の間に、奴らが攻めて来なければいいがな……。まあ、コロニーは破壊したんだから、他に拠点が無い限り、暫くは動けないと思うんだが……」

ロサの言葉も、憶測でしかないため、いつもより歯切れが悪い。

「ワルザと例のモビルアーマーが居なければ、暫くは大丈夫だと思  
うけど・・・」

「月面都市に攻めては来ないだろ、スペースノイドの心象が悪くな  
るだけだから」

口々に出てくるのは、全てロード軍が攻めて来ないであろうという  
「憶測」である。攻められないという「確証」を持っている者は、  
誰も居ない。

「しかし、あれだけの数のモビルスーツを、よく收容出来てたよな。  
おまけに、戦艦が何隻居た？どう考えても、コロニーレーザーの居  
住区だけで、あれ程の規模の軍隊を收容して、それを不自由無い暮  
らしをさせられるとは思えないが・・・」

ロサの言葉に、メツシが反論するような口調で言った。

「しかし、他に拠点のコロニーが存在するという事になれば、調べるに  
は潜入するしかない。そうだったら・・・」

これには、ロサも黙り込んだ。まだコロニーへの潜入調査には、反  
対しているからである。

密通の方法は分かったが、未だに現場を抑えられないままである。このままでは、潜入調査も止む無しとなる。

だが、下手をすれば、またコロニーの中で、民間人を巻き込んだ戦闘をする事になりかねない。自分の母を亡くし、フローラ達の孤児院を破壊した行為を、「戦争に勝つ為に」と言い訳を付けて自らが行う事だけは、絶対にしたくない。

ふと、リリアの言葉が、ロサの頭をよぎる。

”私は、戦争をしている・・・か。確かに、必ず犠牲者を出してしまふという事自体は、俺も否定出来ない。でも、コロニーレーザーで、戦う事の出来ない人間まで巻き込むなんて、絶対間違ってるよ、リリア。俺達だって、そうやって家族が巻き込まれる悲しみは、知っているじゃないか・・・”

（私の手で戦争を終わらせたいと思ったのは・・・間違っていたのかな・・・？）

”戦争を早く終わらせたいという気持ち自体は、間違っていないかったと思う。それは俺達連邦軍だって少しも変わらないのに、皮肉だよな・・・”

（私、もっと早くロサに会いたかったわ・・・そうすれば、私達の

手で、戦争を終わらせられたのにね・・・)

”君の分まで、俺が頑張るよ。だから、安心してくれ”

(今まで人を傷つけた、罰が当たったんだろうね、私・・・)

”そんな事は無い。君が正しいと思って行動した結果が、偶然こうなっただけだ。罰が当たったなんて思う必要は無いよ。後は俺に任せて”

(・・・はい)

ロサの頭の中で、リリアとの会話が成立していた。

何故か、ロサの中で違和感は全く無かった。幻聴なのか、或いは他の力なのかは、ロサ自身にも判らなかった。

「一か八かの賭けになるが、このままロンデニオンに向かった方が、良いのかもしれない」

ロサが迷いつつも、声を出した。メツシが、疑問を隠しきれない表情でロサを見た。

「これ以上、サイド3を気にしないという事か？」

ロサがメツシを見て頷く。

「今の状況で、サイド3にロード軍の拠点が在ると仮定していたら、ガーゴイルは身動きがとれない。それに、ワルザとブロザムは落としたんだから、今のガーゴイルの戦力なら、挟み撃ちに遭ったとしても、被害は知れているだろう」

「ロード本人以外に、厄介な戦力は、もう無いと思うのか？」

メツシの問いに、本音を言えば、ロサは自信を持って頷く事はまだ出来ない。だが、頷いて見せなければ、話が先に進まないと判断したロサは、出来るだけそれを悟られないように、頷いた。

「そう思わなければ、今の状況では、俺達はサイド3の近くから動けない。このままでは、いつまで経ってもスイート・ウオーターを攻める事が出来ない」

「しかし・・・」

反論の材料が見つからず、困惑するメツシの言葉を遮り、ロサが話し始める。

「ロード革命戦線は、ジオンじゃない。貧民層を手懐けるだけではない。ジオン公国みたいに、国家として成立させるには、国という土地、それを支える臣民と産業、そして、それらを支える金が要る。だが、ロード革命戦線は、スウィート・ウォーターという土地と臣民以外に、何も持っていない」

メツシを頷かせる為に、ロサがロード軍を客観的な視点で分析し始める。

「爆発したコロニーも、恐らく残骸を修復して確保したものの筈だ。サイド3で残骸が在ったのは「ソーラ・レイ」だけ。サイド3は金があるから、奴等の少ない資金で住民を手懐けて乗っ取る事は、不可能に近い。奴等になびく貧民層なんて殆ど居ないからね。サイド4はフロンティアになってから奴等が入る隙間が無いし、サイド5はルウム戦役で残骸も残らない程に破壊されたから、拠点には成り得ない」

メツシや他の者も、少しずつ頷き始める。それを見て、ロサが話を続ける。

「もうすぐダニエルさんが、連邦とコロニーの切り離しを正式に発



表する。それが終われば、こちらに傾くスペースノイドだって、必ず出てくる筈だ。そうなれば、反乱分子の動きも、各コロニー単位で抑えられる範囲で済むだろう。下手に俺達が動くより、その方が反乱分子を刺激せずに済むんじゃないかと思うんだ」

一旦、ロサが言葉を切り、含みを持たせた言い回しで話を締めた。

「ただし、ダニエルさんが正式発表を無事に済ませられれば、の話だけだね」

真剣な顔で言うロサに、メッシが尋ねる。

「それを、奴らが阻止したら・・・？」

「それを防ぐのが、俺達の役目じゃないか。俺達は今、ダニエルさんの部下なんだぜ？艦長」

「なら、ロンデニオンよりも、ニューヨークに向かう方が先なんじゃないのか？」

レオンが口を挟んだ。当然、出てくるべき疑問である。ロサも即答出来ず、語尾を濁した。

「そういえば、確かにそうだな」

「発表はいつだ？」

「正式には、俺もまだ聞いていない」

そんなロサとレオンのやりとりを見ながら、グールがボソツと呟いた。

「でも、それなら、奴らはアンマンよりも、ニューヨークを狙った方が、効果は高かったんじゃないのかな・・・？」

「なぜ、そう思つんだ？」

ロサが興味を持ち、グールの顔を見た。グールが視線を合わせ、話を続ける。

「恐らく、奴らはアナハイムのモバイルスーツ開発技術を獲得する事が狙いだっただろう？それで、アナハイムにとっては無害なアンマンにコロニーレーザーを向けて、アナハイムの無血開城を狙ったんだ」

「それは俺も同じ意見だ」

「それなら、コロニーレーザーをニューヨークに向けて、連邦軍本部の無血開城を狙った方が、早く戦争が終わるんじゃないかな？俺にはそう思える」

「グールが、」そう思わないか？」と同意を求める様な表情で、ロサを見た。

「あの位置からだど、月越しにしか地球を狙えない上に、月を避けるのにかかるの距離を移送する必要がある。コロニーみたいな質量の大きい物が、ラクランジエポイントを外れたら、姿勢を維持出来なくなつて、照準が定まらない筈だ。俺なら、そんなギャンプルをせずに、もっと狙いやすい場所から、出来るだけ地球とレーザーの接点がニューヨークだけになるように、ピンポイントで狙う」

ロサの言葉を理解出来ない表情で、グールが首を傾げる。

「何故、そんな面倒な狙い方をする必要があるんだ？」

「地球そのものを破壊するようなやり方では、いくらスペースノイドといえど、人道的な面で不快だろう。そうなればロードが批判を受けるのは、目に見えている。だが、ニューヨークだけをピンポイ

ントで破壊するなら、いくら一般市民が巻き込まれても、恐らく連邦に不満のある連中は、拍手喝采する筈だ」

そこまで言って、ロサがふと考えた。

” ちょっと待てよ？そのピンポイントでニューヨークを狙えるコロニーの位置って……”

「艦長、スウィート・ウォーターと地球の位置関係を、ディスプレイに表示してくれないか？」

急に思い出したようにロサが言った。

「どつした？」

「もし、スウィート・ウォーターをコロニーレーザーに改造して、ニューヨークを狙うとしたら、それほど手間はかからないし、奴らにしてみれば、スペースノイドへの宣伝効果は抜群の筈じゃないか？」

艦の規模にしては小さい会議室の、上座の背後に配置されたディスプレイパネルに、地球と月、サイド1の位置が写し出される。サイド1の中の、スウィート・ウォーターが赤色で表示される。

「スウィート・ウォーターを改造か、考えもしなかったが・・・確かに、地球の自転にタイミングを合わせれば、地表を削り取るようなピンポイント掃射は可能だな」

メツシが画面を見ながら頷く。ロサがそれを聞き、納得した表情で呟いた。

「なるほど・・・サイド3からアンマンを狙ったのは、アナハイムの無血開城だけでなく、ピンポイント掃射の予行演習を兼ねてた訳か」

「しかし、スウィート・ウォーターには、まだ住民が居るだろう？連邦政府でも立ち退きに応じなかった連中を、どうやって立ち退かせるんだ？」

レオンが、当然の疑問を口にした。そもそも、今回の戦争の発端は、そこにある。

それに対し、ロサが真剣な顔で答える。

「今までロード革命戦線に施しを受けてた連中が、立ち退きを求められて、断れると思う？それに、スウィート・ウォーターは、元々

がコロニーをくつつけて造られた急造品だ。もうこれ以上はもちま  
せんから危険ですと言われたら、俺達だって納得しないか？」

「確かに」

その場に居た全員が頷いた。

「だが、今の奴らに、そんな財力があるかな？」

ケニーが当然の疑問を口にした。ロサが、何かを納得したように、  
そういう事かと呟いて、ケニーを見た。

「だから、今まで新型が少なかったんじゃないか？ワルザやグリ  
ラス、ベリックもそうなんだが、あれらのモビルスーツは、CG  
からマークさんに分析してもらったら、昔のキュベレイやリック・  
ディアスの躯体の設計を流用して、部分的に改良した可能性が高い  
らしいんだ」

ロサの言葉に、珍しくレオンの表情が曇った。

「キュベレイやディアスって、グリプス戦役の頃の？もう20年も  
前の話だぞ？」

レオンの脳裏に、連邦軍に入隊した頃の、悲劇の記憶が蘇る。表情は隠したつもりだったが、ロサには気付かれたらしい。

一瞬だけ申し訳無さそうな表情を見せ、ロサがほんの少しだけ手を上げて、拝むような仕草を見せられた。

”ごめん、レオンさん”

以前レイラから、レオンの妻と娘の事を聞いたのを思いだし、ロサの声がやや小さくなった。

「グールが落とした新型は、恐らく独自に造ったんだろが、知つての通り、パイロットがコントロールしきれないような失敗作だ」

あれならギャプランの方がマシ・・・と言いかけて、レオンの心情を思い、慌てて言葉を飲み込んでから、ロサが話を続けた。

「コロニーレーザーに金をつぎ込んで、モビルスーツに金を回せなかったとしたら、完全な新設計のモビルスーツが無いのも、納得がいく。俺がジェガンで、腕が一本無いとはいえ、グリアラスといい勝負が出来たのも、きっと基本設計がジェガンより古いからなんだよ」

”その基本設計が古いモビルスーツに、いいように翻弄されてた俺達って一体……”

レオンとメツシが無言で顔を見合わせる。

「どっちへ先に行くべきなんだろう？」

レイラが難しい顔で呟いた。

「ロード軍にしてみれば、ニューヨークでダニエル総司令を暗殺する方が、手っ取り早いけど……」

「俺達が今から本部に向かったとしても、ニューヨークに居る間にコロニーレーザーを発射されたら、直撃を防ぐのは不可能だ。重力があるからニューヨークにコロニーレーザーは置けないし、地球で運用出来るような同等のエネルギー砲は、存在していない」

ロサが答えたところへ、マークが資材搬入の手を止めて、会議室に入ってきた。

「街が随分騒がしいが、何かあったのか？」



「いや、特に何も起こっていない筈だが・・・？」

メッシがいぶかしげな顔をする。その後、ロサが思い出したように呟いた。

「ダニエルさんが、もう正式に発表するんじゃないかな・・・」

「発表？何を？」

まだマークは話を聞いていないので、怪訝そうな顔をした。

「連邦政府が、全コロニーを独立採算にするって話さ」

「はあ？そんな事が今更出来ると・・・」

マークが言いかけるのを、ロサが遮った。

「俺はその確約を得たから、今まで戦争してきたんだ」

「本気で出来るとでも？」

マークが、正気かよと言いたげな表情で言ったが、ロサは確信に満ちた顔で言った。

「ダニエルさんなら、出来るさ。俺はそう信じてる」

ロサが笑みを浮かべ、真っ直ぐにマークを見た。

「まあ、それで戦争が終わるなら、俺もそう願いたいかな」

マークはまだ半信半疑のようだが、諦めたように言った。

「じゃあ、あの騒がしさは一体・・・？」

「発表を聞いて、みんな驚いてるからじゃないか？放送の電波って、受信出来ないの？」

「出来る。暫く使ってないから、忘れてた」

思い出したようにマークが言い、ディスプレイの操作盤のスイッチを幾つか触ると、ディスプレイにダニエルの顔が映し出された。

テロップに、「連邦政府、宇宙を分離へ」の文字が大きく表示されている。

先程、地球連邦政府と地球連邦軍の最高責任者であるダニエル・キリス総司令官が、地球連邦政府から全コロニーの管理権限を、コロニー毎に委ね、事実上の独立採算制に移行する法案が可決されたと発表し、……

「これでニューヨーク行きは取り消しだな。せつかく地球に降りられると思ったのに。残念」

口ではそう言っても、ロサの顔は満面の笑みがこぼれている。

「だが、ニューヨークを潰されれば、こちらの混乱は免れない。今のニューヨークは、連邦軍にとって唯一の頭脳だからな」

真剣な表情で言うメッシの言葉に、ロサも笑みを消し、真面目な表情になった。

「わかってる。一刻も早く、ロード革命戦線の本部を叩く必要がある」

「さっきの कोरोニーレーザーの話が、ロサの言つとおり現実に実行されるとしたら・・・」

「サイドーに急がないとな」

ロサとメツシが、頷き合った。

「しかし、エリオットはどうするんだ？今のままじゃ動けないだろう？」

マークがメツシの顔を見た。間を置かずにメツシが頷く。

「検査の結果が出てから、本部に判断を仰ぐ。辞令を出して入院させたから、うちだけじゃ判断出来ない」

メツシが溜め息をついたのを見て、マークも”やれやれ”と言いたげに頭を掻いた。

「あいつも困ったもんだな」

「無事に戻れる事を祈ってるがな・・・」

「サラマンドーみたいに、いくら訓練しても頭打ちの連中だって居るんだ。あれだけの騒ぎを起こした張本人なんだから、戻ってきてくれなきゃ困るぜ」

ロサがメツシを見て、憎まれ口を叩いた。その後、鼻の前で両手を組み、机の縁を睨む。

”本当は、今回の一連の騒動の発端になったエリオットを許せそうには無いがな……。だが、ガーゴイルが円滑に動くには、やはり今までどおりのメンバーでいる事が望ましいんだよな。レオンさんやレイラ姉ちゃん達も、その方が動きやすいに決まってる”

ロサ自身も、その事は十分に分かっている。だが、表情に出す事をどうしても抑え込む事は、出来なかった。

「……そうだな」

ロサの表情を見たメツシは、言葉が見つからず、ただ頷く事しか出来なかった。

”俺がロサをガンダムに乗せなければ、ロサはあんな表情をする事は、無かったのかも知れない”

メッシがふと思った直後、ロサが急に明るい声を出した。ロサとメッシの表情を見て、会議室全体が辛気臭い雰囲気になってしまった事に、気付いたからである。

「艦長、現時点で出来る議論は、これで終わりじゃないか？」

ロサがメッシを促した。はっと我に返り、メッシが頷く。

「よし、解散しよう。後は出港まで、待機任務（緊急時に備え担当機体に一定時間乗り込んでおく任務）以外は特に何も無いから、適当に外出して貰っても構わない」

メッシの言葉で、それぞれ思い思いに散っていく。

パイロットでは最後にロサが会議室を出た。すると、フローラが怪訝そうな顔をして、入口の横に居た。

「さっき、誰と話してたの？」

フローラの声に、若干威圧感がある。だが、その理由が分からず、ロサは何事も無かったように、小さい子供をあやすように微笑んだ。

「会議室に居たんだから、誰かと話す事くらい……」

「女の子と話してなかった？」

フローラの声が、威圧感を越えて怒気を含み始める。少し間をおいて、ロサは、頭の中でリリアとやり取りした事を思い出した。

「あれは……」

目が泳ぎ始めるロサを、射抜くような視線でフローラが睨む。

「何を話してたの？」

「……俺の言うこと、信じてくれる？」

「内容によるけど」

恐る恐る尋ねるロサから、フローラがピッと目を逸らす。

”それって、凄く棘のある言い回しだよな？フローラ・・・？”

ロサが顔を引きつらせながら、一旦フローラを自販機コーナーに促し、ココアを2つ用意した後、自室へと連れていった。

「ソファーじゃ出来ない話なの？」

完全にご機嫌斜めなフローラ言葉に、ロサは真剣な表情で頷いた。

「どうしても、君以外には聞かれたく無いんだ」

フローラは、不機嫌な顔のまま首を傾げ、ロサの部屋のデスクチェアに腰かけた。

ロサは、フローラの手元にココアを置き、ベッドに腰かけて、2人が向かい合った。

「さっきの話は、コロニーレーザーで何十万人もの無抵抗の人を巻き込むなんて、間違いだっていう話だったんだ」

「本当にそうなの？」



まだフローラの声には、棘がある。

だが今回は、ロサは全てを正直に言う事にした。安心させる為の嘘を言う必要は無いと判断したからである。

「遊覧船の入り口で見かけた子・・・覚えてる？」

ロサの言葉に、フローラが頷く。

「私達と似たような歳の女の子だよね？」

「あの子は、ロード軍のパイロットだったんだ」

目を見開いて絶句するフローラの表情を見ながら、ロサが話を続ける。

「あの時は、本当に俺も知らなかったんだ。偶然、戦闘になった時の会話で気が付いた。自分の手で、戦争を終わらせる事が正しいと信じて、ロード軍に参加したと言っていた。彼女も、実は俺達と同じように、軍に拾われた戦災孤児だったんだ」

フローラは言葉が見つからず、次第に俯いていく。その様子を慈しむような目で見ながら、ロサが話を続けた。

「でも、戦えない民間人を何十万人も巻き込むやり方は、絶対に間違ってる。だから、俺はあの子を説得しようと思った。フローラと同じような立場の女の子を、俺の手で死なせたくは無かったからね」

「・・・その後、どうなったの？」

顔を上げられなくなったフローラが、ロサの顔を見ないまま、続きを促した。

「コロニーレーザーは、あの子が発射を阻止してくれた。自分の命と引き換えにね。あの子が俺を庇ってくれなければ、俺が自爆してコロニーレーザーを止めていた筈だった」

フローラの顔が青ざめ、涙目になっていく。

「命と・・・引き換えって・・・」

フローラは、ロサの為にそこまで出来るリアの行動力を羨ましいと思う自分と、好意を持つライバルが居なくなったという安心感を

感じる自分、更に人が死んでいるのに安心した自分を不謹慎だと蔑む自分が同居した、思春期の女の子特有の複雑な気分に襲われた。

俯いたままのフローラの表情を、ロサは読み取る事が出来ず、話を続けた。

「その子は、自分が間違っていたのかと、俺に尋ねた。俺は、コロニーレーザーで民間人を巻き込むやり方は間違っているが、自分が正しいと思って動いた結果が、たまたまこうなったただけと言った。自分の手で戦争を終わらせたいという気持ちは、間違っではないなかつたと、そう言ったんだ」

フローラが漸く顔を上げた。その拍子に、両目が涙がこぼれた。

「・・・ロサは、自分が連邦軍で戦う事が、正しいと思う？」

ロサは、肯定も否定もしないまま、話し始めた。

「あの時、同じ事をあの子にも聞かれた。俺はダニエルさん・・・連邦の総司令官が、きつと上手くやってくれと信じてる。ただ、俺が戦争とは言え、多くの人を殺めてしまった事は、変えようの無い事実だ。だから正直なところ、俺自身が幸せになる権利は、無いと思う」

少しココアを口にして、俯いて考えた後、ロサが続ける。

「でも、戦争が終われば、他の人は幸せになれると思う。今の俺にとっては、戦争を俺の手で終わらせる事が、俺や俺の家族が殺めてきた人たちへの償いなんだ。正しいとか間違ってるとか、そういう言葉で表現出来る問題では無いと思う」

ロサが話し終わると、フローラは悲しげな目をして俯いたまま、首を横に振った。

「・・・私には、まだ分からない。そんな言い方をされても」

「分からない方が、良いのかも知れない。こんな気持ちは」

複雑な表情のフローラを見て、ロサが呟いた後、ふと気付いた事を尋ねた。

「そう言えば、部屋の外に居たのに、どうして俺が話してるって判ったの？」

ロサの言葉に、フローラは手の甲で涙を拭いながら、目線だけを天井に向けて少し考えていたが、結論は出なかつたらしく、首を傾げ

た。

「何となく、そういう風に感じたから・・・かな。そう言えば、変ね？なんでかな？」

そう言っただけでフローラが笑った。自分でも、よく分かっていないが、どうやら嫉妬心が先だって、体が自然に動いたという事のようにだった。

その表情につられて、ロサも笑みを見せたつもりだったが、その顔は、フローラいわく、かなり引き攣っていたという。それを見たフローラが、また浮気を疑い出した為にエンドレストークになってしまい、数十分間に亘って、問答無用でロサが怒られ続けたいらしい。

その後ロサは、絶対に浮気をしない事を、固く心に誓っていた。

### 33・病室（前書き）

フローラとの会話から、リリアの気配を感じ取ったロサ。

リリアの事や、スイート・ウォーターの情報を集めるために、街へと歩き出した。

### 33・病室

フローラの話聞き、ある疑問を持ったロサは、フローラが食事の準備の為に部屋を出た後、写真大くらいの小さなメモ用紙に、リアの似顔絵を描き始めた。

裏社会で組織の抗争に首を突っ込み、顔写真を撮影するのにも一苦労するような、殺し屋の抹殺まで敢行する必要があったロサは、似顔絵を描いてターゲットを特定する事も多かった。このため、似顔絵だけは、そこそこの絵心がある。ちなみに、「みてみん」サイトの筆者のラフより、ロサの絵は数十倍綺麗である。

”さっきのやり取りに、フローラが気付いたと言う事は・・・君は生きていて、この近くに居るのか？リア・・・”

月面都市の真ん中では、ジャージはかえって目立つたため、例のデニムの上下に着替えた後、リアの似顔絵をポケットに入れた。

子供達は3時のおやつ時間で、メルサの部屋に居る。今なら、ロサが遊び相手をする必要も無い。

ロサはブリッジに上がり、メッシに外出の許可を取りに向かった。

リリアの件を調べるのが本来の目的のつもりだが、スウィート・ウォーターの情報も敵に直接漏れてくるとは考えにくいので、シャインリバーの縄張りとして、以前抗争に巻き込まれて幾つか組織を制圧した事があるグラナダの裏社会の両者に連絡を取り、何か情報を得られないかとロサは考えたのである。

無論、リリアの事を悟られないよう注意しながら、メッシに切り出す。

「スウィート・ウォーターの कोरोンレーザーの件、何か情報が無いか、調べて来るよ」

「わかった。お前に言う必要も無いだろうが、一応、気を付けてな」

気の無いメッシの返事に、ロサが苦笑して、悪態を突く。

「一応って何だよ、もうちょっと心配してくれても良いんじゃないの？」

「お前を心配しなきゃならないって、どんな化け物が敵なんだよ？」

「俺は化け物扱いかよ」



肩をすくめたロサが、真面目な顔に戻った。

「テキサスの時みたいに、フローラ達にも外出許可を出してるのか？」

「グラナダは、あまり治安の良い街とは言えないから、外出は許可していない」

笑いを消して首を横に振ったメツシの顔を見て、納得した表情で頷いた。

「そうか」

「とりあえず、戻ったら情報の有無に関わらず俺に報告してくれ。場合によっては、また本部で会議をしなければならぬからな」

「わかった。すぐ戻るよ」

ブリッジを出るロサの背中を見て、メツシはソフィアやリアの事がロサの耳に入らない事を祈っていた。

フローラ達の目に付かないように、補給物資の搬入口から、ロサはグラナダの街へ向かって歩き出した。

軍港と一般貨物港からの道が合流し、大型トラックが頻繁に行き交う、如何にも港といった風情の倉庫街の傍らを歩きながら、ロサは考え事をしていた。

ロサは、自分がニュータイプとは思っていない。

少し離れた場所の殺気や気配を感じ取る事は出来るが、それは喧嘩や格闘技など、生身で戦う人間なら、それが出来なくては生きていけない。

まして、ロサのように、組織同士の抗争に巻き込まれて、常に遠距離からライフルで狙われるような者は、尚更である。だから、ロサのような戦いに明け暮れた人間にとっては、それはごく自然な事である。

むしろ、フローラが持っている不思議な力の方が、よほど話に聞いているニュータイプに近いのではないかと思う。

「よく、女の第6感と言うのが、さっきのは、そういうのとは違うだろう……」

女性のほうが勘が鋭いというのは、現実にもよく有る事である。

だがそれは、脳幹が太い女性の方が、目で見て物事を認識する迄の時間が男性より速いからであり、目の前に居る相手を、観察する事が出来る状況下で、初めてその能力が活きるものである。

先程の会話は、完全にロサの頭の中で行われたものであり、ロサ自身は声を出してはいない。現に、会議室に居た者が、誰一人、やりとりを聞いていない。

いわゆる勘の良し悪しで、頭の中で考えた事を探るなど、常識で考えられない話である。

ちなみに、後から思い出して気付く、という事はよく有るので、男性は全く観察眼が無い、という訳では無い。

結局、結論は出ないまま歩き続けて、市街地に出たロサは、公衆電話を探し始める。

”まあ、いいか。別に浮気してる訳でもないし……待てよ？よく考

えたら、そもそもフローラに浮気って言われる筋合いは、無いんじゃないのか？ そうだ、俺達はまだ、恋人同士でも何でも無いじゃないか……”

開き直って一度は自分に言い聞かせたが、フローラの前で果たしてそう言えるかと言われたら、恐くて言えないチキンな自分にロサは苦笑した。

先程フローラにこっぴどく怒られたのが、よほど堪えたらしい。よく考えれば、理不尽以外の以外の何者でもないのだが、フローラに對してだけは、何故か尻に敷かれる方がしっくり来ると感じる事が多い。

”つまんねえ事ばかり考えてないで、早く電話を見つけないと……”

とりあえず大通りを歩き回り公衆電話を探すが、オフィスビルばかりで建物に勝手に入る訳にもいかず、ロサが遠慮なく使えそうな電話が見つからない。

広い公園を見つけて入ってみたが、やはり公衆電話は見当たらなかった。

「いくら携帯が普及したからって言っても、大地震でも起こったら

連絡手段が無えじゃん・・・そつか、月で地震なんか起きないか」

一人で納得して溜め息をつき、何気無く天を見上げる。

「ん？あの建物・・・病院？」

公園の周囲を囲む林の向こう、少し距離がある場所に、10階建ての赤十字が付いた病院の建物が見えた。オフィスビルは15階建てが大半だったから、市街地では見えなかったのである。

ロサは、待合室の傍らに個室の電話を見つけ、そこからシャインリバーの情報屋と連絡を取った。いつも通り、必要最小限の会話で電話を終えた後、待合室の前を通った時だった。

前を横切った、白衣を着た30代位の2人の男性医師達の、何気ない会話で、ロサに聞こえた。

「連邦軍と革命軍が、同時に入院して来るなんてなあ・・・」

「全く、さつさと退院して貰わないと、何が起こるか分かったモンじゃないよな・・・」

それを聞いたロサの口から、自然と言葉がこぼれた。

「革命軍……？」

その言葉が、どうしても気になったロサは、医師達に声を掛けてみた。

「この数日の間に、俺と同じ歳くらいの女の子が、こちらの病院へ怪我をして運ばれたと聞いて来たのですが、ご存知ありませんか？」

相手に軍人である事を悟られないよう、年齢相応の笑顔を浮かべて尋ねたロサを、いぶかしげな目で見た後、2人の医師は顔を見合わせて、”しょうがないから話を聞くか”という表情で、ロサに尋ねた。

「あなたは？」

「孤児院の友達が怪我をしたと、連絡を受けて来ました。入院先がこちらだと聞いたもので」

2人の医師が、顔を見合わせた。思い当たる年齢の患者は、1人しか居ない。”もしかして、あの患者？”という表情を浮かべた後、1人がロサの顔を見て尋ねた。

「身分証はお持ちですか？」

「戦災孤児ですから、身分証はありません。名前を証明出来るものも、預金通帳しか……」

そう言って、ロサは自宅の倒壊跡で見つけた、自分の名義の預金通帳を見せた。

ロサがマフィアに関わる前に、ハートレイがお年玉や小遣いを管理させる為に作ったものだから、それらを貰っていた頃の、ささやかな金額が並んでいる。

事実、ロサは正式に軍から辞令を受けていないし学生でも無いので、身分証明書は持っていない。地球を出た時のパスポートも、連邦政府発行のものだから、ここで出せばトラブルの元になるので、出す訳にもいかない。

銃も持っておらず、ロサの雰囲気からも、患者を襲いに来た訳では無いと感じた医師が、溜め息をついて話し始めた。

「……意識不明の重体で、本来は面会など出来ない状態なんです  
が」

「本人かどうか、確認するだけでも良いんです。お願いします・・・」

ロサは、芝居ではなく本心で頭を下げた。

会ったところで、自分が何かをしてやれる訳では無い。それは分かり切った事なのだが、何故かロサは、どうしてもリリアなのか別人なのか、自分の目で確かめたかった。

そして、何故、自分がそうしたいと思ったのかは、ロサ自身にも理由は分からなかった。

「わかりました。院長の許可が必要ですので、院長室までご同行下さい」

真剣なロサの表情に、諦めたような口調で医師の1人が言った後、ロサは院長室に通された。

10帖程の、病院の規模の割に狭い部屋だが、濃い茶色の壁に似た色の重厚な机、黒い革のソファが、白い壁ばかりの病院の中では特別な部屋である事を、無言で主張していた。



身長170cm程の中肉中背、短い白髪に銀縁の眼鏡を掛けた、少しだけ細長い顔に、細い瞳に優しい光を湛えた、穏やかな雰囲気のある院長が、椅子を勧めた後、ロサと向かい合った。

ロサは、案内してくれた医師達に話したのと同じ事を、院長に話した。

話し終えた後で、リアの似顔絵を描いた事を思い出し、ロサはポケットから取り出して、院長に見せた。

それを一瞥した院長は、やりきれない表情で目を閉じ、似顔絵の人物に非常に似ている事を認め、ロサに伝えた。その上で、責める様な口調で、ロサに言った。

「この患者さんは、恐らくロード軍のパイロットと思われる。なぜ、彼女が戦争に出る前に、止めてあげなかったのですか」

そういった後、院長は手にしていた似顔絵を机に置き、大きくため息をついて、ロサの顔を見た。リアやロサのような年齢で、今回のような経験をするには、あまりに若すぎると感じたのだろう。

「彼女は、生まれてすぐに、乗っていたシャトルが故障して戦場を漂流していた所を、軍に救われたと言っていました。連邦軍に反感

を持つていたという事は、彼女を救った軍というのは、恐らく反連邦政府軍。そして、俺達が生まれてすぐの反政府軍ですから、恐らく第2次ネオ・ジオン戦争のジオン軍だと思います」

ロサが悲しげな目で俯いたまま、静かな口調で話し出した。

「それから連邦政府は、墮落してはスペースノイドから責められ、武力と権力でそれを抑圧し続けた。それが原因で、幾度と無く戦争が起こった」

沈んだままの表情で淡々と話すロサの顔を、院長もやりきれない表情のまま、じっと見つめている。

「そして、今も尚、スペースノイドを蔑んだ連邦政府が原因で、戦争が続いている。彼女は、多感な時期にそんな状況を見続けてしまい、連邦政府こそが倒すべき諸悪の根元であると感じた。そして、自分の手で平和な世界を取り戻そうと、今回の戦争に参加した」

ロサが顔を上げ、院長の顔を見た。

「彼女は、自分に正直過ぎただけなんです。だから、俺にも止める事が出来なくて、こんな事になってしまった」

ロサは、声を大きくして、必死に何かを訴えるような表情で、院長の顔を見た。

こんな所で何かを懇願しても、事実は何も変わらない。それが分かっているにも、ロサはリリアが不憫でならず、話しているうちに、無意識にそんな口調になってしまっていた。

ここまで話した後、ロサはまた俯き、肩を落とした。

事実、ロサは、アストルでの戦闘中、リリアを止めようとはしたが、結局、彼女の行動を止める事は、出来なかった。

あの時、遊覧船で自分がフローラと一緒に居ると言わなければ、もしかしたらリリアはこうならずに済んだかもしれない。ロサは、その時の自分の言動を激しく後悔した。

その負い目は、どうしてもロサに重くのしかかっていた。それは、ロサにとっては、重すぎる重圧だった。そんな気持ちだが、ロサの言動を、焦りと悲壮感で染めていく。

「お願いします！ひと目でも良い、合わせて下さい！もうこれ以上、彼女が傷つくのを見たくない！俺が説得して、戦争をやめさせます  
！！！」

何かに取り憑かれたように必死に懇願し、頭を下げたまま上げよう  
としないロサに対し、院長は目を閉じて首を振った。

「彼女は今、意識不明の重体です。説得は出来ません」

またリリアを救えないという現実には、ロサは言葉が出なかった。

涙目で肩を震わせるロサを見て、院長はリリアの似顔絵に目を遣っ  
た。

鉛筆の優しい筆遣いで、描き手の慈しむ思いが滲み出た、見る者を  
優しい気持ちにさせるリリアの笑顔が、非常に印象的に描かれてい  
る。ロサとの会話の中でも、このような優しい表情を見せた事は無  
かった筈なのだが、ロサは見事な程に描ききっていた。

「この似顔絵は、あなたが描いたものですか？」

「……はい」

顔を上げる事が出来ないまま、ロサは掠れた声で、小さく返事をし  
た。それを見て院長は頷き、慈しむような視線をロサに向けた。

「それを、彼女の病室に置いていくと良い。目が覚めたら、きっと喜ぶでしょう。ただ今の時点では、目が覚めるかどうか、我々にもわかりませんが」

「・・・わかりました」

「あなたがどんな想いで彼女と接していたのか、この絵を見れば確かに伝わってきます。病室にご案内しましょう」

ロサが驚いた表情で、顔を上げた。その拍子に、ロサの目から涙がこぼれた。院長がその目を見て、優しく頷いた。

「ありがとうございます・・・」

院長が付き添い、ロサはリアの病室を訪ねた。リアは全身火傷で皮膚の移植を繰り返しているため、集中治療室（ICU）に入っていた。

院長に続き、ロサも体の消毒を済ませ、頭巾や割烹着のような抗菌の上着を着て、病室に入った。

部屋の中は、暑いくらいに暖房が効いていた。現時点では、まだ殆

ど皮膚が無く、自力で最低限必要な体温を保つ事が出来ないからである。

仮に退院出来ても、神経や汗腺は死んでしまっている筈だから、汗をかくという事が出来ず、空調が無ければ、熱中症などで倒れてしまふ事になる。室温に気を遣う一生を送る事になるのは、間違いないだろう。

ビニールのような透明のカーテンに囲まれたベッドで、全身に包帯が巻かれ、目が閉じている事以外は、どんな状態なのかも全く判らないリリアが、横たわっていた。

数え切れないコードやチューブが至る所に繋がれ、重度の火傷のため、あちこちがむくんでしまっている。見た目では顔の輪郭もはっきりと分からず、遊覧船で会話を交わした時の明るいうりリアの面影は、微塵も感じられない。

まるで別人のような姿に、ロサは呆然としていた。

これが、モビルスーツで戦い敗れていった者の、現実の姿なのである。

病室に入る前は、どんな言葉をかけようか、少しは迷ったものだった。

だが、現実にはリアの変わり果てた姿を目の当たりにしたロサの口からは、彼女の名前すら出てこなかった。

「恐らく、似顔絵の人に、間違いないと思います」

院長が、呆然とするロサを見かねたのか、声をかけた。

「これが・・・あのリア・・・？」

「着ていたパイロットスーツのネームによると、リア＝ミゼル」

それを聞いた途端、ロサは膝の力が抜け、地面にひざまづいた。慌てて院長がロサの体を支えた。

「・・・嘘だ・・・あのリアが・・・こんな」

両膝を地面につき、漸く立っている状態で、譫言のように呟いた。

「そつだ・・・リアは・・・もっと明るくて、元気で」

ロサの脳裏に、遊覧船で会話をした時の光景が蘇っていた。そのリアの元気で快活な雰囲気は、今の姿とは余りにもかけ離れている。ロサにしてみれば、決して受け入れたくない現実。目の前の光景ですら、夢であって欲しい、間違いであって欲しい。そんな想いが、ロサを過去に引き戻し、現実逃避させていた。

だが、目の前のリアは、恐らく退院出来たとしても、話をして声を聞かない限り、本人だと気付く事は、ロサにも出来ないだろう。知り合いと敵同士で戦う結末とは、こういうものなのだろうか。

「何でも良い、一言声をかけてあげなさい。必ず彼女の心に届く筈です」

院長がロサの両肩を持ち上げて助け起こし、リアの傍らにロサを連れて行く。

リアの心拍を示す電子音と、人工呼吸器の弱々しい通気音だけが、リアの生きている気配を伝えている。

「……彼女の顔に、触ってもいいですか？」



病室に入って、初めてロサが自分の意思を言葉に出来た。落胆を隠し切れず、ロサは院長の顔を見る事も出来なかった。

本来は、医療行為以外で触れるのは、無論、ご法度である。だが、ロサの落胆の激しさを目の当たりにした院長は、黙って頷いた。

ロサは、手術用の手袋を嵌めた右の手の平で、そっとリリアの左頬に触れてみた。

包帯と手袋を通して、微かではあるが、リリアの体温が感じられた。その温もりが、リリアが生きている事を実感させ、ロサの気持ちを落ち着かせていった。

「・・・また、必ずここに来るからさ。その時には、俺の名前を、あの時みたいに、元気に呼んでくれよ。リリア、いいね?・・・約束だよ?」

途切れ途切れに出て来る言葉を、やっとの思いで言い切ったロサは、リリアの頬から手を離れた。リリアの閉じられた目元を見るロサの目は、優しく穏やかな目をしていた。

気分が落ち着いたロサは、ようやく膝の力が戻り、自力でカーテンの外へと出た。それを見た院長も、安心した表情を見せた。

「有難うございました。お手数をお掛けしました」

抗菌着を返した後、病室を出たロサが、院長に礼を言った。

「最初の様子を見た時は、正直、彼女に会わせた事を後悔しましたが、どうやら大丈夫のようですね」

ロサに笑みを向けた院長も、院長室で話した時と比べ、悲しげなやりきれない雰囲気表情は、和らいでいた。リリアを支えてくれる人が、例え1人でも居ると感じて、安心したのだろう。

「似顔絵に、何か一言書いておくと良い。目が覚めた時、必ず、彼女の励みになる筈です」

そう言って、院長はロサに胸ポケットから取り出したボールペンを差し出した。

ロサはペンを受け取り、少し考えた。

”どんな言葉なら、リリアの心に届くだろう……?”

似顔絵を見て、ふと、会議室でのやり取りを思い出した。あれなら、きっと彼女の心に届くだろう。

あとのことはおれに任せて、早く元気になってください　ロサより

絵の下の余白に、下手な字で走り書きして、ロサは院長に礼を言い、借りたペンとリリアの似顔絵を手渡した。

「確かに、お預かりしました」

受け取った院長が、胸ポケットにペンと絵を納め、笑顔を見せた。それを見届けたロサが、真面目な顔になり、院長に尋ねた。

「軍の関係者が、彼女が此処に居るといふ情報を掴んでいる気配は、ありませんか？」

「恐らく死んだと思っている筈ですが……」

自信無さげに首を傾げる院長に、ロサは真剣な眼差しを向けた。

「俺も、さっき案内して貰った医師の立ち話を聞いて、気付いたん

です。これ以降は、緘口令を徹底してください。もし同じような形でロード軍に漏れたら、ここが戦場になるかもしれない。それが奴らのやり方ですから」

「わかりました。すぐに医師に伝えます」

「彼女の事・・・宜しく願います」

ロサは深々と頭を下げた。

「確かに、お引き受けしました」

院長の笑顔を確認し、ロサは病室を後にした。

「なぜ彼女を止めなかった、か……。私も、彼を止められないじゃないか。彼が戦場に向かおうとしている事など、分かっている筈なのに」

ロサの背中が見えなくなった後、自嘲的に院長が笑った。

「彼が此処に運ばれて来ない事を、祈るだけだな」

廊下の白い天井を見上げて、院長が呟いた。

ガーゴイルに戻ったロサは、デニムを着たまま、ブリッジのメツシのもとへ顔を出した。

「やはり、スウィート・ウォーターをコロニーレーザーに改造する工事は計画は、進行しているらしい。開放型（大型ミラーで反射した太陽光を採光する窓が有る）の部分に、住民全員が移動させられた後、密閉型（完全な金属の筒）の部分が切り離されて、移動しているようだ」

「まだ、完成はしていないという事か？」

真剣な表情で頷いたメツシの質問に、ロサが肩をすくめて答える。

「まだ、進捗状況の情報は無いみたいだ。でも、奴らがそこまで重大な情報を漏らす程、迂濶とも思えないけどね」

頷いたメツシが、表情を緩めて尋ねた。

「今日は、随分長いこと街に居たようだが、奴等に尾行されなかったのか？」

はっとした表情になり、背後を見やったロサが、珍しく自信が無さそうな声を出した。

「多分、大丈夫だと思うけど」

「そうか」

ロサが俯き、暫く何かを考えるような表情を見せた後、メツシの顔を見た。

「……例のモビルアーマーのパイロット、生きていたよ」

それを聞き、メツシの顔色が変わる。まさか殺してはいまいかと、メツシは気が気ではない。

「お前、まさか……」

「会ってきたよ。院長に挨拶もしてきた。同じ部屋に居なかった所を見ると、姉さんは死んだか、別の場所で拾われたかだ」

目を泳がせるメッシに首を傾げながらも、ロサが真剣な表情で話を続ける。

「彼女は集中治療室に入っていた。全身火傷で、意識不明の重体だそう。皮膚がまだ殆ど再生していない状態で、自力呼吸も出来ないみたいだった」

ロサの口から、殺したという言葉が出ない事に安堵し、メッシが落ち着いた表情を取り戻して、ロサに尋ねた。

「どうやって気付いたんだ？」

「偶然近くに居た、医者との立ち話で気付いた。だから緘口令を徹底するように、院長に言っておいたよ。あんな場所でも、ロード軍が気付いたら、ドンパチ始めかねないからな」

「そうか……。まさかお前が拳銃を向けたんじゃないかと、冷や汗をかいたぞ」

苦笑するメッシに、ロサも苦笑を向けて返事をした。

「それじゃ、ただの人殺しじゃないか。いくら俺でも、そこまではやらない。あれがロードだったなら、話は別だがね」

「ロードなら撃つたのか!？」

メツシが目を見開き、思わず大きな声を出す。だが、ロサは”なに驚いてんの?”と言いたげな表情で、メツシを見た。

「戦争つてのは、リーダーを消せば終わるんだろ?ロードを消した後、地球と宇宙を切り離しさえすれば、もう戦争は起こらない。でも、パイロット1人を消したところで、戦争は終わらない。騒ぎを起こしてまで、彼女を消す意味は無い。そんな無駄な殺しは、俺だつてやりたくない」

話し終えたロサの表情は、若干沈んでいた。だが、”消す”とか”殺し”と言う言葉に、ロサの過去の生活が垣間見られる。言葉遣いも、ガーゴイルに来た当初のものに、戻りつつある。

「もし、病室に居たのがソフィアだったら、お前は撃つたか?」

メツシは、何気無く尋ねたつもりだったが、ロサは射抜くような鋭い視線をメツシに向けた。殺す殺さないという話をしていて、抹殺者としての感覚が戻りつつあったからだろう。

「姉さんだったら・・・?なぜそんな事を?」



メツシは、ロサの殺気混じりの冷酷な視線に、背筋が凍るような感覚を覚えながら、なだめるような口調でロサに言った。

「い、いや・・・ほら、もしかしたら、似たような状態で、近くの別の病院にいる事だって、無くはなかるう？」

「・・・そうだな」

ロサはメツシから視線を外し、少し考えた。リリアと同じような状態で、ソフィアが横たわっていたとしたら、自分はどう感じただろう……？

だが、その場では、ロサにも結論を出す事は、出来なかった。

「いずれにしても、この前の件で、もう死んだと思う事にした。仮に生きてるとしても、まともに家族として接する事は有り得ねえな」

冷淡な口調で、吐き捨てるようにロサが言い放った。

本人は口調の変化には気付いていないのだろうが、それだけソフィ

アとの確執は決定的になってしまっているのかと、メッシには感じられた。

「だが、他の病院や、顔が利くグラナダの組織も幾つか当たってみたが、姉さんの気配は、近くには感じられない。多分、少なくともこの近くには居ないだろう」

ロサの口調から、冷たさと怒気が消えていく。ソフィアが見つからなかった事で気が抜けてしまった、そんな雰囲気を感じられた。

「わかった。ご苦労だったな」

メッシが労ったのに対し、ロサが少しだけ寂しげに、笑みを見せた後、ふと浮かんだ疑問をメッシに訪ねた。

「そういえば・・・Aガンダムって、何故あのタイミングでシャインリバーに運ばれて来たんだ？アナハイムに引き取られたって聞いてた筈なんだけど」

「お前が行方不明じゃ誰も使えないってんで、解体場に運ぶ予定だったんだ。革命軍が蜂起して以来、アナハイムがモビルスーツの新造に追われて空きラインが無くなったから、シャインリバーの軍の解体検査施設でバラして、そのまま組み直さずに廃棄する予定だった。それが、どうかしたのか？」

怪訝そうな顔でいうメツシの言葉に、ロサが納得したように頷いたが、寂しげな表情を崩さないままメツシに背を向けた。

「わかった、ありがとう。別に、何となく気になっただけで、大した事じゃないよ。部屋に戻る」

「ああ」

ロサの声が、いつもどおりのやや幼い雰囲気に戻ったのを聞き、メツシは胸を撫で下ろした。

”やはり、ソフィアの事は、黙っておく方が良いみたいだな。もしロサがいま気付いたら、間違いなく殺しに行くだろう・・・”

メツシは、ブリッジの正面に見える、リリアとソフィアを拾ってくれたシャトルを、遠くを見るような目で見つめていた。

### 34・グラナダの夜（前書き）

物流の要衝・グラナダ。その地位を活かし、様々なものが取引される。

その一角で、対照的な雰囲気醸している者達が居た。

### 34・グラナダの夜

グラナダでは、自分で身を守れないフローラと子供達は別にして、ガーゴイルの他のクルーは、一応外出許可は出されていた。

グラナダは、一年戦争時代はジオン公国資本だったため、いわゆる風俗営業法に関連する賭博や色街等の規制が、連邦政府資本のフォン・ブラウンに比べ、かなり緩かった。それゆえに、歓楽街の範囲が広い。

また、工業立国のサイド3と地球圏各地の中継点として、物流の要衝の地位を不動のものとしている。このため、地球圏各地から集められたものが各サイドに散っていき、またここから地球圏各地に物がばら撒かれていく。そんな土地柄である。

それ故に、ありとあらゆるものが取引の対象となり、昼と夜とでガラリと街の顔を変える。日本で例えれば、昼は健全なビジネス街、夜は日本一の歓楽街となる新宿あたりに例えればいいだろうか。

月面都市では、地球と同じように、1日24時間のリズムで人工太陽装置が作動する。

太陽が地球の陰に隠れる事が多いから、そうしないと一定の生活リズムを保てないのである。

夜の帳が下りた後は、休み無く点滅するネオンで、昼間とは全く違った表情を見せ、ある意味で昼間よりも忙しく、活気に溢れた街になる。

また、煌々とネオンが点滅する大通りと対照的に、路地裏の酒場で、煙草の煙にいぶされたバーのカウンターで、酒のグラスを傾ける者も居る。

グラナダは、地球以外では珍しく、煙草を吸える店が多い。サイド3製の高性能換気設備が、比較的安く手に入るからである。

表と裏の顔があるということは、当然裏の取引の対象となるものも、頻繁に在庫が動く。ドラッグや麻薬、兵器類といったもの、いかがわしいものやバッタ物など、表で動かせないものも、右から左へと流れてゆく。

日没後、ガーゴイルのクルーの中にも、何人が食事に出た者も居たし、また「友人」に会うと言って、1人で出かけた者も居た。

路地裏の一角に有る、とあるショットバーの店内。

濃い茶色のニス塗りのカウンターに、飲みかけのブラッディマリー

のグラスが置かれている。

それを見た、白いブラウスにノーネクタイだが、黒いスーツとストラップスをきちんと着こなした、身長170cm程の、肩に届くカールした金髪が印象的な女性が、グラスの前の男に近づいた。やや切れ長の目付きに低めの鼻、小さめの顔が、知的な雰囲気醸している。年齢は35歳前後だろうか。

トレーナーにジーンズのラフな服装だが、角張った顔に細い目の碧眼、逆立った短い金髪に厳つい体格の、如何にも軍人という雰囲気50歳前後の男の隣に、女性は無言で腰掛けた。

「連絡を寄越したのは、あんたか？」

スーツの女性は、黙って頷いた。

「同じでいいか？」

やはり黙ったまま、やや俯いて無表情な顔で女は頷き、B6サイズの封筒を、目立たないように、男の膝の上に置いた。

「すぐに動けるのか？」

封筒を受け取った男が、飲みかけのグラスをゆすりながら尋ねた。

やがて、女の前にも、グラスが置かれた。

「想定外の事態が起こった」

沈黙を破った女の第一声は、男にとっては思いも寄らないものだった。グラスを揺すっていた男の手が、ピタリと止まる。

「・・・何だつて？」

グラスを置き、男が女の顔を見た。やりきれない表情で目を閉じ、一つ一つの言葉を噛み締めるように、ゆっくりと女が話した。

「先刻の爆発以来、行方不明・・・恐らく・・・死んだ」

それを聞き、目の前が真っ白になった男の膝から、受け取った茶封筒が滑り落ちた。その様子を見た女が、深い溜め息をついて目を閉じ、小さく首を横に振った。

目を見開き、暫く時が止まったように、男の動きが無くなった。落



胆の余り、取り落とした封筒を拾うことも出来ず、男は呆然として  
いる。

「バカな・・・そんな事が・・・」

どの位の時間が経ったのか、やっとの事で男の口から言葉が出てき  
た。きつく閉じられた目と、強く握られた拳から、男の無念さが手  
に取るように分かる。

「今、代わりに探している」

そう言って、女は封筒を拾い、再び男の膝の上に置いた。哀れむよ  
うな表情で男の背中を見た後、カウンターの丸椅子に座り直した。

「我々を信じて欲しい」

男の落胆ぶりを直視していられなくなった女は、そう言った後また  
俯き、正面のテーブルを見てすぐに目を閉じた。肘を突いた右手で  
目頭を覆い、もう一度首を横に小さく振る。

「・・・本当に信じて良いんだな？」

男は、掠れきつた、絞り出すような声で言った。話すのがやっとという雰囲気、ありありと見て取れるのは、落胆のあまり、まともな言葉も出て来ないのだろう。

「リスクの大きさは我々も承知している。この件に関しては、決して裏切る事はない。見つかるまで、引き続き我々も協力する。信じたい」

目を閉じたまま、懇願するような口調で、女が静かに言った。溜め息混じりの声に、男も言葉が見つからないのだろう、次の言葉を言うまでの時間は、短かった。

「・・・わかった。頼む」

女がグラスを口にした。氷の音が、短くカウンターに響く。

「こういう時勢でなければ、もっと早く見つかったかも知れないのに……」

女が、また溜め息混じりに呟く。その声には、明らかに仕事ではなく、個人的な同情の感情が表れていた。だが、男はそれを聞き、首を横に振った。

「こつこついう時勢でなければ、連邦だけでは、見つからない」

男は、相手を信用して希望を見出したのか、先程よりはっきりとした口調で言った後、グラスの中身を飲み干した。

「世話をかけるが、宜しく頼む」

それだけ言って男はグラスと代金を置き、カウンターから離れた。

背中越しに、女が頷いたのを確認し、男は店から出ていった。

「私も、そうやって助かったんだから・・・嘘つきには、なりたくない。必ず探し出して見せる。父さんのように」

そう呟いた後、グラスを空け、女も席を立った。

「ロサ達」＝「お子様組」は、ガーゴイル艦内の食堂で、少し遅い夕食を取っていた。

「何で俺達だけ、外に出ちゃいけないのさ？」

ロサの肩を掴んで前後に揺らしながら、アックスがぶつくさ文句を言っている。それにつられて、メルサも理由は無いがご機嫌斜めの様子だ。

「ここは、夜は怖いおじさんがいっぱい出て来るから、外には行かない方が良さんだ」

ロサが弁当の中身を口に運びながら、わざとすました顔でアックスを無視する。揺すられながら箸を使うから、食べにくい。たまに豆類が箸を外れて、トレーに戻る。

「おいアックス、飯ぐらい落ち着いて食わせろよ。フローラが作ってくれた料理を、落として捨てたくなんか無いんだから」

5回豆を落として、さすがにロサも機嫌が悪くなってきた。子供相手に殺気を込めるような大人げ無い事はしないが、声がかなり”いい加減にしないと殴るぞ”的な苛立ちを、露わにしている。

「他のみんなは、外に行ってるじゃんかよ。何で俺達だけダメなんだよ？」

アックスでも気付く程度に怒気を込めたロサの声に、口を尖らせてアックスが抗議する。ロサを怒らせる根性はアックスには無いので、ロサの肩から手を離し、揺らすのは止めた。

「俺が外に行きたく無いって思うような所に、アックスは行きたいのか？」

「うん！行きたい！」

満面の笑みで頷くアックスの即答ぶりに、ロサが机に額をぶつける。

「・・・あのなあ・・・アックス？」

青筋を立てて額を押さえながらロサが顔を上げると、レイラとフローラ、メルサまでが、その様子を見て吹き出した。

「あはは・・・！まるで漫才だね・・・！」

” 2人共、傍観者を決め込まずにさあ、ちょっとは鎮圧するのを手伝ってくれよ……”

ロサの「Help me!!」の視線も、腹を抱えて笑うレイラ達

には見えていない。大きく溜め息をついて、救援を諦めたロサが、真面目な顔でアックスを脅す。

「レオンさんやレイラ姉ちゃんも、今日はここに居るんだから、大人しくしてろ。ここで怖い人に連れて行かれたら、知らない土地に売り飛ばされちまうぞ。俺だって、グラナダでは、夜は出歩きたく無いんだ。いつ拳銃で頭をぶち抜かれるか、分かったもんじゃないからな、この街は」

「えっ・・・嘘お!?!」

最後の一言が効いたようで、漸くアックスが大人しくなった。

「そんなに治安が悪いようには、見えないけど？」

怪訝そうな顔をして、レイラが口を挟んだ。

「どう見ても普通の歓楽街じゃない。そんなに、事件ばかり起こる訳でも無いでしょう?少し位、連れて行ってあげればいいじゃない」

アックスが、レイラの背中にくつついて、「そーだ、そーだ!」と語気を強くする。だが、ロサは真剣な表情を崩さずに、首を横に振った。

「駄目だ。グラナダは、余りにも事件が多過ぎて、みんな感覚が麻痺してしまってるんだよ。だから騒ぎにならないだけさ。「事件が起きた」という認識が喚起されるのは、街のド真ん中で爆弾テロか銃撃戦が起きた位のレベル。銀行強盗くらいじゃ、ニュースにもならない。そういう街なんだ、ここは」

「えっ・・・!？」

レイラとフローラの顔が引き吊ったまま固まる。

「嘘だと思っなら、ネオン街から一本だけ路地裏へ入ってみなよ。夜は、怪しげなドラッグとか拳銃とかを、そこら辺で普通に売ってるから」

まだ真面目な表情を続けるロサに、レイラとフローラの視線が釘付けになる。

「ホントに？」

「シャインリバーの裏社会で動いてるブツの9割は、グラナダから流れて来てるものだ。麻薬なんかでも、質が結構良いから、グラナダ経由のものは、良い値段が付く。銃弾だって、サイド3からグラ

ナダ経由で来たものは、桁違いに命中精度が高い。そういうものが溢れてる街なんだ、ここは」

「恐ろしい事を平然と言うね、ロサ・・・」

レイラとフローラが蒼ざめている。フローラに至っては、両手でレイラの右手を握り、微かに震えている。そんな2人を見て、思わずロサが苦笑する。

「前に言っただろ？俺は、そういう世界で暮らしてたって。グラナダには、前に組織のシマ（縄張り）争いで連れて来られて、そういう方面の状況は、ある程度は知っている。だから、夜は出来るだけ、ここでは出歩かないようにしているんだ。女の子が観光気分で、夜の街をブラついてたら、ホントにドラッグ漬けにされちゃうぜ」

表情一つ変えずに言いながら、最後の一口を口に運び、ロサも箸を置いた。

「そんな生活をしてて、お母さんは何も言わなかったの？仮にもお父さんは、連邦のパイロットだったのよ？」

レイラが、常識人なら当然考える箸の疑問を、口にした。ロサは、笑顔も見せず、冷たい口調で言い放った。



「姉さんが失踪した時も、お袋は何も言わなかったし、親父も殆ど戻って来れなかったから、気付いてなかった。お袋にとっては、むしろ俺たちの失踪は、いい厄介払いだったんだよ」

少しだけ怒気と寂しさが混じった、何とも言えない複雑な声と表情を出すロサを見ながら、レイラがやりきれない表情になり、急に声のトーンが下がった。

「・・・そういえば、二人とも、よくうちに泊りに来てたわね。私がロサの家に行った事って殆ど無かったけど、それが当たり前だったから、特に疑問も感じなかった・・・」

レイラ達が中学を卒業した後、レイラが士官学校に入る直前に、ソフィアが失踪した。その時すぐに、レイラは原因を尋ねようとしたが、ロサは何も言わなかった。

” そういえば、その時のロサも、さつきみたいな顔をしていたな・・・。どこかで、あんな顔をしたロサを見た覚えがあると思ったら、あの時か・・・ ”

今になって思えば、ソフィアの失踪は、起こるべくして起こった、という事だったのだらう。ロサの家庭が、当時、既にそういう環境だったのである。

なぜ当時、その事に気付いてやれなかったのかと、レイラは激しい後悔を覚えていた。

「私の知らない所で、ロサも苦労してたんだね……。もつと早く私が気付いていれば、ロサもそんな苦労をせずに済んだかも知れないのに……。ごめんね、ロサ」

レイラが俯いたまま、沈痛な表情になり、言葉を失った。それを見たロサが、辛気臭い雰囲気を取り繕う為に笑みを見せ、わざと明るい声を出した。

「やだなあ、レイラ姉ちゃんが悪いんじゃないよ。第一、俺達は只の幼馴染で、親戚とかじゃないんだよ？それに、うちの家族が、それぞれ自分の考えで行動した結果がこれなんだ。それぞれが、今の結果には納得してるさ。だから、レイラ姉ちゃんも元気出してよ」

その言葉に、レイラの表情が少しだけ緩んだ。それに安心したのか、ロサも普段の落ち着いた声に戻った。

「今の俺にとつては、ガーゴイルのみんなが、家族みたいなものさ。俺はそれで良いと思ってる」

「家族……？」

フローラが急に声を出し、不満げな表情を見せた。

「じゃあ、私とロサは、兄弟みたいなものなの？」

唐突に、怒ったような悲しげなような、複雑な表情で睨まれたロサが、喉に何か詰まったような声を出して、固まった。

「えっ？」

急にフローラの表情が変わった意味を理解出来ず、ロサがしどろもどろになる。

「えっと……その……」

うろたえるロサを見て、益々フローラの機嫌が悪くなり、プイッと横を向いてしまった。

”なんで！？なんでフローラは怒ったの！？”

焦って我を忘れた表情で、ロサがレイラとフローラの顔を交互に見

る。

レイラは”何で分からないの？”という、哀れみを含んだ目でロサを見ている。そんな顔で見られ、ロサは完全にパニックになったように、半泣きになっている。

”レイラ姉ちゃん、助けて!!”

涙目のロサに、レイラが何か言おうとした時には、既に遅かった。

「………もういい」

フローラが、仏頂面のまま立ち上がった。無論、ロサの顔はわざと見ないように、背を向けて歩き出す。

「トレーの回収をしなくちゃ」

「じゃあ、俺も手伝うよ……」

ガンダムのパイロットとは思えないような、情けない声を出しながら、ロサがフローラの後を追う。2人が行ってしまった後、ポカンとした表情で固まっていたアックスが、目を丸くして、レイラに尋

ねた。

「フローラ姉ちゃん、何で怒ったの？」

アックスの表情とその質問の内容に、レイラは急に可笑しくなって、思わず吹き出した。

「兄弟だと、フローラはロサのお嫁さんになれないからよ」

「フローラお姉ちゃんは、ロサお兄ちゃんのお嫁さんになりたいの？」

メルサも、会話に入ってきた。その顔は、アックスと違って嬉しそうな笑顔である。

「そうよ」

レイラは、満面の笑みで、メルサに向かって頷いた。

洗い物を手伝いつつ、2時間がかりで漸くフロアを宥め終わった後、神経をすり減らして自室に戻ったロサは、リアやエリオットの容態が気になり、夜更けになっても眠る気になれず、自販機の前でココアを飲んでいた。

日付が変わり、外に出ていたガーゴイルのクルー達も、殆どが戻って来た。酒が入り、上機嫌の者が大半だったが、その中で1人だけ、沈んだ表情で戻って来た者がいた。

本人はロサに気付いていなかったが、その様子をソファーから見ていたロサは、当然ながら気付いていた。しかし、あまりにも声をかけにくい表情をしていたため、ロサも何も言わなかった。

「一体、どうしたんだろ、あんな顔して……。何かあったのかな  
・・・」

気になったロサは、翌日にメツシの仮眠が済んで、艦長席に座った後に、その人物の話をする事にした。

### 35・強奪（前書き）

日付が変わった後も、まだ寝つけなかった口サ。

だが、艦外での異変に気付き、何が起こっているかを確認しようとしたのだが。

深夜0時を回って、外出していた者が全員戻り、ガーゴイルの通用口が閉じられた。

だが、ロサはその後も暫く眠れず、人気の無い自販機前のソファーに居た。

自分の部屋よりは若干広く、天井も高いから、多少なりとも気は紛れる。

”一人で居た時は気付かなかったけど、俺ってホントに不器用だな”

無然とした表情で溜め息をつき、ロサはソファーに座ったまま、壁の片隅に有る、小さな窓の外の明かりを眺めていた。

フローラ達の孤児院探し、リリアやエリオットの容態、そしてさっきの男の暗く沈んだ表情。

”いくら俺が考えても、答えが出る訳じゃない。他人の事なんだし、それぞれ本人の力で、結論を出すべき事柄ばかりなんだから・・・”



自分に言い聞かせて、さつさと眠れる時に眠らなければ、次はいつ眠れるかも分からない。戦争とは、そういうものである。

頭では分かっているのに、どうしても気になって、考えてしまう。他人の心配ばかりで眠れない自分を自嘲して、ロサは苦笑した。

”俺が、これ程まで他人を気に掛けるなんてな・・・もし、あのままシャインリバーに居続けたままだったとしたら、有り得ない話だよな”

ロサは、レイラが士官学校に入った後、シャインリバーでの殆どの時間を1人で過ごし、その後は仲間と言える存在の人間は、皆無に近かった。

信用できる情報屋は何人が居るが、それらの人間が信用できる情報を提供しているのは、仲間としての信頼と言うよりは、ロサに下手な情報を流して、彼の怒りを買って死にたくはないがために、必死になって情報集めをしているという者が殆どである。

それ故に、自分の存在を受け入れてくれる友人や仲間を、今以上に減らしたくは無い。血の繋がりで家族と呼べる存在の人間が、現時点で1人も傍に居ない以上、傍に居てくれる人は、1人でも失いたく無い。

それが、今のロサの本音なのである。

” どうしたら、みんなが上手くいくんだろつな・・・？ ”

また、ロサの頭の中で、答えの出ない堂々巡りが始まった。

同じ頃

時間は午前1時。「アナハイム・エレクトロニクス」グラナダ工場  
の一角に有る、背の高い倉庫。

テンキーが爆破され、鉄扉が勢いよく開かれた。自動小銃を持った、  
黒いノーマルスーツの集団が次々になだれ込む。ドアが解放された  
事でセンサーが作動し、警備室の警報が鳴る。

狙われた新型モビルスーツ「ジエスタ」は、本来は試験的にガーゴ  
イルに引き渡される予定の3機だった。

だが、連邦軍の受領担当者が暗殺された混乱で、ガーゴイルに連絡

が行かなかったため、そのまま放置されてしまったのである。

警備員が建物に駆けつけた時には、既に「ジエスタ」は動き出し、格納庫の入口のシャッターを掴んで引きちぎった後、まさに建物から出ようとしている瞬間だった。

「止まれ！格納庫ごと爆破するぞ！！」

警備員が、ハンドマイクのスピーカーのハウリングも気にせずに出せるだけの声で怒鳴ったが、ジエスタが止まる気配は無く、掴んだシャッターの残骸を投げ捨て、前に足を踏み出した。

「止むを得ん……！！」

腰のベルトに吊っている、格納庫の無線爆破スイッチを押す。だが、テンキーと同時に回路を爆破されてしまい、爆弾が起動しない。

「……！？」

3回押してダメだと判断した警備員は、舌打ちして無線機を手にした。

「モビルスーツ隊！ジェスタが賊にやられた！撃墜しろ！」

侵入者に盗まれたという焦りと、生身の自分の前で巨大なモビルスーツが動く恐怖で、その表情は完全に血の気を失っている。

程無く、警備用のスタークジェガン5機が、水平V字型に並んだ編隊飛行で飛来した。両肩に乗っている12発ずつのミサイルポッドを、格納庫へ一斉に向け、狙いを定める。先頭の機体が、最初に全てのミサイルを発射した。

レーダーでその接近に気付いたのだろう。3機のジェスタが、メインバーニアを全開で噴かし、格納庫から素早く飛び出すと同時に、正面、左右と3方向に散開した。

外れたミサイルが、本来は既に爆破されている筈だった格納庫に当たり、爆発した。格納庫の壁が、轟音を立てて跡形も無く崩れ去り、トタンと思われるグレーの屋根が捲れ上がって、投げ捨てられた新聞紙のように、地面に落ちた。

ミサイルを使い果たした機体は、止むを得ず正面のジェスタヘビームライフルを連射する。他の4機が、一斉に全てのミサイルを発射した。距離が無かった先程と違い、今度は複数弾頭が散開し、ジェスタに雨霰と襲いかかる。

だが、ジエスタはそれらの攻撃を難なく回避し、そのまま工場の敷地を出て、訓練施設の方へと向かってしまった。

スタークジェガンがしつこく連射してくる火線をかわし続けながら、ジエスタは訓練施設の宇宙飛行訓練用ハッチが有る方角へ向かう。

ジエスタは全ての攻撃を紙一重でかわしているが、パイロットの反応が遅い訳では無く、明らかに意識的に、相手が撃つてから回避している。

その動きは、どう見ても、反応速度を試しているようにしか見え無い。ジエスタが飛び道具で反撃出来ないのは、ビームサーベル以外に、武器を持っていないからである。

まだ市街地に入っていないため、スタークジェガンは遠慮なくビームライフルを連射する。舗装されていない訓練コースの土が、火線で焼かれると同時にもうもうと舞い上がる。

やがて、連射を続けたスタークジェガンのライフルが弾切れになり、空になった弾倉を交換しようとした刹那、ビームサーベルを抜いたジエスタが、突然振り向いて斬りかかり、スタークジェガンの胴体を真っ二つに切り裂いた。

ジエスタが機体の横を通過した直後、スタークジェガンが爆発した。

訓練用ハッチの管制塔の建物が、その光に照らされ、窓から様子を窺っていた数人の、黒いノーマルスーツのヘルメットのバイザーを、浮かび上がらせた。

「今のは、爆発音・・・？」

ロサは、ガーゴイルの自販機前の壁時計を見た。現地の電波を拾うので、時間はグラナダの時間である。

夜の1時。どう考えても、古いビルの解体爆破をやるような時間ではない。当たり前だが、クルーの殆どは眠っている。

ロサが立ち上がり、小さな窓の外を見た。相変わらず、倉庫群の建物越しに、街のネオンの明かりがちらついているのが見えるが、周辺で爆発が起きたような気配は無い。

「2回・・・いや、もっと聞こえたような気がした。まるで戦闘中のように・・・」

エリオットやリアの事を考えていて、寝つけなかったロサと、当直の夜警担当者以外は、誰も起きていない。

常につけ狙われていたロサにとっては、銃や爆弾など火薬の炸裂する音を聞き分ける事は、自分の生死に直結するので、聞き間違える筈は無い。

”何の音なのか、確認するか”

ロサはブリッジに上がり、艦長席にいる副艦長のロバート「ジャック」に声をかけた。メッシと違い、逆立った金髪の碧眼に角張った厳しい顔と体格、如何にも軍人といった風貌をしている。ロサの居る位置からは椅子越しで、顔は見えていない。

「異常は無い？」

返事が無い。

ロサが、艦長席の下に有る、非常用のハンドスピーカーを音も立てずにそっと取り出し、ロバートに向ける。

『異常は無いか？』

ロサが居るのと反対の方向に、ロバートが転げ落ちた。狭いブリッジに、割れた音声が鳴り響く。

「寝てちゃダメでしょ。職務怠慢じゃない」

呆れた声を出しつつ、爆発音を聞いた後だけに真剣な表情を保ったまま、ロサが言った。その横で索敵手も飛び起き、慌ててずれたヘッドホンを直す。

「お前なあ……もうちょっとやり方ってモンがあるだろ……！」

ロバートが、転げた際に打った頭を押さえながら、ロサに抗議する。

「爆発音が聞こえた。何か異常は無いか？」

出撃前でも滅多にしないような真剣な顔で、ロサがロバートに尋ねた。理解しきれないロバートが座り直して、いぶかしげな表情でロサの顔を見た。

「……爆発音だっ？」



「遠いけど・・・確かに爆発音だな」

ロサの言葉を聞き、索敵手が音紋記録の確認を始めていた。過去の音紋記録と照合し、該当するものを見つけた途端、索敵手の顔が急に険しくなった。

「建物にミサイルが当たって崩れる音と・・・ジエガンの爆発音だな」

「ジエガンだと!？」

ロバートの眠気が、一気に吹き飛んだ。人気の無いブリッジに、目を見開いたロバートの声が響き渡る。

「どこだ!？」

「半径10kmほど離れた所です。方角は・・・この船体から見て正面ですね」

ロサが、ブリッジの正面の大窓の景色を睨み付ける。

シャトル乗り場の垂直尾翼が、オフィスピルの明かりに浮かび上が

り、幻想的な光景が広がる。その向こう側で戦闘が繰り広げられているとはとても思えない、静かな夜景だった。

「・・・訓練所の辺りか」

頭の中でグラナダの地図を描き、該当する施設を思い出したロサが呟いた。パイロット経験の無いロバートが、ロサの顔を見る。

「訓練所？」

「アナハイムのテストコースも兼ねてる、連邦軍のモバイルスーツ隊の訓練所さ」

市街地からは離れているものの、時間が時間である。テストをやるにしても少々非常識だ。

「ジェガンの他に、機体は居ないのか？確認してくれ」

ロサの声が、まるで敵機に遭遇のような緊張感を孕んでいる。索敵手の返事次第では、本当に出撃の必要があるだろう。

「照合出来ないのが・・・3機。同じやつだな」

「新型……？」

ロサの目がさらに鋭くなる。

「またガーゴイルに奇襲をかけるつもりか……？夜中の寝静まった時間を狙って……」

基本的に、港を占拠しない限りは、外部からモビルスーツが単独で月面都市に侵入するのは、不可能である。

という事は、アナハイムの連邦軍向けの新型機が盗まれそうになっ  
ていて、それを阻止するための戦闘と考えるのが妥当だろう。

相手の戦力が分からない以上、天蓋の外にガーゴイルごと出港する  
訳にもいかない。

アナハイム・エレクトロニクスの新型モビルスーツと言う事は、A  
ガンダム以上の性能を持っているという可能性も、十分に有り得る  
からである。

それに、万一、不測の事態が起こったら、エリオットが戻れなくな

る。辞令によって入院させた以上、エリオットがガーゴイルの独断行動によって乗れなくなってしまうえば、軍法会議ものの騒ぎになってしまう。ロサとしても、メッシにそんなつまらない恥をかかせたくは無い。

「ロバートさん、カタパルトデッキのハッチを開けてくれ。あと、当直のパイロットに連絡を頼む」

そう言った後、ロサがロバートに背を向けた。ロバートが、ロサの背中に声を掛ける。

「出るつもりか？」

「いや、こっちに来なければ出ないよ。念のために構えておく。少しでもこっちに来たら、すぐに出撃許可を出してくれ」

「わかった」

Aガンダムに乗り込み、ハッチを開けたまま、ロサは音を聞く事に集中する。

「ジェガンの爆発音って……一体、何が起きてるんだ？」

ロサが呟いた直後、仮眠から起こされたレイラ隊のパイロットたちが、モビルスーツデッキにやって来た。

レイラが、Aガンダムのハッチが開いているのに気付き、ロサに声をかけた。

「起きてたの？」

「ちょっと静かにしててくれ」

ロサの声が、戦闘前のような緊張感を伝える。

「・・・？」

まだ状況をはっきりと把握出来ていないレイラが、いぶかしげな顔で、Aガンダムのハッチを見上げる。

もう一度、ロサの耳に爆発音が届いた。

「またジェガンか？」

無線でロサが確認する。相手の情報が無い緊張感で、今までに無い程に、低く厳しい声になる。

『そつらしいな』

ロバートが応答する。ロサを落ち着かせようと、わざと軽い声を出す。やはり不安は隠しきれない。

「ジェガン？ロサ、一体何が起きてるの？」

状況がまだ分からないレイラが、ガンダムの足元から、声を出した。

「まだ遠いが、ジェガンの爆発音が2回聞こえてきてる。どうやら戦闘中みたいだ」

「戦闘・・・！？」

パイロット達が、一斉に声を出し、目を見開いてガンダムのコックピットを見た。それを聞き、ロサが話を切り上げるように、声を出した。

「こっちに来たら、すぐに出るぞ」

「わかった!!」

ロサの声に返事をして、パイロットが、各自のジェガンに乗り込んでいく。

『他のパイロットも必要か?』

ロバートがロサに尋ねた。

「新型3機か・・・大丈夫だと思うが・・・」

距離は約10km。モビルスーツなら数分掛かるか掛からないかの距離である。流石のロサも、今回は迷った。

様子を見に行くにしても、間に市街地があるので、こんな時間に飛行したら、現地の住民から非難轟々になるのは、目に見えている。

折角、ダニエルのコロニー独立採算制法案が可決されたのだから、この時期に不祥事は起こせない。

と言って、天蓋の外から回り込むには、管制に連絡して、港の気密を保つ為の2重の開閉蓋を開けさせ、さらに訓練所の蓋も同じように開けさせなければならぬ。港の蓋はラー・カイラム級大型戦艦のガーゴイルが余裕を持って入る大きさだから、開閉には相応の時間が掛かる。

それに、ロサが天蓋の外へ出た隙に、中からガーゴイルを襲われてレイラ達が殲滅されたら、ガーゴイルが沈んでしまう。ガーゴイルを守る為には、ガンダムは天蓋の外には絶対に出られないのである。

ロサは、ガーゴイルの安全を最優先した。敵機が攻めて来たとしても、当直の人数だけで食い止めている間に、他のパイロットも準備が出来ると判断し、ロバートに結論を伝えた。

「まだ緊急性が高いとは言えない。だが、すぐにみんなを起こせるように、構えておいてくれ」

『わかった』

まだハッチを開けたまま、再びロサが、艦外の音を聞き始める。無論、1 km以上の距離だから、ロサの耳に届いているのは、実際に爆発してから数秒後の音である。



他のパイロットは、ロサとロボットの交信を聞きながら、固唾を飲んでいる。

「……3機目。またジエガン？」

『ああ』

ロサの声に、ブリッジから返事が来る。音紋照合機が反応するという事は、ロサの空耳では無い事だけは、間違いなさそうだ。

『なぜレーダーに映らないんだ？』

緊張感に辟易したロバートが、レーダーを眺めながら、誰でも気付くような当然の疑問を口にした。

「訓練所の敷地内だろうから、ミノフスキー粒子じゃ初心者のパイロットがぶつかってしまふ。恐らく、逆波形の電波で打ち消しているんだ。スパイ対策だよ」

ロサの言う「逆波形の電波で打ち消す」というのは、同じような技術に、携帯電話や音響機器の騒音低減技術がある。

横軸に時間、縦軸に電気の大ささ（レーダーに映る鮮明度）をとったグラフを作ったときに、実際にレーダーに映る電気信号に対し、時間軸を境に完全に線対称になる波形の電気信号を人工的に発生させ、擬似的に電気信号を0にし、レーダーに映らなくするというものである。

音響機器や電話なら、音の周波数が限られているから、ある程度はプログラム段階でパターンを予想できるので、それで騒音を打ち消せるが、さすがに生の爆発音を打ち消すことは不可能だから、口サの耳にも届くのである。

「どうするか・・・こんな時間に戦闘になったら、街が全滅してしま・・・」

もうすぐ、グラナダは深夜2時半。善良な市民なら、眠っている筈の時間である。そんな時間に警報サイレンなどが鳴れば、街がパニックに陥る。

さらに言えば、月面都市は、クレーターに透明な蓋をつけて形成されている。

透明なものは、概して固くて脆い。コロニーのような金属と違い、真空空間と接している部分が一ヶ所破損すれば、あっという間にヒ

ビが広がり、天蓋が吹き飛ぶ可能性もある。

だから、月面都市の中では、戦闘は協定上は禁止されている。

「くそつ、相手の性能が判らなければ、手の出しようが無い！一体、どうすればいいんだ・・・!？」

ロサがうめくような声を出して小さく呟き、唇を噛む。

ジエガンという事は、撃墜されているのは、恐らく味方。にも関わらず、文字通り、手も足も出ないのである。今まで、自分が手も足も出ない状況など、経験した事の無いロサにとっては、とてつもなく長い時間を感じる。

『4機目』

ブリッジから声が聞こえた。

『・・・5機目爆発！レーダーに映った！何だ！？こいつら、何処へ行く気だ！？』

ロサも、Aガンダムのレーダーに目をやる。敵と思われる新型3機

ともう一機、レーダーの機影から小型輸送機と思われる機体は、こちらには来ず、あらぬ方向に向かっている。

「しまった！訓練場から外へ脱出するつもりか！」

敵なら、迷わずガーゴイルに向かって来ると踏んでいたロサは、思わず舌打ちした。

訓練場とは、文字通りパイロットの訓練のための施設なので、当然、宇宙空間へ出るための設備がある。

無論、そこにも管制塔が有るのだが、モビルスーツを盗む程の組織的犯行なら、恐らく管制塔も制圧されてしまっているのだろう。

管制塔が無人でも、1分間通過する機体が無いままで放置すれば、天蓋は無条件で自動的に閉まり、気密を確保するようになっていく。

真上の蓋を今さら開けてくれと言っても、間に合う筈が無い。

ガンダムでの追跡を諦めたロサが、改めてレーダーを見て、新型機が逃げる様子を追う。動きの速さにまず驚いたが、ロサが更に驚いたのは、この後の逃走機の行動だった。

「何だ？こっちに向かって来る！？一体何をするつもりなんだ……！？」

慌てて ガンダムがカタパルトデッキから外へ飛び出し、天蓋に向かってビームライフルとファンネルを構える。

” しかも……速い！！ ガンダムでも、追いつくのは無理だ……！！”

ロサの身体中から、冷たい汗が流れる。

ジェスタの1機が、外側の蓋の外から、先程の戦闘中に、スタークジェガンから奪い取ったビームライフルを、管制室に向けた。

『蓋を開ける。さもないと、開かない筈の天蓋に、風穴が空く事になるぞ』

他の2機が、市街地の天蓋に向け、ビームライフルを構えた。

「街を人質に！？何て卑怯な……！！」

ロサが唇を噛むが、この状況では下手な行動には出られない。

目的を達成出来なくても、相手はそのまま撤退してしまえばそれで済むから、街が破壊されようがされまいが、乗っている連中にしてみれば、差して問題は無いのである。

3機のジエスタが、管制室から銃口を外さずに、機体分だけ開かれた隙間から進入して来た。気密を確保した後、内側の蓋が開かれる。

いつの間にかもう一機が居ないところを見ると、恐らくジエスタ以外の、戦闘が出来ない輸送機か何か、先に逃走したのだろう。

” 一体、何を要求するつもりなんだ・・・!?”

予測のつかない事態になり、流石のロサも手出しが出来ず、黙って相手の出方を見るしか無かった。

### 36・狙撃（前書き）

新型機「ジェスタ」を強奪し、何かを要求する為に、グラナダの天蓋を人質に取った、ロード軍の兵士達。

その内容に、居合わせたガーゴイルパイロットが、思わず齒軋りする。

ガーゴイルのカタパルトデッキに乗ったまま、困惑した様子で上空を見上げながら、ライフルを構えるAガンダムを見下ろし、ジエスタのパイロットが下卑た笑いを浮かべた。

『さて、ガーゴイルに要求が有る。我々に対し、推進剤と武器弾薬の補給をしてもらおうか。断れば天蓋を破壊する』

「・・・何だと!？」

居合わせたガーゴイルの面々が、突拍子の無い要求に、眉を寄せて目を見開いた。

『一機ずつ順に補給をして貰う。余計な抵抗をすれば、どうなるか分かるな?』

高圧的な相手の声に、ロサが思わず悪態を突く。

「ふん、流石はテロリストだな。そうやって、平然と一般市民を巻き込むやり方しか出来ねえんだからな」



『利用出来る物は効率良く使いこなす。それが戦争の勝ち方だよ、坊や』

相手の声は、先程までと変わらない。挑発に乗って墓穴を掘るタイプのキャラクターでは無いらしい。

”ちっ、こいつ、随分と慣れてやがるな”

ロサが舌打ちすると同時に、最初の一機が ガンダムの横に降り立った。

堂々とガーゴイルの艦内に入ってくる図々しさに憤り、レイラのジエガンがビームライフルを構える。だが、それをロサが押し殺した声で制した。

「よせ！！グラナダの市民を巻き込みたく無い、手を出すな！！」

「くっ・・・！！」

ロサの声に、レイラがライフルを下ろし、鬼のような形相でジエスタを睨み付けた。

この後、同じように残りの2機も推進剤とビームライフルのスペアマガジンを積載し、最後の1機がカタパルトデッキを出した時、最初の機体の声がロサに向けて無線を開いた。

『ガンダム、我々と一緒に来てもらおうか』

Aガンダムの隣に居る機体が、ライフルを向けてロサに言った。全身から嫌な汗が吹き出すが、それを悟られる訳にはいかない。交渉事は、弱味を見せれば、十中八九負けだからである。

可能な限り、平静を装った声で、ロサが返す。

「何だ？人質か何かのつもりかよ？」

『このまま貴様を引きずり出して、ガンダムだけを持って帰っても良いんだが、総帥が貴様に話があるって事なんだな。このままついて来て貰う』

「それなら、俺だけを連れてった方が早いんじゃないのか？」

『貴様をコックピットに入れて、後ろから首を絞められたら、手も足も出ないんでな。悪いがガンダムと一纏めで来て貰おう』

”ちっ、やはり小賢しい駆け引きに乗っては来ないか。こつこつ任務が得意なキャラクターなんだろうな”

ロサが心の中で舌打ちした。それを見透かしたように、相手がロサを促す。

『さて、無駄なお喋りはここまでだ。来い』

挑発するように、ライフルで”上に行け”とゼスチュアを示す。

「ロサ!!」

レイラ達のジエガンが、再び一斉にライフルを構えるが、Aガンダムが手の平をそちらに向けて、動きを制する。

「大丈夫だ、死ぬ事は無えよ」

ロサがそう言った後、Aガンダムがメインバーニアを噴かし、上空へと向かった。隣に居た「01」の機番を付けたジエスタがそれに続く。

ロサが上空に待機しているジェスタを睨み付けた時、ある事に気付  
き、隣に追い付いた機体をもう一度見た。

” E F S F・・・G L O 1つて、この機体、まさかガーゴイルに乗  
る筈のものだったのか！？という事は、こいつら最初からガーゴイ  
ルで補給まで済ませる魂胆で、このタイミングで行動したのか！！”

人間で言うところ左鎖骨あたりの「E F S F」が「地球連邦軍」の所  
属、左肩の「G L」「O 1」と2段に分けてある表記が「ガーゴイ  
ル1号機」を示している。

ガーゴイルに乗る予定だった新型機。それが3機纏まっているのだ  
から、その攻撃力も半端なものでは無いだろう。

” 下手に抵抗すれば、無駄死にするだけだな”

如何に卑劣な相手を許せないと言っても、下手に抵抗して、フロ  
ラの目の前で地獄絵図を展開する訳にもいかないし、自分が死ぬ訳  
にもいかない。

『 Aガンダム、先に出る』

隣に居た機体からの指示に従い、ロサが先に天蓋をすり抜け、ジェ

スタ3機が後に続いた。

天蓋を出た後も、しばらくロサは抵抗もせずに、攻撃する隙を伺っていた。仮に攻撃するとしても、グラナダから距離を取らなければ、自分からの流れ弾で、街の天蓋を破壊しかねないからである。

だが、Aガンダムの後ろに3機がピタリと貼り付き、攻撃の隙が無い。自分の中で感じる焦りを必死に抑えながら、ロサが現状を脱出する方法を探る。

”さて、どうするか・・・ファンネルを使った所で、さっきのスピードを見る限り、良くて相打ちって所だな。恐らく、単独で逃げ切る事は出来ない筈・・・”

ロサがそんな事を考えているうちに、スクリーンに映る月の大きさが、ピンポン玉くらいに見える距離まで離れていた。ふと正面に気配を感じたロサが、リーダーを見ようと、視線を落とした。

「正面に、何かが居る・・・？」

ロサが呟いた直後、いきなり狙撃が始まった。画面を確認出来ない

まま、ロサが反射的にペダルを踏み込む。

「何だっ!?!」

ガンダムが頭上へ、ジエスタ3機が左右と足元へ、一斉に散開する。砲撃がそれを察知したかのように、ガンダムとジエスタを引き離す形で壁を作る。

「これは、俺に対する援護!?!」

気付いたロサが、Aガンダムを砲撃源へ急がせる。ジエスタがAガンダムを追おうとするが、頭上に水平にビームで弾幕を張られ、Aガンダムを追う事が出来ない状況になった。

「ちっ、連邦の援軍か!仕方が無い、引き上げるぞ」

ロサに命令していた高圧的な声が言い、ジエスタ3機はサイド3の外郭の方へと逃走した。ガーゴイルとは少し違う雰囲気の子エガンが、ジエスタへの追撃に向かう。

「あれは、確か「フォースジエガン」・・・駐留軍の「ガルーダ」が動いたのか。しかし、何故このタイミングで、ガルーダが動いたんだ?」

ロサの目に入ったのは、両腕にギャプランと同じようなシールド兼用のメガ粒子砲と、全身の各部に外付けの補助スラスタを取り付けた、ガンダムや プラスと同等の機動力を誇る、厳つい外観のジェガン。

サイド3の専守防衛を担う、駐留軍の虎の子部隊「ガルダ」のみに配備されている「フォースジェガン」である。

ロサが死を覚悟する緊張感から解放され、大きく息をついた。

「ありがとうございます」

『無事で何よりだ。我々の艦で、Aガンダムをガーゴイルまで送るように、指示を受けている。うちの大きさはクラップ級だから、ラー・カイラム級のガーゴイルと比べたら少々狭いかも知れないが、暫く我慢してくれ』

無線越しに聞こえる、相手の声の明るい雰囲気につられ、ロサの声も普段の口調に戻っていく。近づいて来た一機のパイロットが、声の主らしい。

「この状況で、贅沢は言いません。感謝します・・・うっ!？」

心臓を直接締め付けられるような痛みにも、堪らず口サが呻き声をあげた。極度の緊張から解放され、心臓の動きが急に変化したからだろう。

『何だ、今の声は？大丈夫か？』

相手が心配そうに声を掛けてくるが、今の口サが返事をする余裕も無い。

ヘルメットのバイザーを上げ、左腰のエアタンクに付いているポシエットから、発作を抑える薬を取り出して口に放り込み、それをレシーングカーと似たような機構のヘルメットに仕込まれた飲料水で、喉の奥へ流し込んだ。

「大丈夫・・・ちょっとした発作です。すぐ・・・収まりますから・・・」

言葉が続かない口サの声は苦しげで、誰がどう聞いても大丈夫そうには聞こえない。

『主電源を落とせ、変な場所を触ったら暴走してしまう。ガルードまで曳航してやるから、大人しくしてろ』



「・・・了解」

Aガンダムが、フォースジェガンに抱えられるようにして「ガルイーダ」に着艦すると、ジェスタの追撃を終えたフォースジェガンも、次々に戻って来た。

暫く医務室で横になった後、ロサは「ガルイーダ」のブリッジに通され、艦長のアルカス＝レイモンドから話を聞いていた。

「しかし、Aガンダムが無抵抗で連行されるとはな」

ガルイーダのエースパイロット・カルロス＝サンディアノが、無然とした表情で言った。170cm程の軍人にしては細身の体型に茶色の巻き髪、日焼けした彫りの深い丸顔、黒いやや小さめの瞳には、ロサの実力を疑う雰囲気が見え隠れしている。

「仕方が無かつたんですよ、グラナダの天蓋を質に取られたんです

から。俺だつて戦災孤児だし、ガーゴイルには18バンチ事件に家族を巻き込まれたパイロットも居ます。自分のせいで、あんな悲劇を再現する訳には行かなかった」

「そうか、それはすまなかつたな。口が過ぎたようだ」

カルロスが表情を正し、困惑気味に話したロサに、頭を下げた。

「いえ・・・それより、サイド3に居る筈のガルーダが、何故こんな所に居るんですか？」

「ガーゴイルの副艦長から、救援要請が来た。流石にAガンダムを奪われると、我々まで危機的状況になる可能性が高いから、動かざるをえなかつたのださ」

苦笑するカルロスの言葉に頷いた後、ロサが笑みを消し、真剣な表情になった。

「あのジェスタという機体が逃げたのは、サイド3の外郭部、丁度うちが先日破壊したコロニーレーザーが在った方角です。そっちへ急いで貰った方が、ガーゴイルとしては助かるんですが」

「何故、ガーゴイルが動かないのかね？」

艦長席からアルカスが口を挟んだ。カルロスと似たような体型に黒い巻き髪、日焼けした彫りの深い、やや細長い顔。黒いやや大きめの瞳が、ラテン系の人当たりの良い雰囲気醸している。

ロサはエリオットの病状と、辞令のためガーゴイルの独断で動けない現状を簡潔に話した。

「それに、今はまだ艦長にも話してませんが、俺自身もそろそろバイパス手術をしないと、発作が出始めてる。グラナダの小児心臓血管外科がある病院で、カテーテルと冠動脈のバイパス手術をやって貰うつもりです。3日で退院出来るという話ですし、小児外科の精密な腕に頼めるのは、今年が最後ですから」

「という事は、いま15歳か。その歳で狭心症という事は、生まれるときの病気なのかね？」

アルカスが怪訝そうな表情で尋ねた。まさかガンダムのパイロットが、心臓病という爆弾を抱えている等とは、思わなかったからである。

「ええ。「完全大血管転位症」という症状で、生まれてすぐに、シヤインリバー中央病院で手術を受けています。最近まで何とも無かったんですが、宇宙そふに出てから時折、冠動脈が詰まるみたいで、発

作が出るようになりました。今は後遺症の狭心症は、カテーテルがバイパスで、結構簡単に治ります」

ロサの楽観的な言い方に、アルカス達が安堵の表情を見せたが、すぐに眉を潜めた。

「何故、艦長に言っただけ無いですか？」

「誰かの口から漏れて、入院したタイミングを狙われたら、ひとたまりも無いですからね。それに、艦長も総隊長も昔からの知り合いだし、俺がガンダムに乗れば、戦争を終わらせる事が出来るって信じてるから、余計な心配を掛けたくなくて・・・」

悪戯がバレた子供のような顔で頭を掻くロサに、アルカスが厳しい表情で言った。

「気持ちは分からんでは無いが、そういう重要な事は、きちんと報告しておくべきだろう」

何も言えずに、ロサが肩をすくめる。

「何処も大変なんだな。うちが独断で動けるのって、恵まれてるんだ」

ロサの様子を見たカルロスが、やれやれといった雰囲気で、両手を上げた。

「あの機体、恐らくAガンダムの倍近いスピードだ、Aガンダム単独では、あの3機相手では勝てない。だから、さっきも抵抗出来なかったんです。接触する時は、気をつけて」

真剣な表情を崩さずに、ロサが言った。カルロスが、それを見て、それまでの砕けた雰囲気を消し、緊張感に満ちた表情で返す。

「ありがとう。ガーゴイルを数々の危機から救ったという君の腕は、本部から伝わっている。肝に銘じておくよ」

「さて、グラナダに着いたな。我々は、逃走した機体を追う。ガーゴイルも、出来るだけ早めに追い付くように、努力してくれ」

アルカスがブリッジの窓をちらりと見た後、笑みを消してロサに言った。ロサも、ジエスタを追うガルーダ隊の心中を思い、笑みが消える。

「分かりました。艦長に伝えます。皆さんも、ご無事で」

アルカスやカルロスと握手を交わした後、ロサがAガンダムに乗り込み、ガルードを後にした。Aガンダムがバーニアを噴かすと同時に、ガルードのエンジンにも火が入る。その光をちらりと見て、ロサがガルードに背を向けた。

”ガルードの戦力でも、ジエスタには掠りもしていなかった。恐らく今のガーゴイルが全力で攻めても、圧勝する事は不可能だ。どうしたら、あの機体に勝てる……？”

ロサが思わず操縦レバーを握り締め、それに反応したAガンダムの両手も、自然と拳を作っていた。

機体の幅だけ開けられた天蓋の隙間を潜り、Aガンダムが、後部ハッチからガーゴイルに着艦する。所定の場所に駐機を終え、ガンダムを下りたロサのもとへ、レイラが駆け寄ってきた。

「ロサ、大丈夫!？」

「ああ、大丈夫……」

飛び付くようにレイラに抱き締められ、ロサが言葉に詰まる。レイラが何度もロサの後頭部をさすりながら、感情を押し殺すような、掠れた声を震わせた。

「お願いだから、あんまり心配掛けないで!! あなたが死んだら、また私は一人ぼっちになるじゃない……!!」

「……ごめん」

レイラの体の震えを感じたロサは、それ以上、何も言えなかった。レイラが落ち着くまで、暫くの間、ロサはレイラの温かさに身を任せた。

この後ブリッジに戻ったロサ達は、Aガンダムが連行された直後に叩き起こされたメツシから、仮眠を取り直すように言われたが、結局、居合わせた面々は、誰も眠る事が出来ないまま、夜が明けた。

旅客ターミナルのシャトルの白い尾翼が、ネオンの光で様々な色に染まっていたのが、やがて藍色から空色、水色と表情を変えていく。再びその色が本来の白に戻った後も、シャトルは何事も無かったかのように、静かに佇んでいた。

### 37・絶望と希望（前書き）

ガルダ隊の波状攻撃ですら掠りもしないジエスタに、ロサが尋常では無い危機感を持ち始める。

そんなロサを気遣い、フオローの為に奔走していた人物が居た。



### 37・絶望と希望

Aガンダムが連れ去られた直後に、メッシと同時に叩き起こされたパイロット達も、ロサの帰還後、全員がブリッジに集まっていた。

ロサが、ジエスタの所属表記と性能についての見解を話し、次いでガルダに追跡を依頼している事を説明した。

「ガーゴイルに新型が来るなんて話は、聞いた事も無いがな」

メッシが首を傾げるのに対し、ロサの表情が曇る。

「だが、Gが入る所属表記は、ガーゴイルのGLか、ガルダのGdの二種類だけだ。連邦エース艦かサイド3の虎の子部隊、どっちに行く予定だったとしても、今から配備される新型が、中途半端な性能の筈が無い。気を引き締めるだけでは、恐らく勝てない」

「実際の性能が判らなければ、対策の立てようが無いから、アナハイムに問い合わせる。あと、本部にも今後の指示を仰がないと、独断で下手に近づいたら危険だ。ガルダにも、そのジエスタという機体には慎重に近づくように、俺からも注意を促しておいたが・・・

┌

メツシの判断に、居合わせた者が頷いた。だが、ロサだけが唯一、浮かない表情をしていた。

「それは正しいと思うんだが・・・フォー스ジェガンの砲撃が、掠りもしなかったのが気になる。あれだけの波状攻撃なら、1機くらい当たったって不思議じゃない筈なのに」

「とりあえず、アナハイムに問い合わせて、確認を取ろう。話はそれからだ」

メツシの言葉に、ロサも表情を変えないまま頷いた。それを見たレオンが口を挟んだ。

「しかし、何故すぐに俺や他のパイロットを呼ばなかったんだ？他に何人が居れば、もっと策だって有ったかも知れないのに」

「あの状況じゃ、仮にレオンさんが居たって、手も足も出せねえよ。俺達もどうしようもなくて、胃が痛かったんだ。あれが真っ昼間なら、俺だって遠慮なく現場に向かったさ。でも、夜中の1時から3時の出来事だ。あんな時間に市街地のド真ん中をモビルスーツが飛んだら、街がパニックになる」

言われてみれば確かにそのとおりだと、咎めるような表情から少し落ち着いたレオンが、ロサの顔を見た。

だが、状況を思い出しながら話すロサの顔に、困惑の色が出始める。

「おまけに、俺が奴等に話しかけるまで、本当に盗まれたかどうかも判らなかつた。あの時点で確かなのは、ミサイルをぶち込まれた建物が崩れたのと、何処の所属かも判らないジェガンが5機爆発した音が聞こえたって事だけだったんだ。只でさえ混乱してる所へ、Aガンダムを連行なんてされたら、応援を呼ぶどころじゃ無いよ」

レオンが頷いた後、いぶかしげな表情で、ロサに尋ねた。

「奴等が港を制圧するまでは、艦の周囲では、全く何も無かつたという事か？」

レオンの言葉に、ロサとロバートが同時に頷き、ロサが言葉を続ける。

「街の何処かが爆発して、煙でも見えたんなら話は違って来るけど、見える範囲では、街も何とも無かつた。俺達が攻撃を受けた訳じゃ無かつたから、あれじゃ何も出来ないよ。本当に、単なる演習だと言われても、全く違和感は無い状況だった」

「そう思って構えを緩めた所へ、グラナダの天蓋を人質に取られた

か。確かに、一発でもぶち込まれたら、18バンチ事件の二の舞だな」

そう言つて、レオンが顔をしかめた。ロサが悲しげな顔で頷く。

「そんな光景を、フローラやメルサに見せたくは無かった。正直、あの子達が居なかつたら、俺も”犠牲もやむ無し”と思つて、ジエスタを攻撃したかもしれない。だから、フローラ達が今まで傍に居てくれた事には、感謝してる」

”今になつて思えば、リリアや親父が、止めてくれたのかも知れないな”

ロサがそう思つた後、メツシがアナハイムに電話を繋いだ。

「ガーゴイルに乗る予定だった新型が、盗まれた・・・やはりそうですか」

ブリッジに居た全員が一斉に、落胆を隠せないメツシの顔を見る。

「しかし、そんな話は、艦長の私ですら、一度も聞いていませんでしたが・・・」

多少は取り乱す事は有っても、落胆する様子をクルーに見せる事は決して無かったメツシも、流石に今回は脱力感を隠しきれなかった。声が完全に掠れてしまっている。

『連邦軍のモビルスーツ受領担当者が暗殺されたらしく、連邦軍の内部で行き違いが有ったようなのです。聞いた話では、うちで最終チェックが終わった日に、担当者が暗殺されたとの事です』

事務屋の癖なのだろう、相変わらず淡々と事務的に話す相手に、メツシは絶望感すら覚え始めた。

「そんな・・・」

『ガーゴイルがグラナダに入港していると聞いていれば、到着後すぐに引き渡したんですが、我々も民間企業ですから、まさか軍艦のスケジュールを問い合わせる訳にもいかないし、早く引き渡そうと努力はしてみたのですが、結局どうしようもなかった。うちの警備部隊が撃墜にかかったのですが、振り返ちに遭ってしまい、全員死亡しました』

身内の死に至るまで淡々と語る相手に、メツシは呆れ返ったものの、それが冷静さを取り戻させた。艦長として得るべき情報を、相手に尋ねる。

「その盗まれたというモビルスーツの性能は、どの程度のものなんですか？」

『完全な新設計ですから、もしAガンダムを乗りこなせるパイロットが乗れば、Aガンダムを簡単に撃墜できる筈です』

「Aガンダムを簡単に撃墜!？」

メツシの叫びを聞いた者が全員、絶句する。電話の向こう側で、  
当然ですよ”と言って、相手が呆れた声を出す。

『Aガンダムの基本設計は、遡れば20年前のZガンダムですし、サイコミュのベースのガンダムだって、もう15年前の設計です。むしろ今まで強いと言われ続けたのが、不思議な位ですよ』

言われてみれば、確かにそのとおりである。反論の言葉も無く呆然とするメツシをよそに、相手が言葉を続ける。

『ファンネルやサイコミュこそ付いていませんが、機体そのものは非常に優秀です。我々としてはガンダムを名乗らせたかったんですが、量産を前提としていた為に、軍部が許可しなかったんです』

「ガンダムを名乗らせたかったって……そんな機体を盗まれたと言っんですか!？」

『守衛や警備も、この件以降、連邦軍に委託しています。どうやら、今回の事件は軍隊の仕業のようで、警備どころか管制塔まで制圧されてしまって、抵抗する隙もなかったようなのです』

「やはり軍隊……ロード軍の仕業ですか」

これを聞いていたロサが、思わず両手で顔を覆った。それを見たメツシが、何とか打開策を見い出そうと、蒼ざめたままの表情で尋ねた。

「同じ機体は、もう生産していないんですか？」

『量産を前提にしていたので、軍部のゴーサインが出れば、もう3機だけなら、いつでも組み立てに掛かれます。ただ、もし革命軍が、ジエスタに独自にサイコミュを組み込んで運用し出したとしたら、どう戦局が転ぶか我々にも想像が出来ません。基本的にサイコミュを組み込む前提で設計していませんから、我々の手では、サイコミュを搭載した場合のシミュレーションは行っていないのです』

「なるほど、分かりました。軍部への承認手続きは、我々も急ぎます。そちらも、出来るだけ完成を急いで下さい」

一旦電話を置いた後、メツシは即座に連邦軍本部に連絡を取り、ジエスタ発注を急ぐよう要請した。

ダニエルが総司令官になってから、軍の内線電話で各艦から直接本部に繋がるように、通信網が整備されたため、現在はその場で連絡を取れるようになっていた。

「ダニエルさんの戦力の応援要請の答えが、こんな形で裏目に出るとはな……俺は、どんな面<sup>ツラ</sup>して、ダニエルさんに会えば良いんだよ……」

ロサが唇を噛んだ。どんな理由があっても、目の前でジエスタを盗まれ、しかも補給までさせられたという屈辱は、消える事は無い。

だが、キンバリーの件もある以上、本部にも状況を知らせざるを得ない。いずれにしても、ロサのプライドは、この時点でズタズタになっていた。

メツシが用件を言い終わると、本部の相手が、ロサに替わるように言ってきたらしく、メツシがロサの前に受話器を差し出した。きよとんとした顔で、ロサが受話器を受け取る。



「替わりました、ロサ＝ヒシモトです」

『久しぶりだな、ロサ』

短期間にめまぐるしく状況が変化していたので、ダニエルの声が妙に懐かしく感じる。

だが、以前のように、笑顔を浮かべられる精神的余裕は、この時のロサには無かった。みるみる表情が沈み、声にもまるで覇気が無い。

「」無沙汰しています」

『ジエスタは気に入ってもらえると思ったのだが、残念だった』

ダニエルの声は、比較的落ち着いていた。その事に違和感を感じたロサは、その違和感が、ダニエルに咎められているのだと勘違いし、必死に釈明を始める。

「すみませんでした。街を夜間飛行して、ダニエルさんの支持者が減っても困ると思って……。それに、グラナダの天蓋を自分のせいで破壊されたらと思ったら、恐くて手を出せませんでした」

これまで聞いた事の無いようなロサの沈んだ声に、ダニエルが努めて穏やかな声で、諭すように話し始めた。

『状況は、アナハイムと現地の警察、それにガルードからも聞いている。よくグラナダの市民を守ってくれた。それに、私が法案を発表した時機が、少し早かったのかも知れない。余計な心配をかけてすまないな』

自分を気遣うダニエルの言葉に、漸くロサの表情が、少し落ち着きを見せた。

「いえ……お手数ですが、「ジェスタ」の補充の件、よろしく願います」

『何とかする。本来は、ガーゴイルのジェガンを全てジェスタに替えて、上手く運用出来ると判断されたら、ジェスタをベースに、新しいガンダムを設計しようと考えていたんだ。すまないが、もう少しの間、Aガンダムで我慢してくれ』

「新しいガンダム……!?」

自然に、ロサの声が大きくなる。だが、少し明るくなっていたダニエルの声が、再び厳しい雰囲気変わった。

それは、仮に新しいガンダムが完成しても、樂觀出来ない状況である事を意味している。

『だが、ジェスタが強奪された以上、ロード革命戦線が、ジェスタをベースに新型を設計してくる事は、間違いないだろうから、スペックの時点で、それ以上の数値を持つガンダムが必要になるだろう。設計でき次第、組み立てに着手する。それまで、何とか生きていくれ』

「設計でき次第……という事は、まだ図面は出来ていないという事ですね？」

少しは出来ているのかと期待したため、落胆を隠しきれない声になったロサに、ダニエルが強い口調で言った。

『久しぶりに、私も設計に参加する』

意外な発言に、ロサが目を丸くした。機械設計が出来るキャリア官僚というのは、非常に珍しいからである。

「ダニエルさんって、技術者だったんですか？」

『Aガンダムは、私が設計したんだ』

「ガンダムは最初に乗っていたパイロットが設計したと聞きましたから、てつきりAガンダムも親父が設計したと思ってました」

『ハートレイの意見はだいぶ取り入れた。言いたい放題言われて、苦労したよ』

ダニエルが当時を思い出し、苦笑した。

『ジェスタの設計に入った時は、コロニー独立採算法案の草案を作る事で手一杯だったから、参加出来なかった。だが今度は、私も設計者の1人だ』

心強い味方が出来たと感じ、ロサが漸く穏やかな笑みを浮かべた。

「お手数をお掛けします」

『礼を言うのは、戦争に勝ってからにしてもらおう。Aガンダムとジェガンについても、最低限の性能をジェスタに合わせる必要がある。新しいガンダムが完成するまでの応急処置だが、アナハイムでジェスタの装備を可能な限り取り付けるよう指示してある。すぐにAガンダムを、グラナダ工場へ運んでくれ。ジェガンも、3機まで

ラインに入るそうだ』

「すぐにつて・・・もう準備は出来てるんですか？」

フロアの速さに、ロサが目を丸くした。その声が先程よりも明るくなった事に気付き、ダニエルの口調も明るくなっていく。

『ああ。遅くとも3日以内で終わるように、手筈を整えておいた。ジエスタも、5日で届く筈だ。これ以降は、私がモバイルスーツの受領責任者になる』

「わかりました。宜しくお願いします」

『私の期待に、応えてくれよ？』

「全力を尽くします」

『前にも言ったろう？必ず勝つと言え』

ロサが、また前回と同じように苦笑した。

「そうでしたね。じゃあ・・・必ず勝ちます」

その声を聞き、ダニエルが満足そうな声を出した。

『それでいい。もう、ゆっくり話している時間も無い。次は、戦争が終わって落ち着いてから話そう』

「分かりました。では、ご無事で」

『お前もな、ロサ』

ロサは受話器を返し、指示どおりに、改造のために工場に行く事を、メッシに告げる。

「お前が、あれほど総司令に信頼されているとは思わなかった。正直、驚いたぞ」

メッシが感心して、目を丸くする。

「だから、俺も信頼してるし、応えなきゃいけないと思えるんだよ。そうでなけりゃ、今の状況で正気を保つ事なんて、とても出来ない」

いつもどおりの声で答え、ロサはジェガンを従えて、工場へ向かった。

アナハイムの工場で、エレカ（電気自動車）を借りたロサたちは、私服に着替え、ヘルメットとパイロットスーツを後部の荷台に放り込み、ガーゴイルに戻る事になった。

昼間の繁華街は、スーツ姿に混じって、買い物と思しき若者の姿も多い。

今回は、一番下のグールが18歳、あと2人も19歳と、レオン隊の若い男ばかりなので、フローラだけで手一杯のロサ以外は、自然と若い女性に視線が行く。

ロサだけが頬杖を突いて、はあ……と呆れたように溜め息をついている。こういう所は、ロサはお子様なのだ。

「何をため息ついてんだよ、ロサ」

バックミラーのロサを見て、ハンドルを握るマーガスが声を出す。

「お兄さん方の会話について行けねーんだよ。どーせ俺はお子様で

すから」

完全に呆れた声を出して、ロサが膨れっ面になる。

「こいつはフローラー筋だから、何を言っても無駄だよ」

グールが冷やかすように言うと、ロサの拳が左のわき腹を打った。

「痛ってーな！何すんだよ！」

「余計なこと言うからだ」

「ホントの事じゃないか」

頬を引っ張り合って、漫画のように喧嘩する2人の様子に、助手席のルークも腹を抱えて笑っている。

そんなやり取りの合間にロサが何気なく外を見た。

”ここからなら、病院が近いな。このタイミングで行くしか無い”



ロサがそう思った時、車が赤信号で止まった。

「ごめん、ちょっと用を思い出した。先に戻っててくれ」

そう言っつて突然車を降りたロサに、3人が驚いてロサを見る。

「どうしたんだ？」

「ちょっと買い物をしてくるだけさ。すぐ戻る」

「暗くならないうちに戻れよ？」

「俺は幼稚園児か!？」

口を尖らせるロサに苦笑しながら、青信号になった事に気付いたルークが、アクセルを踏んだ。

「気を付けてな」

「ああ」

”なんか良いな、こういうのって……。ずっと、こんな感じが続いて欲しいと思ってしまう……”

こんな何気無い会話でも、荒んだ環境で過ごしたロサにとっては、思わず笑みがこぼれてしまう。本当に自分が目指すべきものは、こんな小さな幸せが、ずっと続く世界なのかもしれないと、ロサは改めて感じていた。

エレカが見えなくなったあと、病院の建物を見つめながら、ロサが呟いた。

「これ以上放っておいたら、フロアを守るどころじゃなくなるかな……俺の手で生きて守り抜く為には、仕方が無い。それが、リリアとの約束なんだから」

ロサは、病院に向かって歩き出した。歩きながら、自分が入院したらリリアの様子を見に行けない事に気付き、暫く歩きながら、リリアの事を考えていた。

だが、暫くして、思い出した事が有った。

”そう言えば、俺がリリアの事に気付いた後、ずっとあの人は沈ん

だ表情をしてるよな。何か関係があるんだろうか・・・？”

考え事をしながら歩いていて、気付いた時には、ロサは目的の小児外科の前に着いてしまっていた。

「とりあえず、薬を貰わないと、どうしようも無い・・・こんな無様になるなんて、俺も、罰が当たったかな。もう少しだけ、もう少しだけで良いから、俺を守ってくれ、リリア」

診察券を受付に渡し、待合室のベンチに座った後、ロサが小さく呟いた。

### 38・苦戦（前書き）

各所で起こる、予想外のタイミングの戦闘。

生身のまま出歩いていたロサ自身も、何者かに尾け狙われる。

モバゲーでは書いていなかった部分を追加し、完全に新規で書き起こしました。

入院前の検査の為、午後3時を回る頃まで掛かって必要な診断を済ませた後、病院を出たロサは、尾行されている気配を感じ、歩きながら何度か振り向いた。

”何だ？グラナダなら銃撃戦だつて珍しくないから、ヤクザ同士の抗争に見せかけてロード軍の連中が俺を襲ってきてても、不思議じゃない筈なのに・・・”

今回はモビルスーツを操縦した直後なので、拳銃も持っている。

だが、拳銃と言ってもベレッタM93Rは装弾数が多い分、357マグナム弾を使う「デザートイーグル」と差して変わらない大きさだから、普段は邪魔になるサイレンサーは外して持ち歩いているので、発砲するとしても最初の一撃で相手を倒せなければ、発砲音で相手に居場所を知らせているようなもの。慎重に相手の様子を伺いながら、ロサはガーゴイルの停泊する港とは逆の方角に歩き始めた。

”その場に俺だけしか居ないなら、拳銃なんて使う必要も無いんだがな。ここは一般市民が多いからやりにくい。訓練所の傍の方が、遠慮なく暴れられる”

ビル街からアナハイムの訓練所へ戻る形で、市街地を歩く。徐々に

ビルの高さが低くなり、それにつれて人影も減ってくる。だが、5 km以上歩いて、一向に消えない尾行の気配に、ロサも首を傾げながら歩き続ける。

やがて、訓練所を囲っている防音壁と、その内側を覆っている鬱蒼とした森が見えてきた。周辺は軍需産業の小企業が入居する低いビルや倉庫、その関連の工場ばかりで、一般人の気配は無い。

流石のロサの足でも、10 kmも歩けば2時間では届かない。間もなく日没になる時間で、人工太陽の温度が下がり始める。既に終業時間を過ぎていいのか、電灯が点っている窓は意外なほど少ない。

「以前ほど景気は良くないみたいだな……。ここなら、夜でも明るくてやりやすいと思ったんだが。まあ、巻き込む人数が少なくなるだろうから、その意味では良いんだが」

暗い窓が続く建物を見上げながら、ロサが呟いた。突如、機関銃らしき連続発砲音が鳴り響き、ロサの足元を掠めた弾がアスファルトを削って火花を散らした。引き金を引く瞬間まで殺気を感じられず、舌打ちしたロサが、とっさに傍らにあった町工場のドラム缶の影へ飛び込む。

「やはりプロか。あそこまで気配を消せるなんて、大した練度だな。・・・うっ!?!?」

心臓が悲鳴を上げる痛みに、堪らずロサがうめき声を出した。急いで薬を口に放り込み、隠れていたドラム缶の陰から、工場の奥に向かつて無理やり体を動かし、舌打ちしながら駆け出す。

装弾はAガンダムに乗る前に済んでいるので、撃鉄を上げれば何時でも発射できたのだが、機関銃を相手に乱射しても、あっという間に不利になる。車のタイヤが軋み、スピンターンして戻ってくる気配を確認し、溶接作業場の一番奥にあった、数本のビル建設用と思われる厳つい太さの鉄骨に隠れたあと、落ち着いてロサが拳銃の安全装置を外した。

「最初の一撃で俺の体に当たらなかったという事は、運転者と狙撃手の息が合っていない。そんな即席チームで俺を消そうなんて、よほど情報収集力が無い連中なんだな」

青い顔のまま一度だけ深呼吸をした後、拳銃の撃鉄を上げたロサが呟いた。

「ロサの奴、随分遅いな。何処をほっつき歩いてるんだ？」

途中でロサと別れたマーク達から、ロサが街に出たという事だけは

知らされていたメツシは、ガーゴイルの艦長席の傍らにあるモニターの時計表示を見て、惘然とした表情で呟いた。

「どうする？探しに行くか？」

傍らに居たレオンも、流石に楽天的な表情ではなく、やや心配げな声を出した。昼食もロサを待ちきれずに済ませ、夜食も同じように既に乗員全員が済ませている。連絡もよこさずにロサが戻らないという状況に、ブリッジ全体が不穏な空気に包まれている。艦長席の周囲を見回し、溜め息をついたメツシが、言葉を選びながらレオンに言う。

「やむを得んな。この時間じゃ、捜索に出た者が犯罪に巻き込まれて二次災害に遭う恐れがあるから、闇雲には出られない。とりあえず、現地の警察に情報提供を依頼しておく。それらしい目撃情報が入ったら、その地域を重点的に探すようにしよう。少なくとも、俺達よりロサの方が土地勘があるから、道に迷っている訳ではないだろう。何かの事件に巻き込まれた可能性は否定できんから、外に出ている者も、全員呼び戻そう。こんな街のこんな時間に、女手を使う訳にはいかないからな。男手が必要だ」

「わかった。各所属長に連絡してくれ。モビルスーツ隊も、全員出撃準備をさせておく。居場所が分かったら、すぐに教えてくれ」

「頼む」



数分後、ロサ以外の乗員が戻ったと報告があつたが、依然としてロサの所在を知る者は、乗員の中には居ない。メツシが難しい顔で腕を組んだ直後、緊急連絡が入った。

「何だと！？例の新型モバイルスーツが、破壊したコロニーレーザーの近くで駐留軍と交戦を始めた！？ガルードは何を・・・駐留軍の全戦力をぶつけて、半分が壊滅しただと！？」

メツシの声に、ブリッジの全員が食い入るようにその表情を見つめている。艦内全ブロックに、既に緊急警報が響き亘っている。レオンも、当然のようにメツシに指示を仰ぐ。

「どうする？このままじゃ駐留軍の壊滅も有り得る。とって、ロサが居ないまま応援に行ったら、うちもただでは済まないかも知れん。何しろ、Aガンダムはまだドックの中だ。仮にロサがジェスタ同等機に乗っても勝てるか分からん相手に挑むのは、無謀とも言える」

「大半の駐留軍の部隊は、普通のジェガンでジェスタに挑んでるんだ。仮にも連邦軍旗艦のうちが出ない訳にはいかない。応援に行くぞ、緊急発進だ！」

有無を言わせない調子でぴしゃりと言い切り、メツシが関係箇所へ

の連絡を始める。やがて、港の構内で一番大きな天蓋が、轟音を立てて開きだした。

「あの音は、港の天蓋が開く音？ガーゴイルに何か起こったか、他所の部隊からの応援要請が有ったらしいな。くそっ、こんな時に・・・このっ！！」

溶接作業場に立て掛けられている数本の鉄骨の影から、ロサが敵の車を狙撃する。だが、一瞬乱射が止まるだけで、また車からの鉛弾の嵐が襲ってくる。そのままロサを轢き殺すつもりなのだろう、車が乱射を続けながら、まっすぐにロサの方へ突っ込んでくる。

817

「ふん、轢き殺せば確実にケリを付けられると思ってるようだが・・・鉄骨がぶっ倒れれば、車なんてひとたまりも無いぜ」

鼻で笑うように呟き、ロサが手近にあつた鉄骨の一本を、足の裏で押し出すように蹴り飛ばした。だが、ガーゴイル出港のための天蓋の振動で地面にめり込んだらしく、鉄骨がびくともしない。

「何だ！？ここの地盤って、そんなに弱かったのか！？」

驚くロサをよそに、見る見るうちに車が迫って来る。仕方なく、慌てて別の鉄骨の陰に移動して隠れ、銃弾を避けるロサ。

「ちいつ！他に使えるものは無いのか！？」

流石に、格闘漫画のように弾を叩き落としながら突撃するような真似も出来ず、焦りを隠しきれない様子で周囲を見回す。

「フォークリフトのガソリンと、溶接のガスボンベ……。一か八か、やってみるか」

地面にめり込んだ鉄骨の根元に、足元に有ったガソリン入りのポリタンクを置き、小型ガスボンベをその横に並べて、隣の鉄骨の陰へと飛び込む瞬間に振り向き、M93Rお得意の3連射を浴びせる。一発がポリタンクを撃ち抜きガソリンが漏れ、逸れた弾がボンベに弾かれて火花を散らし、引火したポリタンクが轟音と共に爆発した。だが、車の勢いは変わらない。勢いを増すガソリンの炎を避け、ロサの居る鉄骨へと車の向きが変わった瞬間だった。

「もらった！！」

ロサがボンベのバルブを狙撃し、猛炎の中でガスを勢い良く噴出させる。素早く鉄骨の物陰に体を隠すと同時に、辺りを揺るがす轟音と共に大爆発が起こり、至近距離を通過した敵の車は、跡形も無く

吹き飛んだ。だが、当然ながら離れているとはいえない距離に居たロサ自身も、隠れていた鉄骨が衝撃波に耐え切れずに弾き飛ばされ、それをまともに背中に打ち付けられて、意識が途絶えた。

「くそ……！ガルダーはまだなのか！？」

ジェスタと交戦中の、地球連邦軍・ジオン共和国駐留軍の軍艦の一隻。

ブリッジで、艦長らしき人物が忌々しげに怒鳴った瞬間、ジェスタの砲撃がブリッジを襲い、艦長席はビームライフルの熱線の中へと消えた。

ガルダーのレーダー画面から、その反応が消える瞬間を見ていたアルカスが、忌々しげに舌打ちした。

「ちいつ！また一隻沈んだか！！」

「ガーゴイルがグラナダを出て、こちらへ応援に向かっていると連絡が……！」

ガルーダの通信士が、艦長席のアルカスへ緊急通信を伝えた。

「バカな！？ガンダムはドック入りしてる筈だし、ロサはまだ手術を終えていないだろうが！！こんな空域で、もしロサが発作を起こしたら、取り返しがつかない事になるぞ！！」

「ジェスタと思われる機体が、こちらに気づいた模様！！リーダー範囲外から狙撃してきました！！」

索敵手の声に舌打ちしながら、アルカスが各員へ指示を飛ばす。

「カルロス！ガーゴイルがこちらへ向かっているらしい、到着前にケリをつけるぞ！！」

「ガーゴイルが？ロサは大丈夫なんですか？あいつ、まだ心臓の手術が終わっていない筈でしょう」

ガルーダのモビルスーツデッキで待機するフォースジェガン1号機のコックピットで、総隊長のカルロスが理解しきれない様子で聞き返す。

「わからん！とにかく、うちで決着をつける！いまガーゴイルを戦

わせる訳にはいかんだ!!」

「了解！カルロス＝サンディアノ、フォースジエガン1号機・出ます!!」

カルロス機が、ガルードのカタパルトデッキから勢い良く飛び出す。その全開で噴かされたバーニアの青白い炎が、宇宙の闇に光跡を描くのを眺めながら、アルカスが眉間に皺を寄せながら、艦長席で呟いた。

「生きて戻れよ、カルロス・・・」

「ガルードからフォースジエガンが出撃した模様。戦闘空域は随時移動していますが、交戦しているのは3箇所だけです。敵自体は、先日強奪されたジエスタと見て間違いありません」

索敵手からの報告に、ガーゴイルの艦長席でメッシが舌打ちする。

「くそっ！うちがもっと早く気づいていれば、こんなことには・・・」

「

「グラナダの訓練所から打電！ロサが重傷を負って病院に搬送された模様です！！」

「!？」

通信士の言葉を飲み込めず、メツシの思考が停止し、一瞬、言葉を失う。

「・・・今、何て言った？」

「ロサが、重傷を負って病院へ搬送されたとの連絡です。現地も混乱しているらしく、詳細はまだ何も・・・」

事態の深刻さを、通信士の青い顔色が明瞭に表している。

包帯を巻いて治る程度の怪我なら、格闘技もこなせるロサの強さを考えれば、わざわざ連絡をして来る筈もない。少なくとも入院を伴うような大怪我であろう事は、想像に難くない。

どんなに切羽詰っても、少しでもだけ状況を整理する事で、人間の脳とというのは回転し始めるものである。何とかそこまで状況を分析し、冷静さを取り戻したメツシが、次の指示を飛ばす。

「とりあえず、生きてるのかどうかだけでも、大至急確認するように伝える。ロサが生きていなければ、ガンダムの改装の意味が無くなるし、我々も今後の動きを考えなければならなくなる。生きてさえいれば、あいつは必ずここへ戻って来る筈だ」

「了解!!」

メツシの強い口調に我に返った通信士が、急いで暗号文の打電を始めた。

「フローラや子供達には、ロサの事を知らせないように、緘口令を敷く。全員に徹底しておけ」

珍しく眉間に皺を寄せ、メツシがブリッジに居る者たちに呼びかけた。

「しかし、ガルーダのパイロット、相手がジエスタと分かっているから向かっていくなんて、随分と勇敢だな。リーダーは何者なんだ？」

「カルロス・サンディアノ、24歳。マフティーの反乱軍がアデレードを襲撃した際、（クスイ）ガンダムを捕獲した際に使われた



翼を張る部隊で頭角を現し、以後ガルルーダ発足の際には、満場一致で総隊長に任命されたとあります。かなり優秀なパイロットのようですね」

出港後しばらくは出撃は無いと判断して、ロサの容態を尋ねにブリッジに上がって来たレオンとレイラが、メツシの疑問に答えた通信士の言葉に、艦長席の傍らで硬直した。

「カルロス＝サンディアノ・・・？」

レイラの口から、その名がポツリと出たのを聞き、メツシが振り向いた。

「レイラ、どうした？」

怪訝そうに尋ねるメツシの言葉に、珍しくレイラが返事をしなかった。視線を落とし、宙を睨んで定まらない視線のまま何やらブツブツと呟くレイラと、呆れたような、レイラに同情するような視線を向けるレオン。

「カルロスが・・・生きていた？しかも、ついこの間、近くまで来たガルルーダの総隊長？」

「・・・？」

メツシが首を傾げた途端、レイラが突然咆えた。

「あんのバカ！！今の今まで何の連絡もよこさないで、何処をほつつき歩いてるのかと思ったら、そんな所に居たのか！！しかも、すぐ傍まで来てたんじゃないの！！何で一声掛けてくれなかったのよ！！！！」

ブリッジ中に目いっぱい響き渡るような大声でキレだしたレイラに、全員が静まり返り、溜め息をついているレオン以外の全員が硬直したようにレイラを見つめる。

ポカンとした顔でレイラを見ていたメツシが、周囲のレイラを見る視線に気づき、漸く口を開いた。

「あ、あの、一体どうされたんですか？レイラさん？」

何故か敬語になるメツシの声に、ハッと我に返ったレイラが、鳩が豆鉄砲を食らったように目を丸くして周囲を見回す。

全員の視線が集中しているのに気づき、途端に羞恥心から顔を赤くして、縮こまるレイラ。

「あらやだ、私ったら、つい・・・すみません」

「何がどうなってるんだ？レオンは事情を知ってるのか？そのカルロス＝サンディアノって、何者なんだ？」

まだ納得しきれない表情で、メツシがレオンを見た。再び溜め息を吐いて、レオンが言い難そうに口を開く。

「知ってるも何も・・・レイラが士官学校に入った時の、学生部隊の総指揮官をした男だ。アデレードでの戦闘で、マフティーの操縦するガンダムを罠まで誘導する作戦を立てたのが、カルロスだ。だが、罠に辿りつくまでにファンネルミサイルで殆どの機体が撃墜され、あいつの機体も被弾した。てっきり死んだものと思っていたんだが、まさかガルーダに居たとは・・・」

語尾を濁したレオンが、レイラをちらりと見た。まだ俯き、肩を震わせるレイラが、この時のレオンには堪らなく不憫に見えた。

「恐らくあいつは、お前の両親が居た病院を守りきれなかった事を悔いて、お前に会いづらかったんだろう。そうでなければ、俺達に生きている事を隠す必要なんて無い。お前にも、マフティーの反乱が片付いた後、すぐに会いに来ていた筈だ」

「どづいつ事だ？」

「レイラの親父さんが、硬化して動かなくなっていた心臓の弁の手術の為に、アデレードの病院に入院していた。その付き添いで、レイラのお袋さんもシャインリバーからアデレードに下りて、一緒に病院に居たんだ」

話しながら、レオンの目が遠くを見るような細い目になる。

「だが、その直後にマフティー軍が動き出した。そして、カルロスが・・・アデレードでガンダムを捕獲する作戦を申し出た。その時にカルロスと組んでいた士官学生部隊の相方が、まだ入学したばかりの新米だったレイラだった。最も優秀な学生のカルロスが、最も戦闘経験が低かったレイラをカバーできるとの判断だったんだ。だが、二人はガンダムのファンネルミサイルから逃れる最中に被弾し、カルロスの機体が、レイラの両親が居た病院に墜落した。レイラは、傍らでただそれを見ている事しか出来なかった」

「そんな事が・・・」

「当時のレイラにとっては、カルロスは頼れるパートナーだった。当然、恋愛感情が芽生えても不思議ではない。だが、彼のせいで、レイラの両親が・・・」

「やめてください、レオンさん」

俯いたまま、レイラが呟き、まだ話そうとしていたレオンの言葉を遮った。

「あれは、戦争での事故なんです。彼のせいではないし、私も彼を恨んではいません。そうでなければ・・・そう思わなければ、私は彼を殺さなければ気が済まなくなってしまう！あれは事故なんです！戦争の・・・犠牲者になったんです、私の両親は！！」

目尻に涙を浮かべ、悲しげな表情のレオンを睨みつけ、レイラが搾り出すような声で叫んだ。再び、重苦しい雰囲気にもまれ、ブリッジが静まり返る。それに気づき、沈んだ表情でレイラがレオンに詫びた。

「・・・すみません。上官に向かって、生意気な言い方を・・・」

いつもとは全く異なる、ぼそぼそと呟くような声を出すレイラの肩をポンと叩き、レオンが部屋で休むように告げた。

寂しげな笑みを浮かべ、無言で頷いたレイラがブリッジを出たのを見届け、メッシがレオンの顔を見て、ポツリと呟いた。

「一体、いつになったら終わるんだろうな。人間同士の戦争ってのは……」

「彼には、何度も戻ってきて欲しくは無いのだがな……」

グラナダ中央病院の院長が、搬送されてきたロサの顔を見て、深い溜め息をついた。

「聞いている爆発の規模を考えると、奇跡的に火傷は軽い。彼のこ  
とだから、とっさに何かの物陰に隠れたのだろう。耳や内臓も、ち  
ゃんと対処していたようだ。問題ない。一番の問題は心臓だな……」

地雷や爆弾などが爆発する際に、万一至近距離に居る場合は、耳を塞ぎ、大きく口を開けておかないと、鼓膜が破れるだけでなく、衝撃波で内臓が破裂してしまう。これらの対処方法は、軍人の息子であるロサは、当然の如く知っているし、実弾を使った訓練も受けていた為、体が覚えている通りに動いた。

偶然にも頑丈な鉄骨に爆風や熱から身を守られただけでなく、体を運ばれる形で吹き飛ばされ、熱風を浴びる前に工場外に追い出され

た為に、火傷などの重い外傷は殆ど無い。単純に、背中を強打した為に意識を失っただけで、持病の狭心症以外には、治療が必要な箇所も見当たらなかった。

「よし、狭心症のバイパスとカテーテルでの詰まりの除去、予定より早いのが済ませてしまおう。今は血流を確保して、治療力を維持させる必要があるだ」

院長がそこまで言った後、ロサの目が僅かに開いた。まだ朦朧としている様子で、何かを伝えようと口を僅かに動かしている。

「気がついたかね？」

優しい笑みと声で、ロサを安心させようと院長が声を掛ける。だが、ロサの口の動きは止まらない。声が出ないのだろう、通気音だけがロサの口から漏れ、その音を治療に必要な道具を用意する看護師達の慌しい足音が掻き消す。

「無理をしなくていい、ここは病院だ。後は我々に任せなさい」

穏やかに言う院長の言葉が聞こえていない訳では無いようだが、なおも口を動かすロサの様子を不審に思い、院長がロサの口元に耳を寄せた。

「……フローラを、暫く……任せると……。伝えて……。下さい……」

「フローラ……女性かね？軍の関係者が来た時に、そう伝えれば良いということだね？」

院長の問いに、ロサの首が僅かに頷き、再びロサの意識が途切れた。

「始めるぞ、緊急手術だ！」

院長の声と共に、ロサの横たわるベッドが手術室へ運び出され、赤い手術中ランプが点灯した。

ロサが爆発を起こした工場に隣接する、アナハイムIIエレクトロニクス・グラナダ工場。

その一角のモビルスーツ格納庫から、大きな声で男達が怒鳴りあっているのが聞こえる。



「無茶です、改造できるかどうかテストベッドにした機体なんて、実戦で使えませんよ！」

「ガーゴイルが出港してしまった今、我々に出来る事はこいつをガーゴイルに届ける程度しかない。こいつのデータを元にして改造が可能だと証明されたということは、少なくとも普通のジェガンよりは使える筈だ。ガーゴイル所属機の改造完了を待っている時間は無い、只でさえガーゴイルは、搭載機体が減ってる上にパイロットが二人も戦線離脱してるんだ。例え一機でも多い方が良いに決まっている」

若草色のジェガンの前で、青いつなぎを着た中年のメカニックと、精悍な顔立ちのベテランパイロットと思いきノーマルスーツを着込んだ男が、大声で揉めている。

部分的に紺色で塗られた間接部や、通常より遥かに厳つい外観の背中のバーニアなど、正に「木に竹を接ぐ」という表現が適当に思われる、なにやら妙な外観のジェガン。ジェスタと同等の性能に改造する事が計画された際に、実際にフレームの強度や全身の動きが追従できるかどうかをテストする為の、試験改造機である。この試験結果を元に、ガーゴイル搭載機の改造項目が決定されたので、使い物にならないというほど酷くは無いが、やはり細かい部分の調整や使用可能な武装の不足など、完全なジェスタ同等機とは言えない面がある。

だが、メカニックの制止を振り切り、パイロットはコックピットへ

と入り込んでしまった。

「RGM-97X1・ジエガン試験改造機、出るぞ」

「何があっても、知りませんよ!!」

怒鳴るメカニツクの表情は、言葉とは裏腹に、パイロットを止められなかった自分への情けなさ、相手を気遣うが故の心配が表に出てしまっている、複雑なものだった。

### 39・通わない心（前書き）

娘を思うが故に、自分と同じ道を歩ませたくない父の思い。

父の苦悩を知らないが故に、父の背中に憧れ、同じ道を歩もつとずる娘。

言葉に出せない思いが、互いの歯車を狂わせていく。

### 39・通わない心

「全く、こんなものまで戦力扱いしなきゃならんとは……。軍縮と言っても、考え方が違う国家が有る以上、ある程度は残す必要だつてあるだろうに」

ジェガン試験改造機のコックピットで、先程のパイロットが呟く。

「ガルーダはともかく、いまガーゴイルを失う訳にはいかない。彼からの伝言も伝えなきゃならんしな……。」「フローラを頼む」か。余程大切に思われているんだな。幸せな子だ」

モビルスーツを操縦し、今まさに戦地へと赴こうとしている男の顔に、まるで父親のような笑みが浮かぶ。

その笑みは、気を失う間際までフローラを想うロサの恋心を微笑ましいと感じたものなのか、ロサに想われるフローラを、成長する最中の娘のように感じた気持ちが見れたものなのかは、正直なところ、彼自身にも分からない。

だが、そんな二人を、決してこの世から失ってはいけない。その気持だけは、何故か彼の中で確信に満ちていた。少しだけ、彼の目が遠くを見るように、悲しげに細くなる。

「俺がスイートウォーターからの移民なんかでなければ、教会の下敷きになんかならなかつただろうにな……。せめて、彼らだけでも生き延びて貰わなければ、あの子が報われない。生きていてくれよ、ガーゴイル!!」

パイロットの顔に戻った男が、祈るように正面を見据え、呟いた。

「レイラさん、ロサを見ませんでしたか？」

ブリッジを出てから、沈んだ表情のまま歩いていたレイラの背後から、フローラが声を掛けた。

事情を知らないフローラに心配を掛けまいと、レイラが笑顔を作り、フローラと向き合う。

「どづしたの？」

「緊急発進だという事は警報を聞いて分かりましたけど、グラナダを出てから、ロサの姿を全く見ていないから、ちよっと気になって……。部屋の呼び鈴を鳴らしても出ないし、何だかこの船に居ないような気がして」

どこか寂しげな笑みを浮かべ、フローラが視線を落としながら話した。

ロサが近くに居ないという気配には、やはり敏感なようである。彼が居るか居ないかを、周囲の気配や雰囲気を感じ取ってしまう程、戦争中の戦艦に民間人が乗っているという心境は、極めて不安なものなのだろう。

” そう言えば、ロサが以前に不思議な事を言っていたわね。最初にロサがガーゴイルを救った時、フローラがガーゴイルの危険を知らせたとか……。だとしたら、箝口令を敷いたところで、いずれ気付く筈ね。変に箝口令を敷いて不安にさせるより、誤魔化しておく方が良いかな ”

「実はね、ちょっと風邪をひいてたらしくて、ロサは病院へ行ったのよ。宇宙じゃ、すぐにみんなに移るから、早めに治すつもりでね。その間に緊急発進しちゃって……」

「えっ!?!?じゃあ、ロサはさっきの港に置いてけぼりにされちゃったって事ですか!?!?」

目を見開いて驚くフローラに、レイラが素直に苦笑して見せた。

「大丈夫。グラナダの基地ですぐにモビルスーツを借りて、後から追いかけて来てるって、さっき連絡があったわ。もう追い付く頃だから、安心なさい」

「そうだったんですか。でも、大丈夫なのかな？風邪をひいてるのに、モビルスーツの操縦なんて・・・」

本当に心配げな表情で眉を潜めるフローラに、レイラが笑みを見せる。

「風邪をひいてたって、ロサは私より強いわよ。実際に、ロサが風邪をひいてた時に訓練で相手をさせられた時も、私の方が秒殺されちゃったんだから。心配する必要は無いわよ」

「そうですか。何となく前より不安じゃないのは、すぐ近くにロサが来てるからなのかな・・・」

表情を緩めるフローラに、レイラも安心した様子で、フローラを促した。

「ロサが戻ってきたら、ちゃんと風邪が治るように、食事を用意しておかなきゃ。そろそろ準備しなきゃいけない時間でしょ？」

「あっ……そうですね。すみません、呼び止めてしまっ」

普段の穏やかな表情に戻ったフローラが、疑いもなく踵を返して厨房へ向かうのを見届け、レイラが胸を撫で下ろした。

” ロサが近くに来てる？本当なのかな、それ……”

訝しげに首を傾げたレイラが、ブリッジへと引き返そうと、振り向いた瞬間だった。艦内放送で、メツシの声が聞こえてきた。

「ガルーダのモビルスーツ隊が交戦を開始！モビルスーツ隊、全員出撃準備を開始せよ！」

「カルロスが……」

近くのスピーカーを見上げ、レイラが小さく呟いた後、モビルスーツデッキに向かって駆け出した。

「レイラ、大丈夫なのか？」



自分のジエガンに乗り込もうとするレイラを、レオンが呼び止めた。レオンの機体は改造中で本来の機体では無いが、この有事に総隊長が出撃しない訳にもいかず、一般機を借りる事になったのである。

「カルロスが頑張っているのに、私が出ない訳にはいきませんよ」

はつきりと強がりだと分かる笑みを浮かべ、レイラが答える。

「それに、この前あいつが来たときに声を掛けてくれなかったこと、頭にきてるんですよ。一発ぶん殴ってやら無いと気が済みませんか、死んでもらっちゃ困るんです。私も、死人を殴るような冒険はやりたくありませんから」

今度は、数十メートル離れている筈のレオンからでも、はつきりと分かる程の青筋を立てて、レイラが低い声を出した。やはり、カルロスがレイラに会おうとしなかったことを、相当怒っているらしい。

「……やれやれ。カルロスの事になると、すぐ目の色が変わるんだから。変わってないな、そんな所だけは」

しょうがねえな、と言いたげに小さく呟き、溜め息をつくレオン。聞こえないように言ったつもりだったが、気が立っているレイラは

地獄耳に変わっていた。

「何か言いました？」

「いや、何でもありません……。ジェガン5号機、レオン、出るぞ！」

逃げるように、レオンのジェガンがカタパルトから飛び出した。

「そういえば、フローラは大丈夫なんだろうな？メツシは緘口令と言ってたが、ロサが居ない状態で緊急発進なんてすれば、すぐ分かるだろうに。船の揺れで、何機出たかくらい素人でも分かる筈だ」

思い出したように言うレオンに、レイラが無線を繋いだ。

「ロサが居ない事には、とっくに気づいてましたよ。フローラは」

「何だと！？じゃあ、また前みたいに……」

「それが、何だかよく分かりませんが、落ち着いていたんです。だから、ロサは風邪を引いて病院へ行ってる間に緊急発進して置いて来てしまったけど、すぐに追いつくからって言ったら、フローラは

何の疑いも無く納得して、厨房へ向かっていきました。前みたいに不安じゃないのは、ロサが近くまで来てるからなのかなって、少し微笑みまでうかべて」

「何だそりゃ・・・？まだロサがグラナダを発ったという知らせは無いし、それらしいモビルスーツも見つかってない。近くにロサが居るって、本当なのか？」

半信半疑の表情を浮かべるレオンとレイラ。その会話の間に、一瞬だけ彼らのリーダーにも、遠くからガーゴイルの部隊を追い越していく一機のモビルスーツが映ったのだが、すぐに範囲外に消えてしまい、彼らが気づくことは出来なかった。

「何て事だ・・・！駐留軍の実力とは、この程度のものなのか!？」

戦闘空域の惨状を目の当たりにしたカルロスは、思わず唇を噛み、無意識に絶叫していた。

先日偵察に行った、コロニーレーザー・アストルの爆発現場に引けを取らない程の夥しい残骸が浮遊し、リーダーを覆いつくしていて、画像では敵か味方かの判別も難しい。

アストルとの違いは、パープルのロード軍艦船ではなく、白い連邦軍艦船の残骸のために、センサーの光が乱反射して、有視界での状況確認が極めて厄介なことである。

そんな現場のど真ん中では、敵がこちらを見つけにくい代わりに、見つかったら最後。万一狙撃されたら、かわす前に宇宙の塵になっ  
てしまっているだろう。

「まして、ロサですら抵抗できなかつたと言っていたな。あのジェスタというモビルスーツ……。さつきから戦闘の気配が無いが、俺を狙撃しようと言うのか……？」

戦闘があつたことは間違い無い筈なのに、まるで何事も無かつたかのように、辺りは静まり返っている。

「まだ後方のガーゴイルへは向かつていない筈だ。この空域を抜けているなら、レーダーにも必ず動きがある。何処だ？何処に居る……？」

カルロスが呟いた瞬間、近くでまた連邦軍艦船が爆発した。その弾みで、ミノフスキー粒子の格納庫から積まれているだけの残量が全て霧散し、一気にレーダーが無力化される。

爆風に気を取られたカルロスにほんの僅かな隙が出来、フォースジエガンの機体が流された。不意に現れた、3機の機体。

「しまった・・・!!」

一斉にビームサーベルで斬りかかる濃紺の機体に、両腕のシールドライフルの銃口を向けようとするが、間に合いそうも無い。

銃口に刃が触れようとした瞬間、カルロス機の背後からビームライフルの閃光が走った。

「殺らせるかよ!!」

後方から、別のフォースジエガンがシールドライフルを構え、もう一閃の火を噴く。

「ちっ!」

グレインが舌打ちし、ジエスタ1号機が一旦フォースジエガン部隊との距離をとった。だがい、移動中も執拗にフォースジエガンの狙撃が続く。

「さっきの爆発のおかげで、ガルダの母艦を見失ってしまった。何処だ？」

「ガルダ隊を相手に他所見とは、いい度胸だな。ファイア！」

総攻撃を意味するカルロスの号令と共に、20門のシールドライフルが一斉にジエスタめがけて火を噴いた。一撃だけでなく、乱射とも言える火線の勢いで、グレインを追い詰める。

更に、ガルダ隊とは別にもう一本の火線も、明らかにジエスタを狙って狙撃してきた。しかも、フォースジエガンの火線とは比べ物にならない程、見た目でエネルギーが大きい。まるで戦艦の主砲が1門だけ撃ってきたような、そんな感覚。

辛うじてそれをかわした後も、続けざまにジエスタ1号機に砲撃がついてくる。戦艦の主砲では、明らかに不可能な精密射撃。グリプス戦役で「百式」やZガンダムが使っていた「ハイパーメガランチャー」を思わせる攻撃に、グレインが思わず声を上げる。

「何だ！？別動隊！？」

フォースジエガンからの嵐のような砲撃と、別動隊からの強大な火線。全ての砲撃をギリギリでかわしながら、この状況では最も狙いやすい別動隊への反撃を試みる。

「たかが一機増えたところでっ…！」

忌々しげにグレインが眩き、スクリーンを埋め尽くす光の隙を突き、ビームライフルを連射する。

だが、機体を一瞬でも止められない状況では、如何に上級者が高性能機を操ろうと、照準が定まるものではない。徒な弾数の消耗を避けることは出来ず、徐々に残段数が減っていく。押されているという自覚に、思わずグレインが舌打ちした。

「これ以上、無駄な弾の消耗は出来ん、引き上げるぞ！」

カルロス達に背を向け、グレイン達のジェスタが一齐にバーニアを噴かす。

「逃がすか…！」

10機のフォースジエガンと別働隊の一機が、一齐にバーニアを噴かす。同時に、カルロスが母艦・ガルダに向けて、ミノフスキークラス粒子の中でも確実に伝わる発光モールス信号を送り、再びアストルの爆発跡の方角へと向かう事を告げた。それを受け、ガルダも高速巡洋艦の機動力を活かし、即座に進路を変更した。

「ナターシャ、本当に良かったのかね？親父さんに黙って乗り込んできて」

ロード軍の補給艦「サジタリアス」の艦内。

白衣を着た、白髪の年輩の研究員と思われる男が、同じ白衣を着た、20代前半の短髪の黒人女性に声を掛けた。

「父がずっとロード革命戦線に参加を続けてきたのは、自分が正しいという信念の顯れ。私も、革命軍に参加する事が正しいと考えるのは、ごく自然な事でしょう？それとも、何か後ろめたい事でもおありなのですか？」

わざとすました顔で、件の黒人女性・ナターシャ・フォースが答える。父・グレインの血を色濃く受け継いだ、短い巻き髪に180cm近い長身。話している白衣の男と比べても何ら遜色ない、厳つい軍人の体格に見える。

「駐留軍を壊滅させてから戻る気かしら？予定の帰還時刻より、随分遅いようですが」



呆れたような声を出し、無然とした表情でナターシャが時計を見ながら言い放った。

「まあ、戦闘のデータは多いに越した事はないさ。その方が、君も分析のしがいがあるだろう」

「確かに、そうですね・・・」

「ジェスタが戻って来たが、連邦軍の部隊に追われている模様！！出られるモビルスーツは全機出撃用意！！各銃座、砲台も手の空いている者が手伝え！ただしギリギリまで使いな！！」

サジタリアスの艦内に、非常警報が鳴り響く。だが、自分の機体にまっすぐに急ぐパイロットとは対照的に、右往左往する白衣や士官服の面々。

サジタリアスは、輸送艦。一応、最低限の自衛の為に銃座や砲台も付いてはいるが、戦艦のように360度回転するような本格的なものではないし、戦闘要員など、本来は殆ど居ない。だが、アストルの爆発から逃げ延びた、ほんの一握りのギラ・ドーガの部隊が、救援を求めてきたものを救出していたのである。

もともとのサジタリアスの任務は、民間の輸送船に偽装して、グラ

ナダとアストルの間での補給物資の受け渡し。たまたま物資を満載してグラナダを出港した直後に行き先を失ったところへ、敗残兵が逃げてきた為、受け入れるだけの余裕はあった。3機のジエスタも、最も近い拠点として、アストルの巨大な残骸に身を隠していた、サジタリアスに出入りしていたのである。

「敵はフォースジェガン10機、未確認機1機！・・・グリアラスが接近しているだ！？スコープオンがこちらに向かっているというのか！！」

「何事だ？」

サジタリアスのブリッジで、焦りを隠しきれない様子で大声を出した索敵手に、艦長が尋ねた。

「スコープオンが複数の艦船とともにスイート・ウォーターを出港して、こちらに向かっていると。既にグリアラスが出撃したようです」

「本来は戦場をちよろちよろして欲しくないところだが、仕方あるまい。手を借りるとしよう。何しろ、こいつではまともな戦闘なんて出来っこないんだ、命を預けるしかない」

諦めと安堵が半々の、複雑な表情で艦長が呟いた所へ、ナターシャ

がブリッジにやってきて、通信士席の傍らに立った。ヘッドセットを奪い取り、送話口に向かって声を荒げた。

「全く！どうせ調子に乗って、ガルーダに自分から仕掛けたんでしよう！？何でこんな時に、そうやって調子に乗るのよ！？追撃を受けて、サジタリアスまで敵について来られたら、共倒れになっちゃうのよ！？分かってんの！？」

怒鳴り散らされた相手が、居るはずが無いと思いついていた声の主に驚き、声を失う。数秒たってから我に返り、グレインが目を剥いた。

「こんな所で、何をしてるんだ！？」

「私は補給部隊所属よ？補給艦以外の船に乗っている方が、余程おかしいでしょう」

父譲りの短い巻き髪に、母譲りの童顔の丸顔を横に背け、涼しい表情で受け流すナターシャの態度に、グレインが雷を落とす。

「お前まで戦争に関わる事は無いだろう！」

「だったら、父さんが戦争に関わるの、やめてよ。大学で、親が革

命軍に居るって知られただけで、居場所が無くなっちゃったんだから」

ナターシャが呆れた声を出した。

本当は、親友が次々に離れていく悲しさに、泣きたい気分だった。

だが、次第にそんな状況にも慣れてしまい、軍に参加する事で、再び人と接する喜びを思い出し始めたばかりだった。

だから、この時のナターシャが、辛うじて涙を堪える事が出来た。今のナターシャにとっては、自分を人として認めて貰うには、此処に身を置くしか無かったのである。

「それとも、私に知られたら、まずい事でもしてるの？」

「そんな事は無いが、しかし」

狼狽の色を隠しきれないグレインの言葉を、ナターシャが遮った。

「子供はね、親の背中を見て育つものなの。親がいくら反対したって、自分の親が正しいと思ったら、憧れるものよ。私が関わって欲

しくないなら、まず父さんが戦争をやめて。自分が正しいと思えない事をしてる自覚があるのならね」

「私は革命軍こそ正義だと」

「だったら、私がしてる事は、正しいんでしょう？正しい事をするのに、親に反対される謂れは無いわ」

また言葉を途中で遮られ、グレインが言葉に詰まり出した。

「……死ぬ事になるかも知れんぞ。私は、お前に自分より早く死んで欲しくは無いから……」

「戦時中に、早く死ぬも何も無いでしょう。それに、戦争で無くても、人間は死ぬ時は死ぬわ。だったら、いつ死んでも後悔しない生き方をしたい。それだけよ」

結局、反論の言葉が尽きた。コロニーも何も無い所で放り出す訳にもいかず、グレインはナターシャの参加を黙認するしかなかった。

「とりあえず、スコープオンがこっちに向かっただけで連絡が入ってる。サジタリアスでは、ガルーダ相手に勝ち目は無いわ。グリアラスにも手伝ってもらおうから、そのつもりでいて頂戴」

「何でこんな時にグリアラスが!？」

「私を知る訳ないでしょう。とりあえず、追いかけてきてる連中、どうにかして頂戴」

ナターシャが言い放った途端、無言でグレインからの無線が切れた。爆発した様子は見えないから、スイッチを切って戦闘に集中するつもりなのだろう。

「自分がしてる事が正しいと思うんなら、はっきりと言い切りなさいよ。なんでもってるのよ、馬鹿親父……」

いらだった表情で呟いた後、ナターシャがヘッドセットを外し、通信士に投げ返した。

「まさか、ナターシャがサジタリアスに乗っていたとはな……。私が戦争に巻き込んでしまったということなのか……。?だとしたら、父親失格だな、俺は……」

フォースジェガン部隊からの狙撃をかわしながら、グレインが諦めたような表情で呟いた。



### 39・通わない心（後書き）

2011年1月7日に戦闘シーンを少し細かく書き直しました。

長期間更新を休んでいましたので、リハビリを兼ねたものです。

次章の戦闘シーンも、後日少し弄ります。



#### 40・謝罪（前書き）

戦争であるが故に、成り行きや不可抗力とはいえ、悔やんでも悔やみきれない事態はどうしても発生してしまふ。

結果的に家族を巻き込み、自分だけが生き残った者達が、その苦悩を吐露する。

「やはり、もう少し接近しないと当たらないか。追いつけるか……!?」

グレインの撤退を決意させた、ジエガン改造機のパイロットが、数回のメガ・ビームランチャーを放った後、ジエスタに全てかわされたのを見届けて呟く。

「ガーゴイルが無事なら、今はガルダの部隊を援護するのが先決だ。結果的にガーゴイルの援護にもなる。ロサという子が言っていたフローラという子を死なせるわけには行かない。フレアと同じような歳の子たちの未来を、潰させはしない!!」

行方不明の愛娘を思い、再びジエスタに照準を定めようと彼がディスプレイのレーダー表示を改めて見た時だった。

ロード軍籍の輸送艦と、戦艦らしき船影、それに加えてモビルスーツと思われる機影が、赤いE(ENEMY=敵機警戒表示)と共に接近しているのが目に入った。同時に、明らかに狭い間隔での砲撃が、彼の乗機を掠める。

「……グリアラスか!？」

呟いた瞬間、レーダーが死んだ。ミノフスキー粒子が濃い空域に入ったのだろう。

「ちいつ、レーダー無しでグリアラスと戦えっていうのか！？ガル―ダ隊を呼び戻さないと、深追いさせたら危険だな」

「ファンネル付きの機体を相手に余所見とは、良い度胸だ」

「!？」

ジエガン改造機のパイロットが、ガル―ダとジェスタが交戦している筈の方角をちらりと見た瞬間、既に目の前にグリアラスが迫っていた。

振りかぶられたビームサーベルの光に気づき、瞬時に自機のビームサーベルを抜いて、切っ先を合わせる。だが、予想外の方角から出てきた切っ先に驚いたのは、ロードの方だった。

「左利き!？」

「たまには左利きのパイロットだって居るさ」

モビルスーツでは極めて珍しい、左での居合い斬り。激しいスパークが散ると同時に、ジェガン改造機の左手の甲からグレネードランチャーのミサイルが飛び出す。

「ちっ！」

素早くグリアラスがかわす。だが、その背後から、かわした筈のミサイルが現れた。最近になって、ぶつけるだけなら漸く一般機でも実用可能なレベルになった思念波誘導ミサイルが、グリアラスを指す。

「これは、ファンネルミサイル!?・・・なめるなっ!！」

ロードが忌々しげに叫び、グリアラスのファンネルで、ちらりとも見ないままミサイルを狙撃する。その爆発の背後から、ギラ・ドールが数機、ジェガンを狙いマシンガンを乱射してくる。

「流石に、親玉が一人でうるつくなど、有り得ないか」

一旦グリアラスと距離を取った直後、グレインたちのジェスタが同じ戦闘空域に入った。グリアラスの姿を見たグレインが、思わず声を大きくする。

「やはりグリアラスか！総帥、こんな所で何を・・・!?」

「自分も今回の標的だという事を、お忘れらしいな」

ジエガン改造機のパイロットが、メガ・ビームランチャーをジエスタに向けた。その厳つい砲口から、眩い光の束が吐き出される。

「そんな取り回しの悪い武器で、ジエスタを捉えられると・・・何だと!？」

ジエスタを狙った筈の砲撃は、標的にはかわされたものの、輸送艦サジタリアスを捉えた。貨物室やデータ分析室の辺りから、負圧によって船内の物品が次々に宇宙に投げ出されていく。その中に見えたノーマルスーツを見たグレインが、絶叫した。その瞬間、サジタリアスの艦体が爆発し、炎に包まれる。

「ナターシャ!？」

「もらったぞ、ジエスタ!!」

カルロスが叫び、フォースジエガンのシールドライフルが火を噴く。同時に他のフォースジエガンからも狙撃を受け、これを一斉にかわ

す、グリアラスとジェスタ。そして、ジェガン改造機。

「ガルーダか！面白い、纏めて沈めてやる！！ファンネル！！」

ロードが呟き、グリアラスの10基のファンネルからの火線が狙撃元へと放たれ、フォースジェガンが散開した。だが、この軌道上に全速力で追ってきていた彼らの母艦・ガルーダが居た。蒼白になってカルロスが叫ぶ。

「まずい・・・！！」

「殺らせるかよ！！」

強い意思のこもったグールの叫び声と同時に、複数の閃光が走り、グリアラスの狙撃が途中で爆発した。

「ガーゴイルからの援軍！？」

ロードが声を上げると同時に、レオンがグリアラスの存在に気付いた。

「グリアラス！？ならば、ジェスタなど相手にしている場合じゃない

いな！」

レオンの乗機がグリアラスへと進路を変え、レイラやゲールがそれに続く。

「グリアラスは殺らせんよ!!！」

グリアラスの所属艦スコープイオンから、援護の砲撃が次々に発射され、レオン達の進路を塞ぐ。

「ちつ、流石に敵軍のエース艦か。簡単には殺らせてくれんか・・・くっ!!！」

「そんな一般機で、ジエスタやグリアラスを相手に出来るか!!！」

グレインとパブロ、バセットのジエスタ3機がいつの間にもやら接近し、レオン機に襲い掛かる。

「レオンさんは殺らせない!!！」

レイラが鬼気迫る表情で叫び、ビームライフルの激しい連射でジエスタを狙撃する。だが、その弾道を見切ったグレインが、ビームラ

イフルを放った。

「落ちろ！！」

レオンの攻撃をやり過ぎつつ放たれる、ジエスタ3機の連携砲撃に追い詰められ、必死にレイラが逃げ回る。

「レイラ！！！」

「カルロス！？キヤアアッ！！！」

カルロスに気を取られた一瞬、レイラの集中力が乱れ、ジエスタの狙撃の一本が右足首を穿った。

「！！！」

レイラのジェガンが衝撃で流された先に、グレーの貨物シャトルが見えた。ガーゴイルがグラナダ入りする直前に出発した闇ルート機が操縦不能に陥り、戦場に紛れ込んできたのである。

だが、脚部のスラスタが片方破壊された状況では、姿勢制御を仕切れない。そのまま、レイラのジェガンがシャトルの浮遊している



方角へと突っ込んでいく。

「ダメ！民間機を巻き込む訳には・・・お願い、みんな気づいて！」

停戦信号弾を打ち上げ、レイラが祈るように目を閉じる。状況にいち早く気づいたのは、カルロスだった。

「レイラ！！・・・くそっ、間に合え！！！」

全速力でフォースジェガンがレイラの元へと向かわせるカルロスに、グリアアラスのファンネルが砲口を向けた。

「邪魔するんじゃないよ！！！」

カルロスが鬼のような形相で怒鳴り、ファンネルを次々に狙撃して、破壊していく。漸く、フォースジェガンがレイラのジェガンの腕を掴んだ。

だが、グレインのジェスタが、この瞬間に安堵した二人の隙を見逃さず、切れ目無くビームライフルを連射した。

「……！！ダメだ、避けきれない！！」

カルロスが、一旦掴んだジエガンの腕を引き寄せ、ジエガンが流れる向きを、あらぬ方向へと強引に変えた。予想外の方向への加速Gに、レイラが堪らずにうめく。

その直後、フォースジエガンの全身を、無数の火線が穿った。だが、最後の足掻きでフォースジエガンが放ったシールドライフルの2本の狙撃が、グレインの乗るコックピットを貫通した。

「レイラ……両親のこと、すまなかった。最後に、せめて君だけでも守れて、良かった」

カルロスの言葉が、フォースジエガンの爆発と共に途切れた。同時にグレインのジエスタも爆発する。2機の爆発の衝撃波で、制御不能のシャトルが木の葉のように流され、スコープイオンの船体へと近付いていく。

「そ……んな……。カルロス……。また私を置いて行っちゃうつもり！？ねえ、答えなさいよ！！カルロス！！まだ……。聞きたい事が……。山ほどあるんだから！！」

目の前で炎上するフォースジエガンから、レイラは目を離す事は出来なかった。呆然と炎の明かりを見つめながら、搾り出すような声

で、レイラがそこまで言い終わった時、もう一度爆発したフォース  
ジェガンとジェスタが、跡形も無く四散した。両者とも脱出ポッド  
が出なかったところを見ると、狙撃を受けた拍子に、どちらも電気  
系統がトラブルを起こしたのだろう。

2機のリーダー機の爆発を見届けたロードが、その猛炎に照らされ  
る貨物シャトルのグレーの機体が、ゆっくりとスコープピオンのブリ  
ッジに近付いているの気付いた。

「ちっ！あのままではブリッジにぶつかると、やむをえん！！」

再び停戦信号弾が上がり、漸く両軍の機体が動きを止めた。

「逃がすか！！」

ジェガン改造機のメガ・ビームランチャーの砲口が、グリアラスを  
捉える。だが、その瞬間、シャトルとグリアラスが被った。

「くそっ、また故障機か！・・・やむをえん、ハートレイの悪夢の  
再現は出来ん」

ジェガン改造機のパイロットが舌打ちし、唯一隊長機用のアンテナ  
を付けているレオンのジェガンに近付いた。それを見て、戦闘終了

と判断したレオンが、炎の前で佇むレイラ機に近付き、ジエガン改造機が誘導されるように続く。

「レイラ、引き上げよう。ロサを拾いに行かないといけないし、エリオットの事も結論が出ていない。いずれにしても、グラナダへ戻らないと」

グリアラスがシャトルを曳航するのを見つめながら、レオンが忌々しげに呟く。

レオン機がレイラ機の右方に、劣わる様にそつと手を掛ける。直後、レイラの号泣する声が、無線に響いた。

「……カルロス……さん……？」

ゆっくりと目を開け、呟いた声の主の視界は、ぼんやりとしていて定まらない。

見慣れない、白い天井。全身の感覚が鈍い。ここまで力が入らないという事は、自分の体は地面に横たわっているはず。なのに、背中には地面の感触がない。

「・・・麻醉・・・？という事は・・・ここは、病院なのか・・・」

思いのほか回転が遅い脳で、そこまで判断出来たころ、漸く天井に焦点が合ってきた。途端に、自分の体に布団が被せられている感覚が鬱陶しく感じられ、顔をしかめた声の主は、力が入らない上半身を、気合いだけで無理やり動かし、布団を退けようと体を起こした。

「・・・っ!？」

声にならないうめき声が出たのは、胸、正確には肋骨の下の辺りに、刃物が刺さったような痛みが走ったからである。だが、血が皮膚を滴る独特のぬめつとした感触や、匂いがしない。

「気がついたかね？」

「!？」

まだ判断力がついて来ていないのだろう。相手の声の穏やかさにも関わらず、反射的に体が戦闘態勢になる。いや、なっかつもりだった。いつものように手が動かず、足も全くといって良いほど動いていない。焦るあまり、その足先に視線を向けた直後、白衣が視界の隅に入った。

「ロサ」ヒシモト君。連邦軍のパイロットだったんですね、君は「

「・・・院長先生」

見知った顔が目に入り、肺の空気を全て搾り出すような深い吐息を吐き、ロサが膝に視線を落とした。

「さつき様子を見に来た連邦軍の関係者が、目を覚ました途端に暴れださないように麻酔を強めに掛けておけと私に言い残して行った。本来なら、起きる事も出来ない筈の処置をしてあるのに、よく起きられたものだ」

感心と呆れが半々の視線をロサに向け、院長が苦笑した。

「それより、先ほど来た軍の関係者、というのは・・・？」

誰だったんですか、と問おうとしたロサの口から、言葉が途切れた。まだ、言葉が上手く出てこず、舌も回りが悪い。

「はつきりとは名乗りませんが、軍の身分証は持っていたので、君の容態だけは伝えておきました。面会などは希望されません

でしたので、すぐに引き上げて行ったのですが」

「そうですか」

「それよりも、まだ体を動かしてはいけません。幾ら内視鏡手術とはいえ、まだ傷口が塞がっていない筈だ」

「手術!？」

ロサが慌てて、リネンの手術着の胸をはだけ、自分の腹を覗き込んだ。よく見ると、わき腹の古傷に、新たに糸が縫いこまれている。

「若干予定より早くなったが、君が運ばれてきた後、ついでに済ませる事にした。現場が混乱していて、レベル4の火傷を想定していたから、手術室をあけておいたんだ。だが、最も手当てが必要なのは、火傷ではなくそちらだった。心拍に明らかな細動が出ていたからね」

「なるほど・・・」

諦めたように溜め息をつくロサを見て、院長が穏やかな笑みを浮かべたあと、思い出したようにロサに言った。

「私には意味は分からなかったが、フロアを頼む、という言葉も、彼に伝えておきましたよ。確かに承った、と言っていましたか」

「!?!?.. 何ですか、それ!?!」

思い切り不意打ちを受けた気分で、ロサが目を白黒させる。

「手術の直前に、君が呟いていたのを、そのままお伝えしたのですが、何かまずかったですかね?」

純粹に悪意の無い、きよとした顔で院長がロサの顔を見る。あちやく、とも、しまった、とも言出しそんな顔で、ロサが肩を縮めて俯いた。

「明日の検査結果を見て、明後日には退院予定、と思ってもらって結構です。手術自体は上手く行っている」

「...俺、どのくらい眠っていたんですか?」

「ここに運ばれてから、ほぼ24時間が経っています。術後、もうすぐ20時間です」



「そんなに！？まずい、こっしちや居られな・・・っ!？」

慌てて立ち上がるうとするロサだが、わき腹の痛みになじ伏せられ、立ち上がる事は出来なかった。

「もう一度、麻酔を打った方が良いか」

冷静な顔で言う院長には、冗談で言っている様子は見られなかった。その様子に、余計に茶化されたような気分になったロサが、力の入らないまま無理やり搾り出すような声で、院長に食って掛かった。

「俺の乗っていた船が緊急発進して、どこかの戦闘空域へ応援に行ってしまうてるんです！俺だけ寝てる訳には・・・」

「そんな体で、モビルスーツの操縦を許可する訳にはいかない。大人しくしていることだ」

堅気の者ばかりを相手にしている訳ではない院長が、ねじ伏せるように言葉を発する。冷静な状態であった方が、恐らくロサは沈黙していたのであろうが、麻酔から醒めたばかりの脳が、落ち着いていられるはずは無かった。

「ガーゴイルにはフローラが乗ってるんだ！俺が傍に居ないと・・・！！」

「そんなに仲間が信用できないかね？」

院長が醒めた目でそう言って、捲し立てる口サを見つめた。口サの動きがぴたりと止まる。

「私だって非番の日はあるし、間に合わない時には緊急手術を仲間任せれることもある。その程度も任せられないような信用できない医者は、この病院には居ないよ。君の船の仲間とは、それほどの盆暗なのかね？だったら、無理には止めない、行けば良い。そのフローラという人物を任せるに値する仲間が乗っているというのなら、仲間を信じる事が出来るというのなら、私の指示に従いなさい」

まっすぐに口サを見据えて、院長がはつきりとした口調で言い切った。

暫くの間、睨むように院長の目を見ていた口サも、反論の余地も無く、親友と喧嘩した幼児のような顔で俯いた。まだ力の入らない両手が、先ほどまで鬱陶しくて仕方無かった筈の布団を、求めるように震えながら掴んでいた。

だが、その震えが不意にピタリと止まった。

”・・・いつの間に、俺はそんなに他人を信用出来なくなっていたんだ？”

ハートレイが戦争に駆り出されてからというもの、ロサはAガンダムの調整を手伝わされていたとはいえ、直接顔を合わせるどころか、声すら聞くことが出来なくなった。親子の会話がほぼ完全に断絶してから、はや2年近くが経っている。

その間に、母親の不貞に心を苛まれて裏の世界に関わりを持ち、それに気づかないハートレイにも苛立ち始めた。ついに呆れも通り越して、親に対する気持ちが完全に醒め始めてしまったのも、ほぼ同じ時期。

それでも、Aガンダムに乗ることで、父親とつながりを持っている、と自分の気持ちや寂しさを誤魔化し続け、何とかロサの心は正常と言えるギリギリのところまで踏ん張っていた。

そんな中での、突然のハートレイ撃墜の知らせに、益々奔放に振舞う母。見つからない家出した姉。

本来、思春期の頃こそ、最も信頼できなければならぬ家族を信じられなくなったロサが、まして他人を信じるなど、有り得ない話だという風に考えるようになってしまったのは、至極当然の事と言える

た。

だが、ガーゴイルに乗ってから、クルーはロサを「必要な兵器」としてではなく、本当に家族のように接してくれた。特に、レオンやレイラは、迷ったときには道を示し、手を差し伸べてくれる、本当の意味でロサが信じられる存在になってくれた。

だからこそ、ロサは、彼らには恩を感じ、無条件に守りたいと思える存在になった。

だから、ガーゴイルにすぐにも戻りたい。いや、戻らなければならぬ。その責任感によつて、ロサは焦っていた。麻酔から醒めたばかりの、霞が掛かったような思考力では、それも無理もないといえる。

しかし、改めて言われてみると、今のガーゴイルのクルーが、それほど無能だとは、ロサには思えない。今の状況で、フローラを完全に守りきれないかと問われれば、実はそうでもないだろうと、今のロサには思える。

「仲間、か・・・」

表情は考え込んだままではあったが、意味も無く、ロサは握ったままの手を見つめながら、そう呟いてみた。その響きが、意固地にな

っていたロサの気持ちを、ゆっくりと、穏やかに解きほぐしていった。

”任せるしかない、か。しかし・・・さっきの夢の内容が気になる。みんな、無事だといいが・・・”

「どっつするかね？」

詰問するわけでもなく、とって優しいわけでもない。強いて言えば、覚悟を問う口調と言えはいいだろうか。そんな口調で院長に問われ、ハッと現実に戻ったロサが、院長の顔を見た。

「・・・わかりました。暫く、お世話になります」

まっすぐに院長の目を見た後、ロサが深く頭を下げた。その真摯な表情を見届けて、院長は何も言わずにいつもの温かい笑顔を見せ、病室から立ち去った。

”人間、自分一人で出来る事には限界があるって事か。今まで一人で居たから、気付きもしなかった。いや、自分一人で何でも出来ると思ひ込まなければ、生きてこれなかったんだから、仕方が無いさ。今のこんな体でフローラを守り切る事なんて、出来る訳が無い。俺は、まだ高校にも入れないような歳なんだ。任せられるところは、任せよう。頼れる人間がいるなら、頼ればいいじゃないか。2日程

度、フローラを任せられないようなヤワな連中じゃない。今は、ガーゴイルの仲間を信じよう”

何でも一人で出来ると思っていた驕りに対する呆れ。焦っていた自分への自嘲。無力な現在の自分への諦め。そして、仲間を信頼出来る、今の自分の置かれている状況に対する安心感。

様々な感情が一気にあふれ出て、思わず口サはふつと笑みを漏らした。その表情には、自分が傍に居なければフローラが死ぬと言う危機感は、全くと言って良いほど見られなかった。

戦闘後、グリアラスと、何とか生き残ったバセット、パプロのジエスタが帰還したスコープイオンのモビルスーツデッキ。

ファンネルの補充、ジエスタの損傷箇所をチェックと、メカニックたちが忙しく動き回っている。

そんな場面の傍らに、先ほどロードに保護された、グレーの貨物シヤトル、もといヤミ営業のシヤトルが、忘れられたように佇んでいる。

一応、手の空いていたブリッジのクルーがマシンガンを持ち、艦内にシャトルの乗員が入り込まないよう警戒にあたっている。

そんな状況の中、一人の男がシャトルの出入り口のハッチを開けた。

どう見ても貨物機の乗員ではない、いわゆる黒服のスーツを纏い、表情が窺い知れないサングラスをかけた左頬に十字傷を持つ男が、警備にあたっていたスコープイオンのクルーに声を掛けた。居る筈の無い「乗客」の姿に一瞬あつげにとられたものの、すぐにマシンガンを構えなおし、クルーが警戒心むき出しの表情を男に向ける。

だが、顔を出した男は、携帯端末（手帳サイズのパソコンのようなもの）の画面をクルーに向け、慇懃な態度でクルーに伝えた。

「ロード中将に、これを渡すように指示を受けている。渡しておいてくれ」

「・・・？」

それに気づいた他のクルーが、シャトル側面のハッチを開けて声を掛けてきた男へ、訝しげな表情を向けた。彼もまた、貨物シャトルと思い込んでいた為、ノーマルスーツも着ずに黒服のダークスーツを着込んだ男が現れたのが意外だったというのもあるのだが、それ以上にロード本人に渡せという男の手に乗っている小さなディスプレイ

レーに警戒心をむき出しにして、数名のクルーが銃を向ける。

「中身は？」

「怖い顔をしなさんな。爆弾とかその類のものじゃないよ。まあ、今のロード軍にとつちや、爆弾級に強いのもかもしれないが。あるモビルスーツの凶面だ」

スコープオンのクルー達の態度に苦笑して見せた男は、一番近くに居たメカニツクに、携帯端末を投げ渡した。それを受け取り、電源が入ったままの端末を覗き込んだクルーは、その凶面の内容を理解し、驚愕の表情を見せる。

「これは……確か……」

「ジオンの残党の使っていたもの、と言えば理解できるか。そのジエスタの凶面も、別のファイルに入れてある。お宅らの今の知識だけでは、ジエスタは手に負えんだろうと思ったのでな。ついでに持ってきた」

「……貴様、一体何者だ？」

「お宅らにとって、敵じゃない事は確かだということは、理解出来



るだろう？スウィート・ウォーターまで、ゆっくりさせてもらっぜ」

男はそういつて含み笑いを見せた後、何事も無かったかのようにハッチを閉じ、シャトルの中へと引き上げていった。

「申し訳ありませんでした。私が戦闘中に私情を挟んだばかりに・・・カルロスが・・・」

ガルダからの指示で、戦闘を終えた後、一旦ブリッジに立ち寄ったガーゴイルのパイロット達は、艦長のアルカスに挨拶した。だが、レオンより先に、レイラが開口一番、謝罪の言葉を口にした。

普段は冷静沈着なレイラも、流石に何か体を動かさずには居られなかったのだろう。沈痛な面持ちで言い終えた後、唇を噛み、涙目になっている事に、レイラは自分で気付くことは出来なかった。

「君が、カルロスが言っていたレイラ少尉かね。大丈夫か、と尋ねたところで、無駄だろうな。気の毒だが、挫けずに生きてくれとか私には言えない。気の利かない上官で、申し訳ない」

その言葉を聞いたレイラは、溢れる涙を堪えきれず、再び嗚咽を漏

らした。声を上げて号泣する事を何とか堪えたのは、士官として人前で号泣するべきではないという、プライドがそうさせたのだろう。

ロサを救助する以前から、アルカスは事情は聞かされていた。

だから、ガーゴイルへロサを送り届けた際にも、ロサに気付かれないうちに、アルカスは、レイラと会っておけとカルロスに何度か言い聞かせようとしていた。

だが、カルロスには、レイラの両親を奪ったという自責の念から、頑なに拒んだ。今になって思えば、無理にでも会わせて置けばよかったと、アルカス自身も後悔を隠し切れなかった。

右手で口を覆い、自分の意思で止められない涙と嗚咽と必死に闘うレイラに、周囲の男達は、揃いも揃って、掛けるべき言葉を見つめる事が出来ずに居た。

重い沈黙に耐えかねたレオンが視線を泳がせた先に、見慣れないパイロットが一人、佇んでいた。

ガーゴイルには居ない顔。年齢はレオンより少し下、という程度であるう、ベテランの雰囲気を感じさせる。だが、アルカスやガルーダ隊の集団とも距離を置いている様子に、レオンが何気なく声を掛けた。

「貴方は？」

自分が声を掛けられると思っていたのだから。レイラに同情するような視線を向けていた男が、ハッと我に返り、レオンの方を向いた。

「グラナダ基地でテストパイロットを務めています。ケイイチ・キリサキと申します。階級は大尉です。ガーゴイルの緊急発進の知らせを受けて、ジエガンの試作改造機で応援に参りました。改造やパイロットの離脱で、通常よりガーゴイルの戦力が落ちている事は伺っておりましたので。グラナダ基地も、まさかガーゴイルが出るとは思っていませんでしたので、私も許可を得ずに、試作機を無断で持ち出してしまいました」

レイラを気遣うようにちらちらと視線を送りつつ、ケイイチと名乗ったパイロットがレオンに答えた。その目元を見たレオンの表情が、やや訝しげなものに変わる。

”この男、どこかで見た事があるような気がする。別に警戒する必要の無い、身近な場所で……。一体、何処で……？”

「どうかなさいましたか？」

ケイイチが、レオンの表情に疑問を持ったのか、不思議そうに首を傾げる。その表情に疚しい部分が無かったが故に、レオンがある人物を思い出した。

「・・・もしかして、娘さんがいるのではないかね？」

「・・・居た、という方が正しいかもしれません。シャインリバーの戦闘時に、住んでいた建物が倒壊し、以後行方不明になっているとの事ですので・・・恐らく、その時に・・・」

寂しげな笑みを浮かべるケイイチに、レオンが再び声を掛けた。

「それは、丘陵地の教会の孤児院では？君の娘さんと言うのは、ロサと同じ位の、15歳前後ではないか？」

まだロサを知っているかどうかも確認していないのだが、レオンはそう言わずには居られなかった。尋ねられたケイイチが、驚きを隠せずに目を丸くした。

「ロサ君は15歳なのですか？・・・そうだ、今思い出したのですが、ロサ君から言伝てを預かっています。暫くフローラを任せると伝えてくれ、とのことでした。・・・失礼、ご質問の返答になっていませんでしたね。確かに私の娘も、生きていれば15歳です。し

かし、私が聞いている範囲では、現在も行方が分かっています。私がつと上の階級なら、こんな事にはならなかったのでしょうか。・・・」

「どづいつことだ？」

「娘が生まれてすぐに、住んでいた居住地が第二次ネオ・ジオン戦争直前のスウィート・ウォーターの暴動に巻き込まれ、連邦軍関係者は逃げ出さざるを得なくなった。私達家族も、その時に移民せざるを得なかったのです。だが、私のような下士官では、移民先のシヤインリバーでは比較的安全な、官公庁付近に住居を構える事は出来ませんでした。あのコロニーにはスウィート・ウォーター出身者が多かつたため、官公庁街の外で娘の身の安全を確保するには、出生地を問わず受け入れてもらえる孤児院に身元を知らせずに預け、親が連邦軍関係者である事を隠すしかなかったのです」

レオンの問いに最初は驚いていたケイイチだったが、少しだけ間を空けて、やりきれない表情でケイイチが静かに話し始めた。黙って聞いている、というよりは言葉が出ないというのが正しいであろうレオンの様子に、ケイイチが言葉を続ける。

「とはいえ、娘はその事情を知る筈も無い。教会の方にも、一切事情は知らせずに預けざるを得ませんでしたからね。だから、もし生きていたとしても、私の事を、自分を捨てた薄情な人間だと恨んでいることでしょう。そして、その薄情な親のせいで教会の倒壊に巻き込まれ、悲しい思いをする羽目になったと思っっていることでしょう

う。彼女が生きていても死んでいたとしても、恨まれこそすれ、感謝される謂れは無い。あんな時期に生まれなければ・・・あんな場所に生まれさえしなければ、幸せに暮らせたかも知れない。私の階級がもつと上なら、そんな思いをさせずに済んだ筈なのです」

娘の経緯を話すうち、表情がだんだん自虐的に、そして、話し終える頃には後悔に満ちた表情で、ケイイチはうつすらと目に涙を浮かべていた。

親にならなければ、決して分かる事の無い感情。子供には決して理解できる事は無いであろう後悔。上官の前である事も忘れ、ひとしきり話し終えたケイイチの両手は、固く握られたまま震えていた。

「君の奥さんは、今、どうしているんだ？」

「妻は、スウィート・ウオーターの暴動で、亡くなりました。火災瓶が飛び交う中で、娘を庇って・・・。病院へ搬送され、娘の無事を聞いた直後、息を引き取ったと聞いています。当時、私は暴動を鎮<sup>な</sup>庄する部隊の最前線に居て、彼女が亡くなった後もまだ衝突の最<sup>さ</sup>中に居た。連邦軍が撤退する間にその事を知らされ、無我夢中で娘を連れ出し、シャインリバーに逃げたのです。その後、すぐに娘を孤児院に預け、更にグラナダへと逃亡した私は、軍の基地に居た元の上官を頼り、テストパイロットとして生きながらえました。しかし、妻を荼毘に付する余裕は、残念ながらありませんでした。恐らく無縁仏として、現地の集団墓地に埋葬されている事でしょう。妻には、本当に申し訳なかったと思っています。当時の事とはいえ、

私のような下士官と一緒になつたばかりに・・・」

レオンも、理不尽な攻撃によって、妻と娘を茶毘に付する事すら出来ないまま亡くしている。ケイイチの話は、とても他人事と思える内容ではなかった。

「・・・俺だけでは無いんだな」

レオンの口から、無意識に言葉が零れ落ちた。

「ガーゴイル隊はともかく、ケイイチ大尉はどうするかね？ガルダもガーゴイルも、今のままでは、これまでより少ない人数のまま戦い抜かなければならない。さっきの戦闘を見ている範囲では、どちらに入っても十分やっていけるだけの技量はあると思うのだが・・・」

艦長席から、アルカスがケイイチを見て尋ねた。ガルダも総隊長のカルロスを失い、ガーゴイルもエリオットの補充については未だに見通しが立っていない上にロサが入院中ときている。グリアラスやジェスタを追い返した今、ロード軍が直ぐに逆襲に転じることは無いだろうが、このタイミングで再度の襲撃があれば、無傷で追い返すことはかなり難しいであろう事は、容易に想像できる。

「現段階では、グラナダ基地の許可を得ずに出撃してしまいました

ので、自分の意思では、所属に関する事柄について決定することは出来ません。下手をすれば軍法会議ものの違反行為ですから、あまり期待はされない方が宜しいかと思えます」

「そうか。我々も、貴君が応援に駆けつけてくれなければ、カルロスだけの犠牲では済まなかっただろう。出来る限りの事はさせてもらうと、本部に伝えておく」

「」配慮、感謝いたします」

アルカスの言葉に、ケイイチが真摯な表情で頭を下げた。

「我々は、いずれにしてもロサと合流する為に、グラナダへ引き返す必要がある。大尉も、同伴願えるかね？」

レオンの言葉に、ケイイチが表情を変えずに頷いた。



#### 40・謝罪（後書き）

モバゲー時代のストーリーを完全に破棄し、全く新しく書き起こしていますので、この辺りからは更新速度が極端に遅くなっています。

作者の能力不足もあり、楽しみにして頂いている方にはまことに心苦しい限りですが、お待ち頂いた分だけ、ガンダムとして楽しめる内容となるよう努力いたしますので、ご理解願います。

今後は、週一話ペースでは能力的にかなり厳しいため、月一話ペースの更新を標準とさせていただきますと思います。

#### 41・来訪者（前書き）

歓迎されざる者たちが、招かれざる場面へと出くわしてしまう、運命の悪戯。

それぞれが抱える心の傷が、それまで見ず知らずの筈だった者たちに曝け出される。

## 41 来訪者

退院検査までは大人しくする事を余儀なくされたロサは、点滴などの必要もあり、暫くは病室のベッドで横になっていた。

細いとはいえ、今回彼が手術を受けたのは、心臓に栄養分を運ぶ冠動脈。歴とした動脈だから、余程手術の腕が良くなければ、今ロサが居るような6人用の大部屋に来る事は出来ない筈である。

だが、幸か不幸か、この広い病室に、今はロサ以外に誰も居ない。主の居ないベッドが並ぶ景色が、侘しさを際立たせている。

アスペルガー障害という発達障害を持つロサにとっては、普通の人付き合いというのは生まれつき苦手。本来、彼にとって、今の環境は適している筈であった。

” 目を見て話すの、苦手だからな、俺は……。寂しいと言えば否定出来ないが、常日頃から大勢と一緒に居ると、気が滅入る。この方が気楽で良いかな……”

しかし、言葉に出さなかった彼の心情も、完全な負け惜しみでしか無い。今の彼の表情には安堵は見えず、寂しさだけが浮かんでいた。

ガーゴイルでは、パイロットは専用の個室を与えられている。

だから、一人になりたければ気の済むまで一人で居られるし、誰かと話したくなれば部屋を出て、ブリッジに行けば必ず誰かと話が出る。如何に戦艦のブリッジといえど、何時如何なる時も私語が出来ない訳ではなく、状況が平和そのものなら通信士や砲撃手は手が空いているし、操舵手だって自動操縦に任せて、顔を横に向ける事も出来る。

だが、この環境では、何処へ行っても、ロサにとっては見知らぬ顔しか居ない。

生来、ロサは人見知りが激しく、初対面の者とは殆ど話をしない。リリアと初めて会った時も、たまたま彼女からフローラの話を持ち出され、答えざるをえなかったから渋々ながら話をした、というのが本音だった。

院長や看護師たちも、何時でも手が空いている訳ではないから、ロサから話をする事は控えていた。彼らの手を塞いでまで話をする必要性も無いし、治療や術後の注意点など必要な話も聞いてしまっているから、これといった話題が見つからないのである。

「そう言えば……リリアの具合はどうなんだろう」

一人で考えを巡らせ、気が滅入りかけていたロサは、リリアの事をふと思い出し、リリアの病室へと向かった。

既に手術着や浴衣を着る必要も無いロサは、搬送時の衣服に特に損傷は無かった為、それを洗って貰っただけで、アナハイムを出た時の服をそのまま来ている。点滴や食事など、時間が決まっている事柄以外に、特に注意点もないし、彼を束縛する要素も無い。

他の面会者は、私服で歩いているロサが入院患者と気付かずに素通りしていく。時折すれ違う医師や看護師と挨拶を交わしながら、ロサはリリアの居る集中治療室へと向かった。

いつものように抗菌服を借りて消毒を済ませると、珍しく窓口担当のいつもの看護師が、ロサに声を掛けてきた。

「ついさっき、珍しく面会の方が来てたよ。知り合いの人かい？」

「面会？リリアに？」

「落ち着いた感じの女の人。30代後半くらいの歳かな？武器を持って無いし、一応モニターで様子を見てるんだけど、特に触れようとする気配も無いから、そのまま居て貰ってるんだけど」

「孤児院からここへ迎えに来れるほど、予算に余裕は無い筈なんだけどな・・・？まあ、会って話をしてみますよ。ありがとうございます」

いぶかしげな顔をしつつ、会って見ない事には話が先に進まないと考え、ロサは病室のドアをくぐった。

「！？」

他に来訪者が来るとは思わなかったのだろう。透明のカーテン越しに、相手が警戒心剥き出しの視線をロサに向けて来た。

「心配は要らない。銃も持って無いし、俺は彼女の友達だから、俺が殺す必要性が無い。戦争の事は俺に任せると言っているから、もう彼女が戦場へ出る事も無い。第一、俺もこの入院患者だ。まだ無理が利く体じゃない」

ロサが両手を開いて肩の前へ出し、戦意が無い事を相手に伝える。それを見た女性は、安堵の表情を浮かべ、大きく肩で息をついた。それを見たロサは、カーテンをくぐり、まだコードやチューブが多数繋がれたまま意識も戻らないリリアの傍らへと近づいた。

呼吸や脳波は漸く安定したらしい。モニターや心拍を知らせる電子機器類は、一定のリズムを刻んで動き続けている。

「大部屋に居ても、話し相手も居なくて暇なんでね。退屈しのぎに様子を見に來ただけさ。院長に頼んで、病院関係者に箝口令を敷かせたのも俺だし、彼女の事は、ほんの一部の信頼出来る人間以外には、一切話していない。今は、極秘で連邦軍の護衛もついているから、心配ない。大規模病院の患者が大勢戦争に巻き込まれたら、連邦軍としても叩かれるネタを増やしてしまうだけだからな。今のこの警戒レベルは、連邦政府の最高議会の会場並みだ。ここに来る途中の通路にも、本来は総司令官のお抱えのSP（護衛警官）が2人、張り込んでいた。信用出来る警戒体制だ」

「・・・そうですか」

「あんたも、軍の関係者か？」

落ち着いた、しかし完全には警戒を解いていない表情で尋ねた口サに向け、女性は首を縦に振った。

「軍と言っても、革命軍。それも、前線の任務ではなく、裏工作ですけどね」

自嘲ぎみに静かに笑みを浮かべる女性。好戦的な人物では無い雰囲気は、確かに最前線で戦ってきた口サにも、彼女が非戦闘員である事は理解出来た。

しかし、彼女の口から出た聞き捨てならない台詞が、ロサの表情を  
厳しいものに変えた。

「裏工作？」

「彼女をドナーとして紹介する代わりに、ある人物に情報のリーク  
をさせていたのです」

「・・・なるほど。そのある人物ってのが、ガーゴイルの乗組員の  
誰かな訳か」

ロサの声が、異様なまでに低くなっている。相手の言葉の意味を理  
解した瞬間、滅多に感情を露わにしない彼の表情にも、その激しい  
怒りが現れてしまっていた。

「彼女の血液型は、RH-（アールエイチ・マイナス）のAB型。  
それ自体が200人に一人の確率なのに、骨髄移植が出来る確率は、  
さらに低い」

「それでも、そんな裏取引、人間のやる事じゃねえだろ。自分のや  
ってる事に、良心が痛まねえのかよ？」



低い声のまま、吐き捨てるように言う。ロサの表情は、夜叉か鬼神と言っても過言では無いものだった。「ずっと様子を見ている」という窓口担当者の言葉を聞いていなければ、間違いなく相手の首をへし折っていただろう。

相手を殺したい衝動を必死に抑えながら、まさに紙一重で堪えていたロサには目を向けず、リアの顔の辺りを虚ろな目で見たまま、また自嘲的な声で相手が答えた。

「私も、全く同じ環境で移植を受けて、助かったの」

ロサの表情から怒りが消え、驚愕を通り越し呆然とした表情に変わる。

「あなたは生まれていない年齢かも知れないけど・・・第二次ネオ・ジオン戦争で使われた「アクシズ」の譲渡に関する裏工作は、連邦軍の高官だった父が、私を助けるために、ジオン兵の一人をドナーとして紹介する代わりとして、段取りを整えたものだった」

絶句するロサをよそに、女性は静かに話し始めた。

「手術が成功した当初、私はその事情を知らなかった。でも、それを知った時には愕然とした。私一人のために、どれだけの人が犠牲になったのか。考えただけでも身震いがしたわ。だから私は、そん

な父に失望して、反連邦活動に参加したの。でも、偶然シャインリバーへ潜入する事になって、彼女の事を知った時、とても他人事とは思えなかった」

「・・・そのシャインリバーで移植を待つてる人間を救うには、他に手段が無い。軍の裏工作を担当するくらいだから、当然リアの事は把握出来た。だから、今回の裏工作を始めたのか」

ロサの表情からは、既に怒りは消えていた。声色も、元の少年のものに戻ってしまったている。

難病を抱え、それでも生き延びられる手段があるという事は、非常に幸運な事であると、自分自身が一番よく分かっているからである。

ロサの持つて生まれた「完全大血管転移症」も、執刀出来る技術を持つ小児外科医は、非常に少ない。たまたま、ちゃんと執刀出来る医師が近くに居たから、彼も生きていられるのだ。

例えそれらの行為が人道的には間違っているとわかっていても、目の前の女性の行為を責める事も、処刑も覚悟で身内を助けようとした「裏切り者」を責める事も、今のロサには出来なかった。

「何も疑わないという事は、気付かれていたのね」

表情も視線の向きも変えないまま、女性はリアを見つめている。

「ワルザが攻めて来るタイミングが、あまりにも良すぎたからな。右舷側の航空灯火の回路に、ONを常時維持出来るスイッチと、押しただけONになるバネ入り押しボタンスイッチを並列に仕込み知らせる時だけ押しボタンでモールス信号を作っていた、ということころまでは突き止めた。これなら、監視モニターにも異常表示は出ないし、通信関係にも異常電波で知られる心配は無い。普通、航空灯火なんて艦内から注視する奴は居ないから、点滅に気付く乗組員も、まず居ない。一番肝心な、裏切り者が誰なのかまでは、まだ分かっていなかった。今までの話で、漸く見当がついた」

その言葉に、相手の肩がピクリと跳ねた。許しを乞うような目で、女性は口サを見た。

「・・・殺すの？彼を」

その瞬間、リアの呼吸音に、ほんの僅かだが変化が見られた。人工呼吸器のマスクの曇りが、それまでより大きくなったのである。その変化にいち早く気付いたのは、口サだった。

「・・・リア？」

それまで動く気配の無かったリリアの口元が、震えた。それでも、彼女にとっては必死の叫びなのだろう。目元から、涙が一粒、流れ落ちた。

「リリア、無理しなくてもいい。もう一度、ゆっくり言ってくれ。いま、何て言おうとしたんだ？」

彼女の耳元で囁く様に優しく声を掛け、マスクの直ぐ近くまで耳を近づけたロサに、悲しげな吐息が聞こえた。

”ロサ、お願い……。許してあげて。私も、頑張るから”

不意に、ロサの目元が熱くなった。それまで見えていたものの全てが、涙で滲んだ。

ロサの頬を伝い、シーツに落ちた涙の音が、病室のどの音よりもはつきりと響き渡った。リリアの口元に耳を寄せようと、ベッドに突いていた左手が、シーツをぐっと握り締めた。

感極まり、十数秒間にわたって言葉が出なかったロサに、再びリリアの吐息が呼び掛ける。

”ロサ……”

「分かった、もう良い！分かったから！！・・・それ以上、喋るな。君がこれ以上無理して死んでしまったら、何にもならない。だから、もう喋るな」

思わず強い口調になるロサ。だが、思い切り叫んだつもりだった言葉は、声にはならなかった。ロサの口から漏れた吐息だけが、リリアの耳元で響いた。

話し続けるうちに、徐々に気持ちが悪くなった。涙目ながら落ち着きを取り戻した様子で、ロサがリリアの耳元で話しかける。

「手段は、ある。彼を殺さずにガーゴイルから下ろす方法は、ちゃんと考える。だから、心配するな。……後のことは、俺に任せろ。必ず、みんなが上手く幸せになれる方法を考える。だから、生きていてくれ。良いね？リリア」

”・・・ありがとう”

マスクの中に響くりリアの吐息が、漸く落ち着きを取り戻し、一定のリズムに戻った。優しくリリアの頬をなでるロサに、女性が困惑を隠しきれない様子で話しかけた。

「本当に、彼を死なせずに済むの？ 事の全貌が明らかになったら、間違いなく彼は戦犯・・・処刑されて当然という事に・・・」

「・・・話を全部聞くまでは、そう思ってたんだがな。彼をいま俺が殺して事情が明るみになったら、家族に遺族年金も下りなくなるだろう。そうになったら、骨髄移植どころじゃなくなる。ただ、その事実が判明した以上、今のまま乗り続けて貰う訳にはいかない。中途採用の親父やレオンさんと違って、シアスさんは勤続20年を越えてるんだ、退職金で何とかなるだろう。家族の看病の為に辞めると言えば、突然辞めたって、みんな納得する筈だ。実際に死と隣り合わせの重病なんだから、末期ケアの為だと思っるのが、むしろ自然だろう」

そこまで話した口サの表情は、悲しげな、やるせないものに変わっていた。

「だが・・・それで助かったとしても、それを知った時に本人がどんな思いをするのか、一番よく分かっている筈のあんたが、そんな裏工作に関わって、よく正気を保っていられるな。俺なら、良心の呵責で潰れちまう」

「私のせいで死んだ人達への、せめてもの罪滅ぼしのつもりです」

女性の表情が、漸く穏やかなものに変わった。しかし、強い悲しみを隠しきれないその瞳を見た口サは、リアの目元に視線を移

した。

「リリアにも、そんな気持ちがあっただろうな。こんな結果になった事を、戦争で人を殺したから罰が当たったなんて思ってた。・ ・ ・自分が正しいと思っただ行動の結果で打ちのめされると、本当に辛いんだよ。・ ・ ・」

「あなたも、そんな経験があるの？」

「目の前に、俺が正しいと思って行動した結果が出てるじゃねえか。友達に、それも女の子に、こんな怪我をさせて。・ ・ ・後悔しない方がどうかしてる」

吐き捨てるような、自分への怒りと苛立ちを抑えきれない口調で言った後、ロサはリリアから顔を背けた。

「リリアは、もうロード軍の中では死んだ事になっているのか？」

「ええ。私も、こんな裏工作からは、早く逃れたい。それに何より、当人達の身の安全を確保する為には、それが一番だから」

それを聞いたロサが、安堵の溜め息をつき、表情を緩めた。

「こっち（連邦軍側）の処理は、俺に任せて貰おうか。そっち（革命軍）側の事は、あんたに任せる。リリアの思いを無駄にしないように、最善を尽くしてくれ」

「本当に、任せて良いのね？」

「さつきみたいに命懸けでものを頼まれたら、流石の俺だって無碍にはできねえよ。……ったく、何でこんな優しい子が、戦争に巻き込まれるかなあ……」

リリアの顔を見つめたまま、敵である筈の女性の念押しに、遣る瀬無い思いを隠せない声で、ロサが答えた。

『戦闘は完了したんだな？』

「ああ。艦内の戦闘配備は解除しても構わない。ただ……」

無線でのメッシとのやり取りの最中に、ガルーダを発ってガーゴイルへと近付いていたレオンは一瞬、口をつぐんだ。



「もう一機、規格外のジェガンがグラナダから応援に来てくれた。その機体も回収したいんだが・・・」

『一機くらい増えたところで、大した負担にはならんだろう？それとも、何か不都合でもあるのか？』

普段から、所属外の部隊でも味方機なら分け隔て無く受け入れるというのが連邦軍の暗黙の了解だが、それを差し引いても、レオンは弾薬や推進剤の補給なども、艦載機と同等に行うべきという持論を持っている。

マークがガーゴイルの整備班長として転属してきた当初、随分その件でレオンとは揉めたのだが、結局マークが折れる形で、そのスタイルを貫いているのが、現在のガーゴイルである。

その先鋒のはずのレオンが、所属外機の回収に関して口をつぐむというのは、極めて異例である。メッシの口調がいぶかしげになったのも、無理は無い。

「機体は、今うちのジェガンが受けている改造のプロトタイプ、いわゆる試験改造機というやつだ」

『何だ？そんなに厄介な機体なのか？Aガンダムを扱ってるうちの

メカニックが、手に負えないとでも?』

メッシがそこまで言った後、暫く沈黙が流れた。時間にして十数秒。無線の向こうの空気の重さを感じ取ったメッシは、レオンの言葉を待った。漸く、重苦しい空気の中、レオンが口を開く。

「そのパイロット、恐らくフローラの父親だと思われる人物だ」

『!!--!』

今度は、数十秒に亘り、重い沈黙が無線を支配した。

通常なら、世の中が平和な状態であるならば、恐らくそれは喜ぶべきことなのだろう。だが……。

「グラナダでフローラを下ろすとすると……」

『ロサの反対加減は、尋常ではないだろうな。頷くはずが無い』

グラナダの治安の悪さは、メッシが自ら、フローラ達に艦外へ出ることを禁じたほど。更に、それを聞いたロサは、安堵の表情を見せていた。レイラからも、ロサからグラナダの裏社会の様子を聞かさ

れ、寒気を覚えたと聞かされている。

無論、グラナダにも地元の子供は居るし、彼らも学校には通っている。しかし、そういった土地で育った人間は、慣れによって、ある程度自衛の手段も持っているし、その手段を行使することにも躊躇はしない。自分の身が危険となれば、相手を殺すことにも躊躇いを持つ事は無いのである。

教会の孤児院で、半ば修道女のような生活をしていたフローラが、極めて荒れているといえるグラナダで下ろされても、地元に馴染む事は決して出来ないだろう。それどころか、いじめで済めばまだマシ。下手をすれば、犯罪に巻き込まれて命を落とすかも知れない。

メッシヤレオンですら、そんな事を考えるのである。フローラを守る為には命をも投げ出す覚悟をしているロサが、首を縦に振るなど、決して有り得ない。

「どつするっ」

『とりあえず、当人たちに話をさせてみよう。我々が口を出すのは、それからでも遅くは無い』

「最終的な判断は、艦長に任せる。今回は、俺が口を出せそうな問題では無さそうだ」

『問題のパイロットにも、着艦後すぐにブリッジに顔を出すように伝えてくれ。フロアにも、それとなく伝えておく』

「頼む」

無線を切った後、艦内に戦闘配備解除を放送し、メツシが疲れ切った顔で、組んだ両手に額を寄せ、考え込む表情を見せた。

「今に始まったことじゃないが、次から次へと、厄介ごとばかり続く艦だな・・・」

メツシが呟いてから数分後、前方の大窓にレオンたちのジエガン隊が見え始めた。

「ご苦労様でした。おかげさまでうちのパイロットが無事に戻れたこと、感謝します」

ブリッジに通されたケイイチに、艦長席からフロアへ下りたメツシが挨拶した。

「残念ながら、ガルーダのパイロットが亡くなりました。もう少し私の到着が早ければ、少しは違ったのかもしれませんが・・・」

「彼は、無許可で試験機を持ち出し、独断で応援に来てくれたそう。恐らく出撃時にも、ひと悶着あったんだろう。遅れたのはやむを得ない。ただ・・・撃墜されたのは、カルロスだ」

メッシとケイイチの会話に割り込む形で、レオンが声を潜めてメッシに伝えた。カルロスの名が出た直後、レイラがぐつと目を強く閉じた。それをわざと見ないように、レオンが話を続ける。

「ガルーダも、今後は体制の立て直しに奔走しなければならない。暫く、戦力として当てには出来ないだろう」

「・・・そうか。撃墜されたのは、ガルーダの隊長機だったんですね。取り返しのつかない事になってしまった・・・」

漸く状況を理解したケイイチが、右手で額を抱え込んだ。

「大尉が来て下さらなければ、うちのパイロットにも深刻な被害が出ていた筈だ。あの口サですら不用意に手を出せなかった機体を相手に、よく頑張って下さったと思いますよ」

メッシの声色には、自責の念に駆られるケイイチに対する同情の色が、ありありと見て取れた。

「とりあえず、食事の用意をさせます。今後の事を考えれば、特にパイロットは体調を整えて貰わなければならない。何しろ、今のガーゴイルはガンダム抜きで8機しか無い。グラナダ到着までに出撃が必要になった場合、申し訳ないがケイイチ大尉にも出撃して貰う必要がある。その為にも、ゆっくり休めるよう、手配します」

「・・・わかりました。お世話になります」

ケイイチが姿勢を直し、深く頭を下げた。

少し時間は遡る。

戦闘配備解除の知らせを受け、フローラたちは厨房へと入り、食事の用意を再開していた。

宇宙戦艦であるガーゴイルは、基本的に航行中は無重力だから、ど

んなに重いものでも放っておけば浮遊を始めてしまう。子供の乗艦自体が想定されていない厨房で、背の低い子供2人が包丁を持つのは危険なので、必然的にアックスとメルサには、材料の運搬や調理済みのトレーの配膳を中心に手伝わせる事になる。

民間機のパイロットの食事が、食中毒による航行不能に陥らないよう、機長と副機長とで異なるメニューにするのは有名だが、それは戦艦の食事にも同じことが言える。

戻ったパイロット達や早番者の食事を乗せたカートを押して、子供達が元気な足取りで厨房を出て行くのを見送った後、フローラが遅番者のメニューの準備を始めた後、出撃していたジェガンが戻ってきた。

着艦時の軽い衝撃を感じ、フローラはこの中にロサが居ると思い込み、ロサに会いたいという、はやる気持ちを無理に抑えながら、煮立っている大鍋に切った野菜などの材料を放り込んでいた。

「ロサ、喜んでくれるかな？」

今回は、ロサが好きなウィンナーカレー。意外にも、前線の兵士の食事というのは、前世紀から殆ど変わっていない。

レイラの話ではロサは病み上がりの筈で、カレーは少々胃に重いか

と思ったものの、それよりも好きなものをしつかり食べて体力の回復を図る方が良さであろうという、フローラの個人的な配慮であった。幸い、カレーに関しては、多少多い回数になっても、誰も文句は言わない。それほど、このインド発祥の調理法は、偉大なのである。

だが、楽しそうに笑みを浮かべていたフローラの表情が、9機目、つまり出撃前には居なかつた筈の機体が着艦した直後、突然曇つた。

ガーゴイルのパイロットの中で、一番カタパルトから飛び出すのが下手なロサは、実は一番上手に着艦する。その腕前は、出撃時と帰還時で、一機減つたかと感じるほど着艦時の船の揺れが小さい。帰還時に一機多く感じるほど、ロサの着艦は下手ではない。

更に、ロサの気配を感じない。似ている雰囲気はあるものの、それが別人のものであるという事に気づいたフローラは、無意識に手元から顔を上げた。

「ロサじゃ、ないの・・・？」

自然と口から零れ落ちた言葉を、自分で聞いて漸く理解したフローラは、近くに居た当番兵にロサの安否を尋ねたが、彼女もそれについては知らない様子だった。



「ロサの身に何かあったなら、もつと艦内がざわついている筈でしょう？前に似たような事があった時は、まるで艦が沈没するかと思うような騒ぎだったから、私もヒヤヒヤしたわよ。でも、今はそんな様子も無いし、さっきの艦長の放送も落ち着いてた。いま戻ってきた中に居なくても、問題は無い筈よ」

「レイラさんは、ロサがグラナダからモバイルスーツを借りて来てるって言うてましたけど・・・」

「まあ、敵に交信が漏れたらまずいし、何かの手違いで誤報が流れてきてたのかもしれないけどね。どのみち、ガンダムを引き取りにグラナダに引き返さなきゃいけないから、すぐに会えるわよ。心配しなくても、大丈夫。それより、あなたがそんな心配をしすぎて体を壊したら、「なにフローラに無理させてんだ!!」とか言っって私達がロサにぶん殴られちゃうから、あなたも体調を崩さないように気をつけなさいね。あの子、あなたの事になると、ホント見境が無くなるんだから」

苦笑を浮かべつつ、フローラの方をポンと叩き、当番兵の女性は次の工程の準備を始めた。

普段なら、恥ずかしさで顔を赤くして呆けてしまうフローラだが、今回の彼女の表情は、むしろ青ざめていた。

パイロットの帰還に合わせて早番の食事が用意されたのだが、ガイ  
ゴイルに部屋を持たないケイイチは、とりあえず遅番者に混じり、  
食堂で食事を済ませる事になった。

メツシに案内され、空いていた席に腰を下ろしたケイイチに、フロ  
ーラが食事の乗ったトレーを持ってきた。見慣れない顔を見て、や  
や訝しげな表情になるものの、隣にメツシの姿を見て安心したのだ  
ろう。先ほどの不安を見せないよう、愛想笑いを忘れずに作った。

「ぶっぞ」

「ありがとう」

受け取ったトレーをテーブルに置き、笑みを浮かべるフローラの目  
を見て、ケイイチは硬直したように表情を失った。だが、流石に彼  
も軍人である。瞬時に表情から戸惑いを消し去り、食事に手を付け  
始めた。

「では、ごゆっくり。部屋は、空いているパイロット用の部屋を用  
意させておきます。食事が済んだら、インターホンで艦長席にご連  
絡ください」

「お手数をおかけします」

ケイイチへの声かけを済ませた後、食堂を出ようとするメッシを、フローラが呼び止めた。

「あの・・・先ほどの方が、グранаダから応援に来られたという方ですか？」

「ああ、そうだ。何故それを？」

「ロサがグラナダでモバイルスーツを借りて、こちらに向かっていると聞いたので・・・。てっきりロサが合流しているものだと思っていたんですが、違う人だったので・・・。でも、あの人、私の事を何か知っているんじゃないですか？」

” 流石に鋭いな。俺よりも、状況を把握しているんじゃないか？”

内心、フローラの鋭さに舌を巻きつつも、落ち着いた様子を崩さないように気をつけながら、メッシはフローラの話の聞こえという態度を見せた。

「なぜ、そう感じた？」

「トレーを受け取ったとき、明らかにあの人の表情が変わったように見えました。でも、グラナダには私の知り合いは居ませんし……誰なのか、気になって」

誰なのか、というよりは、何者なのか、という方が正しいという心境なのだろう。

狭い軍艦の中、しかも相手はプロの軍人。幾らロサの親しい者が傍に居るといつても、か弱い素人の女の子が不安を感じるのも、無理は無いといえる。

「その事なんだが、後で彼の事について、少し話したい。全員の食事が済んだら、ブリッジに来てくれないか」

「私が……ですか？」

真剣な、少し暗さを感じさせる表情でメツシが言ったのに対し、フローラが目を丸くして聞き返してしまった。

今まで、わざわざ用があるといつてメツシがブリッジにフローラを呼び出すなど、一度も無かった。それなのに、今になって、一体どうしたというのだろう。気付かないうちに、何か艦を追い出されるような粗相をしまっていたのだろうか？

急に不安に染まったフローラの表情に、メッシがやや焦りを隠しきれなくなつた表情で苦笑を浮かべた。

「別に、何か不具合があつたとか、怒らなければいけないことを君がしでかしたとか、そういう事ではない。だが、君の意思を聞く必要があることなのでね」

「私の意思・・・？」

「詳しくはブリッジで話す。とりあえず厨房が一段落したら、顔を出してくれ」

「わかりました」

メッシが踵を返し、ブリッジへ向かう背中を見るフローラの顔には、困惑の表情がはっきりと浮かんでいた。

”何か、言い難い事なんだろうな、きつと・・・”

「フローラ、近くに居ないの？」

先ほどの当番兵の女性が呼んでいる声を聞き、我に返ったフローラは、慌てて厨房へと引き返した。

「おかしいな……。普通なら、起き上がるのも億劫な筈なんだが」  
点滴を吊るキャスターを押しながら、普通に歩いてトイレから戻ってきたロサを見て、院長が真面目な顔で首を傾げた。その顔を見て、ロサが思わず苦笑を浮かべる。

「刺されたり撃たれたりしても、取り敢えず体を動かさなければ、戦場では生きていけませんからね。戦争なら投降すれば助かりますけど、マフィアやヤクザ組織が相手じゃ信念もへつたくれも無いから、動けなくなったらその場で消されてしまう。内視鏡手術の傷程度では、動けなくなる程に酷いとはいえませんよ。それにしても、流石ですね。まだそれほど時間もたっていないのに、無理やりベッドに押し戻されるような状態じゃ無いんですから」

冠状動脈に背側動脈を繋いで詰まりやすかった部分をバイパスしているの、細いとは言えど動脈を縫っている訳だから、もし動くと傷が広がるような縫い方をしているのなら、歩くどころか起き上がろうとするだけで看護婦が飛んでくる筈。

それにも関わらず、目の前に執刀医が居るのにそれが無いという事は、全くと言って良い程、血管の縫い目に隙間が無いという証拠。ロサが流石と言ったのは、院長が慌てて自分を止めなかったのを、手術の技量に対する自信の表れと見たからである。

「ここには、毎日のように救急車が救急救命にやってくる位だから、予定されていた手術程度なら研修医でもやってのける事が出来る。私も、赴任直後は驚いたものだが、それだけ土地柄は良くないという事だ。その分、我々が儲かるというのは皮肉な話ですがね」

「でも、そのおかげで俺も助かった。まさかこの歳で心室細動が出るなんて、思っても見ませんでしたよ。心のどこかで、「自分はまだ死ぬ訳が無い」なんて、思い上がっていたみたいだ。全く、恥ずかしい限りです」

ロサがもう一度苦笑した後、表情を正し、院長に向き直った。

「さつき、リアアの病室を覗いて来ました。俺と、もう一人の面会者の会話が聞こえていたみたいです。無意識に、かもしれませんが、口が動いた」

「先日のロサ君と同じですかね。強い思いは、無意識にでも人を動かす。医学の知識だけでは決して起こらないはずの動作が、出てしまうようになる」

「すみません、その話にくれぐれも他の人には……。フローラの顔を、まともに見られなくなりますから」

「良いですねえ、若いというのは」

うろたえるロサの様子に、穏やかな笑みを浮かべて院長が笑う。返事も無い事にロサが何も言えないのは、それだけ動揺している証拠である。

短い苦笑の後、深い溜め息をつき、ロサが廊下の窓の外へ目を移した。

「何で、敵同士になっちまったんだろう……。あるいは、俺がガンダムなんかに乗らさえないければ、こんな事にはならなかったかも知れないのに」

「ガンダム……。か。かつては、連邦軍の威信の象徴だったのでがね。今では、スペースノイドにとって、抑圧の象徴に感じられるようになってしまっている。しかし、ロード革命戦線の動きは、テロそのものだ。決して、スペースノイドといえど、賛同できるものではない。観光コロニーであるブリュターやガルーダ部隊への襲撃は、決してやってはならなかった」



院長の言葉に、ロサの顔色が変わる。

「ガルダへの襲撃って、まさか！？・・・犠牲者が出たんですか！？」

「サイド3付近の交戦でパイロット一人が亡くなったと、先ほどのニュース速報で流れていましたが・・・」

「じゃあ、あの夢は・・・。カルロスさん・・・なんで・・・!!」  
堪らずロサが唇を噛み、両手を握り締めた。目を強く閉じ、首を何度も横に振る。遣る瀬無い気持ち、自分の無力さを痛感したロサの手を震わせる。ジエスタ強奪の後、切るのを忘れていた指の爪が掌に食い込み、赤く血が滲んだ。

その後、数十秒の沈黙が、誰も通らない廊下を支配した。気持ちを無理矢理リセットする為、一度だけ深呼吸をしたロサが再び顔を上げ、院長を見た。

「院長先生、退院を許可して下さい。・・・やはり俺は、ガンダムのパイロットみたいだ。どんなに後悔しようと、どんなに避けたいと思おうと、乗らなければならぬと本能が言っている。これ以上人を傷つけたくはないと思っているのに、俺の手で戦争を終わらせな

ければならないと、もう一人の自分が心の奥から叫んでる。もう一度、俺がガンダムに乗って、戦争を終わらせないといけないみたいだ」

「いま、軍港に戦艦は居ません。交戦が終わったのなら、弾薬を補給をしに戻ってくる筈です。戦艦が戻り次第、退院検査を行いましよう」

もはや止めることを諦めた院長が、医者の方識が通じない呆れと、ロサが戦争を終わらせてくれるという期待が入り混じった、複雑な表情を見せて頷いた。

「失礼します」

やや緊張気味に声を出したフローラが、メッシたちが居る艦長席へ向かった。彼女がブリッジに来るのは、保護された日以来。その時を1回目として、今回で2回目。

特に特殊な錠前が付いている訳でもないが、部外者が見る事はまず無いような機器が並ぶブリッジは、明らかに自分にそぐわない場所というイメージがあったのと、初日にメッシが電話に向かって怒鳴っていた記憶が相乗して、子供達だけでなくフローラも無意識に敬

遠している場所だった。そこへ来いというのだから、緊張するなという方が無理なのかもしれない。

予想していたとおり、グラナダから来たというパイロットも、メッシの傍らに佇んでいる。彼の表情に、先ほど食事を手渡した時の緊張感が漂っているのが、フローラにもはっきりと感じ取れた。そのせいで、こわばった表情になったフローラに対し、メッシが穏やかな声で話しかけた。

「休む暇も無しで、すまないな」

「いえ、大丈夫です。あまり疲れた顔をしていると、ロサが心配しますから。それより、お話というのは？」

「彼は、ケイチキリサキ。グラナダ工場のテストパイロットをしている」

”この人の目・・・私に似てる・・・？”

フローラも思春期の女の子なので、鏡は毎日のように見る。自分の目をまじまじと見る事は少ないが、それでも顔の中にあるパーツの形くらいは、流石に覚えているものである。

ケイイチと呼ばれたそのパイロットの目は、鏡の中に映る自分の目とよく似ている。メツシの言葉を聞き、改めてケイイチの顔を見たフローラは、その考えが頭から離れなくなった。

「彼は、スウィート・ウォーターから娘さんと共に逃亡し、シャインリバーで娘さんの安全を確保する為に孤児院に預け、自分はグラナダに逃亡していたと言っている。娘さんの名前は、フレア。綴りは、"flare"だそうだ。だが、暴動の真只中で走り書きした為に、名札にきちんとした筆記体では書けなかったらしい」

「・・・私の"flora"は、その書き損なった筆記体をシスターが読み違えて名づけられてしまった、という事ですか？」

どこか他人事のような、静かな表情でフローラが尋ねた。だが、その視線はメツシには定まっておらず、虚空を見つめているように見える。人の目を見ずにフローラが話すというのも、極めて珍しい事である。強い違和感を感じながらも、メツシが言葉を続けた

「戦乱の中での出来事だから、まだはつきりとは分からない。だから、きちんとした検査をして、血縁関係を確認したいということなんだ。自分の娘と確認できれば、一緒に暮らしたいと思っているそうなんだが」

「仮にその人が私のお父さんだとしても、私はグラナダで降りるつもりはありません」

間髪入れずにフローラがメツシの言葉を遮った。静かな口調ではあったが、普段は決して見せないような強い口調で、きっぱりとフローラが拒否の意思を示した。驚きのあまり、絶句するメツシとケイイチをよそに、フローラが言葉を続けた。

「私だけ、なんでしょう？メルサやアックスはガーゴイルに残される、という事ですよね？」

確認というよりも、静かな怒りが見て取れる表情と声。予想外の迫力に、メツシが言葉に窮した。返事の無い苛立ちに、フローラの口調は強さを増していく。

「私は、少なくともメルサとは同じ孤児院の、同じシスターの手で育てられた。だから、今でもメルサを実の妹だと思っています。私をガーゴイルから降ろすというのなら、妹であるメルサや、兄弟同然のアックスも一緒に降ろしてください。出来るなら口サも一緒に居て欲しいけど・・・それは、今の状況では無理なことは理解しています。でも、私とメルサを引き離す事は、絶対に誰にも許さない。例えばそれが口サの指示であったとしても、私はメルサを・・・妹を戦場に向かう船に残して、自分だけガーゴイルを下りたりは出来ません。そんなこと、出来るわけが無い」

例えば口サの指示でも拒否する。それは、フローラにとって、決して強がりでもなければ、比喩表現のつもりでもなかった。仮に口サが

この場に居たとしても、ロサにどんな侮蔑の言葉をぶつけられても、フローラはメルサを残して自分だけがガーゴイルから降りるなど、考えるつもりは無かった。

戸惑いを隠せなくなったケイイチを蔑むように睨んだフローラの口から、とめどなく言葉があふれ出す。それは、ロサにすら言わなかった、心の傷を曝け出すものだった。

「孤児院で育った子供が、世間からどんな目で見られ、どんなに悲しい思いをしているのか、あなたにわかりますか？私は、小さな子供が親に抱かれて、「あそこは捨てられた子供が行くところなの？」と尋ねているのを聞いたことがあります。その親は、何て答えたとしますか？ただ一言、「そうだよ」って……。涙が止まらなかった」

フローラの小さな白い手が、体の左右でぐっと握られ、震えだした。

「孤児院には、事故で両親を亡くした子も、ロサみたいに戦争で両親を亡くした子も居るんです。私みたいに、捨てられた子供ばかりじゃない。それなのに……。そんな風に蔑まれている子が、たくさん居るんです！そんな誤解と偏見を、何のためらいも無く小さな子供に刷り込んでしまう親が、世間には満ち溢れてるんです！私達だって、好きで孤児院に居る訳じゃない、自分だけではどうしようもなく、生きる為には頼るしか方法が無かった！なのに、只でさえ両親を亡くして悲しい思いをした子が、何で更にそんな風に蔑まれて、辛い思いをしなきゃいけないの！？私は、あの子達がそんな

風に思われてると思うだけで、悲しくて堪らない！だから、私がメルサをそんな誤解や偏見から守らなきゃいけないの！例え何があっても、私だけは絶対にメルサの味方で居なければいけないの！！そんな私が、今更メルサを放り出して、自分だけ父親に甘えて生きていけると思うの！？今更そんな生き方を始めて、私が幸せになれると思ってるの！？馬鹿にしないで！！私達には、もう帰る孤児院すら無いの！私が居なくなったら、あの子はどうやって生きていくのよ！？」

話しているうちに、感情が堰を切って溢れ出したのだろう。だんだんと声を荒げ、悲しみを増していくフローラの言葉と表情に吞まれ、周囲に居た者達は、誰も言葉を発することが出来なかった。

そこまで息も継がずに一気に捲し立てたあと、軽く咳き込んだフローラは、肩で息をしてはいるものの、憑き物が落ちたように大人しくなった。深呼吸をして呼吸を落ち着けた後、再びフローラが口を開いた。

「・・・ごめんなさい。皆さんが私を気遣って下さっているのに、今みたいな言い方は無いだろうと思います。でも、今の私にとって、メルサは唯一の孤児院の家族なんです。誰が何と言おうと、その気持ちは変わらない。私達にとって、家族というのは、血のつながりじゃない。心のつながりなんです。どうしても私をグラナダで降ろすというのなら、メルサやアックスが、戦場に向かうこの船に残らなければいけないという必然性を説明して下さい。私だけが平和に暮らす事になる理由を、あの子達が、きちんと納得できる言葉で、あの子達にも、説明して下さい」

言葉が途切れ途切れに出てくるのは、必死に感情を抑え込んでいるからだ、震える手を見れば誰でもわかる。

それほどまでに、今のフローラは感情的になっていた。あふれ出てくる怒りや悲しみ、これまでに耐えてきた心の傷の痛み。一気に出てきた感情を、混乱する事無く最後まで話し終えたのは、むしろこの年齢としてはよく頑張ったと言えるだろう。

だが、いまの彼女の前には、その頑張りに対し、言葉を紡げる者は一人も居なかった。

沈黙がブリッジを支配する中、グラナダの街の明かりが、大窓の外に見え始めた。



#### 41・来訪者（後書き）

今回は、精神的に余裕が無かった為、ロード軍側の描写や戦闘シーンを入れることが出来ませんでした。

その辺りの埋め合わせも、次回に入れていきたいと思えます。

次回は12月末か、年明けの更新になる予定です。

## 42・過去から見えた未来（前書き）

鬱症状がようやく改善し始めましたので、とりあえず話を先に進める事にしました。

今回は戦闘シーンは書けませんでした。作者がロサの過去という形で最もこのストーリーで表現したかった部分。読者に考える機会にして欲しかった部分を、回想として書いてみました。

## 42・過去から見えた未来

「懐かしいな」

自販機のジュースを買おうと、病室から出てガラス張りの喫煙室に入ったロサが、自販機や煙吸引装置の傍らに置いてあるテレビから聞こえてきた曲に、思わず声を出した。

直前まで誰かが居たのだろう。紫煙の匂いが漂うが、診察時間の合間の巡回診察の時間になったので、10人程が入れば一杯になってしまふ喫煙室は現在、無人。小さなテラスに続く引き戸の窓から、やや離れた位置にある、港の天蓋が上空に見えた。消し忘れられたテレビから聞こえる曲が、ロサの孤独感をさらに増幅させる。

旧暦の頃に流行り、ロサも日本に居た頃の再放送でよく見ていた、少年探偵アニメの主題歌だった曲「Secret of my heart」。自然と表情が緩み、聞こえてくるメロディーに合わせて、自然と口から言葉が溢れ出た。

「どんな…言葉に変えて…君に…伝えられるだろう？…あれから…幾つもの…季節が…」

声変わりの境目になっているロサの声は、まだ女性ボーカルの声域でも楽に出せる。

日本でこの曲を聞いていた頃のロサは、まだ幼かった為に歌詞の意味は理解出来ず、好きなアニメの主題歌だった、としか認識していなかった。歌詞の内容を理解出来たのは、本当につい最近の事である。

だが、改めて聞いてみると、そのフレーズの節々に、過去や今の自分と重なる部分が多く、歌い出すとつい、意味も無く最後まで歌いきってしまふ。

何かのリクエスト番組だったらしく、サビの部分だけで画面は別の曲に変わったが、ロサは自販機でホットココアを買いながら、記憶の中から曲を紡ぎ出していく。

「誰だって、逃げたい時もあるけど……それだけじゃ……何も始まらない……」

「Can I tell the truth? …その言葉言えず、空回りする唇に……」

まさに、当時の自分の心境そのものを代弁するような歌詞。だが、「恋心を伝える事で親友という今の関係が壊れて欲しくない気持ち」という本来の歌詞と、当時のロサの思いは、少し異なる。

母の不貞に悩み、それに気付いていても、やめて欲しいとは言えなかった。

それを正面からぶつけて家出しても、自分一人で生活出来るだけの力が無かった。

また、仮に当時ロサが家出して行方不明になったとしても、この母親が自分を心配して探し回る事など、決して無い。

当時の自分の母親に、本気で家庭を守ろうという気概があれば、不倫など考える筈が無いからである。

そういった客観的事実を、当時ロサは既に理解出来てしまっていた。

自分は所詮、望まれて生まれたのではない、副産物。

そんな思いに常に苛まれていたロサは、自分の心を守る為に、何時の頃からか、「自分も父親に会えなくて寂しいのだから、母親も同じなのだ」と、自分を偽っているという事を意識すらしないまま考えるようになった。

そう考えた途端、体が楽になった。気持ちも楽になった。そんな時、

この曲に出会った。

気持ちが沈んだ時、誰も助けしてくれない、誰にも助けを求められない環境の中でこの曲を何度も聞いて、これまで、どれだけの勇気を貰って来た事か。

だが、鬱屈した感情を抱えたまま、唐突に日常崩壊の引き金を、ロサは他人によって引かれてしまった。

最初は、偶然だった。11歳になる直前に、ジュースを買おうと立ち寄ったコンビニで、ガラの悪いチンピラ風の二人組に絡まれ、返り討ちにした。

それだけなら、まだロサも彼らと関わりを持つ事は無かっただろう。だが、この時に半殺しにされた二人のポケットから落ちた財布が、分厚かったのがいけなかった。

この時に金を巻き上げられた二人組が、次々に仲間を連れては報復を試み、その度にロサが金を巻き上げる。その繰り返し、幾度と無く続いた。

そのうち、マフィアの事務所に出入りする者が混じり始め、最後には自分と家族の身の安全を確保する為に、ロサはマフィアの本体を直接潰しに掛かる羽目になる。

気が付けば、相手に死人が出ていた。

いや、そんな表現では生ぬるい。

正しく、死屍累々。まるで戦場の最前線で爆弾が炸裂したような、血みどろの死体の山が、ロサの前にあった。

組織の暗躍に手を焼いていた警察ですら、その惨状に震え上がり、その場でロサを逮捕しようという勇敢な者は遂に出なかった。

駆け付けた警官達は、皆、畏怖と恐怖の混じった、完全に人間ではないものを見る目で、死体の山の前で佇むロサの背中を、遠巻きに眺めることしか出来なかったのである。

それは、シャインリバーの犯罪組織の勢力を書き換えてしまう程の意味を持っていた。ロサが最初に潰したのは、度々警察と衝突を繰り返し、時に何百人という犠牲者を出す事もあった、シャインリバー最大手の組織だったのである。

その後、ロサを手懐けてシャインリバーを牛耳る事を目論んだ組織が次々に接触を試みた。

彼がそれを拒む毎に、接触した組織は彼を襲い、反撃に遭って潰されるという構図が暫く続いた。彼が他の組織に加担して、自分達が潰されるのを恐れた為、組織側も必死だったのである。

そのうち組織数そのものが減少し、気が付けばロサは単独で裏社会を牛耳る位置に居た。

結局、ロサはこの組織に加担するという訳でもなく、ふらりと事務所に現れては金をせびるだけという、ヤクザ業界にとっては疫病神以外の何者でもない存在になっていく。断れば事務所が血の海になるという結末が確定している為、組織もロサに逆らう事が出来なかった。

そんな生活が続くうち、やがて自暴自棄の典型と言える生活にどっぷりと浸かってしまい、気が付けば、周囲の誰もがその殺戮の残酷さに、ロサを忌避するようになっていた。

そんなロサの荒んだ心に、唯一の癒しを与えてくれた曲を歌う、美しい声と容姿を兼ね備えた女の子は、シャインリバーの犯罪組織を全て敵に回したロサにとって、本当にささやかな癒しを与えてくれる、唯一の拠り所だったのである。

自分も犯罪組織に関わりを持っていながら、「この歌手だけは絶対に麻薬なんかの犯罪に関わりを持って欲しくないな」などと考えて、



心の片隅でもう一人の自分に「お前が言える立場か？」とツツコまれて現実に戻り、一人でロサは苦笑した。

その表情が次の瞬間、スツと沈んだものに変わる。

「お袋の事、フローラに話したら、どんな顔をするだろうな……？」

無意識に立ち席のテーブルに両肘を突き、両手でコップを握るロサ。その視線は、虚空を見つめ、定まっていな。

今更フローラに話してみても、どうしようもない事だと分かっている。

経験が無い者に理解出来る筈も無い心理なのだから、こんな事を話されたところで、親と一緒に過ごした経験の無いフローラがロサに出来る事など何も無い。だから、何の解決にもならない。

そもそも、ロサ自身で答えを決定すべき事だ。そのロサ自身にも答えが見つからないのだから、決してフローラが答えを出す事など出来はしない。

それでも、フローラは多分、少しでもロサの力になりたいと、自分に何が出来るのかを真剣に考え、悩み始めるだろう。自分の力で口

サの苦悩を解決する事など決して出来ない、気付く事も出来ずに、である。

そこまで思い至って、ロサはフローラに話すかどうかを悩む、という事が如何に無駄なのかを思い知り、悩む事を放棄した。

明らかに間違った事をしている親に対する侮蔑。

そんな親を侮蔑する自分への自己嫌悪。

親からの自分への愛情に対する猜疑心。

最も愛情を受け、最も頼れる筈の、最も信じられる存在である筈の、親。子供にとっては、正しいかそうでないかの最後の判断基準となる筈の、親という存在。

その親に対する不信感は、そのままロサの中で人間不信を形成していき、最後には「信じられるのは自分だけ」という、歪んだ信念を揺るぎ無いものにしてしまった。

今でこそ、メッシやレイラ、レオン達ガーゴイルのクルーに対して、ロサは家族に近い感情を持っている。フローラだけでなく、メルサやアックスの命が危険だと判断すれば、例えフローラに制止された

としても、今の自分ならきつと助けに行くだろうと、ロサは思う。

「……自分が家族に近い感情を持っていたとしても、俺の過去を話したところで……完全に俺の中の苦しみが消える訳じゃない。誰かが俺に何かを出来る訳でもない。だったら、フローラに話してしまつたら余計な辛さを感じさせてしまっただけだ。きつと、誰にも話さない方が良いんだろう。……どうせ、お袋も死んだ今になって解決する術すべなんか無いんだし」

母も既にこの世の人ではなくなった今、誰に何を言ったところで、過去は変わらない。それが分かかっていても、いつまでも際限なく纏わりついてくる忌々しい過去が、この上なく鬱陶しい。

結局、何の進展も無かった事に今さらのように気付いて、ロサの目が遠くを見るような表情に変わる。

不倫に限らず、親がしていた不道徳行為というのは、何も親の世代で止まるものとは限らない。

血の繋がりに云々を別にしても、「自分を育てる親」を見ずに育つ子供は居ない。

自分の中に、連邦軍エースパイロットの血が流れているという誇りと同時に、普段から留守がちだった父よりも傍に居る事が多かった、

不貞な母親の血も流れているという陰鬱な感情も併せ持つてしまったロサの思春期の心は、一緒に居る時間の長さに比例して、母親への嫌悪感が次第に勝つていった。

それは同時に、自分の体に流れる血に対する嫌悪感が増大する結果をも引き起こした。

元々、妊娠期高血圧症に端を発するアスペルガー障害（発達障害）のせいで、ある特定の能力以外は殆どが同じ歳の子より劣る為、只でさえロサは劣等感が強い。

発達障害のために肉親ですら目を合わせるのは苦手だから、他人と目を合わせるのは更に辛い。障害の種類を問わず、発達障害を持っている人間はコミュニケーションそのものが下手なのだ。

それに加えて、まるでロサが居ないかのような、母親の振る舞い。

次第に居場所が無くなり、ヤクザ組織を締め上げては金を巻き上げる生活をするようになったのも、実は、半分以上は単なる八つ当たりだった。だが、どんなに八つ当たりしても自分から逃げて行かない存在を、ロサは他に見つける事が出来なかったのである。

そんな生活をしていた時に聞いていた曲は、当時の苦い思い出をロサに思い出させると同時に、自分に流れる不倫に依存する母親の血

の事もロサに思い出させた。

「自分も、母親のような依存癖を持っていないだろうか？」という不安が、どうしても消えない。

母が死んだ事が悲しくもあった反面、忌々しさから解放されたという、奇妙な安堵感もあった。それがロサに、人間として明らかにおかしいな感情だという違和感を感じさせ、「自分はおかしい感情を持った人間だ」という自己嫌悪に変質して、未だにしつこく付き纏っている。

だから、フローラに傍に居て欲しい、離れたくないという正直な想いでさえも、「そんな母親と同じような依存癖を偽る為の言い訳ではないのか?」、「自分と同じような人間不信を、フローラに植え付けてしまうのではないのか?」という不安に飲み込まれ、素直に伝える事が出来ない。

どうしても、フローラと距離を取ろうとしてみまい、壁を作ってしまう。それが、フローラとの接し方さえも中途半端にさせてしまう。今のままでは一番良くない結果になると、分かっている、尚もそんな迷いが消えない。

「こんな事なら……仮死状態から生き返りたくなんか、無かったな……」。俺が生きれば生きる程、傷つける人間の数が増える……」

思わず漏れた溜め息と共に、ロサそう呟いて意味も無く紙コップを揺らし、波打って蛍光灯の明かりを反射するココアの液面を見つめた。

殺気には敏感なロサも、流石にボンヤリと考え事をしていては、「生き返りたくなかった」と言う言葉で足が止まり、ガラスの向こうで立ち聞きをしているだけの院長の存在には気付けない。

誰に話す訳でも無く、ロサの独り言が続く。

「最も傷つけない人間を自分の手で突き放す事が、結果的にその人を守る事になるかも知れないなんてな……皮肉な話だ。銀行強盗の巻き添えで死んだ婚約者って人が俺を産んでくれてたら、こんな思いをする必要は無かったのかも知れない。……ったく、何でその人をちゃんと守ってくれなかったんだよ、親父……」

例えロサと結ばれたとしても、フローラにも、いずれは死ぬ時が来る。死なない人間などこの世に存在しない。死は必ず平等に訪れる。それまでの時間が長いか短いかが、最期の瞬間になって有意義だったか無駄だったか、或いは幸せだったと思えるかそうでないかだけの違いであって、決して強盗の巻き添えで死んだという女性を守れなかったハートレイのせいなどではない。

本来なら、「フローラが幸せに生きて欲しい、幸せな生涯を送って

くればそれで良い」と考えるべきなのだが、そんな事も忘れて、ロサは本人に聞こえる筈も無い八つ当たりを口にした後、いつの間にかカラになっていた紙コップを握りつぶした。

連邦軍艦船を受け入れる為に、軍港の巨大な透明の天蓋が轟音と共に動作を開始し、無意識にロサの視線がそちらへ向いた。

だが、この時のロサの頭は、「自分がガンダムに乗るとまた死人が増える」という自虐思考のせいで、ガーゴイルへ急いで戻るといふ考えが浮かばなかった。

ゆっくりと、引き付けられるようにロサの足が窓へ近づく。8階のテラス越しの窓に広がる、港の手前の公園を覗き込むように、額をガラスに付ける。

「グラナダがこんなガラの悪い街でなければ、こんな風に悩まずに、迷う事無く降りて貰えたのに……。この街を完全に制圧する事が出来なかった、俺の力不足だな……」

シャインリバーやテキサスを制圧し、裏社会で不動の地位を築いたロサが、一つの街を制圧してその街の治安を守る事など、一般人には不可能であると気付く事など出来ない。

彼にそれを教えてやれる人間は、過去には居なかった。だが

「それは違うんじゃないかと思えますがね……」

ロサの、あまりに年齢に不相応な自虐発言に、耐えかねたのだろう。院長が、溜め息をつきながら喫煙室に入ってきた。

誰かが聞いているという意識が全く無かったロサは、完全に不意打ちだったその声に反射的に振り向こうとして、思わず額をガラスにぶつけ、その拍子に握っていた紙コップを足元に落としてしまう。

「い……院長先生！？聞いてたんですか!？」

顔をしかめて徐々に大きくなる額のコブを押さえながら、ロサが驚きのあまり裏返った声で、大声を出した。

「いや……、立ち聞きするつもりは無かったんですがね。だが、執刀医が患者に生き延びたくないなどと言われたら、看過する事は出来ない。自殺の可能性もありますからね。声をかけそびれたまま足が止まってしまつのも、無理は無いでしょ」

言葉に詰まったロサは、何か言いたげな表情をしたが、上手く言葉が纏まらないのが悔しいらしく、黙ったまま俯き、唇を噛んで悔しげに顔を歪めた。



そんな口サを見て、院長は呆れたように肩で息をつき、諭すような口調で話し始めた。

「グラナダは、一年戦争以前から、つまり君が生まれるより遙か前から、武器商が栄えた街だ。だからジオン公国のような、たかだか一コロニーの兵力でも、最初は連邦軍を圧倒する事が出来た。グラナダの兵器産業からの武装支援が無ければ、ジオン公国軍も只のテロリストに過ぎなかったでしょう」

何故、今の話の流れで口サが生まれる更に14年前のジオン公国軍が出て来るのか、口サには理解出来なかった。だが、首を傾げる口サに構わず、院長が話を続ける。

「そして、兵器産業が発達した街では、マフィアのように「歩兵に拳銃という武器を持たせる犯罪組織」ではなく、最初から機関銃やミサイルといった「兵器を扱える兵士」を束ねる組織が勢力を持つのが普通だ。グラナダの組織はどこも、シャインリバーやテキサスとは、組織の成り立ちも構成員の実力も違う上に、運営の考え方も違うのですよ。今の状況に例えれば、その他大勢の艦隊を沈めて調子に乗っていたロード軍が、ガーゴイル隊を潰せないと嘆いているのと同じなのです。君は今、力不足だからグラナダを制圧出来なかったと言ったが、それは5隻現存するガーゴイル隊の全ての艦船を一人で沈められなかった、と言っているのに等しい。そんな事が、現実的に考えて可能だと思いますか？」

ロサの返事（返事というより回答）が返されるまで、数秒の間が開いた。

「……いくらガンダムを使っても、それは無理ですね。少なくとも、今のガーゴイルを敵に回したら、俺一人では沈められない筈だ」

その返事に、院長が強く頷いた。手術後すぐの会話や、ロサがフローラを暫くレオン達に任せる決心をした様子から、ガーゴイルのパイロットの技量を想像していたのだろう。頷いた後、すぐに院長が言葉を続けた。

「今までの君は、心臓の事もあったから、無理が利かない状態でもあった筈だ。グラナダの全組織を制圧するには、何千というミサイルや装甲車を持つ軍の一個師団を何師団分も潰すのに等しい戦力と、それに見合うだけの激しさで交戦を続けるだけの持久力が必要だ。比喻表現ではなく、本当の戦争を自分の手で起こし、しかもそれに勝つ必要がある。これまでの狭心症という爆弾を抱えていた君の体では、そんな状況に耐え抜く事など、出来はしなかった筈だ」

「……」

反論は、出来なかった。

使用するのに、発射台という「設備」が必要な「兵器」が相手では、生身の人間に太刀打ちできるものではない。それは、モビルスーツに目の前で自宅を倒壊させられても逃げる事しか出来なかったロサも、痛感している。

ヤクザ同士の抗争では、少なくともミサイルなどの「兵器」は登場しない。爆薬の類も、せいぜい人間が抱えることの出来るバズーカ程度。それは、どんなに土地柄が悪い地域であっても、ある程度の当局や軍の取り締まりによって、「兵器」の流出が妨げられているからである。

そして、言外に院長が言うように、もし自宅に落ちて来たのがモビルスーツではなくミサイルだったとしたら、当時から時折、狭心症に悩まされていたロサの心臓は、その爆風に耐えきれぬ筈はなかっただろう。

グラナダを制圧するには、そんな状況を掻い潜り反撃まで出来る人間の集団を、相手にする必要があるというのだ。

手術を終え、生まれて初めて誰かを頼る事に違和感を感じなかったロサが

誰かに頼る事の大切さを思い知った今の彼が

自分なら出来るという傲慢な結論に至る筈など、ある筈も無かった。

神妙な表情で俯く口サの顔を見て、院長が諭すように言葉を続ける。

「少なくとも、君自信も今まで心臓病に苦しんでいた「人間」だ。決して、戦争を終わらせる為の「兵器」では無い。人間には、必ず出来る事と出来ない事が存在する。私だって、自分の手術をする事など絶対に出来ないのです。何もかもを、一人で抱え込まない方が良い。出来ない事は出来る人間に任せて、自分に出来る事に最大限の力を発揮するべきです」

「……………」

「それに……………過去は変えられないが、未来は変えられる。私も臨床医の一人として、臨床試験という名の人体実験で、何百人ではきかない患者の死を看取ってきた。当然、遺族に胸ぐらを掴まれる事も、一度や二度では無かった。人体実験の為に家族が殺されたという様に解釈される事も、多々ある。そして、私自身もそれを否定する事は出来ないし、数年後に新しい手法が見つかって、「あの時の自分にこの方法を見つげるだけの力があれば」と自分を責める事も、未だに減らない。しかし、過去に亡くなった患者に手術をする事は出来なくても、これから先は手術をする事が出来る。私の手で救える命は、確実に増えたと考えるようにしている。そうでなければ、私がかれまでに看取った患者が、報われない。だから、命ある限り、私は現役の医者でいようと考えている。その矜持だけが、今の私を支え、生かしているのだから」

「院長先生はそうかもしれませんが、俺がこれまでに奪ってきた命は……そんな大義名分も無い、単に私利私欲に走っただけの、無駄に捨てられた命だ。或いは、連邦軍を倒す事こそ家族を救う手段としか考えられないような、情報操作の犠牲者か。いずれにしろ、俺が誰かを殺す事で得られるものなんて何も無いし、誰かの未来を変える事なんて出来はしない。……誰かを救う事なんて、尚更に」

反論の為に顔を上げたロサだったが、自分の発する陰鬱な言葉に気が滅入り、また俯く。それを見かねた様子で溜息をつき、院長は苦笑した。

「もし、君が誰かを救う事を望んでいるのなら、医者になる為に戦争を終わらせる、という目標を持ってみたらどうですか？」

「俺に医者は無理ですよ。アスペルガー障害のせいで、医療ミスを繰り返すだけだ。一人や二人殺したところで、今の俺が罪悪感を感じてミスが無くなるとは思えない。心臓病用のニトロ口を落つことして病院が吹き飛ぶくらいの重大ミスでもなければ、俺の脳みそは懲りてくれないんです」

「別に、医者である必要は無いと思いますがね。どんなに腕が良い医者だって、道具が無ければ手術は出来ない。人工心肺を回す臨床工学士だって必要だし、内視鏡や診断機器を作るメーカーが無ければ、手も足も出ない。製薬会社や血液の分析技術だって必要だ。そ

ういった側面から医療を支える力が強力であるほど、医者は安心して活躍出来る。決して医者だけが偉い訳じゃない。支えてくれる力を使いこなし、自分の能力以上の力を引き出せなければ、一人前の医者とは言えないのです。だから私は、自分の技術にはまだ満足していない。いや、満足出来るとしたら、多分、死ぬ時に人生を振り返って、救った患者の数を数えて自己満足に浸る時だけでしょうね」

「……」

「君が医者になれなくても、そういった技術を勉強して、医者が人を救いたいと思う気持ちを、実現出来る技術を造る事は出来る筈だ。そういった機器面の技術というのは、医者だけで考え出す事は出来ないし、進歩させる事も出来ない。君がこれからその技術を持つ事は、出来る筈だ。これまで自分のせいで死んだ命に少しでも報いたと思うなら……自分が生きていく意味や価値を、少しでも向上させたいと思うなら……目指すだけの価値は、あると思いますよ」

ロサの瞳に、迷いが見え隠れし始めた。出てきた言葉に、壁を作りそこへ逃げ込む為の言い訳は、無くなっていた。

「自分の……生きる意味、か。考えた事も無かった概念だな……。でも、俺はロクに中学にも通って無いし……」

「学校に通うというのは、目的を達成する為の手段でしかない。それに、大学受験検定（一般的な言い方では「大検」）だってあるのだから、必ずしも中学や高校程度の時分に、学校に行く必要は無

いと思いますよ。エンジニアに必要なのは、学校に行ったという過去でも、学校で良い成績を取る事でも無い。患者を救いたい医者への熱意に答えようとする、エンジニアとしての熱意とそれを形にするだけの発想。技術などはその次だ。私は、そういった才能を持った彼らとの出会いに恵まれたから、今の地位がある」

「しかし、俺はグラナダに永住するつもりは」

「何もグラナダで勤務する必要性はありませんよ。有用な医療機器というのは、場所や人種に関係なく、必ず医者が気付いて、普及していくものだ。仮に君が地球に降りて何かを開発したとしても、それが有用なものなら、いずれは私の診察にも導入する日が来る事になる。但し、本当に良いものならば、という条件付きですがね。あのリアという子に今後必要になる、マイクロサージャリー療法だつて、その一つだ」

「マイクロサージャリー？何です？それ」

「ここでは無理な治療ですがね。日本の福島医大で実用化されたもので、従来の培養した皮膚を貼り付けるだけの治療では、血管が皮下組織と繋がらなくて十分な回復が見込めなかった。だから、同じような大やけどを負った場合、自分の変わり果てた姿に絶望して自殺してしまう事も多かったのです。マイクロサージャリー療法は、貼り付けた皮膚に血管を繋いで回復させる治療で、完全に元通りという訳にはいきませんが、少なくとも輪郭を取り戻す事は可能です。ただ、今のところ、ここには機材もアシスト出来る人材も無いから、

出来る方法ではない。普及させる為には、メーカーが機材を低価格で量産してくれないと、医者的心思や努力だけではどうしようもない。無論、医師の学ぼうとする姿勢も必要ではありませんが」

最後の一文を言うあたりで、院長はやや芝居がかった視線を、ロサに向けた。だが、少し言葉を出さずに何かを考えていたロサがそれに気づく事は出来ず、結論だけを口にした。

「じゃあ、俺がその機材のメーカーに入社してここへ売りに来れば、リリアに力になる事も可能な訳か……」

ロサの口から、初めて「未来」が洩れた。その瞳にそれまでの濁った光は無く、澄んだ光が宿っている。それを復活の狼煙と取った院長の表情が、ようやく緩んだ。

「早く戦争が終われば、まだ君の歳ならゆっくり考える時間がある。少しでも考える時間を増やす為に、自分の手で早く戦争を終わらせようと思つようにしてみてはどうですか？今まで奪った命の数だけ、病に苦しむ人を救える技術を身につける道も、悪くは無いものですよ」

「……前向きに考えてみます」

「天蓋が開いているという事は、ガーゴイルがもうすぐ戻る筈です。」



退院検査を始めましょう」

強い意志を感じさせる表情を取り戻したロサが、真剣な表情になった院長の言葉に、強く頷いた。

「スコピオンは、民間のシャトルを拾ってしまっているんだ！今の状態で攻撃など出来る筈が無かるうが！！」

一足先にサイド１・ロンデニオンに到着していた連邦軍巡洋艦「サラマンダー」のブリッジに、艦長でありガーゴイル艦隊の副長でもあるニツクの怒鳴り声が響き渡った。

「民間機ごと攻撃などしてみる、それこそ我々は全宇宙を敵に回すことになる！ようやく鎮火しかけている戦争の火種に、自分の手で油を注いでどうする！？」

『ロード（ヤツ）だってハートレイ大佐を停戦中に狙撃したじゃないですか！そのロードを今の状況で叩いて、何が悪いんです！？』

インターホンの向こうで、ニツクと無線上で論戦を繰り広げている相手は、ロンデニオン常駐の連邦軍の艦隊長・アルベルト・マンセ

ル。ガーゴイルの整備副長・シーアス＝マンセルの弟である。

マフティーの反乱が地球上で繰り広げられて以降、主力部隊であったロンド・ベルは地球に降り、更にその激戦の隙を突いたロードの蜂起の際に、偶然居合わせたフロンティアサイドのガーゴイル隊に宇宙の主役の座を奪われ、ロンデニオンの常駐部隊は半ば閑職と化していた。

その閑職に甘んじている者が、ロード革命戦線の本体を叩く事が出来るかも知れないという状況は、半ば飼い殺しにされている鬱憤を晴らす絶好の機会。

更に言えば、華々しいガーゴイル隊で活躍している兄に対する嫉妬心も、この状況下で功績を求める彼の勢いを後押ししていた。

『ガルーダと戦った今の状況なら、奴らは消耗し切っている！今こそロードの息の根を止められる時だ！！』

「こちらだってガルーダのエースを潰された上に、ガンダムだってすぐには使えないんだぞ！援軍を望めない状況で自分から仕掛ける馬鹿が何処に居る！？」

『そんなものは必要ない！俺達の手で潰してやる！！あんな子供にいつまでも頼ってるあんた達の言う事なんて、聞いてはもらえない

「!!」

その直後、音声途絶えた。これ以上議論しても埒があかないと、アルベルトが無線を切ってしまったらしい。

突然途絶えた音声に顔をしかめたニツクは、アルベルト達の艦が動き出した事に気づくのが一瞬遅れた。既に彼らの艦は、全速前進を意味する長い炎をエンジンから吹き出し、ロンデニオンを離れてしまっていた。

「よさんが、アルベルト!!」

ニツクの絶叫が、サラマンダーの狭いブリッジに響き渡る。それを聞いた操舵手が、焦りを隠しきれない表情でニツクを見る。

「どうします!?!」

「……我々はこのまま待機! ガーゴイルがグラナダを出られん今、ロンデニオンを留守にする訳にはいかん!」

「しかし、このまま放っておいても、連邦の戦力を消耗するだけですよ!?! あの口サですら苦戦したんでしょ!?!」

「そんな事は言われんでも分かっている！！しかし、彼らを止めるには、もはや撃沈しか手段が無い！この状況で、我々がそんな無様を晒す訳にはいかんだ！！」

苦虫を噛み潰した、という表情の見本のような顔で、ニッケが押し殺した声をサラマングダのブリッジに響かせた。

## 42・過去から見た未来（後書き）

今後の大まかなシナリオは決まっているものの、体調の波が激しく、次回更新時期は未定です。

なんとか完結まで持っていく意思は有りますので、今後とも宜しく  
お願い致します。

## 親という存在 (前書き)

前書き 自分やメルサ達に対するケイイチの接し方に、物議を投げかけるフローラ。

その一方で、戦争に巻き込まれた子供の心の歪みに、堪らず苦悩を吐露するロサ。

良心と義務感のジレンマに、ロサの中で、再び戦う事への疑問が増幅していく。

## 親という存在

ロンデニオンでの論争が終わる、少し前。

グラナダの港の天蓋が開いていく様子まで、はっきりと見える距離に近づいたガーゴイルのブリッジ。

「やはり……どうしても降りないつもりなのか？」

十数分間に亘り沈黙が続いた狭い室内の正面の大窓に、グラナダの街明かりが一杯まで広がった頃、メッシが漸く重い沈黙を破り、何処か諦めの入ったような、返される返事が分かっていながら念の為という秀囲気の声で、フローラに尋ねた。

腹部を覆うように両手を組み、俯いたまま神妙な表情で佇んでいたフローラが、ゆっくりと顔をあげる。

「……ケイイチ大尉、でしたよね？大尉は、本当に私を引き取りたいと思っっているのですか？」

フローラが顔を向けたのは、メッシではなく、自分と確かに似ていると彼女自身も認めざるを得ない目を持っている、ケイイチだった。

フローラの言葉の意味を理解出来なかったメツシとケイイチが、同時にフローラの顔をいぶかしげに見る。ケイイチから視線を動かさないまま、フローラは静かに言葉を続けた。

「大尉は、まだフレアという女の子を引き取りたいとお考えではありませんか？ だったら、それはもう無理です。私は……今の私は、フローラという人格を既に持ってしまったって、それを变える事は出来ません。それに、メルサの姉であるという意識は、フレアという女の子には無い筈です。ケイイチ大尉、あなたもそんな意識をお持ちではありませんか？」

寂しげな笑みを浮かべて問うフローラに、凶星を突かれたケイイチの表情が硬直した。

彼女の言うとおり、フレアとして父親に接して欲しい、そんな願望がケイイチにはあった。そして、その願望の中に、当然メルサは存在していない。

「大尉がガーゴイルに來られてから私達に対する接し方を見て、メルサは余所の家庭の子であるという考えをお持ちのように私は感じます。ですが、今の私にとってはメルサは間違いなく妹。アックスだって、今では弟と言える存在です。ロサは、少し違っても知れないけど……ずっと側に居て欲しい。そう思っているのが、フローラという人格を持っている今の私なんです。今まで、苦勞してフレアさんをお探しかったとは思いますが……今の私は多分、大尉が引



き取りたいと願っているフレアという女の子とは、別人だと思いません。本当に、ごめんなさい」

フローラ自身にも、言葉で言っているより遙かに大きな苦悩があったのだろう。唇を噛み締め、深々と頭を下げる彼女の肩は、涙を堪えるように震えていた。

「今の状況で、メルサ達を残して私だけが幸せになるなんて、どうしても出来ません」

「わかった。その代わり、万が一ガーゴイルが戦闘中に沈んでも、俺達を恨むなよ？現実問題として、この艦は実戦配備中の、それも連邦軍の旗艦だ。敵にしてみれば、真つ先に狙うべき艦だからな。攻撃を受けた時、君やメルサ達を俺達が助ける事が困難な場合も、当然ながら想定される。その時は……」

「ロサが助けしてくれます、きっと。それに、艦長がそんなに下手な指揮を執るとも思っていないせん。万一の場合も……怖いと思うかも知れませんが、覚悟はしているつもりです。地上に居ても、戦争が始まれば逃げ場が無いのは同じでしたから」

語尾を濁すメッシに対し、顔をあげたはずみに目尻から涙を流したフローラは、切なげな笑みを浮かべた。

シャインリバーで奇襲に遭った際の避難時、フローラはメルサを連れてシエルターを必死に探したが、定員オーバーを理由に入れてくれない所ばかりが続いた。ようやくドアを開けてくれる箇所が見つかった直後には、戦闘が終了し空襲警報も解除されていたのである。

彼女にしてみれば、着のみ着で逃げ回るしか無かった地上よりも、ガーゴイルの居住区の方が何倍も安心出来る居場所であり、しかも自分を受け入れ守ろうとしてくれる人が大勢居るといふ心理が無意識に働いた笑みだった。

まるで「地上の人よりガーゴイルのクルーの方が何倍も信用出来ま  
す」と言わんばかりの、切なげで悲しげな笑みに、メツシは諦め気  
味な溜め息をつき、ケイイチはぐっと目を閉じて眉間に皺を寄せ、  
額を右手で何度もさすった。

「……分かりました。戦争が終わってから、もう一度考えさせて下  
さい。その頃には、君にもゆっくり考える時間が出来ているでしょ  
う」

深い溜め息をついて、そのついで、といった様子で、ケイイチがフ  
ローラに言った。

「ありがとうございます。でも……その頃には、私はロサと結婚し  
て家庭を持っているかも知れませんか、養子縁組の必要は無くな  
っているかもしれません」

涙が乾き切らないまま、「必ずロサと結ばれると信じている」という、未来しか見えていない笑みを浮かべ、フローラが答えた。

「グラナダ軍港に入港を開始。自動操縦に切り換えます」

操舵手の喚呼が狭いブリッジに響き渡り、軍港の巨大な天蓋を抜ける。エアロックを万全にする為に、二重の蓋の間でガーゴイルが一旦待機し、外側の蓋の閉口が完了する迄、自力浮上を続ける。

「艦長、手が空いてる者はロサを探しに行かせる。各員に連絡を頼む」

「わかった」

レオンに返事をしたメッシが艦内放送を始めると、ガーゴイルが地上への降下を始めた。

指定位置に寸分違わず横付けされたガーゴイルのハッチに、停止後すぐに成田や関西空港などで見られるようなボーディングブリッジが接続される。

レイラを除く男性パイロットや停止中は手が空く操舵手、モビルスーツの整備士達が、出入り口の開扉と同時にグラナダの街に散って行った。

退院検査と必要な手続きを終え、リアの事を改めて院長に頼んだロサは、ガーゴイルが入る事になるであろう軍港へと向かい、街中を歩いていった。

最初に病院を見つけた公園を抜け、小企業の入った雑居ビルが続く路地裏を進み、軍港へ出入りする大型トラックが行き交う大通りを目指すロサの顔には、はっきりと迷いの表情が浮かんでいた。

自分がガンダムに乗れば、また「革命こそ正義」と信じて命さえ投げだせる者達を、自分の手で葬らなければならぬ。

だが、自分の命を投げ出してまでロサを救い、フローラと結ばれる事でロサが幸せになる事を願ったりリアもまた、革命軍の一人であったという事実。

自分自身が戦争に参加してから、それまで自分にとって絶対に揺らぐ事は有り得ないと信じていた、連邦軍が正義であるという信念が、

音を立てて次々に崩れていく感覚。

リリアを助けようとしている自分の判断は、本当に正しいのか？

何処に身を寄せても反発する者が出てしまう自分は、本当に存在し続けて良い人間なのか？

敵である筈のリリアや、彼女を見舞いに現れた女を信用した自分は、結果的に革命軍に手を貸す存在になってしまったのではないのか？

その為に、忌避され続けた自分を受け入れてくれた仲間達が、危険に晒されるのではないか？

次々に心にのしかかってくる疑問や罪悪感に押しつぶされそうになる感覚を必死に堪えながら、重い足を一步步づつ、ガーゴイルが居る筈の軍港へと進める。

その力の源は、自分の手で戦争を終わらせなければならないという使命感。エースパイロットの息子である自分が決着をつけないければ、戦争は終わらないという義務感。そして、フローラに幸せに生きてもらいたいという、純粹な少年としての想い。そこに、ロサ＝ヒシモトという個人の欲望は存在していない。

「取り敢えず、今の俺に出来る事を、一つずつ片付けていこう。どうせ俺の脳ミソは、一つずつしか物事を考える事が出来ないんだから。戦争が終わるまで、取り敢えずフローラを俺の手で守り切る事さえ出来れば、それで良い。その後の事は、その時になってから考えれば良いさ。そうだな、親父……？」

父の形見である懐の拳銃に右手をそつと当てて、神妙な表情で歩きながら、ロサが呟いた。

乗用車一台分の幅しかない路地から、角地のオフィスビルを直角に曲がった死角を何気なく抜けて、ロサが大通りへ出ようとした時だった。

アックスと同じ10歳くらいの少年が駈けて来て、そのまま勢いよくロサとぶつかる。

「痛ててっ……………。」  
「めんよ、兄ちゃん！」

転びはしなかったもののロサのアバラで鼻を打つたらしく、鼻を抑えながら苦笑いを見せ、少年がそのまま立ち去ろうとした直後。

「待ちな、坊主」

それほど威圧感の無い、むしろ苦笑まじりの声で、ロサが少年を呼び止めた。だが、何故か少年は肩をビクツと震わせ、立ちすくんだ。その表情は、何かに怯えるように青ざめている。背中越しに表情を読み取ったらしく、振り向いたロサが更に苦笑を強くした。少し間を空け、呆れたように声を出す。

「勘違いすんな、別にお前を警察サツに連れて行こうって訳じゃねえよ。俺もあまり警察サツのご厄介にはなりたくねえ身分なんでな。それに、実質的に被害も無かった訳だし」

その言葉に、少年がぎよつとした表情で、慌ててロサへと振り返る。その先に、まるで悪戯を成功させた子供のように、ニツと笑みを浮かべ、自分の財布を右肩の前へ掲げて見せたロサの姿があった。それを見て、驚愕の表情に変わる少年。

「そんな世界に居るんなら、言葉くらいは知ってるだろう？」「燕返し」を使わせてもらった」

ロサが財布をジーンズのポケットに仕舞いながら言ったその台詞に、信じられないといわんばかりに呆然とロサを見つめる少年。

「燕返し」とは、すられた財布をその場ですり返すという、スリ稼

業の自己防衛技術のひとつ。無論、相手もプロのスリである事が大半なので、相手に気づかれずに成功させられるというのは非常に高度な技術といえる。まあ、倫理的に褒められるような技術ではない、というのは言うまでもないが。

「俺もこう見えて、すられたらマズイ物を色々と持ち歩いていた時期があつてな。自分が盗る真似はしなかったが、防衛手段の一つとして技術だけは身につけている。俺がそういう世界に居る人間だ、という事くらいはその歳でも理解出来る筈だな？」

少しだけ声に威圧感を出して、ロサが真面目な表情になり、少年を見た。

「何故、そんな危ない橋を渡ろうとする？お前、自分の意思だけで……自分がやりたいからやってる訳じゃないだろう？誰に頼まれた？」

諭すように言うロサの言葉に、少年がまた驚き、言葉を失った。そのままロサが少年を見たまま、言葉を続ける。

「お前、友達か何か……そんな関係の誰かを助けるのに必死になつてるって感じの顔だ。少なくとも、盗みをやりたくてやってる目じやないな、お前の目は。何故そこまで必死になれる？犯罪を犯してまで助けたい仲間なのか？……誰かを不幸にしてまで、助ける値打ちがある仲間なのか？」



少年自身も、罪悪感を感じてはいたのだろう。言葉に窮した少年が、悔しげに唇をかみしめ、歯ぎしりしそうな表情で俯き、ぐっと目を閉じた後、静かに話し始めた。

「……別に、頼まれたわけじゃないよ。でも、いくら働いて稼いでも助けられるだけの薬代を貯められる方法が、俺には見つからないかったんだ。子供がいくら働いたって、治療費なんか用意出来なかったから……」

「風邪や怪我って訳じゃないのか。要するに病気の友達の薬代が必要な訳だな？何の病気だ？」

「聞いたけど、よくわからない。心臓の血管が詰まるとか言ってたけど……孤児院じゃ薬代も無いし、苦しくなっても自然に収まるのを待つしかないんだ。だから……俺が新聞配達したりして薬代を払おうとしてたんだ。でも、いくら頑張っても足りなかった」

表情を変えないまま何度も首を振り、地面を見つめる少年。小さな手を握りしめ、そのまま震えさせ始めた。

「心臓の血管が詰まる、か。お前が欲しがってる……お前が助けた子に必要な薬ってのは、もしかしてコレか？」

手術前に飲み残してそのままになっていた、ガーゴイルの医務室からくすねた薬瓶をポケットから取り出し、ロサが少年の顔の前に近付けた。

如何に鍛えていたとはいえ、さすがのロサも狭心症の発作に勝てるものではない。薬の残量は四分の一程度まで減ってしまっている。

「俺も3日前までは、狭心症……心臓の血管が詰まる病気だった。入院してた病院で治して貰って、今日これから帰るところだ。俺も住んでた所から勝手に持ち出したものだから、本来なら怒られる筈なんだが、まあどうにかなる。これをお前にやるよ。持って帰って飲ませて良いか医者に聞いてみな。但し、間違った飲ませ方だったら間違いなく死んでしまうから、絶対に医者に聞かずに飲ませるんじゃないぞ。いいな？」

「でも、それじゃ兄ちゃんが死んじゃうんじゃないのか？」

戸惑いながら薬瓶を受け取り、心配げな表情で、頭一つ高いロサの顔を見上げる少年。その頭にポンと手を置き、ふつと笑みを見せるロサ。

「俺はもう大丈夫だ。医者が治ったと断言した。心配いらない」

「でも、これって高いじゃないか。本当に大丈夫なのか？」

「子供の稼ぎで買えない値段ではあるが、今の俺はそいつを買える程度の金は稼げるようになった。俺も親が戦争で死んでしまって、本来ならお前と同じように孤児院に行く筈だった。だからお前や、お前が助けようとしてる心臓病の子の事が、とても他人事と思える状況じゃない。ちゃんと事情を話せば、俺の仲間は理解してくれるさ」

少年を労わる様に、優しい声でロサが言った直後だった。

「居たぞ、あそこだ!!」

大人の男の叫び声とともに、少なくとも5人以上の足音が、ロサ達の居る方向へ駆け寄ってくる。その途端、少年が蒼白な顔色に変わる。

「動くな!!」

合計8人。連射を前提とした大型弾倉を取り付けたアサルトライフルが、ロサ達に向けられる。

「!?!」

ロサが相手の服装を見て、仰天する。自分に銃口を向ける男達の服装は、ロサが知らない筈の無い、幼い頃から見慣れた制服。

「連邦軍!？」

反射的に少年を背後に庇ったロサが、思わず大声を出した。それが合図になってしまい、大量の爆竹が一齐に破裂するような爆音と共に、一齐に連射が始まる。

「何だ何だ!？何がどうなってる!？あいつら一体どっちを狙ってるんだ!？」

取り敢えず話し合いも出来そうに無い雰囲気を悟ったロサが、血相を変えて弾かれたように駆け出した。背後の少年をラグビーボールのように抱え上げて建物の陰に飛び込んだ後、一目散に逃げ出した。乱射されるライフルの弾が火花を散らしながら、金属を叩きつけるような甲高い音と共に、次々にロサの足元をすり抜けていく。

「逃がすな、追えっ!！」

乱射がいったん止み、大勢の足音がロサ達を追う。

「くそっ!！何で連邦軍が俺に発砲して来るんだ!？訳が分からん!！」

殺して良いなら簡単に殺せるが、相手は味方である筈の制服を着ている。流石のロサも味方相手に無暗に発砲する訳にはいかず、銃も抜かないままひたすら逃げ続けるしか手段がない。

焦りを隠しきれない表情のロサに抱えられたままの少年が、怯えるような小さな声で、ポツリと呟いた。

「昨日、眼鏡を掛けた会社員みたいな人から財布と携帯電話をすった後、ずっとこんな風に追われてるんだ。その財布と携帯を渡せば薬をくれるって言われて、言われたとおりにしたんだけど……」

「何!？」

ナポリの町はずれを思わせる、古い石積み建物の隙間をすり抜けるように駆け抜けながら、脇に抱えたままの少年の言葉に、ロサが表情を険しくする。

「お前、一体何を盗んだ!？」

「俺は財布と携帯を盗んだだけのつもりだったんだ。でも、何か他に連邦軍が怒るようなものが入ってたのかな……」

蒼い顔で、困惑気味に声を顰める少年。

「子供相手にこれだけムキになるって事は、恐らくスパイ容疑だろうな。連邦軍の新しいモバイルスーツか何か、その手の軍事機密指定の資料が入ってんだろう。お前、とんでもないものを盗んでくれたみたいだな」

「スパイって……映画とかみたいに殺されちゃうの!?!」

悲鳴のような声で叫ぶ少年に、ロサが厳しい声で怒鳴り付けた。

「逃げてる最中にでかい声を出すな!?!……その薬をくれるって言った奴は、ちゃんと薬をくれたのか?」

「後で渡すって言って、そのまま……」

「だろうな。そいつ、恐らく薬なんか最初から渡す気なんて無かったはずだ。お前に嘘をついて、騙したんだ」

「そんな……!?!」

みるみる涙目になっていく少年。その表情が、ロサの中で、暫く顔

を見ていないアックスに重なる。

こんな少年を騙してまで連邦軍の機密文書を強奪するなど、何者の仕業なのか想像はつく。その非道さへの怒りと、戦争による貧困に喘いだ拳句の果てに、仲間を思っで行動した少年の歪んだ純粹さが痛々しく感じられ、少年を救う術を持っていない自分の無力感に、そして戦争に自らも参戦していながら未だに終結させる事が出来ていないもどかしさに、思わず口が歯ざりする。

「そいつの顔、覚えてるか？」

「覚えてるけど、それがどうしたの？」

「あの連中が探してるものを取り返すしか無い。でなければ、俺達2人も八子の巢にされちまう。取り敢えず、あの連中を振り切る。上手く逃げ切れたら似顔絵を作って探すから、そいつの特徴を教える。俺が取り返してやる」

「許してもらえるかな……？」

「何とも言えないが……取り敢えず、今の俺達に出来る事はその程度しかない」

ロサが続けて何かを言おうとしたが、途中でそれが遮られた。建物の角から飛び出した瞬間、ロサの襟首を何者かが掴み上げ、少年もろとも持ち上げられてしまったのである。

” しまった……!! ”

顔色を変えたロサが声を出す前に、ロサの頭上から聞きなれた声、不機嫌そうな雰囲気撒き散らした。

「ガーゴイルのクルーが総出で搜索してるってのに、何を呑気に鬼ごっこなんかしてるんだ？お前は」

「レオンさん!!」

追われていた事も忘れて、ロサの表情が一気に明るくなる。だが、ロサ達を追っていた「鬼」は、プロの軍人。ロサの声が路地裏に響いた直後、大勢の足音が追いついてきた。

「動くな!!」

別の方角からも現れたグループも追い付き、一斉にサブマシンガンの銃口をロサ達に向ける。



すると、襟首を掴まれたままのロサの視線が、レオンの脳天が見える高さまで上がった。

「……なんでレオンさんまで手を挙げてんの？こいつら、下士官じやん」

「……そうか。俺、軍人だった」

あまりにも素の反応を見せてロサを地面に下ろしたレオンに、少年を抱えたまま呆れたように「大丈夫かよ？」と呟いて溜息をつくロサ。

そのロサを地面に下ろし、パイロットスーツを着たままのレオンがポケットから身分証を取り出した。

「ガーゴイルのモビルスーツ隊総隊長・レオン」ハザード少佐だ。こいつはうちのエースパイロット、つまりお前らの味方になる筈なんだが、こいつが何をしでかした？」

銃を向けていた集団が困惑気味に顔を見合わせ、にわかに銃口の向きがバラつき出す。

「我々が追っていたのは、その少年ではありません。彼に抱えられている子供の方だ」

おそらくリーダーであろう雰囲気を持つ、20代後半と思われる青年が進み出て、ロサの脇へ降ろされた少年へ銃口を向けた。ビクツと肩を震わせ青ざめる少年を庇うように、ロサが少年の肩へ手を回し、鋭い目で青年を睨む。

「いくら機密文書を盗んだとはいえ、こんな子供を相手に機関銃を振り回す事は無いだろう。第一、そんな機密文書を治安の悪いグラナダの街中で持ち歩いている事 자체가、盗まれた奴の危機管理意識が低かった証拠だ」

「黙れ!!」

携帯移動用小型機関銃「ワルサー・MPL」をロサの顔に向けて怒鳴る青年。反射的にロサが懐の拳銃へ手を掛ける。

だが、ロサの銃が懐から出てくる前に、ロサの脳天にレオンの拳骨が振り下ろされて鈍い音を立て、同時にレオンの右手にいつの間にか握られていた拳銃が火を吹き、その弾に青年の銃も弾き飛ばされた。

「~~~~!!」

脳天を抑えて蹲り、声にならない苦悶の息を漏らす口サ。青年も、自分が銃を弾かれた事実を飲み込めていない表情で、呆然と立ち尽くしている。

「機密文書を盗んだというのは、本当か？」

事の重大さというよりも、軽率に銃を使おうとした口サに対する呆れから出たものであるう厳しい声と表情で、レオンが少年に尋ねた。

「機密文書とかいうものかどうかは、俺にも分からないんだ。友達の病気に必要な薬をくれるって言われて、会社員から携帯電話と財布をすったのは間違いないけど……」

脅えるようにレオンを見上げ、恐る恐る声を出す少年。

「その電話と財布は今も持ってるのか？」

「もう渡しちゃったから、俺は持ってない」

「取り敢えず、その頼んだ奴の似顔絵を描いて、捜索を掛けようと思ってたんだ。事情も聞いてない状態でこいつらに襲われて、どう

しようも無くて逃げたんだ。ダニエルさんの監視の手前、まさか味方を撃つ訳にもいかなかったからな」

レオンと少年の会話に、ロサが割り込んだ。キンバリーでの騒動以来、ロサの行動は連邦軍本部へほぼ筒抜けになっているので、銃を使わなかった彼の判断は妥当だったと言える。

「なるほど、道理でお前が銃も抜かずに逃げ回ってた訳だ。本来ならこいつらが返り討ちに遭ってただろうからな」

レオンが取り囲んでいる軍人たちをちらりと見て、更にロサを指差した。

「「シャインリバーの黒い鬼神」と言えば、お前らにも通じるか？ こいつがその「鬼神」の正体だ。お前らが殺される前に見つかって良かったぜ」

数年前、正体不明の黒いジャージ姿の少年がグラナダの犯罪組織を次々に壊滅させ、関係者を恐怖のどん底へとたたき落とした。だが、グラナダの約三分の一の組織が壊滅した数か月後、ある少年がシャインリバーへと発ったのを境に、壊滅騒動はピタリと止んだ。以後、「シャインリバーの黒い鬼神」という畏怖を込めた別称で呼ばれ、グラナダ中の犯罪組織が警戒した少年。その噂は、当然ながら軍にも聞こえていたものの、その正体を特定する事は、軍の情報網をもつてしても出来なかった。

その「鬼神」に、自分達が銃を向けていたという事実気付いた軍人達が、揃って顔色を変えた。

レオン自身も、当時から気付いていた訳ではない。たまたまロサが「喧嘩で巻き上げた金で生活していた」と発言したのを本人から聞いたから気付いただけで、その一言を聞いていなければ恐らくレオンも気付く事は無かつただろう。

「取り敢えず、レオンさんが見つけてくれて助かったよ。いくら俺でも、まだ病みあがりだからいつも通りには走れない。レオンさんが居なかったら、こいつらと話し合いが出来そうな雰囲気じゃなかったから」

青ざめつつも銃口をロサから外そうとしない軍人達を睨みながら、ロサが吐き捨てるような口調でレオンに言った。

「こいつに盗みを頼んだっていう奴の似顔絵を作って、指名手配しようと思ってる。準備をさせてもらいたいんだけど、許可してくれるか？」

「終わった後、そいつは軍に引き渡す事になるが、構わないな？」

「……致し方無いだろうな。ただ、こいつの友達に薬だけは届けてやってくれ。俺と同じ狭心症に苦しんでるらしい。こいつ、薬代を確保する為にスリを働いてたらしいんだ」

「どんな事情があれど犯罪は犯罪だ。同情の余地は無い」

事務的な言い方をしたレオンに、珍しくロサが感情を剥き出しにして叫んだ。

「一歩間違えば、俺だってこいつの友達と同じ立場だったんだ！大人が始めた戦争のせいで苦しむのは、いつも子供じゃないか！俺達もつと早く戦争を終わらせていたら、こいつだってスリなんかする必要は無かっただろ！？……確かに、手段は間違ってるかも知れない。でも、ただ友達に生きていて欲しい、それだけの為にここまで危険な思いをしてるこいつを、さつさと戦争を終わらせる実力も無い俺達が処罰するなんて、絶対に間違ってる！！こんな子供達を救ってやってこそ、本当の軍じゃないのかよ！？こんな奴らを救える世の中を築いてこそ、本当の政府じゃないのかよ！？さつさと戦争を終わらせる事も出来てない俺達に、こいつを罰する資格なんか有るものかよ！！」「」

決して不治の病とは言えない、むしろ薬や手術代さえあれば簡単に治せるような病気ですら治せない。医者にかかることすら出来ない現実の中で、必死に生きる子供達。そして、その「現実」とは、全て大人達が自分の主義主張を譲らないという、大人の勝手な都合で作りに出したもの。

それは何も、戦乱に揺れる地域だけではない。

大地震などの災害で被災し、未だにその大きな爪痕が癒えない地域の中で、それでも大人達を心配させまいと心の傷を必死に隠して笑顔を見せる子供達にも、同じ事が言える。だが、そんな子供の「無理をした笑顔」は、続けられる限度が短く限られている。

自らの保身しか考えない大人がきちんと子供の事を考えない行動ばかりとつっていると、子供の苦しみはいつまでも癒えないまま放置されることになる。

自分の保身しか考えない大人達の犠牲になるのは、いつも子供。ロサの言葉には、そんな大人達に対する、子供の「大人に助けてほしい」「子供の力だけではどうしようもない」という、必死の叫びが込められていた。

涙目で振り絞るように叫んだロサの言葉に、大人の軍人達が言葉を失い、立ち尽くした。

少年の肩を抱く力を強くしながら、捲し立てるロサの表情は、先程までの殺気は見られず、自分の無力感に対する悲しげな涙目に変わっていた。

「戦争が無ければ、こいつや病気の友達だって、孤児院に入る必要なんか、きつと無かった筈だ！こいつがスリをしてまで薬を手に入れようとする事なんか、きつと無かった筈だ！その原因を作ったのは、俺達連邦軍じゃないか！こいつらは、むしろ被害者だろ！俺達の何処にこいつを罰する資格があるんだよ！？こんな奴らを救う為に俺達が居るんじゃないのかよ！？……今まで俺は、この戦争に関わりを持ってから、誰一人救う事は出来なかった！せめて、こいつだけでも俺は救ってやりたい！そう思っちゃいけないのか！？誰か答えてくれよ！！そうでなければ、俺は……このまま連邦軍で戦い続ける事が出来なくなる……！！！」

自身も戦災孤児であるだけに、そして金を奪う相手は違えど然して変わらない手段で生活していたロサにとっては、少年の立場は自分と被る部分があまりにも多すぎた。

自分と同じ思いをする人間を二度と出さないと固く誓ってガーゴイルに乗り込んだ筈だったのに、次々に自分が絡む状況で人が傷つき、弱い立場の人間が虐げられる。

拳げ句、命を捨てられる程までに自分を想ってくれていたリアも、両親の死後となっては唯一の肉親だったソフィアも、姉として慕うレイラの恋人だったカルロスも守れなかった。

ガンダムに乗っている筈なのに、目の前で大切な人が次々に傷ついていくのを、守るところか止める事も出来ない。そんな自分の無力



感に、ロサの心の疲れはピークに達していた。

そんな心情を初めて人前でストレートに口にして、本気で戦う事を放棄しかねないロサの発言に、彼を強い精神の持ち主と信じて止まなかったレオンは絶句した。

「申し訳ないが、その少年を見過ごす訳にはいかない」

不意に聞こえたその声に、涙に震えていたロサは、はっとした表情を浮かべる事しか出来なかった。

ロサ自身も、少年が犯罪を犯したという事実自体は理解出来ていた。その行為が法律的に許されるものだとも思っていない。それだけに感情だけで捲し立てていた自分の言葉が如何に稚拙なものだったのか、はたと気付いた為に出た表情だった。

そして、その声の主が今この場に居たという事実を漸く頭で理解して、目を見開いて驚いたロサが、佇む声の主へ慌てて顔を向けた。

「ダニエルさん！！？？」

思わず裏返った声で叫んだロサ。その名前に、居合わせた軍人全員が瞬時に姿勢を正して踵を合わせ、敬礼する。

「お前のこれまでの生活の仕方では、その少年と被る部分も多いという気持ちは分からないでは無い。だが、今回ばかりは私も見過ごす訳にはいかない。その少年が盗んだのは、お前が乗る予定だった新型のガンダムの図面だったのだからな」

厳しい表情で、しかし口サを含めて子供が相手という心理が働いた複雑な面持ちで、重大な事実を口にするダニエルの表情に、口サのこめかみを冷や汗が流れ落ちた。

「……………新型の、ガンダムの図面を盗まれた？こいつに？」

「ガンダムの機密レベルは、知っている筈だな？」

「……………核兵器と同等、またはそれ以上……………」

謔言のように力無く呟き、表情を失う口サ。それまで庇うように掴んでいた少年の肩に、今度は寄り掛かるように掴まる。

「私も、ジムやザク程度の図面なら見逃しても構わないと考えていた。だが、どんなに古くても、どんなに性能が低くても、秘匿されなければならないのがガンダムというモビルスーツだ。まして新型の図面を盗まれたとあっては、見逃す訳にはいかない。特に今回は、

敵のファンネル操作用思念波をジャミングするという厄介な機能付加を済ませた状態のものであったのだ」

自らも線図を引いた部分が存在する図面であるだけに、ダニエルの表情は厳しい。それほど連邦軍にとって敵に渡れば脅威となるものだった、という事は、ロサが見ても想像に難くない。

そんな表情を隠す様子も見せないダニエルに、ロサが落胆を露わにする。がっくりと項垂れた後、ギリツと奥歯を噛み締め、肩を震わせるロサ。

少年の肩からずり落ちるように膝をつき、地面についた両手を握りしめたロサの指の爪が手のひらに食い込み、血が滲み出した。

「……俺には、どうする事も出来ないって事ですか？」

絞り出すように、無念さを隠しもしない声を出し、ロサが尋ねた。

彼が敬語を使う相手など、ごく限られた人間しかいない。だが、その語調に普段の敬意は見られなかった。

日頃の絶対的な信頼と、それに対する敬意を持っていた過去がなければ、この場面で敬語を使えるほど感情の抑制は利かなかっただろ

う事は、周囲に居た誰の目にも明らか。

その場に居た機関銃を持っている筈の軍人達が萎縮する程の威圧感を放ちながら、ロサが顔を上げ、言葉を向けた人物を睨む。

だが、その視線を受け止めながらもロサと目線を合わせて自らも膝まづき、ダニエルがまっすぐにロサの目を見た。先程までの厳しさは消え去り、大人として説得する表情で、強い語調でダニエルが話し出す。

「軍事機密漏洩罪で、盗まれた当人を処刑せざるを得なかった。盗まれた人間が罰せられた後で、盗んだ当人を見逃す訳にはいかない状況なのだ。この件を放置すれば、また戦況が悪化するだけじゃない。悪しき前例を今この場で作ってしまったのは、全宇宙の治安に影響が出てしまう。そんな世界を、私の指揮する世の中で作ってしまった訳にはいかない。分かってくれ、ロサ」

ロサの両肩を労るように、ダニエルがそっと手を置く。再びうなだれたロサから、諦めの混じった、うめくような声が出た。

「……そいつは今、俺が渡した狭心症の薬を持っています。そいつが助けようとしてる友達に、渡してやって下さい。それから……くれぐれも、悲しい結末にならないように配慮をお願いします」

「……保証は出来ないが、努力する」

ポンと優しくロサの肩を叩き、ダニエルが立ち上がって、少年を追っていた軍人達を見た。

「基地に連行して、事情聴取を行え。但し、あくまでも丁重にな」

官僚の口調に戻り、指示を出すダニエルの言葉に、ロサが顔を上げた。

「そうだ、似顔絵……こいつが盗んだ資料を受け取った奴の似顔絵を作って、探さないと」

「その件だが、実は有力な情報がついさっき入って来た。我々にとつては、良くない話だがな」

そこまで言ったダニエルの表情が、急に暗くなった。懐から写真の印刷された紙を取り出し、少年にそれを向けた瞬間、当人の顔色が変わった。

「その人だよ！俺が携帯電話を渡したのは！！顔の左のペケ印、間違いない！！」

「顔の……左のペケ印？ちょっと待て、それって……まさか!？」

かつて幼い頃に自分が言い慣れていた言葉に、弾かれたようにロサが立ち上がり、ダニエルが少年に向けていた紙を奪い取った。

そこに印刷された顔に、先程までとは全く違う感情で、ロサの手が震え出す。紙の両端を握りしめ、殺気すら感じられる視線を少年に向け、ロサが激しく詰め寄った。

「お前、本当にこの男に渡したのか!? 本当に間違い無いんだな!？」

「本当だよ!間違い無い!!兄ちゃん、俺が嘘ついていると思ってるのか!？」

あまりのロサの迫力にたじろいだ少年だが、必死の表情で抗議するその目に、偽りの表情は見えない。

「信じられるかよ!!これ……誰がどう見たって、親父じゃないか!!!」

ロサの絶叫に、レオンが顔色を変え、先程のロサと同じように、そ

の手から紙を奪い取った。レオンの目が、驚愕と絶望感に見開かれていく。

「総司令官……これは……どういう事です？」

「私が聞きたい状況だよ。だが、グラナダからスウィート・ウオーターに向かつて出た闇営業機に、この男が搭乗していたという情報が入った。それが今、ロード軍の「スコープオン」に救助されているというのだ。その容姿が、我々を混乱させる為に整形手術で作ったものなのか、あるいは偶然似ている人物が攪乱の為に使われたのか……。私も、本人ではないと信じたいところだが……」

「親父はロードに殺されたんだ、生きてる筈が無いだろう！！二人とも、何を言ってるんだ！！そんな外見だけの奴なんかに惑わされてんじゃねえよ！！」

全力で叫ぶロサだが、ダニエルに対してまで敬語を使わなかったのが、何より彼の動揺を顕著に示していた。鬼神のような憤怒を露わにし、ロサが低い声でうめく。

「親父の姿で俺達を攪乱しようなんて、随分いい度胸してるじゃねえか。それがどんな怒りを招く行為なのか、この俺の手で思い知らせてやるよ！！地獄で後悔させてやる！！！！」

「黒い鬼神」を遙かに凌ぐ、空間の歪みを感じる程の強さで殺気を放出したロサに、思わずその場に居た者全員が後ずさった。

だが、その殺気が、軍用無線機から漏れた連絡音声を聞いた途端に霧散する。

「ロード軍旗艦「スコープオン」とロンデニオン所属の第5艦隊が、月とサイド1の midpoint 付近で交戦を開始！近隣の各移動は応援に入られたし！繰り返す……」

ダニエルとレオン、ロサが思わず顔を見合わせた。

「バカな！？闇営業とはいえ、民間のシャトルを救助中の「スコープオン」を攻撃だと！？一体どこのバカだ！？」

焦りと憤怒を隠そうともせず、レオンが怒鳴る。

「ニック艦長がそんな常識外れな事をしない筈だ。別の……元々ロンドニオンに居た連中だろうな。ロンド・ベルがマフティー反乱で移転してから閑職だったから、憂さ晴らしのつもりで出たんだろう。つたく、何てバカな事を！！」

忌々しげに舌打ちするロサとレオンを見回し、ダニエルが事務的な



口調で指示を出す。

「ガーゴイルへの改造完了機の搬入は済んでいる筈だ。大至急、応援に出てくれ」

「何を言ってるんですか！？軍の規律を破ったバカどもを助けろ！？だったら！！」

ロサが続けて言おうとした言葉は、「こいつも見逃してやって下さい」だった。しかし、それを遮ったダニエルの言葉に、ロサの表情が凍りついた。

「……「スコープピオン」を沈める好機である事も、また事実。一概に攻撃に出た艦隊の判断も間違っているとは言えない。だが、今の行為を認めれば全宇宙を敵に回す事になる。ガーゴイルは直ちに出勤し、民間機救助中の「スコープピオン」に危害を加える艦船を撃沈せよ。かつて米軍がイスラム過激派から報復を受けた9・11のような惨劇を、我々が再現する訳にはいかない！！」

「総司令！？この時期に、我々に仲間割れをしるとおっしゃるんですか！？」

「我々が本気でコロニー独立採算制を実現しようという意思を持っているとスペーススノイドに理解させるには、並大抵の努力では不可

能だ。身内に対しても毅然とした態度を示さなければ、全てのスペースノイドを納得させられない。辛い任務になるが、ガーゴイルにやって貰わなければならん。レオン、これは総司令官としての命令だ」

強い意思を込めた視線で、正気を疑う声を出したレオンに言葉を向けたダニエル。

ハートレイ程に親しくはないものの、レオンもハートレイを介したダニエルとの付き合いは長い。

階級を入れずにレオンを呼んだのは、志を共にする友人に理解を求め、ダニエル「キリス」一人としての苦悩を押し切っても任務を遂行しなければならぬ、地球連邦軍総司令官としての立場を理解して欲しいという、個人的な願望が混じっていたからである。

「……わかりました。我々はすぐにガーゴイルに戻ります」

「ちよっ……レオンさん!？」

「お前もガンダムのパイロット、つまり連邦軍の一員だ。総司令官の指示に従う義務がある。たとえそれぞれが個人的にどんな感情を持っていても、連邦政府の核である連邦軍は全人類を纏める指導力を示さなければならぬ。それに従えない者は、排除しなければならぬ」

ない。連邦軍に所属するとは、そういう事だ」

レオンが、先程から抜いたまま手に持っていた拳銃を、ロサに向け  
た。その表情は、ただ任務を遂行する為に手段を選ばず成すべき事  
を為す、一分の迷いも無い軍人の表情だった。

「レオンさん……」

「ガーゴイルの総隊長として命じる。ロサ、ヒシモト、速やかにガ  
ーゴイル本隊と合流し、ロンデニオン第5艦隊の暴走抑止を命じる。  
抵抗があれば強硬手段も躊躇するな。いいな？」

ギリツと奥歯を噛み締め、諦めきれない表情でぐつと目を閉じるロ  
サ。そのロサの額に、無表情のまま銃口を付けるレオン。

「返事は？」

「……了解!!」

額に付けられたままの銃口を睨みながらも、ついにロサが諦めの意  
思を見せた。

「本当に……これで宜しいのですね？」

拳銃を腰のホルスターに収め、レオンがダニエルに念を押しした。

「すまないが、頼む」

神妙な表情のまま、直立不動で頭を下げるダニエルに、15歳のロサも彼の苦悩の深さを見て取る事が出来た。

「よし、俺達はガーゴイルに戻るぞ。その子供の処遇とロサが言っていた薬の件、くれぐれも宜しく頼む」

ロサに、そして少年を取り囲む軍人達にそれぞれ顔を向けてレオンが言った。

了解の意思表示なのだろう、15人程いた軍人達が一斉に踵を揃えてレオンへ敬礼を返し、少年を連れて基地へと動き出した。その背中を見送り、ダニエルがレオンとロサへ視線を向けた。

「私もすぐにニューヨークへ戻って、ガンダムの凶面を書き直さなければならぬ。暫く宇宙そらの事はガーゴイルに任せる」

「わかりました。どうかご無事で」

「レオン達もな」

ガンダムの凶面を奪われたという極めて深刻な状況下、彼らの会話に笑みは浮かばなかった。

二人に背を向けて歩き出すダニエルに、ロサが言い出しにくそうに声を掛けた。

「ダニエルさん、何故この時期にグラナダに居たんですか？」

「お前が入院したと聞いて、様子を見に來ただけだ。本来ならそれだけしか用は無かった筈だったのだが……起こってしまったものは仕方が無い。それに、お前が予想外に元気そうで安心した。もしお前が重篤な状態で生死をさまよっているような状況だったとしたら、私もあの少年を許せる程、精神的な余裕は無かっただろうな」

ロサに背を向けたまま、穏やかな声で言い残し、ダニエルがまた歩き出した。

「……ありがとうございます」

神妙な表情で、ロサが深々と頭を下げた。

地球の景色で例えると、港というよりは、巨大なガラス天井が付いた現在の大阪駅のプラットホームに近い雰囲気を持つ、月面都市ゲラナダの軍港。

入口の検問の守衛に連邦政府発行の青い表紙のパスポートを見せ、通行許可を得たロサは、レオンの背中を追って、成田や関西空港の旅客ターミナルを思わせる大型戦艦用のボーディングブリッジの一つへ向かう。

その傍らに、ロサ達よりも早くガーゴイルを待っていた、先客が居た。

明らかに、SPか軍の制服組と思われる、黒いスーツを身に付けた長身の男が2人、並んで立っている。隠れている様子でも無いから、明らかに公用でガーゴイルの到着を待っているのだろう。

だが、今のガーゴイルに、そんな立場の人間が何の用なのか、ロサにはまるで見当がつかない。

「何だ？ガーゴイルで、警察や制服組が入るような事件が起こる筈は無いが……？」

少し離れた位置で、思わず首を傾げて呟いたロサに気付き、片方の男がロサに近づいた。

「ロサ」ヒシモト、ガンダムのパイロットだな？」

多少の警戒心をわざと見せ、無言でロサが頷く。

「我々は、あるテストパイロットが無断でモビルスーツを持ち出した件で、そのパイロットに話をしに来ただけだ。ガーゴイル本来の乗員に用がある訳では無い」

「無断で……モビルスーツを持ち出した？この前の、ジエスタが盗まれた時の事か？」

「その後、グラナダ工場からある試作機が持ち出され、盗まれた3機のジエスタの内1機がそれによって撃墜された。だが、無断で持ち出した点については、相応の懲罰の対象としなければならない。如何なる状況であっても、モビルスーツは個人に貸与されているものでは無い以上、許可を得て持ち出す必要があるのだから」

淡々と語られた事実に対して、驚愕の表情で目を見開いたまま、ロサが呟いた。

「あのジェスタを、撃墜……？なんて腕だ……！」

純粹な驚きの声をあげた直後、ロサの表情がいぶかしげなものに変わる。

「しかし、ジェスタを撃墜出来る凄腕を懲罰対象にして降ろせるほど、今の連邦の戦力に余裕は無い。懲罰なんかやめてガーゴイルに乗せてくれ。そうしてくれれば、俺だって今よりだいぶ楽になる」

「我々も正直なところ、そう思っではいる。だが、どんなに腕が良かろうと、一定の規則に則った懲罰を与えなければ、内部の規律を守れなくなってしまうのも、軍という組織なのだ。凄腕のパイロットが全て従順に従ってくれるなら良いが、世の中そう上手くは行かないものでな」

「……耳が痛い話だな。笑えねえ……」

相手にそのつもりは全くなかったのだが、自分の事を指摘されているようにしか聞こえなかったロサが、苦虫を噛む潰したように顔をしかめた。



凄腕「従順という理想方程式を、ロサ自らが先陣を切って破壊してしまっているのだから、とても彼等が他人の事を言っているようには聞こえなかったのだ。」

思わず居心地が悪そうに身をすくめたロサが、何とか雰囲気を変えようと、意図的に話題をそらした。

「しかし、それなら別にわざわざ迎えになんか来なくても、自分で出頭させれば済むんじゃないのか？しかも、なぜ2人も？」

「そのパイロットと共に、難民を下ろすかも知れないと聞いて迎えに来たのだが、説得が難航しているらしい」

「難民……フローラ達を？」

グラナダでは、下ろせない。頭の中で即答したロサだが、言葉に出せる余裕が無かった。味方だと理解はしているので視線に殺気こそ乗せなかったが、親の仇でも見る様な表情で、ロサが反射的に相手を睨み付ける。

その表情に、思わず黒服の男二人が宥めるように両手を広げて、青ざめた表情で後ずさった。それだけで、彼らが少なくとも近接戦闘に長けていない事や、ロサの格闘戦の実力を誰かから知らされてい

る事は、すぐに理解出来る。

「我々も、詳しくは聞かされていない。そんな顔をされても、我々も任務として来ているだけで、個人的な事情は聞かされていない。君にそんな顔で睨まれても、我々にもどうしようも無いのだ」

見るからに「勘弁してくれ」と言わんばかりの引き攣った声と表情に気をそがれ、はっとした表情を一瞬だけ浮かべ、バツが悪そうに「すまない」と呟き、ロサが視線を落とした。

「その事なんだが……入港直前に、本人が拒絶の意思を明確にしたのでな。そちらについては、今回はご破算になった」

「!?!」

レオンの言葉に、黒服の男達よりもロサが驚きを露わにした。

「フローラが、拒絶!?!」

ロサの驚き具合が意外だったのだろう。黒服の男達への説明も兼ね、レオンは到着直前のブリッジでの会話の様子を克明に説明した。その内容に、ロサが大きく頷いた。

「なるほど、いくらフローラだって、それじゃ怒るよな。グラナダじゃなくても、フローラはメルサを置いてガーゴイルを下りたりはしない。同じ孤児院で同じシスターの手で育てられた女の子同士なんだから、当人達が姉妹だと考える方が、ごく自然だろう。あの二人、本当の姉妹のように見える接し方をしてるし、血の繋がりが無いと言われる方がむしろ違和感を感じる位だからな。いくら肉親でも、フローラだけを引き取るなんて、納得する筈が無い。……前々から、一度ぶん殴ってやりたいと思ってたんだが、そんな出来事があつた後なら、申し出た本人はショックだろうな。今回は自重する事にするか」

物騒な事をさらりと言つてのけた口々に、レオンの顔が思わず引き攣る。

「何故お前が彼に腹を立てる理由がある？」

「ブリュタールで散歩した時、フローラが話してくれた。両親に会いたいかと俺が尋ねた時、「自分が必要じゃないから捨てられたと判るのは怖いから、両親に会うのは怖い」とな。俺達が生まれてから、「シャアのネオ・ジオン」や「袖付きの反乱」だって鎮圧されただんだし、「マフティー」だって地球にしか展開しなかった。宇宙そらに居たのなら、別に今でなくても、フローラを探す時間は他に幾らでもあつた筈だ。理由はどうあれ、フローラに15年間もそんな不安を与えてた奴が今更現れて、しかも一人だけを引き取りたいだなんて、勝手にも程がある。許せねえよ」

「しかしな……」

「孤児院に預けざるをえなかった当時の事情まで理解出来ない訳ではないさ。でも、シャアの反乱は一年も経たずに鎮圧されてるじゃないか。本当に引き取る気が有ったのなら、軍を辞めてでも迎えに行けば良かったんだ。15年も音沙汰なしで本人の現状も知らない癖に、何が父親だよ」

最後の一言は独り言なのだろう。憤懣やる瀬ないという表情を露わにした口々に、レオンも反論は出来なかった。

”……アンナやカレンも、こんな事を考えていたのだろうか？俺も、もう少し家庭を大事にするべきだったかもしれないな”

任務に追われ、年に数度と自宅に戻れないまま過去の戦争の犠牲になった娘を思い、レオンが口をつぐんだ。怒りの収まらない口サはレオンの表情に気づかないまま言葉を続ける。

「親父だつてろくに家に戻って来なかったけど、少なくとも俺の前ではリーダーとしての責任から逃れようなんて考えは感じられなかった。自分が負うべき責任を他に転嫁して保身ばかり考えてる今の大人達とは違った。責任を負いたく無いなら役職になるべきではない、その言葉どおりに親父はエースパイロットとしての責任と誇りを持っていた。模擬戦でも先陣を切つて敵陣に切り込んで、どんなに不利な状況でも仲間を守りながら最後に帰還する。そんな親父

に、俺は憧れた。自信を持って自慢できる親だと断言出来た。子供がそんな風に自慢できると思える親が、今の世の中に何人居る？ フローラの父親って名乗った奴は、そこまでの人徳が有る奴なのか？話を聞いてる限り、到底そんな風には思えない。自分のエゴをフロラにぶつけてるだけにしか感じられない。そんなエゴを全部受け止められるほど、フローラは強い子じゃないよ。どちらかといえば、フローラがエゴを受け止めてくれる人を求めてる感じだから」

「……」

「子供が親だと認められる人間ってのは、自分の手本として認められる人間。自分の言動にきちんと責任を持って、その言動に説得力を感じられるだけの振る舞いを日ごろからしているかどうか、それが子供が親を尊敬する最初の基準なんだ。子供が尊敬出来ない大人なんて、人の親になる資格は無い。最近の若い連中がすぐキレるっていうのも、彼らより上の世代の言動に説得力も責任感も感じられないから尊敬出来ない、だから言う事を聞けない、「自分の事しか考えてないアンタらに言われたくねえよ」って思ってるっていうのが真相だ。要するに無責任で説得力の無い、今の大人の責任だよ。子供の親に対する望みってのは、常に子供が納得できるだけの説得力を持った言動をしていて欲しい、単純にそれだけなんだよ。日ごろからそれさえあれば、普段ろくに家に戻って来なくなつて、子供は自慢できる親だと思つものなんだ。フローラとその父親って男の場合、尊敬出来るか出来ないか以前に、どんな人間なのか分からないのに親と思えなんて、有り得ない話だよ。もし俺がフローラと同じ事を言われたなら、その場でぶん殴ってる筈だ。てめえなんか俺の親になる資格は無いって言つてな」

「……仮に、ガーゴイルの誰かが、ロサやフローラを養子にしたい  
と言い出したら、どうする?」

恐る恐る、といった雰囲気です。尋ねたレオンの言葉に、ロサが返答に  
詰まった。

「……そうだなあ。今でも家族みたいなものだから、それなら受け  
入れられるかもね」

「じゃあ、誰か4人とも纏めて養子にしないかって議題にしてみる  
か」

「俺は別にしてくれよ。フローラとは兄弟になりたくない」

慌てて否定するロサを、不審そうにレオンが見る。

「何故だ?」

「……ついこの間、フローラと兄弟になる云々の話で、宥めるのに  
何時間かかったか、レオンさん知らねえだろ。あんな不機嫌な顔を  
見せられたら、フローラの前でそんな話は二度としたくねえよ」

先日の食事中に偶然その話が出た時のフローラの不機嫌さを思い出したのだろう。ロサが、珍しく疲れを隠そうともせず、うんざりした表情を見せた。

「今はそんな事よりも、目の前の任務を片付けようぜ。……あんまり気が進まねえけど」

ロサがそこまで言った時、彼らは漸くガーゴイルの船体側のハッチをくぐる事が出来た。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1031k/>

---

機動戦士 ガンダム - 戦いの償い -

2011年8月1日14時28分発行